

普通少女のヴィランア  
カデミア

火ノ鷹

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

全人口の約八割がなんらかの特異体質である超人社会、その中でごくごく普通の家庭に生まれた少女、依光成生。普通の家庭によくある個性「指先を発光させられる」、ヴェランに襲われることもない普通の生活。無個性の子供から見れば涎ものの生活をしていながら、彼女はずっと「普通」でいたくなかった。

普通の女の子って何？無個性の女の子とは違うの？普通って何？

「普通」、自身がそう呼ばれることは嫌ではない。ただ彼女は「普通」のままではいたくなかったから——一歩踏み出した。それが正しくない道だと分かっている、自分自身のために。

# 目次

プロローグ	
依光成生 オリジン	2
7歳 ヴィランへの道	5
13歳 巨悪との接触	9
14歳 破壊者との出会い	19
15歳 成生の個性	26
15歳 ヴィラン名決定	37
一章 デビュタント	
16歳 雄英受験	51
USJ襲撃前夜	59
USJ襲撃 上	65
USJ襲撃 中	79
USJ襲撃 下	85
USJ襲撃後	100
ヒーローサイド ヴィラン連合分析	107
生徒サイド：爆豪 雄英体育祭前	116
最強の盾 vs 最強の矛	121
ヒーロー殺しとの接触	132
胎児脳無計画始動と正しい個性の使い	142
方上	153
胎児脳無計画始動と正しい個性の使い	153
方下	153
M s. ダーククライのアジト建設	153



	悪夢と惨劇とデビュタント その7		監獄タルタロス オールフォーワンの
	↳ M s. ダークライ・デビュタント↳		惚気
390	依光成生の悪夢 ↳デビュタント後↳	377	死穢八斎會——ヴィラン連合 接触
	ヒーローサイド デビュタントの爪痕	365	469
	二章 ダンシング&スリーピング		ボーイ・ミーツ・ガールズ
	闇を導く光と理を壊す少女 邂逅		悪夢の墮とし子 始動
	390		ヒーローサイド ナイトアイとオール
	闇を導く光と理を壊す少女 再会		マイト
404			烈怒頼雄斗デビュ戦
	計画看破と仮免試験	426	ヒーロー&ヴィランサイド 死穢八斎
			會突撃まで
			死穢八斎會&墮とし子 v s ヒーロー
			その1
			649
			602
			564
			537
			522
			492
			446

	死穢八齋會&墮とし子 v s ヒーロー		M s . ダークライ V S ヒーロー & ヴィ	
	その 2	671	ラン	761
	マッチアアップ	烈怒頼雄斗 & ファット	個性破壊弾	781
	ガム V S	乱波肩動 & 天蓋壁慈	よりみつせい V S デク & 壊理	800
690	夢のような時間	—————	よりみつせい V S ヒーロー & 壊理 & 悪	
	マッチアアップ	トガ & トウワイス V S	夢の墮とし子	813
	ナイトアイ & デク	—————	ヒーローサイド	死穢八齋會編アフ
	マッチアアップ	電花 V S イレイザー	ター 切島編	843
	ヘッド & ロックロック	—————	ヒーローサイド	死穢八齋會編アフ
	マッチアアップ	オーバーホール & 根本	ター ナイトアイ編	863
	& クロノスタシス V S ルミリオ		ター エリ編	876
746			悪夢の後遺症	892

義賊の投稿者は悪夢に魘される

900

三章

墮とし子の脈動 灯火

944

ヴィラン連合チュートリアル終了

955

デトラネット社交渉

972

再臨祭

993

行進

1009

道

1028







## プロローグ

## 依光成生 オリジン

「普通って何？」

5歳の時、何にも疑わない純粋な感情で疑問を口にした。

生まれた時から言われてきた「普通」。お父さんもお母さんも似たようなことを言い、似たような個性を持っていた。だから二人みたいな人のこというのかなって思ってた。

けれど――

「悪いことをしないことだ」

「あなたの個性はよくあるものなの。無個性みたいに虐められたりはしない」

――答えは全く違うものだった。

無個性じゃないから大丈夫？ 虐められる？ だから私に個性があることは「普通」でいいことだ？

何一つとして理解できなかった。私の個性は「指先が発光できる」こと。100いれば一人くらいは似た個性がいるくらいなの、世間によくある個性だ。

よくよく考えればお父さんの個性は「思考速度加速」、お母さんは「両腕発光」であり、

少し探せば目に映るような個性だった。父の血を継ぐように頭の回りは良く、母の血を継ぐように白い髪と……似た個性を持っているのが二人の子供である証拠だ。

両親もプロヒーローにあるような強い個性じゃないし、どっちかと言えば地味な個性だ。言い換えると普通の個性だとも言える。

「それが普通なの？」

「ヴィランにならず、ヒーローの邪魔にならず……もしも何か起きたらヒーローに助けられる。それが普通なんだ」

「襲われないのが一番よ。ヒーローがいつも来てくれるのは分かっているけど、傷ついている間に合わないことだって多いのよ？」

「ああ、それはもちろんだ」

両親の言葉が空虚に聞こえた。

そんなものが「普通」なのか、まるで他人事であり続けることが「普通」なのか。自分から何か起こせるような人は「普通」ではないのか。

ヴィランにされるがままなのが「普通」なのか、ヒーローに助けられるのが「普通」なのか、まるで自分の人生を自分で決められないのが「普通」だと言うのか。

そんな、生きている価値があるかも自分で決められないのが「普通」だと言うのか。

幼い成生はそこまで考えられはしなかった。だが成長してから、この時無意識かもし

れないが間違いなくそう感じ取っていたのだと確信を抱く。

5歳の幼い成生に芽生えた感情は——怒り。

誰よりも間近で見続けていた両親が「普通」に……つまりまるで他人事のことに見続けていたのかもしれない。たったそれだけの事実が成生の生き方を決定的にした。

絶対に「普通」ではとどまらない人になる。ヒーローだろうが……ヴィランだろうが構わない。

どんな形であれ、誰の目にも止まる人になってやる。

それが、よりみつせい依光成生が生きる目的となった。

## 7歳 ヴイランへの道

平々凡々の日々とはこういうことを言う。そんな日々が毎日続く。

成生は小学校では平々凡々の「普通」の女の子だ。家にいる時も同じ、「普通」の女の子だ。長い白髪に指定の制服、綺麗系の顔であり学年で2, 3番目辺りに位置するくらいには整っている。

父と同じ野菜菜園作りが趣味という、少し小学生らしくない趣味を除けば、そこらにいる小学生だと言ってもただの事実だ。

成生はそう「普通」の女の子を、演じていた。

「普通」と違うのは、指先から先だけだ。成生の個性は「指先発光」。光りさえバレなければ、どこでどう光らせようとバレることはない。机の中、トイレの一室、果ては自らの口の中や菜園の土の下。どこでも成生は自らの個性を使うことができた。

地面の中なら発光しようと熱量が溜まるだけだ。口の中でも同じことであり、成生の持つ個性の出力では電灯程になればいい方だ。使えば使うほど体力を消費するとい

うデメリットもあつたが、コスパは恐ろしい程よく、懐中電灯レベルの灯りなら一日中光らせても息切れしない程だ。全力で光らせ続けても十数分はしないと息切れしないのだからデメリットと呼ぶような消費とすら言えない。

しかも消費が体力ということとは個性が伸びれば体力も伸びるということだ。伸び盛りの今でそんなことをすればイカれた体力を有することになる。

成生は気づいてこそいなかったが、成生が行っているそれはよくて高校生が行うもの、それも雄英高校ヒーロー科が行う「個性伸ばし」と全く同じものだった。

本来なら高校生程に成長してなければ「個性」を伸ばすのは危険であり、だからこそ雄英高校では行われているのだが……小学生の身で成生は何の問題もなく伸ばしていた。それは「普通」の個性であるがゆえにでもあつた。

強個性と呼ばれる「爆破」や「炎熱」といった個性は総じて好き勝手使えば危険だ。半歩間違えればヴィランへと落ちてでも何らおかしくない。プロヒーローの下でもなく普通の環境で個性を伸ばしでもすれば間違いなくヴィラン扱いされたことだろう。

だが成生の個性は光るだけだ。強弱もつけられるが、最強では熱量が発生こそするものの熱でありせいぜいハロゲンヒーター代わりになるくらいのものだ。

もつとも——それは小学一年生の終わりの段階での話だ。

5歳の時、2年前は指先が弱弱しく光るだけだった。それが7歳で電灯くらいには

なっているのだ。これを高校生になるまで成長させていく予定が成生の頭にはあった。「フフフ……」

自室で成生の瞳は怪しく光る。小学一年生だが父譲りの頭の良さから既に自室を貫っている。そして彼女にはヒーローもヴィランもその瞳には映らない。彼らの行いが尊く輝くものや憧れ惹かれるものであっても、成生には常に変わらない目標があり揺らぐことは無い。強いて言うのなら、その目標はヴィランの考えだったということくらいだろうか。

誰の目にも止まる人になる。成生の目標は全く持つて揺らが無い。目に止まる方法が余りにも幼稚なことが分かかっていても、成生は変わらず突き進む。

そして、その目標を掲げている以上思考がそこに到達するのは致し方ないことだった。

「一番目に留まる人、ヒーロー……オールマイト」

ウェブに上がっている生放送の動画。そこには雲を散らせるオールマイトの姿が映されていた。

どこから見ても視線はオールマイトへ向けられている動画に、羨む成生。

だが、それだけでは足りない。

「オールマイトを超えるくらい誰の目にも止まりたいなあ……ヒーローじゃ無理かあ」  
今の人外とすら言える力を持つオールマイトで向けられる視線はあの程度。憧れる  
だとか、かつこいいだとかそういう視線をまとめ切ったとすら言えるのがオールマイト  
だ。

言い換えれば、オールマイトと同じ以上の目に止まるのはヒーローでは不可能である  
ことを意味する。

「じゃあヴィランしかないね。力を蓄えてから……やっぱり早くても高校生かな」  
周囲には完全に個性伸ばしを隠し、成生は自らの目標のために突き進む。

そして、成生が中学生になった時に転機は訪れた。



## 13歳 巨悪との接触

中学生になっても平々凡々の日々が毎日続く。

そう思っていたのは中学一年生の10月：半年までだった。

人差し指だけで体育館を眩く照らすことすらできるようになった成生は次の段階に移っていた。すなわち、光を集中させることだ。

熱量もヒーターどころか近付ければ酷い火傷を負う程になり、これを集中させたらどうなるかなど簡単に予想できた。一言で言えばレーザー、光線だ。

何もかもを貫通するレーザー、ヒーローですら簡単には至れないそこを目指そうと個性をさらに伸ばしていく。中学生になりさらに個性は伸び、五本の指から恐ろしい程の熱量が発生するようになりつつあった。

そこまで来るともはや個性を伸ばす練習場所に困ってきた。夕方にランニングしたいと親に告げて裏山に指を突っ込み無理やり鍛えるくらいしか出来なくなってきた。

そんな成生が13歳になった次の日である土曜日、両親がちょうど出かけている時間

帯。自室に黒い霧が突如として現れた。空気が冷え込み、咄嗟に個性で発光し熱量にて周囲を暖める。

「本当にこの子なのですか？」

「ああ、間違いない」

黒い霧から現れたのは二人の男(?)だった。

一人は全身が黒い霧で包まれた男で、バーテンダーのような格好をしていた。ヴィランですというような雰囲気を出しており、声を聞かなければ男だと判断すらできなかっただろう。

そしてもう一人は雰囲気どころか、重圧すら感じるヴィランだ。顔がマスクで隠れているにも関わらず、そこにいるだけでただ恐ろしい、心臓を止めてしまいたいという感情を抱かせるものだった。

「ひっ!?!」

彼らを認識し終わった後で、成生は悲鳴を上げた。一瞬の躊躇こそあったものの、誰かに助けを求めようと声を上げたのだ。

その行動はどうしてか目の前の男に注意されることになった。

「そんな顔で悲鳴を上げてても説得力が無い。気を付けなさい」

「え、は……は……はい」

まるで先生が生徒を叱るように顔が潰れた男は話す。成生もその言葉に思わず頷いていた。

何より、口角を上げ笑っていることを成生は自身で無意識にだが知覚していた。こうなることを望んでいたのかのような感覚に、少しだけ紅潮してしまう。

自室の勉強椅子に座り、二人はまるで成生の友達が上がったかのようにベッドに腰掛ける。状況だけで言えば二人がヴィランとはまるで思えないものだった。

中学生の身でありながら大物ヴィランの重圧を跳ね除け、純粋な疑問を成生はぶつける。

普通の中学生の少女なら臆するのが当然であり、明らかに違う反応をした成生に二人の男は思わず「ほお……」と声を出していた。

「あなた達は誰ですか？」

「もしかしたら両親が来るかもしれない。悲鳴を上げてその質問……察する能力は子供だからかな？」

質問に答えられなかったことに成生はムスツとしてしまう。いくら目の前の男の重圧を跳ね除けられるとはいえ、中学生の女の子なのだ。それも二次性徴もまだ終えていない少女だ。

純粋無垢が故に感情もストレートに出ていた。

「……」

ムスツとした顔でふいつと横を向く成生に、二人の男は少しだけ驚いていた。ヴィラン相手にこんな態度ができるのはヒーローですら中々いない。ましてやここにいる男は、ヴィランでも頂点に位置する存在だ。

二人が驚嘆するのも当然のことだった。

「……大物ですね」

「全くだ。意地悪が過ぎたかな？ 僕はオールフオーワンと言うヴィランだ。君の名前を教えてほしい」

名前を言われても成生にはピンと来ない。何せヴィランで恐れる人と言えど？ と問われても数が多過ぎて誰を怖がればいいのか分からない程なのだ。

ただヴィランだと言われて少しも動揺しない成生ではなかった。その証拠に言葉が出るも、震えていた。

「よ……依光、成生」

「成生か、いい名だ。端的に言おう、聡い君ならこれだけで分かるはずだ」

ゴクリと喉から音が鳴る。ヴィランからの要求なんて一度足りとも経験したことなどない。「普通」はあり得ない事態に、心臓はバクバクと鳴っていた。

「——僕と共に来ないか？」

目標が近づいた音が、聞こえた気がした。

中学生とはいえ成生はまだ子供だ。だが子供だからこそ、何の迷いもなく直感に従って行動することができた。この提案は素晴らしいものだ、という直感に。

しかし、なけなしの良心が目の中の男を信用するなど叫び、ほんの一步だけその歩みから足を引つ張っていた。

「……信用は、どうすればいいですか？」

「その言い回しはどうも信用したがっているように聞こえるね」

オールフオーワンの口角が上がる。求めていた答えに近しいものが返ってきたのだから当然だった。

そして、成生もまた口角を上げていた。

無意識でこそあつたが、まるでオールフオーワンに応えるような笑みに、近くで見えた黒い靄で包まれた男——黒霧は戦慄していた。黒霧からすれば、子供にしか見えな  
い少女が巨悪オールフオーワンと対等に話すなど、信じられないことだった。

「否定はしません」

「ならば信用すればいいじゃないか」

「共に来いなんて…ヴィランが何も要求してこないなんておかしいじゃないですか」

いくら求める目標が全てとはいえ成生にも良心はある。目標に向かうには足を引っ張っているだけのものだが、ヴィランの要求に全て応えるような真似をするつもりは……今は無かった。

その良心をくすぐるかのようにオールフォーワンはニヤリと笑い、言葉を返した。

「君が欲しい。」

ストレートな言葉に成生の鼓動が早くなる。13歳という短い生でありながら、これほどまで直接的な言葉をぶつけられたことは無かった。

喜んでと、即答したい欲をぐつと抑え、疑問を口に出す。まだ「普通」である私にこんなうまい話がある訳が無いのだから。

「何故？私以外に優秀なヴィラン候補なんて山ほどいるはず」

「それはちよつと明かしたくなくてね。君でなければならぬとだけ言っておこう」

私でなければならぬ。

「普通」ではない、「特別」な存在だと認められること。成生からすればこれ以上なく嬉しい対価だった。

いつの間にか成生は笑っていた。オールフォーワンも応えるようにニコリと笑って

おり、明らかに契約が成立しているようにしか見えない光景だった。

だが足を引つ張る良心の、せめてもの抵抗が口を開かせる。

「……時間を、貰えますか?」

「もちろんだ。無理して来てもらっても僕が困る」

言葉尻にニヤリと笑うオールフォーワンに本能が刺激されたのか、成生もまた似たようにニヤリと笑う。

——そこが、良心の抵抗限界だった。ただのヴィランでさえ普通の人が相対したら精神の抵抗など即座に無くなる……巨悪オールフォーワンなら一瞬で抵抗が無くなっても全くおかしくない。成生が周囲には「普通」であることを固辞していることが、逆に抵抗を強化していたのだった。

しかし今、目標のために足を引つ張る精神は無くなった。そこに居るのはどんな手をつかっても「誰の目にも留まる」ために純粋に歩み続ける女の子だ。

成生の口がオールフォーワンへと向けられる。時間をくれと言ったにもかかわらず、次の言葉を紡いでいた。

「ただその前に一つだけ、答えてほしい質問があります」

「ふむっ」

話は終わったと立ち上がったオールフォーワンへと成生は声をかける。成生が目標

としている先へと届くなら、届く可能性があるのか、それだけを聞くために。

「共に行けば、だれの目にも止まることはできますか？」

一瞬の沈黙。成生の眼光がギラつき、オールフオーワンが即座に回答できない程の雰  
囲気を醸し出していた。

初めて見せた隠していた牙だ。……が、中学生の少女の圧力だ、オールフオーワンか  
らすればそよ風にも等しい。

答えるオールフオーワンは、さつきまでとは違い愉しそうな顔をしていたように成生  
には見えた。ちょうど今、成生がしている表情と同じように。

「面白いー！」

さつきまでと同じ笑っている表情。唯一違うのは声色が明らかに高くなっているこ  
とだった。

まるで、求めていた宝物を見つけたような声色に、笑う成生も少しだけ気圧される。

「実に面白い質問だ！ 答えはそうだね……君次第だ」



私次第。オールフオーワンの言葉に確信すら得た成生はスツと立ち上がり、オールフオーワンの目の前に立った。

「分かりました。私から言えることは、親のいない時に隠れて来る分には構いません。あと個性を伸ばせる場所を提供してくれると嬉しいです」

オールフオーワンの無い目へと視線を合わせ、握手するように成生は手を伸ばした。身体も精神もオールフオーワンの提案に乗っている。乗っていないのは言葉だけだった。オールフオーワンも言葉に疑問を思ったのか首を傾げていた。

「承諾した、という訳ではないと？その上で要求かい？」

「私はまだ中学生です。それに個性もまだまだ伸ばせる。そうですね……。高校生になる時ではいかがでしょう？」

それは最早承諾したと言っていい言葉。オールフオーワンもフフフと小さく笑い声を隠していなかった。

オールフオーワンも手を伸ばし、二人の手は繋がれた。

「ふふふ、これほどの人材とは……予想以上だ」

「普通である両親には迷惑かけたくないですから」

ヴィランであれば絶対に出てこない言葉。成生が普通の少女であるからこそその言葉だが、ここにいる三人には全く別の意味となる。

即ち、いずれヴィランになるのだという宣言だ。

「黒霧、ここをマークしておけ」

「はっ」

黒い霧が部屋に展開され、少しずつオールフォーワンと黒霧の姿が消えていく。成生は笑って手を振っていた。

「また来るよ。成生の話をもっと聞きたいからね」

## 14歳 破壊者との出会い

「場所の提供は喜んでしてあげよう。個性を伸ばすのは深夜になるだろうから、早く寝るようにしておくといい」

「助かります。お礼は出世払いをお願いしますね」

「ハハハ！出世払いか！もちろんいいとも！」

最初の会話の後に軽くこんな会話をし、オールフォーワンは週一のペースで成生の自室を訪れるようになっていた。いや、訪れるというより呼んでいると言うのが正しい。

両親も眠りについた深夜0時になると成生の寝ているベッドごと黒い霧に包み、広い訓練場のような場所へとワープさせるのだ。帰りも同じ形で返していた。

そして成生は驚いていた。オールフォーワンが連れてきた場所が余りにも個性を伸ばすのに適していたからだ。

最初に連れてこられた時、周囲の光景に成生は目を丸くしていた。そこにあったのは夜空さえも呑み込むような黒い空であり、十数メートル先で壁がある体育館のような場所だった。

指先を翳し全力の半分ほどで発光させる。それだけで本来なら1kmは先を照らすことが可能な程の光なのだ。だどいうのに目の前の光景はまるで違う。

「半分発光で照らし切れないって……」

「もちろんこれは特殊な個性を使っている。ブラックホールという個性を知っているかい？」

成生はオールフォーワンへ顔を向けコクリと頷く。明らかに特別な部屋を準備してもらっている以上、礼を尽くさない選択は成生にはない。

軽く一礼し、感謝を告げてオールフォーワンへと答える。

「特別な部屋、ありがとうございます。ブラックホールというと……光を呑み込む個性でしようか？」

「それと似たようなものだ。これを打ち破れる個性まで伸ばせれば理想だろう？そして準備した対価として君にお願いしたいことが一つあってね」

成生が依頼した形である以上、成生が対価を支払うのは当然の話だ。成生も理解していたが、オールフォーワンの望みに今の成生が応えられるとは到底思えなかった。

「お願い？今の私にできることなんて無きに等しいはず」

「いや、大丈夫だよ。僕が行っている人体実験に君の一部を使いたい」

その言葉に思わず頬が引きつっていた。人体実験に成生を使いたい、そんな死ぬより

も酷い目に遭うのだけはごめんだ。目標が達成できた後ならまだしも、何もできていない今だと話が全く違う。

「え……腕とか大事なところとか嫌ですよ?」

「当然だとも。髪とか爪レベルでいいんだ。それだけで十分過ぎる」

ホツと表情に思いつきり出し安堵する成生。オールフオーワンも揶揄ったのが成功したからかフフフと笑っていた。

そんなオールフオーワンを目の前に、スツと成生の目つきが不敵なモノへと変わる。さつきまでとは違い、まるで自らの信念に従った思想犯のような瞳をしていた。

「構いませんよ。それならこちらからも一つ追加したいですね。体術の相手になつてくれる相手って誰かいます?」

オールフオーワンも雰囲気が変わったのが即座に理解できた。

ちようど先日、初対面で話したとき、良心が無くなった時と同じ瞳だったのだ。歴戦の猛者、巨悪オールフオーワンが分からないはずがなかった。

「……丁度いい。彼を紹介しておこう。相手は少し難しい形になるが出来なくはないはずだ」

黒い霧が周囲に染まり、黒い空間から一人の男子が姿を現した。

まともな人間ならまず間違いない驚き、悲鳴を上げて逃げ出す姿だ。病的なまでに細

身であり、最大の特徴は上半身に取り付けられた「手」。顔を鷲掴みにするように取り付けられている一個を初め、肩や腕の関節など各所に着けられており、……何よりそれらの「手」が本物であることだろう。

成生も予想以上の姿形の少年に一瞬だけ硬直した。だが即座にオールフォウンの重圧ほどでもない、身体の強張りは解けていっていた。

「死柄木<sup>しがらぎ</sup>弔<sup>むら</sup>だ。先生、こいつは何だ？」

「依光成生。貴方はオールフォウンが直々に鍛えてるとかですか？」

おどろおどろしさを纏った声にも、平然と成生は答える。

弔は何もかもを壊したがる破壊者と呼ぶべき人種だ。対して成生は何もかもを犠牲にしても目標を手に入れる愚者だ。

価値観は全く違うものの、そのエネルギー量だけは同じであり、目的も相反するものではないため争う必要もない。

「いや、彼は独学だよ。黒霧が相手になってることが多いかな」

成生の疑問にオールフォウンの声が答えを告げる。そしてそのまま弔への言葉へと切り替わる。

「弔、成生は一般人だ」

「はあ？じゃあ何でここに」

「体術は君が鍛えなさい」

数秒の沈黙。弔が首を縦に振っていないことが納得してない証拠だった。

はあと溜息を一つ吐き、弔は仕方ないと口を開く。

「……先生が言うことだ。従うけど……意味はあるのか？」

「もちろんだ。意味は……いや、そうだね、君が考えなさい。ただこれは君のためにもなるとだけ言っておこう」

「……分かった」

次の瞬間、弔の足が成生の目の前にあった。

「おわっ!?!」

ギリギリで反応し身体を反らせて蹴りを避ける。突如向けられた敵意に、体術は一般人レベルである成生が避けられたのは運が良かったとしか言えない。

「二つ言っておく。俺の両手には触れるな」

弔が警告の言葉を一つすると、軽く拳を振るい成生へと襲い掛かる。

しかし成生は体力だけは化け物だ。ヴィランやプロヒーローと比べても同等以上という歪さを持っており、瞬発的な行動も軽い武術レベルなら対応できる。

唯一体格差だけは無視できないが、成生を素手で捕まえるということは指を向けられる至近距離に居るということに他ならない。熱量だけでも溶ける領域に達している成

生の熱量を真正面から受ければプロヒーローだろうと死傷は必至だ。

しかし目の前の弔は武術レベルで言えば対応不可の領域にいた。さらに体術と組み合わせる個性も持つっており、成生からすれば個性を使わなければ最も対処困難な相手とも言えた。

「個性の条件ですね？実戦形式とは一般人に酷い真似を」

「今のを避けた時点で一般人でも動けるレベルなのは分かった。ならあとは実践だ」

弔が一方的に攻勢を仕掛ける。成生はギリギリのところまで避けられてこそいるものの、全てがギリギリでの反応だった。

深夜で身体のパフォーマンスが落ちている成生にはきついものだが、当たれば吹き飛ばされそのまま意識も飛ばされると察していた。

「あ、10分程度でお願いしますね。個性伸ばしの時間もありますし、成生さんも時間が無いので」

言い忘れていたと黒霧が口に出すと、弔は渋々と一度手を引く。攻勢が無くなったことで成生は距離をとり、弔の身体全体を注視していた。

「黒霧……はあ、先生が言うことだ。信じるとするか」

成生の瞬きを突き、弔は一足飛びに膝蹴りを放つ。

「わっ!？」



これもまたギリギリで反応され、身体を横にひねって回避していた。全てがギリギリの攻防。弮との訓練はまだ始まったばかりだった。個性を駆使し視覚を攪乱し弮の攻勢から避け続ける訓練がこの日から始まった。

この後めちやくちや体術訓練と個性伸ばしした。

## 15歳 成生の個性

「ところで私の爪とか髪って何の実験に使ってるんですか？」

オールフオーワンとの出会いから一年ほど経った頃、ふと成生は疑問に思ったことをぶつけてみた。

成生は襲い掛かる弔の手を払い疑似ブラックホール空間を五指から出る五本の収束光で斬り裂きながら口に出す。弔が苛立っているのがよく分かる余裕さえあった。

一年で成生は恐ろしい程の成長を遂げていた。成生自身不思議だと思っているのだが、成生の技術を飲み込む速度は常人とは桁違いだったのだ。

一日で弔の体術から避ける術を得、数日もすれば弔の全力の攻撃から避け続けられるようになり、一か月もすれば両手にギリギリ触れないような組手を行えるように、一年も経てば片手間に捌けるようになっていた。

天才などという言葉では言い訳にすらならない。弔の体術はプロヒーローにさえ通

用する程なのだ。しかも成生との鍛錬により更に体術レベルは上がっている。反射速度がバグっているとしたか相対している弔には考え付かなかった。

「チートがつ……！」

弔の五指が地面に触れ、足場を崩壊させていく。成生も態勢を崩すはずだ、弔の狙いは間違っていないかった。

「ん」

狙い通り態勢を崩された成生が地面へと指を向ける。一瞬すら遅い程の速さで指が光り、熱量がそこへと発生し大きく風が吹いた。

一点に集中させた光から吹く風なら、指向性を持たせることなど容易い。

「おっと」

「クソが……！」

五指で触れるように顔へと向けられた手を、戻した体勢から首をひねって避ける。個性と体術、どちらも成長していなければできない戦いを成生はしていた。

「10分です」

「ここままでだね」

「……先生、いつまでこいつと遊んでればいいんだ？」

苛立ちを隠さない弔はオールフオーワンへと半ば怒りをぶつけていた。もはや片手

間の雑魚と扱われているようなものであり、プライドの高い弔からすればずっと揶揄われているとしか見えていなかった。

「成生の答えはそうだね……では来週にでも教えよう。弔の質問にはこう答えよう、君が納得できるまで」

「こいつとはもうやり合いたくない」

「じゃあ止めようか。黒霧、来週以降は成生をこちらに呼ぶようにしてくれ」

そして次の週。いつも通り……ではなく黒霧本人が成生を迎えに来ていた。ベッドごとの移動ではなく本人だけ呼ぶ形らしい。

なんでもベッドごと移動は場所が固定させているから分かりやすい上に黒い霧が見られないので隠密性も高いのだが、今回は場所をとりたくないらしい。

黒霧のワープゲートを抜けた先にあったのは、大量の実験生物用のカプセルがある部屋だった。カプセルに入った脳無から、ここが生産している場所なのだと言座に理解できた。

待っていたオールフォーワンと、そしてもう一人の姿がそこにはあった。白衣を着、ゴーグルのようなメガネをした研究者のような男性だった。

「まずは紹介しよう。私の側近だ、名前は殻木球大……ドクターと呼ぶといい。実際に医者だ」

「この子か！脳無の完全上位化素体という最高の個性を持つ少女というのは！私がオールフオーワンの側近が一人、ドクターだ！これから長い付き合いになるだろう、よろしく頼むぞ！」

ドクターと握手した後、周囲をキョロキョロと見回す。一年の間のどこかでオールフオーワンと話していた、脳無と呼ばれる者のカプセルだけではない。奥を見れば脳無の元となっている研究なのか、それ以外にも研究していることがあるのが視界に入る。

「ハハハ？」

「脳無を作っておる。個性を複数所持する意思のない人形じゃよ」

「個性の複数所持、ですか」

指先発光しかできない私からすれば絵空事の世界だ。そんなことができれば「普通」とはまるでかけ離れた個性になるが、ヴィランとして個人として力を付けたいのなら真つ先に手を出したくなる能力だろう。

そんなことを考えている成生の思考に、オールフオーワンの言葉が横槍を入れた。

「そ·う·だ·。ま·る·で·、君·の·よ·う·だ·ろ·う·？」

「……は？」

成生の思考に横槍どころか、完全に思考が沈黙していた。成生にはオールフォーワンの言葉が全く理解できなかつた。

「私の個性は指先が光るだけですよ？」

「そうだ。いや、僕もそうだと思っていた」

うんうんと頷くオールフォーワン。成生の方へと顔を向けると人差し指を立てて、「だが」と話を続ける。

「だが余りにも不可解なことが多過ぎるだろう？一般人レベルの膂力であるにもかかわらず弔の攻撃をギリギリで避け続ける。一年で片手間になるほどの成長。そして……発光による熱量を君自身は受けていない」

「あ、そういえば」

発光するなら熱量も出る。小学生では出ていたが、光線のようにしたり戦い方に利用したりした頃から自分自身には跳ね返ってきていなくなつた。熱量から突風が起きるからと助かっていたのだが、そもそも熱が出るなら自分自身にも熱く感じ取れるはずだ。

何せ光線で疑似ブラックホールすら焼き斬ることが出来るのだ。熱量で言えば熱専門のプロヒーローですら相殺すらできず死ぬだろう。かのエンデヴァーでさえ不可能

だ。

「おや、気づいていなかったのかい？だがこれらは説明がつくのさ。君の個性が違うものだったということだね」

「むしろそれしか考えられないですね」

人差し指を顎に当て、首を傾げて思考を加速して考えてみる。

オールフオーワンが挙げたのは弔の攻撃を初見で避け続けたこと、一年で片手間であしらせるほどの成長性、発光と熱量無効。そしてそれらは複数の個性を所持しているようだということ。

まず複数っぽい動きをする個性なことは間違いない。何せ身体強化と成長性に熱耐性だ。これらを一つで示せるなら何かしらの動物を模した異形型だが、私の見た目は人間そのものだ。

「んー…分かんない。適用範囲が広過ぎるのでは？」

「そうだ、広過ぎるんだよ。だから僕も考え始めはまるで見当が付かなかった」

多くの個性を知っているオールフオーワンですら知らない個性。それならば思考を加速させようと分かるはずもないか。

ふうと一息つく成生に、ニヤリと笑うドクターが目も笑わせて口を開く。横にいるオールフオーワンも口角を上げていた。

「二つヒントをやるう。お主の髪といった身体の一部は、脳無の身体に使われておる。使った脳無は複数の個性所持を簡単に行うことができおったわ」

ドクターの言葉を聞き、首を傾げて再び思考を加速させる。新しく情報が入ったならば辿り着く答えも違うことが多い。正しい情報はあればあるほど助かるのだから。

「まさか天然のマスターピースなんてものが居るとはのう……この目で見るまで信じられなんだ」

「それは僕もだよドクター」

二人の会話を無視して成生は思考に没入する。

ドクターの言葉は私が提供した身体は脳無に使われているということだ。そして脳無とは意思のない人形。私の身体を使って作った人形に複数の個性が利用できる。それらが繋ぐ答えは――

「――私には個性が複数ある?」

「ある意味でそれは間違っていない。君が持っているのは一つだ。けれど、君には産んでくれた両親がいるだろう?」

最後にオールフォーワンが告げたヒント。ここまで届いた言葉から予想できる成生自身の個性。

思考を加速させることができる成生は、答えに到達するのもすぐだった。



「指先発光……両腕発光から。頭の回転……思考力加速。……え、まさか……」  
辿り着いた答えは余りにも荒唐無稽。そんな個性があったとしても意味があるのか  
すら分からない。けれど、そうだとしか考えられない。

「——持っている個性を自分自身に最適な形で適用させる個性？」

オールフオーワンとドクターがニタリと笑う。それが答えだと二人して言っている  
ようだった。

「正解だ！正解には『所持している個性を自らの個性に変化・最適化させる個性』だ。見  
た目に現れない異形型の個性とも言えるだろう。条件さえ揃えばこれ以上なく強力な  
個性だよ！」

「ああ、だから指先発光の個性伸ばしで思考力加速……つまりは学習能力が上昇したん  
ですね。副次効果とでも呼ぶべきか」

指先発光が最初の個性だった。だがその一つの個性伸ばしをしたおかげで本来持つ  
ている個性も伸びたのだろう。思考力も加速したりしなかったりするようになり、デ  
フォルトでは常人よりか速くなるようになっていたのだ。

弔の攻撃を初見で避けたのはそのおかげで、成長したのは弔との訓練で思考加速も個

性伸ばした形になったからだろう。指先発光からの熱量無効は光る現象がそうなるように発光させた現象を最適化させていたからだ。

「そうだ。それ以外に考えられない。僕が君の個性を奪えなかった理由もそれだ」

「え、奪う？」

思わずオールフォーワンの方へと目を向ける。一年の間にオールフォーワンのことを調べてこそいたが、そんな素振りなど無かったのだ。

「どうせ調べて知っているだろう？僕の個性は『個性を奪い、与える』ものだ。初対面の時に握手しただろう？その時に試したのさ」

脳裏を過ぎるのは初対面の時のこと。確かに手を組む的な意味で握手はしたが、まさかそんな真似をされているとは思わなかった。

はあと一つ溜息を吐き、オールフォーワンへと不敵な笑みを見せる成生。ドクターには成生のヴィランとしての姿が瞳に映っており、オールフォーワンも雰囲気が変わったのを感じ取っていた。

「そういうことでしたか。貴方が隠し事するのは今更なので特に言うことも無いですが……与える個性、ですか」

成生の個性が分かった今、オールフォーワンの持つ個性は最高の相性を持っているのがすぐさま思いつく。

そして、それを利用しない成生ではなかった。

「……さらにドクターの研究は個性の複製というところも行っている。時間さえあれば本来よりかは劣化個性だが、どんな個性でも君なら使いこなせるだろう」

加えてオールフオーワンやドクターの協力姿勢。成生が完全にヴィランとしての笑みを浮かべるのも仕方のないことだった。

「私の個性は最適化させる。それなら持てば持つほど強くなる？」

「いや、限度があるはずだ。……君が望む個性になったら限度となる、という意味だがね」

オールフオーワンの言葉はつまり、成生が望む、成生のヴィランとしての姿を体现するイメージをそのまま再現できるということだ。

心臓が高鳴って仕方ない。気分がこれほど高揚したのは人生で初めてだ。望むものが全て手に入る、最高の気分が過ぎて倒れてしまいそうだ。

「とりあえずつと欲しいと思っていた個性と増強系が一つ以上貰いたいところですね。だましたお礼の一つ……下さいな。『人形を操る個性』、ありますか？」

成生の告げた個性にドクターは首を傾げ、オールフオーワンはフフフと笑っていた。オールフオーワンには何をしたいのかが予想できたようだった。

「やはり君は面白いよ、成生。あった方がいい個性はあげるつもりだったから安心する

「と  
いい」

「あ、習熟もあるのでくれる個性は一度に二個までにしてくださいね」

「普通」の少女、依光成生は巨悪オールフオーワンへと軽く注意し、そのまま紹介はお開きになった。

# 15歳 ヴイラン名決定

「雄英を記念受験しておきます」

「正気かの？」

中学三年が終わる頃、ドクター達のいる研究所へとワープし近況だったり脳無の話だったり話をしていた。

そして私の受験先という重要な内容が二人と情報共有され、聞かされた二人は思い思いの反応を返していた。ドクターは呆れたような顔を、オールフォーワンは微笑みを。

「フフフ……やはり君とは馬が合うね、成生」

「そりやそうでしょう。私の目的は『オールマイトを利用する』という側面を持つてます。貴方が『オールマイトを嬲り殺しにしたい』のと目的似てますし思考が近寄るのは当然です」

成生はオールフォーワンに刺激されたようにフフフと笑う。傍目から見ても、ヴィラン同士の碌でもない計画を練られているのが分かるものだった。

「どういふことじゃ？」

「今の私、ただの中学生です。普通の高校に進学する予定ですけど、きっと私の考えが役

に立つ時が来ると思っています」

不敵な笑みをし二人へ自らの考えを示す成生。そこにあるのはヴィランであるただの悪意だけだ。それも、巨悪オールフォーワンと考えを近くする並大抵ではないヴィランの悪意だ。

「普通の少女が強大なヴィランになった」という事実、これ以上なくヴィランに有利なカードでしょうか？ 雄英の記念受験は「普通」なことですよ」

成生が話したそれはヒーロー社会を破壊する一手。いづどこから強大なヴィランが現れるのか分からないという、社会を疑心暗鬼に陥れるヒーロー社会への攻撃だ。

しかしこれは雑に放たれて意味を發揮する一手ではない。社会的にインパクトのあるタイミングで放てば恐ろしい程の効力を發揮するタイプのものだ。上手くすればこの一手で、治安が恐ろしく悪くなっても驚きはしない程の。

「フフフ……カードの切るタイミングは弔に任せることになりそうだ。それでもいいのかい？」

「カードを切るのに完璧なタイミングなんて無いでしょう。それまでは弔君の下に付きましよう」

とはいえタイミングを作るというのは計画的な犯行でなければならぬ。そして成生には計画的に行動する気はさらさら無かった。

そして能動的に動くヴィランという役割なら最適な人物が近くに居る。死柄木弔という先輩……いや、既に後輩とすら言えるような、弟のようなヴィランが。

「それは助かる。弔は君と違つてまだまだ教えなければならぬことが多い。君が天才児の飛び級なら彼が一步一步進むタイプさ。あと半年は付かないと教えきれない」

「いいでしょう」

オールフオーワンの言葉に成生は肯定を返す。弔という強大なヴィランの影に隠れて行動することで、ヒーローには弔と意志を近い者だと示すという狙いもあった。

「じゃがヴィラン側にいる姿を見られれば公安やヒーローに目を付けられるぞ？」

「ええ。そうなるでしょう」

ドクターの言うことは正しい。いくら「普通」の少女とはいえヴィラン側に付いた時点でヒーローに声をかけられ、公安に始末されるなんて未来もあり得るだろう。……何度も目撃されればの話だが。

「ですが今の私は「指先発光」の個性よりも、オールフオーワンから貰った個性の習熟とその個性伸ばしがメインです。この間貰った「人形を操る」「エアウオーク」。むしろ個性伸ばしの内容からすれば発光訓練のためにここに来る方がバッドですよ」

ニタリと笑い、現状を確認しますと一言告げて成生は語る。絶対にバレることは無いという事実を。

「ここには黒霧のワープ経由でしか来ていない。場所も「病」の一字の言葉だけしか知らないから真実を話しても理解できる人はいない。家には監視カメラも無いから私のここに来た過去を知る者はここにいる人だけ」

依光成生がここに来た過去は二人と黒霧以外には誰にも分からない。弔でさえ予想はできるが確信は無いのだ。高校に進学した後なら新しく貰う個性の関係上、問題は無い。

オールフオーワンも感心したように「ほう……」と微笑む。

「跡は残さず、完璧じゃないか」

「そうですね、しかも高校に進学するギリギリ前……半年後でしたっけ？その頃には「転送」も貰えるんでしょう？一週間もあればだいぶ伸ばせますよ。……あと、頼んでた私の人形って出来てます？」

ドクターへと顔を向けるとコクリと頷く姿があった。膝に乗せた小さな脳無が持つ個性だ。複製できると聞いている以上、使わない手は無い。空間転移という意味ではワープよりも扱い辛い個性だが、成生の場合はだいたい移動先には人がいる。問題になっっていないかった。

「うむ、ジョンちゃんのコピーは難しかったが順調じゃ。人形はできておるぞ、お主の協力ありなら脳無作ってるついででも簡単じゃ」



ドクターがチラリと後ろを向くと、そこには成生と全く同じ身体の姿をした者がカプセルの中で培養されていた。脳無と同じカプセルであり、意思無き人形……死体であるのは明白だ。

もつとも、私の細胞を培養し植え付けた特注の死体だ。これを操れば文字通り私が二人になるようなものだ。

「これで欲しい物は全て揃いました。人形操作の個性伸ばしで高校にはこいつを送りません。私自身は別動して個性を伸ばし切れれば弔君の力にもなれるはずです」

進学した後も、ヴィランバレした後も問題なく行動可能な地盤が作れた。「普通」の少女である依光成生を認識すればヴィランである成生を認識するのが難しくなる。そうなればこの場にいる三人を認識し、止められるものはいないも同然となっていた。

悪魔達の会合は新たな悪魔を加えたことで、新しい道を作り始めていた。

「あとドクター。脳無からちよつと考え付いたことあるんですが協力つて出来ますか？」  
「ほう？ 具体的には何を」

ヴィランである成生だが、彼女が最も他とかけ離れているのは「目的を達成するためなら手段を選ばない」ことだ。他のヴィランでも同じだろうと思うが、彼女の場合は「自

らはどうなろうと達成すればいい」という要素が付随する。

「——私の身体、もつと欲しいでしょう?」

不敵な笑みを浮かべる成生に二人は笑みを浮かべて話を聞く姿勢に入る。

成生は自らの成長だけでなくオールフオーワンと会った後からオールフオーワン本人からの教えを、ドクターと会った後はドクターの考え方を、弔との鍛錬では格下への教え方やあしらい方といった学習も行っていた。

言うなれば教え子からの計画提案だ。二人は真摯な姿勢で話を聞いていた。

「当然じゃな。脳無にもつと使えればもつと上位の脳無が作れる」

「私、月に一回起きる性現象がありますよ」

月に一回起きる性現象。成生が女性という事実。それらから想像するのは二人なら容易もいいところだ。

そして成生の身体というには確かにこれ以上なく大事な素体だろう。何せ、新しい生命を生み出す核となるものなのだから。

「……取り出すのはできる。しかしそれを使ってどうするつもりじゃ？ 脳無に使うにも難しいぞ」

しかしそれは新しい生命のためのもの。既に死体である脳無からすれば真逆の存在だ。扱うにしても脳無とは全く別のものとしたドクターには思えなかった。

それを結び付けることができるのが、成生という存在だ。複数の個性を問題なく操れることが前提なら、大きく話は変わる。

「生体培養で成長させながら脳無の力を据え付ける。私がベースにあるなら……できるでしょう？」

成生の卵子と適当な精子、そして成生の身体が基にあるならば脳無という複数個性持ちの意思持たぬ者への改造は容易。まさしく、悪魔と墮天使が融合したような提案だった。

成生の提案に二人は一瞬口を呆けさせ、その後大きく声を上げて笑っていた。

「——ハハハハ!!!こいつは面白い!!!面白いぞ!!!」

「ハハハハハ!!そんなことを考えてたなんて僕にも予想できなかったよ!!!」

ノリノリになったドクターはテンションを高めたまま成生へと質問を放り投げる。そこまで提案できるなら答えられるだろうと、ドクターの目は笑いながらも真剣だった。

「だが父親はどうする!?!母親は全てお主になろうが、父がつまらん者なら碌な力も持たない者になろうぞ!?!」

「力はあればいいですが、そもそも作った作品は知性が間違いなくあるでしょう。言うなれば人の身体に意思を縛り脳無の力が付いた者になるはず。個性があつたら赤ん坊時点で取り上げて脳無の形で据え付ける。……知性を持った個性を持つ操り人形で目に触れても問題ない代物になる。であれば父親は影響がある人なら誰でもいい」

その言葉にオールフオーワンも乗り気になったのか、二人の間に立って話に割り込んできた。

「いい計画だ、成生。僕も混ぜてもらっていいかな?」

「あ、オールフオーワンも父親で参加します?どうせ個性は別ですし」

「それも面白そうだ。でもどうせならオールマイトやエンデヴァーといったヒーローの方が面白いんじゃないか?」

邪悪なニヤケ顔を全員が隠す気無く見せていた。ここにいるものは全員がヴィラン

だった。それも自分達以外の者を何もかも利用するタイプの、黒幕《フィクサー》タイプのヴィランだった。

「ヒーローだけじゃ面白くないですよ。ヴィラン側もやっておかないと面白くない」「もしかしたら隔世遺伝の個性が起きるやもしれん。個性の観点ではそれも間違いではないの」

巨悪と悪魔、新しく現れた闇——墮天使とでも言うべきヴィランという三人の人道を無視した計画の会話が続く。

一時間近くテンションが上がっていたため悪魔の計画が詳細までプランニングされ、実行まですぐさま決まったところでようやく三人は落ち着いてきていた。

一度頭を冷やそうとドクターが話題を切り替えるべく口を開く。

「ところで今の個性伸ばしは何をしておるのじゃ?」

「私自身を人形として操っています」

今の成生が持つ個性に内臓しているのは「指先発光」「思考力加速」「人形操作」「エアウォーク」であり、それぞれが「光熱操作」「学習能力超加速」「人形操作」「エアウォーク」に最適化されている。

後ろ二つはまだまだ最適化が進んでいないために使い慣らし段階だ。ただそれを成せば成生は間違いなく一段階上の力を身に着けることになる。

「指先発光によるレーザーで操るイメージで、自らの身体を自然に動かす練習です。戦闘訓練もこれでやってるんですよ?」

「何故そんなことを?」

一から説明すると成生は一言告げ、自らの個性について話し始めた。

「私は異形型。オールフオーワンから私の個性を聞いた後、指先発光からきちんと個性を確認し直したんです」

「異形型は人に異形を足して二で割ったような姿。では指先発光から来る異形とは?」

その答えがこれ——自らの電気信号が光であること。そして、指ではなく自らが「先端」と見做したところから発光できること」

これこそが成生自身の持つ最も異形である箇所。個性は脳で操作するはずだが、明らかにオーバーバースペックなのだ。

何せ上手く扱えば成生の反射速度は光速に至る。遠距離攻撃はレーザーを持っていく以上、あとは身体の遅さだけが問題になるだけだ。

とはいえ上手く操れることは不可能だと分かっていた。所詮人である以上、光速で反射など人の枠組みにいる間はできはしない。そしてそのための「人形操作」だ。

「であれば私を人形と見立てれば……反応速度は光速になる。オールフォーワンも予想していたことですよ」

「うん、「エアウオーク」をあげたのも空と言うフィールドに移動させ周囲知覚の自由度を上げるためだった。あとは身体の速度さえ増強系で上げれば君に敵はいない」

自身を人形と見れば完全に光速で反射できるようになる。あとは身体の遅さだけであり、それは後でドクターやオールフォーワンと最適化させていけば解決するだけの話だ。

解説して話していく成生だが、そういうえたと話すのを忘れていたことを思い出した。異形型であると説明され色々と再確認したのだ。当然、使っている指先発光についても。

「あ、そういうえと指先発光というのはある種間違っていました」

「ほう？それは初耳だ」

オールフォーワンが食いつく。最適化されたことで少し特性が変わったことを知りたいのは明白だった。成生も隠す気は無いので一つ一つ説明していく。

「光の特性を持つてこそいるものの、極小の生命エネルギーの放出とでも言うべきか……反射させるかどうかも自在でした」

試しに非常に弱くして人の目に入っても全く影響しないレベルに落とした光線を鏡

に当ててみたのだ。結果は反射するはずの方向には行かなかった。

光線のベクトルは、成生自身が向けたと思う方向へと向けられていた。それほどの自在性があるならばと、成生は色々と試してみたのだ。

「つまり、こういうこともできます」

例えば……光る色を変えろといったように。

「熱だけがある。まさか透明の光とでも？」

「そのまさかです。しかもこんな色まで」

透明色の光りから自然発光へ、そして暗闇に収束させたような光にまで変化していく。赤色だろうと青色だろうとどんな色にも変化させることができおり、従来の白色光から恐ろしい程の発展を遂げていた。

これこそが成生の個性、最適化させるということだった。

「自然光、透明光、暗黒光を操ることができました。しかも当たった者が何かくらいまで知覚も出来るようになりつつあります。そこからピンと来たんですよ」

不敵な笑みを浮かべ、二人に語り掛けるように話す成生。その瞳は邪悪なヴィランそのものだった。そのヴィランが決めたもの、それは――



「——私のヴィラン名」

忘れていたと二人はポンと手を叩き、軽口を叩くように成生へと思い描くヴィラン名を声に出した。

「死柄木成生は嫌かい？」

「嫌です。対等の……お嫁さんとかならともかく娘は嫌です」

「手に入れる個性を自らのモノにするのじゃから……グリードとかかの？」

「そんな強欲に見えます？」

ジト目で二人を見る成生に、ハハハと笑う二人。軽々しい態度だが、既に成生が決めているのなら重々しく話す必要も無いのだ。当然の態度だった。

「この光は闇を導く光。言うなればダークのためのライト。そして貴方、オールフォーワンとは対等でいたい」

ヴィラン名に思い描く自らのキャラクター性を詰め込む。ヒーローと同じ考え方が、悪いことではない。むしろ「普通」の考え方とも言えた。

「M s. ダークライ。それが私のヴィラン名です」

巨悪と悪魔に見守られ、新しい強大なヴィラン、闇のための光、M s. ダークライは産声を上げた。

不敵な笑みを浮かべ、デビュタントはまだまだ先と見据えた、深淵のような瞳をした

墮天使がそこにいた。

## 一章 デビユタント

## 16歳 雄英受験

「今日は俺のライブへようこそー!!!エヴィバデイセイヘイ!!!」

「プレゼントマイクかあ」

成生は雄英に受験に来ていた。さすがは雄英と言うべきか、学校ではトップクラスに頭がいい成生でさえ既に筆記で不合格が確定していた。自己採点が既に50点を切っていたのだ。

それも当然、成生がいた中学は「普通」レベルの高校進学しか考えてなかったからだ。雄英なんてレベルの高いところの勉強なぞしていなかった。

とはいえ成生は既に進学する高校は受かっている。文字通りの記念受験だ。もつとも、目的は合格なんぞではなく別のところにあるのだ。問題にはなりはしない。

「こいつあしヴィー!!!受験生のリスナー!実技試験の概要をサクッとプレゼンするぜ!!  
アユーレディ!!?

yeah!!!」

会場がシーンと静まっているにもかかわらずあの言動、流星はプロヒーローと呼ぶべ

きか、それともあのポーズをとらなければならぬと哀れむべきか悩ましい。

「入試要項通り——」

プレゼントマイクが試験内容を話している間に周囲をキョロキョロと見回す。顔を見ただけで予想がつくような個性もいるのだ。言い換えれば見た目だけで合格になりそうなやつを予測できる可能性もゼロではない。

「質問よろしいでしょうか!？」

「ん?」

「プリントには四種の敵が記載サイランされております! 誤載であれば日本最高峰たる雄英において恥ずべき痴態!! 我々受験生は規範となるヒーローの指導を求めてこの場に座しているのです!!」

(規範ねえ……。こいつは合格しそうな感じがする)

雰囲気は素人ではない。おそらくプロヒーローの家系か何かだろう。プロヒーロー相手にアホみたいな真面目質問ぶつけてるのも良い意味でお坊ちゃまらしい。

「ついでにその縮毛の君」

「先程からボソボソと……。気が散る!! 物見遊山のつもりなら即刻雄英こへいから去りたまえ!」

(物見遊山ではないなあ。遊びではないし)

「すみません……」

(……ん？あの子何か変な感覚がある。少なくとも「普通」ではなさそう)

成生は弔との訓練やオールフォーワンとの対話で身に付いたものがある。それは「巨大な悪」との遭遇から成立したものだ。が、「巨大な正義・悪を直感する」というものだ。

オールフォーワンとの対話、オールマイトを動画で視聴、弔との訓練、それらから思考加速により結び付けたスキルだ。個性ではなくスキルだ、誤魔化されたり間違えることは無い。

そしてそのスキルが今、注意された子とその横から類似した者がいると言っていた。

「へえ？」

「四種目の敵は0ポイント！そいつは言わばお邪魔虫！」

プレゼントマイクのプレゼンを見つは言わばお邪魔虫！。縮れ毛の少年はプレゼントマイクに釘付けであり、その横の少年も苛立つて話を聞いているだけだ。

「あの二人を見たいところね……」

「俺からは以上だ!!最後にリスナーへ我が校「校訓」をプレゼントしよう。かの英雄ナポレオンⅡボナパルトは言った!「真の英雄とは人生の不幸を乗り越えていく者」と!!」

プレゼントマイクは一息入れ、響き渡るように雄英の校訓をその場にいる全員に告げた。

「<sup>更</sup>Plu<sup>に</sup>s U<sup>向</sup>it<sup>こ</sup>ra<sup>う</sup>!!<sup>へ</sup>それでは皆良き受難を!!」

「更に向こうへ。良き受難を。……良い言葉ね。最初つからもつと向こうへと進んでる私に言う言葉じゃないけど」

プレゼントマイクの話が終わり、大勢に混じり場所を移動していく。

「会場は……よかった、縮れ毛の少年に当たってる。あの子には何かある、それを探りましょう」

周囲をキョロキョロと見回すとルーティーンを行っている者や準備運動をしている者が目に付く。そこにはさつき覚えておいた人もいた。

「あ、さつきの真面目お坊ちゃんもここか。足についてるアレ……ヒーローに居たような気がする。予想的中と」

とはいえあんまりキョロキョロしていると逆に怪しまれかねない。それを言えば一番キョロキョロして怪しいのは縮れ毛の少年だったりするのだが、それはそれだ。

いつスタート合図があるかも分からないので一応準備だけしておく。やる必要も特  
にないが、ポーズとしてやっておかないといけないのだ。

「ハイスタート」

「はい」

なんて思ってたら案の定プレゼントマイクの声が聞こえたので行動を開始する。

タツタツと試験場の中へと走っていく。が、そこで気づく——誰も動いていないことに。おかしい、スタートは鳴ったはずだ、

「あれ?」

「どうしたあ!?! 実戦じゃカウントなんざねえんだよ!! 走れ走れえ!! 一人だけじゃねえか!」

賽は投げられてんぞ!!?」

プレゼントマイクの言葉に、発破かけられたように受験生達が大挙して押し寄せる。

先んじていた成生は逆に道の端により大挙する受験生から身を隠し、隠密行動を開始していた。

「標的捕捉! ブツ殺ス!」

「ポイント稼ぎましようか」

とはいえ使えるのは「一般人レベルの体術」と「弱い指先発光」のみ。「普通」の高校生である依光成生はレーザーを放つようなことはしないのだ。

一般人らしい適当な構えをしセンサーへと指先を伸ばす。弾くように機械の手が動くも、思いつきり体重を乗せた拳ならその手を押し込むくらいはできる。

「えいつ!」

機械の手をセンサーへと叩き込み、行動不能へと追いやる。十数秒もかかってそれで

はまず合格などできはしないが、目的が違うのだから問題にならない。

「はあ……はあ……」

特に息切れしている訳でもないが一応そういう体をしておく。何せここでは「普通の」高校生なのだから。

広場上になっっている場所へと隠れながら移動し様子を見る。そこには真面目お坊ちゃん走り回り、丸くて可愛い女の子がヴィランを浮かべていたり個性が暴れまわっている光景があつた。

これが市民がいる町なら彼らはヴィラン扱いになっいてもおかしくないだろう。そう思うと少し口角が上がってしまう。

などと考えていた頭を振り払い周囲の様子を詳細に確認していく。予想していた人がいるはずなのだ。

「……いない?」

縮れ毛の少年がいない。雄英に入る巨悪などいない、いるとすればオールマイトに近い信念の持ち主だろう。そんな少年が活躍するはずの現場にいないというのは意外だった。

「どこに……いた……あれ?」



戦いに巻き込まれないように大回りしながら移動して探していると、腰を抜かしている縮れ毛の少年がそこにいた。少なくともそんな姿を見せないであろう人物だと思っていたのだが。

原因は何かとその視線の先へと目を向けると、そこには大型のロボットがいた。

「ああ、お邪魔虫とか言っていたやつですか」

逃げるべきか、隠密に移動するか悩ましいところだ。

そう逡巡していたところで、縮れ毛の少年が立ち上がり走り出した。向かう先には――  
―お邪魔虫の大型ロボット。

建物の影に隠れながら行動する成生は眼中にないと行動しているロボットだが、その移動進路は人が全員逃げ切った訳ではなかった。

「さっきの丸い子！」

移動進路には足を怪我したのか、地面に倒れる少女がいた。まるで少女へ迫る脅威を排除するかのよう縮れ毛の少年が走り、ヴィランロボットへと掛け声と共に拳を繰り出した。

「SMASH!!!」

ただ純粋な破壊。拳から放たれた規格外極まりない破壊は一撃でロボットを行動不能へと追い込んだ。

その様子に成生は思わず口元を隠していた。隠さなければいけない表情がそこにあった。

当たりだ

あり得るんじゃないかと私が提案し、納得したオールフオーワンと私が予想した、オールマイトの「後継者」。まさかこんな形で確認することができるとは思わなかった。

「終了~~~~~!!!」

「1ポイントね、予想通り不合格でしょう」

雄英に来ようとした事実を残すこと、そして受験者から将来敵対するヒーローの卵を見定めること。全て目的は果たせ、予想以上の収穫すらあった。

足が車のマフラーみたいな少年、物を浮かす少女、そして何よりも……オールマイトの後継者。まず間違いなく雄英に入学するだろう。

「知らせないとね」

オールフオーワンと話すことがたくさんだ。愉しみが増えていく。

## U S J 襲撃前夜

「オールマイトは弱っている。これは間違いない事実だ」

「本当か？」

「弔が「崩壊」させ黒霧がU S Jのカリキュラム情報を雄英から盗み出したことで、弔はU S J襲撃を決定した。」

オールマイトを殺したいと言う弔だ。雄英で教師をすると宣伝があったことから黒霧とオールフオーワンが事前に準備立てのために指示したのだった。

そして明日、U S Jを襲撃するという段階に来ていた。

オールフオーワンがモニター越しで説明を、私がバーのソファに座って補足説明を行うという形で弔に教えていた。

「後継者に力を渡してるんだよ？どんどん力は減る一方。連続して行動できるのも数時間とかじゃない？」

個性で人形のように自らの腕を上下させながら弔の疑問に答えを示す。既にある情

報から判断できる分なら説明しても問題にはならない。

「時間稼ぎで殺せるか？」

「御冗談を。今の立ち位置にいるオールマイトが反応するということは雄英教師も反応します。いくら情報を遮断してもパトロールくらいしているでしょう」

黒霧の指摘も当然のものだ。いくら外部と遮断できると言えど、外部と遮断されていると外側の人物が察する可能性は十分にあるのだ。雄英という最高峰ならむしろ可能性が無い方がおかしい。

「……M s. ダークライの力なら」

「おっとそれは無し」

弔の言葉に即否定を返す。M s. ダークライを示すのはまだまだ先なのだ。こんなアホみたいな段階でバレるわけにはいかない。

「はあ？」

「私は弔の下に付いてるけど、付いてるだけだよ。そうだね……オールマイトと教師二人までは手を出さない。教師が三人以上いれば一度だけ手を貸すくらいかな」

黒霧と脳無、そして弔で三人だ。なら向こうのプロレベルが三人までなら手出し無用だろう。

それ以上であれば蹂躪するのもやぶさかではないけれど、あまりやりたくないところ

だ。だから妥協するとその当たり前になる。

「うん。手の内を少しだけ見せるのは流石だよ」

苛立つ弔だが、オールフォーワンが肯定を返したことで渋々矛を収める。

しかし弔を中心にヴィランを集めると考えると考える人、参謀的な役割が必要になると思うところだ。弔が成長すれば問題ないけれど、今の弔だと難しいところだろう。

とりあえず最初くらいはしてあげてもいっかな。まずは自らの戦力を知ることから。

「弔にハイエンド脳無一体と黒霧、おまけでチンピラ60〜70人くらい? ……私一人より弱いね」

「チートが」

思わず煽ってしまったが実際弱いのだから仕方ない。弔はレーザーで貫けるし脳無は小間切れにして熱で燃やせばいい。黒霧は適当に放つ熱量に耐え切れない。チンピラは論外。

うん、間違いなく殲滅できる。

つと、話が脱線してた。次に敵の戦力だ。

「ヒーローはオールマイトにレイザーヘッド、あと13号。それに生徒20人」

カリキュラムから判断するにこれで全員だ。敵は23人、こちらが60人を超える戦力なのだから、個性さえ無ければ壊滅させられる戦力差と言える。

もつとも、人数差をひっくり返せるのが個性なのだが。

「気を付けるのは後継者である縮れ毛の少年、あとそいつに口うるさく言っているやつ  
の二人までは確認してる。イレイザーヘッドも含めて脳無ぶつければなんとかなるで  
しょ」

「指図すんな。今は俺が上だ」

弔が全くこちらの言うことを聞かない。……いや、情報として受け取ってこそいるも  
のの無視しているようだった。

それならこちらも口を出すことはない。

「はいはい。そもそも私は普通に高校で過ごしているんだから、本来なら一緒にいるは  
ずないもんね」

ツーンと態度を固くして弔から目を離す。

こちらも個性の鍛錬に注力したいのが本音なのだ。何せ新しく「転送」「瞬発力」を  
貰っているのだ。慣らすのに時間が必要だった。

「成生、今日までいいが、君が弔に教えるのは以降禁止としたい」

「……へえ？」

オールフオーワンの言葉に感心と疑惑を半々で混ぜたような目を向ける。

私と弔を離すのは理解できるし、今はいいタイミングと言える。だが弔の成長が上手

くいくのかがかなり怪しくなるはずだ。

……まあ先生と生徒という形だ。従っておくことにしよう。

「先生？ どういうことだそれ」

「M s. ダークライは才覚と力を持ち過ぎた。最早教える側とも言えるが、弔には少しばかり影響が大き過ぎる」

そうなのだ。ライバル関係が高め合う関係になるように、上手な人がタイマンで教えると成長が早まるように、身近に「こうありたい」という姿があるというのは成長に大きく関わる。

それが私と弔だと弔側が成長が早まる関係性にある。しかしそれは私足りきになつてしまう。

可能な限り早く離しておくのは正解だ。

「手遅れ感あるけどね。これからは弔が先生から教わるか、弔自身で学ぶか。頑張りなよー」

「そういうことだ。弔、間違えることを恐れてはいけけない。恐れるべくは間違えたことに気づかないことだ。」

オールフォーワンの言葉に弔は上を向き、そしてモニターの方へと顔を向けた。

「……先に間違いを教えるはくれないのか？」

「間違えたという経験は糧になる。即座に気づくなんていう成生が優秀過ぎるから、比較するのが間違っているだけだよ」

失礼な。私の場合には目的に辿り着くためという判断基準があるから間違っているかどうかすぐ分かるというだけだ。思考加速も手伝って即座に判断できるように見えるだけだ。

弔が静かに微笑む。その瞳にはもう成生は映っていないかった。

「オールマイトを殺す。そうすればこいつよりかは優秀って言えるだろ」

「その調子だよ、弔」



## U S J 襲撃 上

事前に弔が「崩壊」させ黒霧がU S Jのカリキュラム情報を雄英から盗み出したことで弔が決めたU S J襲撃、そこへ繋ぐワープゲートが目の前に展開されていた。

ワープゲートは全部で二か所。チンピラを集めた広場といつも集まってるバーだ。

ここを超えればヴィランの一員と認識される。公安やヒーローに目を付けられる。分かってはいても面倒なことだ。

「はあ……」

「溜息吐きたくなるのも分かる。僕と対等になると言い、既に側近レベルに到達した君だ。子供の面倒を見るようなことをさせるのも少し不本意ではある」

弔や脳無、チンピラ達がワープゲートをくぐっていく。成生もくぐらないといけないなあとのおんきに考えつつも、言葉の先はオールフオーワンに向いていた。

「今回は失敗するでしょうね……生徒の個性が見えてない。あと側近は私とドクター以外にもいますね？紹介してください」

「もちろんだ。ボディーガード担当の側近たる彼と戦えるレベルになれば僕と同等レベルまであと一歩だ。それと今回は試金石でもあるし脳無の紹介という一面もある、失敗

を恐れては進めないさ」

オールフオーワンから側近の紹介をするという言葉をとったので少しだけテンションが上がる。

戻ってきた時の餡が無いと面倒な行動なんてしたくないのは誰だって同じなのだ。

「ですね。それでは行ってきます」

ワープゲートをくぐりUSJへと向かう。後ろから少しだけ流れた声には気づかなかった。

「マキアが最強の盾とするならMs. ダークライは最強の矛となる。愉しみだよ」



時はほんの少しだけ巻き戻る。

弔がワープゲートをくぐり始めたのとほぼ同時にイレイザーヘッドはその姿を視認していた。

「かたまりになって動くな！13号！生徒を守れ！」

イレイザーヘッドが大きく声を張り上げる。

同時に、途方もない悪意を持つ者達が黒い霧から姿を現した。

「何だありや？」

「動くな！あれは——ヴィランだ!!!」

イレイザーヘッドがゴーグルをかけ臨戦態勢に入る。真つ先にワープした黒霧が状況を確認し、オールマイトがいけないことを察する。

「13号にイレイザーヘッドですか……先日頂いたカリキュラムではオールマイトがここにいるはずなのですが」

黒霧の言葉にイレイザーヘッドが即座に反応を返した。まるで分かっていたことだったと言わんばかりに。

「やはり先日のはクソ共の仕業だったか」

弔がガリガリと掻きむしり、ヴィラン特有の理解できない苛立ちをヒーローやヒーローの卵へと向ける。

悪意そのものとしか見えない弔の姿に、ビックリとする生徒もいたようだった。

「どこだよ……せつかくこんな大衆引き連れてきたのにさ……。オールマイト……平和の象徴……いないなんて」

苛立ちを隠さない弔。オールマイトがいけないとは予想だにしていなかった、ならばと次の手を考える。

オールマイトを呼ぶ……ヒーローを呼ぶ方法だ、それなら簡単な方法がある。

「子供を殺せば来るのかな？」

「急ぎはするだろうね」

ワープゲートをくぐり終えた成生が一瞬で状況を把握する。そして弔へと助言していた。

USJに着いた成生が認識したのは、イレイザーヘッドと13号が生徒たちを守ろうとしていることと、何故か本来いなければならないはずのオールマイトがいないことだ。後者に至つては、こちらから見ても誤算だ。

広場の上、13号達の居る方へと目を向けると生徒たちの姿があつた。予想通り、縮れ毛の少年の姿もある。

「バカだがアホじゃねえ。これは……何らかの目的があつて用意周到に画策された奇襲だ」

目を向けられている先では状況把握を急ぐA組生徒やイレイザーヘッドの姿があつた。避難を急いでいるのが成生の瞳にも映つていた。

「13号避難開始——」

行動を開始した姿を見、即座に黒霧を近くに呼ぶ。弔に教えたりするのは色々縛りがあつて面倒だが、黒霧との情報共有だつたりは特に制限もない。

現状から考えられる向こうの戦術を見抜き黒霧へと伝える。

「抹消の個性だっけ。イレイザーヘッドが指示して避難、13号が護衛、そしてイレイザーヘッドが奇襲返し。じゃないかな？」

「恐らく」

黒霧も予想はしていたようで、向こうの行動が開始した瞬間に黒霧は生徒たちの方へ襲う予定だったらしい。考えがかぶったことに少しだけ腹を立ててしまう。

「一芸だけじゃヒーローは務まらん」

予想通りイレイザーヘッドが広場の方へと降りてきた。奇襲に対するカウンターと言うには雑もいいところだが、威勢だけでも押し返しできなければ待つているのは凄惨な結末だけだ。

流星はプロヒーローといったところだろう。

「多分まばたきの間が隙だよ黒霧。隙を突きな」

黒霧へとアドバイスし成生は弔よりも後ろでただ突っ立っている。守られる対象でもないのだが、着いた順番的にこうなってしまった。

イレイザーヘッドに展開されていたチンピラが蹴散らされていく。ゴーグルでまばたきを隠しているのだろうが、常に発動し続けるようなことをしていれば問題なく黒霧が移動できる。

「うん、成功」

予想通りチンピラの肉壁が蹴散らされていく間に黒霧が生徒たちの方へ移動できたのを視認できた以上、あとはこちらのものだ。

「嫌だなプロヒーロー。有象無象じゃ齒が立たない」

などと考えてたらイレイザーヘッドがこっちに突っ込んできた。「普通」の高校、春川高校の制服を着ている私の方へ。

弔よりも後ろにいるから大ボスだとも思ったのだろうか？勘違いや早合点はよくないぞヒーロー。

「お前は？」

「依光成生と言います。以後よろしくお願いしますね」

イレイザーヘッドが構えるも成生は手出しなどしない。今回は弔の戦いなのだ、全て壊すような真似をするわけにはいかない。

「攻撃してこない？」

「私別にヴィランでも何でもない一般人です。他人を傷つけたことないですよ」

存外これは事実だったりする。

確かに巨悪と話して邪悪な計画をいくつも立ててこそいるが、成生本人が人を傷つけたことは一度もない。例外は弔と黒霧くらいのもので、殺したことすらないのだ。

思想犯や黒幕ブラックサードという意味では大活躍しつつあるが。

だがイレイザーヘッドからして見れば襲撃者Ⅱヴィランの方程式は変わらない。と  
りあえず捕縛して後で話を聞くだけだ。

「ここに侵入しただけでヴィランだ」

「きゃっ!!」

捕縛布を向けるも、イレイザーヘッドの目に見えたのは恐怖で怯える「普通」の女子  
高校生の姿だった。

怯えるのも当然だ、プロヒーローが理由こそ弱いものの鍛えた力を向けてきたのだ。  
一般人なら恐怖で足が竦むのも、ペタンと膝が落ちるのも当然とすら言える。

言い換えると、ヴィランにはあり得ない姿だ。

「……っ!!? 本当に一般人か!？」

イレイザーヘッドの思考が乱れる。ヴィランの集団に一人だけ一般人が混じって  
いるなど碌でもない想像しかできない。

だが、チンピラのような雑魚を纏める小悪党とイレイザーヘッドの考える碌でもない

想像を行う者はイコールで繋がらなかった。

「そこだ」

「ぐっ!?!」

成生の行動で油断を誘われたイレイザーヘッドの腹へと膝蹴りが叩き込まれる。弔の一撃だからこそまだまだ戦闘続行できるダメージだったが、これが脳無だったら一撃KOものだった。

吹き飛ばされダメージを負いながらも即座に態勢を立て直すイレイザーヘッド。弔も追撃に動いていた。

「アクションする度、髪が下がる瞬間がある。まばたき云々言ってたが……合ってたみたいだな」

数瞬の攻防が続きイレイザーヘッドが弔へとカウンターで肘を腹へと叩き込む――はずだった。

「無理をするなよイレイザーヘッド」

「――っ!!」

イレイザーヘッドの肘が崩れる。ギリギリのタイミングで弔が左手を間に挟んでいたので。即座に五指で触れたことで弔の個性が発動していた。

「生徒に安心を与えるために正面戦闘か？」



即座に離れるイレイザーヘッドへと口で攻撃する弔、さらにチンピラが追撃し距離をとる。

弔の言葉での攻めも警戒しなければならぬ個性を見せた後ならば効果的だ。事実さつきまで焦りが見えなかったイレイザーヘッドが、ほんの少しだけ動きが鈍っている。

「かつこいいなあかつこいいなあ……とところでヒーロー」

弔が脳無へとイレイザーヘッドが潰せと一言命令する。と、同時に脳無が動き始めた。

「本命は俺じゃない」

あの子は私の細胞を使っていない、試作段階の脳無だ。シヨック吸収と超再生の個性を持った脳無だが、たった二つの個性しか持っていない個体だ。

それでもオールマイトと同等程度を目指した性能をしてるから強さという意味では十分なんだけど。それこそプロヒーローの一人なんて……

「数秒で終わるでしょうね」

「対平和の象徴、改人“脳無”」

数秒でねじ伏せられたイレイザーヘッドの姿が、そこにあった。

「個性を消せる。素敵だけなんてことはないね。圧倒的な力の前ではつまりただの無

個性だもの」

オールマイト並の性能持つてれば大概の人から見れば無個性だろう。私が増強系の個性を持ちたいと言った理由はこういうのに遭遇した時のためだし。

私の身体能力では光速で攻撃はできても指を向ける必要がある。目の前で音速レベルで行動されれば流星に思考力加速と光速反射のコンボがあっても身体が追い付かない。

イレイザーヘッドと同じような結果になるだろう。逆に数秒の距離あれば殺せるから、相性的な問題と言える。

「死柄木弔」

「黒霧、13号はやったのか」

ワープゲートを渡つて黒霧が報告に戻ってきた。隙を突けと言って狙い通り進んだのだ。

少し逃げられたとか、そんな私の予想通りには進んでそうだ。

「行動不能にしましたが……散らし損ねた生徒がおりまして、一名逃げられました」

「……………は？」

ふうんと一息つく。一名なら黒霧はかなり頑張った方だろう。速度増強系やサポート系は数名いた、多少の連携さえ上手くいけば黒霧一人からの逃走はできなくもない。

逆にちゃんと連携とれたなら複数名逃げたどころか黒霧に一撃喰らわせるくらいの可能性はあった。それが無いなら惜敗くらいだろうか。

「はあ……。はあ——黒霧、お前がワープゲートじゃなかったら粉々にしたよ……」

首をがりがりと掻きむしる弔。苛立ちが隠せてないのが丸わかりだ。それ自体は悪く無いのだが、悠長なことをやってる時にやることではないという意味ではヴィランとしてバッドだ。

「さすがに何十人ものプロ相手じゃ敵わない。ゲームオーバーだ」

思っていたことが伝わったのか、ピタリと掻きむしる手が止まる。思考がまとまったのか、両手をふらりと下ろす。

「今回は、ゲームオーバーだ……。……帰ろっか」

「ん、いいんじゃない？」

引き際は大事だ。特に弔の場合は傷を治す個性持ちがいない。多少の無茶しても構いやしないけど、死なれるのだけは困る。

無茶やるとして……。せいぜい生徒を殺すくらいかな？

「けどもその前に、平和の象徴としての矜持を少しでも——へし折って帰ろう」

後ろに潜んでいた三人の生徒、その中でも蛙っぽい子へと弔は一瞬で間を詰め、手を顔面へと翳す。五指を触れたのは確実だった——が、崩れていない。

「……本当かつこいいぜ、イレイザーヘッド」

脳無に潰されながらも目だけは弔へと向けていたようだ。流石プロヒーロー、守る側からすれば即死攻撃が一番恐ろしいことくらいは分かっているみたいだ。

感心している弔へ、潜んでいた縮れ毛の少年が思いつき殴りつけてきた。雄英受験の時に見た、あの少年だ。

一瞬あの威力がああ場で発生したら危険だと指を向けるも、ギリギリ脳無が間に合うと個性は発動しなかった。

「手え放せえ!!!」

「脳無」

弔も分かっていたのか即座に脳無を呼び盾としていた。オールマイトの後継者と言えど、馬鹿げた威力がすぐさま使える訳が無い。最適化に特化した私ですら2く3か月は必要なのだ。

とはいえNo.1ヒーローの個性だ。多少しか使えずともそれなりの破壊力は持っていた。ドゴオという音と共に脳無へと叩き込まれる。

「え……」

当然、傷など有りはしないが。

ショック吸収の個性があるのだ。例えば全盛期のオールマイトの破壊力でも、打ち抜く

には数発必要な個性なのだ。子供なら尚更効くはずが無い。

「いい動きをするなあ……。スマツシユ、縮れ毛の少年……。お前か」

私が注意したことは覚えていたらしい。危険な少年なのだということを、殺しておくべきだということを。

「まあいいや、君死ん」

ドゴオツ!!

弔が脳無に指示を出すよりも早く、USJの出入口が勢いよく吹き飛ばされた。これほどの勢いを持って突入し、尚且つこれほどの速さで到着できるヒーローは一人しかない。

「もう大丈夫」

そう——No. 1ヒーロー、平和の象徴、オールマイト唯一人だ。

「私が来た」

守られるべき者に安心を、敵対するものに絶望を与える台詞と共に、ヒーローは現れ

た。

「あ——！……コンティニューだ」

私も弔も、ようやく現れたかという目をしてヒーローを見据えていた。

## U S J 襲撃 中

「待ったよヒーロー、社会のゴミめ」

ズガガガン！という音と共にチンピラ達が前のめりに突つ伏す。オールマイトが一瞬で移動しチンピラに一撃ずつ見舞った音だ。

光速反射と思考速度加速で見えていたが、流石No. 1ヒーローだ。一撃一撃にちゃんと技術が培われている。力を集中させたり、急所への確に打ち抜いたりと基本中の基本から移動時に衝撃波が出ていなかったりと高度なレベルまで多彩だ。

「相澤くん、すまない」

ほぼ一瞬でイレイザーヘッドの元まで辿り着いたオールマイト。意識のないイレイザーヘッドを肩に担ぎこちらへと身体を向ける。

「っー」

一瞬の眼力、それだけでこちらに一瞬で移動してくるのは予想がついた。

幸い弔とは少し距離をとっており、こちらにオールマイトが来ることは無かった。だが弔に襲われている生徒は一瞬で救出され、その上で弔に一撃を加えて離脱していた。

「皆入口へ。相澤くんを頼んだ、意識が無い。早く！」

「え!?あれ!?速え……!」

一撃を加えられた弔だが、ギリギリで防御が間に合っていたようだ。弔の身に着けている手の一つも落とさずに対処出来ていた。

あれは私のおかげでもありそうだ。弔との体術訓練は途中からだだが、私が指を向けたら光速で飛んでくるという反射訓練のような鍛錬にもなっていたのだ。オールマイトを視認できていれば何とか反応できる成長はしていた。

「流石に速いや、目でほぼ追えない……でも思ったほどじゃない。やはり本当だった……?」

ヒーローの卵の生徒ですら目で認識すら出来なかったのが、弔はギリギリ追えていた。嫌々だったが弔も心の中で成生との訓練のおかげだと認めていた。

そして弔の目に追えている事実は聞いていた話と合致していた。

「弱ってるって話……」

弔の眼力にビクリと縮れ毛の少年が怯える。オールマイトが横に居ても怖いものは怖いのだ。

「オールマイトダメです!あの脳ミソヴィラン!僕の腕が折れない力でビクともしなかつた!!」

「緑谷少年」



緑谷、ようやく縮れ毛の少年の名前が分かった。オールマイトはヒーローとしてはN.O. 1だが先生としてはまだまだまだ新米らしい。咄嗟に名前が出てしまうのはいいが、戦う時の癖でこちらにも聞こえてしまっている。

「大丈夫!」

緑谷少年に自らの目を挟むようにピースして笑い、オールマイトは弔へと走り出す。

「CAROLINA SMASH!!!」

「脳無」

オールマイトの全力を喰らえば弔と言えど意識が飛ぶ。分かっているから脳無を盾として前に出した。

「マジで全っ然……効いてないな!!!」

クロスチョップを平然と受け、更に追撃を受けても脳無はビクともしない。そういう風に作られているのだ、当然のことだった。

「効いてないのはショック吸収だからさ。脳無にダメージを与えたいなら……肉をゆうつくりとえぐりとるとか有効だね、やらせるかは別として」

……弔は子どもっぽいなあと思うことがよくあるけど、こんなタイミングで出なくてもいいのに。弱点なんて教えなくてもヒーローは勝手に暴くんだから。

「わざわざサンキュー! そういうことなら! やりやすい!!」

バックドロップ。たったそれだけの技だがオールマイトの力で起こせば地面に埋まるのは必然だ。

必然……なんだけど、いざ目の前で見ると「いやそれはおかしくねえ？」感がある。むしろ威力が強過ぎてクレーター出来る方が正しいんだけど、これもプロの技術というやつだろうか？

まあ、埋まるとしても落とす先が地面ならの話だ。

「~~~~~!!!そういう感じか……!!!」

「コンクリに深く突き立てて動きを封じる気だったか？それじゃ封じれないぜ？黒霧、期せずしてチャンス到来だ」

突き刺した先はワープゲート。黒霧が戻ってきていたのどこ行ったのやらと思っ  
てたらちやんと共闘態勢でいたらしい。

「あイタ!!」

「目にも止まらぬ速度のあなたを拘束するのが脳無の役目。そして——貴方の身体が半端に留まった状態でゲートを閉じ引き千切るのが私の役目」

流石にオールマイトを殺す算段を少しは考えて来ていたみたいだ。

私は勝手に黒霧と脳無で動き留めて弔が崩壊させるのかなあ？と思ってたけど、弔は意外と安全志向な考え方をしていた。オールマイトの反撃考えたらそつちのがいいかと

は思うけど。

「蛙っ……！つゆちゃん！相澤先生担ぐの代わって！」

「うん。けど何で」

「ん？」

耳に入ったのはさつきオールマイルトが助けた生徒たちの声。増強系の個性はまだそんなに持っていないけれど、音を注意深く拾う技術は私も磨いてきているのだ。……まだまだ発展途上だけだ。

「オールマイルトオ!!!」

成生がチラリと生徒の方を見た瞬間、緑谷がオールマイルトへと駆け出して来ていた。

流石オールマイルトが見込んだヒーローの卵。ピンチには勝手に身体が動くってやつだな。

成生がそう感心した瞬間、別の側面から黒霧へと一人の少年が——爆発を起こす両手で、一瞬で黒霧を地面へと伏せさせるようにとびかかってきていた。

「どっけ邪魔だ!!!デク!!!」

「……むかつくやつ来たなあ」

淡々としていた成生の顔が苛立ちに染まる。

個性以外の思想も「普通」からかけ離れた優秀。最も「普通」だった者から見れば、最

もかけ離れている思想が故、成生が生理的なレベルで嫌悪する人が現れた。

## U S J 襲撃 下

「てめえらがオールマイト殺しを実行する役だっただけ聞いた」

脳無が凍結し身体の動きが固まる。不意打ちだった上に命令も受けていない脳無はただ受けるしか選択肢は無い。

「だあー!!」

「ふん」

さらにもう一人の弔へ向けられた奇襲。子供で近距離だったから弔は軽く避けていた。

「くっそー、いいところねえ!!」

「スカしてんじゃねおぞ!!モヤモブが!!」

随分と威勢のいい連中が現れた。そして遠距離攻撃持ちが一人、しかも氷なんていうかなりの万能属性だ。

決めたルールだから手は出さないが、炎や氷といった熱量操作系の攻撃には私の指先発光をぶつけたくなる。相殺を貫通して格上だと見せつけるのは嬉しいのだ。

そしてそれはそれとして、だ。

「モブ呼ばわり……こいつ……」

両手から爆発させる汗を流す少年。言葉だけじゃない、行動の端々から私の嫌いな要素が目に見え。

私はなんだかんだ言っただけで「普通」は好きなのだ。「普通」なことは何も悪いことじゃない、ただ「普通」を押し付けるのは嫌いなのだ。

そして「普通」を押し付けることを一番分かりやすく行うのは、優秀だと自負する優秀な人間が「普通」の人同様の行動を起こした時だ。明確に差が現れ、否が応でも「普通」を押し付けられる。

そういうことを起こし、「普通」を見下すやつは反吐が出る程に嫌いだ。さらに自分の人生は自分が主人公だというのに、他人をモブなどと呼ばわり自分が他人の人生の主人公面する——到底許せる人間ではない。

さっと成生は両手で顔を隠す。平常心から余りにもかけ離れた表情、今この場にいる誰にも教える訳にはいかなかった。

「氷結……」

「平和の象徴はてめえら如きに殺れねえよ」

「かつちゃん……皆……」

不幸中の幸い、全員が吊の方へ集中していた。さらに後方にいる成生の方には姿が制

服なのも相まって、プロの探知範囲かオールマイトが視界に収めるだけで、ほぼ誰の目にも映っていないかった。

「……………ふう……………」

思考加速により平常心を取り戻し、顔から両手を離す。爆発少年を視界に入れるとイラつとする程度に感情を抑えきっていた。

爆発少年は痛い目見させるとして、4人の加勢。しかもこちらは二人が抑えられつつある。……………さて、弔はどう出るかな？

「出入口を抑えられた。……………こりゃあピンチだなあ」

まずは現状認識から。相手が攻撃してこないならまずは冷静になろう、オールフォーワンの教えはちゃんと伝わっているみたいだ。

「モヤ状のワープゲートになれる箇所は限られてる！そのモヤゲートで実体部分を覆ってたんじゃろ!」

「っ!」

「つと動くな。「怪しい動きをした」と俺が判断したら即爆破する!!!」

「ヒーローらしからぬ言動。つと一般人がいんじやねーか。何でここに?」

あ、やべ。程々に戦域が近づきつつあったから視界に入っちゃったみたいだ。目立つたりしないっていう認識外にいる……………ミステイレクシオンだっけ?、それを使つてたの

に。

仕方ない、自己紹介でもしよう。

「バツカ！モブ女もヴィランだ!!制服なんてのも騙すためだろ!!」

ぶち殺してやろうか？

「つ失礼な！これでもちゃんと在籍してます！普通の進学校の生徒ですー。成生って言うんだ、君は？」

「あ、俺は切島です。……っっておかしいだろこの流れ！」

……頭が爆発してる少年は放っておいて、硬そうな少年の名前は切島というのは分かった。クラスメイトの戯言を鵜呑みにせず、ちゃんと話すのはポイント高いぞ☆

「何でこんなところにいんだ？」

「女には不思議が付きものなんだよ♪」

こういうのは程々に揶揄うのが愉しいのだ。何でか横にいる少年達は困惑してるみたいだけだ。

「……えーと、どうすればいいんだこれ？」

「とりあえずそっちの方解決したら？」



指さす方は弔たちの方。ヒーロー側からすれば脅威度は圧倒的に弔たちの方が上だ。

こつちにかまけてないでまずはヴィラン確定した人から何とかしなよ？

「攻略された上ほぼ無傷……最近の子供は凄いなあ。恥ずかしくなってるぜヴィラン連合」

目が成生へと向けられている間に弔は態勢を立て直すことにした。まずは黒霧の奪還からだ。

「脳無、爆発小僧をやっつけろ。出入口の奪還だ」

弔の命令で脳無の身体が動き始める。凍結された身体を力任せに動かし崩れていく。

「身体が割れてるのに……動いてる!？」

「みんな下がれ! ショック吸収の個性じゃないのか!？」

そして崩れた先から身体が再生を始めていた。右半身が崩れたと言うのに数秒と経たずにほぼ回復しきっていた。

「これは超再生さ。個性が一つだけと言ってないだろ。脳無はお前の100%にも耐えられるよう改造された超高性能サンドバッグ人間さ」

回復も終わらないままに脳無は黒霧を抑えている爆豪へと襲い掛かる。オールマイト並の速度を持って殴れば肉塊になるのが妥当な結果だった。

「加減を知らんのか……!!」

だが結果はオールマイトが吹き飛んだというものだった。爆発少年を庇って脳無の攻撃を受けたのだろう。脳無のスピードに追い付けるのはオールマイトしかおらず、庇わなければ爆発少年が死ぬならオールマイトは迷わず庇う。ヒーローなのだからそういう動きをするのだ。

「仲間を助けるためさ。他が為に振るう暴力は美談になるんだ、そうだろヒーロー？」  
弔が無邪気に適当なことを話し出す。？八百を並び立てて遊んでいるが向こうはやる気があるらしい。オールマイトは全力を出すためにさっさと生徒を外へ送りたいうろくに、生徒が意図を察せないとは少し残念……いやそっちのが才覚的には「普通」なのかな？

「3対5だ」

「モヤの弱点はかっちゃんか暴いた」

「俺らがオールマイトのサポートすれば勝てる」

ヴィラン  
敵の個性も分かり強力なプロヒーローもいる。油断しなければ勝ち目は確かにあると言える。

だが油断しなければ、の話だ。油断を誘うのがヴィランなのだ、そこをまだ理解してない当たり、まだまだヒーローの卵といったところか。

「ダメだ!!!逃げなさい!!!」

オールマイトも分かっているのだろう。半端な戦力では逆効果だ。そして生徒たちは、個性は強力と言えるがヴィランとの戦いという意味ではまだまだ落第だ。

「さっきのは俺がサポート入らなきゃまずかったですよ」

「それはそれだ！轟少年！ありがとな！！」

オールマイトの眼光が強まる。生徒が逃げないと判断し一気呵成に潰す方へ判断が寄ったのだろう。脳無さえ損害なく倒せれば正しいと言えるが……

「……弱体化してるオールマイトがやれるの？」

「しかし大丈夫！！プロの本気を見ていなさい！！」

自らを鼓舞しオールマイトがこちらへと一気に踏み込む。その矛先は、当然脳無だった。

「脳無、黒霧、やれ。俺は子どもをあしらう」

ドゴオ！！！！

脳無とオールマイトがドゴオと拳と拳がぶつけあった音だ。さらにそこから二人はラツシユの態勢に入っていた。完全に殴り合いだ、技術の差こそあれどそのパワーは同じ。

シヨック吸収と分かかっていて殴りつける。……まさかキャパ越え狙いか？私が動画で見たことのあるオールマイトの全力なら可能だろう。けれど弱体化した今で……可

能なのか？

“無効”ではなく“吸収”なら!!! 限度があるんじゃないか?!”

やはりか。だけど……いや、そうか。オールマイトはヒーローだ。

「私対策!? 私の100%を耐えるなら!!! さらに上からねじ伏せよう!!!」

ヒーローならば、ピンチに追い立てた時こそ恐ろしい。何故ならヒーローとは――

「――ヒーローとは常にピンチをぶち壊していく者!!! ヴィランよ!!! こんな言葉を知っているか!!!」

「Plus Ultra!!!  
!!!!!!」

優に300を超えるラッシュ、脳無が耐え切れずUSJから吹き飛ばされていく。こつそり透明光を指先発光で伸ばし、脳無が飛んで行った先を知覚しておく。

「さてとヴィラン、お互い早めに決着つけたいね」

「チートが……!」

お互い早めに。弱体化は素の力だけではなく時間制限までありそう。いい収穫と言えるだろう。オールフォーワンに教えたらしい感じに嬲り殺しにするプランもすぐ考え付きそう。

「全つ然弱つてないじゃないか……脳無さえいれば……!」

弔が狼狽え、さらにオールマイトが眼力と雰囲気だけで動きを抑えつけていた。

「どうした? 来ないのかな? クリアとか言っていたが……出来るものならしてみろよ!!!」

眼力は確かに恐ろしいレベルだ。なのだが、オールフオーワンと対峙した時と比較すれば同じかそれ以下だ。弔がオールフオーワンから重圧を向けられることは無いから全つ然耐えれてないけど、私はあるから何の問題にもならない。

だから、少し魔が差した。

「……いいのかな?」

弔の二歩ほど前へと歩みを進め、オールマイトと対峙する。不敵な笑みもしていない、「普通」の少女の成生だ。

「君は……一般少女?」

「依光成生つて言います。ところでクリア……しちゃっていいんですか?」

ほんの一瞬だけ、成生は瞳の奥に深淵のような色を浮かべる。M s. ダーククライの片鱗を見せただけだったが、たったそれだけでオールマイトは冷や汗をかいていた。

その動きを止めたのは、背中からかけられた声だった。

「おい」

「死柄木と私で連携すればまだチャンスはあります」

まだチャンスはある。そう言いたげな二人であり、まだまだ戦う気満々だった。

「黒霧、逃げる準備。引き際を知りな、ヒーローを舐めるな」

たった一度。オールマイトと脳無の戦いを見ただけで成生は成長していた。ヒーローはピンチを超えていく存在だと認識すれば、応援にかけつけるヒーロー達の数も変わるもの。

従来予想ならあと数分はあるはずだったが、その程度の加速は優にしてくるだろう。ならばここが限界だ。

「どけー！」

「脳無の仇です!!!」

成生の制止を振り払い、二人はオールマイトへと突撃する。手が届けば殺せる、あと一歩で目標へと届くのだ。

だがその一歩が、遠かった。

「オールマイトから、離れろ」

「二度目はありませんよ!」

なりの勢いで割り込みに飛んできた緑谷少年が黒霧へと殴りかかる。警戒はしていたために弔と咄嗟の連携で五指を拳へと突きつけ――

「……だから言ったじゃない。引き際だつて」

「来たか!!」

——られなかった。一発の銃弾が手を横から狙撃し、邪魔をしていた。

「I—Aクラス委員長飯田天哉!!ただいま戻りました!!」

視線を入口へと向けると、そこには雄英所属のプロヒーローの集団がいた。

スナイプ、セメントス、ミッドナイト……十人近い数のトップクラスのプロヒーロー相手ではいくら弔と黒霧と言えど勝ち目はない。

私としては全員による奇襲と予想していたために少しがっかりだ。このタイミングだと二人だけでもギリギリ逃げ切れる。

「あーあ、来ちゃったな、ゲームオーバーだ。」

残念そうに弔が呟き、黒霧がワープゲートの展開を始める。

そこにスナイプの銃撃が2発届く。いくら弔と言えど遠距離狙撃には反応しきれていなかった。左腕と左足に一撃ずつ貫い、そこでようやく弔との間に空けておいた数歩の距離が埋まる。

「黒霧、私を殿しんがりに行きなさい」

死柄木へと向けられる銃撃の間に割り込む。既に弔が撃たれたが足一本あればワー  
プゲートをくぐれる、十分だ。

「この距離で捕獲可能な個性っ!!」

続くスナイプの銃撃。ほぼ連射で撃ったにもかかわらず、弔との間に成生が挟まると  
いう異常事態にヒーローは一瞬何が起きたのかすら理解できていなかった。

さらにヒーロー達は成生のその様子を見てそんなバカなど一瞬だけ悔やんだ。銃撃  
に普通の少女が割り込めば蜂の巣になり死ぬだけだ。人質としか見えていなかった  
ヒーロー達にはまさか人質が庇うなぞ考えられなかったのだ。

しかしそこに在った光景は……プロヒーローには信じられない光景だっただろう。  
銃弾を素手で掴み向きを変えて避けるなどオールマイティのような超人でなければでき  
ないのだ。

それを「普通」の少女が行っていた。

さらに成生は13号へと指を向け、向けられているブラックホールへと収束させた透  
明光を向ける。

「なっ!?!」



私のレーザーはブラックホールに分解されない。貫通し、13号の右腕を貫いていく。

「一般人捕ばっ……!?!」

死柄木へと向けられた銃口が今度は銃弾を麻醉弾に変えて成生へと向けられていた。

だが銃口を向けたということは成生の個性を銃口へねじ込めるということでもある。前髪の髪先から銃の内部に熱量を放り込み、弾薬を爆発させる。愛用の武器を破壊する完全なる不意打ちの爆発には、いくらプロと言えど一瞬たじろぐ。

「あと君……爆発少年、私が嫌いな権化みたいなやつだから痛い目見な」

クスリと笑い、指先を向ける。たつたそれだけだというのに爆豪から大爆発が起きた。正確には爆豪のコスチュームから。

爆豪は一撃で黒霧を仕留めるためにコスチュームに自らの汗を……爆発する汗をため込んでいた。使うことこそ無かったが溜め込まれたままであり——熱を操るものからすれば悪用されるには十分が過ぎた。

爆発は爆豪自身へと向けられたものであり、更に爆発の衝撃といった被害は周囲へと向けられる。間近にいた二人にも、爆発の衝撃が全身に浴びせられていた

「がっ……!?!」

「びへ……!?!」

「ぐっ!？」

それだけでパタリと二人が倒れ、一人は膝をついた。氷で咄嗟に弱めたか、成長株だ。本音では爆発少年は殺したい。けれどここで殺そうとすれば周りが動き出すし、そうなればオールマイトを殺すことになる可能性がほぼ100%だ。

まだオールマイトには生きて貰わねばならない……致し方ない。諦めるとしよう。

「っー」

指先を向けられることに危険を察したセメントスがオールマイトと生徒、そして私を分断するように地面が隆起するも……手遅れだった。

セメントが隆起する直前、視界に収めていた筋肉の塊であるオールマイトがしばみかけていた。骸骨のような姿ではないが、さつきまでの筋骨隆々とした姿に比べれば頬骨が痩せこけていた。

「やっぱり弱くなつてたねオールマイト、あんなの昔なら一瞬だったのに。じゃあねプロヒーロー、たかが普通の女の子に一泡吹かされた情けない大人たち」

残されていたワープゲートを凱旋するように成生はくぐっていく。それはまるで勝者の振る舞いだった。

「何だったんだ……あの少女は……」

オールマイトはほぼ一瞬でおきた被害に、そう呟くことしか出来なかった。

こうして、USJ襲撃は実質的に成生の一人勝ちとなって終幕した。

## U S J 襲撃後

「つてえ……」

弔が黒霧のワープゲートから這いずるように出てくる。成生の方はというと、スタスタと先んじて早く着いており、バーの中に入りオレンジジュースをコップに注ぐ余裕すらあった。

「両手と左足撃たれた……完敗だ……」

愚痴ではない。やりたいことだからやってみて、失敗したから後悔する。誰だって当然の考え方だ。

「脳無もやられた……手下どもも瞬殺だ……子供も強かった……」

そこから反省して次に生かすこと、それこそが大事なのだが……弔は今回が初めての失敗だ。すぐさま生かすというのは難しいのだろう。

「……」

オレンジジュースを飲む私は何も言わない。オールフオーワンとの約束だ。きつと弔の成長のために、「負けた」という経験をさせておきたかったのだろう。

私は「普通」だった。「普通」は社会的に真ん中であるということでもあるが、真ん中

ということとは優秀な者共に負けてもいるということでもある。「負けた」経験などいくらでもあるのだ。

「平和の象徴は健在だった……!」

……訂正したいけど、後でモニターを超えた方へ移動するのでその時に話すことにする。あの姿はどう見てもボロボロだったよ。

「話が違うぞ……先生……」

「違うよ」

モニターからオールフォーワンの声が聞こえてくる。オールフォーワンと私とでの情報共有は完璧だ。

実はオールマイトの全盛期を教えてもらっており、当時と比べればオールフォーワンもだが弱体化甚だしいのは分かっている。その上でどれくらい弱体化したのか?というのを知りたかったのが今回の襲撃の理由の一つだ。

脳無を倒すのに100発以上も使っている以上、素の力が激減している上に私が最後に視認したことから時間制限もかなり厳しい。オールフォーワンと戦えば長期戦に持ち込んで勝手に潰れる形になるだろう。

まあオールフォーワンはやる気出すだろうから短期決戦挑むだろうけど。

「ただ見通しが甘かったね」

「うむ……舐め過ぎたな。ヴィラン連合なんちゆうチープな団体名でよかったわい。と  
ころで……ワシと先生の共作脳無は？」

「回収していないのかい?」

「弔ではなく私と黒霧へ向けられた言葉。黒霧は首を横に振り、私はスマホを立ち上げ  
てマツプを開く。」

「場所は知覚してますよ。ただ……黒霧、この場所の上空にワープゲート開いて、頭だけ  
出すから」

「はい」

黒霧がワープゲートを展開し、頭だけ覗き込むように成生はワープゲートをくぐる。  
そして向こう側を除き、脳無が両手を拘束され、頭に布を被せられていたことを視認す  
る。

頭を引っこ抜くようにバーへと戻り、黒霧もワープゲートを閉じた。一分もかけてい  
ないがそれだけで弔のカバーが完了していた。

「……はい、捕まってきましたね。耳も塞がれてた、あれじゃあ流石に回収は難しそうで  
す」

ただあの脳無はドクターとオールフォードの共作だが、私の細胞は一片足りとも使  
われていない脳無だ。

ハイエンドのプロトタイプとでも言うべき脳無だ。オールマイルト並のパワーを再現するために作り成功したものだ。私が協力し始めた後なら、そんなレベルの脳無は多く出来ている。

完全に試金石投入だった。

「せっかくオールマイルト並のパワーにしたのに……」

「まあ……仕方ないか……残念」

しかしハイエンド脳無の数はまだ多くない、貴重なのだ。回収できるのであれば回収したかった。

まあ、回収出来なかったなら出来なかったでヒーロー達に餌的な情報を渡したと考えるだけだ。オールマイルト視点ならオールフォーワンがUSJ襲撃の裏にいと勘づけるくらいだろうか？

オールマイルト以外ではせいぜい気持ち悪い強い命令を聞くだけのヴィランだ、くらいだろう。大した情報を得ることはできない。

這いずる弔は恨みつらみを込めた言葉を呪うように口から吐き出す。「負けた」経験はよっぽど腹に据えかねたようだ。

「パワー……そうだ……。一人……オールマイルト並の速さを持つ少年がいたな……」

緑谷少年のことか。最後に突っ込んできたのはまさしくヒーローと呼ぶしかないタ  
イミングだった。オールマイトが後継者に選ぶのも理解できるものだ。

名前はまだ分かっていなかったが、オールフォーワンにも私が雄英受験した後の話は  
している。後継者が雄英にいと確信を得られたという意味でも今回のU S J 襲撃は  
収穫だった。

ヒーローの卵の情報や脳無の性能実験、ヒーローへとオールフォーワンの存在疑惑を  
向ける、さらには雄英が襲撃された事実。戦術的戦いには負けたが私とオールフォーワ  
ンから見た情報戦には勝利したと言える程だ。

「へえ」

感心があるような無いような、何ともいえない声がモニター越しに届く。私達は知っ  
ていたことであり予想通りで面白みも無いことだが、弔が「オールマイト並の速さ」と  
評価できたことが嬉しかったのだろうか？

「M s. ダーククライの時間稼ぎとあの邪魔が無ければオールマイトを殺せたかもしれな  
い…………ガキが…………ガキ…………」

「…………あー」



私の時間稼ぎのおかげで私はオールマイトの弱体化をこの目で見たが、弔はその前に撤退した。弔からすれば邪魔しただけにしか見えないのだ。

私達という陣営という意味では十分なのだが、弔からすれば許せない行為でもあったのだろう。少しだけ申し訳ないなあ。

「悔やんでも仕方ない！今回だつて無駄ではなかったはずだ」

切り替えていこう！、そうオールフオーワンが叫ぶように聞こえる。オールマイトというヒーローを近くで見れたという経験を、ヒーローという存在がどんな存在であるかの知見を私は得た、今回の件はそれだけ見ても無駄ではなかった。

弔もいずれ分かるようになるだろう。極論、ヴィランとはヒーローに負けてもいいのだ。やりたいことをやれていれば勝ちなのだから。

「精銳を集めよう！じっくり時間をかけて！」

オールフオーワンの言う通りだ。いくら私がいるとはいえ弔に協力はできない。ヒーローの卵たちが4人立ちふさがったのと同じように、弔もまた何人かは集めなければヒーローにまた負ける。

「我々は自由に動けない！」

私を実働してますけどね？

茶々入れるのは止めておいて、オールフオーワンがそう言うのも理解できる。

純粹で強力なヴィランには惹かれる者は多い。そしてそこに至るには純粹な悪意・殺意といった感情が必要になる。私の目的はそこには無く、代わりにはなれないのだ。

「だから君のような」シンボル」が必要なんだ。死柄木弔!!次こそ君という恐怖を世に知らしめろ!」

代わりにはなれない。だから弔……もつともつと悪意を、感情を強くしていつてね?

## ヒーローサイド ヴイラン連合分析

USJ襲撃事件から一日ほど経ち、雄英では会議が行われていた。

警察の塚内警部も会議の一員として参加しており、襲撃したヴィラン連合についての話し合いだった。

「死柄木という名前、触れたモノを粉々にする個性。個性登録を洗ってみました、該当なしです」

「ワープゲートの方、黒霧という男も同様です。無戸籍かつ偽名ですね、個性届を提出していない、所謂裏の人間」

塚内警部の調査結果にスナイプは溜息を一つ吐く。応援で駆け付け、唯一ダメージを与えたからのだ。一番最初の発言権があった。

「何も分かってねえってことだな。死柄木とかいう主犯が治ったら面倒だぞ」

スナイプの銃撃は一日二日で治らない。その間に何とかするという選択は取れないというのが調査結果だったのだ。後手に回っているのが拭えなかった。

「主犯か……。思いついてもなお普通行動に起こさない大胆な襲撃。用意は周到に行つたにもかかわらずだ」

「行動も“稚拙な暴論”、自分の所有を自慢した”。これらから予想できる死柄木の人物像は、“幼兒的万能感の抜けきらない、子ども大人”だ」

「何か問題あんのか？」

オールマイトの人物観察にブラドキングが疑問を呈する。そんなヴィランは山ほどいるからこそその発言だった。

その疑問に応えたのは塚内警部だった。

「USJで検挙した敵の数、72名。どれも小物でしたが、問題は死柄木について来ようとしたことです」

「ヒーローが飽和した現在、抑圧されてきた悪意は……そういう無邪気な邪悪に惹かれるのかもしれない」

無邪気な悪、だからこそ付いてくる者も多い。今でさえそれなのだ、これから先を予想などしたくもなかった。

「子ども大人……逆に言えば成長の可能性がある」

だがその予想をさせたのがたった一人の少女の存在だ。

「優秀な指導者が……まさかあの少女？」

オールマイトにだけ一瞬見せた、ヴィラン相手でも見たことのない深淵染みた瞳の色。思想犯というにはドス黒過ぎるそれは、長い期間プロをしているオールマイトでさ

え恐れを抱くものだった。

ならば有り得る。しかしこれに答えたのも塚内警部だった。

「……依光成生という少女だけはヴィラン連合でも例外です」

「何？」

会議室がざわつく。例外という言葉には大抵碌なことがないからだ。

そして案の定、碌でもない調査結果が塚内警部の口から出てきた。

「彼女は高校に在籍しています。それも制服にあった春川高校に」

「それならとっ捕まえれば解決じゃねーのか？」

ブラドキングの言葉に首を横にふる塚内警部。居る場所が分かり、捕まえる理由もあれば警察である彼なら当然捕まえる。

だが本来あり得ない問題がそこにあった。

「ところが……襲撃当時、彼女は高校にいました」

「……っ！」

彼女にはアリバイがあった。それも大多数の監視下にあったという、雄英の情報の方が間違ってるんじゃないのかと問われかねない程のアリバイが。

「USJ襲撃はおおよそPM2:00あたりからでしたが、当然普通の進学校である春川高校もカリキュラムがあります。そして彼女はそこで授業を受けていました」

普通の進学校ならPM4:30くらいまではどうやってもカリキュラムに囚われる。件の人物も当然囚われていた。

警察が直接当人から聞くのは躊躇われるため周りに聞き込みしたのだが、彼らもいつも通りに過ごしていたとの答えを貰っていた。

監視カメラでさえ普通に暮らす依光成生の姿を捉えていたのだ。

まるでキツネにつままれたような話だった。

「は？だがそいつはワープゲートに入っていたのは全員が見てるんだぞ？」

ブラドキングの言葉に全員が頷く。塚内警部から渡された当時の春川高校の写真から、同一人物だと全員が認識していた。

「なら二人いないと成立しないだろう」

「いや、そもそもあれは本名なの？」

各々が同一人物だと認識している以上、USJに現れた彼女と何かしらの関係があると考えるのが当然だ。

しかし警察が同じことを考えない訳が無かった。

「別人である可能性もあります。そこでUSJを探したところ、毛髪が一本見つかりました。これをDNA鑑定にかけました」

「結果は？」

「全て同一人物でした」

更に謎は深まる。会議室が一瞬静けさに包まれるも、まだ同一人物の可能性はあるとスナイプが考えを口に出した。

「完全に二人に分身しているってことか。エクトプラズムみたいな感じか？」

その言葉に塚内警部は首を横に振る。ここが解決さえできれば全て解決できるので、最も大きな問題がここにあった。

すなわち、彼女の個性が個性届で完全にバレているということだ。

「ところが個性届を確認したところ彼女の個性は「指先発光」です。これも裏付けはとれてます」

「待て、指先発光？そんなところ見てないぞ。んな普通の個性なわけ無いだろう。銃弾を反らしたりと強力な増強系にしか見えなかった」

ヒーローが目にしたのは銃撃の間に割り込む程の速さを持ち、銃撃を反らす程の技術を持ち、スナイプの銃は破壊し、13号のブラックホールを貫通して右腕を損傷させた姿だ。

どこを見ても「指先が光る」個性に出来る真似ではなかった。

「いや、スナイプの銃を破壊してる……見えないレーザー？」

「バカな、色を自在に操る上に収束させるなんてプロヒーローでも難しい。トップヒー

ローでさえできるか分からないくらいだ。個性を鍛え切ってもできるか分からないようなレベルだぞ」

「それに13号のブラックホールを貫通できてる。レーザーではないはずだ」

各々が予想を立てるも、前述した分身個性とは全く別物だ。二人いたとしても完全なる別人としか言えないが、振る舞いがどこか似ているとオールマイトは見ていた。

「問題はそこじゃない」

会議のざわつきを断ち切るように校長が声を上げた。その声に会議室が一瞬で沈黙する。

根津校長の個性は「ハイスペック」だ。頭脳労働や戦略をメインにする校長の話なのだ。傾聴しない訳にはいかない。

「二つだ。一つは彼女は雄英を受験してきたこと。この恨みなら話は早いんだけど、僕の直感は違うって言ってる。となれば偵察だ、偵察して攻撃を仕掛ける。計画的犯行と言える」

「そしてこつちの方が大問題だ。彼女が死柄木すら超えるヴィランだとしたら、何の変哲もない普通の少女が突如として強大なヴィランになっているという可能性だ」



「「!!」」

校長の言葉に全員の顔が驚愕に染まる。仮に真実だとしたら、とんでもない事態だった。

「ヴィラン連合どころじゃない。あの子一人でヒーロー社会がひっくり返りかねない爆弾だ」

「……今すぐ捕まえるべきでは？」

校長の言葉に、オールマイトが迷った末に言葉を告げる。平和の象徴オールマイトでさえ、彼女を捕まえるべきだと判断していた。

「彼女が分身や別人であれば私たちが何の罪もない少女を捕まえたことになる。冤罪だと叫べば社会からの批判は襲撃された件もある以上、糾弾なんてレベルじゃすまない。雄英閉鎖すらあり得る」

USJ襲撃という大事件を何の罪もない少女に無理やり押し付けた。そうなれば雄英の評価が地に落ちるのも一瞬だろう。だからこそ手が出せない、校長はそこまで分かっていた。

さらに、問題はそこまでじゃない。むしろこっちが最大の問題だ。

「余りにもハイリスクであり、しかももし彼女が予想通りの狡猾なヴィランであれば畏

である可能性も高い。手出ししようにも難しい」

彼女を優秀なヴィランと想定した場合、一番あり得る可能性がこれだ。ヒーローを嵌めるための罠、だとすれば手を出すには相応の準備が必要になる。

少なくとも、雄英からヴィラン被害が無くなったと社会が判断するくらいまでは彼女に対し行動できないのは間違いないかった。

「正直なところ、我々ヒーローが行える手はない。こうなると分かって打った一手だけとしたらとんでもないヴィランだ。これだけでヒーローを詰みまで持っていける」

校長はそう締めくくる。険しい顔になっている教師も多かった。明確に戦略を行えるヒーローは少ない、雄英教師でさえ全員が出来るわけではないのだ。分からないヒーロー程フラストレーションが溜まるのも仕方ないことだった。

「この話は一旦私が預かろう。会議が紛糾しても意味が無いのさ」

そこで彼女に対しての話はひとまず区切られることになる。最後に一つ注意を残して。

「ああ、A組生徒には依光成生を見かけても襲わないように言っておくように。特に一名、襲いそうなのがいるだろう？」

教師たち全員の中の浮かんできたのは、爆発の個性を持つ少年の姿だった。

仮に襲ったらどつちがヴェイランか分からないなど、全員の心が一致していた。

## 生徒サイド：爆豪 雄英体育祭前

入学前は一番だと思ってた

でも入学して、半分野郎に敵わねえ、ポニーテールの奴に納得させられ、一番じゃねえって思い知らされた。

デクの野郎にも痛い目見せられて、オールマイトを超えるっていう目標も揺らぎそうになっちまった。

だから一度認めた。

俺より明らかに強え奴らの中で「俺が一番だ！」と言つてもホラ吹きでしかねえ。それなら一度強え奴や認めた奴が、俺より上の部分があるんだって認めるしかなかった。デクに涙目見られたのは……長い付き合いだからいい。痛い目見せられたのもデクが最初だった。

だが数日後、周囲を認めるよりも重要な、目標の方の高さを思い知ることになった。USJ襲撃事件、後からそう呼ばれた事件だが、俺だけが完全敗北を身体に刻みこまれた。

雑魚共の処理はすぐ終わった。そこまでなら俺達の勝利でよかった。

ワープゲートを破壊しに行く。オールマイトも到着してたからサポートの形で参加すれば、あとは雑魚ヴィラン同様にケリがつく……はずだった。

だがオールマイトに庇われた。足手まといだと言われても仕方ないことだった。

オールマイトのヒーローとしての頂を見せられた。憧れ、超えられると思えない姿がそこにあった。

先生たちが来る直前にデクがオールマイトの救出を動いたが、俺は動けなかった。またデクに想いの強さを知らされた。

だが俺だけを完全敗北に追い込んだのは、ただの一般人にしか思えない女だった。

「バツカー！モブ女もヴィランだ！！制服なんてのも騙すためだろ！！」

モブ女と言ったら両手で顔を塞いだような動きをしていた。メンタルが雑魚なモブヴィランじゃねーかって、何でここにいるのかもスルーしてオールマイトの方へと向

かった。

きつとそれが正解であり間違いだった。オールマイトに向かったのは正解だ。が、モブ女から注意を反らしたのが間違いだ。

手だらけのヴィランより、ワープゲートのヴィランより、モブ女の方が強かったのだから。

「あと……爆発少年、私が嫌いな権化みたいなやつだから痛い目見て地獄に落ちろクズが」

それもモブ女は桁違いに強かった。先生二人に一瞬で手傷を負わせ、さらに俺のコスチュームへ俺を中心に爆発させるように何かを放った。

俺だけが爆発するなら問題は無かった。問題は、切島や轟にも爆発がとんでつたことだ。

俺達の仲間を傷つけるために道具のように扱われる。これ以上ない屈辱だった。

ヒーローなら、周囲を傷つけずに戦う。

ヒーローなら、ヴィランを倒して皆を安心させる。

ヒーローなら、仲間を傷つけるような真似は絶対にしない。

ヒーローなら当然のことに、全部泥を塗られた。しかもあの時の台詞が「俺が嫌いな権化みたいなやつだから痛い目見やがれ」。純粹に俺を狙って言葉通り、痛い目見せられた。

「ヴィランに負けた」と言っても間違いじゃなかった。

病院送りにされたのも、生徒じゃ俺とデクだけつつー話だった。デクはオールマイトの助けるために超パワー使つての自傷だ。俺だけが……俺だけが負けて病院送りにされた。

「クソがつ……」

授業中にも考えてしまう。もう放課後だつつーのに、傷はリカバリーガールのおかげで癒えてるつつーのに、屈辱は忘れられない。

爆豪がそんなことを考えて席を立ち、廊下に出ようとする就先に出ようとしていた麗日が声を上げた。

「何事だあ!？」

外に居たのは他のクラスのモブ共。ヴィランに襲われた野次馬ってか？

「意味ねえからどけモブ……共……」

モブ女、俺がそう呼んで両手で顔を塞いだ。「モブ」、俺がいつも呼んでる言い方だ。……何故？モブはモブだろう、何でそんなにシヨックを受ける？

モブ共の宣戦布告やらの話を聞き流し、うざったい人の波を押しつけて進もうとする  
と後ろから声がかかる。

「待てコラどうしてくれんだ。おめーのせいでヘイト集まりまくってんじゃねえか」

「関係ねえよ」

切島の怒りに俺の言葉で応える。こんなもん聞かなくても分かるもんだろが。

「上に上がりや関係ねえ」

そのはずだ。関係ないはずだ。……何でだ、どうしてだ？何でこんなイメージが頭から離れねえんだ？

「関係ねえ……はずだ」

俺が上に上がっても、あのモブ女が変わらず笑ってそうないメージが離れねえ。



## 最強の盾 v s 最強の矛

一日が経ち、私はオールフォードの下を訪れていた。U S J 襲撃の時の内容を知らせるのと、襲撃前に約束した側近の紹介のためだ。

いつもの研究所でオールマイトの時間制限や素の力弱体化について情報共有した後、黒霧のワープゲートをオールフォードと二人でくぐる。その先は自然豊かな山の中腹に繋がっていた。

「マキアー」

オールフォードが普段と変わらない声で周囲に呼びかける。たったそれだけでズンという音が周囲に響いた。

「主ー」

現れたのは数メートルという巨体を持った男だった。

まるで岩山のようなゴツイ肌と体格、数メートルという大きさ、そして——全裸。

「女性に紹介する姿じゃないですね？」

思わず突っ込みを入れてしまったが仕方ない。何も知らない女性に全裸の男性を紹介するなんて●●●狙いですと言ってるようなものだ。

それより非道い真似はしてるが、それはそれだ。

「それはすまない、何せ彼に渡すタイムミングが無くてね。紹介しよう。彼がギガントマキア、僕が最も信頼する側近の一人にしてボディーガードの役割を担う者だ。マキアと呼んでくれ」

「大きい……ボディーガード？ 貴方の？ 必要なんですか？」

「これでも昔は要人みたいなポジションだったんだぜ？ 居て当然だろう」

思わず「確かに」と口に出る。ボディーガードが強力なら、オールマイトの襲撃があつたとして全滅する前に逃がすのも分かる。

オールフオーワンさえ死ななければいいのだ。しぶとさなら多分そっちの方が上だろう。

「大きいのは感情が高ぶってるからだね。普段はもう少し小さいのだけれど、僕が来たから大きくなってるとるみたいだ」

「……私とは違う形ですが複数個性持ちですか。顎とか見るからに違いますし」

顎がしゃくれているようにも見えるが、おそらく個性によるバイザーだろう。巨大化や岩山のような肌、顎のバイザー、複数個性でないと説得力がない。

「耐久に巨大化、痛覚遮断にエネルギー効率、剛筋に犬、あと土竜だね。物理戦闘に特化している個性さ」

「なるほど、ボディーガードと呼ぶなら妥当な人材ですね。盾と呼んでもいい」

嗅覚特化で護衛対象の下まで直行。地面の下を潜って高速で移動し、護衛するために痛覚も無い。物理障壁という意味なら最高峰と呼べるだろう。

洗脳や幻惑系に弱いかもしれないが、そこは忠誠心がカバーする形だ。耐久性をぶち抜く攻撃が無ければただ蹂躪されるだけになる戦力だった。

「私が指先発光、思考加速、人形操作、空中地面化、転送、瞬発力と一人完結型に対し、専門特化型ですか……今の私だと多分勝てませんね」

「勝てないと言っても遜色ないレベルだろう。あるとすれば……体力かい？」

オールフオーワンの言葉に首を横に振る。指先発光による体力成長は今でさえ伸びているのだ。個性が無くとも人は成長できる、成生はその限界に迫りつつあった。

「いいえ、私の体力は個性無しですが人類最高峰に到達しつつあります。問題は私の武器が通じるかどうかというところですよ」

「確かに。君の最大威力はレーザー常時出力による広範囲斬撃だろう。それが効かなければマキアが追い詰めてM s. ダーククライの負けだ。だがマキアを一撃で切るなんて真似までできると思うかい？」

再び首を横に振る。理想はマキアでさえも一刀両断出来る程のレーザーだが、マキアの耐久を抜くほど出力があるかと言われると領けない。それもちゃんとした理由が

あった。

「……私のレーザーはブラックホールも貫通しますが、減衰してませんが、減衰してらんですよ」

私のレーザーの特徴は三つでできている。光っぽい特徴、エネルギーっぽい特徴、よく分からないダークマター的な特徴の三つだ。

疑似ブラックホールを打ち抜き、さらに常時出力でぶった切る時の個性伸ばしをしていたらいつのまにかダークマターの性質は付いていた。

13号のブラックホールをぶち抜いたのはこのダークマター的な特徴がブラックホールで分解できなかったからだ。それでも二つの特徴は分解・減衰し、右腕を打ち抜く程度まで落ち込んでいた。

本来ならU S Jの外まで貫通する程の威力が、だ。

「熱が効かず、エネルギー……衝撃波のような要素も効かず、ダークマター的な性質の斬撃も効かないともなれば届くか怪しいですね。一つだけでも届けば減衰程度で済みますが」

マキアには全部効かないのだ。出力を全開にし、収束レベルを高めれば届く可能性はあるが、一朝一夕で出来るものではない。

「そこで、だ」

成生の考えに、指をパチンと鳴らしオールフォーワンが注意を引く。

「君にはマキアと戦い、マキアと対等レベルまで強くなってもらいたい」

事前情報では勝てない相手。それに勝つというのは、今の自分の限界を超える、殻を破る必要がある。

そしてそれは今の成生が欲しい経験だった。M.S. ダーククライは黒幕タイプフィクサーのヴィランだが、限界すら超えずに倒れるような真似をするつもりは無い。

雄英と同じだ、Plus Ultra更に向こうへ。むしろずっとし続けている成生だが、明確に誰かを超えろという経験は無かった。

「構いませんが、今からですか？」

「甲の全快には二週間ほどかかる。ちょうど雄英体育祭も被るし見たいだろうが、録画しておくよ。後で見るといい」

オールフオーワンの言葉に安堵する。雄英体育祭でヒーロー科を見ないと、あの爆発少年の名前が分からない。いつの日か必ず殺すと決めている以上、名前を知らなければ次のステップに進めないのだ。

あと一応確認だ。

「一撃KOされたらどうするつもりですか？」

「面白い冗談だね」

およ？ 冗談を言ったつもりは無いのだが。流石に私でも巨体から感知できない一撃

を喰らえば重傷は負う。動けないまでも回復系の個性が無いのだからじわじわと不利になっていくだろう。

「弔と黒霧を相手取り、片手間扱いで倒せるくらいに体術を向上させ、体力も二日徹夜しようが問題ない。さらに人形として操れば傷も関係なしに動けるし、緊急回避で転送もできる」

「そんな君が一撃で終わるなんて愚か者が考えることだよ」

要するに全部避けろと。できない個性じゃないから頑張れと、そういうことらしい。

「……転送も慣れてきましたし、対象人物から距離指定での転送もできるようになってはいます。どれだけ巨大化しようが背後に回れるし離れることもできる」

それに、私の速度は転送や光速反射だけではない。

「あなたが瞬発力を二つも寄越したせいで随分と最適化・習熟が遅れましたけどね？」

オールフオーワンが悪戯感覚で付与した個性だ。複製だったからか二つを一つに纏めた最適化が可能だった。そして超瞬発力とでも呼ぶべき個性に昇華させていた。

これのせいで転送の習熟は遅れたのだ。本来ならとつくに終わっているはずだった。……もつとも、USJで銃撃の間に挟まるなんて荒業に役立ったからあんまり悪くは言えない。

「すまないと思っているさ。ただ気になってね、でも結果は良しだったろう?。……あ

と一か月もすれば次の個性入れてもいいんじゃないか？ 超再生あげようか？」  
「ください」

食い気味に反応してしまっただが、回復系の個性は急務だから仕方ない。被弾をしないギリギリのセンスを磨くのも重要だが、被弾した時の対応が出来ないのは問題だ。

「では対抗も十分できそうなのが分かりましたし……：：：オールフオーワン、命令とスタート合図をお願いします」

「マキア、今から言うことをよく聞くんだ」

「主」

オールフオーワンがマキアへと語り掛ける。ワンコに説明しているみたいだ。

「僕の横にいる女性はMs. ダークライと言う。僕と対等なパートナーと呼べる人材だ」

「主と対等なパートナー」

「ああ、そこでだ。君に試してもらいたい」

「期間は二週間……：：：14日だ。それまでにマキアが翻弄されるようになっていたら認めてあげて欲しい」

「主の言葉のままに」

説明が終わったのかこちらへと向き直るオールフオーワン。時間を決めてなかった

のに勝手に決めたのは苛立つが、私自身も限界に挑みたいところだったので二週間というのは分かりやすい目安だ。

問い詰めるのはやめておこう。上手くいけば超再生が貰えるって話だし。

……どうせだし、少し煽るか。

「僕が始めといつたら始めていいよ。M s. ダーククライ、紹介くらいはしたらどうだい？」

「そうですね。初めましてギガントマキア、オールフオーワンの最も信頼する僕が一人。私はM s. ダーククライ、私もあなたを試しに来ました」

一拍置き、マキアの瞳へと深淵の色をした目で覗き込むように見つめる。

「ボディガードとして使えるのかどうかを」

「M s. ダーククライ……！」

煽られ燃えるマキアへと半身に立ち、個性を発動させていく。

「さて、準備はいいかい？」

オールフオーワンの言葉にコクリと頷き、黒霧がワープゲートを展開した。オールフオーワンと黒霧は身体を半分ほどくぐり、一言だけ置いて戻っていく。

「始め」

最強の盾と最強の矛が、その力をぶつけた。



二週間の戦いは壮絶を極めた。

マキアが巨大化し、拳を振るい衝撃波を放つ。それだけで地形が変わるほどの戦闘痕が發生する程であり、直撃したらいくらM s. ダークライと言えど動けなくなるのは必ずだった。

対してM s. ダークライは空を歩き、距離すらも収束させ一点に収束させきつたレーザーを放ちマキアへ傷跡を付ける。マキアが避ければそのまま後ろの山が真つ二つに斬られるほどの収束であり、一日目では距離の収束が足りていなかったため水ぶくれ程度の火傷しか与えられなかった。

だがマキアの攻撃の全てをM s. ダークライは避け切っていた。全方位への衝撃波だけは避け切れていなかったが、自らも目の前に発光させ熱を瞬間発生、風を引き起こしてダメージを抑えていた。

5日ほど経った頃、M s. ダークライが戦い方を変更した。レーザーの距離を収束するの成功したが、それでもマキアには火傷程度しか傷つけられなかったのだ。

故に接近戦、レーザーを指先から50cm程度までにし、常時出力することで剣のような扱い方を行っていた。この時はレーザーソードと適当に付けた技だったが、マキア

へと明確な傷跡を付けることに成功していた。一閃だけでは致命傷とまではいかなかったが、百閃もすれば致命傷へ届くほどの傷跡だ。

マキアも警戒したが、レーザーソードは最適化がまだまだできていない技だった。消耗が激しく、体力が無尽蔵とすら言えたM s. ダーククライでさえもふらついた程だった。

10日たった頃、マキアは巨大化せずに戦うようになっていた。M s. ダーククライの攻撃は巨体ほど届きやすいからだったが、体術という意味ではマキアも実力者だ。速度はそれほどでもないが、弔や黒霧と比較にならないレベルであり、M s. ダーククライも届いていなかった。

体術で圧倒さえすれば問題ない。だがマキアは持続力や頑強さはあっても、瞬発力では圧倒的に負けていた。技術的地力では超えているのに、身体能力で負けている。当初とは真逆の事態が起きていた。

最終日、そこにはマキアの拳を笑いながら避け、マキアを翻弄するようなM s. ダーククライの姿があった。

どうせ最終日だと、M s. ダーククライが遊んでいたのだ。全力でぶつけ合えば身体の

頑強さでマキアの勝ちなのだが、M s. ダークライは人形のように身体を動かせる。光速で反射し転送すればマキアだろうと届くことは無い。

最終日の日が落ちる頃、マキアは動きを止めた。時間が来たこと、そして翻弄された事実を認めたらからだった。

「主のパートナーと、認める」

「ありがとう、マキア。私もあなたを認めるよ。優秀なボディーガードだ」

二人ともがガクリと膝をつく。流石に長期戦が過ぎた。二日に一回くらいは少し休憩できていたが、そこまでだ。疲労が限界を超えていた。

M s. ダークライは極限の疲労が原因であり、マキアはエネルギー効率の個性があつても血を流し過ぎていた。痛覚が無くとも疲労はかなりのレベルであり、しかも血が無くなれば行動できなくなる。

直後、黒い霧が周囲に展開された。オールフオーワンと黒霧が姿を現し、M s. ダークライを労う。

「お疲れ様、M s. ダークライ。これからはいつでもマキアと遊ぶといい」

「オールフオー……ワン……」

M s. ダークライの意識は暗転した。

## ヒーロー殺しとの接触

成生がマキアの戦闘でバーの裏でぐっすりと寝ている頃、バーの表ではヒーロー殺し、ステインの姿があった。

オールフオーワンが指示し、黒霧が連れてきたのだ。破壊衝動だけではダメだと弔に教えるための人物選だった。

「なるほどなあ……お前たちが雄英襲撃犯」

「その一団に、俺も加われと」

バーのカウンターチェアに座りながら弔が誘いの言葉を口にする。

オールフオーワンが仲間を作ると言ったから言葉通り行動しているのだ。ステインはオールマイト以降の単独での殺人では最多なのだ。

ヴィランとして超一流かつ、今のヴィランにおける頂点の一人とも言えた。

「ああ頼むよ。悪党の大先輩」

「……目的は何だ」

「だがそれほどの存在ならば何の理由も無く所属するような真似はしない。しかも目の前の男は少年なのだ。」

それもステインが最も嫌いな、「信念が無い」とすら見えるタイプの少年だ。

「とりあえずオールマイトはぶつ殺したい。気に入らないものは全部壊したいな」

「こういう糞餓鬼とかもさ……全部」

「弔が雄英体育祭の写真を数枚取り出し見せる。ステインの瞳には緑谷の写真が映っていた。

「興味を持った俺が浅はかだった……お前は……ハア……俺が最も嫌悪する人種だ」

「はあ？」

子どもの戯言。ステインにはそうとしか見えなかった。

両脇に差しているナイフをスラツと抜き始める。明確に弔と戦う意志を示していた。

「子供の癩癩に付き合えと？ハ……ハア……信念無き殺意に何の意義がある」

黒霧がステインの行動を理解し、即座にモニターへと問いかける。連れてきた本人だ

からこそ、弔を傷つけさせるわけにはいかないのだ。

「先生……止めなくていいのですか？」

だが返ってきた言葉は黒霧が予想していたモノとは少しだけ違うモノだった。

「これでいい！」

「答えを教えるだけじゃ意味が無い。至らぬ点を自身に考えさせる！成長を促す！」

モニターから来る言葉は確かに「先生」として正しいものだった。教育者としての方

針として基本となるべき考え方だった。

そんな教育をほぼ無視して一気に成長しきった、バグ染みた前例であるM.S. ダークライとかいうのがあるせいで正しく見えないのだが、本来あるべき姿はこちらだ。

「教育」とはそういうものだ」



「何を成し遂げるにも、信念……想いが要る。ない者、弱い者が淘汰される、当然だ」

ステインが主張し続ける当然の思想。その大元にある考えを口に出す。仮に成生が聞いていれば納得していた言葉だった。

「だから死ぬ<sup>こうなる</sup>」

「ハツハハハ……！ 行ってええ、強過ぎだろ。黒霧！ こいつ帰せ、早くしろー！」

「身体が動かない……！ おそらくヒーロー殺しの個性……！」

甲は倒され、ステインの左手のナイフで肩を刺され右手のナイフを首の横に突きつけられていた。黒霧はバーの中から動くことすらできていなかった。

これがステインの実力。対人では無類の強さを発揮するヒーロー殺しの力だ。

「英雄<sup>ヒーロー</sup>」が本来の意味を失い、偽物が蔓延るこの社会も、徒に“力”を振りまく犯罪者も、粛清対象だ……ハア……」

ナイフを甲の顔についている掌へと少しずつ近付ける。

「ちよつと待て待て……この掌は……ダメだ」

弔の右手がナイフを掴む。右手から血が流れようと、それだけはさせないと動かしていた。

「殺すぞ」

視線から向けられた殺意。ステインほどのヴィランでさえ、何かを感じ取るものがあるものだった。

「口数が多いなあ……信念？んな仰々しいもんじゃないね……強いて言えばそう……、オールマイトだな……」

ナイフが弔により「崩壊」されていく。少しずつ崩れていくナイフの先、掌から少しだけ見える弔の表情は――

「あんなゴミが祭り上げられているこの社会を、滅茶苦茶にブツ潰したいなあ、とは思つてるよ」

――笑っていた。それも酷く無邪気に、邪悪に。

崩壊がナイフを通じて自らに飛んでくると、即座にステインは距離をとった。同時に弔は目の前にいたステインに手を伸ばすも、距離をとられ回避される。

「せっかく前の傷が癒えてきたとこだったのにさ……こちとら回復キャラがないんだよ、責任取ってくれんのかあ？」

ユラリと立ち上がり苛立ちを口にする弔。まだまだ戦えると言っているようだった。

「それがお前か……」

「はあ？」

「おまえと俺の目的は対極にあるようだ……だが、「今を壊す」。この一点に於いて俺達は共通してる……」

目的は違うが共通している点がある。それは弔にも似たような覚えがあつた。MS、ダーククライという存在だ。

ただの目立ちたがりかと思つたらぶち壊したい世の中があるのだとのたまう。オールマイトを殺したいという考えに同意するが、それは目立ちたいからと言う。

共通してるところはあれど目的が違う。まさに同じことだ。

「……ざけんな、返れ、死ぬ。最も嫌悪する人種なんだろう？」

「真意を試した。死線を前にして人は本質を現す。異質だが……」想い……歪な信念の芽がお前には宿っている」

ステインがナイフをしまい、理解したというように両手を広げる。弔の思想とステインの思想は全く別物だ。



が、ステインとは全く別のところで働くものである以上、ステインからすれば勝手に行動してくれるだけの人物でしかない。

「お前がどう芽吹いていくのか……始末するのはそれを見届けてからでも、遅くは無いかな」

「始末すんのかよ……こんなイカれた奴がパーティーメンバーなんて嫌だね俺」

弔が嫌だといったその時、バーの裏から一人の少女が姿を現した。

「ふああ……あれ、ステインじゃん。なんで有名人がここに？」

「Ms. ダークライ、起きるのが遅え」

成生はマキアの戦いの後、疲労だけだと判断されバーの裏にあるベッドで二日ほど寝ていたのだ。何かあれば起きたが、起こしにくる者もいなかったので寝たままだった。

「お前は？」

「弔、まだ私は依光成生。デビュータントはまだ先なんだから」

ステインの疑問を無視し弔へ注意喚起する。ヴィラン名を勝手にバラされるのはまだ困るのだ。

「……いつと同じ信念か？……ハア……」

殺意を感じた成生は一瞬でステインの目の前に寄り、両目につぶしするように右手を向けて動きを止めた。成生が動きを止めたのを察し、ステインも向けかけたナイフの

動きを止める。

歴戦の勘が、動くなと叫んだのだった。同時にステインの髪が数本、はらりと地面に落ちていた。

「止めておきなさい。死にますよ」

左手の人差し指を天井へ向け、天井がちようど焼けるようにレーザーを放つ。それだけでステインも察していた。

「指からレーザー……なるほど、詰みだ」

「信念と言う話なら私にはきちんとあるから安心なさい」

成生の場合自身が目標と呼んでいるものだが、周りから見れば信念と呼べるに値するものだと分かっていた。

なぜならそれだけで巨悪とも対峙できるほどの想いなのだから。

「ほう？」

「オールマイトもヴィランも超え、誰の目にも留まる存在になる。それこそが私の目的にして全てです」

自らの全てとすら言い切る成生に、ステインは口角を上げていた。

ステインの想いは十年以上持ち続けてきたヒーローとしてあるべき姿に起因する、「英雄回帰」と呼ぶべきものだ。

成生の想いは悪い言い方をすれば目立ちたがりだが、ヒーローもヴィランも超えてともなれば「頂点」とすら言える。ヴィラン側にいるということは方法も問わないということだ。

「……なるほど、「今を壊す」共通点は同じ、だから子供ともやっつけていけているのか。なら……ハア……俺とも?」

「私は弔の協力者ではありませんが同志ではありません。」

成生の言葉に頷くステイン。同志ではない、というところに惹かれたのだろう。同じ立場なら問題ないと認識していた。

「……いいだろう。協力者という形なら俺も参加しよう」

「死柄木弔、彼が加われば大きな戦力となる。M.S. ダーククライ、ありがとうございます。用件は済んだ! さあ保須へ戻せ。あそこにはまだ成すべきことが残っている」



ステインがワープゲートをくぐっていく。成生はその姿を見て決意を一つした。

「……離れるのが、正解かな」

「あ?」

正直に言って今の私は弔の近くに居るのは過剰戦力が過ぎる。マキアと同格になっ

たともなれば戦力として、いてはいけないレベルだ。

弔の成長の邪魔になる。

「肥料はあげすぎちゃダメ、水も多過ぎると根腐れする。私という養分は、余りにも大き過ぎる」

「何を言ってる」

ステインが芽と言って気づけた。大樹が横に居ては、太陽も雨も遮って殺してしまいかねない。

あるとするなら、風が吹いて葉っぱに間が出来た時……要するに気まぐれの時だ。

「弔、黒霧。これから先、私は気分が乗った時しか弔には協力しません」

「はあ!? ふざけんな」

「それは先生の指示ですか?」

首を横に振る。オールフオーワンは私に指示はほとんど出さない。最低限だけだ。でも、間違えたことは一度もない。

「違うよ。でもきつと同じことを言うんじゃないかな」

「その通りだよ。流石M s. ダーククライだ」

闇を導く光だと言っておきながら、導くのを間違えたなんてやりたくない。だから、ここで離れなきゃいけない。

なんだかんだ一年以上の付き合いがある。少しだけ寂しいけれど、同じヴィランだ。無いとは思うけど、気分が乗れば会いにくるだろう。

「M s. ダークライにはこちらの協力をしてほしい。弔への協力は構わないが、ドクターが呼びたがってる」

「じゃあそつちに行きますね。弔、精鋭たる仲間を増やして、成長していきなよ?」

バーの裏へ回り、転送の個性で自らを転送させる。転送先は研究所へ。

ドクターが呼んだということは私の計画も進み始めた。弔には悪いけど、私は私がやりたいことをやるだけ。ヴィランなんだ、自由にやろう!

## 胎児脳無計画始動と正しい個性の使い方 上

「これが私の赤ちゃんですか」

「腹を痛めてもない子供じゃ、愛情なぞ湧かんじやろ」

ヒーロー殺しと会った後、私は弔達と別れ、単身ドクターの下へと訪れていた。口調を丁寧な、M.S. ダークライのロールプレイ状態で。

黒霧もいないのにどうやって?というところ、転送の個性は最適化が十分な段階まで到達したのだ、本州くらいの範囲なら人物指定で移動を可能としていた。

そして今日の前には胎児が培養カプセルの中で眠っていた。予定通り、私の卵子を利用した赤子だ。

「当然ですね。で、彼らはどれくらいで培養終わるんですか?」

「10歳児程度に成長させるとして、この後どれだけ早く成長させても半年。長ければ一年以上では優にかかる。完成した後の寿命も十年あればいい方といったところじゃない」

10歳児がいつぱいいるとなると見た目保母さんだなあ。

なんて呑気なことを考えるよりも先に思考を回すべきことがあるでしょ。寿命が十

年もあれば私の目標は達成できるはずだ。  
最悪、もう一度作ればいい。

「父親は誰を？」

「先生、ギガントマキア、オールマイト、エンデヴァーの四人が先行しておる。髪の毛一本あればいいのじゃ、ヒーローの分は適当なチンピラに金渡せばすぐじやつた」

ヴィランとヒーローのトップか。上から順に、つて感じかな。

脳無計画の人選は成生だけで決めたわけではなかった。一年で12人として、オールフォーワンとドクターで8人、成生が4人という形で分けていたのだ。

先んじていたのはオールフォーワン達が決めた方だ。成生はまだ決めあぐねていた。何せ自分自身の個性をどうするか、方向性だけが決まっており細かいところは決め切れていないのだ。

「彼ら以外はまだ卵子状態じゃ。優秀な個性を持っている者を選定したいのじゃが……我々に優位な個性も欲しい」

「そうですね……近接戦闘よりも遠隔攻撃の方がいいと思いますよ。オールマイト並のパワーと超再生がベースにあるのなら、必要なのは中遠距離攻撃。もしくは連携用、特殊戦闘用の個性」

脳無の前提がオールマイト並のパワーとスピードなのだ。なれば過剰な接近性能は

いらぬ。巨大化が一人いれば十分だろう。

成生の意見にドクターも頷く。プランニング時には技術的な話をベースにしていたため日程が優先されたが、どういった戦力が欲しいといったことは議論まで出来なかったのだ。

「確かにの。近距離はむしろいらんくらいじゃ」

「となると……連携用にラグドール、中遠距離にホークス、特殊戦闘という意味ならステインなんか悪く無い。丁度ステインなら取ってきました」

実はステインに近づこうとした瞬間、透明色レーザーで髪先を打ち抜いていた。ステインの動きが遅かったのは多分、これが理解できなかったからだろう。後はステインがさっさとワープゲートをくぐったから見つからず、拾っておいただ。

ステインの個性は刃物戦闘なら有用だ。私のレーザー支援があれば即ケリがつくれベルになる。

「手が早いな。……ラグドール？サーチの個性なぞ……標的か」

ラグドールのサーチは私が長距離射程レーザーを放つためだ。今の私はマキアとの戦闘で射程が伸び、一点集中レーザーなら10kmを超える射程がある。サーチがあれば十分過ぎる。

今の段階で常時レーザーだとマキアに通じるのが80cm、そうじゃないなら2〜3



km程だ。こちらでも長距離射程を使える以上、やはり欲しい。

というかオールフオーワンが接近戦好き過ぎるのだ。オールマイトを意識し過ぎても言う、オールマイト並のパワー前提なら一人いれば十分でしょ。

「巨大化したオールマイト……マキアがいるなら巨大化で殲滅も問題ない」

「ホホ！確かにの。じゃが難しいのではないか？知性を持たせると言っても子供レベルじゃ。それ以上の知性は反逆の可能性がある以上不可能じゃ」

うぐつと思わず息が詰まる。私が想定している使い方は多少の知性がベースにあるからだ。

サーチがあろうと伝わる術が無ければ伝わらない。レーザー支援も反射的に悪く動く可能性もある。そういう意味では夢物語に近い。

はあと溜息を一つ吐く。自らが持ちたい個性としてサーチは有用なのだが、指先発光で似たようなことを出来てしまっているのだ。ステインの個性も、無力化と言う意味では有用だが殺す戦闘なら無用の長物だ。

結局は遠距離攻撃追加した接近戦メインの脳筋仕様が無難そうだ。成生の思考はそこでひとまずの結論を出した。

戦力的な話はここまで。次の話に移るとしよう。

「確かに戦略的に胎児ベース脳無を動かすのは難しい……やっぱり指示系列は必要か。

ドクター、研究所ってここだけですか？」

「いくつかある。ヒーローが襲撃したら困るからの」

「この脳無タイプが確立したら専用を一つ増やしません？」

次の提案はこれだ。胎児ベース脳無の専用の研究所が欲しいというものである。

私が立てた計画だから私の管轄が欲しいっていうこともあるが、きつかけはそこ以外にもある。問題も多いのでそこをどうするかが課題だ。

「何故じゃ？移動が増えるとジョンちゃんの負担が増えることになるからやりたくないのじゃが」

一番大きい問題はこれだろう。ドクターが動く負担が増える。この解決さえできればいいのだが、こればかりは難しい。

だから別の角度でメリットを示す。交渉には持つてるカードと切り方が重要なのだ。

「そうですが、脳無専用と分けた方がいいでしょう。それにここはドクターの地盤にいるでしょうけど、絶対不可侵領域って訳ではない」

「そもそも不可侵領域は作れんじやろ」

「作れますよ？」

何でもない風にドクターへと告げると、首をグルンと回してこちらを凝視してきた。どうやらドクターも気にはしていたらしい。

バレないという意味で、ここはかなりの高レベルの場所だ。ドクターの素性が分かなければ入口さえ見つけることができないだろう。

逆説的に、「病院が怪しい」と探りをかけられたら見つかる可能性は万が一あり得るのだ。

だからこそその絶対安全領域だ。デメリットも多いが、それ以上に「襲われない」というのはメリットが大き過ぎる。

「黒霧のワープゲート、私とジョンちゃんの転送。それだけしか出入口が無ければいい。電力も私が居れば熱源を発生させられる」

出入口は個性のみ。最強の出入口だ。黒霧は脳無みたいなもんだから最悪のケースであっても、機能停止すればいい。そうなれば侵入できるのは私とオールフォーワン、そしてジョンちゃんの飼い主であるドクターだけだ。

「……場所は？」

どうやら乗り気になつたらしい、現実的であると判断したのだろう。ヴィランの研究所とは決して見つかつてはいけないのだ。

見つければ、ほぼ「敗北」に近い結果となるのだから。

「マキアに適当に掘らせればいい。地下深くならバレることは無いでしょう？」

地下深くを探查できるヒーローはかなり探さないといいない。ローカル極まりない個

性な上、ヒーローとして活動できるのか怪しい。

むしろサーチとかの方が危ない。目で見るとか条件あるだろうけど、一度見つかったら地下深くにいてもバレかねない。……まあそのケースはどこにいても同じだけど。

ただサーチはオールフオーワンが欲しがってたから……うん、ラグドールが拉致られたら私もここに自由に来れるかな。

「少なくともここよりはバレない……最初は個性因子保管庫に使うくらいでいい。警備つて意味であればマキアを近くに置けばいい。ヒーローが来たなら呼んでつて伝えればそれくらいなら聞いてくれますよ」

「先生のボディガードを警備員扱いするか、悪い手ではない。先生の声も無いのならマキアを呼ぶときは黒霧が探すことになるじやろうし、近くの地下深くに何かあるなぞ考えんじやろ」

マキアの真下に作る予定なんぞない。あくまで近くだ。真下だと隠してるとバレバレだしね。

あとこつちが本当は欲しかったことだ。

「それに……私の訓練場所も欲しい」

「そつちが本音か。じゃが気持ちは分かるぞ、先生もワシも専用の研究所を持つておるからの。お主がしたくなるのもよく分かる」

うんうんと頷くドクター。……やつぱり、フィクサー黒幕タイプのヴィランなら研究所みたいなところで悠々自適にいるものでしょ？

ヴィラン的には惹かれるものがあるし、私も欲しいなって思ってしまった……だから作ろうと、実行に移すのです。

「それに胎児脳無計画も立てたともなれば持ちたいじやろう」

研究所なら何か「研究」する必要がある。胎児脳無計画は丁度いい内容だった。

「ではまずは必要なものを集めねばな。マキアに空間を作るよう言うのと、資材集めはそちらで行うがいい」

資材集めは電気だとか設備だとかの前準備だ。ここから転送して持ってけばいいが、持ち込み先に環境が無ければならない。

ただ問題が一つ。私だけの手作業となると時間がいくらあっても足りない。だからこそ、丁度いい。

「それ」

「ん？」

私に足りない個性は増強系だけじゃない。大規模な行動を起こすタイミングがあれば個性伸ばし扱いで丁度いいと思っていたのだ。

足りない個性、質量攻撃の個性を手に入れて伸ばすのだ。

「資材集めで、土系操作の個性……欲しいなあつて。空は飛べますが、私の個性では大質量攻撃って意味であと一步足りない」

指先発光からの常時レーザーは破壊力という意味では最強だ。マキアに通じるレーザーが他の耐久系の個性に通じない訳が無い。

……なのだが、攻撃がレーザーだけだと地下に落とされたらかなり戦略が狭まる。指先発光は地上、空中では無類の強さだが、万が一のためにもサブウェポンが欲しかった。誰が持っているのかの事前調査もしておいた。こちらもあとは実行のみだ。

「ピクシーボブというヒーローが持ってますよ」

「先生の協力は無理じゃぞ？」

コクリと頷く。オールフォーワンがいなければ個性を奪い、与えられることはできない。新研究所建築よりも個性伸ばしを優先するのが賢い選択とも言える。

けれど私に賢者は似合わない。愚者であり、愚かに砕け散る可能性すら選んで進んできたから私なのだ。

「ええ。それで一つ、思いついたんです。胎児脳無計画は細胞一つから子供作るなら」  
「……まさかお主」

ドクターの表情が怪訝な顔つきへと変わる。M s. ダークライの発想に気づいたからこそ、そして発想を行えばどうなるか予想がつくからこそ、悩ましい顔になっていた。

何せそれは、ドクターが研究している最先端でありオールフォーワンに捧げる予定のものだからだ。

「私が喰つたらどうなるのかな、と」

すなわち、個性を取り込み自らの身体に適応させる改造。マスターピースと呼ばれる無限の力を持つ人間。あらゆる個性を自由に操れるようになる一端に、成生は自らの発想だけで到達しつつあった。

「何より、私の本来の個性は余りにもシビア過ぎる特性を持っています。最適化の個性だけじゃ成長できないって……これだけなら無個性と言われた個性。でも私、まだやってないことが一つだけあります」

「死ぬつもりか？」

研究の第一人者であり、マスターピースを最も詳しく知るドクターだからこそ忠告していた。何せ予定では数か月、死ぬような地獄の苦しみを続けてようやく到達するであろうというものだったのだ。

それを個性一つというお試しレベルだが——数日もかけずにやると言っているのだ。ドクターにさえええ狂気の沙汰と思えなかつた。

M s. ダークライは首を横に振る。彼女にそんなつもりは毛頭ない。

「私は誰の目にも留まる者にならないと死ねないよ。私のメインの個性、「最適化する個

性」の最適化。これがもし出来るのなら……独り立ちも夢じゃない」

だがM・S・ダークライは狂気を超えなければ到達できない領域を欲する。その先に目標に届く力があるのだから。



# 胎児脳無計画始動と正しい個性の使い方 下

数日後の土曜日AM7:00、再び私は研究所を訪れていた。目的は当然、「最適化」個性の最適化を行うためだ。

今日と明日は遠隔で家の人形操作している思考領域ですらこちらだ。人形は部屋の外に失恋中につき進入禁止と張り紙し、鍵もしておいたから親も侵入しないはずだ。

……正直なところかなり怖いものがある。失敗すれば死すらあり得るのだ、目標に届かない死など私からすれば屈辱にも等しい。

全身全霊を以て事に当たると、半日ほど葛藤の末に決意をしてきた。絶対に適応してやる。

「ここに横たわるように。……これがピクシーボブの髪じゃ」

ドクターの指示で手術台の上に身体を乗せる。まるで今から手術を行うようだった。

とはいえ改造という意味では間違っていない。外部からの改造なのか、内部からの改造なのかの違いではない。

「ありがとうございます。……これ、本当に必要なんですか？」

手術台に乗せられたらすぐさま点滴をぶっ刺された。輸血用コードもあり、今日のた

めに準備してくれていた。

ドクター曰く、無かつたら失血死する可能性が高いとのこと。血反吐吐くことになるからしておいて損は無いらしい。

「死んだらそれまでじゃ。それにワシは一応第一人者じゃからの、どういう経緯を経るのか知っておきたい」

「輸血と点滴……あるとないとじゃ心の持ちようが変わるか。助かります」

身体を固定させ、手術台から身体を動かせないようにする。

……さて、一世一代の大勝負だ。上手くいけば、これから先の歩みは独りになろうと進んでいける。

「それじゃ、いただきまーす」

敢えて軽い雰囲気を出して右手に受け取っていた髪を口にする。

マキアの戦闘を通し技の最適化すらできるようになり、最適化という個性を自覚できる今の私ならば、髪の中に宿る個性すら認識できる。認識できれば既に自分の中にあるのだとし、取り込める。

「身体の内部に入った異物を……個性と認識し取り込み最適化させる。そしてそれを自らの所持として認識……がふっ!？」

勢いよく血が口から噴き出た。思わず右手で口を抑えるも、身体の反応はまだまだ続

いている。

身体が熱い。経験は無いが、まるで灼熱に焼かれるような感覚だ。眩暈もし始めた、幻覚が見えないのは幸いか。

「……やはり無理か？」

「がっ!!……いや、まだまだ大丈夫……あぐっ!!」

身体に激痛が走る。マキアの衝撃波を受けたときのような、打撲的な感覚だけでは無い。脳天に一気に登るような感覚や、頭をシエイクされたような感覚すら流れて来る。

「まるでワシの想定しておるマスターピースへ変化させる途中の経過みたいじゃな」

「間違つてな……あっ!……ぐっ!!」

軽口も叩けないくらいに痛みが走る。自らに別の物を取り込むのだ、拒否反応は分かっていた。

だからこそ決めてきたのだ。絶対に私の中に入れてやると、適応させて私そのものにしてやると。

「ぐぐ……ぐめん……なさい。一日くらい……かかるかも」

痛みをねじ伏せろ。目標を、オリジン原点を思い返せ。例え死んでも目標に到達するのだ、誰の目にも留まつてやるのだ。

脳が沸騰するような感覚も、爪が千切られるような感覚も、腕が切られるような感覚

も、腹の中が抉られるような感覚も、息を続けるなど認識しそうになる幻惑も、全ての目標の障害物だ。

「そうか。ならば丸一日経ったらまた来よう」

成生の姿を見てドクターは部屋を出ていく。後に残ったのは口から血を吐き目を見開く成生の姿だけだった。

「がっ！ ああああ!!」

絶対に、絶対に私は思い描くヴィラン、M.S. ダークライになるのだ。誰の目にも留まる、闇を導く光となるのだ。

これが試練だというなら……超えるだけだ。目の前の死など私が超える試練には生温い。そんなものを超えた先に、本当の私になれるところがある。

激痛や幻惑と言った傷・症状は、真夜中まで続いた。



丸一日が経過した。手術台の上には、息を整えて眠っている成生の姿があった。

手術台の周囲には乾いた血が散乱し、まるで死体をぐちゃぐちゃにかき回した後のような光景がそこにあつた。

「気分はどうじゃ？」

ドクターの声に成生はパチリと目を開く。むくりと身体を起き上がり、手をグーパーと開いて身体の感覚を確かめていた。

「悪く無い……いや、自然体っていうのかな？。これは最適化の最適化じゃない、きつとこれは正しい運用なんだ、本当はこうして新しい個性を自らに取り込まないといけない」

成生は生まれて初めて、メインとなる個性を能動的に使うことに成功したのだ。本来ならプロヒーローになろうと成功しない個性の発動に、感動や達成感が胸に押し寄せる。

長い道のりだった。まだドクターの手助けがあるとはいえ、副次効果ではなく自らの個性を使えたのだ。指先発光や思考加速も自らの個性だが、また違う感覚がそこにはあつた。

だからといってそれらの個性はなくてはならないものだった。だからこそその達成感だ。

「指先発光や思考加速が無かつたらここまで来れなかつた」

「個性伸ばししか」

ドクターの言葉にコクリと頷く。「普通」の個性だから個性伸ばしがどこまでも伸ばせた。発展性もそれなりにあったから最適化と組み合わせられ、最適化の個性が伸びる要因になった。

私の人生の足跡とすら言えるものだ。本来ならこれでようやく個性を普通に扱う人と同じ扱いだなんて笑えてくる。

ただ……理解もできる。この個性はオールフオーワンやオールマイトにも引けを取らない程のものなのだから。

「個性を得られる前提があるなら最適化の個性は余りにも強過ぎる。だからこそそのシビアな条件が前提」

他の人から勝手に個性を複製し、自らのものとして扱える。そして最終的には自らの理想を体现する個性だ。強過ぎるからこそその制限が、今回の件だ。

今回のように本来の最適化の使い方だけでなく、新しく個性を手に入れるのはできないのだ。オールフオーワンからの付与の方が裏ルートなのだ。

そして今回の死線で、個性の動きが分かった部分もある。ただでは倒れてあげないのが私だ。

「何にも考えずにこの使い方をしたら間違はなく死ぬ。個性を伸ばして自らのキャパシティを確保できてないと耐え切れない」

私自身で扱える個性には限界がある。ただ限界といつても、長期的に見れば限界とすら言えないものだ。

まず持っている個性は最適化を使わなければならない。使わなければ、自らが所持している個性であるという認識がズレるのだ。結果、個性使いたての子供みたいな動きになる。

そして最適化した個性を習熟しなければならぬ。習熟しなければ自らの理想に近づかないからだ。

比喩するなら宝石の原石を買い、カット・研磨し、飾る、ような感覚だろうか？そして私自身は宝石商であり宝石店だ。原石を個性を貰う買う時に今回のようなことが起きる。

「子供の頃ならどうあがいても無理だった。個性を伸ばしても余裕ができたのはレーザー使えるようになった頃かな」

言うなれば一つ目の宝石を研磨カットして、輝くようになった頃だ。飾る段階になり、研磨やカット方法を理解したのだ。輝いたから飾った、そのことで飾れる場所がその横にあることが分かったとでも言うべきか。

「そしてオールフォーワンから貰ったのも習熟しないとダメなの、これが理由だね。習熟しないとキャパシティに余裕が空かない。半年に二つって英断だった」

半端な磨きかけの原石を貰っても自らの仕様に変えなければ飾る段階まで進められない。輝かせ、飾ろうという段階までいかなければ個性として使いづらいのだ。

そして研磨やカットを両手で一つずつ出来るようになっても一度に出来るのは二つまでだ。手は二つしかないのだから。

「現状の限界は半年で三つ。でも二つが無理のない範囲。三つ入れれば昨日の私みたいになる」

両手が塞がれてるのに原石投げつけられたら身体は倒れるし、機材から両手が離れ地面に着く。原石を倉庫に置いて投げつけられた後や機材を直して再び元の作業に戻る、というのが昨日行ったことだった。

瞬発力が二つ合成が上手くいったのは……よく分からない。圧縮でもしたのだろうか？

「つまり……個性因子の取り込みさえなんとかなれば、お主はもう自ら個性を手に入れられると」

ドクターの問いには領けない。例えば私の個性を宝石商だとしたが、両手が空いてたとしてもできないモノがある。



慣れてないか、機材がないかだ。

「……ううん、違う。私を取り込む場合は適性がある……と思う」

個性を手に入れた直感やこれまでに望んだものから逆説的に予想を立てる。

欲しいと思った個性はサーチ、土操作、人形操作。人形操作が元は誰の個性なのかも

確認した。

全員女性だ。

「多分女性の方がいいし、何なら目立つような人。……考えが近い人じゃないとダメじゃないかな」

「女性ヒーロー・ヴィランだけということか」

おそらく私自身の理想、M s. ダークライ、闇を導く光、巨悪オールフォーワンと対等であるヴィラン。それを体現するために最適化された結果だろう。

「M s.」と付くのだから女性の中で、ダークとライトはまんまヴィランとヒーローだろう。その中のオールフォーワンと対等レベルの存在になる。

言うなればヴィランの女王というようなものだ。そのために個性の方向も最適化されたのだろう。

「だね。でも十分かな、あとは安全な場所……研究所さえできれば全部解決」

「弱点がそこだけじゃものな」

自らの個性の正しい使い方も分かった。今回は死線をくぐらなければ使えなかったが、キャパがある状態で使えればこれほどの死線をくぐる必要も無い。

何故だかこれについては確信がある。全て習熟完了して、新しく一つならおそらく血反吐も吐かないはずだ。

「うん。ただ個性最適化も今キャパ限界状態だし、個性伸ばしを進めないとマズいかな。弔が動き出しそうなら一言頂戴」

「今は仲間が集まってるところじゃろう。早くても7月入ってからじゃな。あと1月とあったところじゃな」

時間が経つのは早いものだ。もうすぐしたら夏休みだ。多分雄英でも何かしらイベントはあるだろうし、そこで弔も何かしでかしそうな気がする。

「ありがとうございます」

血まみれの制服を脱ぎ捨て、ドクターが用意してくれた春川高校の夏服へと着替える。ここから先は新研究所建築がメインだ。

## M S・ダークライのアジト建設

遠隔人形操作を再開して一日ほど休み、転送でマキアがいた近くへと飛ぶ。マキアから相対的に500m程の位置だ。

キヨロキヨロと誰もいないことを確認し、透明色の指先発光を周囲へ知覚のために飛ばす。……誰もいない。

ふうと一息吐き、自らの身体へと意識を傾ける。最適化の際に身体の中の個性因子がどう動いているのかが少しだけ認識できた。今でもまるで個性因子が脈打つかのようには煌めいているのがよく分かる。

輝きを放っている個性は放っておき、光量が弱くなったり強くなったりと不安定な個性へ意識を向ける。土流の個性だ。

「……個性最適化、数が増える速度は半年で二つでも早すぎるね。一つは最適化できるけど、一つは間に合っていないし」

今時点で私が持っている個性で最適化を行ったものと元の個性を頭の中で羅列してみよう。

・最適化

- ・指先発光（熱量無効・異形変化）

- ・思考加速（思考速度自由化）

- ・人形操作（身体操作最適化・光速反射）

- ・エアウォーク（空中地面化）

- ・転送（瞬間転送）

- ・瞬発力×2（超瞬発力）

- ・土流

ほとんどの個性の最適化は進めているが、超瞬発力と瞬間転送はもう少し足りていない。歩いていけば勝手に上がるような個性と、自身を目標に相對瞬間転送しまくれば勝手に上がるから問題ではないが、土流が入りどこから手を付けるか悩ましいところだ。

ただ新しい個性を手に入れるのは解決方向に進んでいる。研究所が欲しい理由の一番はそれだ。訓練場所も欲しいけどね、一番はこっちだ。

「個性因子の保存場所って意味が一番かなあ……研究所が必要な理由」

新しく個性を手に入れる時、個性因子関係のものが何かしらあればいい。であれば自らの管理下に個性因子そのものがあれば即座に手に入れられる。

モチベーションも出てきたところで工事開始といこう。少しだけ歩き、マキアを呼ぶ。

「マキアア」

「Ms. ダークライ、呼んだか？」

匂いから向こうも少し近づいてきていたらしく、呼んだらすぐに姿を現してきた。それじゃあ一つずつ指示を出していこう。

「いつも過ごしているとこ案内して」

マキアがコクリと頷き、私を掴むように手を伸ばしてきた。

「わっ」

掴むとそのまま背中に乗せてくれた。マキアの方が身体が大きいし、長距離移動ならこっちの方が速い。

相対距離移動でそれなりに近くだったからか、数分も立たずに到着した。

「いっただ」

何の変哲もない、ただの山の中腹。こんなところにいたら誰かに見つかるなんてことは中々ないだろう。

マキアの背中から遠くを見ても似たような風景が続くだけ。これなら紛れるし、問題なさそうだ。

「土の中にいる感じかな。じゃあさ、一つ横の山……あそこに行ってくれる？」

「分かった」

指さした先へとマキアが歩いていく。風が頬を撫でる感覚……爽快感がすごい。

数分ほどで目的地に到着した。一応透明色周囲知覚発光もしておく、問題なさそう  
だ。

「ここでもいいか」

「じゃあ次はここに穴を掘ってくれない？200mくらい」

地下深くと言っても空気とかを考えるとそれほど深くにするのは難しい。200m  
でもかなりきつい距離だ。私が土流の個性伸ばしを行う前提でなければ絶対にやらな  
いことだっただろう。

「背中にしがみついている」

指示にマキアが応える。指先が土竜のような爪になり、地面を勢いよく潜り始めてい  
く。私が圧死しないように空間を空けて掘り進めてくれているのは流石と呼ぶべきか。

それとも「穴」を指定したからそうしてくれたのか。……後者な気がする。

「これでいいか？」

縦穴を200m程掘ってくれた。直径5mくらいの大穴だ。僻地だからできる行為  
だ、人気がある場所なら即座にバレることだろう。

「んーちよつと大穴過ぎるけど……まあ埋めるからいいか。それじゃ次はここから横穴  
を30m四方くらいでよろしく」

「分かった。ここで待ってる」

マキアの背中から降り、ドガガガと掘り進めるマキアを眺める。ちようどいいと土流の個性を使ってみると、確かに土が動いていた。固めれば石にも岩にもなれるはずだ。土流の最適化は間違ひなく土操作なのだから。

1〜2時間ほどどれくらいの範囲が現状使えるかといったことを確認していると、マキアが帰ってきていた。マキアもいい汗かいたとどこか嬉しそうだ。

「終わったぞ」

「ありがとう。じゃあここ登って、元のとこ戻っていいよ。私は戻れるから大丈夫」

マキアが穴をよじ登り帰っていく。地上に戻ったのを視認し、マキアの下へと自身を転送させる。

私の転送は座標移動じゃない。ここに来るための何かしらが必要になる。適当な動物を捕まえて穴の中に放り投げておけばいいのだが、それを捕まえるための移動だ。

透明色知覚発光で適当な鳥を一匹知覚する。あとは転送させて手元に呼べばOKだ。バサバサと動くこうとするのを抑え、相対移動で地下へと移動する。

土流で簡単な檻を作成し、その中へと放り投げて閉じ込める。これで移動先が確定だ。私の転送は最適化により死んだ者でも対象になっている。まずは私だけ、いつでも

移動が可能になった。

「名前は……ルトでいいか。それじゃあ地上に戻って……」

相対移動で地上へと移動する。直上200mで地上なのだから簡単だ。

「まずは大穴を橋をかけるような形で蓋をするところ」

穴を塞ぐところからだ。今の私では最適化個性のブーストがあってもギリギリになるはず。

土流の個性により少しずつ穴が塞がれていく。人が乗れば落ちるような程度だが、上から見えないだけでも十分カモフラージュにはなる。

そして一時間程で穴に蓋をしただけ後、パタリと倒れた。体力の消費ではない、新しい個性の使い過ぎで慣れていない感覚にずっと襲われていたからだ。

「……これだけで限界とは……先は長そう」

新しい武器は、意外とじゃじゃ馬だった。



## 成生ちゃんのお買い物

アジト建設による個性伸ばしもようやく伸びてきたところで6月も終わりになっていた。思考加速を使い、遠隔操作で人形操作しながら自身は土流を最適化させていく。

さすがに一月では個性の特性を掌握しきるのが限界であり、そこから個性伸ばしに入っている段階だった。範囲は使えて50m程度、高さも50cmと動画で見たピクシーボブとは天と地ほどの差がある。固めると言った方向もまだまだだし、半年はみないとダメそう。

そんなところでマキアの時から身体を休める以外の休みなんて無かったし、たまには息抜きでもするかと思いついた。どうせなら夏に相応しい服装のショッピングでも行くことにしよう。

「ドクターお金頂戴」

ということでお金を持ってそうなるドクターの下へ転送移動。医者だって話は聞いているからお金も持っているだろう。こんな研究所作れてるくらいだし。

そして今はMs. ダークライじゃない。ただの「普通」の女の子の成生だ。口調も畏かしこまる必要はない。

「なんじゃ急に」

「おしゃれしてない高校生っておかしくない？春はよかったけど、夏は開放的だし服もそもそも持ってないから買っておいた方がいいからさ」

一応人形が着ると考えれば出費的におかしなところは無い。私も着るけどね。

「……両親に言えばいいのではないか？」

「あ」

最近実家に帰ってなかったので完全に両親の存在を忘れていた。



人形と転送入れ替わりで実家に戻り、親に強請つたらけつこうな額くれた。中学時代個性伸ばしばかりやってて全然お金使わなかったから、もしも強請つたらと貯めておいたらしい。

一人で買い物っていうのもアレだけど、こういうのも嫌いではないのだ。何せ「普通」のことであり、何よりオシヤレは女子の嗜み！

どうせだし少し遠出して買えるものは買つとこうと思いい立ち、来たのは木榔市区シヨツピングモール。

「……たまにはこういうのも普通に楽しい！」

適当な店に入って良さそうな服を試着していく。お金があると感覚的に「良さそう」

レベルで買うから散財気味になってしまう。成生のセンスは普通レベルだ。普通ということとは大量に買えばいい感じのコーデイナートができるということだ。

滅多にない楽しみだ。仲間がいればもっと楽しいのだが、ヴィランの女の子なんて探さないといけないしなあ……だいたい指名手配されてるし。

成生が紙袋を一つ、パンパンにしてホクホクとした顔をしていたところで、ある声が耳に届いた。

「おーアレ雄英生じゃん!? 1年!? 体育祭ウエイイ!!」

「は?」

ただの一般人の声だ。だが意味するのは雄英体育祭に出た一年生がいるということ。

まさかと思い、今いる二階のバルコニーから下の階を覗く。そこには動画で見た雄英体育祭の面子、緑谷や飯田、麗日といったA組生徒の姿があった。私服でワイワイとしており、友達同士で仲良くしているのが目に見えて分かる。

「何で?」

休みだからと、切っておいた透明色の周囲知覚のための発光を起動させ周囲を認識する。思考力加速で莫大な情報処理も簡単だ。居るのはA組の緑谷、麗日、飯田、常闇、切島、芦戸、峰田、耳郎といった面々。そして離れた位置に弔。

……え、なんか弔がいるんだけど。

「何でえ!？」

落ち着け私、ヴィランの女王になる私がこの程度で驚くのは、なんかこう……違うでしょ。

多分A組は単純に買い物だろう。夏休み近いし、プール行こうとかなら皆で買い物とかも理解できる。

弔は……え、一人？何をトチ狂ってそんな行動してんの？黒霧はこんなとこ来れないから分からないでもないけど、護衛の仲間も無し？

「……何か悩んでるのかなー？」

よし、先生も口出ししてないし放っておくとしよう。私が口出ししても碌なことにならないそうだ。どうせステイン関係で何かしら思うところあったとかでしょ。ドクターに見せてもらった動画はカッコイイ倒れ方してたし。

それはそれとして今は買い物だ。思考加速以外の個性使うのもオフなんだよ今日は！

そしてスタスタと二軒目に突入する直前、以前に聞いたことがある声がかげられた。その以前というのがUSJの時だったりする。

「あれ、あんた……成生とか言ってたっけ」

「え？」

何故かこちらに声をかけた切島くんの姿があった。……思考加速開始。

何でええ!!? 落ち着け、落ち着け私……こいつとは初対面だ、初対面。こいつと会ったのは人形だけ。弔と合流したりしたら今はダメ。春川高校の成生と弔が繋がっちゃう。ついでに爆豪煽りとかもダメ。

……よし、現状把握大丈夫。人形操作でやってるときみたいに声を返せばいいだけだ。

「誰?」

「え? 覚えてないのか?」

「初対面だと思いますが……」

客観的に見れば私は初対面のはずなのだ。間違えてはならない。今の私は人形と成り代わっている。春川高校の依光成生なのだ、M.S. ダークライではない。

「人違い?……U.S.Jで会わなかった?」

「U.S.J……あ、ナンパですか」

手をポンと叩き答える。U.S.Jって言ったなら「ユ●バーサルス●ジオジャパ●」の方でしょ。誰も「うその災害や事故ルーム」だなんて思わない。

会った先がそこなんてナンパ以外の何者でもない。

妥当な返しをしたはずなのだが、突如私と切島くんの間にぶどうが生えてきた。

「ナンパだとう!?切島てめえ!!!」

「わっ!!」

いやぶどうじゃない。峰田とかいうやつだ。A組にいた……はず、体育祭の騎馬戦あたりにはいた……っけ?

なのだが、どうもヒーローの卵とは到底思えない。ただのエロ魔神じゃないのかこいつ。

「美人JK……切島あ!!!」

私の胸とかお尻とかちらちら見ながら切島くんは血走った眼を向けているあたり、だいたい的人物像も分かった。

「落ち着け峰田。知ってる人だと思ったら別人だっただけだ」

そして峰田だけでなく切島くんの方もだ。随分と好青年だ。個性も確か硬化……普通によくある個性だ。それに……爆豪と戦ってる。

「でも私は知ってますよ!」

「え?」

……ああ、やっぱり駄目だ。可能な限り煽りたい。

私みたいな個性伸ばしをしてないのだから爆豪に負けたのは当然だ。強個性相手に普通の個性が同じだけ伸ばしても勝ち目はないのだ。だから私の一番強力なところは

「個性伸ばしを誰よりも効率よく長く行っている」事実なのだから。

切島くんも同じ真似ができればいいが、それはできない。でも応援してあげたくなくなるの感情はあつた。その理由もある。

「雄英体育祭！熱い戦いでした！」

タイマン二回戦で爆豪に負けたが、ヒーローらしく戦っていた。心に信念を持ち、個性が強い人に立ち向かう。まさにヒーローの卵だ。爆豪が見た目ヴィラン寄りなのも相まって動画見た時は応援したくなつたのだ。

「ファンになっちゃいそうです」

成生はもじもじとして顔を赤らめる。切島も顔を赤くしていた。

「え?!いや、その」

「切島あ(血涙)!!!」

遂に血の涙を流してまで切島くんにつつかかる峰田。エロ魔神が間に割り込むな、蹴り飛ばして一階に落としてやってもいいんだぞ？

今の私は「普通」の高校生だからしないけど。

「(こいつも一応騎馬戦いたんだけど)」

あ、いたんだ。うとうとしながら見てたから覚えてないや。タイマン勝負の面子は見ただんどねー。

「私強い人にしか興味ないので」

「ガフツ!!」

もちろん信念が強いつて意味……あ、なんかエロ魔神が血反吐吐いた。え、こんなのでダメーじ受けるの?それなら排除しておこう。

「エツチなことしか考えてない人なんて人として邪魔だし?」

「ゲハア!!」

「あるとしたら……モテるためにヒーローとか?そんなの順序逆だしね」

「古傷がつ!!!古傷が痛い!!!」

峰田は悶絶しながら転がり、階段を落ちていった。突然出てきた変態ならいい気味だ。

成生がそうやって峰田をいじっていたところで、切島は自らの手を胸に当て、握りしめていた。そして成生に目を向け、自らの想いを口にする。

「強い人か……俺はまだまだだ。紅頼雄斗クリムゾンライオットみてえになりてえんだけだな」

まだまだ。上を目指す人として自らの立ち位置が分かっているのは「普通」に優秀な証拠だ。

謙遜し、向上心をしっかりと持ち、よくある個性をもった人。そんな人こそ成生が好きなタイプだった。



成生が口角を上げ、ニコリと微笑む。そこにあるのは「普通」の少女の笑顔だった。

——切島が、見惚れるような笑顔だった。

「満足せず目標のために一途……うん、やっぱり私はあなたのこと好きかな。ヒーロー的な意味でね？」

「あつ、ああ。ありがとう」

照れている切島くんは少し可愛いところがあるみたいだ。もしもクラスメイトだったら声かけたり気にかけてたりしただろうな、と少しだけ思いをはせる。

……結局ナンパみたいなことになっちゃったな。でも悪く無い気分だ、こんな気分も当分味わえなくなるだろうし、今楽しまなきやね。

「名前、教えてくれないか？」

「よりみっせい依光成生。普通の女の子だよ、切島鋭児郎くん。じゃあね、応援してるよ！」

手を振り切島くんと別れる。一応聞き耳を立てておき、切島くんから聞こえてくる声に耳を傾ける。

「同姓同名見た目も同じってすげえ偶然もあるもんだな！」

そんな偶然があつてたまるか!!!

## 開闢行動隊      w i t h      M s .      ダークライ

「え、嘘」

シヨップピングの後にヒーローの情報を調べていたのだが、完全に忘れていた情報がポロツと出てきた。『ラグドールは見なければサーチ出来ない』。見つからなければ私も無造作に行動出来るのだ。

アジト建設しながらヒーローの情報を調べてはいたのだが、個性伸ばしに夢中で気づくのに1ヶ月遅れた。

orzって跪き頭を垂れるくらいには愕然とした。こんな見落として無駄な警戒してたなんて馬鹿らし過ぎる。

もう夏休みに入るっていうのに……。時間間隔がおかしくなってきた。

だが特性が分かったなら対策できる、見えなければいい。左手分の指先発光をレーザーにするように指向性制御、透明色を自身の全身に纏う様に行使する。光学迷彩と同様の現象を引き起こし、視覚から逃れる。これで私が見つかりアジト特定というやらかしは無くなった。

戦闘には右手しか使えないが、足先や髪先からもレーザーは放てる。たいした問題で

はなかった。

これで好みに動ける。アジト建設の際に転送、超瞬発力の個性習熟も終わったことだし、オールフオーワンから超再生を貰いに行こう。

まずはオールフオーワンのところへ自身を転送させる。

相変わらずの研究所だ。たまーに来るが、ドクターの研究所と違い培養カプセルみたいなのは無い。

あるのは生命維持装置？みたいな機材ばかりだ。

「おや、1ヶ月ぶりかな。新しい個性でも欲しくなつたかい？……超再生かな」

「約束ですよ」

「新しい研究所建設をしてると聞いてるよ。僕の転送ではまだまだだ。成生の個性は流石だね。こちらに来てくれるかな」

座っているオールフオーワンの手が届くように、オールフオーワンの足元にしゃがむ。

オールフオーワンが手を伸ばす、それは協力者というより……孫を撫でる祖父のような手つきだった。

「これで付与完了だ。個性もだいぶ増えてきたね」

「あなたのお陰でもありますよ。あ、そうだ。筋骨バネ化って複製ありますか？」

前に何か個性見せてと強請った時があったのだが、その時にオールフオーワンが見せてくれた個性だ。超瞬発力と超再生とコンボすれば自傷無視によつて増強系の個性には十分対抗できるようになる。

「あるはずだ。ドクターに聞くといい。ああ、そうだ」

オールフオーワンがパチリと指を鳴らす。三年近い付き合いだ、何か思いついた時によくする行為だと知っている。

「どうせなら弔のところ遊びにでも行ったらどうだい？仲間も集まっていたよ」

「ふうん？」

仲間も集まった。その言葉に惹かれて成生はニコリと笑う。普通の女の子の笑みで。

「それなら喜んで」



弔へと転送先を指定。どうせバーにいるだろうと予想し、案の定だった。

「わ、人増えてる」

突如何もないところから現れた成生に、バーにいた弔と一人以外の面々が即座に臨戦態勢に入る。

臨戦態勢に入っていない唯一、トガヒミコが首を傾げて問い掛ける。

「誰ですかー？」

「Ms. ダークライ。気紛れだろ」

成生が答えるよりも早く、弔が問いかけに答える。バーの面々も弔の知り合いであると分かり臨戦態勢を解いていた。

しかしそんなことより成生は、弔に叱りつけるように注意を口に出す。青筋を一つ、額に立てながら。

「とーむーらー？ 私は依光成生だつて言つてるだろー？」

「……悪かつた」

頭を下げる弔を横目にキョロキョロと見渡す。つぎはぎだらけだつたり全身タイツだつたり、仮面をした紳士風だつたりと個性的な面子だ。それなりに名のあるヴィランもいるし、指名手配されてる吸血鬼のような歯をした女の子もいる。

「中々面白そうな面子を集めたね」

「あんたは何だ」

つぎはぎだらけの男——茶毘が疑問を口に出す。弔と黒霧以外は誰も成生のことを知らないのだ、当然の疑問だつた。

だが一つだけ茶毘は間違いを犯した。自らやヴィラン連合の方が目の前にいる女よりヴィランとしての格が上という認識ミスによる、上から目線の言葉使いだ。

一瞬の瞬き、そして成生の両目が深淵へと堕ちる。茶毘には余りにも理解不能な変貌が

瞳に映り、身体が強ばっていた。

「まず自分から名乗りなさい。私は弔の先生の協力者、皆より弔との付き合い長かったりするよ」

「だ、茶毘だ」

一瞬の変貌に恐れを抱いたのは茶毘だけではない。トガヒミコと弔を除いた全員が「恐ろしいヴィランが仲間になる」と認識せざるを得なかった。

そしてトガヒミコはと言うと、その「恐ろしいヴィラン」が即座に元の普通の目に戻り、目にも止まらぬ速さで抱きつかれていた。

「かくわ〜い〜い〜！指名手配のトガヒミコちゃんじゃん！」

「わっ!?!」

瞬間転送＋光速反射＋超瞬発力。強力な個性を無駄極まりない使い方をしている自由人がそこにいた。

「野郎ばかりで集めたと思ってたからびっくりだよ！弔も男の子だったんだね！」

わたわたとするトガを背後から抱いて弔を煽る成生。弔は嫌そうに口を開いた。

「こいつはステイン信奉だ」

「あ、そう？ステインは私と同じ立場だったし、残念だったよ。でも悪くない倒れ方だったね」

「ステインを知ってるのか!? あ、俺はスピナーだ」

トカゲのような異形をした少年——スピナーが思わず口を出す。この中ではステイン信奉者でもトップ、ステインと同じ立場の人と言われて話を聞かない訳がなかった。「捕まってるそれなりのヴィランなら知らない人はいないでしょ。私も好きな方だったよ」

「つてことはあなたもヴィラン? あたしはマグネつて呼んでくれると嬉しいわ」

ロン毛に女口調の男、マグネが確認をとるように口に出す。成生はむすつとした顔をし、胸を張って返答した。

「失礼な、私は世間的には悪さなんてしてない普通の女の子だよ」

世間は私がUSJ襲撃にいたことを知らないのだ。人形だけの視点で言えばただの女子高生だ。

「普通の女の子が「ここにきちやダメだろ!」」

全身タイツの男が至極真つ当な正論を成生へと飛ばす。何か言い方が二重人格みたいな言い方になっていたが特に気になどしない。それより、まったくもって否定できない事実を言われたことに思わず言葉が詰まってしまっていた。

「えーと……「すまねえな!」「トウワイスだ!」「トウワイス? いい人だね。でも大丈夫、ここに来る私はヴィランだよ」



「なら「ヨシ！」」

「で、弔。なーにを考えてるか教えてくれる？私も行けるよ」

今回の参加は面白そうだからだ。こんなに仲間を集めておいて何をやるのか、楽しみで仕方ない。これでつまらない目的なら……ちよつと愛想尽かすことになりかねないけど。

「合宿中に襲撃、雄英の生徒を拐う」

弔の言葉にニタリと笑みを浮かべる成生。さつき見せた雰囲気に近いものがそこにあった。

「うん、いい目的だね。ただ、こんだけの戦力あってもヒーローは越えてくる……分かるでしょ？」

「Plus 更に Ultra 向……分かってる。成生が参加するなら成功は確実だな。黒霧を守ってくれ、退路を頼む」

「頼むなんてらしくないね」

ハハハと弔が濁いた笑い声を上げる。確かにらしくないと苦笑の笑いだった。

「黒霧と退路を守れ」

「ふふふ、構わないよ。それでこそ弔だ」



決行当日、先んじて茶毘と私は山の中腹、崖の上にいた。先に来たのは大まかな地形の確認がメインだ。いろいろ教えてくれる人がいるらしく、雄英の合宿プランは分かっているらしい。

オールフオーワンには友達が多い。雄英にスパイを送ってたりするのだろうかと思いを付け、頭の片隅に置いておく。

「ヴィラン連合、開闢行動隊が地に墮とす。愉しみだ」

「茶毘くん中々いい戦略眼してるじゃん」

「そうか？」

地形も、英雄生徒が肝試するということ動きも分かっているなら打つ手は変わる。プロヒーローがポイントごとにいるとかなら隠密襲撃か、同時各個撃破が考え方の中心になっただろう。

今回がそうでないなら戦略も変わる。きちんと対応できていた。

「制御不可のマスキュラーは大外周りの遊撃、一番厄介な英雄プロヒーローには時間稼ぎのための複製と範囲攻撃の二人。殺傷能力の高い面子で生徒を襲い、それ以外が残り」

時間稼ぎが徹底してるところがいい。範囲攻撃と複製なんてどちらも逃がせない相手だ。血眼ちなまこになって探すことだろう。

「私的には好みだね。ただ一つ言えるなら……ヒーローつてのは追い込んだところからが怖い」

「肝に命じておくよ。……アンタの役割は？俺何も言つてないよな？」

どうやら今回、目的は弔が指示したらしいのだが、実働は全て茶毘くん以下に任せているらしい。そして私も実働側に入っているので茶毘くんと話していたのだが、何も指示を受けていなかった。

言い訳は「あんたほどのヴィランを扱える気がしないから勝手に動いて」ということらしい。いやまあ……茶毘くんの作戦がイラツとしたら無視しかねないのはその通りだけだよ。

それはさておき今回の私の役割は簡単、レスキューだ。

「ん、弔くんのためを考えると……マスキュラー、ムーンフィッシュ、マスタードは捨て駒。雄英プロとは戦いたくないから、そこ以外の面子を助けるのと退路確保するってことで」

捨て駒以外の面子が危機に陥つたら障害排除して救出、それだけだ。全員一度見たから私自身が転送で移動できる。逆に誰かをどこかへだとか、私のところへ送るとかは時

間がかかるようになったが、自分だけを誰かの下へなら一瞬だ。

オールフオーワンのように複製したての転送は親しい人とかじゃないとできないのだが、今の私なら一度見ればOKだ。

「すげえ仕事量になりそうだな。出来るのか」

「簡単。だって黒霧、トガちゃん、スピナー、マグネ、Mr. コンプレスを守ればいいんでしょ？ 最悪捕まった後に回収でもいいけど」

どうせ捕まっても生徒数人とプロヒーロー5人程度だ。全員排除できる。

「トウワイスも頼む」

「いやー、無線で助け呼んでくれたら行くから。あとっておくと今の私、地形無視して戦っていいならヒーローとヴィラン全員相手どつても勝てるから」

空飛んで5km近い長さの常時レーザーを三分くらい振り回せばこの辺の山は全て斬り裂ける。全員皆殺しになるからやらないけど。

「弔め、とんだ化け物隠しやがって。スピナー達に付いてくれ」

「んー……戦力分析終わってから決めるね。じゃああとは無線でお願いね。私は姿見えないから」

■ ■ ■  
透明化で姿を消す成生。その瞳には既にヒーローの姿がロックオンされていた。

夜、それはヴィランの時間だ。肝試しを始めた雄英生徒を目標に、崖の上に集まったヴィラン連合は茶毘の話聞いていた。

「威勢だけのチンピラをいくら集めたところでリスクが増えるだけだ。やるなら経験豊富な少数精鋭」

既に戦略を決めていた茶毘に、突如現れた成生は完全に予想外の存在だった。

しかも底は見えぬ、性格もまた把握出来ないフイックサイ黒幕タイプのヴィラン。弔からの指しも相まって、ヒーロー戦の支援くらいしか役割の選択肢はなかった。

茶毘の声に透明のまま、ニタリと笑う成生。誰にもバレないからと、深淵色の瞳を、邪悪な笑みを、まったく隠さないM.S. ダークライへと表情を変えていた。

「まずは思い知らせろ……てめえらの平穩は俺達の掌の上だということ」

茶毘の言葉に全員が動き始め、M.S. ダークライはクスクスと笑う。何も無いところから上がる笑みは、不気味そのものでしかなかった。

その不気味な存在も他の面子同様に行動を始める。その行動先はというと――

「私はあなたたちの支援ね」

「姿が見えない……透明化か？何で俺たちのもとこなんだ？」

「そうよ。あたしたちそんなに弱くないわ」

――一番戦力の低いスピナーに付くのは当然の選択だった。

個性や体つき、武器の使い方を鑑みてもスピナーが最弱だ。甲と気が合いそうだし捨て駒にするにはもったいない。となるとここに付くのが最良だ。

それに、プロヒーローを舐めてる節がある。それはダメなのだ。

「相手がプロで、チームだからねー。2対2になったら勝ち目薄いよ？」  
「それでもだ」

「舐めてるって言うのよ、それ」

マグネは殺人を犯したりと、プロヒーローから逃げ切っているからともかく、スピナーは怪しい。1対1なら私も遠くから見ただけにしたらさだろうけど、2体2だと連携の必要性が出てくるからダメなのだ。

ただこういう手合いは何を言っても反論してくる。だから言えることは一つだ。

「はあ……結果出してから言いなさい」

「……アンタは結果出してらってか」

「雄英襲撃した時、駆けつけたヒーロー数人に対し、私は無傷でヒーロー二人を止めて甲を逃がした。これで十分？」

「十分ね」

森を移動しながらの会話だが、マグネが即答した。流石にプロヒーローの強さを知っているからだろう。ヒーローに応援がいて、自身には仲間がいて、その条件でヒーロー

に手傷を負わせて逃げきったというのが凄じことなのだ。

「それほどのヴィランだったのか……見かけによらんとはこのこと」

「さて、無駄話はここまで。基本助けないけど……緊急で助けて欲しかったら、ヘルプ！ っって言つてね？ さあ、ご対面といきましようか」

遠くでは茶毘が炎で森に火をつけ、肝試しをしている近くではマスタードがガスの噴出を始める。

ヴィラン連合が、動き始めていた。

「さあ始まりだ。地に墮とせ、ヴィラン連合『開闢行動隊』」

そして悪夢も、動き出す。

## 林間合宿襲撃～開始～

「飼い猫ちゃんは邪魔ね」

マグネの磁石へ、不意打ちでマグネにより磁力を付与されたピクシーボブが引き付けられ激突する。マグネの狙い通りピクシーボブの左側頭部に直撃し、何の警戒もしていなかったからか一撃でピクシーボブは沈んだ。

さらにスピナーが踏みつけ、一日は起き上がれないダメージを与える。

これで私に対抗できる戦力は無くなった。生徒たちの個性を全員分かつているわけではないから、警戒するのはそこくらいだ。

「何で……！万全を期したはずじゃあ……！」

怯える雄英生徒たち、口に出していたのはブドウ頭をした少年だった。

……峰田じゃん。本当に雄英生徒だったんだ、少しだけ疑ってた。あんなのが雄英生徒だなんて思いたくなかったってのもある。

「何で……何で敵<sup>ヴァイラン</sup>がいるんだよオ!!!」



プロヒーローのマンダレイ、虎が雄英生徒を守るように正面に立つ。二人で数人を守る、ヒーローの鑑だ。

衣擦れの音や聞き取れるか分からないくらい足の足音で、見えない相手がいることくらいは分かると思ったんだけどちょっと残念。山岳救助がメインという話だからむしろ頑張ってる方かな？

「ピクシーボブ！」

生徒から声上がる。緑谷の声だ、生徒が全員がここにいるわけではないのだろうが、彼がここにいてくれれば周りが楽になる。無理やり止めてもいいが……避難するなら好都合だ。

なんでも、攫う予定の生徒は既に分断済みらしい。なら残りの生徒は避難場所に押し込んだ方がいい。

「やばい……！」

何故かマンダレイが慌てる。何か不測の事態でも起きてるのだろうか？勝手に分断されてくれるなら助かる。私は基本ヘルプ呼ばれない限りは隠密に徹する、下手な行動された方が困るのだ。

「ご機嫌よろしゅう雄英高校!!我ら敵<sup>ツイン</sup>連合開闢行動隊!!」

テンションが上がっているのかスピナーが両手を広げ、大きく声を上げる。ステイン

の思想に酔ってるのか、随分と好戦的だ。

そしてそれは、プロヒーローとの戦いではあまり良くない傾向だ。プロヒーローは冷静にこちらの弱点を突く、ボロが出たら負ける可能性が高くなるのだ。

「敵<sup>ヴィラン</sup>連合……!?何でここに……!!」

尻尾を生やした生徒が疑問を口にするも、答えはまったく別のものだった。

「この子の頭潰しちゃおうかしら、どうかしら? ねえ、どう思う?」

「させぬわっこのっ……」

マグネが脅し、即座に虎が反応する。自らの意志に従い自由に行動するヴィランはヒーローの疑問に律儀に答える必要などないのだ。

が、そんな一触即発の二人をスピナーとマンダレイが止める。熱くなっただけの戦いなど、どちらも求めていなかった。

「待て待て早まるなマグ姉!」

「虎もだ、落ち着け」

マンダレイは冷静さを取り戻させるための引き止めだったが、スピナーは違う。戦う理由の問題だった。

「生殺与奪は全て、ステインの仰る主張に沿うか否か!!」

「ステイン……!あてられた連中か……!」

飯田はどうやら察したようだ。ステインを倒した一人だつて話だから当たり前なのだが、最後の仁王立ちから影響を受けなかったわけではないらしい。

ヒーローにも影響を与えたというのは中々に、人の目に留まっていると言える。影響力と言う意味ではオールマイイト程ではない、だが局地的には見れば影響は超えてもおかしくない。

「そしてアアそう！俺はそうおまえ、君だよメガネ君！」

飯田を指差し、背負っていた大剣のような武器を抜く。ナイフを何十何百と括り付けて一本の剣状にした武器だ、鎖で巻き付けられているのがどこことなく突貫工事感がある。

……あれ、蹴っ飛ばすだけで壊れそうなんだけど。カッコイイからとか、もしかしてそんな理由だろうか？ヴィランだし自由にやれとは言うけど、あれ作れつて言うなら自分の身体に保護色するTシャツの方が百倍マシだと思う。

「保須市にてステインの終焉を招いた人物。申し遅れた、俺はスピナー——彼の夢を紡ぐ者だ」

壊れそうな大剣だが、迫力だけは満点。生徒を驚かせるくらいには成功していた。プロヒーローは別だが。

「わっ」

「何でもいいがなあ貴様ら……い」

虎が一步前に出て凄んだ顔でスピナーとマグネを睨みつける。

私はヒーローとヴィランの相對している横からしゃがんで見ている。傍観者みたいな視点だ、視線による怖きなんでものはまるで分からない。どうせUSJの時に脳無とやり合う時のオールマイト程ではないでしょう。

「その倒れてる女……ピクシーボブは最近婚期を気にし始めててなあ、女の幸せ掴もうって……いい歳して頑張ってたんだよ」

私達ヴィランからすればどうでもいい情報だ。むしろ顔面ぶん殴ればいいのかな？  
としか思わない。

「そんな女の顔キズモノにして、男がヘラヘラ語ってんじゃあないよ」

……私が女だからそう思うのかな？男ならヴィランでも変わったたりする？

そんな疑問の答えはスピナーから飛んできた。

「ヒーローが人並みの幸せを夢見るか！」

そう口に出し武器を持って駆け出すスピナー。格で言えばヴィランでも下寄りの彼だから正直これが回答かどうかは怪しいが、男でもそうらしい。ヴィランであるより男

だって言う人なら話は変わるかもしれない。

駆け出すスピナーにマグネも武器を構える。虎とマンダレイも迎撃に腰を低く構えていた。

「虎！「指示」は出した！他の生徒の安否はラグドールに任せよう！私らは二人でここを押さえる!!」

ラグドール、私が警戒していたプロヒーローだけど……手遅れじゃないかな？

右手で透明色による知覚発光を上空にかなりの発光量で飛ばしてみたけど、腕とチェーンソーを何本も持つてる脳無の傍では動くような気配が無くなってる。脳無が手になんとかキャッツの頭装備を持つてるから戦いも終わっているはずだ。

ついでに他の面子の状況も確認。茶毘とトウワイスは複製茶毘を合宿所へ、トガちやんとマスクュラーは索敵中、Mr. コンプレスは潜伏して機を伺ってる。ムーンフィッシュとマスタードは行動を始めてる。生徒も軽傷者が出始める頃合いだろう。

まあ、ラグドールが堕ちたとはいえ透明化を解くのはNGだ。今無駄に出て、不意打ちチャンス逃したくはない。

「皆行つて！良い？決して戦闘はしない事！委員長引率！」

「承知致しました！行こう！」

飯田や尾白、峰田達が走り出す。生徒に傷を与えるなら今じゃないから見逃してあげ

る。……あれ、爆豪どこだ？あいつは殺してやろうと思ってきたんだけど。さっきの覚の時も森に隠れて見えなかった。

「……………飯田くん、先行つてて」

「緑谷くん!?何を言ってる!？」

「緑谷!？」

緑谷追えば分かるだろうか？なんだかんだこの二人仲は良さそうだし。

ただ実力自体は認めあつてそうな気はするから、助けに行くとかはしないんじゃないかなあ……よし、留まることにしよう。

「マンダレイ!!僕、知ってます!!」

マンダレイが汗を一つつく。そこで全く関係ないことにふと気づく。

爆豪がいるのは多分ムーンフィッシュ辺りだ、と。

恐らく合宿所にはいない。一日目、二日目と五人くらいがなんか一緒に行動してて、そいつらが居たからだ。多分そいつら以外はここと森の中にいるはずだ。

そしてここにはいないなら森の中だ。さらにラグドールが沈んでいる近くに居ないならムーンフィッシュかマスタードのところだろう。で、マスタードと爆豪は実は相性が悪い。

マスタードのガスは有毒だが可燃性は無いのだ。なら爆発させればガスは吹き飛ば

せる。けれど大爆発になるから間違いなく音が聞こえる。そしてそんな音は聞こえない。

なら結論はムーンフィッシュ辺りになる。

(そういえば攫う目的の生徒って誰だっけ)

緑谷が別方向に駆け出していき、スピナー達がマンダレイ達と衝突する。そんな中M・s・ダークライは今更そんなことを考えていた。口に出さないのは隠密を解かれないからだ。

何せ合宿前日に合流したのだ。目的だけ知らされており、詳細な情報を教えられていなかった。他の面子には知らされてるリストみたいなものさえ渡されてないのだ。

実は弔が茶毘に「どうせ成生なら何も言わなくても対応してくれる」と言ったからなのだが……今のM・s・ダークライには知る由もない。

M・s・ダークライはふうと一息吐きながら、持っている情報から推測する。雄英体育祭の動画と、そこで見た個性だ。そこからヴィラン的に相性がいい特性持ちが該当するはずだ。

(一番ヴィランに近いのは爆豪だけど……弔って私と爆豪の相性の悪さ知らないんだっけ?じゃあ常闇くんあたりかな?)

闇の中では強力な力を使える個性だ。うってつけと言えるだろう。

「てめえらのような利己的なヒーローもどきは肅清対象だ！」

M.S. ダークライが思考に耽っている他所で、威勢よくスピナーが大剣でマンダレイへと切りかかる。が、何故か一瞬動きが止まった。まるで虚を突かれたような表情をしていた。

「え？」

「なに照れてんの、ウブね」

「でえ!!」

動きが止まったスピナーにマンダレイは猫のような四足になり、横つ腹を爪で切り付けて距離をとる。

……テレパスか、マンダレイの個性だ。前に女性ヒーローで有用な個性は無いか調べたことがあるから分かる。何か気を引くようなことを言って動きを止めたのだろう。

どうせだし、髪の毛とか拾っておくか。もしかしたら個性貰うことになるかもしれない。髪の毛一本貰って保存しておけばいいって楽でいい。どつかのタイミングで手に入れよう。

「なんて……つ不潔な手を！尻軽めが！」

スピナーが再び切りかかろうとし、マンダレイも迎撃態勢をとる。が、マンダレイを引く張る力があつた。



「わあ!？」

「おいで飼いの猫ちゃん」

マグネの個性だ。個性で磁力を付与し、持つてる1m近い磁石に引き付ける。不意打ちでピクシーボブを沈黙させた攻撃だった。

が、プロに同じ手はそう簡単には通用しない。すぐさま間に割り込む虎がいた。

「そう同じ手！させぬわ！」

「きやつ」

割り込むと同時に磁石を殴りつけ、地面へと落とす。さらに虎は意外な情報を口に出す。思わずMs. ダークライも聞き入るような情報を。

「引石健磁、<sup>ザイラン</sup>敵名マグネ。強盗致傷9件殺人3件殺人未遂29件」

完全にマグネの素性が割れていた。民間人に結構な被害を与えてるなーと呑気に微笑みながらMs. ダークライは再び上空へ透明色の知覚発光を飛ばす。戦局は一瞬で切り替わることも多い、ここだけに注力して他が死んでたら意味が無いのだ。

……マスキュラーと緑谷が会敵してる、緑谷運悪いな。ムーンフィッシュが誰かの腕を切ったかな？そのせいで逆にムーンフィッシュが動けなくなってる。轟と爆豪はここか、予想通りだ。

あとは変わらず。トガちゃんはまだ索敵中かな？

「やだ私有名人……んっ！」

知られていた、という一瞬の油断。そこを突き虎が拳を振るうも、マグネは左手で受け止めていた。

「何をしに来た犯罪者」

呼気を強くした虎にマグネは淡々と対処する。その目にはまだまだ余裕という文字が書かれていた。

対照的に余裕が無さそうなのは、マンダレイだった。テレパスでいろんな状況が分かる故に、情報処理が追い付かないのだ。

(思考加速が無ければ私もそうなってたからよく分かる)

「虎！おかしいよ……！まだラグドールの応答がない。いつもならすぐ連絡寄越すのに……！」

ニヤアと笑うマグネ。姿こそ見えないものの、M.S. ダークライもまた同じ表情を浮かべていた。

## 林間合宿襲撃く鎮圧く

「あーんもう近い！アイテム拾わせて!!」

（此奴……！私のキャットコンバットを読んだ動きを……!!）

「くっ！」

「らあ！」

マグネと虎が近接格闘戦を繰り広げ、スピナーが大剣を振るいマンダレイはヒット＆アウェイで対処する攻防が続く。

さつき再び上空へ透明色知覚発光を行ったところ、地鳴りみたいな音と共にマスクユラーが緑谷に負けた。

正直緑谷のことを侮ってた。オールマイトの後継なのだから一番してはいけないことなのに、次からは油断はしないで計画を組み立てることにしよう。

そしてこっちに向かってきていることも分かっている。ただまあ……消耗がヤバかったからせいぜい不意を突く一撃程度だろう。

「しついつ……」

「い………のはおまえだニセ者！とつとシユクセーされちまつ」

——ちようど今日に映っている、あんな風に突撃してくるくらいだ。

「ええ!？」

勢いよく飛んできた緑谷のドロップキックがスピナーの大剣を破壊していく。

しかしあんなの警戒してたマンダレイは実戦から遠のいてるなあ。緑谷のドロップキックは……増強系でないプロヒーローなら自傷覚悟の全力の一撃で対等だ。一言で言えば、虎かマンダレイが猫手袋みたいなアイテム壊れるの覚悟の全力で横から殴れば壊れる。

一瞬だけでもスイッチすれば即決着してただろう。本当にチームか？

「マンダレイ!! 洗汰くん! 無事です!」

「君……」

「いっつ!!! つ!!!」

ドロップキック慣れてないのか着地失敗してる。慣れない技は使うもんじゃないぞ、自爆したら元も子もない。

ジツと緑谷の身体を観察する。明らかにマトモに動けるような身体じゃない、怪我だらけだ。エンドルフィンだっけ? 傷も無視して動けているけど、あと数分から十数分も

すれば勝手に倒れるのは間違いない。倒す分には時間稼ぎで十分だ。

「相澤先生からの伝言です！ テレパスで伝えて!!」

相澤先生？ イレイザーヘッドか。伝言……テレパスが狙いか、だとすれば伝言の内容は確実にあれだろう。ふうん……それなら時間稼ぎじゃなくていい。

「A組B組全員——プロヒーローイレイザーヘッドの名に於いて戦闘を許可する!!」  
面白くなってきた。私もそろそろ介入を始めよう。



「伝達ありがとーでも！ すぐ戻りな！ その怪我尋常じゃない!」

「いやっ……すいません! まだ! もう一つ……伝えてください!」

緑谷が、森へと駆け出しながらマンダレイへ頼みを告げる。既に動けないレベルの怪我だだろうに、まだまだ動く気満々みたいだ。

「敵の狙い少なくともその一つ——……」

(あ、助かる。誰?)

きつとマスキュラーから聞き出したんだろう。あんな奴にさえ教えてるのに強いからって理由で何にも教えないのは流石におかしいでしょ……、問題ないけどさ。

「かつちゃん狙われてる！テレパスお願いします！」

かつちゃん……アダ名？「か」から始まる名前の人か？

狙いそうなやつ筆頭は爆豪か常闇……爆豪勝己と常闇踏陰。ばくごうかつき とこやみふみかげ

つき……かつ……かつちゃん……。ええ、マジかあ……。

あいつかあ

今宵、M s. ダークライが透明化して最も全員が助かった現象は、霧囲気ですら見えないことだった。今見せている姿は余りにも悍ましく、恐れを抱き動けなくなるような霧囲気であり、オールフオーワンにさえ劣らない程の殺意を秘めたものだった。

数日後に同じレベルの霧囲気を実際に感じ取った緑谷達が、心臓を止めたくなくなるほどの殺意だ。ヴィランでさえもその姿には立ち止まる。

そうなったら光速反射と超瞬発力により先手が確実に取れる、光速のM s. ダークライの攻撃が決まり戦いは決着がついてしまう。

まさに、ヴィランヒーロー問わずでの、不幸中の幸いだった。

周囲の様子は変わらず変遷しながらも、M.S. ダークライだけは他所吹く風であり、フラストレーションを高めていく。

「かつちゃ……誰!? 待ちなさいちよつと!」

マンダレイの引き止めも無視して緑谷は森へ駆ける。その様子を見て汗を流したのは——マグネだった。

地鳴りのような音が起こる戦い、目的を漏らすメンバーからしてマスキュラーしかない。そしてここにいると言うことはマスキュラーを倒したということだ。

まだ高校生だというのに、あのマスキュラーを倒した事実。将来恐ろしい程強大なヒーローになるのは明白だった。

「やだ……この子、本ト殺しといた方がいい!」

「ぬっ」

虎の拳を大きく弾き、緑谷の方へと駆け出す。その動きを止めたのは——スピナーだった。

「手を出すなマグ姉!!」

「!?」

壊された大剣からナイフを一本取っており、それを投げつけマグネの動きを止めたのだった。

「ちよつと何やってんの!? 優先殺害リストにあつた子よ!？」

「そりや死柄木個人の意思」

「スピナー何しに来たのよあんた!」

ヴィラン同士で口論、思わずため息の一つも出てしまう。悪いとは言わないが、良し悪しは時と場合による。今回はそんなことやってる暇はないという意味で悪い。

「あのガキはステインがお救いした人間! つまり英雄を背負うに足る人物なのだ!! 俺はその意思に、シタガ!!」

「やつつとイイの入った」

カッコつけてるスピナーの顔面に思い切りマンダレイが蹴りつける。武器も無くなったことで一気に形勢が不利になっていた。

さらにスピナーと口論するという、明らかな判断ミスを見逃す虎ではない。即座に鎮圧に動いていた。

「油断したな」

「きやつ!？」

虎の個性「軟体」。組み合わせる状態になれば一気に拘束までもつていけるのだ。一瞬の油断を見事に突いており、拘束まで時間の問題だった。

「まずつ……」



「これで終わり」

さらにスピナーも鎮圧されかけていた。武器は無く、体術ではプロヒーローには勝てない。個性も「ヤモリ」であり、戦闘向きではないのだ。ヴィランとして連合の中で弱小とも言える。

だがヴィラン連合はただの弱小ヴィランでは入れない。何かしらの信念といったものが無ければここにはいないのだ。それがスピナーの場合はステイン信奉なのだが、それだけではなく——もう一つあった。

「マグ姉っ！くそ、仕方ねえ」

「何をする気？」

それは弱小であり、下手なプライドは持っていないことであり、誰かを頼ろうとできること。……つまり仲間を信じれるということなのだ。

「ヘルプ!!!」

「なっ?!」

大きく声を上げてスピナーが助けを呼ぶ。マンダレイと虎も新手がいます、しかも現

状から助けられる程の人物が来ると、驚きながらも警戒を高めていた。

スピナーの言葉にM.S. ダークライの笑みを抑え込み「普通」の少女、依光成生の霧困気・表情へと様相を変える。まだデビュタントしてないのだ、依光成生で姿を現さないと衝撃的なデビュタントができない。

「うん、十分だったよ。あとは任せて」

動かない二人を転送の個性でここにはいない黒霧の近くへと転送させる。あとはワープゲートで逃がしてくれるだろう。武器は……いっか。マグネのだけ後で回収しておこう。

転送の個性は成生だけなら一瞬だ。だが数秒動かずに待つという条件があれば他人を他人の下へ転送するのも使えるのだ。

そんなこと戦闘中にはまず無いが、声を上げたら数秒くらいはこんな風に静かになる。イレイザーヘッドとかなら話は別だけど、もしそうなったら私が蹴っ飛ばすなりして護衛するだけだ。

「な、ど、ど、ど!?!」

「スピナーまで!?!」

一瞬で消えたマグネとスピナーに周囲を警戒するマンダレイと虎。背中合わせになりどこから来ても大丈夫といった態勢をとっていた。

その様子をクスクスと笑いながら、手を後ろに組んで成生は音も無く透明化を解除する。突如として現れたヴィランに二人とも身体を向け……あまりにもヴィランらしくない姿に思わず目を丸くする。

「虎、マンダレイ、初めまして。私は依光成生って言います」

「女子高生？」

「ヴィラン連合だな？」

虎の言葉にニコリと笑う。と、同時に個性を発動する。

エアウォークから最適化した『空気地面化』。空気があればどこでも地面と同じ認識して行動できる。後ろ手に組んでる掌を地面と認識した空気へ手を付け、さらに『土流』を発動させる。

そうすると何が起きるか——空気があればどこでも土流による攻撃を仕掛けることができるのだ。

マンダレイの後頭部付近に地面化した空気を配置し、土流で形成した拳で殴りつけ

る。突如として殴りつけられ成生の方へと吹き飛ばされるマンダレイに、虎も理解が追いついていなかった。

「マンダレイ!?!」

「油断はよくない」

虎が困惑した隙を突き、成生の方へ飛んできているマンダレイの腹に超瞬発力で膝蹴りを叩き込み、勢いが止まったところで髪を思い切り掴む。

「がつ」

「ほらキャッチして?」

さらにそのまま髪をブチブチと千切りながら全力で虎へと投げる。増強系ではない成生だが、明らかに増強系並の力だった。緑谷のドロップキックより遥かに速い速度だ、虎が受け止めればそのまま後ろに吹き飛ばされるのは間違いない。

これもまた個性のコンボだ。成生の個性の一つ『人形操作』は成生自身に使った場合、光速に対応した反射だけでなく、人体の限界を超えてまで膂力を使うことができる。所謂、火事場の馬鹿力というやつだ。当然それだけの膂力を使えば身体は損壊する。

が、今の成生には『超再生』がある。しかも超再生は人体機能にある超回復まで機能しており、放っておけば超再生に合った身体へ膂力といった能力が変わっていくようになっていた。

要するに、今の成生は人体の限界を超えた力が容易に引き出せる上に、使えば使う程強化されていく状態だった。

(狙いは我がキャッチすること！だが避ければマンダレイが木々に叩きつけられる！)  
「っ！女の髪を掴むんじゃないよ！」

高速で飛んでくるマンダレイを片手でキャッチし、投げられた方向とは別の方へと向きを変えてリリースする。軟体である身体で衝撃をタイミングよく受け流す体術であり、しかも走ってくる成生から視線を逸らしていなかった。

だからこそ、虎は理解できなかった——意識を既に失っているマンダレイに追撃を加えるなどという行為を。

「もちろんこうなると分かってたでしょう」  
「っ!?!」

リリースした方へ方向転換し、マンダレイを狙う成生。まさかの行動に虎も動きが間に合わない。本来あり得ない動きなのだ、虎がマンダレイをリリースしたと全く同じタイミングでそちらへ向かった。

反射速度が尋常じゃない、光速なのかとすら勘ぐる程だった。

当然、マンダレイを守るため、襲い掛かる成生の身体へ横から拳を振るう……ことこそが、成生の狙いだった。

「させぬわ！」

「待ってた」

虎の顎をカツンと裏拳で打ち抜く。一瞬だけ脳が揺れ意識が飛び膝がガクリと落ちかけるも、なんとか虎は立っていた。倒れてもおかしくない一撃に、軟体による衝撃軽減でその程度に済ませたのだ。

だがそれだけの隙を見逃す成生ではなかった。超瞬発力で加速させた、顔面を砕くようなハイキックが虎に決まる。軟体の個性も効かずに吹き飛び、受け身もとれずに木に直撃した。

「っ!!!」

そのまま虎も動かなくなる。少なくともこの後動けることはない怪我だった。

これで広場に立っているのは成生唯一人だけ。有無を言わさぬ勝利だった。

上空へ透明色知覚発光を飛ばし、周囲の状況を確認する。マスタードとムーンフィッシュは負けたか、じゃあ捨て駒はこれでおしまい。

マグネの武器を一時保管だと、転送で自身のアジトへと飛ばして次の目標へ動き出す。

「これでスピナーとマグネの役割も終わり。広場にいた生徒も皆合宿所行き。トガちやん応援にでも行きましようか」

悪夢はまだ、終わらない。

## 林間合宿襲撃～合流～

虎が成生によって沈んだ頃、トガは麗日によって組み伏されていた。横には木にナイフで髪を縫い留められ動けない蛙吹梅雨の姿があった。

二人に傷はない。梅雨も動けないだけだった。

「梅雨ちゃん、ベロで！手！拘束！でできる!?!」

「すごいわお茶子ちゃん……！ベロは少し待って……」

背中から抑えつけたトガを更に拘束しようと画策するも、多少の時間がかかる。ならばと麗日がトガを注視するのも仕方のないことだった。

「お茶子ちゃん……あなたも素敵。私と同じ匂いがする」

「?」

注視し抑える距離にいればトガの言葉は聞かされることになる。ましてや私と同じだなんて言葉、未だヒーローの卵である麗日が聞き捨てることもできなかつた。

「好きな人がいますよね」

「!?!」

「そしてその人みたくなりたいてって思ってますよね。分かるんです、乙女だもん」



(何……この人……)

「好きな人と同じになりたいよね当然だよ。同じもの身につけちゃったりしちゃうよね。でもだんだん満足できなくなっちゃうよね、その人そのものになりたくなくなっちゃうよね、しようがないよね」

トガの興奮したような笑み、麗日は緑谷という思い当たることを脳裏に浮かべる。そんな恋バナをしているところに――

(うんうん、トガちゃん分かってるねえ……乙女の気持ち)

――透明化した成生が来ていた。プロヒーローを沈めてすぐにこちらに転送して飛んできたのだ。何せムーンフィッシュとマスタードが倒れた以上、一番戦力がやってくる可能性が高いのがトガのところなのだ。即座に護衛するならここしかなかった。

「あなたの好みはどんな人？私はボロボロで血の香りがする人大好きです。だから最後はいつも切り刻むの。ねえお茶子ちゃん楽しいねえ」

(私は普通の人が好きだよ。普通で、ヴィランだろうがヒーローだろうが信念は曲げない直球でぶつかる子かなあ？あ、でも一回折れたとかで起き上がった子とかも好きかなあ)

成生が望むタイプは「普通」を押し付けけない、芯のある男だ。個性も普通がいい。どうせ成生の力があれば関係ないのだ。

そんな男性と、バカツプル極まりない恋愛がしたいというのが成生の理想だった。

——もつとも、「Ms. ダークライに向けて死なずに曲げない信念を見せる、普通の個性の男」というのがどれほど困難なことなのかは……推して知るべし。

「恋バナ楽しいねえ！」

手首から先だけは自由だったトガが麗日の太ももに注射器を突き刺し、血を吸い取り始める。麗日もプロではないのだ、完全に関節を極めるような真似はできていなかった。

「お茶子ちゃん!？」

「チウ、チウ」

麗日は両手を抑え込みに使っているが、トガの五体を抑え込んでいる訳ではない。梅雨が解放されなければこのまま血を取られるだけだった。

何とかしようとして麗日が体勢を変えようとした瞬間、全く別の方向から声がかけられた。

「麗日!？」

轟、緑谷、障子の三人が森を抜けて出てきた。

あ、これはマズいかも。トガちゃん抜け出せなかったら私が全力で麗日を蹴っ飛ばそう。

「障子ちゃん皆……！」

梅雨の声に麗日の力が弱まる。その隙を突いてトガは拘束から脱出した。

「あつしまつ……！」

あーよかった。生徒全員相手にするのは簡単だけど、かつちゃんとかいうのがもしかしたら爆豪とは別で、こいつらの中に攫う対象がいるかもしれないのだ。

実は私にも弱点はある。殺傷能力が高過ぎることと拘束能力が低いことだ。レーザーもレーザーソードも、空気土流も殺意極まりない攻撃性能をしている。使えば死ぬ可能性が非常に高く「捕まえる」ことには全く向いていないのだ。

じゃあ身体能力で拘束するしかないが、身体能力の増強で超再生に合う身体はまだまだ先の話だ。今の増強系を捕まえるのは不可能に近い。

結果、虎やマンダレイにやったように空気土流で不意を突き、超瞬発力と光速反射を使った体術で圧倒するしかないのだ。まあそれだけでも十分過ぎるのだが。

「人増えたので殺されるのは嫌だから。バイバイ」

一瞬だけ止まった時の表情が「いいもの見た」って風に見えたのは気のせいかな？

「待っ……！」

「危ないわ、どんな個性を持っているかも分からないわ！」

梅雨ちゃんだっけ、蛙の個性に警戒する能力も高い。成生のままなら仲良くなれただ

ろうけど……ヴィランだし無理か。

まあいい、これでトガちゃんも回避へ入った。あとは攫う対象を捕まえるってところだけど、Mr. コンプレスが実行犯だと思うんだよね。ダントツで攫うのに適してる個性だし。

「何だ今の女……」

「<sup>ヴィラン</sup>敵よ。クレイジーよ」

「麗日さん怪我を……!!」

「大丈夫、全然歩けるし……っていうかデクくんの方が……!」

「立ち止まってる場合か、早く行こう」

合わせて全員で五人かな? 一応確認のために透明色知覚発光で周囲認識……あ、Mr. コンプレスがいるね。もしかして攫い終わった感じかな?

「とりあえず無事でよかった……そうだ、一緒に来て! 僕ら今かつちちゃんの護衛をしつつ施設に向かってるんだ」

「……………」

「爆豪ちゃんを護衛?」

「やっぱりあいつかよ」

……待てよ? 攫った後に色々できる? ああ、そう考えたらだいたいぶやる気出てきた。

ちやうど指先発光で対人用の新技作ったところだったから実験体になってもらおう。

「というか、爆豪いないのに何で護衛だとか言ってるの緑谷？」

「その爆豪ちゃんはどこにいるの？」

（爆豪はどこ？）

「え？」

……あ、Mr. コンプレスがやったか。だったらあとはMr. コンプレスの護衛と合流だけだな。

「何言ってるんだ、かつちゃんなら後ろに……」

緑谷達が後ろを振り返るも、そこには誰もいない。まるで手品でも起きたかのような現象に、一瞬緑谷の目の前が真っ暗になっていた。

それを現実に取り戻したのは——ヴィラン皮肉にも、敵の声だった。

「彼なら俺のマジックで貰っちゃったよ」

木の枝の上に立つ仮面をしたマジシャン、Mr. コンプレスがそこにいた。

「やっぴりか。認識してたけど実際に口にされると「よくやった！」と言いたくなる。

今は透明化してるから言わないけど。

「（こいつあヒーローそちらにいるべき人材じゃあねえ。もつと輝ける舞台へ俺が連れていく

よ」

「!?返せっ!!」

背中に抱えられ動けない緑谷は、叫ぶことしかできなかった。

■ ■ ■

「返せ? 妙な話だぜ。爆豪くんは誰のモノでもねえ。彼は彼自身のモノだぞ!! エゴイス トめ!!」

「返せよ!!」

緑谷は思い切り叫び、成生はMr. コンプレスの話に聞き入る。

うーん、確かにヒーローは「返せ」って叫ぶことが多いよね。それが本当に本人のためになるのかは別の話にしておきながらだ。

例えば虐待されてる子供が迷子になったとしよう。それを育てたいヴィランが攫うのをヒーローが止めて、虐待してる親の元へ返す。

もしその後子供が虐待で死んだら、それは子どものためと言えるのだろうか?

「意外と話合いそうだね」

あ、思わず声に出ちゃった。まあいいか。透明化は解けてないし、どうせ気づかれな

「っ!?!誰だ!?!新手か!?!」

——いなんてことは無かった。障子が気づき、周囲の警戒を更に高める。

「どけー！」

さらに私が声を出した方向とMr. コンプレスの方へと轟が凍結させるべく氷を放つ。

Mr. コンプレスは軽快にトンと木の上を蹴り上がり、私は空気地面化により階段状になつた空へと駆け上がる。

「我々はただ凝り固まってしまった価値観に対し「それだけじゃないよ」と道を示したいだけだ。今の子らは価値観を選ばされている」

枝の上に着地し、説明するようにMr. コンプレスは5人に話しかける。余裕のある様子であり、場数をくぐっているヴィランらしい雰囲気をしていた。

障子が背後を確認し、いなくなったのが爆豪だけではない事実気づく。

「……………！爆豪だけじゃない……………常闇もないぞー！」

「わざわざ話し掛けてくるたあ……………舐めてんな」

轟が目の前前のヴィランが問答無用でないことから、会話で隙を伺おうと探る。油断を誘うのがヴィランだというのに、前回から学べてるのが怪しいところだ。

それに……………舐めてる？当然だろう、私が加わったことで戦力差が違い過ぎることになつたのだから。

「元々エンターテイナーでね、悪い癖さ。それに舐めもするさ……………彼女がこっちに來た

ようだからね。暇なのかい?」

「私の役目はだいたい終わったかな。あと二つくらい?」

どうせだしと、透明化を解除して「普通」の少女、依光成生の姿を現す。制服もUSJの時と変わっておらず、明らかに前回の続きと言った様子だった。

「お前は! 依光成生!」

自己紹介したんだっけ? 名前も覚えててくれたのは嬉しい。強大なヴィランでもない限り簡単には覚えてくれないから。……あ、雄英の先生に手傷負わせたなら十分強力なヴィランか。

「久しぶりだね緑谷に轟。爆豪はこっちだし……切島くんは合宿所かな?」

気にするのはあのととき会話した4人だが、ここにいて無事なのは轟だけか。失望させてくれるなあ、ヒーローの卵。

「何でここに!?!」

「いけないわ。彼女はプロでも一人二人じゃ勝てるか分からないって相澤先生が言ったわ」

注意を促した、蛙吹梅雨が思い出すのはUSJが襲撃された次の授業の時のことだった。



□□□

「お前ら、依光成生といった少女を見たか？ 帰り道や日常であいつを見つけても手出し厳禁だ」

「ざけんな！」

「何で!？」

相澤先生の注意に爆豪ちゃんがブチギレて、緑谷ちゃんが反射的に質問をぶつけたの。

内容が内容なだけに、手を上げずに質問するのも止む無しと相澤先生は答えたわ。

「お前らも見たとと思うが、油断なんぞしてないスナイプと13号に負傷を負わせた。それも一瞬でだ。プロ数人分くらい強さを持つてるヴィランだと思え」

「はい！ 何故日常で見かけることがあるのですか!？」

これまた反射的に飯田ちゃんが質問をぶつけたわ。手を上げながら言っても意味ないでしょと言いたかったけれど、相澤先生は合理的じゃないと思ったのか、一気に話したわ。

「……他所の高校に実際に在籍しているからだ。そしてUSJに現れたのは別人の可能性がある、話はこれまでだ」

相澤先生はこれ以上話すことはないかと区切り、そのまま終わらせたの。分かったの

は、「依光成生という強大なヴィランが放置されてるけど手は出すな。プロですら倒せるクラスのヴィランだから戦うなら逃げろ」ということだけ。

□□□

そんな彼女が、目の前にいる。クスリと、「普通」の少女の笑みを浮かべて。そこだけを見れば、私と友達になれそうと思えるような少女が。

「へえー…イレイザーヘッドは流石だね。私が見せた情報からの力量予測も最大評価、嬉しいねえ。あと理由?……気まぐれ、かな」

「なっ」

余りにもヴィランらしい理由に緑谷が衝撃を受ける。容姿や雰囲気と実力・思考が余りにもかけ離れ過ぎており、まるで身体だけ別人が乗っ取ったかのようにすら思えた。

「ねえ、何で常闇も?」

「ムーンフィッシュを一方的に蹂躪する暴力性を見せてくれてね。彼も良いって判断したのさ」

談笑するような様子に怒号が上がる。声の主は——緑谷。

「この野郎!! 貰うなよ!!」

「緑谷落ち着け」

障子が宥めるも効果はない。何せ緑谷からすれば最大のライバルにして友である爆

豪<sup>ザイラン</sup>が敵に奪われているのだ。元々熱くなりやすい性格ということもあり、収まる気配は微塵もない。

「麗曰こいつ頼む」

「え、あ、うん！」

轟が背負っていた生徒を麗日に渡し、指向性広域氷結を放ってきた。Mr. コンプレスは軽業師のような動きで避け、私は自身に相對距離転送で100m程上空へ飛ぶ。

「あれ、どこに……まあいい。悪いね俺ア逃げ足と欺くことだけが取り柄ですよ！ヒーロー候補生となんて戦ってたまるか」

個性で氷を圧縮しビー玉ほどの小ささの玉にしながらMr. コンプレスは氷結を避け続ける。そして無線を起動させた。

「開闢行動隊！目標回収達成だ！短い間だったがこれで幕引き!! 予定通りこの通信後5分以内に〃回収地点〃へ向かえ！」

「追撃が怖かったら私を呼んでね！」

Mr. コンプレスの横に転送で現れ、無線に追加するように言葉に出す成生。突然のことにもMr. コンプレスもギョツと驚いていた。

「びつくりさせないでくれよ」

「つこ」

「幕引き……だと」

Mr. コンプレスと共に木々の上へと上がる。成生が着地したのは足場が明らかに空の上だが、空気地面化がある成生に足場の心配はいらない。

「ダメだ……!!」

「させねえ!!絶対逃がすな!!」

ヒーローの卵たちの声を嘲笑うかのように二人は軽快に駆けていく。最速である緑谷は動けず、それ以外の面子は速度増強系はいない。単純な速度で追いつくことはできなかった。

「ちくしょう速え!あの仮面と依光成生……!」

「飯田くんいれば……!」

今いない者に頼ることはできない。だからこそ今いる面子で最善を行う——緑谷が策を思いつき、話始める。

「意外と大したことないなヒーロー科」

「油断大敵だよ、Mr. コンプレス。ヒーローはピンチの時ほど怖い」

「肝に銘じておくれよ」

軽い会話をし、移動に集中する。何せ今使用しているのは『空気地面化』で空を蹴り、『人形操作』『思考加速』でMr. コンプレスに合わせた速度を、『超再生』で人形操作の

負荷を解決というものだ。

超再生以外は既に習熟が終わったものであり自由自在だが、超再生のせいでコンマ00数秒ほど遅くなっていた。光速すら認識できる成生からすれば負荷がでかいと言えるだろう。

そしてMr. コンプレスの速度が落ち、成生も護衛はここで終わりで問題ないと判断し茶毘の隣へ転送で移動する。

が、合流地点のほぼ直上というところで、Mr. コンプレスの背後に勢いよく何かがあつかり地面へと落とされた。

「!?!」

ヴイラン連合の合流地点、そこにMr. コンプレスを追ってきた生徒三人……緑谷、轟、障子の姿があつた。

## 林間合宿襲撃～決着～

「知ってるぜこのガキ共！」「誰だ!?!」

トウワイスが誰が来たのかと賑やかし、茶毘は即座に左手を三人へと向ける。茶毘の個性は炎熱系でもシンプルなもの、ヒーローで言うエンデヴァーのような「炎」だ。両手や、時としては全身から炎を放出することができる。

「Mr.、避けろ」

「了解!」  
ラジャ

不意を突く三人の強襲に即座に連携をとる茶毘とMr. コンプレス。経験豊富だからこそその連携だ。成生は緑谷達の退路を予想し、音も立てずに退路を塞ぐ方へと移動を始める。

「バツカ「冷たっ!」」

炎を三人に向けて放つ茶毘。Mr. コンプレスは自らと着地した地面をえぐるように圧縮させ玉にし、えぐった地面に落ちることで回避する。着地の衝撃か、三人は一、二歩動く程度が回避の限界だった。

「うあ、!!」

3人が被弾……いや、轟が避けた。同じ炎使いだから炎の軌道が読めたのだろう。だがギリギリだったようだ。

「ぎゃあ!!!」

緑谷と障子の二人は腕を焼かれていた。あれだ、この夜は腕を使うのは止めた方がいいと言われるくらいだ。

「死柄木の殺せリストにあつた顔だ。そこの地味ボロ君とおまえ!」なかつたけどな!」

トウワイスが轟に、トガが緑谷へと対峙する。怪我の一つもない上に緊張感といった疲労さえないヴィラン側と、常に緊張感を持っていたヒーローでは疲労の差が目に見えていた。

「ちっ!」

「熱っっ!」

近づいていたトウワイスを轟が氷結させようとするも、狙いが甘かった上にトウワイスも咄嗟に回避に徹したことで難を逃れた。

万全の轟なら確実に氷結させられたはずだが、爆豪が奪われている事実と疲労が、個性含めた動き全てを荒くさせていた。

「トガです出久くん!」

トガと緑谷の戦闘では、緑谷が動けない程の怪我だ。見えている注射器投げのような攻撃はまだしも、近距離格闘では勝ち目は無い。

「さっき思ったんですけど、もっと血出てた方がもっとカッコイイよ出久くん！」

「はあ!!」

一瞬で緑谷を押し倒し注射器を振り下ろすトガ。だがここにいるのは緑谷と轟だけではない。

「させん！」

「わっ！」

障子が間に割り込み振り払うように腕を振るう。6本腕を警戒し、トガも振るわれた腕をそのまま受け止め後ずさる。

そんな二人の足止めを背後に、Mr. コンプレスが圧縮を解いて立ち上がる。

「いってて……とんで追ってくるとは！発想がトんでる」

「爆豪は？」

「もちろん」

ゴソゴソと右ポケットに入っているはずの玉を探す。が、どこにも見つかる様子が無かった。

「……………？」



「二人とも！逃げるぞ！」

疑問符を浮かべるMr. コンプレスを見た障子が大きく声を上げる。

何も解決できてないのに何故逃げるのか、ヴィラン側には理解できていない——成生とMr. コンプレスを除いて。

「今の行為ではつきりした……！個性は分らんがさつきお前が散々見せびらかした——……右ポケットに入っていたこれが、常闇・爆豪だな、エンターテイナー」

障子が腕の一つに持っていたのはMr. コンプレスが個性を使って圧縮した玉が二つ。

玉が二つあり、攫う対象が二人。取り返したと二人以外が思考するのも必然だった。

「障子くん！」

「——ホホウ！あの短時間でよく……！さすが6本腕!!まさぐり上手め！」

「っし、でかした!!」

障子のファインプレーに緑谷と轟が歓喜の声を上げる。

確かに取り返したことは喜ばしいことだろう、ヒーローの卵として面目躍如といったものだろう。だが彼らには二つ、頭の中からすっぽ抜けることがある。

「アホが」

「いや待て」

茶毘が取り返そうと動くが、Mr. コンプレスが腕を下ろすようにストップをかける。Mr. コンプレスも気づいたのだろう。

——問題の一つ、ここから逃げられるのか、ということに。

三人が逃げる右側には脳無、真正面には黒霧、左には成生がいた。全員が強大なヴィランであり、プロヒーローでさえ苦戦は免れない者達。

肉弾戦も範囲攻撃も対応でき、速度による逃走さえさせないヴィランによつて囲まれていた。

「ワープの……」

「依光成生まで……」

トウワイスとトガの目の前、そして茶毘の背後にそれぞれ退避用のワープゲートを開する黒霧。逃げる準備も万端なヴィラン連合だった。

「合図から5分経ちました。行きますよ茶毘」

「私は放つておいていいよ。いつでも帰れるし」

脳無を自らのワープゲートに入れながら黒霧は口に出し、成生は自らの個性から無視しろと指示を出す。

ヴィラン連合はその言葉に即座に行動を開始する。

「トウツ！」

「ごめんね出久くんまたね」

トウワイストとトガが一早くワープゲートをくぐっていく。だが茶毘はワープゲートをくぐる気配が無かった。

それも当然、茶毘には爆豪が奪われているとしか見えていなかったのだから。

「さてまだ目標が……」

「ああ……アレはどうやら走り出す程嬉しかったみたいなんでプレゼントしよう。悪い癖だよ、マジックの基本だね。モノを見せびらかす時つてのは——」

成生だけはMr. コンプレスの護衛をしていたから分かった。轟の氷結、Mr. コンプレスが避けた際に氷を圧縮して回避していた。自らは玉に入らずに。

ではその玉はどこにあるのか？その答えが——目の前の光景だ。

「——見<sup>ト</sup>せ<sup>リッ</sup>たくないモノ<sup>ク</sup>がある時だぜ？」

Mr. コンプレスが仮面を外し、舌の先に玉が二つ乗せているのを見せつける。エンターテイナーとはまさにこのことだった。

これこそが問題のもう一つ。その玉は本当に爆豪と常闇が入っているのか？ということだった。

「ぬっ!？」

障子が持っていた玉が圧縮から解放され、人程度の大きさの氷が突如として現れる。

爆豪ではない、玉は偽物だった。

「氷結攻撃の際に「ダミー」を用意し、右ポケットに入れておいた。右手に持ってたモンが右ポケットに入ってたんの発見したら、そりゃ嬉しくて走り出すさ」

三人は足を再びこちらへ向けるも、既に茶毘とMr. コンプレスはワープゲートをくぐりかけていた。こうなれば、高速で動く何かでなければ攻撃すら届かない。

「くっそ!!!」

「そんじゃーお後がよろしいようで……」

——その攻撃は、光速だった。

Mr. コンプレスの仮面を砕くように放たれた、草陰から放たれたレーザー。

「!?」

レーザーにしては収束させた痕跡が無い……個性でレーザーが使えるのか。なんか私とダブってるし……うん。

許せない

よし、どうせ元より話す予定があつた人物だ。痛い目見させておこう。

成生の思考を他所に三人が駆け出す。Mr. コンプレスから弾き落とされた玉を拾

えば勝ちなのだ。ここが勝敗の別れどころだ。

——けれど悲しいかな。思考加速ができる私には一瞬が一瞬じゃない。こういった状況に、致命的なまでに相性が良い。

空気地面化＋土流で、轟と障子の届きかけた手から玉を弾き、茶毘とM r. コンプレスの元へ渡す。

これで、振り出した。

「哀しいなあ……轟焦凍」

茶毘が爆豪の入った玉をパシリと受け取り、M r. コンプレスは常闇の入った玉を手取る。

「確認だ、解除しろ」

「つだよ今のレーザー……。俺のショウが台無しだ！が、ありがとよ！」

圧縮が解除され二人が玉の状態から解除される。ワープゲートに入り込んだ状態で解除されればいくら解放されたとして逃げる術はない。

「問題、なし」

茶毘の声が無情に響く。爆豪も常闇も手を伸ばすことすらできなかった。

「かっちゃん！」

「来んな、デク」

ワープゲートが閉じる。攫うと告げられた一人を宣言通りに攫われて。雄英というヒーロー社会の看板に、大きな傷跡がつけられたのが確実になった瞬間だった。

しかしその場にはまだ一人——途方もなく強大なヴィランが残っていた。怒りを秘めた瞳をした、依光成生というヴィランが。



「あ……—っあああ!!!」

緑谷が痛みで倒れ込み気絶するのを確認し、一つ大きく溜息を吐く。

「はあー……あーあ、本当に置いてかれちゃった」

「依光成生！爆豪を奪っておきながらまだ何かやるつもりなのか!」

障子が会話で止めようと成生へ声を上げる。近くでは木々が燃えているというのに何故か突如として暗くなったからか、その瞳がどんな色をしているのか伺うこともできない。

暗黒色発光。前髪から放たれたそれは明るく照らす炎や光りだろうが暗闇に引きず

り落とす。丁度今の……成生の髪色のように。

「うん。ああ、安心していいよ。誰かを攫うなんてつもりはないから。ただ今は——」

白い髪が黒く染められていく。障子や青山、轟からは瞳の色が見えなくなっていたため気づけなかったが、深淵染みた色に変わりつつあった。

「——八つ当たりしたいだけだから」

「がっ!？」

転送で一瞬で移動、さらに超瞬発力で加速した全力で蹴り込む——青山の鳩尾へ。吹き飛び、受け身も取れずに背中から木にぶつかる。

ただの一撃で、カヒユツという……肺がやられたような声しか青山の口からは出てこなくなっていた。

成生の怒りは怒髪衝天、ブチギレル……半歩手前といったレベルだった。

面白そうだと突っ込んだら目的も教えられずに動かされて、それも目標は殺そうと決めてたやつで殺すなど言われているようなもので、さらには私が数年かけて会得したレーザーを多分ちよつとした犠牲だけで何の苦もなく使えるようになった人がいる。

レーザーは私のヴィラン名の元にもなった個性から来ているのだ。嘲笑うかのような個性……激怒には十分過ぎるものだった。

フラストレーションが、我慢が、限界だった。誰かにぶつけたくて仕方なかったのだ。

「待てー！」

氷結が放たれるも指先発光から起きる熱量で溶かす。さらに空気地面化＋土流で轟を横から殴りつけ態勢を崩し、視界に収める。

そこから超瞬発力＋人形操作の火事場の馬鹿力で一瞬で目の前に。轟が迎撃に手を伸ばしたが――遅い。

「邪魔」

超瞬発力は使わずに、ただ全力で胴体を殴りつける。角度を調整し、木にぶつかる方向へそのまま吹き飛ばす。木に激突した瞬間、空気地面化でさらに頭を真正面から殴りつけ、脳震盪を強制的に引き起こす。

「轟ー！」

障子が轟を助けに来るも、成生の動きは既に轟を目標にしていなかった。狙いは、青山となっていた。

「随分な真似をしてくれたね？」

木を背中に座り込む青山はカヒュツという声と共にブルブルと震えるだけだ。だが腹に巻かれているベルトが、成生に狙いを定めていた。

「あ、あ、っ!!!」

人差し指から常時レーザーを放ち、ベルトの発射口ごと腹へ×印を焼きつける。怒り



のままに任せていても、身体まで斬り裂かないように調整されており、それだけで個性の練度がうかがい知れるものだった。

「腹から出るんだろ？それなら……腹の肉を削いでやろうか？」

「っ!？」

腹を下すことも覚悟し、無理やりにネビルレーザーを放つ青山。だが、光速を認識できると成生には発射タイミングさえ分かれば避けることなど容易い。

思考加速し観察していたら腹の皮膚辺りで収束をしていたのだ、タイミングを測るのも簡単だった。

ただでさえ動けなくなるほどの傷を負い、切り札の個性を避けられた青山に、成生は更なる絶望を口にした。

「——なあ、内通者？」

成生と青山の二人だけに聞こえる声で成生は声をかける。青山の瞳はそれだけで焦点が合わなくなる程に震えていた。

「あ……あ……」

「私を舐めるなよ。オールフォーワンから友達がいるって聞いてるんだ、あとは昨日今日の動きと行動していた爆豪たちの位置から予測するのは容易い」

時折知覚発光を行っていたのはこれも理由の一つだ。そもそも今回の襲撃が成立す

るのは「三日目に肝試しがあり、爆豪が襲える位置にいる」と分かっている必要がある。それができるなら内通者がこの合宿所のどこかにいるということだ。

プロヒーローはまずない。あんな猫4人は個性からしてかなり私生活を合わせる必要がある。そこにオールフオーワンの介入は不自然だし、何より個性からしてもつといいタイミングがあつたはずだ。イレイザーヘッドとブラドキングも余りにも雄英に食い込み過ぎていて。あれで内通者だとしたらもつといいタイミングでやるだろう。

となれば生徒だ。まず肝試し参加組が確定。そして爆豪が森の中へ行つたことを知っている人だから爆豪よりも後発組だ。さらに肝試し一周に時間も15分程度とそんなにかからないことからかなり近い組だ。3組以内と候補は絞れる。

B組の可能性も否定できないが……オールフオーワンのことだ。緑谷と同じ組にいるの方がいいな、くらいで仕込んでいてもおかしくない。というかUSJの手引きもしてたつて話だから確実にA組だ。

つまり耳郎、葉隠、八百万、青山、蛙吹、麗日の6人の誰かになる。で、何の抵抗もなく倒れた者と、徹底的に抵抗した者はスルーしていい。襲つてくると分かっているなら、さっさと逃げるか安全圏に潜伏するかのと二択なのだから。

そうなるよ一人だけだ。

「お前が何をどう勘違いしたのかは知らんが……ヴィランをナメるなよ?」

指先発光。その中でも新技を使う。爆豪に使う予定だった技だ。

新技——催眠光。電子ドラッグなんてものがあるんだ。再現できないかなあと思考錯誤し……先日動物実験に成功した。苛立たせたやつに使ってあげようと楽しみにしていたのだが、こんなに早く機会が訪れるとは思わなかった。

「人に試すのは初めてだが……実験台になってくれ。大丈夫だ、爆豪も同じ目に合わせでやる。一人じゃないなら安心だろう？」

「っ!!」

「青山っ!」

声も上げられない青山に唯一無事な障子が助けに走る。

が、それを許すほどの場にいるヴィランは優しくなかった。

「動くなっ!」

「っ!」

障子の頬を焼き、背後の木を貫く光が障子の足を止めた。成生の後ろ髪から放たれたそれは、障子からすればいつ撃たれてもおかしくないと認識するには十分だった。

「障子とか言ったな? 動いたら殺す」

「……レ……ザ……?」

震える言葉だが、せめてもの抵抗と正体を予測していた。返答は、口角を上げるだけ

だった。

「頭だけ打ち抜くなんて簡単なんだ。これが終わったら帰るから安心してくれ」  
「——っ！」

障子は動けない。レーザーだと成生の笑みが口に行っているようなものであり、動けば死ぬのだ。いくらヒーローの卵たる精神を持っている障子と言えど、無駄死にだけは避けたかった。

「目を開けてこつちを向け」

成生の言葉に、最期の抵抗とばかりに青山は目を瞑る。それが悪手だと分かっているも、目の前の悪夢から目を逸らさずにはいられなかった。

「……そうか」

ドゴォ!!!

その様子に、成生は理解したと一言だけ告げ……顔面に蹴りを叩き込んだ。確実に気絶するように超瞬発力と人形操作で威力を調整した一撃だった。

さらに背後に木という叩きつけるものもあれば必然、強烈な脳震盪を起こすことになる。

ガクリと項垂れ、瞳から力を失くす。その青山の顎をクイツと上げ、成生の指先が当たられるように体勢を調節する。

「これで片目ずつできるな」

「青山あ!!」

余りにも悲惨が過ぎたのか、死の覚悟をした障子が突撃してきた。青山に気を取られていたためか、コンマ00数秒ほど気づくのが遅れる。

——が、問題ない。

「がっ!？」

「安心しろ、殺しはせん。だが動けなくはなつてもらおうか」

障子の背後に転送し横っ腹に回し蹴りを叩き込む。威力調整もしており、吹き飛んで土煙の中で動けなくなる程度になっていた。

呻く障子を他所にスタスタと倒れている青山へと近づく。そして——左手で強制的に片目を開かせ、右手で催眠光をねじ込む。それを、両目ともに行つた。

青山はただビクビクと身体が反応するだけだった。全身のダメージは動けないほどであり、さらに気絶していながらも拒否反応を起こしていた。それだけのことを行つていと知つていながら、成生は躊躇なく行つていた。

両目ともが終わり、青山の身体は時折ビクツと跳ね上がるような痙攣を起こす。明らかに後遺症が残つたような様子だった。

「よし、これで両目とも終わりだ。これだと催眠が強過ぎるか……まあいい、あとは爆豪

で調整しよう」

そんな周りの悲惨さに対して成生は上機嫌だった。何せ爆豪にしようと思っていた技の試し打ちができたのだ。威力調整もできない技など成生自身使いたくなかったこともあり、収穫は十分だとホクホク顔だった。

「いつか教えてくれると嬉しいね、据え付けられた悪夢の光景を」

だれも成生の顔を見ることはできない。白い髪へと変わった深淵色の瞳をしたヴィランは、目の前の惨状を見てそう告げる。そしてヴィランらしく——笑った。

「フフフフフ……ハハハハハ……アツハハハハハ!!」

森全体にも響くような高笑い。さらには邪悪な笑みを浮かべ、強大なヴィランはこの地を去った。

残酷な結果だけをこの地に残して。

## 囚われの爆豪とトラウマ

成生が転送でバーに帰還したところ、爆豪と常闇が両手を塞がれ椅子に縛り付けられていた。

常闇にはライトを当てて個性を封じるまでしており、拘束を多少なりとも外さねば逃げるなど不可能な状態だった。

弔は満足そうな顔をしており、茶毘達実行犯も自らの能力を弔に示せたことから上機嫌なのか目に見えた。

水を差すような真似になってしまいが、こちらの事情が終わった後ならずと渡すので少しだけ借りるとしよう

「弔、爆豪借りていい？大丈夫、少しだけだから」

「……俺のコマだ」

「大丈夫、少しだけ話すだけだから」

「……10分だけだ」

「ありがとう」

椅子ごとバーの裏へと持っていく。爆豪が「男女」だとか口にしたけど……この後全

部利子つけて返してあげることにしよう。



「やあ爆豪、久しぶりだね」

「てめえはモブッ!?!」

椅子を下ろして灯りを付けたら、ようやく誰が担いできたのか認識したらしい。が、余りにも酷い呼び方だったので左頬に弱くペチンとビンタしてあげた。

「普通」の少女の力程度で。超瞬発力や人形操作なんて使わない、舐め腐っているようなビンタだった。

「私さあ……他人をモブだのカスだの呼ぶ人間が死ぬほど嫌いなんだ。思わず殺したくなるくらいにね」

「それがどうしっ!!」

怒った爆豪を今度は右頬にバシッツと音が鳴るくらいに強いビンタを放つ。爆豪はまるで何が起きたのか理解できてないような表情をしていた。

「モブだの言ってさ、他人の人生くだらねえものだって言ってるようなものじゃん。他



人の人生の主人公奪ってるみたいじゃない。ヴィランだよねそれ……ねえ、ヒーロー？」

クスリと微笑みながら「普通」の少女は傷跡を抉るように言葉に出す。

爆豪は、思い当たるものが一人いた。……緑谷という、ナードだのと言って馬鹿にしていた人が。

今でこそ想いは違うが、無個性だからって馬鹿にしてきた、いじめ続けた過去がまさに言葉通りのものだった。緑谷にヒーローになんてなりたいなら死ねばいいとさえ言っていたのだ。

他人の人生を奪う、お前の人生くだらねえと言っている、言われた通りの……ヴィランと呼ばれても文句は言えないものだ。

「っ！」

だが今は違う、そう口に出したいのに……何故か爆豪は口に出来なかつた。

それは成生が「普通」の少女だったから。ヴィランに「お前ヴィランみたいなことやってるしヴィランだな」なんて言われても「お前が言うな」と言うだけだ。

だが成生は爆豪から見ても「普通」の少女だった。同級生に「あなた性格も性根もヴィラン側でしょ？、本当にヒーローになりたいの？諦めたら？」なんて言われたようなも

のなのだ。

それで爆豪は奮起するタイプだが……言い換えると何も思わないようなことは無いのだ。

爆豪はオールマイトが勝つところに憧れた。だがその言葉は、自らがヴィランのような勝ち方をするかもしれないという可能性を少しだけでも、考えさせてしまったのだ。た。

そのイメージが余りにも鮮明で綺麗で、容易に思い描けてしまった事実が、爆豪には恐ろしくて仕方が無かった。

「弔のコマだから殺しはしないよ。ただ一つ……刻み込んであげるだけ」

「はっ……てめえの力で何をするってんだ」

馬鹿にするように笑う爆豪に、ニコリと笑みを浮かべる成生。指を爆豪の両目に、突き刺すように向ける。

目をつぶされる、爆豪は即座にそう判断した。実際には——ある意味それよりも非道い真似をするのだが。

「こんなこと、かな」

「なっ!?!」

指先が一瞬爆豪の頭を揺らすように揺らめく光を放った。青山に放ったものと特性自体は同じだ。違うのは……威力や催眠内容を調整できたことだった。

「うん、一瞬で目を閉じたのは流石。これ、ちよつと強くしたら一瞬だけで十分なレベルだったんだ」

「っ!？」

青山が拒否反応を起こしたことで人体にどの程度のレベルで十分なのかを成生は理解した。だからこそ、自身が行いたいレベルの威力に調整できていたのだ。

爆豪の心を、へし折るための催眠の威力に。

「ねえ、見えてる？私が倒れたオールマイトの上に立ってる姿」

「見えるかっよ!!!」

爆豪は頭を振り払い成生へと睨みつける。だがその行動自体が、成生の言葉を肯定するものだった。余りにも分かりやすい仕草に、ブツと噴き出し成生は笑う。

「アハハ！分かりやすい！認めてるようなものだよそれ」

成生が嘲笑い、爆豪が舌打ちを一つする。少しだけ気分を良くした成生はつつい口が軽くなってしまっていた。

「でも教えてあげる、いずれそれは現実になるよ。あと……その光景、よく見ることになるから受け入れると気が楽になるよ」

「はっ！馬鹿が！オールマイトが負ける訳ねえだろ！受け入れるなんざするか馬あー鹿!!!」

「……知らないの？オールマイトが弱っているってこと」

「は!?!」

爆豪からすれば寝耳に水。一般市民どころかヒーローでさえ知っているのは極々握りの情報を何でもないように口にする。

流石に爆豪も興味を引かれていた。

「知らないんだね、可哀そうに。憧れた象徴がもう墮ちる寸前だっけ言うのに、なーんにも教えられてないなんて」

「あり得ねえな!」

何故だか自信満々に言い切る爆豪に、哀れむような視線を成生は向けた。何も理解できていない子を見る目……だけではない。

爆豪が一番秘密に近い場所にいるにも関わらず、文字通り何にも教えられていないし知らないことを分かっていたからだ。

「そりゃ隠されてるから当然。でも本当に残念……オールマイトが後継者に選んだ緑谷

の友達なんですよ、あなた」

「……待て、今なんつった」

「ん？オールマイトの後継者である緑谷つてところかな？」

爆豪と緑谷が雄英の入学試験の時から一緒だと成生は知っている。一緒に受けるくらいには繋がりがあるということだ。

だがUSJでカスだのと言っていた。つまり爆豪は緑谷をモブだのと言っている被害者……よりも酷い影響があつた関係の可能性が高い。虐めの被害者と加害者あたりと成生は予想した。

「そうだよ、私は予想しかできないけど……あなたが虐めてきたであろう緑谷が、あなたの憧れであるオールマイトに一番認められてるんだよ」

「嘘だな！」

「まあそう思うのも無理はないかな。何せオールマイトはパツと見、弱体化してるように見えないし」

爆豪がオールマイトに憧れているのはなんとなくだけぞ察した。そんな憧れが自身の最も認めてほしくないやつを真っ先に認めたなんて、絶対に認められないことだろう。

自らを優秀と認識していればしているほど、猶更認められない。なれば優秀という自

負、プライドという鎖は自身の心に食い込んでいくだけだ。食い込んだ鎖が痛いと呼ぶことも、プライドが許さない。

「普通」の私からすれば、そんなただの馬鹿だ。自らが優秀だなんていうプライドはゴミ未満でしょ。犬の餌にも、燃やせるゴミにもなりやしない。

……もう7分くらいは経ったかな。じゃあ最後は言葉責めして終わることにしよう。「じゃあ一つだけ、これは確実に言える。爆豪、あなたの性格じゃヒーローには向いてない。」

「それを決めんのは俺だ！」

呆れるような表情を浮かべる成生に、何言ってるんだこいつと嘲る顔をした爆豪。成生が告げた言葉を正しく認識できていないからの顔だった。

「じゃあ一つ例を挙げよう。鉄骨に挟まれ動けない人、助けたのがあなただとする。何か声をかけるかな？」

「挟まってんじゃねーよモブが！」

「だろうね。私はそんなヒーローに助けられたくない。」

「っ！」

ド直球にお前みたいいやつに助けられたくないと口にする成生。流星にこの言葉には爆豪も堪えるものがあつたようだった。

「今の私の感性は一般人とそこまで変わらない。そんな私から言うのは、「あなたみたいなヒーローなんて怖くて頼りたくない、近寄りたくない……助けられたくない。助けられるなら死んだ方がマシ」」

命を助けてとヒーローを求めるものが、ヒーローが現れたから命を諦める。そんなヒーローは絶対にヒーローではない。

一般人がそう思うということは、ヒーローになりたいという爆豪には余りにも致命的過ぎた。

ギリツと歯ぎしりを一つし、爆豪は叫ぶ。

「だからどうしたってんだー」

「あなたが動けば自殺する善良な市民がいるとしたら、それは本当にヒーローなの？」  
不幸にも、爆豪は頭が良かった。ヒーローになった自分をイメージする程度、簡単なことだった。

故にイメージできてしまった。助けた人が感謝も告げずに怯えて逃げ出す光景を、ヴィランを倒して市民に顔を向けた時に、市民の顔が恐怖に染まる光景を。ヒーロー達や市民から、求められない、非難の声をずっとかけられる光景を。

「少なくともオールマイトとは比べるべくもないってことくらい分かるでしょ？」

「……」

私が出来た！——そう言ってオールマイトは市民に安心を与える。爆豪がイメージできてしまった光景とは、まるで真逆だった。

「安心感の一つも得られないなんて自警団未満。ねえ分からない？あなたヒーローに向いてないよ」

クスリと笑う成生。「普通」の少女であるにもかかわらず、爆豪にはそれが恐ろしく見えてしまった。

爆豪自身は認めていないが、それはかつて見た顔と……トラウマとして夢にも見るそれと、全く同じ顔だった。



## コスチュームと実験体

爆豪をイジメた後、私はオールフオーワンのところに呼び出されていた。なんでも、私が随分と前に頼んでいたものが遂にできたとのことだった。

「これが君の髪や爪といった素材を練り込み、君の個性に合わせて作られた服だ。ヒーロー達のコスチュームみたいなものだね」

それは一着のドレスだった。真っ白な生地を使っており、Aラインのホルターネック、アシメトリー、ノースリーブタイプ……パーティードレスで使われる、煽情的にも思えるドレスだ。

さらにフィンガーレスのロンググローブ。中指の根本にかかる……手の甲で三角形を作るようなタイプだ。二の腕にかかるので止まり、そこに蝶のような柄が刻まれている。見えてもおかしくないものだ。

「はわああああ!!!」

まるで憧れを目の前にした純粹無垢な少女のような瞳で成生は受け取る。女性らしい服装であり、しかも大概が碌なものを着ていないヴィランと比べれば、女王のように見えてもおかしくないものだ。

頼んでいたモノが、成生基準の目線でも更にデザインが美しくなっているのだ、喜ばないわけがなかった。

「わしからはこれじゃ」

白いハイヒールに透明色のタイツ、オールフォーワンに合わせたものだ。そして……  
何でこれチョイス!?

「ガーター……ベルト……?」

「ヴィランらしからう?」

「いや、その……らしいけども」

医者だし、何より私の素体として渡しているのは上半身よりも下半身寄りだからってのは分かる。分かるけど!

「デリカシーって……あるよね……?」

「わしらの仲でか?」

指先発光が部屋を照らし始める。右手が白く、左手は黒く、光の層状が成生の怒りを示していた。

流石にマズいと思ったのか、オールフォーワンがフォローを入れた。

「すまないね成生。頼まれた内容と付随してM s. ダーククライらしい恰好をイメージして作ったんだ。僕の横に立つようなヴィランだ、ドクターのイメージはこれだったらし

い」

「……はあ、もういいです。それで？何で白なんですか？」

まるで花嫁だ。これじゃヴィランというよりヒロインだろう。ヒーローに奪われる  
M.S. ダーククライなんて笑うしかないぞ。

「それを持って、暗黒色発光をしてみてごらん」

「？、分かりました」

オールフォーワンに言われた通り、ドレスを左手に、右手指先から暗黒色発光を放つ。

同時に、ドレスが変わっていく。純白の花嫁のような衣装から、全てを塗り替えられ  
た悪の女王のような衣装へと。

「色が……！」

「白から黒に。白色発光で変わるかどうかは君が決められる……君が最適化した色に  
変わる素材だ」

目をキラキラと光らせてドレスを見つめる成生。素材からの変化が、まさかこんなに  
素晴らしい変化になるとは思ってもいなかった。

そしてこれらのコスチュームの機能はそれだけではない。M.S. ダーククライのため  
のコスチューム機能はもう一つあった。こつちが本命と言っている機能だ。

「それだけではないぞ。どれか着てみれば分かる」

ドレスやロンググローブを二人の目の前で着るのも嫌だなど、ハイヒールへと履き替える。ハイヒールもまた白から黒く染まり、ドレスと同じ変化を起こしていた。

そして、気づいたことが一つ。

「ハイヒールも同じ素材……。……。いや、何？この感覚……。まさか！」

まるでハイヒール自体が自分自身のような感覚、髪先や指先とも似たものとして認識できるようにも感じ取れる。

だがそれだけでM s. ダークライには十分、最適化の個性はリアルタイムで動くのだから。

「気づいたようだね」

「これ自体が私の指先だと認識できる!?!」

「正解だ！流石だよ成生！」

オールフオーワンは嬉しそうに声を上げる。サプライズの仕掛け側だ、驚かせるのに成功したのだから喜ぶのは当然だった。

オールフオーワンからすれば最強の矛たるM s. ダークライが更に強化されるのだ。彼女一人でオールマイト以外を相手どり、自身がオールマイトと戦うなんて真似も可能になるような段階に到達しつつあった。

「君がそれを着て戦えば、全身のどこからでも指先発光の個性が使えるようになる。君

にとつて最高の武器だろうか？」

「オールフオーワン!!!ありがとう!!!」

ハハハと笑うオールフオーワンに抱きつく成生。成生が制服、オールフオーワンがスーツを着ているのも相まって、一部だけをみれば父娘のようにも見えた。

デビュタントの準備が整ったのだ、ヴィランとしてデビュするのが目前だった。

もつとも、まさかこの後二日とかからずに半ば強制的にそうなるとは……この時は思ひもしていなかったが。



オールフオーワンとドクターからコスチュームを受け取り、アジトへと転送で帰る。

そこには……ギガントマキアと遊ぶ6歳くらいの子供の姿があった。

マキアと遊べているのは、子供がオールマイト並の馬鹿げた身体能力を持っているからであり——子供は、胎児脳無計画の第一号だった。

「マキア！電花<sup>でんか</sup>！帰ったよー！」

ドゴオ！という音が鳴ったと思ったら目の前に突風と共に現れる子供……電花<sup>でんか</sup>。胎児脳無計画の子供であり、見た目相応の知能しか持っていないが、身体能力はUSJでオールマイトと戦った脳無に匹敵する。

実験体でありプロトタイプだ。まずは一度作ってみようと作った個体であり、ドクターもノリノリでいろんな薬を使ったりとした実験体だ。本来なら10歳程度だったがそれさえも縮めたことで寿命も予定に比べはるかに短い、問題になどなりはしない。

そんな子供だから親は誰でもいいやと、チンピラに雄英の近くで拾わせた髪から作った子供……女子だ。多分電気系の個性持ちだとは思う。理由は簡単だ。

何せ個性が「広範囲電波」。オールフオーワンが持つ「電波」の広範囲版だ。範囲を狭めると逆に辛くなるようなので、純粋な上位互換とは言い難い。

まさかそんな丁度いい個性が当たるとは思いもしなかったから実はものすごく助かる。おそらく私の個性を持った卵子を利用しているから「欲しいなあ」と思った個性に近いものになったとは考えている。

本当はオールフオーワンから複製して「電波」を貰うつもりだった……運が良かったとも言えるだろう。

「Ms. ダークライ、また呼べ。楽しかった」

「楽しかった！マキアありがとうー！」

マキアがアジトから穴を掘り出ていく。出ていった跡は私の土流で埋めておしまいだ。

電花はまだ起動して数日だ。ただマキアと遊べるくらいには身体能力が既に高かった。体力も馬鹿げており、私が根負けしかねない程なのだ。

だからマキアに頼んで遊び相手になってもらっていた。動物的本能のが強めなマキアは、予想以上に遊び相手として適切だった。

コホンと一つ息を吐き、電花へと深淵色の瞳を向ける。黒くなった髪が、雰囲気が、ヴィランそのものだと思わせていた。

「さて、電花。あなたに頼みたいことがあります」

「なあにー？お母さん！」

オレンジ寄りの黄色い髪のアホ毛をピヨコンと立たせて反応する電花。自身の子供の頃にも似た顔立ちだが…自身には無い性格の、ちよつとアホっぽいところが可愛くも見える。

「私もうすぐヒーローと戦うことになります。その後、あなたを呼びます。そしたらあなたに個性を使つてほしいのです」

「うん！分かった！」

電花の個性は広範囲の電波をジャックできる。都心なんかで使えば、関東平野一帯くらいはジャックできることだろう。

デビュタントは派手に私自身の印象をまき散らしてナンボ。これ以上ない程に助か

る。

「じゃあじゃあ！お母さんと遊びたい！」

ホツと安心するM.S.、ダークライに、子供らしくパアツと無邪気な笑顔を向けてねだる電花。思わず「うっ」と唸るくらいには可愛く見えていた。

今の私がオールマイト並の身体能力と戦ったらどうなるか？それを知るには丁度いい。

貰ってきたコスチュームをコスチュームケースの中に仕舞い、これは大事なものだから触ってはダメと一言忠告したうえでコクリと頷く。

「ええ、構いませんよ。少しだけね？」

でも今の私は『人形操作』と『超再生』がある。例えば腕が千切れようと、足がひしやげようと問題ない。『超再生』が無かったからマキアに頼んだのだけれど、ようやく手に入ったのだ。

これで電花とも遊ぶことができる。

くくく電花（が）蹂躪中くくく

「お母さん……弱い？途中からどんどん速くなってきたけど」



「はっ……そりやつ……マキアと比べたらっ……！身体能力だどっ……弱い……はっ……決まってる……！」

息切れ極まりない程に疲労しきったM.S. ダークライがそこにいた。ヴィランの女王とは何処へやら、ヒーローに倒されたような無様を晒していた。

転送や指先発光、空気土流を抜いた体術で戦えば、いくらM.S. ダークライと言えどオールマイト並の身体能力には勝てない。光速反射はできるが、身体能力によるごり押しで打ち抜かれるのだ。

そのごり押しをさせないために回避用の転送や、一撃必殺の指先発光があるのだ。縛ればこうなるのは分かっていた。

ボッコボコにされ『超再生』に想像以上に体力を奪われたこともあり、これ以上動くのは面倒だと思いうくらいには疲労していた。

「仕方ありませんね……」「悪夢の呼び声に応えて眠れ」

「むにゅ……？遊び過ぎたかな……おやすみなさい」

さつきまでの元気は何処へやら。一気に眠りについた電花にふうと安堵の息を漏らす。これ以上暴れられると今の私では対応しきれない。増強系の恐ろしさがよく分かる遊びだった。

「停止コード、作っておいて正解でしたね」

脳無は命令を聞かないと動かない。逆に言えば命令者に何かあれば使えなくなる。胎児脳無計画は知性を持たせているため、命令者の救出くらいまでは勝手に行動してくれるのだが、力加減ができるか云々といったところがある。停止用の命令も当然持たせていた。

地に付していたM s. ダーククライが立ち上がる。その姿はボロボロだが……遊ぶ前とは体つきが少しだけ変わっていた。

「でもこれ……ヤバいくらいに効率がいいですね。身体能力どんだけ上がったことやら……増強系いる？」

何もただ遊んだというわけではない。これも立派な「最適化」のための訓練なのだ。『人形操作』+『超再生』による火事場の馬鹿力に加え、電花の攻撃による損傷を回復させることで『超再生』の習熟度を上げていた。さらに人体機能の超回復が機能するので疲労で動けなくなるまでずっと身体機能が上がっていくのだ。

しかも個性が無かった頃とは違い、今の個性がある人間は身体能力の上限が上がっている。戦闘向けではなくても訓練さえすればヴィラン鎮圧できるのが分かりやすいところだろう。

今のM s. ダーククライは弔に体術で完封、ギガントマキアに個性全力なら対等レベルだが、この遊びだけで明らかに身体能力がレベルアップしていた。

そこまでは予想通りだった——M s. ダークライにも予想できなかったことが一つ起きていた。

「……？超再生の最適化、終わってる？」

超再生はパッシブで自動的に発動する個性だ。逆説的にアクティブで個性を習熟させたり最適化させるのは難しいはずなのだが……既に終わっていた。貰って十日も経っていないにもかかわらずだ。

M s. ダークライが最適化してきた個性が多くなってきたことで最適化速度が上昇していることもあるが、何よりも『人形操作』の最適化、火事場の馬鹿力を使ったりする『身体最適操作』が影響していた。

『超再生』はパッシブの肉体作用の個性……言い換えると身体能力強化の部類とも言える。ゆえに既に最適化されている個性に合わせてチューニングされたのだ。

結果、一か月はかかるはずの習熟訓練・最適化・個性伸ばしが数日と経たずに終わってしまっていた。

「超再生の最適化……なるほど、『本来の肉体よりも理想の肉体へ方向を変えて再生する』ように最適化されましたか。一定以上の戦闘の先に理想の私が現れるといったところですね」

超再生の最適化『変化超再生』<sup>へんげ</sup>とでも呼ぶべき個性。仮にこれがオールフォーワンに

渡ったら顔も体も治るだろう。壊した身体が再生したらイメージした身体に変わっていくような個性なのだから。

つまりこれを使えば身体能力も増強系個性を使ったレベルまで上げれる。再生した後のイメージを脳無のような身体能力を持った自分自身と考えればいいのだから。

ただ全盛期オールマイトの身体能力は無理だ。限界はおそらくU S J で使ったオールマイト並の性能をした脳無まで。そこは身体能力としての限界だ。

「助かりますね。筋肉ダルマなM s. ダークライなんて嫌だったのです。これで今の私から……曲線美を持った理想的な美人に成長させ、さらにオールマイト並のパワーを持っているという姿になれます」

M s. ダークライはフッフと笑う。これで増強系は限界まで到達できるようになったのだ。まさか『超再生』から派生するとは思いつかなかったが、これでオールフォーワンに増強系個性を貰う必要も無くなった。

不意打ち是指先発光と思考加速で知覚できるから届かない。

正面戦闘は回避に転送と攻撃に指先発光、知覚には光速反射があるから勝てるのはほぼ不可能。数十キロ以上先から光速の攻撃が届くっていうならちよつと怪しい。ただ超再生があるから死なないけど。

さらに変化超再生の身体が仕上がれば抹消＋ごり押しすら効かない。物量攻撃は空気土流で踏み潰せるようになる。

それら全てを人形操作＋思考加速で最適化させた行動がとれる。

道標は全てできた。あとは個性を伸ばし、ただ進むだけだ。

## 【説明】依光成生／Ms. ダークライの個性一覧

依光成生／Ms. ダークライの現在の個性一覧

### □メイン個性【最適化】

所持している個性を自らの個性に最適化する個性。複数の個性を持つことを前提にした個性であり、個性を取得するには特定の条件を満たす必要がある。

個性を習熟することにブーストをかける個性でもあり、サブとして所持する個性が鍛えれば鍛えられる程ブースト率は上昇する。

個性は「取得」↓「習熟」↓「最適化」の三段階で所持に至る。最適化の段階になったら自らが所持している個性は最適化できたと認識される。

### ▽使い方・個性取得方法

1 (前提条件)。両親から個性因子を生まれつき貰っているものでそれを使用して8～10年、個性を伸ばして「個性を使うこと」に慣れます。メイン個性【最適化】も副次発動しているので、持っている個性は自らが理想とする個性へ少しずつ変わっていきま

2. メイン個性〔最適化〕を使い、手にした個性因子を自らのものとします

3. 持っている個性全てに1〜2を行い、所持している個性因子を全て自らのものにして。なお、メイン個性〔最適化〕の副次効果により、最適化した個性の数×5〜10倍近い習熟速度加速が得られます。

（最適化1つ：5〜10倍、2つ：10〜20倍、3つ：15〜30倍、4つ：20〜40倍、5つ：25〜50倍、6つ：30〜60倍、7つ：35〜70倍）

4. 女性ヒーローもしくはヴィランから個性因子を手に入れます（髪の毛レベルで可）

5. 所持している個性が全て最適化されていれば4の個性が手に入ります。習熟等はまた1へ。

※所持している個性が全て最適化されておらず、身体のキャパを明らかにオーバーする場合は死にます。

※所持している個性が全て最適化されておらず、身体のキャパをオーバーしていない場合は死にはしませんが血反吐吐くことになります。輸血等行える設備が無いと死にます。

他にもデメリットがあつたり……？

## □サブ個性

## ◆サブ個性Ⅰ【指先発光】 習熟・最適化済

両手両足の指先から光を放つことができる個性。発動型かと思いきや、実際には身体内部に生成している光の特性を持つ物質的な何かを指先から照射する異形型

収束させることでレーザーになる。距離さえも収束させるとレーザーソード（実質ビームサーベル）と化す。レーザーソードの威力（切れ味）は距離を短くすればするほど上昇する。1mでマキアが切れる。15km弱でコンクリートジャングルも切れる。

## ▽『最適化：指先発光』

・自らの身体における電気信号を光速にする。但しこれだけだと身体の反射は人の領域が限界。

・自らが「身体の端っこ」と認識した箇所からも照射可能に。

・光の特性なので熱量も発生する物質だが、自らに発生させた熱量は跳ね返らない

・物質にダークマターの要素を付与。

・光だけでなく透明色や暗闇色といった色変更、催眠光といった特性を持たせることも可能

・レーザーの方向も自在にできる。

・知覚用の光と考えて放てば、光が当たったモノが何か知覚できる。但し膨大な空間



情報が脳内に入ってくる。

▽技（二）内は必要な個性）

- ・常時レーザー（【指先発光】）：距離収束無し of レーザー
- ・レーザーソード（【指先発光】）：距離収束有りのレーザー。実質ビームサーベル
- ・光速認識（【指先発光】 + 【思考加速】 + 【人形操作】）：認識する速度が光速化
- ・光速反射（【指先発光】 + 【思考加速】 + 【人形操作】）：反射速度が光速化、周囲知覚との組み合わせで不意打ちが効かなくなる

・透明化（【指先発光】）：左手が使えなくなる代わりに光学迷彩

・周囲知覚（【指先発光】 + 【思考加速】）：適当な方向へ向けた光が照射された範囲の情報を3D空間知覚する。実質トリコで出てくるゼブラの反響マップ

・????  
（【指先発光】 + 【思考加速】 + 【人形操作】 + 【エアウオーク】 + 【転送】 + 【土

流】）：悪夢

◆サブ個性2【思考加速】 習熟・最適化済

思考する速度が上昇する。一秒で数分考えられるようになるとかそういうやつ。

▽『最適化：思考速度自由化』

・通常速度から光速まで思考速度を自在に変更できる。これだけだとオートでは切り替わらない

・学習能力、脳情報処理能力向上

▽技〔一〕内は必要な個性)

・オート思考速度調整〔指先発光〕＋〔思考加速〕＋〔人形操作〕：思考速度が自身  
がどういった状況にあると認識しているのかによって自動的に切り替わる。

戦闘時は加速、通常時は通常のまま、緊急時は最高速といったイメージ。

・光速認識〔指先発光〕＋〔思考加速〕＋〔人形操作〕：〔指先発光〕欄へ

・光速反射〔指先発光〕＋〔思考加速〕＋〔人形操作〕：〔指先発光〕欄へ

・周囲知覚〔指先発光〕＋〔思考加速〕：〔指先発光〕欄へ

・????〔指先発光〕＋〔思考加速〕＋〔人形操作〕＋〔エアウオーク〕＋〔転送〕＋〔土

流〕：悪夢

◆サブ個性3〔人形操作〕 習熟・最適化済

人形を操ることができる。指先から出せるものがあればそれを利用して操ることも可能。人形にアクセスする方法があればそこから遠隔で操ることも訓練次第ではできる。

更なる訓練次第では人形にオート操作を刻み込むような真似も可能。

▽『最適化：身体操作最適化』

・自らを人形のように認識し、自らの考える理想的な身体操作が可能になる。

▽技 (二) 内は必要な個性)

・ 火事場の馬鹿力 (〔超再生〕 + 〔人形操作〕) : 自傷覚悟で人間の限界を超えた力を行  
使可能。自傷するので超再生

・ 身体による攻撃威力調整 (〔人形操作〕) : 膂力等が強化されても手加減可能などの身  
体操作能力尺度が調整される。オート発動

・ 再生時能力向上 (〔超再生〕 + 〔人形操作〕) : 再生する身体を操作し、理想の身体へ  
近付ける。『変化超再生』とほぼ同じ効果。実質二倍速へ。

・ 光速認識 (〔指先発光〕 + 〔思考加速〕 + 〔人形操作〕) : 〔指先発光〕欄へ

・ 光速反射 (〔指先発光〕 + 〔思考加速〕 + 〔人形操作〕) : 指先発光欄へ

・ ????? (〔指先発光〕 + 〔思考加速〕 + 〔人形操作〕 + 〔エアウオーク〕 + 〔転送〕 + 〔土  
流〕) : 悪夢

◆サブ個性4 (エアウオーク) 習熟・最適化済

空気の上を歩けるようになる。実質空を飛ぶ能力と言える。

▽『最適化：空気地面化』

・ 自らが認識した場所 (座標 or 相対位置指定) に空気として扱える地面が現れる。自  
らが地面と思える場所でなければ現れない。

・ 空気でもあるので空気の壁のように扱うことも可能。

▽技 (一) 内は必要な個性)

・空気土流 (【エアウオーク】 + 【土流】) : 自らが指定した空気がある領域から空気を土として扱った土流を使用。事実上の大気操作。

・???? (【指先発光】 + 【思考加速】 + 【人形操作】 + 【エアウオーク】 + 【転送】 + 【土

流】) : 悪夢

◆サブ個性5 (【転送】 習熟・最適化済)

自らもしくは他人を別の人や生物宛に転送することができる。オールフォウンの黒い泥やジョンちゃんのものと同じ。

▽『最適化 : 瞬間転送』

・黒い泥が発生せず、発動とタイムラグがなく移動できる。但し本人のみ  
・他人を転送する場合、動かないことと数秒の時間を要する。

▽技 (二) 内は必要な個性)

・光速認識下瞬間転送 (【指先発光】 + 【思考加速】 + 【人形操作】 + 【転送】) : 光速で転送する。自傷が起きるので使っていない

・???? (【指先発光】 + 【思考加速】 + 【人形操作】 + 【エアウオーク】 + 【転送】 + 【土

流】) : 悪夢

◆サブ個性6 (【瞬発力×2】 習熟・最適化済)

瞬発力が向上する。身体能力強化のパッシブ発動個性。鍛えれば一瞬だけ加速とかのアクティブ操作も可能になる。

▽『最適化：超瞬発力』

- ・瞬発力が複製個性だったので一つになり、二乗倍（ $\parallel$ 瞬発力 $\times 4$ ）に効果が上昇
- ・個性伸ばし無しで弾丸すら避けれる程の瞬発力に

▽技（一）内は必要な個性）

・転送不意打ち（【瞬発力 $\times 2$ 】 + 【転送】）：障子蹴り飛ばしたやつ。ただの不意打ちとも言う

◆サブ個性7【土流】 習熟済

土を操作できる。初期は地面に手を当てなければ発動できない。訓練次第で地面に手を付ける必要は無くなる。訓練次第で効果範囲上昇し、土形状変更も可能になる。固めることも可能なので岩や石にも派生可能。ただ訓練がかなりの高レベルが必要。

▽『最適化：???』

現状不明

▽技（二）内は必要な個性）

- ・空気土流（【エアウオーク】 + 【土流】）：【エアウオーク】欄へ

・????（【指先発光】 + 【思考加速】 + 【人形操作】 + 【エアウオーク】 + 【転送】 + 【土

流) : 悪夢

◆サブ個性8【超再生】 習熟・最適化済

身体が壊れても超速で再生する。脳無に基本装備されているものと同じもの

▽『最適化：変化超再生』

・超再生の速度さらに上昇

・再生は元の身体に再生するか、自らの理想とする身体の方角へ少しずつ変わるような再生を行うか選べる。身体能力強化の方向性を決めて再生する方向性を決めれば身体能力強化を行われたような身体へと変わる。

・自切にも対応

▽技(一)内は必要な個性)

・火事場の馬鹿力(超再生) + (人形操作) : (人形操作) 欄へ  
 ・再生時能力向上(超再生) + (人形操作) : (人形操作) 欄へ

つまりどういう能力？

正面戦闘の殺し合いの場合は軽く腕を振るうだけで光速の数km射程ビームサーベルが飛び、瞬きした瞬間いなくなって背後から八つ裂きにされる。

不意打ちは効かないどころかカウンターされる。周囲知覚のタイミングが悪いと音速レベルでさえカウンターされて内臓破裂キック or 四肢両断ビームサーベルが飛んでくる。

近接戦闘に持ち込んでも体術レベルはトップヒーロー以上に高いし指先注視しないと突如目潰しとか身体を貫通するレーザーが飛んでくる。攻撃が届いたと思ってもいつの間にか背後にいる。

中遠距離戦闘は相性最悪なので諦めろ。ブラックホールすらこのレーザー貫通する。暗殺しようにも超再生持ちで再生速度が異常だから即死攻撃ですら簡単には死なない。

そして——時間をかければかける程、個性が強くなる

## 悪夢と惨劇とデビュタント その1 ~ヒーロー強襲~

一日程で疲労も抜き去り、電花を地上へと転送して適当に遊ぶよう指示してオールフォーワンの下へと自らを転送させる。

服装はコスチュームを全て装備してだ。白色発光を使えば私の髪は白くなり、暗闇色発光を使えば黒くなる。今は白にしていた。

そして後ろ髪を常時レーザーでスパッと斬り裂く。地に落ちた分は後で渡すとして、今やりたいのはそこではない

「こんな形でどうでしょう?」

「髪を伸ばしたのかい? 超再生はそこまでできなかったはず……最適化かな?」

「ええ、自切したら自身の任意の形状に変えられるようなものです」

髪を超再生で腰まで届くようなロングヘアへと伸ばす。これも変化超再生へんげの応用だ。見た目を変えれば雰囲気も変わる。ショートボブの「普通」の女子からロングヘアのヴィランへ。

そのままオールフォーワンが見ているパソコンのモニターを横から覗き込む。そこには自由になった爆豪・常闇と甲たちの姿があった。こちらの会話や姿は届いてない、



バーのモニターと繋がっているものだ。

「おや、弔たちですか。説得でも？」

「ああ。爆豪くんはオールマイトが勝つ姿に憧れたと言っていたよ」

「ふふ、それは面白いことをしてしまいましたね」

ヴィランらしい邪悪な笑みを浮かべ、M.S. ダークライは両手を頬に当ててどこか愉し気だった。

「私がオールマイトを地に伏せる映像を、ヒーローの道へ進めば進む程脳裏にフラッシュバックする催眠をかけてしまいました」

爆豪に向けた催眠、それはヒーローとして成長すればするほどに食い込む呪い染みたまものだった。

しかも脳裏に焼き付いたといってもトラウマというレベルではなく、催眠光は目を通して脳に物理的に焼き付けたのだ。例えセラピスト系の能力やりカバリーガールの力を持つとしても届かない領域だった。

「ハハハ！それは中々に面白い。一介のヒーローの卵にやることじゃないぜ？」

「仕方ありません。苛立たせた方が悪いのです」

笑うオールフォーワンにぶいっと可愛らしい女性のような表情をするM.S. ダークライ。

二人がそんなことをしている最中、バーを映すモニターから甲の声がこちらへ届く。モニターを凝視しているところを見るに、ようやく決断できたようだった。

「仕方がない、ヒーロー達も調査を進めていると言っていた……悠長に説得してられない」

使わなかった一手、オールフオーワンに力を借りることを。

「先生、力を貸せ」

「……良い。判断だよ、死柄木弔」

その言葉から数秒後、私達のいる建物の一角をMt.レディが踏み潰した。

さらに即座にベストジーニストが内部に侵入、目に付いた脳無を片っ端から強靱な繊維で縛っていく。

「脳無格納庫、制圧完了」

思考加速開始。弔とのモニターが途切れ、さらに私達がいる建物の一角が攻撃された。間違いなくヒーローによる奇襲だ。

建物の一角……私達がいるところではなく、脳無が保管されている場所だ。脳無が目的か、それとも脳無に目印を付けていたといったところだろう。

狙いは私とオールフオーワンじゃない。弔たちヴィラン連合と脳無だ。その封殺だけならこれだけで完璧なのだから。

とはいえ弔が捕まるのは困る。オールフオーワンが後継として育てているのだ、私の兄弟子とも言える人を、簡単に捨てられるほど私の器量は狭くない。

「Ms. ダークライ」

オールフオーワンが一言声をかける。思わずため息が出てしまうが、言いたいこともおおよそ伝わってしまった。

「はあ……まさかこんな形でデビュタントとは。オールマイトも来ているでしょうか、お相手としては十分ではありませんか」

カツンカツンとハイヒールの音を鳴らしながらヒーロー達の方へと歩を進める。オールフオーワンが一步先を行き、ヒーロー達を殲滅に向かう。

「うええ〜これ本当に生きてんのオ……?こんな楽な仕事でいいんですかねジーニストさん。オールマイトの方行くべきだったんじゃないですかね」

「難易度と重要性は切り離して考えろ新人」

Mt.レディにベストジーニスト。日本No.4ヒーローと、物理殲滅能力ならトップクラスのヒーローだ。彼らが投入されているというだけで、ヒーローや警察がどれだけ事態を重く見ているのかが分かる。

それにギャングオルカと……虎。回復し切つてないところを見るに救助要員だろう。

トップヒーローを集めた上で、バーにメイン戦力をこちらにサブをと予想して配置したらこうなる、といった人員だ。おそらく弔の方にはオールマイトと他数人のトップヒーローあたりが居るのだろう。エンデヴァーが隣に並んでいても理解できる。

「機動隊、すぐに移動式牢を！まだいるかもしれない、ありつたけ頼みます」

警察の機動隊まで入ってきた。奇襲にしては随分と周到にできてきたらしい。

「ラグドールよ！返事をするのだ！」

「チームメイトか！息はあるのか、良かったな」

「しかし……様子が……」

ラグドールは既にオールフオーワンが個性を奪った後だ。そのあと身体は脳無ししようと、思考能力を失くさせている最中だった。

ハイエンドには丁度いい個体だったが……まあいい。それなら他所からとつてくるだけだ。

「何をされたのだ……ラグドール」

カツンカツンとハイヒールの足音が鳴る。ヒーロー達にも聞こえたのか、こちらへ身体を向ける。

先に声をかけたのは、オールフオーワンだった。

「すまない虎、前々から良い“個性”だと……。丁度いいから……貰うことにしたんだ」  
「!？」

「止まれ動くな」

ギヤングオルカの制止の声。当然聞くべくもない。両手を前に揃え、従者のようにオールフオーワンの後ろを歩く。実際は対等だが、ヴィラン連合というフィルターを通せば間違いではないのだから。

「連合の者か」

「誰かライトを……」

「こんな身体になってから、ストックも随分と減ってしまったてね」

カツンカツンと音が響く。オールフオーワンの足先だけがヒーロー達に見えた瞬間、ベストジーニストが即座にオールフオーワンへ着ている服による拘束をしかけた。

「ちょジーニストさん、もし民間人だったら……」

「状況を考えろ。その一瞬の迷いが現場を左右する。」

M s. ダークライの足先もまた見え、ジーニストが先ほどと同様に拘束を仕掛ける。

<sup>ツイン</sup>  
「敵には、何もさせるな」

グツと手を握りしめ個性による拘束をさらに強める。……その個性で、M s. ダークライの衣服が動かせていないことにも気づかずに。

轟音だけがその場に響いた。

「せっかく弔が自身で考え、自身で導き始めたんだ。出来れば邪魔はよして欲しかったな」

オールフオーワンが宙に浮き、ヒーロー達を蹴散らした一撃の跡を見下ろす。三つ先の通りのビルまで倒壊させ更地にする威力、ただの一撃でヒーロー達ほぼ全員を戦闘不能へと追いやっていった。

「さて、……やるか」

オールフオーワンは静かにそう呟いた。

■■■■

「流石N04！ベストジーニスト!!!僕は全員消し飛ばしたつもりだったんだ!!!」

パチパチと手を叩くオールフオーワン。そこにあるのは賛辞だけだった。

オールフオーワンはヒーローを舐めたりなどしない。だが自らの実力を低めにも見ない。だからこそその拍手だった。

「皆の衣服を操り瞬時に端に寄せた！判断力・技術……並の神経じゃない」

オールフオーワンがベストジーニストと遊んでいる間に気絶しているMt.レディから髪を数本引っこ抜く。変化<sup>変化</sup>超再生なんていう最適化があるのなら巨大化も候補にあがる。持つておいて損はない。

「いっつ……」

M.S. ダークライがそんなことをしている中、ベストジーニストが思い出すのはこの戦いが始まる前の警察との話し合いのときだった。

「連合には間違いなくブレインがいる」

「それも依光成生というブレインとしての圏を準備して、さらに裏にいるという狡猾さ

だ」

「依光成生も恐ろしく強力で狡猾なヴィランだが、そいつの強さはオールマイトに匹敵する」

「そしてそいつも狡猾で用心深い……。己の安全が保証されぬ限り、表には姿を現さない」

「今回は死柄木の確保から依光成生、奴の捕捉までを可能な限り迅速に行いたい」

余りの一撃に話が違うと思いながらも、ベストジーニストは反撃を試み……。オールフォーワンの追撃に沈んだ。

「相当な練習量と実務経験故の“強さ”だ。君のは……。いらぬいな」

ベストジーニストが倒れ、この場にいるヒーローは敗北を喫した。

「甲や成生とは、性の合わない“個性”だ」

だが敗北したのはこの場にいるヒーローだけだ。ここよりも戦力が割かれている甲たちの方にはヒーローがまだまだいるはずだ。

「M s. ダーククライ、甲のところにいるならそろそろオールマイトが動くだろう。頼めるかい？」

「連合メンバーの転送はそちらでお願いしますね。片付けると甲に悪いですし、私は



オールマイト以外と遊びましょう。」

長くなった髪をフアサツとなびかせた後、深淵色の瞳を、邪悪な笑みを浮かべ……M s. ダークライはカーテシーを一つした。

綺麗であるからこそ、美しいからこそ、惹かれるからこそ恐れる。M s. ダークライというヴィランの姿がそこにあつた。

「僕の知り合いなら放っておいていい」

「分かりました。それでは……悪夢の始まりです」

転送は移動先に目標とする人が居なければ使えない。弔がいるならまだバーへ転送できるので、相対位置転送でバーの上空へと移動する。

空気地面化を使い宙に浮き、眼前の様子を見てみるとオールマイトはおらず、ミドルクラス中位の脳無が大量に現れていた。そしてそこには、エンデヴァーやエッジショット、シンリンカムイといった日本が誇るヒーロー達がいた。

深淵色の瞳を浮かべ、クスクスと笑いながら階段を下りるように時間をかけ、カツンカツンと音を鳴らしながら少しずつ地上へと近づく。そこでようやくエンデヴァーとエッジショットが気づいた。

それがM s. ダークライを、M s. ダークライの姿を、初めてヒーローが目にした瞬間

だ  
っ  
た。

# 悪夢と惨劇とデビユタント その2 S M S. ダークラ イのご挨拶

「あれは……依光成生!!!」

塚内警部の声が響く。と、同時に、脳無すらも止まりこの場にいる全員が宙へ浮かぶ美しく惹かれるようなヴィランへ視線を向けた。

「先制必縛」

ヴィランが現れたのだからと即座に行動したシンリンカムイが背後に飛び、ウルシ鎖牢で縛り付ける——前に瞳から力が無くなり、崩れ落ちる。

特に難しいことなどしていない。今はハイヒールの前後でほぼ常に展開している透明色知覚発光で認識し、指二本を軽くクイツと振っただけだ。常時レーザーの透明色は見えない刃にしか見えない、それで両断しただけだ……両手両足を。

「遅い」

シンリンカムイの四肢が両断され、そのまま力を失い落下していく。エッジショットが跳躍し抱えるも、ここから戦線復帰は困難なレベルの傷だった。

「止めです」

「貴様ー！」

指先をシンリンカムイの心臓へ向けるも、一瞬で散ったシンリンカムイを援護すべくエンデヴァアの炎が向けられた。が、炎は届くことも無く空気中に散っていく。

『空気地面化』＋『土流』、空気の方向が操れるなら放出された炎の向きを操ることも容易い。

まるで空気が流れていくような現象に、エンデヴァアは遠距離戦闘は不利だと即座に判断した。……が、接近すればシンリンカムイの二の舞だとも分かっていた。

歴戦のエンデヴァアですら悩む一瞬を、先に突撃する一人の影があった。

「沈んでくれ」

空気を支配しつつあるヴィランの雰囲気、その空気を切り裂くようにグラントリノが強襲をしかける。隙だらけの背後下方向からの攻撃であつたにもかかわらず、くるりとターンするように彼のヴィランは優雅に避けた。

さらにグラントリノの勢いを残したままに首を掴み、そのまま膂力だけで勢いを止める。グラントリノの個性が逆に仇となっていた。

今の私でもこれくらい真似なら簡単だ。この老人が全盛期なら分からなかった……が、今でも実力者なのは明白だ。

ここにいて、トップヒーローに連なる者ではないのにトップヒーロー並の力を持つ

者。となれば関係者としか考えられない。

「オールフオーワンの知り合いですか？」

「てめ……え！奴と……！」

「知り合いですか。それなら私よりも先に戦う相手がいるでしょう」

そのまま臂力に任せてオールフオーワンが居る方角へと全力で放り投げる。上手くすればオールマイトに遅れて到着できるだろう。

今の私は増強系の全力には届かないまでも、半分くらいまでには届く。たった一度の電花とのお遊びで、そこまで到達できていた。

「そこまでだ」

グラントリノの追撃タイミングで放たれていたエッジショットの音速を超える不意打ち「千枚通し」。タイミングからしてオールマイトでさえ反応するのは難しい攻撃……それを、笑いながらひよいと最小限の動きで避ける。光速で認識できる私からすれば音速など普通の攻撃と同じだ。速さを自慢とする者は私にとってカモに等しい。

今の私は光速知覚と認識速度自由化を人形操作で脅威度判定を行った上で常にオートで使っている。言わば、周囲情報を3D認識した上で、動画で倍速にしたり半分の速度にしたりするような感覚で行動できるのだ。その最大速度が光速、最低速度が通常速度だ。

負荷は一日使うと数分休憩が必要な程だ。人形操作の個性伸ばしは絶え間なく行われているようなものなので、それほどのコストパフォーマンスを叩き出せていた。

「フフツ」

エッジショットの個性は「紙肢」、紙のように身体を薄く細く引き伸ばせる個性だ。細くすることで音速すらも超える速さを得ているが……薄く細くするということは斬撃に対する防御能力を捨てているということだ。

つまり、光速反射と斬撃性能すらも持つレーザーを放てる私は天敵にも等しい。

「っ!!!」

「随分と遅い……」

伸ばされた足を左手で掴み、右手で指先の10cm程までで収束させたレーザーソーダで両断する。余りにも一瞬過ぎたが故に、エンデヴァーとエッジショット以外は何をしたのかすら理解できていなかった。

「あり得ない……!」

「あり得ん……!」

不意打ちの音速攻撃、エンデヴァーやエッジショット自身でさえも避け切れない攻撃を避け、掴み、さらに反撃まで行った。

明らかに個性が働いている、そう判断するのは良かったが……既に戦力は目減りして

いた。

せめてもの抵抗と左腕をあらぬ方向へと薄く伸ばすエツジシヨット。だがその狙いは油断を誘い、目に見えない程に薄くした身体で死角から打ち抜く……つもりだった。

「左腕もですか」

またしても死角からの攻撃を避け、掴むまでも無く手刀で伸ばされた腕をヴィランは断つ。これでエツジシヨットは右足と左腕の手首から先を両断され、動けはするものの戦線離脱クラスのダメージを負ったことになった。

だがエツジシヨットの攻撃は無駄ではなかった。

「そこまでだっ！」

(情報もいらん……こいつは危険だ!!!)

一瞬であったが時間稼ぎはできていた。跳躍したエンデヴァーは溜め込んだ炎が一気に解き放ち、ヴィランを焼き尽くす熱線を放つ——エンデヴァーの最大火力、赫灼熱拳プロミネンスバーンが放てる時間はそれだけで十分だった。

どんなヴィランでさえ焼き尽くし炭と化す熱線が、宙に浮くヴィランに直撃する。

「まだだっ!!!」

最大火力がさらに燃え上がり、継続して燃やし尽くす。手ごたえがある以上、エンデヴァーの炎が止まることはない。止まるのは手ごたえが無くなった時だ。

つまりは……直撃したヴィランが死に、消えた時だ。

「はあっ……はあっ……」

数秒程続いた煉獄が如き灼熱が止む。突如現れた悪夢は地獄すら超える業火に焼かれ死んだ——はずだった。

「この程度？」

「——馬鹿な」

直撃した手ごたえは有り、継続して放ったことで間違いなく無くなった。プロミネンスバーンの直撃も見間違いはなかった。にもかかわらず空に浮かぶヴィランは未だ傷一つ無く生きており、クスクスと現れた時と変わらない笑みを浮かべている。

これこそが現在使える最大の組み合わせ。『指先発光』『思考加速』『人形操作』の最適化、『光速認識』『光速思考』『身体操作最適化』で相手の攻撃が当たったと誤認するタイミングを測り、『転送』の最適化『瞬間転送』で上空の見えない位置へ退避させる。さらに自らには『指先発光』による透明化を付与させ、『エアウオーク』の最適化『空気地面化』と『土流』で退避する瞬間の自らの空気を保持させ囮とする。



あとは相手がそれなりに限界に近付けば『空気地面化』を解除し、死んだと誤認させたら元の場所に転送する。それだけの技だ。名前をつけるのなら……「消えない悪夢」といったところだろうか？

肉弾戦や暗殺系の個性には効果は全くない技だ。しかしこの技の真価はド派手な個性かつ、中遠距離攻撃を喰らった時にある。

攻撃が継続したり吹き飛ばような攻撃によって私自身が見えなくなることを取りガーに、私が死んだと誤認させることができるのだ。

事実、ド派手かつ中距離個性を持つヒーローの最たる者、エンデヴァーに対して効果は恐ろしく靦面だった。

「俺の火力が……通じない？」

歴戦でありながらも、余りのショックに呆ける姿を見せる程だった。

四肢両断のショックから目を覚ましていたシンリンカムイも、エッジショットも、周囲にいる警察すら顔に怯えを少しだけ浮かべる。まるで——悪夢を見ているかのようだった。

悪夢は覚めてもまた見るもの。深淵色の瞳が、ニタリと笑うその笑みが、変わらず目

の前に現れる。突如として現れ、死んだと思っても現れる……ゾワリと背筋が寒くなる感覚をヒーロー達は認識する。

問答無用の攻撃を全て捌き、逆にほぼ戦闘不能に追い込んだ彼女は、白一色の姿から禍々しい黒色へ姿を変えていく。まるでこれこそが本来の姿だと見せつけるように。

そしてヴィランは口を開き、名乗った。

「ようやく静かになりましたか。初めましてヒーロー諸君、依光成生——いえ、私はM s. ダークライと申します」

以後お見知りおきを。M s. ダークライはそう言葉を続ける。

既にマトモに戦えるヒーローはエンデヴァーだけだ。エツジシヨットも無理を推せば戦えるが、相性が悪過ぎるが故に正面に立つことはできない。

「M s. ダークライ……いーヴィラン名か！」

クスクスと笑い、空気地面化を解いて地面へと降り立つ。警察の銃が一斉に放たれた……：タイムイングで、エンデヴァーが歴戦の勘か、塚内警部や周囲の人を掴み、伏せた。

「伏せろお!!!」

銃を踊るように避け、右手を剣のように手刀に変える。

そして右手の五本指から放つ暗闇光を収束させ威力を調整。コンクリートジャングル程度なら、タイムラグすら無く焼き切れるレーザーソードだ。

その射程距離は実に——13 k m。

「挨拶に受け取ってください」

神野の町を、市民を、脳無を、警察の大半を——M s. ダークライの暗闇光が斬り裂いた。

悪夢と惨劇とデビュタント その3  
～ヴィラン連合戦域離脱～

時間はほんの少だけ巻き戻る。M.S. ダークライが移動した頃、オールフォーワンは爆豪や弔たちを自らの下へ転送し、弔へと声をかけていた。

「また失敗したね弔」

茶毘やトウワイスといったヴィラン連合のメンバーの無事を背景に、オールフォーワンは先生として弔せいとに言葉を出す。

「でも決してめげてはいけないよ。またやり直せばいい、こうして仲間も取り戻した」  
「この子もね……君が「大切なコマ」だと考え判断したからだ。いくらでもやり直せ、その為せんせいに僕おれがいるんだよ」

爆豪を転送してきた理由を話しながら、オールフォーワンは重厚な声を、恐怖に陥れるような雰囲気醸しながら告げた。

「全ては、君の為にある」

手を弔へ向けながら口に出したオールフオーワンだが、第六感じみた直感が危険を察知した。

元々予想していた展開を、M s. ダークライに頼んだ展開を。

「……来たか」

宙からオールマイルトが、オールフオーワンへと両の拳を振り下ろしながら激突した。

「全て返してもらおうぞ。オールフオーワン」

「また僕を殺すか。オールマイルト」

平和の象徴と巨悪が、数年の時を経て激突した。

■ ■ ■

「随分遅かったじゃないか」

力が弾け、両者共に距離をとる。衝突した衝撃が爆風と化し周囲へとまき散らされていた。

爆豪を助けに来、隠れている緑谷や、爆豪・常闇……ヴィラン連合にまで爆風は走り、たつた一合相まみえただけで二人の規格外な強大さを思い知らされる。

「バーからここまで5 k m余り……僕が脳無を送り、優に30秒は経過しての到着。衰えたねオールマイルト」

「貴様こそ、何だその工業地帯のようなマスクは？ だいぶ無理してるんじゃないか？」

軽口を叩きながら態勢を整える二人。

爆豪・常闇が伏せながら敵のボスを見、オールマイトの力を弾いたことに信じられない目を向けていた。

「オールフォーワン、5年前と同じ過ちは犯さん」

オールマイトはトントンとフットワークを確かめる。超パワーの増強系である以上、自らの身体能力がオールマイトの切り札だ。因縁の相手ともなれば、準備は常に万端でなければならぬ。

次の瞬間、地面を強く蹴りオールマイトはとびかかった。

「二人を取り戻す！そして貴様を刑務所にブチ込む！貴様の操る敵、ヴィラン連合もろとも!!!」

「それは……彼女がいる以上不可能だ。大変だな……」

対してオールフォーワンは左腕をスツと上げる。軽く返答をしながら、オールフォーワンは個性を使う。

「お互いに」

ブクツと左腕が膨れ上がり、ズツという音と共に空気が超強力な勢いで放たれる。ベストジーニストたちを倒した一撃、それがオールマイト一人へと向けられていた。それも、恐ろしく強化された一撃へと変わった上でだ。

ビルを破壊しながらオールマイトが吹き飛ばす。ベストジーニストたち相手だと3棟

程度しか更地にならなかつた一撃は、8棟近くのビルを瓦礫に変えるものへと変わつていた。

「空気を押し出す」＋「筋骨バネ化」「瞬発力」×4「臂力増強」×3。この組み合わせは楽しいな……増強系をもう少し足すか……」

「オールマイトオ!!」

爆豪が叫ぶ。今のオールマイトでは一秒とかからずに復帰するという真似はできなかった。生死の心配をするのは当然だ。

そんな様子を見て、オールマイトが生きっていると肯定したのは吹き飛ばした本人だった。

「心配しなくてもあの程度じゃ死なないよ。だから……ここは逃げろ。その子達を連れて」

オールフォーワンは指先を鋏突の個性で自在に伸縮させ、黒霧へと刺した。

「黒霧、皆を逃がすんだ」

個性を強制的に発動させる個性。オールフォーワンが持つそれを意識のない黒霧に使い、ワープゲートを無理やり構築させていた。

「ちよーあなた！彼やられて気絶してんのよ!?!よく分かんないけど成生ちゃんといいあなたといい、ワープ使えるならあなたが逃がして頂戴よ!!!」

「僕のはまだ出来立てでねマグネ。……それに彼女も同じだが、彼の座標移動と違いワープ先に誰かいないければ使えないんだ。しかも僕の場合、送り先は人……それも馴染み深い人でないと機能しない」

既に倒れた仲間を心配しマグネは怒るも、オールフォーワンは致し方なしといった様子だった。

ワープゲートが構築、いつも黒霧が開くように展開された。

「さあ行け」

「先生と成生は……。……！」

オールフォーワンが吹き飛ばした方向から飛び出すような動きをした影が見えた。吹き飛ばしたオールマイトが帰ってきていた。

「逃がさん!!」

「常に考えろ弔。君はまだまだ成長できるんだ」

再びの衝突。二人の力がぶつかり合い、先ほど同様に爆風が吹き荒れる。

「行こう死柄木。あのパイプ仮面がオールマイトを食い止めてくれてる間に！」

Mr. コンプレスが気絶している茶毘に手を当て、圧縮し懐にしまい込む。気絶しており戦えない以上、ワープゲートをくぐらせるには圧縮させるのが一番だった。

「コマ持つてよ」



— 少しだけオールマイト・オールフォーワンから離れた位置に陣取るヴィラン連合と—  
— 爆豪・常闇。

「……………」

「めんっ…………どくせー」

対するは茶毘を除いたヴィラン連合の6人だ。Mr. コンプレスが混じっている以上、再び攫われる可能性も十分に考えられる。

「爆豪少年、常闇少年……………」

オールマイトが助けようにも、オールフォーワンの攻撃がそれを許さない。

（こいつらも緊急事態。さっきまでと違って強引にでもおれを連れていく気だ。6対2…………連携を取ろうにも相性が最悪ときた）

爆豪が類まれなセンスで常闇と共に対応するも、流石に多勢が無勢。少しずつ追い詰められていた。

「今行くぞー！」

「させないさ。その為に僕がいる」

オールマイトが助けに行こうとするも、オールフォーワンが足を止めさせる。戦力としては互角であり、誰かを助けるといふ隙を晒せば足止めされるのも必然というレベルだった。

「……………」

爆豪・常闇共にMr.コンプレスだけは警戒しながら戦う。相性こそ最悪だったが、砂塵が荒れる場所であり光が届きづらかったことも幸いし。攫われることなく戦えていた。

最も一番の幸いは、この場にMs.ダークライがないことだった。彼女がいれば即座に二人は鎮圧されて終わっていたのだから。

そんな幸運の中、隠れて爆豪・常闇を助けようと画策していた緑谷達がその姿を現した。氷のジャンプ台と、超加速し戦場を横断するような形で。

彼らはヒーロー免許を持っていない、ヴィランと戦うことを許可されていないとも言える。だからこそその策だった。

「来いー！」

爆豪が空へ飛び、常闇もダークシャドウに自らの身体を投げるように指示し、手を伸ばしていた切島の手を掴む。二人は加速していたままの勢いで、そのまま戦場を縦断していく——はずだった。

「どこにでも……現れやがるっ……………」

「マジかよ……全く！」

弔が、オールマイトが、ヴィラン連合が驚く中、切島の手を取った常闇が警戒に出し

ていたダークシャドウを……どこからともなく飛んできた暗黒色の光が、斬り裂いた。



ダークシャドウは周囲の暗さのみならず常闇の精神状態にも影響される。焦燥している環境下、闇を導く光と称するM・s。ダークライの光が直接叩き込まれたのだ。

「がっ……!?!」

その結果は……ある意味で暴走だった。

M・s。ダークライのレーザーは収束されたものだ。暗闇色であれば暗さで言うところの闇そのものが収束されているものと言っている。

そしてM・s。ダークライの発光は個性によるものだが……自らの体内で生成しているものが光の特性を持っていてそれを伸ばしているというのが正しい。そんなものを浴びせられるというのはつまり……M・s。ダークライの長所だけを魅せられるようなものだった。

一つの目標のため、涙を流しながらも自らのために前を向き、傷だらけになろうが信念を貫き続ける美しい女性が微笑む姿。

そのイメージをダークシャドウは無理やり精神にねじ込まれていた。常闇の分身であるダークシャドウが魅了される……それはつまり、常闇がM・s。ダークライに対し無力になったことに等しい。

そしてもう一つ。

「黒影!?!」  
ダークシャドウ

「アアアア!!!」

「常闇くん!?!」

緑谷、飯田、切島、爆豪、常闇の五人を片手で掴む程にダークシャドウが巨大化する。そしてそのまま、全力で放り投げる。

暗黒色を放つそんな人が近くにいるということが常闇の制御をガタガタにしていた。個性伸ばしで鍛えた制御能力、林間合宿で暴走した経験を持つても投げる方角を変えにくらいしかできなかった。

そして方角は——飛んできた方向とは逆、轟たちが居る方向へ戻る方角だった。運が良かったとしか言いようがない。何せ、暴走したダークシャドウがヴィラン連合の真上を通る形になったのだから。

結果、あっちこっちに移動する方角が変わり、ヴィラン連合が混乱する羽目になっていた。

「どつちに!?!遠距離あるやつは!?!」

「邪魔ダ」

さらに真上から巨大化したダークシャドウの腕が振り下ろされる。完全に予想でき

なかった動きに、スピナー、マグネ、Mr. コンプレスと避ける間もなく上から圧せられる。そのまま三人は気絶した。

だがそんなヴィラン連合の動きよりも大きな問題が起きていた。

M.S. ダークライが放った斬撃、それは13km圏内のコンクリートジャングルを切り裂くように放たれたものだ。つまり……緑谷達が逃げた方向のビル群が崩れ始めていた。

今は爆豪を助けるためと逃げる5人と、飛んできたことで合流した二人。それは一般市民同様に、瓦礫の雨霰を避けながら崩れていない場所への逃避行だったのだ。斬られたビルの上側が落ちて来ることもあり、未だに緑谷はフルカウルで逃げ続けているほどだった。

「もつとーもつと速くー！」

「くっそ……！」

爆豪の爆破を使ったとしても瓦礫の量が文字通り桁違いだ。瓦礫同士で干渉して止まる場所すら崩れる可能性すらあった。しかも個性を使う許可が無い以上、「逃げるため」以外の……救助のための活動すらできないのだ。

瓦礫を抑えることすらできないのだ。

「俺達は……何もできねえのか!？」

「私達が動けばヒーローが動く時に邪魔をする可能性があります……どうしようもないですわ。今は逃げるしかできません」

「氷で抑えようにもどこからどこをやればいいのか分かんねえ」

「ダメだ轟くん！。今は個性を使ったら奴らと同じ扱いになる！おそらくそれが狙いの攻撃だ！」

切島を八百万が、轟を飯田が抑える。ヒーローの卵といえど無力、今は走ることにしかできなかった。



「皆ー！」

爆豪・常闇が救出され、スピナー・マグネ・Mr.コンプレスが倒れた。残っているヴィラン連合は弔、トガ、トゥワイスだけであり、トゥワイスが三人を助けに入っていた。

そのトゥワイスを……彼方より飛来した人物が強襲した。

「今の光はいつたい……!? ……遅いですよ」

「お前が早過ぎんだ。きつと向こうで何かあったな。依光成生が向こうに出た」

グラントリノ、トゥワイスを気絶させて駆け付けた戦力に、オールマイトも安堵の息

を漏らす。

「まさかこれを成生少女が!？」

「さあな。だが分かつてるな!?!向こうの被害食い止めるよりも、こつちを止めないと被害は拡大するんだぞ!!!」

目の前のオールフオーワンを止めなければ、周囲のビル倒壊の被害を食い止めてもオールフオーワンが更に拡大させる。オールマイトはオールフオーワンなら間違いないくそうするという確信があつた。

「なああいつ緑谷!!つとに益々お前に似て来とる!!!悪い方向に!!!」

「保須の経験を経てまさか来ているとは……!十代……!」

今怒るような時間は無いと分かっている、グラントリノは言いたくて仕方なかった。何より、焦っては仕損じる。頭を冷やすという意味でオールマイトに言葉をぶつける。

グラントリノも緑谷達の行動をギリギリ視界に収められていた。M.S. ダークライの暗黒光が常闇のダークシャドウに当てられたことも見ており、その前に飛び出したのも見ていた。

オールマイトの師匠であるグラントリノは説教せずにはいらなかった。

「しかし情けないことにこれで……おまえを倒せる」

オールマイトがオールフオーワンへと「お前を倒す」という決意表明のように拳を向ける。グラントリノもまた、既に行動を始めていた。

「ここにいる連合も二人！依光成生は向こうのヒーローが倒してくれる！これで終わらせる！」

弔へと蹴りかかるグラントリノだが、一瞬だけ脳裏に浮かんだ疑問が消せないでいた。

依光成生を向こうのヒーローが倒せるのか？という嫌な疑問だ。さっきの暗黒光……逆にやられたのではと、いつもの俊足が一瞬鈍る程に疑問は付きまどっていた。

「……………」

「弔くん。終わりたくないです」

「やられたな。一手でキレイに形勢逆転だ」

オールフオーワンは鉋突で指先を伸ばし、マグネへと突き刺す。そして磁力の個性を強制発動させた。磁力は男女でS極N極の磁力を付与させられる個性だ。ここにいるヴィラン連合はトガ以外は男である以上、トガがワープゲートのすぐ傍にいれば全員が勝手にワープゲートへと吸い寄せられることになる。

グラントリノの足が届くことも無く、弔もワープゲートへと吸い寄せられていく。



「え、や——そんなに急に来られてもお」

トガが次々衝突する連合メンバーに押され、ワープゲートの中へと消えていく。マグネもオールフォーワンが鋏突の指に抱えられ、ワープゲートへと放り込まれる。

「待て……ダメだ、先生!」

ワープゲートへと吸い寄せられる弔はオールフォーワンへと手を伸ばす。届かないと分かっている……オールフォーワンの身体を知っているからこそ、先生と呼ぶ人だからこそ、心のままに弔は手を伸ばしたのだ。

「その身体じゃあんた……ダメだ……!俺まだ——!」

だが無情にも弔の身体はワープゲートへと吸い寄せられていく。オールフォーワンも、最後と声を出していた。

「弔、君は戦いを続ける」

オールマイトが拳を振るおうとする眼前で、オールフォーワンはグラントリノを転送し盾としながら眩く。

「……彼女との約束を、果たす時が来てしまったようだね」

それは半年以上前の記憶だった。依光成生と話していた時、ふとした拍子に出た約束だ。

□□□

未だ成生が中学生だった頃、成生はオールフォーワンの研究所にやってくることもそれなりにあった。その内の一日のことだ。

「ねえオールフォーワン。あなたがオールマイトと戦う時、私が利用できそうなら使ってもいいですか？」

「僕をかい？」

「うん。どうせあなたの計画なら問題ないでしょう？」

計画と聞き、オールフォーワンは少しだけ口をへの字に変える。M s. ダークライの恐ろしさは何も戦闘能力だけではない。洞察力や女の勘が鋭いところや、思考能力も高いところにある。

「……………どこまで予想してる？」

「あなたが捕まっても問題ないところまで。その後のリカバリーは……弔次第かな？」

オールフォーワンなら、という信頼。そして成生はオールフォーワンと弔の関係性を疑っていない。

成生は二人の信頼関係から、弔にはオールフォーワンから見て重要な役割があり、そのために教え込んでいると予想した。さらに予想できる重要な役割も大きく二つに分かれる、個性ごと身体を欲しているか、単純な後継者かの二択だ。

弔を教育するというのはそういうことだ。個性だけ欲しいならオールフォーワンは

さつさと奪う、身体だけ欲しいなら脳無にでもするだろう。どちらも欲しいなら寄生だったり合体するような手段が必要になるが……オールフオーワンなら何でもありだからあり得る。そしてそれ以外なら純粋に、ヴィランであるオールフオーワンの後継者だ。

オールフオーワンは「ほお……」と感心した声を出しながら、是と答えた。

「そうだな……構わないよ。ヴィランとは自由に生きる者だろう？何より僕と君の目的は違う」

オールフオーワンが勧誘した時、成生は下には付かないと言った。自らの目的のためなら共に行くという言い方をしていた。それは、対等であるという言い方だ。

だからこそオールフオーワンは成生を欲しがった。面白いと叫び、間違はなく対等以上まで上がってくる者を欲した。自らを超える者、彼女さえ仲間居れば……どんなヒーローでさえ敵ではない。そんな彼女さえ居ればオールマイトなど、簡単に破壊できる。

そしてもう一つ。オールフオーワンには対等なパートナーと言い切れる女性はこれまでいなかった。オールフオーワンからすれば個性も強さも、関係性もどうあっても下になってしまうのだ。対等と言えたのは弟である与一——ひいてはオールマイトくら

いのものであり、同志にも近い者である対等な者はいなかったのだ。

「僕と共に来るといふ約束は、君が君の目的を達成するための手段に過ぎない。だからこそ僕は力関係は対等でなくても、君をパートナーとして扱った」

故にオールフオーワンの目的はもう一つあった。巨悪と対等な存在のパートナーの証明……それは、「手に入れば自らを悪の象徴 支配者と呼べる者」という邪悪な宝石だ。

弔の横に立てば……将来の自らの横に立てば、巨悪が一人だった黎明期よりも遙かに極悪な時代が訪れる。崩壊すら使える巨オールフオーワン 悪と闇を導く光が揃っている社会……心酔させる悪のカリスマと心酔しやすい人を集める象徴シンボルが存在する未来、それこそがオールフオーワンが描く未来だ。

「達成する目的が違えども、その途中までは同じことだから。君が求めるのは僕とオールマイトの激突だろうか？」

描く未来のため、M.S. ダークライがオールフオーワンすら超えるヴィランだと示すのには丁度いい。だからこそ、了承した。

「ふふ、否定はしませんよ。ありがとう」

オールフオーワン自身も可愛らしいと思える、笑顔を向けられながら。



時は再び現在に戻る。オールフオーワンは思い出し笑いをしつつ、言葉を零した。

「ふふ……オールマイトと雌雄を決する。君との約束を守ろう、成生」

## 悪夢と惨劇とデビュタント その4 〈春川の惨劇〉

エンデヴァーやトップヒーロークラスには当たらないように振るった暗黒光の一閃。腕を一度振るっただけだというのに、その被害規模は神野区すら超える程の範囲に広がっていた。

遠くから悲鳴が聞こえる。心苦しいものがあるが致し方無い……私の目的のための犠牲だ。

悲鳴も当然、何せコンクリートジャングルと呼ばれるビル群の、ここから13km圏内の北西から南東が全てスパッと切れたのだから。

ビルが崩れ、落ち、瓦礫と化し、火災も起き、暗黒光で切られなかった人も二次被害を受ける。とはいえ東京に近いためヒーロー達は多い。全力でヒーロー達が助けに走れば二次被害救出くらいはできるだろう。

私もこの場から離れよう。市民への被害を出す気も無かった。

ここにいた警察の大半と地上の脳無はほぼ斬り裂かれ死んだ、後はエンデヴァー達ヒーローに任せるとしよう。

「とまあ……挨拶だけにしておきましょう。私も忙しい身なのです」

「ふざけるなっ!!」

赫灼熱拳を放つためにほんの一瞬、炎を溜め込むエンデヴァー。だが、M s. ダークライはエンデヴァーの視界から姿を一瞬で消した。

転送の個性でエンデヴァーの背後に現れ、横つ腹に超瞬発力を利用した蹴りを叩き込む。林間合宿襲撃の時に障子に蹴りを入れたのに、超瞬発力を加えただけの攻撃だ。

だがN o 2ヒーローの名は伊達ではなかった。当たった瞬間に自ら吹き飛ぶことで威力を弱め、さらに吹き飛ぶ勢いを炎の噴射で弱めていた。

本来ならこれだけで決着がつく威力だというのに、エンデヴァーはまだまだ戦える瞳をしていた。ビルの瓦礫に当たる直前で受け身をとり立ち上がる。

が、エンデヴァーの目の前にM s. ダークライはいた。その深淵色の瞳で目の中を覗き込む程の至近距離に。

覗き込めば取り込まれそうな瞳に、エンデヴァーの背筋に寒気が走る。

「殺しはしません。殺したら私の役に立ってもらえないではありませんか」  
「……………」

せめてもの抵抗と拳を振るうエンデヴァーだが、力が入って無かった。防御すらせず頬にコツンと当たるが、威力も炎も熱すら無い。

この後に中位脳無もいくらか控えているのだ。戦う気が無いと言うマトモに戦えば

死ぬ相手に、向ける力は無かった。

「さて、それではごきげんよう」

M s. ダークライは一步離れ、カーテシーを一つして姿を消した。

その転送行き先は上空。神野はオールフォーワンとM s. ダークライという悪夢に襲われた、さらにM s. ダークライは姿を消したただけでありどこに現れるかも分からない……消えない悪夢はまだ続く。

だが——注目が足りない。デビュタントは、派手でなければならぬ。故にM s. ダークライは少し悲しそうな顔を一つし、更なる悲劇の幕を上げる。

「始めましょう。私の可愛いしもべ、私の分身よ、その力を現し私の下へ馳せ参じなさい」

春川市、依光成生の実家。オールマイトとの戦いをテレビで見ていた彼女……依光成生は、その姿を変貌させた。





「え……」

依光成生という名の人形は、5 m近い巨体へと変貌し、姿を現しただけで家を破壊した。驚きのまま両親は、何が起きたのかも理解できずに散っていった。

巨体に変化した人形は、依光成生という少女の皮を被った最上位脳無のような姿をしていた。巨体に加え白いショートボブの髪、赤い血涙、焦点があつてるかも分からない目、常に口を開き涎を垂らし、膨れ上がった筋肉。まるで突如として自我を忘れて凶暴化したかのようにも見えた。

脳無をベースにした人形である依光成生には自我は無い。あるのはずっと人形操作により操作されていた事実だけだ。

最上位脳無との違いは、死体の意識を利用しているか、していないかの差だ。利用していないと死体と変わりが無いのだから本来動くこともないはずだった。

しかし脳無をベースにしているということは、個性を使えるということだ。さらに成生の細胞を多く取り込んでいることで、成生自身が持つ・持ちうる個性すら複製して使えるようにすらなっていた。

持っている個性は『狂暴化』『超瞬発力』『超再生』『思考加速』『膂力増強×2』『シヨツ

ク吸収』。USJで戦った脳無よりも遥かに強力な個性だ。

『思考加速』だけは本来使う予定は無かった。しかし、とあることに……死体でも動かせると気づいた成生が急遽入れることにしたのだ。

「……壊して……私の下に……行く……」

人形操作によるオートプログラム、いわゆるAIだ。脳無は生前の意識を持たせているため使えないが、思考加速させられる人形ならば使える。

人形を成生が対面で動かし、そこからAIを組み込み動かしたのだ。対面で人形操作する時に、人形には極々微量……0ではない程度の、欠片とすら言えないほどの思考は入る。そこから思考加速させて動かしているのだ。

その何よりのメリットは胎児脳無のように血の繋がりだとか知性とか考える必要も無く……裏切らない。

「があああ!!!」

家を数秒もかけずに更地にする身体能力。依光成生を監視していた警察すらも吹き飛ばし、人形は向かう方角を見定めた。

春川市は神野区から西に40km程の位置にある。オールマイト並のスピード……瞬発力だけで言えばオールマイトすら超える人形が、動き出した。

「「きやああああ!!!」」

市民の悲鳴を無視し、ただ人形は走る。跳躍するための助走だが、5 m 近い巨体が歩道云々を無視して加速し続けていくのだからたまらない。

「ソ、ソ、ソ」

ヒーローが駆け付けようが、超瞬発力をアクティブ操作して一瞬だけ加速し通り過ぎる。一瞬でケリを付けられる戦闘能力であつても、今の人形の目的はただM s. ダークライの下へ向かうだけなのだ。

オールマイトは5 k mを30秒で到達できる。では40 k mなら240秒かとなると……実は違う。

電車……新幹線と同じだ。加速し常に最高速を出せるか、それとも減速しなければならぬ距離で最高速をずっと出せないかの違いだ。それで言えば、前者が今回であり、後者がオールマイトがオールフオーワンのところへ到達した時のことが該当する。

フフフとM s. ダークライは微笑む。人形はただ向かってきているだけだ。5 m 近い巨体の暴走した車が全力疾走しているだけのようなものなのだ。

「つまり道さえ譲れば死人は出ない。ヒーローは……止めますよねえ」

余計なお世話こそヒーローの本分。通る道は少し離れて見れるなら分かるのに、それでも止めようと動く。止めようとしなければなら本質的にヒーローではない……ステインが切り捨てるようなタイプのヒーローだ。

同時に増強系個性持ちのヒーロー十人近くが束になって止めようとしたが、ただ超瞬発力をアクティブにしたタックル一つで吹き飛ぶ。人形のたった一つの武器で蹂躞されるならそこまで大したヒーローでもないということだ。

人形が持つ武器はその身と、『超瞬発力』をアクティブ操作できることだけだ。要するに一瞬だけ体の一部や全てが加速するだけというシンプルなものだが、5mの巨体とオールマイト並のパワー・スピードが前提ならばそれだけで十分が過ぎた。

人形が軽く数百人以上なぎ倒しながらこつちに向かっていることを確認し、オールフォーワンの方へと目を向ける。そこには……ガイコツのような姿をした人物と対峙するオールフォーワンがいた。

「あれがオールマイトの真の姿ですか。……へりにも、報道されているみたいですね」  
へりが数台見えた。……これは使える。

「あとはオールフォーワンの激突を利用してもらいましょうか」

春川から惨劇が走り、神野では巨悪が暴れ、その裏に悪夢が潜んでいた。

オールマイト救けてという叫びが、非情な力に押しつぶされる……ほんの少しだけ前の光景だった。

# 悪夢と惨劇とデビユタント その5 S オールフォーワン

M s. ダークライが上空で人形の様子を見守っている頃、オールフォーワンとオールマイトは再び激突していた。

趨勢は互角よりもオールマイトの方が多少優勢ではあった。オールマイトの活動限界が押し迫りながらも、気力でオールフォーワンへ一撃を喰らわしたのだ。

地に伏せられたオールフォーワンの工業地帯のようなマスクは破壊され、人工呼吸器のような機材が付けられたマスクが露わになり、目や髪といった顔の上部分が無いという姿が表に出ている。

だが優勢なのはあくまで身体上の見かけまで。精神的に押されているのはオールマイトの方だった。

時間が押し迫っていることや、因縁の相手であること、さらにはオールフォーワンがオールマイトに対しては嫌がらせ行為を基本的に行うことで、オールマイトの方が焦つ

ていた。

何よりも、ワンフォーオール先代である志村菜奈の名前がオールフォーワンの口から出たことであつた。オールマイトの感情の高ぶりと共に出た言葉に、反応したオールフォーワンの言葉がそれだ。

「いやに感情的じゃないか。同じような台詞を前にも聞いたな。ワンフォーオール先代後継者、志村菜奈から」

「貴様の穢れた口で……お師匠の名を出すな……!!」

「理想ばかりが先行しまるで実力の伴わない女だつた……!ワンフォーオール生みの親として恥ずかしくなつたよ、実にみつともない死に様だつた。……Ms・ダークライの方がいい女と言えるだろう」

オールマイトが怒りに拳を振り上げるも、オールフォーワンの空気砲で空へと吹き飛ばされる。ヘリが飛ぶ程の上空へ飛ばされ、グラントリノが助けに入った。

「俊典!六年前と同じだ!落ち着け!そうやって挑発に乗つて奴を捕り損ねた!腹に穴を開けられた!」

二人が着地し、年長者であるグラントリノがオールマイトを諭す。

ヴィランの最も嫌らしい攻撃がこれだ。ヒーローが守るべきものへの攻撃、矜持を崩す攻撃、どれもヒーローが身を張つて止めなければならぬものだ。そうして隙ができ

ればヴィランの狙い通りであり、隙ができればただの何の変哲もない言葉や攻撃になるだけだ。

「お前のダメなトコだ！ 奴と言葉を交わすな！」

「……はい……」

「前とは戦法も使う個性もまるで違うぞ。正面からはまず有効打にならない！ 虚をつくしかねえ」

ぜえぜえと息切れするオールマイトをフォローするグラントリノ。既に限界に達しつつあるオールマイトだが、オールマイトでなければオールフォーワンに対抗できないのだ。

可能な限りフォローする以外に選択肢は無かった。

「まだ動けるな!?! 限界超えろ！ 正念場だぞ！」

「……………はい！」

二人の様子を見つつオールフォーワンはボソリと聞こえない声で呟く。

「M s. ダークライは見ているな。計画通りかまったく……僕が負けるの期待しているのか」

まったく仕方ないと言うようにオールフォーワンは両手を広げ、もう一人の生徒への謝罪を口にする。

「弔がせつせと崩してきたヒーローへの信頼、M.S.、ダークライが決定打に近いものを打ってしまったな。その上から僕か……すまない弔」

その上で、オールマイイトへと恐れを抱かせようと、焦らせようとオールフォーワンは語り掛けた。

「でもねオールマイイト。君が僕を憎むように、僕も君が憎いんだぜ？」

僕は君の師を殺したが、君も僕の積み上げてきたものを奪っただろ？だから君には可能な限り醜く惨たらしい死を迎えてほしいんだ」

ブワとオールフォーワンの左腕が膨れ上がる。さつきオールマイイトが直撃を喰らった空気砲だ、強力で広範囲かつ高速の攻撃である以上、回避するか全力の拳で相殺する以外に選択肢は無い。

「でけえの来るぞ！避けて反撃を——」

「避けていいのか？」

グラントリノが回避しながら促すも、オールマイイトは動かない……否、動けない。



「助け……」

背後に瓦礫に挟まれた人が居たからだ。いくら周囲がM.S.、ダークライの暗黒光で斬られても見えない距離だ、他のヒーローが助けることも十分考えられる。だが目の前で助けてと言われ、その被害を齎すオールフオーワンを止められるヒーローはオールマイトだけだ。

ヒーローだからこそ、オールマイトは止めるといふ選択を選ばざるを得なかった。

「おいー」

「君が守ってきたものを奪う」

グラントリノがオールマイトの下へ戻ろうとしても既にオールフオーワンの攻撃が放たれた後だった。活動限界であるオールマイトが更に無理をして力を放てばどうなるかなど、明白だった。

「まずは怪我をおして通し続けたその矜持……惨めな姿を世間に晒せ」

オールフオーワンの攻撃による衝撃で吹き荒れる砂ぼこりが晴れるとそこには——ガイコツのような貧相な姿をしたオールマイトがいた。

『えつと何が……ええ？皆さん……見えますでしょうか？オールマイトが……しぼんでし

まっています……』

攻撃が飛んでこないヘリからの報道、そこにオールマイトの姿は映されていた。攻撃は相殺し切れていたが、使える力は限界だったのだ。

そしてヘリにも映る程であるならば——Ms. ダークライの瞳にも映っていた。深淵色の瞳が映したことでニタリとした笑みが浮かび、更なる悪夢へと事態を動かそうと企みだす。

「頬はこけ目は窪み！貧相なトップヒーローだ!!! 恥じるなよ、それがトウルフ<sup>本</sup>フォーム<sup>当</sup>の姿<sup>姿</sup>なんだろう!!」

オールフォーワンの煽りにオールマイトはその眼光で返事をした。マッスルフフォームの時と変わらない鋭い眼光、違うのは姿による圧力の雰囲気だけであり、矜持そのものが全く変わっていないと何も言わずとも伝わるものだった。

「身体が朽ち衰えようとも……その姿が晒されようとも……——私の心は依然、平和の象徴!!! 一欠片とて奪えるものじゃあない!!!」

オールマイトの矜持、それは自らが平和の象徴であること。例え倒れてもオールマイトは平和の象徴だろう。オールフォーワンも分かっているからこそ、そこをへし折るために動いていた。

「素晴らしい。まいった、強情で聞かん坊なことを忘れてた。……じゃあこれも君の心

に支障ないかな……あのね……」

もったいつけるように一瞬の間を空ける。しかし事実、放たれた言葉はオールマイトの心臓を穿つようなものだった。

「死柄木弔は志村菜奈の孫だよ」

志村菜奈。オールフォーワンの先代後継者にして、オールマイトの師匠が一人。言わば身内、そんな人物がヴィランに堕ち……さらには自らが拳を振るおうと動いていた事実が、オールマイト自身をこれでもかと責めつける。

出てきた言葉も……一言の、ありきたりな否定でしかなかった。

「ウソを……」

「事実さ。僕のやりそうなことだろ？……ああ、あと弔程じゃないが、こつちも言っておこうか」

弔程じゃない。その言葉ですら今のオールマイトには死刑宣告のようだった。オールフォーワンが仕組んだ事実が、余りにもオールマイトの矜持を抉りに来ていたのだ……オールマイトがそう思うのも仕方のないことだった。

「依光成生は普通の少女だよ。ヒーローにだってなれた、どこにでもいる普通の少女だ」

オールフォーワンの言葉に、それはないとオールマイトの停止していた思考が動き出す。甲の正体という衝撃的な事実には比べれば思考が止まる程ではない事実だった。

だからこそオールマイトも今度はきちんとした否定を返した。

「バカを……言うな……あれほどの力を持った子が……」

普通の少女などと言えるものか。そう言おうとしたオールマイトの言葉を遮り、オールフォーワンは口を開いた。

「成生はね、純粋な女の子であり……社会の天稔だ。ヒーローが強ければヴィランに付き、ヴィランが強ければヒーローに付く。オールマイトという突出した個がいるヒーロー社会、君がいなければヒーローになった女の子だよ。事実、僕が手を差し伸べなくても既に同じ道を選んでいた」

これもまた事実。成生はオールフォーワンの手を借りずともいずれヴィランになっていた。

成生のオリジンは「誰の目にも留まること」だ。これを達成するのに一番手っ取り早いのは、一番目立つヒーローかヴィランを手懐けるか、彼らより実力や残酷性といったところで分かりやすく上であることを示すことだ。現代で言えば——オールマイトを

倒せるヴィランが一番誰の目にも留まると言えるのだ。

もしこれが逆に、オールフオーワンが君臨していればオールフオーワンを討伐するために成生は動いたことだろう。社会的にヒーローが強ければヴィランに、ヴィランが強ければヒーローになる存在といっても過言では無かった。

すなわち、社会の天秤がヒーローに寄っていればヴィランへ、ヴィランに寄ればヒーローへと変わり天秤を保つ重しのような存在こそが成生だった。

オールマイトはそこまで理解はできなかった。オールフオーワンが戯言を言った程度の認識であり、どう転んでも成生少女がヴィランに堕ちていたとしか聞こえなかった。

「……だからとて、許される訳が……」

だから、本質に気づけなかった。今ほどヒーローが強く無ければ成生はヴィランにならなかったということに。

「ああ、だからオールマイト、No. 1ヒーロー。これだけは感謝を伝えないといけない——君の行いが、君の矜持が、成生を……どこにでもいる普通の少女をヴィランに堕としたんだ。君が僕に成生という誰よりも輝く宝石をくれたんだ、ありがとう」

オールマイトに嫌がらせばかり行うオールフオーワンが、オールマイトへ頭を下げて感謝を述べたということが、どれだけ異常なことなのか……オールマイトと吹き飛ばさ

れていたグラントリノくらいしか理解できないだろう。

だが説明したことでオールマイトは何故お礼を言ったのか、理解できてしまった。  
た。

「あ……ああ……」

オールマイトの誇り、矜持、平和の象徴。だが平和オールマイトを享受し普通に過ごす人物がヴィランに堕ちた。それも自発的に堕ちた。オールマイトがいるからヴィランになった。

オールマイトが居なければ、ヒーローになり得た普通の少女。吊という衝撃の後でも、オールマイトの心には十分に響く事実だった。

「オールマイト、笑顔はどうした？」

オールフォーワンが口角をくいと両手の親指で上げるジエスチャーという挑発をつした。オールマイトが常に笑い、不安を吹き飛ばす存在だからこそその挑発だ。

「きさ、ま………」

挑発に応え怒りに燃えるオールマイトだが、その心中はまるで穏やかとは程遠い。

師匠の孫という身内の宝が故に堕ちた者、自らが築き上げてきた平和を享受するが故に堕ちた者。どちらもオールマイトの矜持から生まれ落ちた存在だ。

「やはり……楽しいな。一欠片でも奪えただろうか」

——矜持から剥がれた一欠片と言われて同然の者たちだ。いつの間にかオールマイ

トは声にならない雄叫びを上げていた。

「~~~~~おおおおおお……!!!」

あと少しでも衝撃を加えればへし折れる柱。オールフオーワンが見ても、上空にいる M.S. ダークライから見ても……被害を受けている一般人から見てもそう見えていた。だから、だったのかもしれない。

「負けないで……お願い……オールマイト……救けて」

——オールマイト 救けを呼ぶ声が届いたのは。

後ろに、すぐ傍に守るべきものが居る。ヒーローはそのシチュエーションでヴィランと戦う時、無類の強さを発揮する。心が折れかけようと即座に修復し、鼓舞される。オールマイトの右腕に力が灯る。貧相な身体に稲妻のようなオーラが走る。ワンフオーオールの残り火が、最期の輝きを放つ。

「お嬢さん、もちろんさ。ああ……！多いよヒーローは……守るものが多いんだよオールフオーワン!!」

右腕だけがマッスルフォームへと変わる。瞳に灯った輝きが、未だオールナイトは死んでいないと叫んでいた。

「だから、負けないんだよ」

ヒーローは再び立ち上がる。背後に守るべき者がいるのだから、倒さなければならぬ。ヴィランがそこにいるのだから。



「だから、負けるんですよ」

そんなオールナイトの様子をフフフと上空でM s. ダーククライが嘲笑う。

M s. ダーククライはヴィランだ……が、ヒーローにもなれた可能性を持つヴィランだ。ヒーローの理念や、どう在るべきかといったことを知っており、そこから自らが持つ可能性を入れてヒーローが守るべき者を考えたことがあったのだ。

その結論は、守るべきものが多過ぎるといふ簡単なことだった。

「守るべきものは少なく、絶対に守れると言えただけにするべきでしょう。……守るものが多いのは構いませんが、多過ぎるのは敗因にしかならない」



今のヒーロー社会にてヒーローとはヴィランと戦う者にして市民の盾だ。

では市民とは？ただただヒーローを応援しヴィランに襲われるだけの存在か？そんな主体性のないゴミクズのためにヒーローは己を犠牲にしなければならぬのか？

それに対する私の答えは……目に映る範囲だけ守れ、だ。自らの生活圏を守ればそれでいいだろう。ヒーローが飽和する程多いならそれで解決できるはずだ。

パトロールなんて馬鹿らしい、別の町に行つてヴィラン討伐なんて無駄の極み。それでヴィランを活発にさせる方が市民からすれば迷惑だ。

ヒーロー社会でありヒーローが強いからこそオリジンに従い、ヴィランになった私は……そう思う。

「おいで、電花」

転送を使い、電花を呼び寄せる。本来他人には動いてはいけないといった制約がある転送なのだが、血が繋がっているおかげか、電花にだけは使えていた。どこにいても私の下へ呼び寄せることができる。

転送は試したのと合わせても四回目程度。久しぶりの感覚なのか、ポケッとした顔が可愛らしい。

電花は転送されたことに気づくと、成生の方へと顔を向け跳躍して飛びついた。

「おかーあさーん!!」

「いい子にしていた？」

「うん！いっぱい動物と遊んでた！」

電花の力で遊ぶとなると実質殺戮にも近いものが起きていたはずだ。天真爛漫な笑顔に苦笑いを返すことしかできない。

転送で地上へ移動し、オールマイト達の方へゆつくりと歩きながら残る一人の到着を待つ。激突まであと一分も無いが、間に合うはずだ。

「いい子ね。あつちからももう数秒もかからない……来たわね」

「私……目標……到着……」

人形の依光成生も到着した。とところどころに返り血があるのは見間違いでも何でもないだろう。春川市から人も何もかもを無視して直進してくればそうなるのは必然なのだから。

M s. ダークライ、人形の依光成生、依光電花。一人一人だけでも強大なヴィランだというのに、ここに三人が集まった……集まってしまった。M s. ダークライを中心とした、ヒーローや市民を悪夢へと墮とす集団ができてしまった。

ヒーローは、社会は気づかない。ヴィラン連合などより遥かに恐ろしいヴィラン集団ができたことに。しかし気づけたところで何ができたのか……何もできなかった可能性も、十分にある。

「よろしい。それでは巨悪と平和の象徴、どちらも私達が平らげてしましましょう」

中心であるM s. ダークライが宣言する。電花の楽しそうな顔に応えるように。

「M s. ダークライの一味、ファミリー。今はそれで構いません……その表現では言い尽くせない存在であることを、魅せてあげましょう」

M s. ダークライは、好戦的に笑みを浮かべた。惨劇と悪夢、そしてその忌み子が動き出す。

平和も悪も、視点は変われど夢は見る。今宵の彼らの夢は悪夢、彼女はそれを現実にもするために——オイルマイト 平和と オイルフオーワン 悪 の間に現れた。

# 悪夢と惨劇とデビュタント その6 ～ヒーローvs オールフォーワンvsMs. ダークライ～

「渾身。それが最後の一振り……っ!!」

「——!!」

「ごきげんよう、オールフォーワン、オールマイルト」

突如として二人の間に現れた彼女に、二人の反応は意外にも同じだった。

驚愕という感情だ、違いがあるとすれば見た目に驚いたのか、行動に驚いたのかだけだった。

「成生……少女……?」

「Ms. ダークライ。君のデビュタントはこの後じゃなかったのかい?」

オールマイルトはMs. ダークライというヴィラン名を知らない。だがその見た目が、雰囲気、明らかにヴィランであるというように変わっていたことに驚いていた。

対してオールフォーワンは「オールマイルトとオールフォーワンの激突を利用する」というMs. ダークライの計画にしては動きが早過ぎることに驚いていた。

オールフォーワンが予想していたのはオールフォーワンとオールマイルトが激突した

後、疲れ果てた二人をM s. ダークライが行動できなくするまでいたぶり、それをカメラを通して市民にでも見せつけるといふものだった。

僕が倒れてもどうせ二人ともM s. ダークライの餌食になるのだと、利用されても問題ないはずだった。

「ええ。あなたに伝えたのはそんな計画でしたね」

その言葉にオールフオーワンの右腕が膨れ上がった。

「——そうか」

M s. ダークライに手が向けられるよりも速く転送し、超瞬発力を使いドカツとオールフオーワンの腕を蹴り上げる。空気砲は一瞬の溜めが必要になる攻撃だ。それならそこを突けばいい、それだけの速さは持っている。

宙へ放たれる空気砲。それを目にすらせず、M s. ダークライは白く光るレーザーソードをオールフオーワンの首へと突き付けた。流星のオールフオーワンでもこれには追いつけることもできず、抵抗すらできていなかった。

「私の強さを知っているでしょう」

「まさか……かっ……!?!」

オールフオーワンの脳裏に一つの可能性が浮かぶ。M s. ダークライオールフオーワン 生 徒が先 生を超えろという

可能性だ。真正面からぶつからなければならぬが、オールフオーワン自身を超えたと

社会に認識させることができる。

オールフォーワンは自身の評判がどうなろうと構いやしない、問題はそこではない。オールマイトとの激突を邪魔するという形だけはしないと予想していたのだ。

それは下手すればオールマイトすらも同時に敵に回す行為になりかねないのだから——それを、実行した。

「あなたを倒したヴィランがオールマイトを倒す。それが筋書きですよ」

M s. ダークライは微笑み、オールフォーワンの背後に転送し、同時に後頭部へ超瞬間発力を加えた踵落としを叩き込む。一瞬オールフォーワンの意識が飛び、そのままの勢いで落下していく。

オールフォーワンが伝説に残るようなヴィランであることは調べれば出る。なればそれを正面から倒した人物ならば伝オールフォーワン説を超えるヴィランだということになる。

ヴィランの頂点とすら言える。後は誰かを守ろうとするオールマイトを倒せばM s. ダークライのオリジン、その第一段階は完了だ。

ヒーローとして誰かを守るオールマイトなら、全盛期と比較してすら印象的には十分だ。誰かを守ろうとしたオールマイトが守れなかったなら……ヒーローとしての敗北だ。M s. ダークライがオールマイトを超えたヴィランと呼ばれてもおかしくない。

「デビュタントに、あなたは要りません」

飛んだ意識は一瞬だけと、オールフォーワンは即座に態勢を立て直そうとしたが……もう遅かった。

「M s. ダークライ……っ!!!」

衝撃反転であっても意識が無ければ、指定先を向けなければ使えない。オールフォーワンの視界内にはM s. ダークライの姿は無く、向けられる方向が分からない以上防御が取れない。

そこに更なる追撃の転送+超瞬発力の蹴り。完全なる死角から放たれる、意識が戻るか戻らないかのタイミングへの攻撃には、如何にオールフォーワンでも対応できるものではなかった。

加えて、転送連続使用による落下速度に追いつき追撃を行う超瞬発力を加えた連撃だった。不規則な軌道で地上へ落とされるオールフォーワンだが、意識を飛ばしながらもギリギリで耐えきっていた。

とはいえ、頭から抜け落ちてしまった致命的な事実が——一つあった。

「オールフォーワン!!!」

「しまっ!!!」

地上には渾身の力を込め、一撃に賭けているオールマイトがいる。Ms. ダークライの連撃も一撃一撃が必殺クラスだった、通常時オールマイトのスマッシュと比べても劣らない。だが渾身の力を込めたオールマイトとは比べられない。

「S M A A A A S H !!!」

オールフォーワンを地面に叩きつける一撃。Ms. ダークライの連撃で既にギリギリだったオールフォーワンの身体は――崩れ落ちた。

倒れたオールフォーワンを挟むようにオールマイトとMs. ダークライは対峙する。一步ほどこしか距離は無い至近距離だ。

共闘したような形になったのだ、一言対話するくらいの時間はあった。

「ごめんなさいオールマイト。貴方とオールフォーワンを利用しました」

「いや……助かった。オールフォーワンはこれで」



「もちろんオールフオーワンは差し上げます」

オールマイトの声を遮りM.s. ダーククライは口を開く。まるでオールフオーワンがオールマイトと話していた時のように。

オールマイトの背筋にゾツと寒気が走る。もちろん差し上げるといふ言葉……：オールフオーワンが前座であるという言い方に、そしてそれ以外の目的があるのだという言葉の裏の意味に。

ゆらりとオールマイトへM.s. ダーククライの右手が伸びる。光ることも無い、何の変哲もない右手だというのに、捕まったらマズいとオールマイトの勘は囁く。

「俊典!!」

「……！助かります……！」

グラントリノが既に満身創痕のオールマイトを横から攫うように距離をとらせた。オールマイトも思わず安堵の息を漏らす事態だった。

M.s. ダーククライの様相が変わる。ただの強大なヴィランだった姿から、全身から暗闇色の光を薄く纏うような姿へ。薄暗い闇夜に紛れそうなその姿は、悪夢や死神といった言葉が似合うものだった。

「代わりに……私の目的のため、贄となってください」

巨悪を下した悪夢が平和へ迫る。その間を切り裂くように、熱線が暗闇を穿った。



突如として飛んできた熱線。それをギリギリで回避したMs. ダークライは距離をとり、放った者——エンデヴァーへと顔を向ける。

「追いついてきましたか。瀕死に追い込んであげたのに……倒れても良かったんですよ?」

「冗談は姿だけにしておけ」

「貴様のお陰でな。あんな雑な逃げ方されては捕まえねば我らの沽券に関わる」

エンデヴァーの後ろには左腕と右足が両断されたエッジショットと、両足が無く手だけで動くシンリンカムイの姿があった。エッジショットは個性で全身を引き延ばしながら行動でき、シンリンカムイは腕が伸縮する木になるため、応用することで両腕の代わりを作っていたのだ。

「Mt. レディ……!」

シンリンカムイは左腕で動き、右腕でMt. レディやベストジーニストたちを助けて回る。いつの間にか起きていた虎も市民の救出に動いていた。

「沽券、ねえ……」

「俺達は救けに来たんだ!お前は邪魔だ!」

M s. ダークライはエツジショットの攻撃を避けながらどうでもよさげな目をヒーローに向ける。いや、事実としてどうでもいいのだ。

既にヒーロー達は満身創痕。オールマイトはせいぜい一撃しか打てず、エンデヴァーは一撃K O クラスの攻撃を一度受けている。エツジショットとシンリンカムイは動いても手足がどこかしら無いのだから全力とは程遠い。グラントリノくらいだが、オールフオーワンとの戦いでダメージ・疲労が蓄積していた。

だからこそ、ヒーローはオールマイトに頼るしかなかった。一度全力を以て戦い負けた相手だ。全力でない今なら尚更であり、No. 1ヒーローに頼るしかなかった。

「……その姿は何だオールマイト!!!何だそのっ!情けない背中は!!!」

「オールマイト!!!」

「皆あなたの勝利を願っている!頼む、やつを」

「うるさいですよ」

転送し虎を思い切り蹴り飛ばす。超瞬発力を使っただけではないが、救出していた人も巻き込まれていた。

「有象無象が多過ぎますね。……一つ、私が技名をつけたものを見せてあげましょう」  
「マズいっ……!!!」

エンデヴァーが牽制に炎を速射するも、転送で上空へ逃げたMs. ダークライには届かない。切断攻撃を避けた時といい、エンデヴァーは随分と勘が良いらしい。

ふうと一息吐き、今から放つ技のために光を溜め込む。コスチュームを前提とした技は、指先以外からの光を使うことになる。今まで使っていた光の規模とは違うということだ。

それをこれまで同様の感覚で使うことはできない。数秒の溜めが必要になるのだ。

「空だー」

ヒーロー全員が即座に索敵し、エッジショットに見つけられる。しかし、三秒ほどの時間がかかっていた。

一秒が勝敗を分ける接近戦でこの技は使えない。探知系のヒーローがいる時点で使えない技だ。だが今のようにつけるのに数秒ほどかかるなら、使うに値する。

とはいえこの技はまだ技と呼ぶに値しない。何故ならまだ手に入れて二日と経っていないコスチュームを使わなければ使えない。

本来なら全身からレーザーを放てるようになるコスチュームだ。だがまだコスチュームをそこまで使い熟れてないため、そこまではできない。

明滅するようにM s. ダークライが光り始める。即座に対応できるように、オールマイトは最期の力を振り絞り、エンデヴァーは炎を溜め込み、エッジショット達は周囲の市民を逃がす方へ駆け出す。

「これは私がまだ未熟者である証。だからこそ名前を付けました。名前など呼ばずに放てばいいのに……あえて、私は未熟であると付けた。こんな自由も間違いいではないと口にしたために」

できるのは収束させずにそのまま発光させるだけ。指先一つで街すら照らす光を、熱を、全身という面積から発するだけだ。けれど技名は付けた、余りにも合ってる名前だったから。その名は――

「ダークホール」

M s. ダークライを中心にした暗黒色の太陽が周囲を暗くしていく。だが熱量から爆風などとすら呼ぶには生温い程の暴風と熱量が荒れ狂う。さらに瓦礫同士が勢いよく衝突し衝撃波すら無差別に発生する。

13kmの光速切断でできた瓦礫を破壊しながら暗闇は迫る。喰らわないのは指先発光であるためMs. ダークライと、成生の肉体を一部でも持っていると言える者だけ。人形の成生と電花だけだ。

「エンデヴァー!!」

「分かっている!!」

超が三つ付く程の広範囲攻撃。神野区全域が攻撃範囲に入るほどの攻撃に、No. 1とNo. 2はその全力を以て市民を守る。

「UNITED STATURESOF SMAASH!!」

「赫灼熱拳ヘルファイヤーウオール!!! PLUS ULTRAアアア!!」

本来ならオールフォーワン一人に放たれ周囲の街並みすら吹き飛ばす程の攻撃が、超々広範囲へ向けられた熱の防壁が、暗黒の暴熱風を食い止める。

だがオールマイトの攻撃は直接ぶつけられたものではなく空にいるMs. ダークライへ向けられたもの。衝撃波として走る一撃であり……だが威力という意味なら当れば吹き飛ばされるのは間違いないものだ。

——それを嘲笑い、Ms. ダークライは衝撃波を止めた。いくらオールマイトの渾身の一撃とはいえ直撃ではなく風圧……空気砲であり、ダークホールの相殺で威力は十分の程度まで落ちているのだ、その程度なら高密度に固めた空気土流による防壁でも止

められるものだった。

「ああ……！」

オールマイトの残り火が消えていく。既に限界を超えていた上に、オールフォーワンを討つというワンフォーオールの信念を通じたのだ。目的がある個性で目的が達成した、限界を超えて行動していた事実が積み重なり、渾身も一撃が限度だった。

「ぬうつ!!!ウおおお!!!」

オールマイトが倒れても、エンデヴァーがPlusUltra（更に向こうへ）で食い止める。だがMs. ダークライは油断の一つも見せてはくれなかった。

「フフフ……。Ms. ダークライ……。その名は、オールフォーワンと対等な闇の光を意味する」

パツと光を止め、暗くなっていた世界は明るさを取り戻す。ヘルファイヤーオールが勢いのままにMs. ダークライへ襲い掛かるも、彼女の表情は——笑うだけだった。

「まさ、か」

エンデヴァーの炎は当たればまず生き残るのは難しい。攻撃の究極が赫灼熱拳プロミネンスバーンなら、防御の究極が赫灼熱拳ヘルファイヤーオールだ。しかしどちらも赫灼熱拳という、当たれば死ぬ可能性が高い技に分類される。口を開くことさえできなくなる……はずだった。

そのエンデヴァアの炎に包まれながら、Ms. ダークライは放った技の、もう一つの技名を口にした。

「ライトホール」

世界は、白く包まれた。



# 悪夢と惨劇とデビュタント その7 M.S. ダーククラ イ・デビュタント

ダークホールによりオールマイト達の戦いを報道していたヘリが墜落する間際、5m近い巨体を持った人物と一人の子供がクッションとなり受け止めていた。報道しているアナウンサーとカメラマン、そして操縦士の三人は無事に不時着し、火が上がる中を脱出できていた。

「うう……ありがとう……っ!？」

そこでヘリから救出された三人は、助け出した一人が見るからにヴィランだったことによくやく気付く。横に子供もいたが、目の前のヴィランが余りにも凶悪な姿をしていたため、腰を抜かしてしまう。

「あ、これかな? おかーさんが言ってたやつ!」

そんな中、子供がカメラマンから生放送用のカメラ機材をとりあげ、右手で持ち上げる。重さで言えば6歳児が持てるかはかなりギリギリであるというのに、まるで紙のような軽さと言わんばかりだ。

子供——電花なら身体能力はオールマイトが基準なのだ。この程度でできない方がお

かしい。

「ちよつと!?それは報道用の機材なの!ダメ!」

「ごめんなさい!貰います!」

「コラー!……あつ」

腰を抜かしたカメラマンが取り上げようと動こうとしたが、その前に5mの巨人……人形の依光成生が遮るように現れた。流石にカメラマンが対抗できるはずもない。

「貰う、いい?」

「は、はい」

ヒーローがいない現状、見るからに凶悪なヴィランに迫られれば要求を呑む以外に選択肢は無い。生放送用の機材を渡し、そのまま距離をとる。

「おカーあさーん!!!」

電花はそのまま機材を持って走っていったが、人形は一言だけ言葉を残してから歩き出した。

「来る、な。死ぬぞ」

まるで心配するような言葉。命を助けたという意味ではヴィランらしくないところに、どこかちぐはぐさが垣間見えていた。

「あれ……ヴィラン、なのかな?」

機材を奪ったという意味ではヴィランではある。強大な身体能力もあるようだ。だが、それならへりに直接乗り込み奪えばいい。わざわざ助けてから奪う必要などどこにもない。

とりあえず命があつたことに安堵し、三人はその場から離れていった。



電花たちが報道陣から機材を回収している最中、M s. ダークライはライトホールを放った爆心地にいた。ヒーローが全員倒れ、動ける者は一人もいない。

ダークホールだけならまだヒーローは耐えきれただろう。オールマイトの渾身の一撃もあり、威力はほぼ無くなっていった。だが、ライトホールという追撃のもう一撃には耐え切れなかったのだ。

ダークホールには溜めが必要だ。当然ライトホールにも必要なのだが……エンデヴァアの攻撃を喰らった時間がそれだ。数秒あれば十分なのだが、その数秒でエンデヴァアの炎が届いたのだった。

だが届いたのは顔面のみ。武器である服には届かず……皮膚なら変化超再生があるM s. ダークライには無傷となる。

「流石はヒーロー。満身創痍でも今の私に一撃を届かせますか」

油断したとは言わない、変化超再生が無ければ違う戦い方をしただろう。一人一人い

たぶるような戦闘に……オールマイトの渾身の一撃を警戒する戦闘にはなったはずだ。空気土流でヒーロー達を動かし、倒れている場所を調整していく。視界に収まるようにひとまとめでできればそれで十分だ。カメラの視野は広いが、人の視界に収まるのと大差はない。

「オールフオーワン、オールマイト、エンデヴァー、ベストジーニスト、エッジショット、シンリンカムイ……グラントリノもかな？ 私の宣伝には十分でしょう」

「No. 1 ヴィランとヒーローを倒している。それだけでも印象は十分だがどうせなら多い方がいい。」

透明色知覚発光……電花も到着しそう。準備はできた、あとは実行するだけだ。

「さあデビュタントといきましょう。後には引けない……そんなこと、今更ですね」

「おカーあさーん!!!」

「電花、頼んだものは貰ってきた？」

「うん!」

電花が元気な返事をしている中、人形も到着した。どうせ時間はあるからと、ゆつたりと向かってきたらしい。

「よろしい、それじゃあ……ちよつと待っててくれる？人形はこれを持って頂戴」

人形にカメラマンから奪った機材を渡し、立ち位置を調整させる。流石にここがいい

なんてところまで指定はできないからある程度は適當だ。

「あとは7人が見えるところ……この辺りでカメラを動かさずに持つてて」

人形を配置に立たせた後、電花と目線を合わせるようにしやがみ込む。母が子にいい子と言うような声でM.S. ダークライは口を開く。

「電花、それじゃあその横に立つて。私のためにあなたの個性を使ってくれる？」

「うん！」

電花が頷いた数秒後、関東一帯及び連携している報道機関に、ジャミングが走った。



オールマイト達の戦闘を映していたテレビが切れ、再度映つたのは土埃が遠くに見えるとある一地区。上空から撮っていたのが地上になっており風景が変わっている。

しかし同じ放送であり、同じ場所からだとは視聴者は考えていた。そしてそれを悪い意味で裏付ける……ヒーロー達が倒れている姿があった。

そしてその中央に——背を向けた、白いドレスを着た女性の姿があった。

『ごきげんよう市民の皆さん、ヒーローに……ヴィラン諸君。ここがどこか分かりますか？』

背を向けたまま彼女は聞き語る。ここがどこなのかと質問……その答えを、自らが一步横に動くことで証明する。

『見えるでしょう、あの……平和の象徴オールマイトの姿が。ガイコツのような身体になつてでも戦った、Mr. ヒーローと呼ぶ人の姿です。ここは、神野区ですよ』

テレビの向こう側から悲鳴が上がる。ヴィランと戦っていたオールマイトが倒れたということ、ヴィランに負けたということだ。ヒーロー社会の平和の象徴、それが倒れて動けないというのは平和が無くなるとすら言える大事件だ。

そんなカメラの向こう側の反応が分かっているように、少しだけ間をとり、再び彼女は口を開く。

『安心してください、オールマイトは死んではいません。何せ——』

オールマイトが死んでないことにホッとする人もいれば、次の言葉がまさか……と思う人もいた。その予想が、当たっているとは信じたくなかっただろう。

『手を下したのは私ですから』

白いドレス姿が黒に染まる。振り返りカメラに映った深淵色の瞳が、カメラ越しに冷気でも伝えているのかとすら錯覚させる。

『オールフォーワン。それがオールマイトと対等に戦っていたヴィランの名前です。二人とも私が地に伏せてあげました』

ウソだ、そう小声が出る程に衝撃的な事実。それが真実なら、彼女は一人でオールマイト二人分の力を持っているとすら言える。そしてそんな人物がヴィランだともなれば、恐怖以外に感情が出てこない。

しかもオールマイトが倒れ、動けず……彼女に傷は無い。傷一つつけられずオールマイトが負けたなど幻想としか思えない。ウソだと、テレビが間違っていると思うのも仕方ないことだ。

『しかしオールマイトは流石ですね。私がいなければオールフオーワンに勝っていた』

しかし彼女はオールマイトを賞賛した。オールマイトの實力は十分に理解していたのだと、対等に戦っていたヴィランには勝てたのだと。

ヴィランがヒーローを賞賛する。それはヴィランがヒーローをライバルや認められた相手だと口にするのだ。それほどに評価しているというのは……少なくとも全国放送規模でオールマイトに対してそう言えるヴィランであるということの意味する。

『ですが現実には残酷ですね。私がいる、それだけでこんなに戦局が変わってしまったのですから』

「私が来た！」そう安心させるのがオールマイトだとテレビの向こう側は皆知っている。それに対し「私が居る」それだけで戦局を変える者と言われれば、まるで対比のように現れたヴィランだ。

そう言う者は木っ端ヴィランでは山ほどいた。だが悉くオールマイトに潰された……逆にオールマイトを倒す者が現れるなど、市民やヒーローは考えもしていなかつ



た。

『ああ、これは失礼を。私は——M s. ダークライと申します。ヴィラン連合のリーダー、死柄木弔の妹弟子です』

そして告げられるヴィラン名とその正体、説得力が急激に増してきた。昨今で大暴れしているヴィラン連合のリーダー、その妹弟子と言われれば実力が有って然るべきなのだから。

『闇を導く光、そういう名前です。M s. ヴィランと呼んでもいいですよ？ オールフォーワンはそう呼んでた時もありました。……闇をヴィランとするか、そうではなくヴィラン以外にも含めた者とするかはあなたはあなた達次第です』

善良な市民からすればどうでもいい情報。だが、善良でないもの達からすれば最も欲しい情報だ。

オールフォーワンがM s. ヴィランと呼んでいたという事実が、視聴しているヴィランにそれほどの者だと認識させる。少なくともオールフォーワンと同格、下手すれば超

えてもおかしくないほどのヴィランなのだ。

そしてヴィラン的思考を持ちながらヴィランになっていない者達へ、味方がいるのだと示す一言。背中を押すには、十分だった。

視聴者が釘付けになったところで、Ms. ダークライは少しずつカメラへと近づくと、口角を上げ、ニツコリと笑いながら。

『それでは最後に……私からのプレゼントです』

えいっと可愛らしい声で人差し指でカメラに指差し、催眠光を放った。……全国放送でとんでもない視聴率を叩き出している状態の視聴者全員が、カメラ越しにその光を見てしまった。

『私が誰の目にも留まるようになってくれたら、嬉しい』

満面の笑みを浮かべるMs. ダークライ。その笑顔は邪悪というより、無邪気と言う

方が正しかった。

使った催眠はカメラ越しということを考えてもの。恐ろしく弱い催眠であり、ほんの少しだけ不安を煽るものだ。

勘の鋭い人はたまに幽霊みたいな感覚や見られてないのに何かに見られているという「よく分からないけど何かありそう」というシックスセンス的な感覚がある。そこに「M s. ダークライが見ているかも」という感覚を混ぜただけだ。

勘の鈍い人なら数年に一回夢にM s. ダークライが出てくるくらいのも。その程度、極々弱い影響しかない。

テレビの向こう側は阿鼻叫喚だと言うのに、M s. ダークライは満足そうな顔を浮かべてこれでお別れだと手を振る。

『それではお別れの時間です、私はどこにだって現れる——悪夢のように。あなたたちが自らを闇と呼ぶなら導きましよう。私は……M s. ダークライなのですから』

電波が少しずつ悪くなっていく。電花の個性を全力で使っている以上、時間制限があるのも当然。むしろ関東一帯をジャミングしてこれほどの長時間ジャックできたこと自体が途轍もなく強力な個性であることの証明ですらあった。

『ごきげんよう。フツ……フフフ……ハハハ……アツハハハハ！！！！』

嬉し泣きなのかも分からないが、泣きながら高笑いを上げる姿。それはまさに悪夢に見る少女のようだった。

## 依光成生の悪夢　くデビュタント後く

朧げに映る世界。泡沫に漂う身体、幻のような儂げさが其処かしこに感じれる。

これは夢だ……明晰夢というやつだ。いつかだったか、随分と昔のような覚えがある。その頃の記憶だ。

もう無くなった実家、その自室で考え事をしていた時だ。小学生の……一年生だったか、確かその頃だ。

「一番目に留まる人、ヒーロー……オールマイト」

「経歴からして当然なんだろうね……」

パソコンで動画を見て、調べて経歴を調べた。オールマイト専門サイトみたいなものまであったから、何をしたのかはすぐに分かった。

そして、それが余りにも馬鹿げたレベルのヒーローらしい行動ばかりだったことも。そんじよそこらのヒーローとは桁外れの人助けを行っていたことも。

「今から誰の目にも留まるためには何をすればいいの？」

だから、考えなければならなかった……誰の目にも留まるための、手段を。この時に独り言が多かったことだけは覚えてる。

「今はオールマイトが一番目立ってる……オールマイトを超える？」

「オールマイトを超えるくらい誰の目にも止まりたいなあ……ヒーローじゃ無理かあ」

ヒーローになってオールマイトを超えるってことも当然考えた。ヒーロー社会なんだからそれが一番理想的な行動だ。

でも、理想的な行動が最速・最善であるとは限らない。

「ヴィランになってオールマイトを超えるのと、どっちが目立つって言うなら……多分ヴィランの方だよね」

目的は誰の目にも留まること、名声でなく悪名だったとしても目的は叶うのだ。ただ、オールマイトが居る中で超えなければオールマイトよりも目に留まることはまずない。

つまり、オールマイトが引退するよりも速く名声か悪名を轟かせる必要があるのだ。

そしてヒーローとヴィランのどちらの道を選ぶのか……成生は既に決められていた。過去の自分によって。

「今個性伸ばししてること自体本当はダメなこと。ヴィランじゃないとやっちゃダメなこと。ははは……笑っちゃうよ。とつくに道なんて選んでたなんて」

「じゃあヴィランしかないね。力を蓄えてから……やっぱり早くても高校生かな」

遅すぎるとオールマイトが引退しかねない。何せ私が高校生で50歳を超えるはずなのだ。年齢の影響が出たと言われてもおかしくない。

「ヴィランになってオールマイトを超える。どうすればいいかなー」

気軽に考える成生だったが、思考の海に潜った結果……目を見開くようなことに気づいた。

「——待って、私がヴィランになったら……おかーさん達は？」

成生は普通の少女だ。個性もバレており、それがヴィランに堕ちたとなれば親の教育が悪かったと言われるのは間違いない。

それがオールマイトクラスの脅威ともなれば、嫌な想像しか出てこなかった。

「ヴィランの親。そんなの……リンチに合っても、殺されたって文句は言えない」

「私のせいで殺される？誰とも知らない他人に？」



見開いていた瞳から涙が溢れ出す。両親の死、それを呼び起こさなければならぬのは普通の少女である成生にはできないものだ。

「嫌だよ……そんなの嫌。なんで殺されないといけないの？」

「分かってる、私がヴィランに堕ちるから。私がヴィランに堕ちなければ死ぬことなんて無い」

溢れ出す涙の疑問の答えを自ら導き出す。小学一年生とは思えない論理思考だが、元々早熟な成生には簡単なものだった。

疑問の答えは疑問が何処から来たのかなのだ。簡単であり……成生には納得したくないものだった。

何せそこには――

「じゃあヴィランにならないとしたら……私の想いはどうなるの？」

——本来無ければならない、自らの原点オリジンが介在しないことになってしまふからだ。

ヴィランにならず誰の目にも留まるといふのはヒーローでオールマイトを超えることに等しい。そしてそれは時間的に不可能である以上、ヴィランになるしか選択肢は無い。自らの想いを選べば必然とそうなる。

だがヴィランになれば両親は間違いなく死ぬ。それも成生には選べない選択だった。

「押し殺せって？これまで鍛えた想いを無駄にして使えないものにしろって？諦めろって？」

だが簡単に諦められるようなものではない。その選択肢は失ってはならない原点オリジンを失えと言うに等しいのだから。

これまで鍛えてきた個性の、想いの源となるものなのだ。それを無情に捨てるなど、成生にはできない……否、できなくなっていた。

「鍛えれば鍛える程に膨れ上がる想いを……私にとっては生きる希望とすら言えるものを……殺せと？」

もはや成生にとって原点オリジンは生きるために必要なものなのだ。これが無ければ死ぬ、そう言い切れる程の重さを持つ想いであり、蔑ろにすれば、屍のような思考と身体をした人間になっていくことだろう。

すなわち生き地獄。自ら進んでそこに飛び込むなど、狂人でなければできないことだ。

「その先にある未来は……ううん、未来は無い。絶望の淵にずっと立たされる生き地獄、……そんなの私には耐えられない」

当然成生も耐えられないと判断出来ていた。原点オリジンに従うかどうかにより、人生が決まる。そこで現れた選択肢にポタポタと床に涙が落ちる。

原点オリジンを選びヴィランになれば両親が死ぬ。

原点オリジンを選ばなければ両親は死なないが、成生自身が死ぬ。

強過ぎる想いと、それに反応した個性が引き起こした悲劇への選択肢だった。

「何で……どうして……？嫌だよ……こんなの嫌だよ……」

涙が前が見えない程に流れる。気づいたことを言葉に出して情報を整理するも、結果は同じ。

「私の想いを諦めるか両親を諦めるか……。……自殺するか、親を殺すか……。選ぶしかない……」

常人ならば想いを諦めても死ぬことはないどころかくだらないとさえ言うことだろう。だが原点オリジンと呼応している個性がある以上、個性が暴発しようが構わないという覚悟がなければ選べないのだ。

いつどんな暴発をするかも分からない以上、自殺以外に選択肢は無い。

小さな身体には、余りにも酷な選択だった。

「きつと普通なら……ヴィランなんて選ぶ私が死ぬべきなんだろうね……」

ヴィランとは市民に被害を齎す者達。いなければいけない程助かるのだ。善良な一市民がヴィランに堕ちるか死ぬか選ぶなら、死を選ぶこともあるだろう。それが聡明な人物なら尚更だ。

「ごめんなさい……ごめんなさい……私は……嫌だよ……皆死んでほしくなんて無い。私の想いが歪だから……それでも私の原点だから……」

謝罪の言葉なのか、懺悔の言葉なのか、普通の少女はぐちゃぐちゃになった感情から漏れ出る言葉を零すことしかできない。

選べない選択肢を選ぶ。理性というブレーキがロックをかけていたにも関わらず、生死をかけた想いが涙と共に無理やりにロックを壊す。

「ごめんなさい…………ごめんなさい…………私が…………やるから……………うううう…ひぐつ…………  
うわああああああ…!!!」

7歳という児童が悩むには重過ぎる内容を、早すぎる成長が齎した。

涙を流しながら歩み続ける。ヴィランという道を選んだがゆえの涙。普通の少女だからこそ、流す涙がそこにあつた。



息を乱れ、ガバツとベッドから目を覚ます。デビュタントの後、アジトに戻って眠っていたのだった。横に電花もあり、スヤスヤと眠っていた。

「ガツ…………はっ…………」

フラッシュバックするのは昨日の記憶。光速切断に、ダークホール、ライトホール……………どれだけの死人が出たのか、予想もできない。

『助けて！誰か！』

『火が……………瓦礫が！落ち……………ああああああ！』

『逃げろ！逃げろんだ!!!』

『誰が……！ヴィランが！何で！どうして!?!』

頭の中に聞こえるのは悲鳴や怨嗟の声。事実、昨日の戦いで遠くから聞こえていた声だ。

「……随分な悪夢を見ましたね」

……今思えば、弔との特訓の前でも思考力加速は働いていた。今と比べれば極々わずかでしかないそれだが、個性が出た時から働いていたとするなら……成長を早熟にさせたのだろう。

少なくとも小学一年生が考えるようなことではない。そして選べるかどうかも。頭をブンブンと横に振り、夢の影響を紛らわす。もう、今更の話なのだ。

「もはや、進み続けるしかないと言うのに」

両親の死という選択肢が選ばれ、原点オリジンのための第一段階は完遂した。良心がこれでもかと抵抗し、人を殺した事実が涙へと変わる。

まだ、ヴィランとしてデビュタントしただけだ。まだまだ先はある、泣いてなどいられない。

涙を拭い、ベッドから出る。そんな動作のふとした思考の中に、一つの可能性を思いつく。

「でも……もし思いが口に出せそうな人が居れば……話すのも悪くは無いですね」

M.S. ダークライ……成生はフツと苦笑いを浮かべる。思考に浮かんだ、そんな都合のいい可能性なんてあり得る訳が無いものだった。

「闇に堕ちると無意識だろうが自覚するヒーローや少年少女なんて……居る訳ないか」

両親と自分自身を選び、自分自身を選んだ。ならば、同じ境遇の……ヴィランでなくヒーローなら、何か違うものが見られるかもしれない。

もし違う未来があったのなら……そんな未練だった。

一年とかからない遠くない未来、余りにも予想外過ぎるそんな人物が現れることになるとはこの時のM.S. ダークライは考えることすら無かった。



## ヒーローサイド デビュタントの爪痕

一夜明け、世間は騒然としていた。

神野区の壊滅と二次被害、オールマイトの正体、伝説のヴィラン・オールフオーワンが生きていたこと、そして伝説のヴィランすら超える悪夢・M.S. ダークライという新時代の途方もない脅威、その脅威が強烈な光と共に目を覚ましたこと。

どれもが市民が惹かれる超一級クラスの情報だ。それが一気に世間に知れ渡り、不安が煽りに煽っていた。

そんな中、警察は神野区で手に入れた情報を元に、次の行動方針を決めていた。

「直接的被害はヒーローが中心……だが、そこからの市民への被害は千人……下手したら万人規模だろう」

「被害は確かに大きいですが、二次被害という意味ではかなり抑えられています。ヒーローが近いところから助けていった結果、神野区の戦っているところまで到達していなかったこと、戦場の中心近くでは切断攻撃に角度がそこまでついてなかったことで倒壊したビルが逆に少なかったことが大きな要因です。おかげで避難が迅速に進められました」

「図らずも、M s. ダークライが無作為に暴れた結果そうなっていたところか……脳無は？」

「捕らえた脳無はこれまでと同様。人間的な反応は無く新たな情報は得られません」  
「保管されていた倉庫は消し飛ばされており、製造方法についても追って調査を進めるしかありません」

神野区で得られた数少ない情報、脳無。大半はM s. ダークライの広範囲光速斬撃により真つ二つになったが、バーの屋上にいた個体や、跳んでいた個体は逃れており、エングデヴァー達によって捕まっていたのだ。

神野区でM s. ダークライの被害にあつたヒーローは幸い、全員が回復に進んでいた。四肢を切断された者も接合していた、綺麗過ぎる切断だったからこそ逆に回復は早かったのだ。

「大元の一人を捕らえたものの……新たな強大なヴィラン、M s. ダークライの鮮烈デビューなんて笑えない事態だ」

「実行犯、死柄木を始めとした敵<sup>ヴィラン</sup>連合も捕り逃している。ヒーロー社会にあるまじき失態だ。特にM s. ダークライ……依光成生には完敗としか言えない。オールフオーワンを隠れ蓑にした高校生など信じられる方が馬鹿げているから仕方ない部分も大きい」

M s. ダークライに関しては警戒レベルが明らかに足りてなかった不意打ちにも近い結果だ。チンピラヴィランを守るヴィラン程度のレベルかと思えば、オールフオーワ  
ンすら超えかねないレベルの大悪党だったのだ。

考えもしないところから現れた悪夢であり、情報の足りなさが戦いの結果を決めたのだ。

とはいえ、成生が情報を掴ませなかったのは意図的なものだ。警察もそれを分かっているからこそ、完敗としか言えなかった。

「そこ以外で言えば……いえ、負けてますね」

「当たり前だ。オールフオーワンだって平和の象徴と引き換えだぞ」

そして成生以外でも戦いは負けと言ってよかった。

「オールマイトの弱体化が世間に晒され、もう今までの『絶対に倒れない平和の象徴』  
はいない」

「国民にとつても……敵にとつてもな」  
ヴィラン

「たつた一人にもたれかかってきたツケだなあ……」

オールマイトという絶対的安心。それが倒れた以上、ヒーロー社会はこれまでと同じ  
ようにはいられない。まして、敵に似たようなのが現れたのだから。

「敵には」  
ヴィラン どこにでも現れる強大な悪夢が味方についた……それを公言された。敵  
ヴィラン

の活性化も大きくなる」

「そこに敵<sup>ヴァイラン</sup>連合だ。悪夢が出ながら、死柄木弔が動くともなれば力はどんどん付けていく一方だ」

「恐ろしいな……M.S.、ダークライという新しく現れたヴァイランの象徴。惹かれた者達は敵<sup>ヴァイラン</sup>連合へと引き寄せられる。兄弟子と妹弟子の連携、余りにもシナジーが組みれ過ぎてる」

余りにも面倒極まりない敵<sup>ヴァイラン</sup>に会議に集まった面子の悉くが俯く。その後、一人が顔を上げた。

「我々警察も」敵<sup>ヴァイラン</sup>受け取り係」などと言われてる場合じゃない。改革が必要だ」

さらに一日程経ち、オールマイトはグラントリノと塚内警部と死柄木弔と依光成生について話した。結論はオールマイトは雄英で先生を続け、二人が捜査を続けるということになった。

その半日後にオールマイトに外出許可が下りた。トゥルーフォームでオールマイトが向かった先は、緑谷がワンフォーオールを受け継ぐため、特訓をした砂浜。

緑谷を呼び出し、砂浜でオールマイトは空を見上げながら待っていた。思い返すのは死柄木弔……ではなく依光成生について。

オールフオーワンは普通の少女だと言った。確かにUSJの時はヴィランとはどこか違う雰囲気があった。ヴィランとも判断がつかない危うさ……オールマイト自身でさえ見当もつかない危険を秘めていた。

だがあの時、殺すことは無かった。林間合宿でさえも、死人は出なかった。今回分かったことだが、明らかに全員殺せる力を有しておきながらそうしたのだ。

「依光成生……普通の少女……社会の天秤……」

だが神野で対峙した彼女にはそれさえも内包したヴィランと化していた。あれは……もしかしたら、天秤が下がったことでヴィランに堕ちたのではないだろうか？

彼女の言った通り、介入など無く私がオールフオーワンに勝っていたなら……ヴィランのトップがいなくなったがヒーローのトップは弱体化しながらも生きている。それを、天秤がヒーロー側に寄ったというなら……よりヴィラン側にいくのが彼女なのだろう。

涙を流していたことも知っている。そしてあの意味も分かっている……ヴィランには事情がある者も多い、見たことがある。

——悲しみの、懺悔の涙だ。

「ヴィランになりたくなかったのにしなければならなかった、のだろうか……？」

「そうだとすれば彼女は救うべき人だ。何かしらの事情があり、ヴィランになり……両親を殺した。」

泣きたかつただろう、叫びたかつただろう、喚きたかつただろう、誰かにぶつけたかつただろう。それでもしなければならなかったとなれば、精神を病んでいてもなんらおかしくない。

……少なくとも私の声は届かないだろう。きつと彼女が欲しいのは、同情などではないのだから。同年代、A組の生徒か……それとも、同じだけの想いや力、似た境遇か力を持った誰かでなければ対話にすら辿り着けない。

オールマイトの思考を遮るかのようにタツタツという足音が鳴る。緑谷が到着したのだった。

「おっ！ やつと来た！」

「オールマイト……!!」

走ってきた緑谷にオールマイトも駆け寄る。そして――

「テキサス……SMASH!!」

――右手で緑谷の頬を思い切り殴った。

「君ってやつは本当に言われた事を守らない！」

「全て無に帰るところだったんだぞ。まったく……誰に似たのやら」

オールマイトの言葉に緑谷は俯く。やったことがやったことだ、叱られるのは当然なのだ。

「緑谷少年、私ね……事実上の引退だよ。もう戦える身体じゃなくなってしまった」

オールマイトがマッスルフォームに変身するも、数秒と立たずにトウルーフフォームへと戻っていた。活動限界が数秒もないとなれば、行動もできないということだ。

「ワンフオーオールに残り火は消え、おまけにマッスルフォームの維持すらできなくなった」

「だというのに君は毎度毎回、何度言っても飛び出していつてしまおうし！何度言っても身体を壊し続けるし！」

緑谷に突き刺さる言葉、オールマイト程の人に言われてもなお止まらない行動。

「だから今回！」

叱られると、ペナルティを覚悟した緑谷に……かけられる言葉は、予想とは違うものだった。

「君が初めて怪我せず窮地を脱したこと、すごく嬉しい」

「……っ！」

緑谷の目が涙を浮かべる。叱られると思っていたら褒められたから、ではない。

オールマイトが嬉しいと言葉にしたことが琴線に触れたのだ。

「次は、君なんだ」

後継、次に託される者。ここまで明確に言葉に、感情に触れるように言われたのは緑谷からしたら初めてだった。

「これから私は君の教育に専念していく。この調子で……頑張ろうな」  
「うう……っ！」

オールマイトが緑谷を抱きしめる。本来あったはずの力は無く、緑谷に力がもう無くなったのだとひしひしと伝えるものだった。

「君は、本当に言われたことを守らないよ……その泣き虫。直さないとって言ったらろう」

■ ■ ■

それから数日後。雄英では家庭訪問が行われ、寮生活へと生活スタイルを変えていくことになっていた。

A組が寮に入る初日、イレイザーヘッド……相澤翔太は寮生活について説明と、会議で決まったことについて話そうとしていた。

「寮について話すわけだが、その前にヒーロー科には話すべきという結論に至った話を



「一つしよう」

ヒーロー科には。その言葉からA組に緊張が走る。ヒーローでなければ話すべきでないという話なら、危険な情報であるという意味だからだ。

コホンと一つ息を吐いた後、相澤は口を開いた。

「合理的ではないんだが……とある一人のヴィランについてだ」

「何故今なのでしようか？」

「そいつがお前たちと同じ年齢だからだ」

ヴィランであり、年齢が同じ。ヒーローとしても倒すべき存在として見るべき存在なのだと言いたいのだろう。

だが疑問が一つ浮かぶ。ヴィランならば捕まえればいい、年齢が分かっているなら情報も詳細に分かっており、話す必要も無いはずだ。プロヒーローが動けば解決するだけの話だ。

A組のそんな思考をぶった切るように相澤はその名前を口にした。

「そのヴィランの名前は——依光成生。ヴィラン名を……M s. ダーククライ、知らないやつはいないな？」

A組の全員の表情が強張る。あのヴィランが、同年代など信じられなかったからだ。

M s. ダーククライ。知らない者は今や日本にいないとすら言われる強大なヴィラン

だ。現れたのは数日前だというのに、その甚大な被害と、あのオールフォーワンが認めたヴィランというネームバリューは恐怖を呼び起こさせるものだった。

そして何より――

「――オールマイトを倒したヴィランだ。今のお前たちと同じ年齢なんだ、お前たちが社会に出ればヴィラン側であれほどの存在がいると思わなければならない」

オールマイトが倒された。そして相澤の言い方から察するに、プロヒーローでも簡単には勝てない存在だということだ。何せ今時点の高校一年生がプロになっても暗躍している可能性があると言っているのだから。

「これを聞いて折れるくらいなら、ヒーロー科にはいない方が幸せだ」

厳しい言葉。だがA組の皆も分かっていた、言っていることはただの事実なのだ。

強大なヴィランが現れて折れるくらいの信念なら、無い方がいい。ヒーローとはヴィランと戦う者、戦う前から折れるならヒーローを止めたほうが幸せだと言える。

「詳細は未だ不明、それほどに強大なヴィランだ。今のプロヒーローでも奴と戦えば勝てるか怪しいだろう」

出てくる情報は全て良くない情報ばかり。名前も個性も分かっているながら、詳細が分からないというのがそれが物語っていた。

そもそも、A組には実害を受けた者がいる。恐ろしさは知っているのだ。

「爆豪、青山、障子、轟……お前たちは身をもって知っているはずだ」

4人が俯く。彼女と戦った者は全員が何の抵抗もできずただ負けただけ。それも神野区の戦いを見れば分かる通り……手加減された上で負けたのだ。

「それが分かかってなお、ヒーローを目指すなら寮に入れ。そうでないなら——俺が頼み込んで、今からでも家庭訪問の結果を覆す」

先生の言葉にA組の全員がガバツと顔を上げる。そんなつもりなど毛頭ないと言わんばかりだった。

「強大なヴィランがいるなら立ち向かわないでどーすんだ」

「勝てるかじゃない。救ける力が欲しいからここにいます」

「俺達は……何も出来なかった。だから、目を背けるような真似はできねえ」

爆豪が、緑谷が、切島が、思い思いを口に出す。彼らはM.S.、ダークライの二次被害から逃げたという苦渋を舐めさせられているのだ。

逃げるつもりなど、当然なかった。

「皆も気持ちは同じか？」

A組の全員がコクリと頷く。彼らはどこまでも……ヒーローを目指していた。

それを感じ取ったのか、相澤は先生として頷く。結局のところ、相澤は雄英の教師なのだ。生徒の決意を無駄にすることは無いのだ。

「分かった。寮について話をしよう」

「当面は合宿で取る予定だった」仮免”取得に向けて動いていく」

そこまでで一度言葉を止めた。後ろ髪を搔きながら、面倒なことがあったと言うように溜息を一つ吐き、話を続ける。

叱らなければならぬ話を。

「んだが……大事な話が挟まる。轟、切島、緑谷、八百万、飯田。この五人はあの晩あの場所へ爆豪・常闇救出に赴いた」

「「え……」」

倒れていた四人が困惑の声を上げる。耳郎と葉隠はガスによって、障子と青山は成生の攻撃によって倒れていたのだ。既に退院できているから問題はないものの、爆豪・常闇救出など知らなかった。

「その様子だと皆知ってみたいだな。色々棚上げした上で言わせてもらう」

相澤は本音をそのまま口に出す。そんなことを教えたつもりは無い、ふざけた真似をしてくれるな、という言葉を。

「オールマイトの引退とM.S.、ダーククライの登場が無けりや、爆豪・常闇・耳郎・葉隠・青山・障子以外は全員除籍してる」

「彼の引退と彼女の登場でかなりの間混乱が続く。今雄英から人を追い出す訳にはいか

ないんだ……それが彼女の狙いかもしれんしな」

M.S. ダークライは闇を導く光と言っていた。なら、ヒーローから蹴り落とされ闇に堕ちかけている人など格好の餌だろう。相澤は教師でありヒーローである以上、そんな真似はできなかつた。

「理由はどうあれ、俺達の信頼を裏切った事実に変わりはない。正規の手続きを踏み、正規の活躍をして、信頼を取り戻していただけると有難い」

奴のせいでヒーローとしての篩も難しくなつた。これも狙いだとするなら……悪夢としか言いようがない。

相澤のそんな想いは不幸中の幸い、そこまで影響はなかつた。ヒーローとして堕ちたものであつても、M.S. ダークライの誘惑に乗るかどうかは別だつたからだ。

ヒーローとして堕ちても、ヴィランまでは堕ちない。そこまで堕ちるなら……オリジン原点に事情があるものしかいなかつたのだつた。

## 二章 ダンシング&スリーピング 闇を導く光と理を壊す少女 邂逅

さて、泣こうが喚こうが過去は戻らない。覆水盆に返らず、未来へと歩を進めよう。真つ先にやらなければならないことが一つ、……正直行き当たりばつたりではあるが仕方ない。本当ならオールフォーワンに相談した方がいい内容ではあった。

要するにスカウトだ。M s. ダークライの信奉者を作らねばならないのだが、放つておいてもできないだろう。

闇を導く光だと言つても、闇を探す方法が無い。むやみやたらと転送しても無駄であり、探すにも効率よく行く必要がある。

そこで白羽の矢が立ったのは電花だった。

「電花、広範囲電波の逆利用はできますか？」

「ぎゃくー？」

「ええ、送信が出来るなら受信もできるかと思つたのですが」

電花の個性は「広範囲電波」だ。送信ができるのはジャミングから放送を乗っ取れたことから分かつてる。

だが個性とは磨き、伸ばし、思考錯誤するもの。私であれば光の射程距離を伸ばすだけではなく知覚といった別の方向へも進めたように、電花にできてもなんらおかしくない。

そして問いの答えは——Yesだった。

「えーと……ん！頑張ればできる！」

「それでは……私に助けられたいって思ってる人の脳波探知みたいなことってできますか？」

「のうは？」

「私に助けられたいって思ってる人が何処にいるか分かる？」

電花は6歳程度……分からないことが多くても当然。ちやうど私がヴィランに悩み始めたのと同じ年齢なのは運命の悪戯だろうか？

「頑張ればできる……かな？」

頭を傾げる電花を可愛さが過ぎたので抱きしめ、そのまま抱っこする。電花も嬉しいのか、頬をMs. ダーククライの胸に摺り寄せていた。

「一度試してみましようか。電花、やってみることは大事なことですよ」

「分かった！」

転送でアジトから外へ出る。真上ではなく都市だ。どうせならと神野区辺りまで転

送る。山の中で逆利用の個性を使っても人がいないのだから意味がない。

「えいー！」

それに距離が同じなら一度使った場所で使った方が距離感が掴める。電花の個性把握という意味でも神野区に近い場所が良かった。

ただ受信した電花の表情は硬くなっていた。送信した時とは違い、膨大な情報をまとめているのだ。いくら成生の子供とはいえ、思考加速は無く情報処理が追い付いていなかった。

「んー……いっぱいいて分かんない……」

ふむと考え込むM s.。ダーククライ。思考加速を発動することも無く、即座に解決を思いつく。

「その座標、私に送れる？」

送信と受信ができるなら別の人に情報を送ればいいのだ。何も電花が全て行う必要はない。

そして知覚光を戦闘時は常用しているM s.。ダーククライからすれば、頭に来る情報処理など個性の発揮どころでしかない。

「簡単！」

電花の言葉と共にM s.。ダーククライの頭に膨大な情報が雪崩れ込む。本来ならそれ



だけで廃人になってもおかしくない程の量だが、M s. ダークライには思考加速がある。情報が頭に雪崩れ込む速度さえも操れるのだ。

かなりの量だった。思考をいつも遥かに速くしなければ追いつかなかつただろう。……おそらく最も膨大な場所であれば、時間さえ空けば何度も使えるだろう。

M s. ダークライには余裕があつた。が、電花は頭をふらつかせていた。

「んにゅ……でもこれ、疲れる……ごめんなさい……おやすみなさい……」

電花の個性は「広範囲電波」だが、基本的に送信だけなのだ。それをかなり無理のある使い方をして受信したなら、倒れるのも致し方のないことだった。

「慣れない使用だから疲れて眠ってしまいましたか。でも十分です、サツと解決してきましょう」

電花を抱き上げ、アジトにあるベッドへと転送する。一度眠れば8時間は起きない子だ。それまでに見つけたことは粗方解決しておきたい。

まずは何故か地下から届いたもの。……電花の個性は電波だから地下は影響外だと思っていたのだけれど、もしかして私の光と同様に、「電波っぽいもの」を受信でもしたのだろうか？ テレパシーみたいなものでも受信したなら分からなくもない。

電波は座標情報も分かる。それなら自分自身から相對座標で移動すれば目の前に出る。転送した先は……子供部屋だった。

きよろきよろと見回すとベッドが一つ、そしてそこに子供の——女子が一人いた。

「……あなたは？」

「ひっ!? 誰……まさか、ダークライさん？」

女子は突然かけられた声に驚く。目の前の現実が思いもしなかったことになっているのだ。プロヒーローでも一瞬呆けるようなことであり、子供ならなおのことだ。

頭から角を生やした子だった。腕に包帯を巻いていたり、虐待でも受けて……いや、ここは地下だった。

ろくでもないことを考えた輩にでも監禁されているのだろう。それで助けを呼んだといったところか。

「私を呼んだのでしょうか？ お名前は何ですか、お嬢さん」

深淵色の瞳を静め、「普通」の少女依光成生の目をする。優しく微笑みかけ、安心していいのだと目の前の少女に雰囲気伝える。

「壊理」

その想いが届いたのか、少女——壊理えりは自ら口を開いた。

■ ■ ■

服装はM s.、ダークライのまま、髪の色が白く変わる。黒いドレスはM s.、ダークライの姿であり、白い姿は依光成生と分けていた。

今は依光成生だ。一般の子供相手にM s. ダークライの瞳は恐怖しか生まないのだから。

「壊理ちゃんか。どこか他人のような気がしないね」

おそらく彼女は希少な存在なのだろう。彼女の身体を使った実験をしていたとしてもおかしくない。

それはまるで、オールフオーワン達に卵子を提供した成生自身のようにだった。違いはただ一つだけ、自らの意志で渡しているかどうかだ。仮に私がオールフオーワンに協力姿勢でなければ、彼女と同じかそれ以上の実験生物になっていただろう。

少なくとも、脳無の母とされていたのは間違いない。……今も似たようなものか。

微笑む成生に壊理は手を伸ばす。掴んでほしいのかと、成生も手を差し出し手を繋いだ。

「怖い」

M s. ダークライ

私 を呼んだ理由だろうか？。呼ぶ人を間違つてると言いたいが、ヒーローがこんなところを見つけれられる訳もないか。それにこの子が助けを呼んだところで届く場所でもない。

ジツと壊理を見つめる。不思議そうな顔をしているが、おそらく間違いない。

「……電花と同じくらい年齢かな。力加減の勉強もあるし、一緒に遊ばせるのも悪く

無いかな」

女子は男子よりも早熟だが、これくらいの年齢ならそこまで変わらない。電花と同じくらいなら、遊ばせるのは二人にとって良い関係になるはず。

「お姉ちゃん？」

「ごめんね、本当はこのまま連れ去ってあげたい。でもそれができるのはヒーローだけの」

私が連れ去つてもヴィランがヴィランを連れ去るだけで意味が無い。その先にあるのは私がヒーローに託すなんて真似になる。そんな真似はする気も無い。

私が懐かせるなり洗脳するなりしてこの子の意志に介入すればヴィランにできるけど、それはこの子の本当の意志じゃない。決心してヴィランになった者と、そうでない者には「躊躇い」に大きく差がある。思考加速できる私なら別だが、死地で影響するレベルの差だ。

何より、M.S. ダークライは闇を導く光なのだ……闇へ導く光ではない。闇に墮ちる人が明るい方へ、暗い方へ行く時に励まして案内するだけなのだ。だいたいの場合は暗い方へ行くのだが……この子は明るい方だろう。

「お姉ちゃんは、ヒーローじゃない？」

「壊理ちゃんに私はどう見える？」

「怖くない、人」

怖いかわくはないかでしか判断できない……監禁されているならそれも有り得るか。

まあ、それだけで十分だ。ちゃんと味方になってあげられているみたいだし。

「連れ去ってあげることとはできないけど、もし壊理ちゃんを傷つける人がいれば悪夢を見せてあげる」

何を言っているか分からなそうな顔をしている。電花と同じくらいの年齢だ、分からなかったのだろう。

壊理ちゃんの場合はこの場で解決できない問題だ。少し通う必要があるそうだった。

「今度、真正面からあなたの下に来る。怖いものが何か分からないと、私でも手が出ないからね。壊理ちゃんは見えないけど傷つけるような人は怖いでしょ？」

「うん」

即答した、ということはそういう人が近くに居るということだ。監禁しているやつと見ていいだろう。

ただそいつを殺して何とかなる話ではなさそうだと直感が囁いてる……脅すか。

目線の高さを合わせ、ニツコリと壊理ちゃんへと微笑みかける。大丈夫だよと伝えるように。

「私は成生、依光成生。言葉に出してみて」

「成生……お姉ちゃん」

「うん。助けられるかは分からないけど、壊理の下に来る。約束、だよ?」

「やくそく?」

約束の概念も分からないか。それならもっとかみ砕いて伝えてあげよう。

「ふふっ……絶対にもう一度来るから、私を思っただけで待っててね?」

「分か、った。成生お姉ちゃん」

「誰だ!!!」

ペストマスクを着けた青年が扉をバンツと開いて入ってきた。同時に壊理ちゃんがビクツと身体を強張らせる。

なるほど、こいつが傷つけている当人か。随分と特徴的なマスクを着けているものだ、どこぞのヤクザが着けているってオールフォーワンに聞いたことがある。

「おや、見つかってしまいましたか。問答無用と来なかったのはいい判断ですね」

壊理を背後に、白いドレスのまま……深淵色の瞳をしてMs. ダークライは入ってきたヤクザをお出迎えする。ヤクザはヴィランとしてはそれなりの大物であり、Ms. ダークライの瞳を見ただけで目の前の人物が誰なのか分かっていった。

ヤクザ——ヴィラン名オーバーホール、本名は治崎。破壊と再生という強個性を持つヴィランだった。

「お前は……！ M s. ダークライ！」

「この子を傷つけているのは貴方ですか？」

指摘するように人差し指を向ける。これだけで向こうは既に死が目の前に突きつけられたのだが、知る由もない。

「傷つける？ そんなことする訳ないだろう、壊理は俺の大事な娘だから——っ!？」

言葉の途中でレーザーソードを起動する。オーバーホールの首元に収束させた光は、いつでもお前を殺せると言っていることに等しい。光速だったため、余りにも速過ぎる死にオーバーホールも冷や汗をかいていた。

そんな状況ながらも数秒、M s. ダークライの瞳とオーバーホールの瞳は睨み合いを続けた。そして根負けしたのは……M s. ダークライだった。

レーザーソードを消し、手を出すつもりは無いと態度で示す。壊理と約束したことを反故にするつもりもなかった。純粹に脅しただけだ。

「……ふうん、まあいいでしょう。数日後に真正面から私が現れます、この子いろいろお話したいです。まあ、躰が厳しいと口出すかもしれませんがね」

言葉を濁して伝えるM s. ダークライ。オーバーホールも言葉の意図を察していた。壊理に手を出せば死が訪れてもおかしくないということを。

だが、せめても抵抗の言葉を口にした。

「……それなら、お世話役にでもなるか？」

M.S. ダークライが近くにいる、名のあるヴィランにはそれだけで十分なメリットとなる。

何せM.S. ヴィランと称される人物なのだ。そんな人物から目をかけられているというだけで一地方のヴィランくらいはまとめられる。オールフォーワンが居なくなつたが、象徴という意味での代わりは存在しており彼女なのだ。

引き止めるのも当然だった。

対してM.S. ダークライはふむと思案を一瞬だけし、条件付きで了承した。

「お世話ですか、もう一人子供がいるのでその子も加えていいならいいですよ。あと時々外に出してもらえれば十分です」

「構わない。あなたの動向を知れるってだけでお釣りがくる」

壊理という希少な存在であっても、M.S. ダークライという象徴の下に付けるなら差し出すのもやぶさかではない。当然差し出すつもりは毛頭なかったが、オーバーホールは一時的に壊理が使えなくなっても問題は無かった。

何せ彼が考えている計画の骨子は……ようやく計画発動が可能な段階に踏み込んだところ、必要な武器の完成品ができたのだ。だが量産という段階で言えば、まだまだ試行が必要だった。



まだ余裕はある、そんな思考を読んだのかM s. ダークライは邪悪な笑みを浮かべ、一言零した。

「一つ忠告です」

「何だ」

「彼女は私が補足しました。無事かどうかも、分かりますよ？」

ブラフだ。オーバーホールはそう予想していたが、M s. ダークライがどうやってここに来たのが全く分からない。

瞬間移動のような個性を持っているのだろうが、逆に言えば一度補足された以上……オーバーホールは逃げられない。座標移動だと考えてもこの場所を探知した個性とセットで持っているとしたか考えられないのだ。

考えたくないが、相対位置ならどう足掻いても逃げられない。M s. ダークライが殺そうと思えば殺せる状態と言える。首に縄を付けられたようなものだ。

「……あなたの動向を知れるのが引き換えなら、ギリギリ範囲内だ」

オーバーホールは自身に首輪を付けられることに、壊理が一時的に使えないことを対価にしてもM s. ダークライの行動を知れるならと承諾した。

そこまで分かれ、尚も承諾したことにM s. ダークライは少しだけ驚く。ヴィランなのだから、首輪を付けられることは一番嫌うことのはずなのだ。いくらネームバ

リユーがあるとはいえ、即座に了承できるようなことではない。

懐に刃を隠せるヴィランでなければできないことだ。

「また来ますね。壊理ちゃん次第なら……考えておきましょう」

壊理ちゃんに希少性があるというなら……仕方ない、壊理ちゃんが酷い目に合うのも条件次第だ。現状で五体満足なのだから、死ぬほど痛い目かもしれないが死にはしないのだ。

それなら、痛覚さえどうにかすればいい。私なら誤認させることなど簡単だ。

「悪夢を見ないことをお勧めします。それではごきげんよう」

M s. ダークライが姿を消す。十分にも満たない時間だというのに、オーバーホールは膝をつき全身から汗を流していた。息づかいを荒くし、どれだけのプレッシャーと戦っていたのかなど、見ればすぐに分かる程だった。

数秒後、ドアの方から一人が応援に現れる。オーバーホールが信頼する仲間、音本だった。

「若！」

「大丈夫だ……あれは、化け物だな」

格の違い、オーバーホールはそれを理解できてしまった。壊理さえいれば何とかなると信じているが……その心情が折れかねない程の恐怖を、深淵色の瞳から感じ取れてし

まったのだった。

その後、関東一帯に悪夢が現れた。

悪夢はウイルスに堕ちたいものには堕ちるように背中を押し、この日だけでウイルスの被害件数が二倍以上に膨れ上がっていた。

悪夢はその後、半日のペースで各地方へ現れた。関東、関西、中部、東北、北海道、九州、中国、四国……あらゆる場所に現れたM s・ダークライは、まさしく言葉通り「どこにでも現れる」ウイルスとされ、再び新聞の紙面やネットニュースの一面を占めるのだった。

## 闇を導く光と理を壊す少女 再会

帽子を被り、髪型をウェーブがかったミディアムにする。服装も夏の制服ではなく私服だ。肩だしの白いトップスに水色のフレアスカート。伊達メガネもかけ、端から見ても依光成生とは結び付かない外見だ。

依光成生を第三者が見つけるのは個性を使えば簡単だが、使わなければ難しい。高校の制服や当時の私服を着ていた依光成生は、帽子も眼鏡もかけていない。髪型もショートボブだし、身体つきも変化超再生で少し変わっている。

見た目も体型も変わっている人間を同一人物として探す。それも唐突に現れる人物なのだ、予知でもできない限り見つけることは出来ない。

都市近郊までは転送で移動し、そこからはよくいる高校生のように電車で移動し一時間ほど。一度も訪れたことのない、和風な家のインターホンを鳴らした。そこにいる人物と会い、真正面から行くと言ったから行った行動だった。

「すみませーん。治崎さんいますか？」

そこに住む人を近隣住民は知っている。死穢八斎會という極道、ヴィランの巣窟なのだ。そんなところに「普通」の少女が訪れる訳が無い。知っている者からすれば歪な

光景がそこにあつた。

ガラツと扉を開き、マスクをした人物が成生の目の前に立つ。死穢八齋會の鉄砲玉、かつかめりきや活瓶力也だ。死穢八齋會でも汚れ仕事を行う「八齋衆」の一人だが、門番をするような人選ではない。

明らかに、目の前の人物が同等以上の危険性を持つため、何かあつた時時間稼ぎできるようにと送られた者だつた。

「お嬢ちゃん。ウチがどこの組か知つて来たのかい」

「お世話を頼まれました」

力也は何をバカ言つているのかと言いたかつたが、お世話というワードでオーバーホールが言つていた人物と同一人物なのだと悟る。

今八齋會を仕切つている若頭であるオーバーホールから言われた言葉だ。新しい世話係が来ると、何かあつたら危険が過ぎるからお前にしか対応が任せられないと。来たら俺のところ连接到いてこいと。

「誰のだ」

「壊れちゃうかもしれない者をつて頼まれました。理由はそんなところです」

笑顔で話す少女に力也はコクリと頷く。目の前の人物が全てを知つていて来た人物だと分かればやることは一つ。

「……こつち来な」

オーバーホールの指示通り、家の中へと招き入れるだけだ。「八斎衆」の中でも力也だけは例外、オーバーホールの弟分なのだ。兄貴分に従うのは当然のことだった。

案内され、客間に居たのはオーバーホール。死穢八斎會の若頭であり、実権を持ち、組を仕切っているヴィランだ。ヴィラン同士なら隠れて行動する必要があるため地下の隠れ家に対応するが、真正面から現れた人であれば地下に隠れる必要も無い。組に客人が訪れたと同じ扱いだった。

「よく来たな、依光成生」

「どうも……どつちで呼べば？」

「オーバーホールで頼む」

ソファに座りながら軽く話す。よく見て見ればオーバーホールの横に小さなマスコットみたいな人(?)が座ってる。知覚発光からも、背後に襲えるよう人員配置しているのが分かる。襲うつもりはないだろうに、後で警戒を解かせよう。

さて、そんなことより会話を続けよう。私を知ってたのはヴィラン名だけじゃなかったようだし。

「私の名前、調べたんですか？」

「調べずとも分かる。時々ニュースに上がってる。……俺はなんと呼べば？」

「あー……ド派手にやりましたからね、成生でいいですよ。目の色が変わってるか、服装が黒基調になってればM.s. ダークライです」

ニュースに時々上がるなら十分かな。少しずつ私が社会に浸透してきてる証拠だ。ポツと出たヴィランがそれだけの脅威になるというのは、ヴィランにとつては勢いづかせ、ヒーローにとつては警戒対象が増えることになる。これで第二の私が生まれても問題ない土壌ができたわけだ。

あとヴィランとして行動してるときはM.s. ダークライであり、分かりやすくするために服や目の色を変えたりしている。明確な姿がある脅威の方が敵として現れた時に恐ろしいのだ。明確な姿の無い脅威はただ恐ろしいだけであり、畏怖といった感情は起さない。強盗か幽霊か、みたいなものだろうか。

「あと部屋の外にいる人と、オーバーホール横にいるマスコットみたいな人、争う気は無いので警戒しなくて構いませんよ」

ついだ。警戒しても無駄だから一言言っておいた方がいいだろう。争う気は無いし、仮に有ればただ蹴散らされるだけだ。どつちに転んでも無駄なことだ。

「気づいてたのか。舐められてるなら少し脅すつもりだったが……どうも調子が狂う。まるで普通の高校生みたいだからか？」

「ええ、それなのに私にも気づいている。しかも、実力行使しても失敗するヴィジョンし

か見えない。こんなこと初めてです」

部屋の外から一人、扉を開けて中に入ってきた。ペストマスクをしてるところを見るに、側近だとかそんなところだろうか？

「オーバーホールがいいなら横にいてもいいですよ」

「分かった。音本、横に居てくれ。成生、壊理の世話って約束なんだが……」

オーバーホールは話が早くて助かる。それならこちらもさっさと話を進めよう。壊理ちゃんという存在の、希少性について。

「彼女の身体を素材にした『何か』でもあるんでしょ？」

「……知ってたのか」

表情は変わらずに答えるオーバーホール。動揺を隠せるのは流石としか言いようがない。核心を突かれたらだいたい人は狼狽えるもののだが、大物であればあるほどそれを呑み込む能力が高い。オールフォーワンなんて、さも当然のことだと言うように笑うくらいだ。

『何か』とは言ったが、予想はしている。何せ極道なのだ、作るモノと言えば候補は真っ先に二つ挙がるだろう。武器か、薬物だ。

「銃弾あたりかなと予想しました。そもそもあんな場所に閉じ込めておく時点で予想はつきますから」



「それもそうか」

一息吐き、要求の予想とそれに対する返答もセットで送りつけた。成生は勤の良さだけは突出してゐるほどに良い、程々に賢しい者からすれば未知の恐怖にしか思えない程に。

「そして素材として使わせろという要求だと見ました。私の答えは、『構いません』」「つー……いいのかわ？」

オーバーホールは壊理について一言も話していない。だと言うのに作っているモノが完全にバレるという異常事態だ。そこまではまだ耐えられた。

だが成生の答えが予想とは真逆だったことには、動揺を隠し切ることはできなかつた。

それでも、計画まではバレていないことがオーバーホールの動揺をギリギリで止めていた。情報がほぼ皆無な状況からここまで暴かれた以上、目の前の人物への警戒心が否応なしに上がってしまう。

「出来ることなら一回くらいで終わってほしいですけどね。私も協力しますよ」

そんな心境だったからか、オーバーホールには協力という言葉が意外だった。

いつの間にか、オーバーホールの目は見開いていた。依光成生という、M.S. ダークライを作り出した存在の異様さに呑まれかけていたのだった。

「協力?」

「私の光は催眠できます。痛覚を遮断することもできますよ。嫌々なんて問題になりません」

人差し指を天井へ向け、ポワツと小さな光を灯す成生。そのままフリフリと指を振る。まるで催眠術をかけるかのような動作にオーバーホールも納得する。

何より、神野の戦いをオーバーホールや横に座っている入中といった面々も見ていたのだ。催眠と言われ、生放送で示した光という心当たりはあった。

「そういうことか。お願いしたいところだ」

「話はこのなところでしょうか。必要が出来たら呼んでください。それじゃあ……壊理ちゃんはどこですか?」

「知っているだろう?」

先日訪れたのは転送を用いて直接部屋へという形だった。歩いていくような真似はしていないのだから行き方なんて見当もつかない。

もつとも、これはオーバーホールが少しでも情報を得ようという口舌だった。成生は気にも止めず口に出した。

「直接乗り込んだ道順なんて知りませんよ。あの時は壊理ちゃんの場所の目の前に出るよう移動したんですし」

「……仕方ない。案内しよう」

「その前に一つだけ質問させてください」

音本とか言ったか、さつき後ろにいた人が話しかけてきた。声をかけられたと同時に違和感を感じたところから察するに、会話で効果を発揮する個性だろう。

……洗脳系ではないはずだ。直感的にはそんな個性ではなさそうと感じる。

「音本？」

「私たちに危害を加えるつもりはありますか？」

そんなつもりは無い。そう言おうとしたが……なんか勝手に声が出た。

「壊理ちゃんと私の機嫌次第かな。……本音を言わせる個性ね。心配だったのは分かるし、私の気分は悪くは無いからいいけど、次やったら指でも貰おうかなあ」

「っ！申し訳ございません！」

「俺の部下がすまない。壊理にはあれから手を出してない、それでいいだろうか？」

「今回はいいですよ。そんなことより案内してください」

オーバーホール達の安全保証なんぞよりも壊理の安全の方が大事だと言い放つ成生に、彼らは歯を食いしばりながらも睨みつけていた。

マスクによって、成生に口元が見られてないことが幸いだった。



「成生お姉ちゃんー！」

「待たせたかな。ごめんね」

オーバーホールに案内され、先日来た壊理の部屋へと到着した成生に壊理は飛びついてくる。成生は何の警戒もせずに抱き留める。

包帯も付いたままだが、変わりはない様子だ。それどころか少し元気になったようにも見える。

「ううん、成生お姉ちゃんが来てから痛いこと一回も無かったよ」

なるほど。オーバーホールは忠告を守ってくれていたらしい。話を通じるからこそ判断だが、今回は間違っていない。

何故ならMs. ダークライとして活動できていた私が嬉しいから！

「うんうん、ヒーローじゃないけど来た甲斐があったつてものだね」

むふーと喜悅の顔を浮かべる成生に、疑問符を浮かべる壊理。オーバーホールはその様子に溜息を吐いていた。

成生が感情的にやりたいことをやっただけがこの結果なのだ。付き合わせさせられた方は溜息の一つも吐きたくなるのは当然のことだ。

「成生お姉ちゃん、ヒーローじゃないの？」

「あはは、それは違うかな」

私がヒーローだなんて今や天地がひっくり返らないとあり得ないことだ。ましてやここはヴィランのアジト。ヒーローなんて一人も居てはいけない。

「私にとつては、ヒーロー。ダメ？」

「ありがとね。ここから出してあげられないから……ヒーローだなんて呼んじゃダメだよ」

呼ばれたらヒーローへの内通者のようにも取られかねない。オーバーホールとは今は関係を崩すつもりは毛頭ないのだ。

粘られても困る。さっさとやりたいことを進めよう。

「あ、そうだ。私の子供……友達を呼んであげる」

転送を使いアジトで眠っている電花を呼び出す。目の前に現れたのはくかーと眠っている電花の姿だった。

「くう……むにや……っは！おかーさん!?ここどこ!？」

「ちよつと他所に出て来て来てるだけ、落ち着いて聞きなさい」

「うん!」

元気のいい返事。壊理ちゃんと遊ばせるには十分。……むしろ壊理ちゃんの方が壊れないか心配だ。

「誰?」

「電花、自己紹介しなさい」

「僕は依光電花！おかーさんの子供だよ！……って君は？」

「え、えと……壊理」

たどたどしく答える壊理。外で走り回っている電花に対して中でマトモに遊ぶことも出来ない壊理ちゃん。相性は悪くないはずだけど、最初は注意しながらじやないダメそうだ。

「壊理ちゃん？」

言葉そのまま返す電花と視線を合わせてしゃがみ、大事なことですと前置きして話し掛ける。

「いいこと？壊理ちゃんは電花に比べたらものすごく身体が弱い。つまんだら千切れちゃうくらいに」

「……え？えええ……どうするの？」

「だから、電花は加減というのを覚えなさい。壊理ちゃん、電花の頬をペチペチ叩いてみて」

困惑する壊理だったが、成生に言われた通り電花へと近づいて頬をペチペチと叩く。年齢に合った子供の喧嘩であればこんな行為をするであろう、そういう行為が行われていた。

「え……う？こ、こんな感じ？」

「おかーさん、何これ？当たった感触はあるのに全然分かんない」

もちろん電花の身体スペックからすればそんなもの風が吹いたようなもの。熊とタイマンして勝てるような電花からすればどこ吹く風もいいところだ。

が、手加減をマトモにしたことのない電花には必要なものだ。何せ成生が人の前に出さないようにしているため、組手だのといった訓練相手が回避能力だけは電花を遥かに超える成生と耐久お化けのマキアくらいだ。

それ以外は地上の動物相手になるため、人相手の手加減など一度もさせたことがなかった。

「それが壊理ちゃんのご感覚。それくらい壊理ちゃんはお弱いのに」

「え、じゃあちよつと山四つ走り回るなんてことできない？」

「出来ません。壊理ちゃんのご感覚に合わせて動きなさい」

ちよつとの感覚ですらこれだ。困惑する電花に答え、力加減を壊理ちゃんベースにするよう諭す。

そんな様子を見ながらも、壊理は同年代の少女に目がいつていた。同年代など一度も見ることが無いのだ、興味が湧くのも仕方ないことだった。

「えと、電花……ちちゃん？」

「ええ、良かったら、一緒に遊んでくれると嬉しっ!？」

成生が勧めるするよりも早く、電花が壊理へと飛びつく。

だがそこには既に力加減が壊理に合わせたものとなっており、ただ6歳程度の少女が二人いるだけだった。

「えっと……これくらいかな？壊理ちゃん！よろしくね！」

「わわっ!？」

「抱きつけるなら大丈夫かな。流石子供の学習力……私の個性も混じってたら早熟も当然か」

ふむと思考に耽る成生。まさか一瞬で力加減を覚えるとは流石に思ってもいなかったのだ。

何せこういうのは時間がかかるものだ。成生自身でさえ力加減、手加減、どちらも時間がかかった。2、3日でできる程度ではあったが、一瞬ではなかったことだけは覚えている。

考えられることとすれば、最適化が発現した後の卵子を使っているからだろうか？電花自身の身体が最適化が行える身体能力になっているとすれば、あり得る。

私からダウングレードしたような、毛色の違う形で最適化が行われているならこういう形が正しいと言えるだろう。



そう結論付けた成生の思考に邪魔するように、オーバーホールは声をかけてきた。至極まつとうな指摘のために。

「おい、ガキ呼んで遊ぶのはいいが……外出るなら俺に一言言え」

「もちろんです、オーバーホール。明後日辺りにでも出ましようかね。服を何着か買おうかと思つてますが、お金あります？」

「ふん」

オーバーホールがポイツと投げた財布を受け取り中身を見ると、それなりの額が入っていた。これだけあれば何着か服を買つて遊ぶくらいは簡単にできる。

「十分です。それじゃあ壊理ちゃんと遊びましようか」

成生の言葉に壊理はハツと何かに気づき、数歩後ずさる。まるで何かに怯えるような表情に突如として変わったことに、成生も疑問符を頭に浮かべていた。

「……でも、個性が……」

そういえばと、壊理がそもそも何故助けを呼んだのかということを出す。希少性がある個性であれば、デメリットも相応にあるのだろう。

「オーバーホール、壊理ちゃんの個性つて何です？」

『『巻き戻す』個性だ。何でもかんでも巻き戻す』

巻き戻す、確かに破格もいいところの個性だ。おそらく私と同様に突然変異だろう、

そんな個性が血で繋がってたらどこかで途絶するのが妥当なのだから。

そして訓練もしていないなら対象となるのは対人だけだろう。壊理ちゃんの周りの物には影響してなさそうだし。

「ああ、それなら納得。希少もいいとこだし、私でも立場が同じならオーバーホールと似たことするでしょうね」

壊理ちゃんに聞こえないように小声で呟く。オーバーホールは耳聡いようでも聞こえていたようだが、壊理ちゃんはポケツとした顔をしたまんまだ。

ニタリとした目をするオーバーホールはを放っておいて、壊理ちゃんへと人差し指を向ける。数歩下がったなら丁度いい位置だ。

「壊理ちゃん、こっち見て」

「え?」

「『壊理ちゃんは個性が暴走しなくなる。暴走しそうになったら気絶する』」

ポワアと光る指に注視していた壊理はそのまま目をぐるぐると回していき、倒れた。

「きゆう……」

「最初だから気絶しちやいましたか。突然でしたし、そうなってもおかしくはないですか」



「おい、今のは何だ」

倒れた壊理ちゃんを抱き、ベッドに移動させオーバーホールが問いかける。突然の行為だった、聞かないという選択肢は無い。

「言つたでしょう？催眠です。この子の個性が暴走したら私だつて死にかねない。安全の保障は当然でしょう？」

「そんなことまで出来たなら操り人形も簡単じゃないのか」

ある意味ではオーバーホールが最も求めている能力だ。壊理の性格さえ変えて自由自在に操れる人形にできるならこれ以上の物は無い。

だが成生は首を横に振った。

「個人によつて効果が変わる。個性関係だとせいぜい一か月持てばいい方かな、成長するものだし」

今回の催眠は個性に向けたものだ。そして個性とは身体能力とすら言えるものであり、成長すれば小細工など振り切つて伸びる。子供ともなれば成長具合もでかく、催眠もたいして効かないのだ。

オーバーホールは説明を聞いても熱が冷めていかなかった。何せ理想が目の前にあるのだ。手を伸ばせば届く距離にそれがあつて、伸ばさないヴィランは存在しない。

「成長に合わせてやれば」

「言っておくけど催眠は本人にメンタルに影響を及ぼしやすい。壊れた理由になってもおかしくない」

「修復なら俺が……いや、影響を考えると多用はできないか」

落ち着いてきたのか、説明をようやく呑み込むオーバーホール。成生もオーバーホールも壊理が壊れることは望んでいないのだ。

オーバーホールは個性が使える状態での現存を望み、成生は壊理が傷つかないことを望む。成生の望みはヒーローが挟めば解決するのかもしれないが、壊理が表に出て精神的に傷つかないとは言えないのだ。

むしろ個性が暴走すれば即殺人犯として扱われる可能性もある。個性を聞き、現状維持と個性慣れへと進めたのは、成生も今すぐにどうこうという話ではないと諦めた部分もあった。

「壊理ちゃんが壊れないギリギリで残りの催眠は『オーバーホールの実験時痛覚遮断』と『オーバーホールの実験嫌悪緩和』くらい。子供だからそこまで多くはできない」

はあと溜息を吐いてオーバーホールにできる範囲の協力を伝える。オーバーホールはコクリと頷き、助かると一言告げる。

「そうか、いや、十分だ。ここまでしてくれるんなら組に入れてもいいんだが」

「私はどこにも所属しない。自由気ままに好き勝手やるだけ」

成生のヴィランとしての象徴は支配ではなく自由だ。個性をのびのび使って好き勝手生きられる社会の方がいいという方向なのだ。

ならばそのトップとなる成生はどこにも所属などしないのは必然。

「……分かった。だがアンタが変な動きはしないように俺も監視にはつく」

「ここにいる間は遊ぶだけだから監視なんてしなくていいのに。壊理ちゃんに自己紹介はできたし、電花の紹介もした。あと真正面からも入ってきたから……真正面から帰れば疑いもない」

壊理ちゃんが倒れた今、残りの用事をこなすとしよう。まずは私はここにきた一般人だというように状況証拠を固める必要がある。

トップクラスの搜索能力を持つヒーローならば致し方無いが、そんじょそこらのヒーローや公安ならその程度で仕込みだけで疑われることも無くなる。

そのための今回のシナリオは、「お手伝いとしてアルバイトにでも来た人が住み込みで作業を行う」ことだ。今回が面接とするなら、極道の中に私服の女性が混じるのは違和感はあるが、子供の世話の面接ならそこまでおかしくも無い。

住み込みなら一度面接に来て、その後は外から見えない場所で転送による移動か壊理ちゃんと一緒にに外に出ればいい。それだけで社会の目は誤魔化せる。

「一応俺が外まで送ろう。それで監視カメラには問題ないようになる。そのガキはど

うにかしてくれ」

「電花、壊理ちゃん都合悪くなったので今日はおしまいです」

「えー……うん、分かった」

「先に帰っててね」

電花を転送でアジトに帰し、オーバーホールへと残りの用件を口に出す。

「これでよし、もう一回真正面から来た後は転送で来れば大丈夫かな。外からはここに住んだって扱いにすれば問題は無い」

「そうだな。それで頼む。帰り道は今回は同じだ」

帰り道は来た道を迎ればいいなら問題ない。来るときによく分かったがかなり入り組んだ地下に入っており、ここに来るのにも一苦労するレベルだ。

とはいえ私は問題にならない。土流や知覚発光やらで三次元知覚能力は随分と訓練されている。地下空間を覚えろと言われても容易なことだ。

壊理ちゃんの部屋を離れ、帰り道に行く。当分は使うことになる道だ、遊び半分の装飾くらいはしてもいいかもしれない。

……遊び半分？

「オーバーホール、一ついい？」

スタスタと迷わず進む成生は、一定の距離を保ち後ろを歩くオーバーホールに忘れて

たと言うように声をかけた。

「何だ」

「ヴィラン連合を利用する気はある？」

兄弟子扱いにされている弔の率いるヴィラン連合は成生からすれば遊び半分であろう場所だ。今は面子をバラしているだが、トウワイズがかなり近くにいるのは分かっている。

遭遇する可能性は十分にある。聞くだけ聞いておこう。私と弔は別に争わないという選択肢をずつととっている訳ではないのだから。

「一応な。釘でも刺そうってか？」

「ううん、私と弔は仲は良いけど同志じゃない。だから……私に配慮して、なんて真似はしないから」

世間一般では妹弟子なんていう扱いだから勘違いされがちだ。協力すればヴィラン連合に強力なヴィランを送ることだってできるが、していない。

理由は二つ、一つはそもそも私がヴィランに墮とす人はだいたいの場合、ヴィラン連合入りできるような精神性を持っていないことがある。

私がヴィランに墮とす者は「ヴィランに墮ちるか悩む者」だ。やりたいけど一歩踏み出せない、そんな人に大丈夫だと背中を押すのが私のやり方だ。

要するに初犯の人が多いのだ。それなのにスピナー除くと凶悪な面子が揃うヴィラン連合に薦められるはずもない。

もう一つは単純に私がしたくないから。弔が勝手に同志集めてよって話だ。

「そいつは助かる。俺の計画にはヴィラン連合程度のネームバリューが欲しいんだ。アంతが表に出ると、アంతに手柄を取られちゃうからな」

「私だとネームバリューがでか過ぎるからね……。オーバーホールが活躍しても私が横にいるだけで私のせいになる。誰も求めてない結果になるね」

想像以上に「オールマイトを倒したこと」と「どこにでも現れるヴィラン」というのはインパクトが強かった。

精力的に活動したことも相まって、今ではオールフォウンの全盛期を知らない人からはヴィランとしてトップクラスの畏怖をされるようなことになっていた。

社会からは、現在のM.S. ダークライを超えるヴィランと確実に言えるのは全盛期のオールフォウンくらいと認識されていた。それも、オールフォウンの全盛期を知らない人も多い以上、最も畏怖するヴィランとはM.S. ダークライと言つても過言ではなかった。

そんな私が表に出て事件を起こせば全部私のせいになる。表社会でも裏社会でもだ。「支配者になるつもりは無いんだろう?」



「弔はなる気だろうけど、私にその気はないよ。自由人に支配は向かないから」

支配なんてどうでもいい。闇<sup>M</sup>へ導<sup>ダク</sup>く光<sup>ク</sup>りとして動きつつ、電花たち……私の子供たちや知り合いと好き勝手生きられればそれでいいのだ。

利用したいなら好きにすればいい。機嫌を損ねたらはらわた食い千切る化け物を、懐に入れる器量があるならだけど。

「そうか、それなら利用できるだけ利用してやる」

「好きにすれば。私の邪魔したら殺すかもしれないから気をつけてね」

それが脅しても何でもないことをオーバーホールは分かっていた。チラリと見えた少女の横目が、深淵色に変わっていたのだ。

世界で最も自由に危険なヴィランが、そこにいた。

「気を付けておこう」

ならばオーバーホールにできることは一つだけ。機嫌を損ねないように……自由にさせるだけだった。

## 計画看破と仮免試験

「まず確認させい。先生を倒した理由は？」

「デビュタントに要らないから」

少し日が経った後、成生はドクターの下を訪れていた。電花の触診と言う意味では、正しくドクターという意味で間違いではなかった。

だが触診するドクターは、オールフオーワンへの側近であり……その忠誠心は崇拜というレベルだ。オールフオーワンを倒した成生など敵としか思えず、その人物がオールフオーワンを倒す前と変わらない様子で現れたのだから恐れ入る。

しかしこれまでかなりの時間を共にした仲だ。ドクターも、現れたら即座に攻撃する程までの怒りは抱いていなかった。理由さえはつきりしていれば、の話だが。

「……何故？」

「あの調子じゃオールマイトに負けてたよ。圧倒的に気迫で負けてたし、何より悔つてた。私なら初手で周囲へと被害を齎す方向に行くし、なりふり構わずオールマイトを倒そうとするならそれが最適解。なのにオールフオーワンは真正面から戦つてた」

ふむ、とドクターは考え込む。言葉をそのまま受け取るなら、M.S. ダークライが裏

切ったのではなく、オールフォォワンの方がM s. ダークライを制御しきれなかったと見る方が妥当なのだ。

ドクターもM s. ダークライの実力は知っている。分析上では、真正面から戦えばオールフォォワンですら勝てない存在だ。最大戦力となった場合での分析なら……個性をうまく使うことが可能であれば、その武力は小国と戦って勝てる程の力なのだ。

故にオールフォォワンは真正面から戦うのは諦めた。後継が居たとしても諦める程だ、ドクターもそれを事前に知らされていた。一時的な敵対も十分にあり得るといっても。

「因縁があるからって勝てない戦いに挑むの？……だったら私の役に立った方がマシ。私が参加している以上、勝てない戦いするなんて私の方が困る」

呆れるような言い方に少しだけドクターの拳に力が籠る。使えないやつだったから捨てたと言われても、捨てられた者が自身が崇拜するような者であれば当然の怒りだ。

それだけの感情を持っていたが、ドクターは押し殺し会話を続ける。伊達にオールフォォワンの側近ではなかった。

「それで計画が頓挫しようともか？」

「それは無い。私の勘だけど、遅れるだけでしかない」

「……どういう意味じゃ？」

まるでオールフオーワンとドクターの計画を全て知っているかのような言い草に、ドクターの口は少しだけ引き締まる。

どんどん直感が鋭くなるはずだ。M s. ダーククライがないタイミングでオールフオーワンと話していた時に、二人はM s. ダーククライの成長についてそう結論付けた。だがまさか、まさかそこまで直感が鋭いとはドクターは思いもしなかった。

「ドクターが一番知ってそうな気がするんだけど、オールフオーワン……あの姿って本物？」

オールフオーワンの後継計画まで掴み取る程の勘などとは。

ここにきてドクターができることは、ただ興味があるように黙って聞くことだけになつていた。

「ほう？」

「個性からして本物なのは間違いないんだけどさ。ドクター、自分の個性を複製した後に自らに個性を入れたらどうなるかなんで一度も話したことないでしょ」

M s. ダーククライから出てくる言葉が全て正解であり、ドクターは背筋が薄ら寒くなる。

ドクターは自らの個性「摂生」を複製し、オリジナルをオールフオーワンに渡している。自らが持つ個性は複製したものだ。そしてオールフオーワンも同様に、自らの個性

を複製した上でオリジナルを保管している状態だった。

その情報を欠片たりとも渡していないにも関わらず、M.S. ダークライは全貌を勘だけで明らかにした。オールフォーワンから何かしら情報を得ているのかもしれないが、絶対にここまで届く情報ではないとドクターは言い切れる。

なぜならオールフォーワンは慎重で狡猾だからだ。自身の弱点とも成る情報などドクター以外に教えるはずもない。

「私も複製するような個性を持つからなんとなく分かったんだ。似たような気配っついてるか……オールフォーワンの個性って複製したものじゃない？」

「……」

奪い与える個性と、複製して自らのものにする個性。確かに最終的に自らのものにするという意味では近い特性を持っていると言える。

しかしあくまで近いだけだ。氷と炎が熱操作で近い特性を持っていると言っているようなものであり、氷だけを扱うものが炎を扱うものの動きが怪しいと勘づけるか？ということと同じだ。

それを何の疑いもなく言葉にした。まるで無邪気な子供が疑問を口にするように。

「そして個性に意志が宿るなんて話もオールフォーワンから与太話で聞いたことがある。……本物の個性オールフォーワン、研究所のどっかにいるんでしょ？」

「……」

少なくともデビュタント前はここまで直感は鋭くなかった。ただの一回のヴィランとしての戦闘が、M s. ダークライをここまで成長させたとすれば恐ろしいと言う他ない。

「その移植先は弔でしょ」

「それは分からん。お主かもしれん」

これは本当のことだった。もしも弔に万が一があれば、成生に支配者になるという可能性があれば、薄い可能性は存在していた。

それも今潰された。オールフオーワンの個性は人格があるのだ。人格が融合するよくなことになるのだが、力を受け入れる覚悟を前提としており、覚悟の無い……しかも強大な意思を持つ融合元の人格と融合するのは難しい。

そもそも、オールフオーワンが自らその可能性をゼロとしていたこともある。M s. ダークライは器足り得ないと、明言していた。

「それこそあり得ない。オールフオーワンは私そのものを欲しがってた。それに私じゃ……逆に塗りつぶしちゃうよ?」

オールフオーワンはM s. ダークライを横に立つ者として認識しているのだ。ドクターも分かっており、後継として見るつもりは無かった。

ドクターからすればオールフオーワン後継計画の大半が暴かれたことは恐るべきことだったが、味方である以上恐れる必要はないことでもある。そして驚愕すべき事實は武力は知っている以上、直感の鋭さ……成長の速さという一点だけだ。

「……たった一夜の戦いでそこまでヴィランとして成長したか……流石はM.S. ダークライと言うべきじゃな」

「これで問題は解決？こっちの話もしたいんだけど」

いつの間にか成生は自身の背中に転送させ、電花を背負っていた。電花をベッドへと下ろし様子を見ると、スヤスヤと眠りについており、母親が寝かしつけたようだった。

「電花か……経過はどうじゃ？」

「元気がいっぱい、有り余る元気が良過ぎて変化超再生が間に合うのがギリギリ」

成生がドクターの研究所を訪れた理由はこれだ。

電花は実験体だ、寿命もそう長いものではない。だからこそ定期的に経過を見ておく必要があるのだが、今回は少し無茶をさせ過ぎたと成生は感じ取っていた。

元気が余り過ぎていることが心配ではあった。成生がお願いしたからテンションが上がってそうなったのか、それとも寿命を燃やし尽くそうと動いているのかが分からなかったのだ。

「ふむ……少しこちらで預かろう。そこまで元気良くさせたつもりは無かったんじゃ

が」

「私は助かってるからこのままでいいですよ。前に暴れたから数日は静かにしていいだろうし」

ドクターが電花の身体を調べたいというので数日程預けることになった。問題が無ければすぐに戻ってきてくれるはずだ。

電花にはM.S. ダーククライとしての行動でも、私自身のメンタルという意味でも助けられている。こんなところで倒れられたらたまったものじゃない。

「電花がいらないなら……壊理ちゃんと遊びましょうか」

丁度いい機会だと、壊理ちゃんのお服を買ったりお話ししたりしながらも、個性伸ばしもガンガン進めていくのだった。



9月になり、ヒーロー仮免試験を行うということで会場にヒーローの卵たちが集まっていた。成生もまた、姿を透明にして紛れ込んでいた。

雄英はまだ来ていない。来ているのは土傑と他のところからの生徒だ。

私は少し前に到着した、今日は壊理ちゃんのお世話は休みだ。というのも、目の前にいる人物……土傑高校のケミイの姿をした人物が居たから遊びに来たのだ。その合流場所がここだった。



服装や格好は壊理ちゃんのお世話の時と変わらない。どうせ今日はずっと透明になって隠れている予定なのだ、姿を見せる必要も無い。

「お花摘みに、少し離れますねー」

「すぐ戻ってこい」

士傑高校の集団からケミイは一人抜け、トイレの方へと歩いていく。成生も誰にも気づかれないように注意を払いながらそれについていく。

そして、周囲に人がほほいしない通路まで来たところでケミイは呟いた。

「成生ちゃん、いるんでしょ？」

「流石だね、トガちゃん」

目の前の人物——ケミイの姿をしたトガちゃんが振り向き、透明になっている成生へと話しかけてきた。

本州全域を転送範囲として扱える成生はどこに誰が居るか、その気になれば把握できる。トガはヒーロー仮免試験に変身して潜り込もうとしてたのだ。成生も面白そうだとやってきたのだった。

そして話を聞けば、変身の個性に使う血液を集めに来たのだと言う。具体的な目標としては、緑谷と麗日だ。

「という訳で、緑谷君たちに会いに来たのです」

「んじや私も行くー。トガちゃんが見つかったら問題だし」

戦力的に私は別として、トガちゃんが一人で見つかったらヴィラン連合は致命傷になりかねない。茶毘の範囲殲滅やトウワイスの数による制圧も貴重だが、トガちゃんの潜入も貴重なのだ。

トガちゃんが捕まれば単独隠密行動ができる人間がいなくなる。情報戦でヒーローに負ける可能性が一気に濃厚になるのだ。

「でも成生ちゃん参加できないですよ？私は変身できるから参加できるだけです」

それに私はトガちゃんのこと気に入っている。だからこそやるべきことは一つ。

「もしも危なくなったら助ける役割かなー」

「なるほどー、成生ちゃんがいるなら安心なのです」

なんかいつもこういう役回りになっているが、戦略的には間違いいではないから困る。  
殿しんがりには一番強い者を配置する、間違っではないのだ。が、毎回こうだとやる気が下がる。

今回はトガちゃんしかいないから見守るだけで十分だけれど、それも周囲に引率のヒーローが居る中だ。プレッシャーはそれなりにある。

「士傑の一人に変身して入ってます」

「それじや私は観客席から見てるねー」

まあ、ヒーローが居ると言っても私は余裕を崩すことはない。デビュタントの時と比べれば戦力は少ない。

ヒーローの卵たちの数は1000を超えるため同時に戦いにくければ話は変わるかもしれないが、そうなったら卵を壊しにいくだけだ。ヒーローは助けにいかねければならないため、戦いにすらならなくなる。

そんなことを、始まった試験を観客席から見ながら考える。遠目にイレイザーヘッドとか見えるけども、全然バレる気配は無かった。

「んー……あの様子なら心配する必要すら無かったかな」

トガちゃんは緑谷を見つけてボールをぶつけようとしたり引っ掻いたり好きにやっている。随分と楽しそうだ。

一番警戒すべきだなと見た今の緑谷も、トガちゃんの体術なら翻弄できるレベルだ。これならまず倒されることもないだろう。

ついでだ、雄英や今後見ておくヒーローの卵の評価でもしておくでしょう。情報は武器だ、初見で突破できる個性ばかりじゃないのだから。

「雄英は随分と成長したみたいだね、特に緑谷。戦い方も変わってるし、体育祭で見た力を100とするなら……10くらい？それより下は無いか。このまま成長されると私も追いつかれる日が来るかも……。……なんて、あり得ないか」

オールフオーワンの逆の個性だっけ、ワンフオーオール?……10%でも言うべきかな?それだけで体育祭の時とは比べ物にならないくらい強くなってる。多分全身に力を張り巡らせてる感じだろう。

それでも今の私の素の体術で制圧できるレベルだ。私の変化超再生によって強化されていく上限は彼基準で言えば80〜90%くらいだが、既に40%は超えている。これに超瞬発力を入れれば100%を超える。

とはいえ緑谷も相当に頑張っているのは見て分かる。以前に調べた時に知ったが、彼は元々無個性だ。オールマイトの後継と成る力をそう簡単に扱えるはずもない。それをあそこまで使いこなすだけでも尋常ではない努力が必要だったろう。

顔を別の方向へと向ける。そこにいるのは爆豪・切島・上鳴の三人。

「評価なんてしたくないけど、爆豪も成長してるみたいだね……ただヒーロー仮免試験って言うくらいなんだから、性格変わってないなら落ちても全然おかしくないよね」  
今見てる試験だと武力鎮圧における連携の面を見ている感じだ、ここで落ちることはない。

だが仮免試験というくらいだ。爆豪はヒーロー像における「助ける人への安心感」はマイナスに振り切っている以上、これだけで合格する等と言うことは無いはずだ。できれば義賊レベルのヴィジランテだってヒーローになれる。

とか思ってた見てたら爆豪が丸め込まれた……物理的に。対峙している士傑高校の生徒の個性だろう。

「……初見殺しの個性も多いなあ。「精肉」なんて、人形操作無かったら私でも喰らえば終わりだし」

どうやら揉み解せるように身体の性質を変化させる個性のようだ。耐性を持っている人など存在しない個性であり、当たれば基本的に確殺だ。

私でも人形操作で私自身を人形として扱い、対応しなければ丸め込まれるだろう。精肉で人形自体を変質させようとも、操作させる部分でぶつかることになる。人形がどんな形になろうと、元の形に戻せるように操作できるのだ。そういう意味で私にはデバフ程度の扱いになる。

ただ面倒なのに変わりはない。対峙するなら向こうが動く前に殺すか、確実に回避してカウンターすることになる。身体能力と反応速度はあるから問題は無い。

「結局のところ、回避or先手必殺が私の最善手。サーチ&デストロイが最適戦略……言ってる悲しくなるね」

丸め込まれた人を踏んづけながら上鳴と肉倉が対峙する。成生が注視していたのは、踏んづけられている人だった。

先程二人を助けるように動きそのまま丸め込まれた、切島の姿がそこにあった。

「……切島くん、か。んー……どうせだし、少し話そうかなあ?」

成生は切島のファンだと伝えたが、ファンらしい行動を取れていない。タイミングが無かったというのもあるが、そもそも切島は体育祭後のインターンくらいしか行動する機会は無かった。未だ期間が短いために活躍していないヒーローと言える。

そんなヒーローに対して行動するのは……成生にしては珍しく、ためらいがあった。もしストーリーカーと言われたら一日二日は凹む自信はあった。

「いや、止めとこ。代わりにファンレターでも送るのがいいかな。つと、あれは……?」  
妥協し、懐からファンレター用の手紙を出して書き始めながら様子を見てみると、上鳴が隙を突いて士傑の生徒を硬直させ、爆豪と切島が気絶させていた。

硬直させれば元に戻れる、電気系の個性なら当てただけで硬直させられる。相性が良かったとも言えた。

しかし成生が見ているところはそれらも含めた上鳴という人物の全体像全てだった。随分と……自分が作った子に似ている。

「上鳴電気。帯電の個性……それに髪色とか、たまに出てる素の表情。もしかして、電花の?」

直感が合ってるって恐ろしい勢いで囁いてくる。絶対にそうだと叫んでいるようだ。

世界一父親として認識されない父親という不名誉を無理やり渡されたのは彼だった

らしい。渡した側として、不憫だなと思わず哀れんでしまう。

「初動はあんまり良くないけど、危機に近づくと能力を発揮するって感じ。そんなところまで電花に似てる……逆か」

ボケた顔をしながらも、危険を察すると能力を発揮する電花の顔が浮かぶ。壊理ちゃんのの身体に一度触れただけで、個性の暴走という危険を察したのか力加減を一瞬で覚えた時を思い出す。

あれは、私もだけど父親の特性まで引き継いでいたからこそそのものだったらしい。

「パパ、ね。無責任どころか認識すら無いなんて……私ヴィランしてるなあ」

思わず両手を頬に当てて身体をくねらせてしまう。悦に浸るといっのはまさにこのことだ。

うっとりとしている成生だが、透明になって隠れている状態だ。隠密状態とも言えるのだが、身体を動かせば座っている椅子に擦れる音は出る。

それを見逃さない程、警備は馬鹿ではない。

「誰かいるのか？」

「あ」

転送回避！

「あ、危なかった。トガちゃんは……抜けたか」

咄嗟に上空へ転送で逃げた成生。いくら光速で反射できるとは言っても、基本的に戦闘態勢になっている時だけなのだ。ほんの少しでも警戒しようという思考が欠片も無いなら、不意を突かれることもある。

デビュータントしたからか、それとも個性がどんどん強くなっているからか傲慢が表に出てきているのかもしれない。少し気を引き締めて置いた方がいいかもしれない。

「このまま空から……いや士傑に風使いがいたっけ。隠密するしかないか」

透明のまま、トガちゃんが入っていった待合室のすぐ横へと転送する。人形操作を使えばトガちゃんがやっていた技術も成生は使える、気配を存在ごと消す技術を使うことで誰にもバレることはないのだった。



待機室へと入っていく爆豪、切島、上鳴。その後ろからスツと待合室へ入っていく。

中には既に通っていた士傑高校の夜嵐や、轟、緑谷達といった面々が揃っていた。そして一人で孤立させられるような場所はない。

(だよなー。そりゃ私が声かけられそうなお場所無いよね……そうだ)

人差し指だけでトントンとトガちゃんトガちゃんの肩を後ろから叩く。それだけで察してくれたのか、トガちゃんは後ろ手に手を組んでくれた。

そこにファンレターを挟ませてトガちゃんへと渡す。後は切島くん切島くんに渡すだけだ。



「これあの子に、ファンからって」

トガちゃんの耳に近づき極々小さな声で声をかけた後、今度はトガちゃんの正面へと移動し、目に指先を向けて催眠光を当てる。極々微小なレベルの光だ、仮に見つかっても見間違いか何かと誤解されるのがいいところものだ。

催眠も相応に弱くなるが、指定した人を催眠させた人へ少し明るく見せる程度ならそれだけで十分。

「分かったのです」

意図を受け取ってくれたトガちゃんが切島君の方へと歩いていく。これで私ができることは終わりだ。トガちゃんの様子見終わったら、ゆっくり帰ることにしよう。

「ねえ、君」

「ええ、あ。俺ですか。士傑の人ですよね」

「ええ。これ、入る寸前にあなたに渡してって言われたの」

ケミイの姿をしたトガちゃんが切島君に手紙を渡した。横で上鳴が興味津々に見ていたが、他の人から頼まれたというところで興味が薄れたのか、峰田と緑谷の方へ話に行っていた。

受け取った切島はポケットの中に入れつつ、軽く会釈する。当人から見れば他校の人だ、唐突な上に馴れ馴れしくも見えていた。

「誰から?」

「さあ、読めば分かるんじゃない? 私も知らない」

「はあ、ありがとうございます。それで」

切島が感謝を口にし、詳細を聞こうとしたところで後ろから爆豪の声がかかる。交流のために来ている場所ではないのだ、時間が取れる訳もない。

「おい、次の試験内容始まつぞ」

「あ、わりい」

モニターに先ほどまで試験していた場所の全体像が映し出され、爆破されて壊れていく。

ヒーロー仮免試験の最終試験が始まった。



ヒーロー仮免試験の最終試験が終わった。随分と面白そうな内容だったが、特に何の問題もなく終わっていた。

試験として言えば、英雄は爆豪と轟が落ちていた。爆豪に関してはざまあみろといったところだが、轟については残念だ。途中で馬鹿みたいな諍い起こしていたのが原因だろう。

けれどすぐに連携していたあたり、爆豪みたいに純粋なマイナスというより「本番で

起きる予定外」に引つ張られたと見るのが正しそうだ。

トガちゃんはタクシーに乗って帰ると土傑高校の面子と別れ、周囲からはケミイが一人で帰路に行くように歩く。透明色になっている私が横にいるもの、気づける人は一人もいない。

「これで用事は終わりですね。成生ちゃん」

誰もいない路地に入り込み、トガちゃんが変身を解く。私も透明化を解き、横に並ぶように歩く。

「うん、協力してくれてありがとうね」

トガちゃんが潜入できてなければ切島君にファンレターを渡すこともできなかった。内容は……気分がノツたまま書き連ねたような感じだったから、怪文書気味になってるかもしれないのは否定できない。

どうせ他人には見られないから大丈夫だろう。

「成生ちゃんの頼みなのです。代わりにあとでチウチウさせてください」

「トガちゃんならいいよー、弔たちに連絡しなくていいの？」

「あ」

やっべ、と言うようにトガちゃんはポケットに入れていた電話からコールをかけた。

宛先は——ヴィラン連合。

『やっとながった！どこで何してる!?トガ!』

『成生ちゃんと素敵な遊びに更けてました』

『定期連絡は怠るなよ!……って何だ、成生もいるなら安心だ』

この心配性はMr. コンプレスだ。スピナーとMr. コンプレスがヴィラン連合で一番心配性だが、スピナーは振り回される側だ。定期連絡だのといった「連合でやってほしいこと」を注意するほど舵取りはできない。

Mr. コンプレスは舵取りできるし、私の戦力も知っている。……スピナーは間近で見ただけど、何が何だか分からないくらい強さとも認識してるんじゃないかなあ。

『むう、私一人じゃ危ないですか』

『一人捕まれば全員が危ないんだ、成生も一応注意してくれ』

思わずふふふと笑ってしまう。Mr. コンプレスはどうやら私たちを分かっているらしい。

実は私とトガちゃんはヴィランとしての考え方がかなり近い。私は普通を押し付けてる者を蹴り飛ばして自由に生きたい、トガちゃんは普通に生きたい。私たちは好きに生きて好きに死ぬ……恋も生も好きに生きる。近い考えは多い。

もちろん何故そうしたのかといった動機や、何故そう考えに至ったのかは違う。ただ最終的な考えは近いというだけだ。

それでも、友と言えるくらいには気が置ける仲にはなれていた。私もトガちゃんも求めた、友達という形はそこにあった。だから今回みたいになちよつとしたことでも遊びに来たのだ。

『Mr. コンプレスは心配性だね。私もトガちゃんもそんなヤワじゃないよー』

『そうなのです。大丈夫なんです。私は今まで見つからずに生きてきたので』

もちろんトガちゃんは強さも信頼が置ける。私はヴィラン連合の面子は個性と人格、身体技術で評価しているが、人形操作で模倣しなければ出来ない技術というのはトガちゃんくらいだ。

ただ私視点ならそうだけというだけで、Mr. コンプレスは心配で口調が怒っていた。

『連絡くらいしろって話だよ！』

『それに有益でした。弔くんが喜ぶよ。出久くんの血を手に入れました』

『――！』

マイペースな私達の会話に、Mr. コンプレスの息を呑むような声が届く。本当に収穫があったことに驚いているのだろうか。

私もトガちゃんが緑谷に会うところまでしか聞いていなかった。トガちゃんがあつて話していたのは知っていたが、そこまでは見えてなかった。

面白いことになってきた。ヴィラン連合にも顔を出しておくのも悪く無さそうだ。

## 監獄タルタロス オールフォーワンの惚気

トガと成生が暗躍しA組が仮免試験に挑む頃、オールマイトは監獄タルタロスを訪れていた。オールフォーワンの投獄先だ。ケジメを付けに来たことと、何か依光成生について情報は無いか聞き出そうとやってきたのだった。

そして面会の手前、話す時間といった制限について説明を聞いていた。何せオールフォーワンとオールマイトは因縁深い。二人に話させるのもそう時間を取らせてはいけないと看守達も分かっていた。

「オールマイト、三十分以上話しても構わない」

だがそれを差し引いてなお、それなりに長い時間話しても問題ないと判断されていた。オールフォーワンに情報を渡すよりも、オールフォーワンだけが知っている情報が今は何よりも大事だったからだ。

今やオールフォーワンと同格とすら言えるヴィラン、M.S. ダークライについての情報だ。情報戦で言えばほぼ秘匿されきったところから襲撃されたのだ、最も知っている者から情報を搾り取るのは当然のことだった。

「いいのかい？オールフォーワン相手にそんなに長くなど。それにやつから情報を得よ

うとしても碌なモノは出てこない……どころか偽情報も多いのでは？」

「いや、一点だけ間違いない」

「……それは？」

とはいえ既に尋問官といった面々が話させていることでもある。数分も無い程度の極々短時間ではあったが、話した情報もあったのだ。

驚きだったのは、それらの情報が悉く正しいものだったことだった。軽く質問するだけで正しい情報を答えるくらいであり、聞いた側が本当に尋問と言えるものなのか分からないとすら感じ取った程だ。

そして特筆すべきことにそれらは全て、M s. ダークライに關係する情報だった。

「M s. ダークライ……依光成生についてはベラベラと喋るんだ。それもほぼ真実ばかりだった」

「分かった」

M s. ダークライについては真実を話す。それだけでオールマイトはどこか不穏な雰囲気を感じ取る。

まるで「既に取り返しがつかない段階に行っているのではないか？」という疑念を振り払い、オールフオーワンへの面会室へと歩いて行った。



十分とせず、オールマイトは死柄木がどこにいるのか、オールフォーワンは何がしたかったのかを聞き出した。が、やはり特に情報は得られなかったと少しだけ落胆したところ……オールフォーワンから口を開き始めた。

「世間は君の引退とM s. ダークライのデビュタント、それに僕の失墜でかなり揺れたと思うんだが、様子はどうだ?」

「外の情報は遮断しています。軽率な発言はお控え願います」

「……だそうだ」

「残念だなあ……たぶん、こうかなあ……」

オールフォーワンはオールマイトに気軽な世間話を話し始めた。何でもない予想なのだというように。

「M s. ダークライはデビュタント後におそらく日本各地で暗躍。各地でヴィラン被害が最低でも二倍にはなったかな。そこからヒーローはとにかく働きづめになりつつあり、君がいなくなったことと次のN o. 1であるエンデヴァー達もM s. ダークライに負けていることから、ヒーロー社会全体の団結力を高めようとしている」

「社会が不安定になったことを察し、ヒーローを支持しない……所謂日陰者が行動を起こし始める。組織的に行う者も、単独で行う者もいるんじゃないかな」

「M s. ダークライはどこにでも現れるから日陰者はより活発な行動をとるようになる」



る。しかもM s. ダークライはヒーロー・ヴィランのどちらになるかを迷うような人の背中を押すような真似が好き。そしてヴィラン側が多いはずだから、全体として見た数はかなり多いはずだ」

「ただM s. ダークライが弔たちにヴィランに堕とした人を送るとは思えないなあ……。弔たちは潜伏するだろうし、M s. ダークライは弔には自主性を重んじるようになっていたし」

「少し脱線したね。M s. ダークライが活発化させた日陰者はかなり木っ端寄りの者ばかり、M s. ダークライという脅威だけを借り物にした者が大半だろうね。なんならヒーローみたいに救われた者すらいるんじゃないかな？だからヒーローや公安はM s. ダークライの本質的な動きが全く読めずにいる」

「メディアはM s. ダークライの周辺調査でもしたんじゃないかな。もう隠すつもりもないしね。そして恐ろしさだけを強調している。ヒーローみたいな行動もたまにするヴィランなんて言えるはずもない、『もしM s. ダークライがヒーローだったら？』なんて想像されちゃメディアもヒーローもたまったものじゃないからね」

「そしてヒーローとして期待を背負うのは次のN o. 1であるエンデヴァーだけど、M s. ダークライに負けたことから、ある意味いい方向に期待が分散されてる……ヒーローという肩書を持つ者全体へ期待が寄せられつつあるんじゃないか？」

オールマイトのたたりと冷や汗が流れる。社会情勢を大方把握していることも恐るべきことだが、特にM.S. ダークライのことを完全に理解していなければできない分析を行っているのだ。それだけでどれだけ執着しているのかがよく分かる。

そして既に死柄木弔について聞き終えた以上、次に出る質問はこれしかない。

「依光成生について教えろ」

「M.S. ダークライについてか？彼女については色んなことを知ってる……というか、知らざるを得なかったというべきか。どこから話そうか」

少し間を置き、オールフォーワンから出てきた言葉は想像もしないものだった。

「そうだね、じゃあまずはこちらからかな。彼女は僕だけが生まれた世界線ユニバースに対するカウンター、個性社会から見た緊急装置とでも言うべき存在さ」

■ ■ ■

「……何を言っている？」

あまりにも突拍子もないアンサー。オールフォーワンが目の前に居ると分かっているながら、オールマイトが目に見えて疑問符を頭に浮かべるものだった。

「まあ君はそう言うだろうね、何せ君は僕と言う『個人』から生まれたカウンターの存在。最も因縁が深い故に対立しなければならぬ存在だ」

「対して彼女は僕が作り出した『社会』から生まれたカウンターだ。『社会』が僕だけに

なつてはならないと思つていたから生まれた存在さ。王国があるならクーデターは有つて然るべき、とでも言うべきかな。片方が一人でもう片方が社会という馬鹿みたいな天秤を作つてはならない、そう生まれ出た人だ」

「そして君と彼女の違いは現れるかが分からないという一点だ。君は現れない可能性もあつたが、彼女は必ず現れる。『社会』が求めたがために、現れなければならぬ」

「要するに君が居なくても僕はそのうち現れた彼女に殺されていたはずさ。ここで生きてるから儲けものだとすら言える」

笑みを浮かべるオールフォォワン。オールマイトも言つている意味が少しずつ理解できてきていた。

つまりは個性社会という社会が発生した時点で生まれるはずだった人であり、自分がいなければ代わりにオールフォォワンを討伐してくれた人だ。

ならば恐れる人ではない。好き勝手行動しているが、言葉を交わせば投降してくれる可能性もある。

その思考を分かっているようにオールフォォワンは次の口を開く。まるで眉を顰めるような表情をしながら。

「だが哀しいことに、それだけの存在という意味でもある」

「貴様が、哀しいことに、だと」

オールマイトの感情が驚愕へと変わる。オールフォーワンの言葉をそのまま受け取ることも、言葉の内容を信じようとすることも、オールマイトからすればあり得ないことのはずだった。

だがオールフォーワンの声色も、感情も本物だった。愉しむように悲しんでいるのではなく、ただ裏もなく悲しいと思っているのだと直感できるものがそこにあつた。

「ああ、哀しいことさ。何せ彼女の存在は僕を殺すことにあつたはずだ。それだけの個性カを持たされていた」

「だがね、僕の力は社会を形成する程のものだった。それを壊すということは社会を壊す程の力を有しているということであり……『社会』から生まれた彼女自身がそれだけの力を持つことを許さない。親を自らの手で直接殺せるか？という疑問の答えにも近いだろう」

「できたとしても、その行き着く先は——自死だ」

親を自らの手で直接殺せるか？ 汚れ切ったヴィランへと堕ちたならば可能と答える。事実として、M s. ダークライは親を殺していた。デビュタント後に流した涙は、普通の精神性ならば自死への道を歩んでいたとしてもおかしくないと思わせるには十分だった。

「……そうか」

警察の調査の結果、依光成生がそうしたことをオールマイトは知っていた。懺悔の涙を知っている……オールフォーワンの言う通りだとするなら、放っておけばM s. ダークライは自殺するのだろう。

そこで思考を誘導されたことにハッと気づく。オールフォーワンの口元を注視していたからこそ、反応できたことだった。

「オールマイト、何も思わないのかい？ いくら僕達が早過ぎたとはいえ、絶望に死ぬ人がいる。助けに行かないのか？」

ヒーローとしての信念を抉るような言葉。困っている人がいれば助ける、余計なお世話はヒーローの本質だ。もちろんM s. ダークライもお世話される側にあてはまる。

が、余りにもオールフォーワンの言い草は煽るものだった。オールマイトへの嫌がら

せといつても間違いないものと言ひ切れるほどに。

オールマイトには、そんな嫌がらせよりも引つかかる言葉があった。

「それが言いたかったからその話から始めた訳か、やはり変わらない。……早過ぎたかどうか？」

「ああ、彼女の個性は余りにも強過ぎる。原点オリジンさえしつかりしていれば10歳程度で僕は殺されていたことだろう。それ程だからこそ、色々と調べたのさ」

「複合個性ではなく、複数の個性の所持を前提とした……もしくは可能とする個性。そんな個性は僕らか彼女しかいなかった。つまり彼女は僕に対する社会のカウンターなぞではなく、本来ならば僕たちの先輩となる存在だったんだ。個性が混じり、到達する極致……自然に現れるはずだった人が彼女だ」

「であればそこからできる想像は容易い」

「僕や君のいない世界で、混乱する世の中で君ほど固い決意を持ち、僕ほどに敵対する人を絶望させる才覚を持つ人物。暴力という一点における神……武神や救世主とでも言うべき人が彼女だったはずだった。そこから善悪だの支配だったので、始めから対等な力を持つ僕と君が現れる。その歴史が社会から見れば正しかったんだらうね」

「だからこそ僕だけが生まれた世界線ユニバースに対するカウンター、個性社会から見た緊急装置になる。社会がヴィランだけに染まりかけた時、それ以上の暴力で全てを蹂躪する機構

こそが彼女だ」

オールマイトはゴクリと息を呑む。「社会を形成出来るほどに突出し過ぎた個」への撃滅するための人、それが彼女の正体だとすればオールマイトへと敵意を向けてきたのも理解できてしまう。

何せオールマイトは「オールマイト」という時代を形成した人物だ。それを社会が「オールマイト」という個人に染まった社会」と呼ぶなら、オールマイトを撃滅すべき人間として認識してしまうことだろう。

であれば、オールフォーワンが生きていて助かったと言わざるを得ない。

オールマイトのそんな思考を他所にオールフォーワンは話を続けた。ここからが大  
事なことだと口調を強めて。

「だが僕どころか君もいた。特異な個性によって先んじて個性の極致に到達できてしまった僕達がいってしまった」

「社会の善悪を象徴する二人だ。そんなものがあるなら天秤の動きはどちらにも傾かない」

「結果、彼女の原点は明確に善悪どっちだとは言えない……どっちつかずの儂いものになってしまった。そして戦闘能力も決意相応に突出してこそいるが、明確に落ちてしまった」

「悪を人でなしと人々は呼ぶだろう?」「夢い悪」である「人でなし」……彼女はまさに、悪夢と呼ばれるにふさわしい存在なのさ」

文字に起こせばその通り、儂さから人の感情が無くなれば夢のような存在となる。天秤の特性がありながら、偏りがなければ本人は淡く消え失せてしまう存在となる。まさに夢のような人とすら言えた。

だが現実には悪夢を引き起こしている。それは彼女が夢のような人ではないことを意味している、つまりはオールフォーワンの言葉は戯れ言ということだ。

「何故それが分かる、彼女は何を考えている」

「調べたって言っただろ? 彼女は個性からして異質だった、そりや研究するさ」

「彼女の考えね……彼女には「誰の目にも留まりたい」という目的はある。けれど、そんなものはデビュタントとこれまでの暗躍でほとんど終わっていると見ていいんじゃないかな。だから……分からないな」

オールマイトの拳に力が籠る。さっきまでの明確な答えは消え、急にはぐらかすような言い方になったのだ。オールマイトを煽っているとしか思えなかった。

「ああ、勘違いしないでくれ、本当に分からないんだ。勘違いされがちだが彼女は個性を使って犯罪を犯すタイプじゃない」

「?」



「はあ?」と言わんばかりに口を開けて疑問を表情に出すオールマイト。話す前であればまず出さない表情を見せる、それ程に可笑しい情報だった。

「僕の教えが良かったのか、黒幕のヴィランとしてそれなりにはなった。だが彼女の場合は『勘』が余りにも良過ぎるだけさ。本質はそこじゃない」

「ヴィランになるのは個性を使つて何か事を起こしたいタイプか、個性をのびのび使つたり、個性に振り回されて事が起きるタイプだ。前者が僕とすれば……弔や、分かりやすいところではマスキュラーあたりが後者に該当する」

「そして彼女は……後者だよ。本人は黒幕を気取つていたけど、頭ではそう考えないとやつてられないんだろ。だから僕に彼女の考えは分からないんだ。個性に振り回され続ける彼女の思考なんて読める訳ないだろう?僕に彼女の個性は奪えないんだから」

「事実、デビュタントで裏をかかれてしまったしね。あれだけは僕にも予想外だった」  
「まあ、それ以外は僕の予想通り順調みたいだ。何せ僕を助けに来ないんだから」

そこまで聞き、ようやくオールマイトは表情を引き締めた。

話からするとよくいるヴィラン同様に、彼女も何も考えていないのだろう。好き勝手行動しているのが証拠だ、と。

それはそれとして、オールフォーワンの言い方は助けにいつでも来れるというもの

だった。大監獄タルタロスであつても容易に食い破れるというのは、流石のオールマイトでも見逃せない言葉だ。単独でそんなことをされてはヒーローどころか治安組織の面目が丸つぶれになる。

「ここに助けに来れるとでも?」

「できるさ。彼女にはそれだけの力がある……ああ、そうだ。一つ君にお願いしたいことがあつたんだ」

「貴様が私にお願いだと?」

まずあり得ない選択肢。オールフォーワンが宿敵オールマイトに頼みがあるなど、まず信じられないことだ。

そこで気づく、オールフォーワンが嵌めようとしているのだと。オールフォーワンが行う行為は基本的にオールマイトへの嫌がらせだ。対面している状況なら尚更その可能性が高い。

とはいえ、その口を挿んで閉じさせることはできない。オールマイトは聞くしかなかった。

「ああ。成生に君の「普通」ってどんな意味だい? って聞いてくれないか?」

「……「普通」が何か? そんなもの分かつているだろう」

「おそらく彼女の普通と僕達の普通の概念は似て非なるものさ。ただ、それが何か聞き

そびれてしまつてね」

「ずっと「自分は普通の少女だ」って言ってるから、そんな仮面を張り付けているのかと思つてたんだ。それでここに入れられてからも考えてたんだが、どこか違う気がしたんだ」

「だつてそうだろ？ 僕をここに入れた件で、彼女はデビュタントして「普通」なんかじゃなくなつたんだから」

「でも僕を助けに来ないことを考えると、まだ「普通」にこだわつてると思つたんだ。天稗的な特性を持つてるとはいえ、何でそこまで「普通」に執着するのか分からないんだよ。とつくの昔に「普通」なんかじゃなくなつてゐるつてのに」

「普通」にこだわる少女。オールフオーワンの言い分に理解できないこともない。

USJで対峙したとき時に見た姿、横取りしてしまふ謝る姿、個性を好きに振るう姿、涙を流す姿。オールマイトはそれらの姿しか見ていないが、ヴィランが自ら好んで個性を振るつたなら……もつと喜ぶはずだ。罪悪感を感じるなど、まず無いことのはずだ。

考えられるなら、誰かに背を押されたように個性を振るつた？ 善悪どつちかに寄りかかるものの背を推す……Ms. ダークライに押されたように。

首を横に振り、オールマイトは自らの考えに蓋をする。今はそんなことを考える時間は無いのだ。目の前にいる存在に集中するべきだ。

「彼女を捕まえた後に聞いてやるさ、話を戻すぞ。彼女の個性は何だ」

「彼女に聞くといい、きつといつか会えるはずだ。戦いの場でなければ会話に応じてくれるさ。彼女は何だかんだ理由を付けることが多いけど、会話するのは大好きだからね。僕達と同じ、複数の個性を持てるものだとは言っておこう」

複数の個性を所持できる。それだけで十分に危険な個性だ。ヴィランに捕まって研究されていてもおかしくない……むしろ、オールフォーワンが研究していなかったのかと問いただしてもいいくらいだ。

だが、彼女はオールフォーワンと気軽に話していたのをオールマイトは見ていた。であれば、そういったことは行われていなかったと見るべきだろう。二人の信頼関係は存外良好だったのかもしれない。

「彼女に与えた個性は何だ」

「成生にあげた個性は瞬発力、転送、エアウオークだね」

「それ以外にもあるだろう」

「個人的にあげたのはそれだけさ。彼女、僕が惚れてることを薄々察していたからか……離れるのが早かったからね」

「……惚れてるのか」

なるほどと、オールマイトは自らの思考内で理解を進める。いくらオールフォーワン

でも、惚れている女を研究材料にはできなかつたらしい。

「あんなにいい女はいないぜ？無理に掴もうとしたら夢のように消えかねないが、優しく掴めば夢のような力を得られる。僕を魔王と呼ぶなら彼女は魔の王妃さ。僕が対等と認めた女だよ」

「そんな彼女は本来、個性をいくらでも持てる。だが儂い彼女は元々持っている個性すら伸ばし切れていない。原点が善悪どっちかずだから伸び辛いのだ」

「実際。光による斬撃も13kmなんていうちんけな距離しか出せてなかったからね。本来なら100kmを優に超える切断ができただろうに」

「転送だつて本州を覆える程度。本来ならアメリカ大陸を横断できる程のはずなのに……全然だね」

誇張が過ぎると聞き流すも、理解できることもあり判断に迷う。

個性は原点オリジンを意識して伸ばすものだ。原点オリジンがしっかりしており、伸ばせる人が一番伸びやすい。

言い換えると原点オリジンが曖昧な者は伸びにくいのだ。目的地が分からないのに歩くようなものであり、それでもなおNo.1ヒーロー・ヴィランを倒せる戦力になっているというのは規格外極まりない。

それだけの個性だとしても、秩序の象徴とも言えるオールマイイトが言えることは一つ

ただだ。

「それほどの力を有していようと、彼女を救い捕まえるのがヒーローだ」

「救う？もし彼女を救えることがあるとするなら……できるのは彼女だけさ。頂点に君臨する武力を持つなら、自らの意志以外の他人の意志などどうでもいいだろう。自由に好き勝手やるだけさ」

そこでオールフォーワンの言葉が止まる。気分よく話していた口元が、どこかあくどいものへと変わっていく。

オールマイトに嫌がらせをする時に笑うような笑みではない。もつと邪悪で、深みがあるようなものだった。

「……ああ、彼女は早熟だった。けど、早熟というのは良くも悪くも働くものだ」  
「毒を仕込めば、すぐに回るようにね」

「何？」

ある意味で予想外の言葉。惚れている女だと言ったにも関わらず、毒を飲ませるなど信じられない。……熟したら危険だから、殺す気だったということだろうか？

いや、違う。そんな簡単なことをこの男はしない。おそらく毒とは肉体的なものではなく、精神的なものだ。彼女の感情にできた隙に、オールフォーワンはつけ込んでいるのだらう。

「彼女がデビュタントしたんだ。それなら間違いなく……僕の想いは届いてるはずだぜ？」

「何を」

「デビュタント前の彼女は敵ワイランとしては信念が強かった。原点オリジンがそうだったからね。

でも良心という意味では弔と真逆とすら言える。殺しすら躊躇ウイランっていたくらいだ。だからこそ……長く生きる敵である僕には、デビュタント後に彼女がどう堕ちるのかが分かる。節目で少しづつ僕を見せたり、感情に飢えさせたり……依存させる。簡単な事セ」

「……仲間じゃないのか？」

オールマイトの疑問はもつともだ。オールマイトから見れば、オールフォーワンとM s. ダークライは先生と生徒の関係ながらも同格の協力者であり、仲間と呼ぶ関係性と呼ぶに値するものだった。

だがオールフォーワンからすればそれは正解であり間違いでもある。オールフォーワンが仲間と呼ぶのは側近や自ら率先してオールフォーワンに協力してくれる者たち、ドクターやギガントマキアといった者や信奉者たちだ。

そしてM s. ダークライはそこに入らない。オールフォーワンに協力こそしてくれ  
るものの、信奉者と呼ぶような者ではないからだ。協力者や弟子というのは間違いでは

ないが、同志や仲間と呼ぶ者ではないのだ。

言葉にするなら最も近いのは、パートナーという関係性だった。

「彼女は僕の隣に立つべき存在さ。だからこそ、自死などという選択へ辿り着かないように入念に仕込んだ。彼女の原点を<sup>オリジン</sup>捻じ曲げるなんていうあり得ないことが無い限り、必ず僕のモノになる」

「そして君たちが彼女を止められない以上、僕は彼女へ向けた計画や彼女に向けた感情をベラベラ喋ってもいいのさ。君たちに止められないし、彼女に君たちの言葉は届かないのだから」

「その前に捕らえればいいだけの話だ」

「無理だつて分かっているだろう？彼女を捕まえられなくするために転送の個性をあげたんだ」

オールマイトはギリツと歯を噛み締める。オールフォーワンの言うことはその通りだからだ。

彼女の転送は余りにも範囲が広い上に一瞬だ、タルタロスの脳波感知からの銃による攻撃すら間に合わない。複数人の転送はできないみたいだが、単独行動という意味では最強の個性と言っている。捕まえたとしても、気絶したとしても、動けるようになった瞬間逃げられるのは間違いない。



「何よりデビュタントした今、彼女は二度と元の彼女には戻れない」

「個性つてのは使役して使うようなものじゃない、自らの身体の一部だ。身体を自由自在に変化できる彼女でも、身体変化する個性を複数持てば元の姿から歪になつていく。僕と居た時でさえ、個性を新たに持つにつれて……個性を伸ばしていくにつれて原点オリジンに随分と振り回されていたしね」

「彼女の象徴足る深淵色の瞳なんて、僕と会った当初は無かつたんだぜ？」

「見た目が異様になれば精神にも影響がでるのは必然、精神が恐ろしく強いなら関係ないけどね。デビュタントという精神を病む行為をしたんだ、逆説的に身体はどうなつてることやら。揺れに揺れてそうなるなら……原点オリジン以外の精神はギシギシと音を立ててひび割れていつているはずさ」

「今の彼女なら非道な行為ですら呵責も無しに行えるはずさ。きっと彼女自身では分かってないだろうけどね……つけ入る隙がようやくできてきたって訳だ」

「貴様……！」

毒の正体、「デビュタントとそれに付随する個性の成長」を明かしたオールフォーワン。

オールマイトもデビュタントで戦っていたから分かる。彼女の戦闘や戦略にはエアウォークと転送といった、複数持つ個性の中でよく使う個性はオールフォーワンから

貰ったものだ。そこに何かしらの変化要素があるのなら、彼女はオールフォーワンの予定通りに変質させられている。

だがそれを神出鬼没の彼女に伝える方法は無いし、ヒーローの言葉で納得させられることもできない。かといって戦力で叩きのめすこともできず、捕まえたとしても逃げられる。

まさしく、詰みだった。

「僕が動けば彼女は離れる、勘の鋭い彼女なら僕の考えを読んだ可能性すらあったんだ。だからこそ一度卒業という形で突き放し、デビュタントのタイミングをずらし、彼女自身に僕に寄ってくるように仕向ける必要があったのさ」

「今はまだ、毒が回っていることに気づきもしないで自由に行動しているだけだろうさ。ヴィランともヒーローともどっちつかずの動きでもしてるんだらう？」

「……さあな」

外の情報を出すわけにはいかない。オールマイトは曖昧に口をだすだけだ。

M s. ダークライについてはこれほどの確な情報を出せるオールフォーワンはまさしく……彼女のパートナーと呼ぶに相応しい者だ。相応しくないのはただ一点、M s. ダークライを所有・支配しようと動いていることだけだった。

それが致命的なまでの相性問題とは気づかず、オールフォーワンヴィランは笑う。

「儂さ故に逆に固かった良心はヴィランになり脆く壊れていくだけ……その歪になった成生の心に溶け込むのは僕だ。あの子の心は僕だけのものだ」

「先に助けるのが私達だ」

「君たちにはできないさ。彼女を助ける……彼女が欲しいものを手に入れることなどできはしない」

オールフオーワンの確信を持った言葉。その自信は余りにも明確なところから来ているものだ。

ある意味オールフオーワンが最も信用しているところ、オールマイト達ヒーローが作り上げた平和そのもの。それを悪い方向から見えた視点。

「——君たちが助ける人々が、主体性のない善良な市民である限りね」

そう言い放つオールフオーワン。オールマイトは何を言っているのかいまいち掴めていなかった。

だが、彼らも気づくことはなかった。

成生が両親を直接、自らの手で殺してはいなかったことに。自殺という選択を選ぶ未来から少しづつズレていることに。

成生という人間が天秤の特性を持ちながらもMS・ダークライというヴィランになりながら、自由を歩み始めていることに。

## 死穢八齋會——ヴィラン連合 接触

学生の夏休みが終わり数日が経った頃、とある廃工場に数人の人影があった。そこにいたのは敵<sup>ヴィラン</sup>連合の面々と……トウワイスが連れてきた、もう一人。

「話してみたら意外と良い奴ですよ！死柄木<sup>おまえ</sup>と話をさせろつてよ！」「感じ悪いよな！」

「……とんだ大物連れてきたな……トウワイス」

ペストマスクを着けたヴィラン、オーバーホールの姿がそこにあつた。M s. ダークライの姿は見えず、単独でトウワイスに連れられてきたのだった。

「大物とは……皮肉が効いているな敵<sup>ヴィラン</sup>連合」

オーバーホールがそう言うのも当然のことだ。

何せ今の世間では、最も大物と呼べるヴィランはM s. ダークライであり、次いでヴィラン連合だ。妹弟子という関係上、戦力としてはM s. ダークライと同格程度と見られており、世間からの見方は潜伏してるかどうかの違いしかないのだ。

対してオーバーホールは30人にも満たない程度の小さなヤクザの若頭。知名度と  
いう意味では圧倒的なまでに差があつた。

「何!?大物って、有名人!」

「先生」に写真を見せてもらったことがある。いわゆるスジ者さ。死穢八齋會、その若頭だ」

「甲も当然知っている。何せ先生……オールフオーワンは裏社会の支配者だ。裏社会の、強個性を持つてゐる者を知らないはずがなかった。

「極道!? やだ初めて見たわ、危険な香り!」

「私達と何が違う人でしよう?」

トガの疑問ももつともなものである。ヴィランであり、危険な存在。そういう意味では同じような存在とも言える。違うのは年季というただ一点だけだ。

「よし中卒のトガちゃんにおじさんが教えてあげよう」

トガに視線を向けられたMr. コンプレスが軽い態度で答える。

Mr. コンプレスはかつての強大なヴィランの子孫だ。裏社会の住人と言っても過言では無い。なれば事情も詳しく知っていた。

「昔は裏社会を取り仕切る恐ろしい団体がたくさんあったんだ。でもヒーローが隆盛してからは摘発・解体が進み、オールマイトの登場で時代を終えた。

シツポ掴まれなかった生き残りは敵<sup>ヴィラン</sup>予備軍つて扱いで監視されながら細々生きてんのさ。ハッキリ言つて時代遅れの天然記念物」

「まあ、間違っちゃいない」

特に何とも思っていないと、説明に対し態度だけでオーバーホールは応える。

物理的に地下にいなければマトモに行動することさえ出来ない。それを世間という目線から見れば、天然記念物と言われても否定できない事実だ。稀に現存し、姿を現さないという意味では的確な表現と言える。

「それでその細々ライフの極道くんがなぜ敵<sup>ち</sup>連合に？あなたもオールマイトが引退してハイになっちゃったタイプ？」

「いや、オール<sup>ヒュー</sup>マイト<sup>ロー</sup>よりも、オールフオーワンの消失が大きい」

マグネの疑問にオーバーホールは否定と別の答えを返す。昔から存在するヴィランであるからこそ、見えている現実<sup>じ</sup>は連合のものとは違うものだ。

オールマイトの時代に生まれたヴィランと、その前時代に生きるヴィラン。視点が違うのも当たり前だった。

「裏社会の全てを支配していたという闇の帝王……俺の世代じゃ都市伝説扱いだった。

だが老人たちは確信を持って畏れた。死亡説が噂されても尚な」

分かりやすく違うのはオールフオーワンという支配者が見えていたかどうかだ。支配者がいれば畏れ、ヴィラン的行動も邪魔しないようにしなければならぬ。

また、支配下に入れば恩恵にあずかれることもある。それが目に見えて形になるのを知っているというのは、思想から変わる者も多い程に有効なことだった。

そしてそれだけ大きな存在であるとも言える。であれば——

「それが今回実体を現し……タル監タロスへぶち込まれた。つまり今は日向ひなたも日陰ひかげも、支配者がいない。じゃあ次は、誰が支配者になるか」

——その椅子が空いたともなれば、野心を抱くヴィランなら誰でも着きたがるのは間違いない。

しかも今は支配者になった者には象徴たる王妃が如き存在、M s. ダークライもいるのだ。以前にも増して社会への影響は大きくなるのは間違いなかった。

その言葉に反応したのはマグネ。世間の動きを敏感に感じ取るマグネは、世間から見たら既にその立ち位置にいる人物がいると疑問に感じていた。

「成生ちゃんはいいのかしら？」

マグネの言う通り、M s. ダークライもヴィランである以上、支配者になりたがるのは予想できることだ。

しかもデビュタント時の彼女の言葉を鵜呑みにするならばオールフオーワン直々に同格であると言っており、弟子であることを含めれば後継のように思われても仕方のないことだった。

だがM s. ダークライのことを知っている人間程、それを否定できる。弔もオールフオーワンも、オーバーホールもそれは分かっていた。



「M.S.、ダーククライは支配に興味が無い。彼女は支配者の横にいるべき者であつて支配者じゃない」

弔はオーバーホールからその言葉が出てきたことに少し驚きつつも、次の支配者への野心を隠さずに返答した。

「……よく知つてるな。あとウチの“先生”が誰か知つてて言つてんならそりや……挑発でもしてんのか？」

「次は、俺だ」

「今も戦力をかき集めてる、すぐに拡大していく。そしてその力でこのヒーロー社会をドタマからぶつ潰す……当然、M.S.、ダーククライの力も借りてな」

ヴィラン連合を率いる弔は言葉の通り、戦力を集めているのは間違ひなかつた。

一つだけ言えることがあるとすれば、現状の戦力を鍛えるだけでも十分に強大であることだろう。個人レベルならプロヒーローと戦つても勝てる人材が勢揃ひしており、彼らが幹部のように扱われる組織が作ればそれで十分に「社会を潰す戦力」と成り得る。オーバーホールもそれを分かつており、だからこそ惜しいと思つていた。M.S.、ダーククライを除いた単純な戦力だけで言えば、現状なら死穢八斎會が上だろう。だがその潜在している能力は明らかに死穢八斎會を超えている。

月日が経てば膝を折る立場になるのは間違ひなかつた。故に今、ヴィラン連合を下に

着かせなければいけないかったのだ。

「計画はあるのか?」

「計画? おまえさつきから……。……。仲間になりに来たんだよな?」

そしてオーバーホールの優位性は現在であれば年季や戦力が上であることだ。組織力や明確なリーダーシップ、そういった面であればまだ上だった。

弔に欠けている部分、そこを指摘することで優位に立つ。それがオーバーホールの交渉だった。

「計画のない目標は妄想と言う。妄想をプレゼンされてもこつちが困る。勢力を増やしてどうする? そもそもどう操っていく? どういう組織図を目指してる?」

「ヒーロー殺しステインを始め、快樂殺人のマスキュラー、脱獄死刑囚ムーンフィッシュ。どれも駒として一級品だがすぐに落としているな? 使い方が分からなかったか?」

指摘した彼らが落ちた理由は弔には使いづらだろうかとM.S. ダークライが放置したからなのだが、弔もオーバーホールも知ることは無い。

問われた弔はというと、返事などより苛立ちが先に出ていた。ステインはムカつくやつだ、活躍を潰してやろうとした。二人はイカれてるなと思いつながら投入した。だがそれを指摘され、落としたと言われるのは腹が立った。

「イカれた人間十余人もともに扱えないのに勢力拡大？コントロール出来ない力を集めて何になる」

「目標を達成するには計画がいる。そして俺には計画がある。今日は別に仲間に入れてほしくて来たんじゃない」

オーバーホールはここに来た目的を話し出す。M s. ダークライから遠慮するなど言われ、ヴィラン連合では善良な方であるトゥワイスに誘われ、危険性と可能性から「使う」予定だった目的を。

「トゥワイス……ちゃんと意思確認してから連れてこい」

苛立つ弔へ顔を向けるトゥワイス。その視線はどこか、すまねえと言っているようだった。

「計画の遂行に莫大な金が要る。時代遅れの小さなヤクザ者に投資しようなんて物好きは中々いなくてな。ただ名の膨れ上がったおまえたちがいれば話は別だ。」

俺の傘下に入れ、おまえたちを使ってみせよう。そして俺が次の支配者になる」

野心を隠さずに表に出すオーバーホール。次の支配者という椅子を狙うヴィランとという意味では弔と同じ。ライバルというより、競争相手なのだ。それも裏社会での競争相手だ。

「帰れ」

目的の人材でなかった以上、弔からすれば交渉は決裂だ。何より、ヴィラン連合を支配しようとする人物という時点でヴィラン連合からすればNGなのだ。

ヴィラン連合は自由を求めて集まった者たち。再び碌でもない支配を受け入れることなどできはしないのだから。

そこを揺さぶるように、オーバーホールは口を開く。ジョーカーとなるはずだと思っ  
ているカードを切るために。

「M・S・ダークライがこちらに居ると言ってもか？」

流石にこの言葉には弔とトガを除く全員が目を見開いた。

M・S・ダークライ、依光成生はヴィラン連合の協力者だ。弔の妹弟子兼先生という意味でも信頼を置いており、トガのように親密になつてゐる者もいた。

そんな人物が裏切る可能性など、考えることすらなかつたのだ。

もつとも、弔はあり得ないと分かつており、トガも成生ちゃんなら好きにやつてるだけという信頼をしていた。

そもそもM・S・ダークライはヴィラン連合を裏切るなどあり得ない。M・S・ダークライは気分次第でヴィラン連合に遊びに来るといふ関係であり、ヴィラン連合を放置しているというのが正しいのだから。

何より——弔にはそれを否定できる根拠がこの場にあつた。

「無いな、M s. ダークライは誰の下にもつかない。先生にすらついていないくらいだった。」

……だろう？、M s. ダークライ」

「——へえ、随分と勘が鋭くなったね」

弔は天井近くで透明化して隠れていたM s. ダークライへと声をかけた。ただの直感だけだったが、返事が来るとも思っていた。

何せこういう「弔が関わる面白そうなこと」には必ず姿を現すのだ。姿が見えないなら見えないだけであり、必ずどこかにいると信用していた。

弔の予想は正しく、そこにいた。ドレス姿ではない上、服装や髪形も変わっておりパツと見では分からないが、声や個性は変わっていない。何よりその象徴足る深淵色の瞳が、一瞬だけこの場にいる全員に重圧をかけていた。

「成生ちゃん！」

「面白そうだったから来たよー」

重圧を消し、軽い言葉でトガへと返答するM s. ダークライ。姿を現すというだけで全ての注目を集めていた。

オールフオーワンやオールマイトのように圧倒的な存在感があるのではなく……注視しなければ儂く消えかねない雰囲気があるところにあったのだ。気分次第で全員を殺せる

戦力が見えなくなるなど、危険以外の何ものでもなかった。

「今日は、私が目をかけている人が多いからね」

「……お前、こんなやつを？」

甲はM s. ダークライがどう行動しているかを知らない。考えすら分からない人の行動なんぞ知るかという指針からだ。が、M s. ダークライの人を見る目は信じられるものがあつた。

元々勘が鋭いやつだと分かっていることもあるが、M s. ダークライが背を押す者達は甲の下には来ないことを確認できたことが大きかつた。

M s. ダークライに背を押されたものをスピナーとマグネが一人とつ捕まえて聞いたところ、求めているものが違うからだと答えており……そして確かに求めていたものは違つたのだ。

戦力的にも求めていない者であつたこともあり、M s. ダークライが送つてこないのも理解できるものがあつた。そしてオーバーホールはM s. ダークライが背を押す者として戦力的に例外だつたが、M s. ダークライはヴィラン連合へ送つてこなかつた。

つまりM s. ダークライが目をかけていながらヴィラン連合に送つてこない時点で交渉が決裂するのは当然ではあつたのだ。

「私には私の目的がある。その一環つてやつかな」

それを教えろと弔とオーバーホールは問いただしたかったが、口には無い。どうせ支配云々には関係ないのだろうと言葉にして機嫌を損ねたら、戦闘状態のM.S. ダークライは殺しにきてもおかしくないのだから。

「アンタと戦いたくないんだが」

オーバーホールの言葉にM.S. ダークライはニツコリと笑みを返す。

——違和感。弔が抱いたのはそれだった。

弔は飄々として好きに笑っていた依光成生という存在を知っている。もしこいつに頼れば深淵の底無き場所まで落ちる、そう思わせる性格を知っている。弄ばれば一生こいつが脳裏に浮かぶようになる、そうさせる精神的な酷さを知っている。先生が、頼れば恋に落ちるような感覚になるだろうと評した人格を知っている。

だが今の笑みは、先生を思わせるような邪悪ではあったが……見つめられたら底無き深淵に落ちるようなものではなかった。

「もちろん私は戦わないよ。私は弔の“先生”と同じ枠だもの、参加したら面白くもない」

気分次第で参加することや、弔自身に関わることを避けるといった以前からの行動に変わりはない。行動だけを見れば弔にもM.S. ダークライは変わってないと言える。

「アンタにとつちやゲームか」

「うん？違うよ。私は私のやりたいことをやってるだけ。ゲームに見えるって言うならそれだけ隔絶した実力差があるってこと」

視線を向けられた弔は頭を掻いて仕方ないと返事する。M.S. ダークライのことを考えるのは、目の前の人物をどうにかしてからだ。

「まあ……そうだな。今は、俺もM.S. ダークライには勝てない」

隔絶した実力差があるのはその通りだ。弔であろうとオーバーホールであろうと、ヴィラン連合であろうと死穢八齋會であろうとM.S. ダークライとの実力に差があるのは間違いない。

利用できるはするが、M.S. ダークライは気分次第でしか動かない。今も、これから先も、それは変わることは無い。

弔の思考をよそに、M.S. ダークライは視線をヴィラン連合全員の方へと向ける。M.S. ダークライが協力しているのはヴィラン連合だ。弔だけではない。

「そんなことより、誰の下にもつかないのは私も弔たちも同じ。ならやることは決まってるでしょ？」

その一言でヴィラン連合側の面々がオーバーホールへと顔を向ける。M.S. ダークライは気分屋ではあるがヴィラン連合は協力関係であり、言葉や行為に起こした後なら考えが分からないわけではない。



M s. ダークライの言葉の意図を真つ先に汲み、声に出したのはマグネだった。

「そうね。ごめんね極道くん、私たち誰かの下につく為に集まってるんじゃないの」  
マグネの個性が発動し、オーバーホールの頭部に磁力が付与される。同時にマグネは持つている大きな磁石の布を剥ぎ、吸い寄せる極を向ける。

N極へと寄せられていくS極が、磁石へ寄せられるオーバーホールという形で引き起こされる。相当な実力者でなければ、この不意打ちだけで脳震盪を起こさせたらう。林間合宿を襲撃した時の、ピクシーボブのように。

「ー」

吸い寄せられるオーバーホールは即座に左手の手袋を外す。オーバーホールの個性は手で触れることで発動する。手袋を外すというのは、臨戦態勢に入るという意味だった。

「こないだ、友達と会ってきたのよ。内気で恥ずかしがり屋だけど、私の素性を知っても尚友達でいてくれた子。彼女言つてたわ、「常識という鎖で繋がれた人が繋がれていない人を笑つてる」

ヴィラン連合は各々が好きに生きるために集まった集まりだ。ステインの影響を受けて集まった面はあるが、「ステインのような考えの者も集められる集まり」といった側面も大きい。

甲の下に集まってこそいるが、その側面を最も体現していると意味では成生の方が正しいのだ。ヒーロー社会の弾かれ者という方向で、成生はヴィラン連合と軸がズレているからリーダーではないだけだ。

そしてその側面をもっと簡単に言うならば——何にも縛られずに自由に生きたいということだ。

「成生ちゃんと同じ、何にも縛られずに生きたくてここにいます」

私たちの居場所は私たちが決めるわ!!!」

マグネの一撃が決まると同時に——オーバーホールの左手がマグネの右腕に触れる。それで、終わりだった。

バツン!!!

殴った音でも切った音でもない音が響き、マグネの上半身は弾け飛んだ。そのまま下半身は膝から倒れ、血だけが流れていく。

「先に手を出したのはお前らだ」

「マグ姉えー!!!」

余りにも簡単に殺されたマグネにトウワイスが叫ぶ。オーバーホールは正当防衛だと言わんばかりであり、起き上がりながらヴィラン連合を軽く睨む。

「ああ……汚いな……これだから嫌だ」

触れた左手を汚いと言い、服の二の腕あたりでゴシゴシと拭く。オーバーホールの悪い癖が出ていた

あんなタイミングで拭くなんて潔癖症だなあとM s. ダークライが呑気に見ていると、危険を察したのかM r. コンプレスが即座にオーバーホールへと飛び出した。

「待てコンプレス！」

（こいつやべえ、おれの圧縮で——）

弔の静止の声も無視し、オーバーホールを圧縮すべく手を伸ばした。今ならマグネの攻撃によるダメージを引きずっているはず、判断は間違っていないかった。

が、どこかから飛んできた針のような銃弾がM r. コンプレスへ突き刺さる。その効果は即座に現れた。M r. コンプレスの手がオーバーホールに触れ、圧縮された玉になるはずが……個性が発動しなかったのだ。

「触るな」

触れられたオーバーホールは切れ気味に左手で振り払い、個性を発動させM r. コンプレスの左腕を分解した。

「つてええええ!!？」

ヴィラン連合はオーバーホールの個性を知らない。どうしても後手後手にならざるを得なかった。唯一例外は見てから反応できるM s. ダークライだが、誰よりも気分屋

であり今は戦う意志もないのだ。

その代償がMr. コンプレスの腕一本と、マグネだった。

だがその理屈はオーバーホール側にも適用される。Mr. コンプレスに気をとられたオーバーホールへ、Mr. コンプレスより遅れて動き出した弔が、五指を触れさせようと手を伸ばしていた。

間に合わない、そして弔の個性は危険極まりないものと予想がつく。オーバーホールの判断は早かった。

「盾っ！」

オーバーホールが大きく声をあげる、同時に天井からオーバーホールと弔の間に割り込む影が一つ。弔の五指は割り込んだ男に触れられ、崩壊の個性により身体は崩れていく。

「うぐっ……！」

「危ないところでしたよオーバーホール」

ヴィラン連合とのやりとりに割り込んできたという意味なら、現れたのは一人だけではなかった。隠れていたのがさらに二人。そして現れたのはそれだけではない。

「なるほど……！」

「ハナからそうしてりや幾分か分かりやすかつたぜ」

壁を壊してさらに二人が現れる。2 m近い巨体の男と、その頭の上にマスコットのよ  
うな小ささの男が一人。

オーバーホールを除いた4人全員が実力者。一目でそう見抜いた弔は一旦動きを止  
めた。

何せ今ここにいるヴィラン連合は弔、トガ、トゥワイス、Mr. コンプレスの四人。  
オーバーホール側は五人だ。Mr. コンプレスは片腕が吹っ飛ぶ負傷もしており、数と  
いう意味での戦力では劣っていた。

「待て、どこから!? 尾行はされてなかった!!」

「大方どいつかの個性だろう」

さらには個性も分かっていない。ともなれば今すぐ戦うのは分が悪い賭けになる。  
そんな弔の思考を他所に、オーバーホール達はヴィラン連合を視界に入れつつ口を開  
く。

「遅い」

「一発外しちゃいやした……しかし即効性は十分でしたね」

睨み合うヴィラン連合とオーバーホール達。天井近くではMs. ダークライが人差  
し指を顎に当てながら「うーん」と悩んでいた。

今はオーバーホール側にいるから……ではない。Ms. ダークライが気に掛けてい

るのは壊理であつてオーバーホールではないのだから。その気になれば壊理だけ連れて逃げ去ることだつてできる。

そうしないのはヴィランだから、連れ去つた後どうするか面倒だから、壊理がヒーローという概念を知らないせいでヒーローに助けられたいと言わないからだ。そもそも希少過ぎる個性であるため、仮にヒーローが保護しても適当な孤児院に送られ、再びオーバーホールの手の中へ……ということもかなりの確率であり得ることなのだ。

それでもM s. ダークライが保護すれば解決する話ではある。電花という友達もいるのだ、それが自然ですらある。

故にM s. ダークライが今気に掛けるのは、弔の方だつた。

「マグネと、M r. コンプレスの腕一本。高い授業料だつたかな……う」

ヴィラン連合として見た場合、損失はかなり大きい。マグネは真正面からならプロヒーローの虎と対等な近接格闘ができたのだ、他の面子だと弔か武器持ちのトガちゃんくらいになつてしまい、戦闘の幅が大きく狭まつてしまうことになる。

そこまで考え、M s. ダークライは頭をブンブンと横に振つた。思考が間違つていたら反省するためだ。

「むしろ丁度いいか」

近接格闘技能が必要なのは個性を封じられた時だ。具体的などころだとイレイザー

ヘッドが戦闘に混じってる時だ。そこまではどれだけ個性を上手く使いこなしているかが全てなのだ。ならば近接戦闘技能は一旦捨てた方がいい。

個性同士の戦闘が基本なのだから、個性を鍛える方向に薦めた方がいいんじゃないか？ 黒霧やドクターが何かしてくれるはずだ。きっとそうした方が弔も器として成長するだろう。

……今の、何？

「穏便に済ましたかったよ敵ヴァイラン連合、こうなると冷静な判断を欠く。

そうだな……戦力を削り合うのも不毛だし、ちやうど死体は互いに一つ……キリもない。頭を冷やして後日また話そう。腕一本はまけてくれ」

クルリと背を向け、話は終わりだとオーバーホールは行動で見せる。だがより少数精鋭であるヴァイラン連合の損失はオーバーホール達とは比較にならない。それは親密さという意味でも同じ。

トウワイスとトガが衝動に駆られ、殺意をむき出しにしていた。

「てめえ殺してやる！」

「弔くん、私刺せるよ。刺すね」

二人は弔の言葉があれば即座に戦いに入る。そう言い切れる程の怒り心頭つぶりだ。後先も、戦闘力分析も考えなければ弔もそう指示を出したことだろう。

だが弔が出した指示は真逆のものだった。

「……。駄目だ」

弔の言葉であつても、二人には受け入れたくない指示だった。特にトウワイスはオーバーホールをここに連れてきた張本人だ。責任があると、自覚していた。

「責任とらせろ！」

トウワイスは戦う気満々だったが、既にオーバーホールは出口の方へ歩いており他の面子も戦意を無くしつつあつた。そして弔も今は戦う意志が無い以上、組織同士のぶつかりはこれで終わりという扱いだ。

マスコットのような男が頷き口を出し、オーバーホールも別れ際の言葉だと弔へと声をかける。

「賢明だ、手だらけ男」

「すぐには言わないがなるべく早めがいい。よく考えてみてくれ……自分たちの組織とか色々……」

冷静になつたら電話してくれ」

オーバーホール達が廃工場から出ていき、残されたのは弔たちヴィラン連合とM s.。ダーククライ。M s.。ダーククライは既に姿を隠す必要も無いと、透明化を解除して地上に降りて来ていた。



弔たちに背を向けたまま、M s. ダークライは腕を組んで立ちつくす。その背中はどこか悩んでいるようにも見えた。

「M s. ダークライ……いや、依光成生」

弔に声をかけられ、M s. ダークライはハッと頭を起こす。動揺したような動きに、弔も、トガも、トゥワイスも、M r. コンプレスも何か不穏なものを感じ取る。

動揺したという事態があり得ないのだ。M s. ダークライは動揺しても動揺したように見せない。思考能力が加速できる以上動揺は即座に収められる、できないとすればM s. ダークライに何かが起きているとしか考えようがない。

「私も行くかな」

まるで隠すようにM s. ダークライはほんの少しずつ歩き始める。だがその歩みは目に見えて遅かった。四人には、止めてくれと言っているようにしか見えなかった。

けれど声をかけられない、M s. ダークライにはM s. ダークライの考えがあるのだ。それを止めるというのはM s. ダークライと敵対しかねない。

数歩歩いたところでようやく声をかけたのは、弔だった。

「お前は、何をしてるんだ」

そこでようやくM s. ダークライは自分に声をかけられたと認識した。

頭に霧がかかったような感覚。記憶にあるのに感情に無い。ふわふわと、どこでもな

いどこかにいたような感覚がしていた。例えるなら夢の中だろうか。悪夢でもない、ただ現実が夢のように見えてた。

何をしている、か。その前に訂正しないといけない、相変わらず弔は私のことをその場に対応した名前前で呼んでくれないんだから。

「……弔、私はM s. ダークライだよ」

「知ってる。その上で言った」

振り返り、弔達へ瞳を向けてニコリと笑う。深淵色の瞳が、その奥に邪悪な気配を纏った視線が、弔達の全身を貫く。オールフオーワンの死んだと思わせる殺意を含んだ重圧ではない、ただ？み込まれ……そのまま死んでいくとしか言いようがない圧力だった。

そこでトガも気づく。これは昔浴びていたM s. ダークライの圧力ではない、と。

「私は私がやりたいことやってるだけ。M s. ダークライは闇の宝石にしてヴィランの女王。だから……早くここまで届いてね？」

転送の個性で消えていくM s. ダークライ。その表情は、邪悪な笑みとしか言いようがないものだった。

オーバーホール達が消え、M s. ダークライが消え、残ったのはヴィラン連合の四人。頭の中に渦巻くのはそれら二つのこと、どちらもだった。

オーバーホールにマグネを殺されたこと、Mr. コンプレスの腕を吹き飛ばされたこと。いつか代償を貰うことにすると決め、どうするかを思考に回さなければならぬ。

Ms. ダークライの変化。かつてはただ？み込まれるだけであり、その強大さを見せつけるだけの圧力だったものが、まるでオールフオーワンの影響を受けたかのように変わっていた。既にデビュタントから時間が経ちオールフオーワンと接触することは無くなっていく。トガに至っては先日仮免試験で会っていて変わってなかつたことを知っているにもかかわらずだ。

「……お前は、誰だ？」

「成生ちゃん……？」

言い知れぬ不安、それでも二人は依光成生という人物を知っている。何か起きても自分自身の力で何とかできる、と豪語する性格を、実際にそうしてきた力を、変化すら自在に受け入れる自由奔放な姿を。

長い付き合いがある甲は拳を握る。先生やドクターを除けば最も付き合いのある者に何か不穏なことが起きていると分かっている、手が出せないのは言葉にできないものがあつた。

## ボーイ・ミーツ・ガールズ

ヴィラン連合とオーバーホールが接触した少し後、それら二つの組織は提携するとして協力関係となった。その際トウワイスとトガがオーバーホール側へと貸し出すこととなったが、彼らであつてもオーバーホールがたくらむ計画の中核である壊理には触れることすらできなかった。

結果としてヴィラン連合の誰もM s. ダークライと接触できず、情報が遮断されることになった。オーバーホールも情報を渡す気はさらさら無かつたため、M s. ダークライの方からヴィラン連合へと確認しにいかない限り状況が分からない状態になつていた。

ただM s. ダークライは何の情報も持つていないわけではない、転送の個性がトウワイスとトガの場所が近いと示していたのだ、ならば同盟でも組んだのだろうと予想を立てるには十分だった。

そして今、それらのことよりも遥かにイレギュラーな事態が起きていた。M s. ダークライがあり得ないだろうと判断していた、完全なイレギュラーが。

久々に壊理ちゃんを連れて外出していた時だった。いつも手を繋いで歩いているの

だが、突然壊理ちゃんは手を振り払い頭を抱えてしやがみ込んだ。表情が一瞬だけ見え、異常なほど怯えていることだけは分かった。

「壊理ちゃん？」

「成生お姉……ちゃん？……どうして？」

「どうして私に光を魅せたの？」

壊理ちゃんに洗脳がバレた。即座に現状把握までは及んだものの、どう対応したものかと悩んでしまう。

「あー……ごめんね？」

「嫌ー！」

とりあえず謝ってみたが間違いだったみたいだ。対応ミスも仕方ないことではある、何せバレるとは考えてなかった。

個性を使いこなせばあり得ることだとは考えていたのだが、二カ月も経っていないのだ。それ程早く習熟できるなど考えすら無かった。

子供だから伸びが早いのは分かる、身体能力が伸びるのも分かる、個性が伸びるのも分かる。ただ限度というものがある。今回の件は明らかに限度を超えていた。

「壊理ちゃん、ごめんってばー」

「嫌！成生お姉ちゃん嫌い！電花ちゃんも嫌い！」

大通りの端でうずくまっていた壊理ちゃんが、少しでも移動し裏通りに入りうずくま  
る。嫌だといつてもすぐどこか遠くまで逃げ出すことはしないのは何より。

ただ限度を超えた成長、という意味なら身に覚えがある……私自身の個性がそれを翳  
すものだからだ。言い換えると私の個性の影響を受けている者ならばこんな成長をし  
たとしてもおかしくない。電花だつてそうだし。

問題は壊理ちゃんは私の子供でもなければ身体を移植した訳でもない、生物的に私の  
関わりようが無いのだ。それなのに影響を受けたとなると……どこかで私の髪の毛で  
も口にしたのかな？

「おかーさん何したのー？電花も嫌われてるー」

「うん……ごめんね、電花」

付随して常に一緒にいる電花も壊理ちゃんに嫌われることになっていた。私の子だ  
からだろう。私と違って何もしてないのだから、壊理ちゃんも嫌わなくていいのに。

などと思っていたら道も分かっていないのにどこかへ壊理ちゃんは逃げ出すように  
走り出した。あのままでは迷子一直線だが、追う必要はない。

「っー」

「待つてよー！一緒に行くこうー！」

電花が勝手に追いかけていったからだ。今は周りに合わせているみたいだが、電花の

身体能力はオールマイトと比較して劣らない程なのだ。見失うことはまずない。

……前言撤回。電花は天然気味なところあるから、もしかしたら見失うかもしれない。そうなたら私が転送で追いかけるだけだけど。

「かなり助かってたんだが……こうなったか」

オーバーホールの口から嫌味染みたお小言が零れる。外出する際は相変わらず監視として付いてくるのだ。お陰で周囲からは兄妹みたいな目で見られることになっていった。

それ自体は構わないし、監視も気にしていない。利害関係が成立しているからか、オーバーホールも私に敵意を向けてる気配は無い。オーバーホールに対して分かることはそれだけで十分なのだ。

今はそんなことより壊理ちやんだ。個性の制御が上手くなり、暴走の可能性が無くなりつつある。世話係の私としては死ぬ可能性が無くなるのは喜ばしい限りだ。

使い方も私が考えなかつた意外なところ。このまま成長してほしいね。

「いやー、忘れてたね。まさか自分自身の嫌悪感だけを巻き戻して催眠を解除させるなんて」

「お前のせいだけだな」

オーバーホールの言う通り、私のせいだ。個性を制御できるようさせたのは私であ

り、制御が上手くなったことで可能になったことだ。

ただその恩恵は私や壊理ちゃんだけ貰ったわけじゃない、オーバーホールだってそう  
だ。

「まあね、個性が上手く使えて暴走しなくなったのは私が催眠したからだね。でもおかげで作りやすくなったんじゃない？」

個性破壊弾、その材料が壊理だった。正確には「壊理の個性因子」が材料の大半だ。個性因子がより強くなれば、材料としてもより優秀になっていた。そしてそれは成生もオーバーホールも分かっていた。

オーバーホールはコクリと頷き、懐から箱を二つ取り出す。一つならただの試作段階と言えたが、二つなら量産の前段階だ。オーバーホールが企む計画がかなり前倒しにできたことの証左だった。

「元々が五発分予定だったのが十発できたのは間違いなくそのおかげだな。もし何かあった時の保険として……半分いるか？」

一瞬だけ空を見上げ、貰って意味はあるかと思考する。

多分使わない。でもオーバーホールが失くした時だとかのために保険として貰っておいた方がいい。それに壊理ちゃんにはそれなりに時間をかけたのだ、記念として貰うのも悪くはない。



「うん、頂戴。何かに使えるかもしれないし」

片方をポイツと成生へ投げ渡すオーバーホール。未練も特にない、ただビジネスの關係がそこにあつた。

そしてビジネスはまだ終わっていない、まずは目の前で起きたアクシデントへの対応をしなければならぬ。

「ほらよ。で、壊理が逃げたんだが、どうしてくれる？」

オーバーホールも壊理が逃げ出したのは見ている、その上で何もしなかつた。成生に世話を任せているのだから自分は手出ししない、ビジネス的な信頼だ。

それにM.S. ダークライの強大さは知っている。たかが子供一人逃げ出したところで逃げ切れるはずもない。

「ん？私の個性忘れた？いつでも捕捉できる私から逃げることはできないよ」

当たり前と言うように成生は口に出す。それでもオーバーホールは不安が拭いきれない。壊理に何かあれば最も被害を被るのは彼なのだからそれも当然の不安だ。

「ヒーローに捕まったら」

「電花が一緒にいるけど」

オーバーホールが最も警戒すべき懸念を語るも、成生の答えで一蹴される。

壊理と電花はだいたい同い年の子供だ。壊理が逃げて電花が追いかけるならただの

子供のじゃれ合いにしか見えない。そうではないと判断できるヒーローが真っ先に現れるなら一瞬で駆け付けただけだ。

そして仮に壊理が強硬に保護されても電花ならヒーローを倒せる。M s. ダークライの墮とし子という称号は伊達ではないのだ。

「……ならいいか。あのガキ、俺からでも逃げられるくらいだしな。だが帰ってくるか？」

「衝動的に嫌いって言っても冷静になつたらごめんさいって言う。子供によくあることですよ？」

昔の経験か、電花という子供を得たからかは分からない。でもいつの間にか子供の扱いは多少得意になってきていた。行動も理解できるし、その後もおおそは分かる。

それを抜きにしても怖いから逃げる、というのはどんな人間でも最初に遭遇したなら不変の行動ではあるけど。

「確かにな」

オーバーホールも分かったのか、コクリと頷いた。壊理の逃走を糾弾するのも、失態などと思ってもいけない声色で話しながら。

走る、走る、ただ走る。小さな身体で安全な場所を求めするために。

裏通りが危険だと分かっているけども、元々居た場所よりは安全だと分かっているからこそ、壊理はただ走る。

(だれか……だれか……！お願いだれか……！誰か……！)

痛いことする人あの人嫌いだ。痛い思いがずっとずっと。成生お姉ちゃんが来てからそんなに気にしなくなった。

でもさつき聞いた時、眼の色がよく分かんない色になってた。怖そうだけどなんていうか……食べられちゃいそうだった。

嫌いて言っちゃったけど違う、勢いで言っちゃっただけ。本当はごめんなさいって言うたい。でも今は、離れたかった。

M.S.、ダークライ(誰か……は嫌じゃないけど……、確か……ヒーローって言ってた……人なら……！)

来てくれた後で知ったことだけど、成生お姉ちゃんはM.S.、ダークライって呼ばれた。あの人から助けてくれて、いつも笑って遊んでくれて、嬉しかった。

痛いことする人でも来てくれた時に言ってた、ヒーローじゃないと助けられないって。

「壊理ちゃん!!どこに行くのー?」

「電花、ちゃん」

電花ちゃんが後ろから追いかけてきて、壁を駆けて横で走る。きつと心配してきてく

れたんだ。嬉しいし分かるけど、今は助けに来てくれそうな人以外と歯誰とも話したくない。

「おかーさん達から離れちゃ迷子になっちゃうよー?」

ちよつとだけ振り返って顔を見ただけど眉をひそめてた。いつも一緒に遊んでるから、ごめんなさいって言いたい。でも今だけは……ごめんなさい。

なんて思つて前を見てなかつたら誰かに勢いよくぶつかった。

「きゃっ!!」

ぶつかつて、跳ね返つて、お尻が地面につく。電花ちゃんと遊ぶ時にたまにあるくらの痛み。いつもならそれだけ。

でも今日は、違つた。

「ごめんね、痛かつたよね」

差し伸ばされた手。電花ちゃんや成生お姉ちゃんとは違う感じがした。電花ちゃんは何も考えずに手を取れて、成生お姉ちゃんは優しく手を取ってくれる。まるでずっと一緒にいてくれるみたいに。

「……あ」

「立てない?大丈夫?」

手は取つてない。でも二人とは違う感じがするのはなんとなく分かつた。もしかし

てこれが、この人が――

「壊理ちゃん。ダメじゃない、ヒーローに迷惑かけたら」

――ヒーローと呼ぶよりも前に、成生お姉ちゃんが後ろにいた。その横には……  
痛いことする人  
あの人。

「あ、おかーさん!」

「追いかけてこしてくれてありがとね、電花」

電花ちゃんが成生お姉ちゃんに抱きついてる。あんな風にできたら嬉しかったのに……。

「成生、お姉、ちゃん」

返ってきた言葉は、いつものおんなじ感じのこえ。

「帰るよ、壊理ちゃん」

「帰るぞ、壊理」

びつくりしたのは、ヒーローのお兄ちゃんから聞こえたこえが、痛いことする人あの人と成生お姉ちゃんが出会った時とおんなじ感じだった

「せ……い……?」

□□□

「うちの娘がすみませんね、ヒーロー」

オーバーホールが気さくな雰囲気ですら抱き留めたヒーローへ話しかける。と、同時に気づいた。

緑谷じゃん、何でこんなところにいるんだか。横にいる人は見たことないヒーローだし、他のA組はいない。

確か……インターンだっけ。緑谷だけ横にいるヒーローのこのインターンに来たのかな？

「遊び盛りでケガが多いんですよ。困ったもんです」

壊理ちゃんと私に視線を行ったり来たりしてる緑谷。それだけで随分と困惑してるのが分かる。

私ⅡMs. ダークライだから壊理ちゃんと一緒にいるなんてイメージがつかないからかな？私を目の前にしてると分かってない？じゃあ気づくまで誤魔化そう。

「あの、あなた。成生って」

「私が外で遊んでるのが原因だから、私にも少し刺さるなあそれ。ああ、有名な人がいますけど……同名なだけですよ」

「同名、ですか」

納得したみたいだ。今の個性社会なんてアホみたいな名前が大量にある。成生なんて名前だって何十人といることだろう。

「お前は壊理を振り回し過ぎなんだ。自重しろ」

オーバーホールからちよつとだけ睨まれる、完全に素だ。ヒーローが目の前にいるつてのに大胆なことだ。

……いや私に向けてどんだけ恨み溜め込んでんの？心当たりしかないけども。実験回数は減らされる、壊理ちゃんとのスキンシップは横取りされる、その気になれば逃げだされるストレスもあるか。私ならぶん投げるレベルだな！

「おいおい、まーたフードとマスク外れちゃってるぜ。サイズ調整ミスってんじゃないのか!？」

緑谷のフードを被せながら横にいたヒーローが声をかけてきた。その行動だけでヴィランとそれなりにやり合ってきているヒーローだって分かる。

向こうからみれば目の前にいるのは死穢八齋會というヴィランとそのベビーシッターだ。動揺を見せず、何でもないように動くのがベストであり、そういう風に確かに動いている。騒ぎは起こさずに壊理ちゃんを取り戻せばそれでいい私からすれば都合だ。

「こつちこそすいません。その素敵なマスクは、八齋會の方ですね！こころじゃ有名で

すよね、あなたは……この子のお姉さんですか？」

「ええ。マスクは気になさらず……汚れに敏感でして。こちらはこの子のベビーシッターですね、随分と懐いてしまつて……」

「子供は元気に遊ぶのが仕事ですからね。ね、電花」

「うんー！」

こういう時に電花がいるのは助かる。ピリついた雰囲気がちよつとした会話だけで一気に穏やかになる。

ただその雰囲気を見望んでいなかった者もこの場にいた。

「お二人とも初めて見るヒーローだ。新人ですか？随分と若い」

オーバーホールがヒーロー達を探ろうと口を開く。壊理ちゃんを見られたから、保護されるといふ危うい可能性を排除するためだろう。

ヒーローの方へ顔を向けるも、バイザーのようなもので顔を隠しているので表情が見えない。でもオーバーホールの言い方からして探られていることには気づかれたかな、露骨な聞き方だったし。

「……そうです！まだ新人なんで、緊張しちゃつて！。さ、立てよ相棒！まだ見ぬ未来へ行こうぜ！」

「どこの事務所所属なんです？」



早く去ろうとするヒーローへ更に疑問を放り投げるオーバーホール。事務所が分かれば襲撃が可能になる、壊理ちゃんに繋がる者を消せるし情報戦としても間違っていない。

「学生ですよ！所属だなんておこがましいくらいのパイロット子でして……職場体験で色々回らせてもらってるんです」

誤魔化した。警戒していると言い換えてもいい。ウイルスに対してヒーローは警戒から入る、正しい当然の対応とも言える。

だが会話に応じた、それも日常会話のような会話だ。これは今は戦いたくない意思表示だ。

なるほどなるほど……つまりオーバーホールは、何かが見つかりヒーローから探られており、ヒーローも戦う段階ではないということか。

だが緑谷がインターンにいる、その余裕がある。調査を行っているのに余裕がある。それが示すのはヒーロー達から見た私達の調査は全く手がかりが無いか……詰み、どちらということだ。

となるとどちらなのかだが、まだ分からない。おそらく二人のインターン先のヒーローが何かしらの個性を持っていると見た。そしてそれが、それだけで確信に至るレベルの個性持ちなのだろう。

何せオールマイトの後継者・緑谷がインターンに来る程のヒーローだ。それくらいだと想定するのが妥当だ。

「お兄ちゃん、ヒーロー?」

「わ、元気だな。そう、ヒーローさ。……では我々昼までにこの区画を回らないといかんのぞ!行くよ!」

電花が学生の周りをぐるぐる回りながらコスチュームを触ったりしていた。電花も知らないことばかりの子供だから極々自然な行為だ。

……まあ、私も振り回されるくらいだしね。

「はいっ……」

緑谷が学生の言葉に応じ、壊理ちゃんが抱きついていてのを離し立とうとする。が、止める声があった。

「いかな……いで……」

壊理ちゃんの声だ。小さな手が緑谷の服を掴み、助けると言いたげに引き止める。

ああ、それはダメだ壊理ちゃん。そんな言い方や表情を見せたら、生粋のヒーロー体質の緑谷は離れられなくなる。

「あの……娘、妹さん?……怯えてますけど」

案の定だ。オーバーホールのため……っていうか壊理ちゃんのために今は身バレし

たかないんだけど、あんまし詮索されると衝動的に身バレしそう。

「叱りつけた後なので」

「お父さんが怖いから私がいるんですよー」

誤魔化しを口にしたけど、どうも緑谷の表情が変わらない。これは見逃すつもりは無さそうだ。

まあオーバーホールは遠からず詰みっぽいし、そこで区切りとしてはいいかもしれない。心残りは壊理ちゃんくらいか。

（デクくん、余計な勘繰りはよせー！）

「行こう」

学生がオーバーホールの警戒を悟ったか、離れようとしている。けれど緑谷は離れる様子はない。

見逃すつもりが無いのだから当然か。緑谷と壊理ちゃん以外は全員困ることになりそうだ、構わないけどね。

「いやあでも、遊び盛りって包帯じゃないですよね」

「あー、それは電花と遊んだ時のやつですね。この子は力加減が苦手で」

これは本当。電花が手加減できるようになったとはいえ、こないだの出来事だ。日常レベルまで抑えたり、全開にしたりしていると混乱することがある。

オーバーホールの世話になり回復したが、電花に覚えときなさいってことで壊理ちゃんには包帯を巻いてもらっていた。

「うん……たまにちよつと……えいって出ちやうもん……」

響いたのか、電花がしよぼんとした表情になっていた。友達の腕へし折ったなんて、下手すればトラウマものだろう。

でもそこは私の子だ、力加減を間違えたところにショックを受けている。壊理ちゃんの腕だったから、というのはそこまで気にしていないらしい。

そんな電花の自慢が思考を走っていたからだろう。上機嫌だったのがきつと悪かった。

「こんな小さい子が声も出さずに震えて怯えるって、普通じゃないと思うんですけど」

緑谷の言葉は、悪夢の原点スイツチを押した。

「普通？」

その声色は、神野の戦いと同じものになっていた。



瞳の色が変わっていることにも気づかないままに、成生は口を開く。思考した理性で

はなく感情で動く、珍しい姿がそこにあった。

「あなたの普通って、何ですか」

「え」

デクは壊理を抱きしめながら突如変わった声色に反応する。余りにも唐突に変わったため思い出せないが、間違いなく聞き覚えがある声だった。

「……少なくとも、子供が震えて怯えることは普通じゃないんじゃないかな？」

デクの様子がおかしいとルミリオンが代わりに返答するも、声の向きは変わらない。デクへと向けられたままだ。

ルミリオンも声色が変わったことには気づいていた。だがなぜ今変わったのか、変わったから人柄も変わったのか、その予測はできていなかった。分かることは一つだけだった。

テレビで聞いたことがある声。けれど声だけであり姿は知らないし、目の前の人物はテレビで見たことが無いという事実だ。

「他所の人にあなた方の価値観を、押し付けないでくれませんか？」

「おい」

様相が変わった成生にオーバーホールも肩を掴もうとして引き止めようとする。が、掴むタイミングで一步横に移動され掴むこともできない。

そんな中、壊理が成生へと顔を向けた。壊理自身が助けられたと感じた人が、そこにいた。

「壊理、あなたなら分かるでしょう。そろそろあなたも自覚ができてきたはず。……あなたの力が、どんなものなのかを」

「っ!!」

ときたま成生が買ってくる玩具に壊理は個性を使ったりしていた。その結果が、バラバラになったり溶けたり……消滅したりと碌な結果になっていない。

自身の個性が危険なことを、壊理自身理解してきていたのだ。使い方は成生によつて教えられてきているが、個性をどこに向けるかは教えられていなかった。それは、成生が教えることではないと教えることを否定されたのだ。

力を持ちつつある目的の無い少女。少し転べば善にも悪にもなる力。成生は気づいていないが、かつての自分自身を壊理に見ていた。

「この子に！何をしてるんですか!?!」

デクが周囲に気づかれないう程度の強い声で成生とオーバーホールへ問いかける。オーバーホールは目を合わせていたが、成生は目を瞑っていた。

「……ふう、ヒーローは、人の機微に敏感だな」

成生にあてられたのか、オーバーホールも口調を変える。喧嘩腰ではあるが、まだ頭

は冷静だった。オーバーホールの目的は成生と同じく壊理の保護。成生が戦いになつてもいいと判断したなら従うだけだ。

が、次の成生の言葉で動きを止めることになった。

「ヒーローの仕事で有能とされる人材ですから。それより私にこの場合は貸しなさい、知つてる顔です」

「ほお？」

手袋を外そうとしていた動きを止め、付け直すオーバーホール。成生が場を貸せと言うなら従うのは当然だ。実力や性格からして任せれば壊理を確実に取り戻せるのだから。

オーバーホールが目線を外したと同時に、デクへと成生が視線を向ける。深淵が染みだした瞳を以て。

「知っているでしょう？ ねえ……緑谷」

ゾクリとした感覚がデクの全身に走る。声も、視線も、今は取り戻せた大事な親友を……奪われたあの時に知っていた。

デクの異変にルミリオンは気づいていたが、何故そこまでというところに気づけていなかった。成長した成生には周囲に重圧はかからず、デクにだけかけるといふことが可能になっていったからだ。

「おま、えは」

とはいえルミリオンは優秀なヒーローだ。デクのたった一言で、目の前の人物が強大なヴィランと認識するには十分だった。

「この子は私達の下にいます。何をしているのかは……調べてみなさい、ヒーローでしよう?」

「この子を傷つけるヴィランなら戦って保護するだけなんだけど」

デクを庇うように間に立つルミリオン。視線の間に入ったことでデクにかけられていた重圧がルミリオンにもかかり、背筋が凍っていく。雄英のトップと言えど、冷や汗が止まらない程に強大なヴィランが目の前にいた。

割って入った学生に首を傾げて成生は疑問を口にする。相對したならまず話すべきことを。

「……?、名前は?」

「ルミリオン。百万の人を救うヒーローだ」

拳を握るルミリオンに成生は深淵色の瞳を向ける。ルミリオンの瞳にはテレビで見ただことのある、M.S. ヴィランと呼ばれる存在が映っていた。

対して成生は溜息を一つ吐き、戦う気は無いというように言葉を翳す。

「はあ……ルミリオン、藪をつつくなら場所を選びなさい。ここは場所が悪過ぎる、分か



るでしょう」

「——戦う気かい？」

挑発するような声に、成生はニツコリと笑う。まるで笑えていないルミリオンとは、対照的でした。あつた。

「出てくるのは悪夢どころではないですよ」

無理だ、勝てない。ほんの少し視線を合わせただけでルミリオンはそう感じ取つた。

成生が強大な力を持つているからではない。それを行使してなお何も思わないことが感じ取れてしまったからだ。どんなときでも十全に力を発揮できる強大なヴィランなど相手にしたくない。力があるだけなら怖いだけだが、精神に揺らぎが無いなら恐怖の象徴だ。

そこまで分かりながらも、ルミリオンはヒーローだった。

「……そうだね。でも君がやるってんなら止めるだけさ！」

勝てないと分かっている戦いでも、市民のために止めなければいけない戦いなら戦う。ヒーローとして在るべき姿に、ふふと成生も笑っていた。

馬鹿にしているのではない、優秀だと認めているのだ。敵として見ないなら視線すら向けない有象無象として見るだけなのだから。

数秒だけ笑った後、再び口を開く成生。その先は壊理に向けられていた。

「やるのは、壊理次第ですね」

壊理がビクツツと反応する。だが首を振ったりと、嫌だという様子はなかった。

代わりに、言葉があつた。

「あれは、もう、しない？」

「あなた次第です。もしあなたが求めるなら喜んでやりましょう。そうでないなら……私にできることをやるだけです」

成生の返答と同時に壊理はデクを振り払い成生の方へと寄つていく。その表情は、成生にだけ見えていた。

「あつ」

デクの驚く声も、壊理から離れたのだから当然だった。手を取つたにも関わらず、自ら離れた。成生からみたデクは状況が飲み込めていないのが丸わかりだった。

「おかえり、壊理」

しゃがみ、壊理の頭を撫でる成生。俯いてはいたが、嫌だと言う壊理はそこにいなかった。

その様子を一瞬で判断し、壊理をオーバーホールの横へ渡す。オーバーホールは一瞬首を傾げたが、すぐさま頷いた。

「オーバーホール、先に行きなさい」

「あー……知り合いなら話もあるか。分かった」

路地裏の闇へ二人が消えていく。電花もついていき、残ったのは成生とヒーロー二人だけとなった。

「エリちゃんをどうするつもりだ!?!」

デクの声に応えることも無く成生は変わらない声色で会話する。今の彼女にあるのはただ感情のままに動くことだけだ。

つまり、全て本音で話しているだけだった。

「オールマイトの後継者に、雄英のトップ……二人とも、強大な個性を持っていますね。雄英でなければ、事を起こしかねない程の強い個性を」

「何が言いたい?」

ルミリオンが疑問を返すも、成生は変わらず言葉を続ける。おしゃべりが好きという本質が露わになったかのように。

「あの子の個性はそれよりも希少で、未知なもの。……私と同じように」  
「おまえ、と?」

情報は聞き出せる程助かる、ルミリオンの判断は間違っていない。だがジョーカーの如き情報は全容が分からなければ危険も伴うものだ。

未知の個性ともなればどんな落とし穴があるか分かったものではない。使い過ぎた

ら爆発するなんてことだって考えられるのだ。故に何が起きるのか、デメリットは何かを全て把握しなければならぬ。

成生と壊理の個性についてヒーロー側はまるで分かっていない。下手に触れば足元に落とし穴が透けて見えるようですらあった。

「あなた達が壊理を保護するのは結構なことです。ですが、あなた方が保護した先を考えてない以上壊理を渡すことはできません」

これこそは成生の本音。助けることは推奨しても、その先が見据えていない者に渡すわけにはいかない。

自らを、オールフオーワンに渡していないように。無意識にだが壊理に自分自身を投影しているからこそその言葉だった。

「準備でもしろって?」

「優しいんだね!意外とお話好きかな!」

幸いにもヒーロー側にも言いたいことは伝わっていた。特にルミリオンは話好きのところまでバレており、優秀極まりないことが感情を優先している成生にでも理解できていた。

「ええ。ヴィランの私を知らない人はいないと言っているのですが、本当の私を知っている人はいませんか」

話好きなのが興に乗ったのか、成生は自らのことを話していた。ヒーローには滅多に話さない、自らのことを。

「本当の、依光成生？」

「あなた達のヒーローネームと本名は違うでしょう？それと似たようなものですよ。ヒーローなんていう社会的地位と自らの生命活動に使う呼称を同等に扱うわけではないでしょう？」

私もM・s・ダークライという名前をつけましたが、依光成生という名前があります。同じことですよ」

M・s・ダークライというヴィランネーム。ヒーローにヒーローネームがあるように、同じ意図で付けたのだと成生は話す。

それは、ヒーローが本来見なければいけない「依光成生」という人格を隠すようだった。そして隠そうとする意志に、二人は気づけていた。

「個性と一緒にってヴィランもいるけど？」

「……ええ、私はどっちでしょうね？」

もつたいぶるように成生は口にする。

オーバーホールやオールフオーワンのように個性とヴィランネームが一致する者もいるが、弔のように一致しない者もいる。『個性が強大なヴィランである』と魅せるため

だが、成生はどちらでもあってどちらでもない。

個性が強大なヴィランだ。魅力的であるのも間違っていない。そして……個性はヴィランネームになつていながらなっていない。

成生自身はそれを知っているが……しかし放っておいていた。自身の個性の先、分かっているながら到達するのが止められないとも分かっていたのだ。

脱線しましたねと一言告げ、成生は話を続ける。

「話を戻しましょうか。私がやっているのは遠回りですが壊理に個性を制御させているだけですよ、その後どう転ぶかは壊理次第です。

その気になればあの子一人で死穢八齋會を壊滅させることもできるようになる。それはあの子次第」

ヒーロー達二人からギリツと歯ぎしりが鳴る。壊理という少女に強大な力を据え付けるという意味では何も間違っていない……ヒーローが見逃せない行為だ。

それでもルミリオンは情報を聞き出そうと、動き出した一心を理性で抑えつけていた。

「……ヴィランを育ててることかい？」

「さあ？ただ、生粋のヴィランを作るならやり方は違うとだけ言っておきましょう。まあ壊理にはヴィランの素質はあんまりないですが」

その言葉にデクは少しだけホツとする。

M s. ダークライという存在がどういう行動をしているのか既に知られている。大きく二つであり、ヴィランになりかけている人をヴィランにするか……ヒーロー寄りにするか。

大半が前者なのだが後者もいた。そして今回は狙いは壊理であり、後者だろうと本人の口から出されたのだ。

であれば、壊理が死穢八齋會を壊滅させることは考えられない。

「壊理が個性を制御できるようになりあの子が判断するが先か、あなた達が私達から壊理を奪うか、どっちが先でしょうね」

もちろん可能性は0ではない。成生の言った壊理次第とは言葉通りであり、壊理の判断次第では成生がどう動くかも変わるのだ。

M s. ダークライは背中を押すだけだ、自ら悪行を犯すことはほほしくない。その「ほほ」から抜けた事件が大概とんでもない被害を齎すことが多いだけだ。

今回もまた壊理という少女の背中を押すだけ。押せない程に力が育っていなかったから育てた、それだけのことだった。

「最後に一つ忠告です。壊理の個性は指先が触れるだけで人を殺せる個性です。制御すらできずに手を伸ばした先は……どうなるんでしょうね」

「!!!」

助けてほしいと叫ぶ手を取る、ヒーローがもつともやらなければならぬ行為だ。

壊理に対してはそれが生半可な覚悟ではできない。成生や電花は即座に離れられる身体能力と反応速度があるから簡単に触れられるのだ。

もし壊理の個性が一瞬とかけずに巻き戻せるなら成生ですら殺せた。五秒と満たないが、数秒程度のタイムラグがあるから成生や電花が触れられていた。

何にも知らないヒーローなら、手を繋いで保護して数秒経つなど簡単に予想できる。壊理が個性を制御できてなければ死ぬ時間だ。そして助けられたヒーローが死ねば、壊理はトラウマが蘇り成生以外に助けを呼べなくなる。

成生からすれば壊理が依存しようがヒーロー側に行こうが、どっちに転んでもよかつた。所詮はM・s・ダークライの行動の一端に過ぎないのだから。

「あなた達に伝える情報はそれだけで十分でしょう。どうやら既に足元に近づいていたようですし、オーバーホールももうじきお縄ですかね」

後ろを向き路地裏の闇へと歩き出す成生。成生の中では既にオーバーホールは切り捨てられていた。

個性破壊弾

報酬は手に入れられ、壊理がオーバーホールから解放されることは二人に会えたこととほぼ確定。壊理自身も個性制御が進んでいる。成生がやろうとしていたことはもう終



わりつつあった。

後はオーバーホールをヒーロー達を使って弄ぶだけだった。

「待て！ 依光成生！」

デクの声が成生の耳に届く。と、同時に成生は足を止め言葉を零した。成生の直感が多分そうだと言っている……事実として本当にあったことを。

「ああ、そうだ……私のことはきつとオールマイトが少しは知ってると思いますよ。勘ですが、オールフオーワンと会ったでしょうし」

そう告げると路地裏の闇へ今度こそ消えていった。転送の個性がある以上、追つても追いつけないのは二人には分かっていた。

だがデクには最後の言葉が何よりも突き刺さっていた。

「……オールマイトが？」

デクはオールマイトの後継者だ。最も尊敬し、一時は崇拜にすら近かったヒーローなのだ。そのヒーローが、最も警戒しなければならぬヴィランに対して知っていることがあり、隠しているとは信じられないことだった。

## 悪夢の墮とし子 始動

「ねえねえ、この子が私の妹？」

「そうじゃ。まあお主よりも年上になつてしまふが……些細な問題じゃな」

時間は少しだけ巻き戻る。成生がトガと共に仮免試験に参加していた頃、電花はドクタ―の下にいた。

電花の目の間には一人の女の子が試験管に入っていた。腰ほどにも伸びている長い白髪、身長は150cm程であり体型は14歳程のそれだ。ただ発達が早いのか、胸や腰といった女性的特徴は随分と良いものだ。成生がいたら少しだけムツとして自らの身体を変化させるくらいだった。Eはある胸に、身体つきは曲線美を描く。身長がもう少しあれば男から見た理想的な身体つきとも言えるものだった。

試験管の中でコポコポと空気の泡が時々漏れ、生きているのだと証明していた。

「ハイエンドでも起動から安定するのに10時間かかる。その前のテスト段階を考えれば本来なら数年の時間がかかるものじゃが……流石はM.S. ダークライの墮とし子。まさか全個体がテスト段階を超え、起動できる状態になりつつあるとはの」

ドクターからすれば驚きもいいところだった。目の前の少女は電花という試験個体

を除けば正式な計画一人目。だが、だからこそ失敗するか何かおかしなところがあると思っていた。一回目は失敗して当たり前、二回目は上手くいかないが失敗でもない、三回目は成功する可能性がある。研究とはそういうものだからだ。

しかし目の前の少女は明らかに成功していた。電花は例外とすれば一回目だということだ。理由はすぐ横に立つ幼女のおかげだと察していた。

「電花のお陰でもあるのう」

「そうなの？ やったー！」

無邪気に喜ぶ電花の姿に頬が綻ぶドクター。寿命があと半年も無いと思うと残念に思うが、オールフォーワンのため故仕方ない。

そのオールフォーワンは捕まってしまったと言えど、M s. ダークライに力を貸すのはオールフォーワンと協力体制にあるがため。M s. ダークライも裏切った訳ではないのだ、ならば協力は続けるだけだった。

何より——脳無のため依光成生という最高の実験材料が使えるのだ。協力体制を分離す訳も無かった。

「本来なら先生がいての起動だったはずじゃが……事前に起動テストはしなければならん」

致し方無しとドクターは呟く。既に成長が終わっている段階のため起動に入ってい

るのだ。脳無とは違い胎児脳無計画は成長という段階があるため保存は難しい。

今回作ったのは三人だが、成長自体はそれぞれ遅らせていた。それもまた実験だったからだ。成長が最適なのはどの速度がいいのか、その確認のためだった。他個体も起動できるが成長はまだ5歳児程度、いつでも起こせるという……戦力という意味では十分な価値だった。

ただ今回ドクターが驚いていたのは三人全員が起動できる段階に至ったことだ。一人目は、目の前の試験管に沈んでいる少女は既に起動できると分かっていた。

「おかーさんがたまに話しかけてたよ？返事してた」

「既に起きているか確認じゃな、お主のお陰で知能レベルが測れたのも幸い。あれのお陰で十分に知能があるのが分かったのは大きかったのう」

起動しなくても生きているのだから身体に電気信号は走っている。そして電波を受信できる電花が居れば会話することすらできていた。故に起動段階に至る前から既に起動できるという確信を抱いていたのだった。

「では起動じゃ」

ドクターはスマホのような端末からスイッチを押す。装置が起動し、試験管が上下に開き、内部を埋めていた溶液は周囲に溢れ出した。

同時にべちゃやという音と共に試験管に入っていた少女が倒れ込む。だが試験管の中

に生まれたことすら何でもないかのようにスツと立ち上がり、髪を背中へと回し顔を二人へと向けた。

ドクターからすれば異常極まりないことだ。試験管で生まれた子なら筋肉の動かし方が分からなくて当然、故に学習させなければならぬのだがそれを無視していた。

しかしそれもドクターには感極まりないことだった。何故なら目の前の少女は特別極まりない少女、崇拜するかの方の遺伝子を持つているのだから。

「おはよー。私のことが分かる？」

「お、ねー、ちゃん」

流石に声を出すのは少女といえど流暢ではなかった。いや、声を出せるというだけで本来なら数日かかるようなものだ。ただ成長が異常極まりないというのは成生の子だと言えば納得できてしまう。

二人の様子を見て知能レベルも十分だと判断し、ドクターも口を開いた。

「わしが分かるかの？」

「ドク、ター。はな、し、て、た」

ドクターの予想通り、人の判別も可能であり記憶も十分にある。数日もあれば人として扱える完成度に舌を巻きたくもなる。

が、それはまだだ。聞かなければならないことを聞き、身体が動かせるようになって

からだ。だからこそまず、一番先に聞かなければならないことを声に出す。

「お主の名前は？」

三秒ほど間が空きながら、少女はその名を口にした。

「だ、つ、き」

悪夢の墮とし子にして次姉、奪姫——依光奪姫と呼ばれた少女が産声を上げた。

■ ■ ■

「あ、あー……声、出るように、なってきた」

「早いもの。個性がもう動いておるのか？」

ドクターも驚く程の成長速度。ただこれは常時起きている成長ではなかった。

身体の動かし方という意味では赤子から成長というステップを飛ばしている奪姫だが、赤子の如き学習能力は残っているのだ。今は赤子のように目に見えるものから、聞こえるものから真似したりと覚えているだけに過ぎない。それでも異様な速度だったが。

期間に直せば数時間しか保てない成長速度であり、その後は電花と同等レベルまで落ちていく。もつともそれでも十分過ぎる成長速度なのだが。

「電花、おねーちゃん。おかーさん、は？」

「今はトガおねえちゃんと遊んでるところ」

とはいえ奪姫もまだ子供。母親である成生はどこかと周囲をキョロキョロと見回し、いないことを聞いて肩を落としていた。

ぐっぱつと手を握ったり屈伸したりと身体の動きを確かめていく奪姫をニコニコしながら電花は眺め、ドクターはウキウキしながら最も聞きたかった疑問を口にした。

「奪姫、お主の個性は分かるかの?」

弾むような声に奪姫は首を傾げる。個性の使い方もまた身体の使い方なのだ、ならば今学習している最中であれば使い方も分かるはずだった。

そして無個性ではないこともドクターは分かっている。五歳になる頃には既に個性がある身体を示していたのだ。

「個性?……多分、ことう、かな?」

奪姫は首を傾げながら軽い声でえいっと口にする。周囲には何も起きず、物理現象は何も起きていなかった。

しかし発動したことは電花とドクターには分かった。いや、二人にしか分からなかったと言える。

「わわっ!?!」

「ぬう!?!」

二人の身体の調子が一気に良くなったのだ。身体に力が漲り、若返ったようにも思え

る程活力が増す。

ドクターはこの個性を知っている……いや、似た個性を知っていた。死穢八斎會というヴィランのメンバー、活瓶力也という男の個性だ。

「活力が増した……。言うなれば「活力吸収・譲渡」といったところか」

レアな個性だ……が、それだけだ。オールフオーワンやM s. ダークライ程ではない。

強力ではあるため落ち込む必要はないが、ドクターはもしかしたらと期待はしていた。オールフオーワンすら越える個性の持ち主になるやもしれないという、個性終末論に確実に近づいた個体の可能性を。

何せ天然のマスターピースという女神と崇拝する魔王を親に持つているのだ。

「私自身にも、できる」

「今度はあー……はふう……」

奪姫が個性を使って電花の活力を奪ったり渡したりと遊ぶ。端から見れば姉妹のじゃれ合いだが、間に割り込むのは相応の体力が無ければ不可能だ。

何せ彼女らの活力は一般人など吹けば飛ぶほど。オールフオーワン並みを基準に作られたのだ、割り込むのにもプロヒーローでもなければ難しい。

「先生とM s. ダークライの墮とし子ともなれば規格外かと思うたが……。強いは強



い、じゃがそこまでじゃな」

ドクターの落ち込むような声に身体を向ける奪姫。先程渡された活力を奪われ元の活力へと戻されるドクターへ、にへらと笑い奪姫は問題ないと口にする。

「十分、強い。見れば、感じれば、全部奪れる」

その言葉でドクターは自らの認識間違いを正す。活瓶力也とは範囲と応用が桁違いなのだ。彼は触らなければいけないし吸収しか出来ない。

しかし奪姫は五感で相対者を感じればいいだけ。汎用性が別物だった。となれば心配すべきは一点のみ。

「時間さえあれば触れずとも殺し切れる個性。確かにプロヒーローすら容易に殺せる個性じゃな。あとは吸収・譲渡の速度と容量か」

所謂個性伸ばしで伸ばせるところだ。これさえ解決出来れば奪姫は知覚されれば死ぬという絶望の権化となる。

そんなドクターの心配を微笑み返す奪姫……それも当然。個性伸ばしは彼女達が共通で持っている得意分野だ。

「ふふ、ふ……。私の、おかしさん、忘れた？」

「杞憂じゃったな」

一言でドクターは納得した。M.S. ダークライの墮とし子には必要のないことだっ

た。

奪姫の個性も認識も問題ないと嬉しそうな顔で見ていたドクターだが、電花の一言が表情を歪ませる。

「だつきー、じゃあ身体動かさそー？」

慌てさせるといふ意味で。

「訓練場まで飛ばすからそこでやりなさい」

二人が動き出すよりも早く声に出し、即座に足元の脳無に転送の個性を使わせる。

ポケッとした顔をしながら転送されていく二人。ドクターがサラツと流したが、研究所が壊滅する危機だった。



転送された二人はかつてM.S. ダーククライが訓練していた場所にいた。ここならばまだ全力は出せない奪姫と電花の激突にも耐えられると踏んだのだ。

間違いいではない。が、電花にとつての目的はそこに無かった。

「電花、おねーちゃん。二人きり」

走ったり跳んだり軽く身体を動かし、調子を整えていく奪姫は……察したのか、それとも電花の個性が無意識に発動し奪姫が知ったのか分からない。

けれど何も言おうとしない電花を見、奪姫は感じ取った。言いたいことがあるのだ

と。

「何か、お願い？」

「うん。私にはできないから。だつきにお願いしたいの」

既に成生の横にいる命の残り時間も無い電花だ。彼女自身それを分かっており、だからこそ早く弟妹に会いたかった。

家族の未来のため、長姉は弟妹を助けるのが当たり前なのだから。

そしてもう一つ、自分たちが産まれた意味を教えなければならぬのだから。

「おかーさんが助けた人、バラバラになってて可哀そう。だから、まとめてあげたいなつて」

「……でも、私達、移動、できない」

ドクターに囚われ、動こうにも自由には動けない奪姫と成生の近くにいたい電花。動こうにも難しいまのがある。

しかし……ならばこそ彼女達は声を上げる。自ら達の思想に近い人の下へと、

「うん、だから頼ろうかなつて」

「誰を？」

当たり前の疑問に電花は微笑みながら声に出す。外の世界には、色んな人がいると知っていた。広範囲を受信できる電花には、処理落ちしかけることはあるが落ちること

は無い。

だからこそ分かる——思想が似ている人の波長が。

「おかーさんの考えに少しだけ似てる人に……確か、なんとかネット社つてところの人」  
「そこに、お願いして、おかーさんに、助けられた、人の、会。みたいなのを、作る？」  
遺伝のせい、頭の回転が早い奪姫に電花はコクリと頷く。

「うん。きつと助けてくれると思う」

何の根拠もない自信。けれど妙に説得力のあるものだった。

「何で、分かる、の？」

「なんとなく」

「……勘？」

再び電花は頷く。勘ではあるのだが、そこらの人とは比べられない。

何故なら母である成生は第六感とすら言える勘を持っている。個性ではなく、彼女自身  
の力で持つているのだ。

劣化こそしているが墮とし子達は似たものを持つていた。第六感とは言えないまでも、  
根拠と呼ぶには十分なものだ。

「私たちは、おかーさんに作られた。

だから、なんとなく分かるんだ。おかーさんが本当は何が欲しいのか」

言の葉にすればそれだけ。しかしそれだけで奪姫には電花が大きく見えた。依光成生の長姉という、奪姫からすれば尊敬できる人の姿を体現していた。

嬉しそうな顔をして電花に疑問をぶつける奪姫。無邪気な視線には、妹が姉を慕う色が混じっていた。

「それが、助けた人の、集まり？」

「それかなあ？つて。なんとなくだから、ちゃんとそれだつてのは分かんない」

クスクスと微笑み会う姉妹。勘が根拠の行動など……まるで母親のようですらあった。

「だつきも、おかーさんに会えば分かるよ」

「おねーちゃん、おかーさんはどんな人？」

まだ会ったことの無い母親、見たことはなく、声を聞いたことがあるだけ。優しく、包み込むような声をしていたことを奪姫は覚えていた。

頼もしくもあると予想していた奪姫だが、電花から聞こえたのは違う印象だった。「優しい、頼れる、でもよく泣くのを見るかなあ」

思い返すように成生のことを話す電花。奪姫は電花の印象は意外なものだった。強く美しく気高く優しいと思っていたが違い、繊細であり弱々しいところもある。

奪姫の知らない成生の姿、知るのは電花だけであり……だからこそ、電花にしか言え

ない言葉があつた。

「だからきつと、私達はおかーさんを泣かせないために作られたんだよ」

ニコリと笑う電花に、衝撃を受けたように目を見開く奪姫。

産まれた意味など考えもしない情緒の段階だというのに、姉がほぼ分かっている言い方をしたこと。そしてその言葉が何よりもじっくり来たことは、奪姫の性格をどんな方向へ進めるか決めていた。

「分かつたよ、おねーちゃん」

無邪気に嬉しそうな顔を、妹の顔をして返事を返す。電花も幼いながら、姉の微笑みを浮かべていた。

「私、<sup>ゆうや</sup>勇也、<sup>あでは</sup>艶羽、皆もおかーさんのためなら、頑張る。ね、おねーちゃん」

全てを支配する魔王、魔王を倒せし使命を帯びた英雄、空を自由に羽ばたく鷹。父親の力を継ぎ母により力を昇華させた墮とし子達、その一人目が立ち上がる。母を泣かせる何もかもから守る、たつたそれだけのために。

「おかーさんの研究所にいる私達の弟妹……大、<sup>たい</sup>灯火、<sup>とうか</sup>崩華、<sup>ほうか</sup>散血、<sup>ちけつ</sup>消一、<sup>しょういち</sup>闇子、……仁。<sup>じん</sup>いつか、私が居なくなる時が来る。何とかしようとするごく頑張るけど、その時は……

おかーさんをお願い」

歩く災害、燃やし尽くす獄炎、全てを崩し壊す指、英雄を殺し固める血、抹消させる瞳、闇に生きる鳥、あらゆる存在を増やす者。一人一人が並の個性ではなく、成生の子ともなれば脅威は尋常ではないレベルに跳ね上がる。

ドクターやオールフォーワンは知らないが、奪姫が作られ始めると同時、成生が研究所で真似て既に準備していた施設だ。そこに彼らはおり、施設は既に全て稼働していた。

ドクターと違うのは失敗する可能性など成生は考えなかったことだ。何故なら第六感染みた勘があるのだ、心配する必要もなかった。

「……うん、ありがとう、おねーちゃん」

彼らが起動するだけでプロヒーローが壊滅できるであろう戦力であるが、一人目でありリーダーとなる奪姫は純粋に辛かった。

どこか儂げな姉の姿。それが会ったばかりだというのに別れが近いことを奪姫は察せてしまうからだ。弟妹が増えても、奪姫に姉は一人しかおらず……そして年下の姉より精神はまだ幼いのにも母親を任される。それも尊敬する姉の代わりと言わんばかりに。

辛かった——だからこそ奪姫は今を生きる。

「ねえおねーちゃん」

「何?」

「ぎゅってして?」

今しかできないからと奪姫は甘える。電花も分かっているからか、微笑んでいた。

「だっきは甘えん坊さん」

二人だけの姉妹は強く抱きしめ合う。まるで自分たちの決意を強く、強く固めていくように。



## ヒーローサイド ナイトアイとオールマイト

デクがM.S. ダークライと遭遇し、見逃された頃。ナイトアイとバブルガールは死穢八齋會の本拠地を監視していた。

「しっかしまー、弱小とはいえさすが生き残った極道ですね。塀は高くて窓は少なくて……いい家住んでますわ」

「マークから一週間半……。いつもより人の出入りが無い」  
「でんわ」

バブルガールが軽口を叩きナイトアイが情報を整理したタイミングで、バブルガールに電話がかかってきた。かけてきた先は……ルミリオン。

「え!？」

バブルガールの驚愕にナイトアイも顔を向ける。バブルガールの表情は驚きから変わっていないかった。

「ミリオン……治崎と接触したらしいです」

数分後、ナイトアイとバブルガール、ルミリオンとデクの四人は合流していた。緊急もいいたころの出来事に二人だけでは解決できないことであり、当然の行動だった。

「すみません！事故りました！まさかあんな転校生と四つ角でバツタリみたいな感じになるとは……」

「いやこれは私の失態。事前にお前たちを〃見て〃いれば防げた」

「とりあえず無事でよかったですよ！下手に動いて怪しまれたら危なかったかも」

ルミリオンの言葉に、ナイトアイの失態をバブルガールは心配を告げる。

危なかった、その言葉にルミリオンは先ほどまでであった究極レベルの危険を口にする。こればかりは絶対に共有しなければならない情報だ。

「それなんです……」

治崎だけでなくその横にはM.S. ダークライがいたこと。突如として雰囲気を変えて目の前に姿を現したことをルミリオンとデクで口にする。どちらも見逃されたことだけが救いだった。

「奴が……いや、それは事務所で話そう。それ以外には？」

「治崎には娘がいます！」

「娘……？」

ナイトアイのデータに情報は無い。怪訝な顔をしていたところに、デクが少女の印象を語る。

「エリちゃんと呼ばれてました。手足に包帯を巻かれてましたが……とても怯えてい

た。何も分からないけど、助けを求めた。

「どうにか保護してあげられたなら……」

「傲慢な考えをするんじゃない」

冷たい瞳、デクへ向けられた視線も凍っているようなものだった。

ナイトアイはオールマイトの後継としてデクを認めていない。それ故の冷たさもあるが、何より今のデクはナイトアイにさえ弄ばれる程度の実力しかないからだ。

力が無ければどれだけの意志を貫こうと散るだけ。それをよく知っているからの言葉だった。

「奴の言うことを信じるなら保護をするにも間違いなく混乱する。急いで事は仕損じる、どう転んでも対策は必須だろう。」

焦って追えば奴は無関係の市民を攻撃する。救いたいときに助けられるほど貴様は特別じゃない……ましてや相對したのが奴ならば尚更だ。緑谷、貴様なら私の気持ちもよく分かると思っていたのだがな」

「……っ！」

デクとナイトアイに共通するのはオールマイトの大ファンであること。だからこそ奴、オールマイトを倒した敵……ウィラン M s. ダークライへの敵対心も同じだった。

だが、だからこそ強大さも分かっているとナイトアイは思っていた。オールマイトが

真正面からではないとはいえ、負けたことは事実なのだから。

「まず相手が何をしたいのか予測し、分析を重ねた上で万全の準備を整えなければならぬ。」

志だけで救けられる程世の中甘くはない」

まるで自分自身に言い聞かせるようにナイトアイは呟く。デクもうつと息を呑んでいた。

デクもまたM s. ダークライに苦渋を飲まされた。志だけではどうしようもない力、目的を以て放たれた悪意には足掻くことすらできないのだ。

「緑谷、奴のデビュー前を思い出せ。真の賢しい敵は闇に潜む。<sup>サイラン</sup>時間をかけなければならぬ時もあると心得ろ」

M s. ダークライのデビュタント前、林間合宿でかつちゃんを奪われた思い出がデクの頭をよぎる。表に出なくとも簡単に事を為し、姿を現しても先生に手を出すなど言われた。

潜むという表現が的確過ぎるものだった。

「さて、一度事務所に戻るぞ。奴……M s. ダークライの話をしなければならぬ」

言葉を濁してM s. ダークライのことを口にしなかったナイトアイ。外ではどこから情報が洩れるか分からないからだ。

時間は少し経ち、四人はナイトアイの事務所に戻ってきていた。今日の調査は打ち切りという形だった。

バブルガールは事務作業に戻り、残った三人は別室でエリについての情報やM.S.、ダークライや治崎との会話を一言一句そのままに情報を整理する。

ナイトアイの予測は、それだけで十分なものがあつた。

「触れれば殺せる個性か……そして敵になる素質はない、と。これは奴も困っているな」「どうしてです?」

考えもせずに発言するデクにナイトアイは眼鏡をクイツと持ち上げる。明らかに苛立った様子だった。

「予測くらいしてみろ。奴の行動から目的を、目的から性格を、性格から人間性を」

ここはプロの事務所。仮ではあつてもプロとして扱うのだ、何にも考えずに疑問を口に出せる学生気分ではない場所ではない。

しまったと思いつつ、次の瞬間にはデクは思考にふけていた。ぶつぶつとナードらしい独り言を口にする。

「ヴィランを増やす……ヒーローも増えてる……背中を押す……どっちつかず?」

「目立ちたがりつてことですか?」

埒が明かないとルミリオンが答えを告げる。会話は急いでいないのだが、今日のパト

ロールが中止になったことでルミリオンも重く見ていた。

可能な限り早く情報を整理し、真実へ辿り着きたかったのだ。ナイトアイにも伝わったのか、コクリと頷いていた。

「そうだ。そして目立ちたがりだが半端な真似はしない。つまりエリを助け背を押したはいいものの、そこからヴィランにならないならヒーローに渡さねばならない。

だが奴程のビッグネームがヒーロー事務所に来ると思うか？ ユーモアという意味なら百点だがな」

「気分屋っぽかったから来るかもしれないような……」

USJで一度会っているデクは思わず口に出していた。デクの印象だけだったが、実的を得ていた。

デクの言葉にムツとするナイトアイ。彼自身、別の件からMs. ダークライには思うところがあったのだった。

「……そうだったな。貴様は奴と接触したことがあったな。本当に予知通りで嫌になる」

「Ms. ダークライを予知で見たことが!？」

デクが声を荒げるが、ナイトアイは落ち着けと一言告げるだけ。

そもそもMs. ダークライ程強大なヴィランが予知で出てこない訳が無いのだ。そ

れでも予知にあまり出てこないのには簡単な理由があった。やってることが犯罪を犯しそうな人の背を押すといったり、逆にヒーローになりたいと悩んでいる人の背を押したりと、現実に影響される人はあくまで「怪しそうな人」であることだ。「既にヒーローが怪しんでいる人」やヴィランにはそもそも関わることすらしないのだ。

「昔の話だ、話を脱線させるな」

「あ、はい」

それでも数撃てば当たる。ナイトアイには心当たりは多くあった。何より、最も大きな変革の予知は間違いなく彼女だという確信すらあった。

しかし今話すことではないと、話を続ける。

「ヒーローに渡したいがヴィランのビッグゲームが邪魔をする。秘密裏に渡すとかですかね?」

「それができれば苦労はしない。秘密裏に動こうとしても必ずどこかで情報は漏れる、奴はそれを嫌ったのだろう。故にエリのボディガードに付いている」

エリのボディガードにMs. ダーククライ。そこからエリを救けるとなれば絶望的なまでの戦力差だ。が、ここまでの予測で分かる事実もあった。

「だが逆に言えることもある。奴は澁々動いているということだ」

「……ああ、ということとは」

「通形先輩?」

まったく見当もつかないデクに思わずいつも通りの呼び方をしてしまうデク。

戦いの予測はできても性格や目的といった予測はまた別物だ。例えば、もしこいつがクズのヴィランならどういう行動をとるか? そういう予測がデクにはまだ出来ず、ルミリオンには出来ていた。

ナイトアイが溜息を一つ吐き、ルミリオンへと話を促す。

「貴様は人柄の予測はまだまだだ。ミリオ、答えてみる」

「ボディーガードだけど治崎達を捕まえる分には手を出してこないってことさ! 要するに彼女と戦う必要はない!」

ルミリオンの回答にナイトアイは頷く。間違いなくそうなると予測できる、何せ目立ちたがりならこんなところで油売つてる暇は無い。暴れるだけで人を魅せるカリスマは出来ない、暴れ方というものがあるのだ。

故に治崎との戦いまでは手は出さない。が、その先はまた別の話だ。

「正解だ。おそらくこちらが捕まえようと動いたら察してのらりくらりと逃げ……治崎を捕まえた後、我々とエリの間立ち塞がる。見物人が誰も居なくなれば自由にできる、そう来るはずだ」

「それじゃあ」



ダメなんじゃないか、デクが口にするより早くナイトアイは自らの予測を言葉にした。正確には、そうするしかないという対策を。

「そして目立ちたがりということとは会話が通じない獣じゃないということだ」

個性で暴れる者はよくケダモノと呼ばれる、暴れるしか能が無いからだ。

しかし彼女はそうではない……であれば、交渉という余地はあるのだ。

「奴は実力行使はしてこない。出来る限り引き分けに近い形か、エリの意志で逃げたという形か、そういった形をとるだろう」

狡猾で慎重・強大なヴィラン、そう評価されたが故に通じる可能性。成生からすれば皮肉だが、強大なヴィランと成ったからこそできる対策だった。

□□□

週が明けた月曜。緑谷は職員室に訪れていた。オールマイトから全て聞き出したかったのだ。

しかし中に入ってもオールマイトはおらず、いるのは他の先生たちのみ。ミッドナイトが近くにいたため所在を聞くことにした。

「オールマイトならジヨギングよ」

「ジヨギング？」

「知らなかった？家庭訪問終わってから何故か鍛え始めたの。引退したならゆっくりす

ればいいのにな」

全部教えてくれオールマイト。今の緑谷の気持ちはそれだけだった。

既に放課後になっていたためフルカウルを使い、ミッドナイトがこのコースを走っているのを見かけると言っていた場所を走って探す。オールマイトは、すぐに見つかった。

「緑谷少年が来た！ゴホッ

何故私がここにいると!？」

勢いよく走ってきた緑谷に、ここにいると分かっていたことにオールマイトは驚く。が、緑谷はオールマイトに会えたというのに黙っていた。走ってきて息が上がっているというのもあるが、何から聞けばいいのか分からなかったのだった。

「……………全部知ってたんですか？」

意を決して口を開く。何から聞けばいいのか分からない、だから緑谷は疑問を全部口にした。

「ナイトアイがワンフオーオールを知っていて、通形先輩が後継の候補だったって……。それに M.S. ダークライのこともオールフオーワンに聞いたって……。全部知ってたんですよね……。？何で言ってくれなかつたんですか？」

オールマイトはジョギングしたまま緑谷の方へ立ち向かない。まるで真正面を見て

話せないことだと言うようだ。立ち止まらないのも、逃げ出しているようにすら思えた。

「言う必要……あつたかな」

「あるでしょ!!!」

オールマイトに緑谷が怒って大声を出す、非常に珍しいことだ。

返答を待つよりも早く、緑谷は思ったことを全部声に出す。分からないことばかりであり、答えを知らなければいけないのだ。

何より、オールマイトの考え方という本来なら緑谷にも分かるはずのことが分からないということが大きかった。

「新事実ばかりでなんかよく分かんないまま否定されて！何よりオールマイトの意図が分からなくて！

M s. ダーククライのことなんて皆で共有すべきことでしょ!?!」

「秘密にする意図が分からないからモヤモヤする！何で教えてくれないんですか!?!」

あなたのファンとしてじゃなくて、後継者として全部知りたい!」

後継者として知りたい。その言葉に一瞬だけ横目で緑谷を見るオールマイト。

誤魔化すこともできないと判断するには十分であり、緑谷の覚悟をみるにも十分だった。

「……………この話は君の為に、社会の為にならないと思った。本当に聞きたいのか？」

「このまま秘密にされるよりいいです」

「後悔するなよ」

「……………はい」

緑谷の言葉を聞き、オールマイトは話したくない過去を呟き始める。オールマイトの関係者しか知らない過去の話を。

「ナイトアイは元々私の大ファンでね、サイドキックは取らない主義だった私だが……根負けする形で彼を迎え入れたんだ。ともに活動してたのは五年程。時期で言えば君たちが中学生にもなっていない頃だ。

身体能力はそれほど高くないが、ブレインとして私の活動を支えてくれた」

「知ってます……………前線で活躍するオールマイトのサポート役です。仲も良かったはずで  
す」

デクはオールマイトの大ファンだ。サイドキックも当然知っていた。そして同時に、今はサイドキックではないことも。

コンビを解消している事実、その別れの原因こそが話したくない理由だった。

「ああ……………だが6年前、私の怪我によってコンビを解消した。価値観の違いだった」

オールマイトはナイトアイのことを思い返しながら話し始めた。今思えばナイトア

イの言葉通りにした方が良かったかもしれない、そう思わせる過去だった。

□□□

6年前、オールマイトとナイトアイの間に亀裂が入るほんの少しだけ前のことだった。オールマイトはオールフォーワンとの戦いにより内臓をやられており、病院の壁にもたれながらヨロヨロと歩いていた。

歩く理由は単純明快、オールマイトはヒーローだからだ。

「無茶だオールマイト。もう引退すべきだ」

だがナイトアイは止める。身体が傷つき、行動もマトモにできないともなれば必然だ。まして、それが大ファンであるオールマイトともなれば当たり前の言葉だった。

「ニュース……見てないのか……？皆が私を……探している。待っているなら……行かないやあな……」

しかしオールマイトは止まらない。オールマイトはヒーローなのだ、市民が求めているならば動かなければならない。彼自身の原点がそうさせるのだった。

「その体でヒーローを続けても皆が辛くなるだけだ。呼吸器官がやられたんだ、以前のようにはいかない。あなたの願う平和のためにも……伝説のまま引退すべきだ」

「ワンフォーオールの後継ならウチでいくくらでも探すといい。君は十分に頑張ったさ」

ナイトアイの冷静な声に、根津のフォーローが入る。平和は一人で作れるものではな

い、それにワンフォーオールは紡がれてきた灯であり、ここで絶やす訳にはいかない。動けなくなったら次の人に託す、それができるのがワンフォーオールなのだ。分かっているからこそナイトアイは止め……そしてオールマイトは歩いていた。

「もうフカフカのベッドで安眠をとつていいんだ。明るく強く親しみのある人間、あなたのような人間を見つけ……託そう」

「その人間が見つかるまでの象徴は？ オールフォーワンがいなくなっても……超人社会……すぐ次のオールフォーワンが現れるぞ」

オールマイトはワンフォーオールを託され、そしてオールフォーワンを討った者だ。それ故に、次のオールフォーワンが現れることを最も恐れる。自分が行ったことで終止符を打ったことなのだ。それが再び訪れることを最も嫌う者とも言えた。

ヒーローの、平和の象徴。オールマイトが必要だからと作り上げたものであり壊されてはいけないものだ。しかし……今の本人を見る者は、そう呼べなかった。

「象徴論は分かる！ 敬服している！ けれど……なあ——全然笑えてないじゃないか……！」

ふらつくオールマイトをナイトアイが支える。苦悶にも近い顔をしたオールマイトだ、いつも通りの笑って危険を吹き飛ばす表情はどこにもなかった。

「これ以上ヒーロー活動を続けるなら私はサポートできない……！ したくない……！」

ナイトアイの言葉はそんな雰囲気を感じ取ったから——だけではない。長年の付き合いだ、辛い表情を浮かべているオールマイトでもすぐに分かった。

「見た」のか。私の事は見なくていいって、言ったハズだろナイトアイ」

ナイトアイの予知。後継がどうなるのか、オールマイトの未来はどうなるのか予測すべきだからと個性を使った結果、ナイトアイはオールマイトを止めていたのだった。

そして予知は余りにも不確定だった。見えた未来は……一つではなかった。本来なら誰しもの意志と力が大きく変わらなければ変わらないはずの予知が、容易に変わっていたのだ。

「あなたが引退すれば次のNo. 1は現れる！少しの間荒れるが——間違いなく避けられるんだ！」

「その少しの間にどれだけの人々が脅えなければならぬ？」

「オールマイト！」

少しの間が一日や二日といってもオールマイトは動く。ヒーローだから、市民から求められているから。

例えオールマイトを超えるヒーローが一年後にでも現れると言っても聞かない。間違はなく現れると言われても、オールマイトには許せないことだった。

「それに……君の『予知』が外れたことは無いだろう」

オールマイトからすれば一番大きいのはこれだ。予知で荒れることが分かっている、ならばオールマイトは許せなかった。

だが、ナイトアイにとっても一番大きいのもこれだった。これまで起きなかった予知、それが明確に現れたのだ。前例のないことに動揺を隠せておらず……ましてオールマイトも関わることもなれば声を荒げるのも仕方のないことだった。

「違うんだオールマイト！」

「今回の予知は変わる！大きく変わるんだ！」

このままじゃ変わった後に近づいてしまう！それは駄目なんだ！」

ナイトアイからすれば前例のない予知だと言っているのだが、オールマイトからすればナイトアイが止めようとする言い訳にしか聞こえない。

予知が変わったことを真実だと分かるのも数年後のことであり、当時では知る由も無かった。

「私はあなたの為になりたくて、ここにいるんだオールマイト！」

「私は世の中の為に……ここに在るべきじゃないんだナイトアイ」

オールマイトを心配するナイトアイと、振り切ろうとするオールマイト。話は平行線であり、オールマイトが折れない限り結論はつかない。

そしてオールマイトが折れることはあり得ない以上、未来は決まっていたようなもの



だった。

「このままいけば……あなたは敵と対峙し、言い表せようもないほど……凄惨な死が、悲劇が起きる！」

□□□

「私の未来を巡り対立……そのまま喧嘩別れした。根津校長は通形少年を私に薦めた  
が、彼と出会う前に私は君と出会ってしまった」

ジヨギングを止めないオールマイトは、今でも歩み続けていることを教えているよう  
だった。ナイトアイの人柄を知っているからこそその予測が今だった。

予知を知り足を止めた緑谷とは、まるで違っていた。

「言いたくなかったんだ、ごめんな。君は私のファンだから」

「オールマイトが……死んじやう……？」

「きつとな」

そこでようやく足を止めたオールマイト。死を見据えてようやく止まりかける姿は、  
現実のオールマイトに相応しいとも言えた。

「オールマイトが……死」

予知された事実を受け入れられないのか、緑谷は何度も口ごちる。

「死ぬ……」

「M.S. ダークライのことは……いや、先にこつちが話し終わってからだな」

M.S. ダークライが予知にも関わっていること。ナイトアイの態度から緑谷にも分かってはいたが、オールマイトは後回しにしていた。

というのも予知以外にも現実を知ったことで繋がる面が見えてきたからだ。脅威の力だけでなく性格も見えてきたからこそ、予測できるものがあった。

「君と出会い力の譲渡を決めたこと、ナイトアイにも報告したんだ。けれどそこでも対立し、彼との溝は益々深まる結果になった。

馬鹿げていると一蹴し彼は……真にふさわしいと思う後継候補を……通形少年を育成し始めたんだ」

何を考えている、他に相応しい人間ならいくらでもいる、志だけでは務まらない。ナイトアイはそう言つてオールマイトを批判した。

相応しい人間に無個性の少年だっているはずだと返し、オールマイトは同じ志をもつ少年を擁護する。そして今に繋がるのだった。

オールマイトの話は聞いていた、が、緑谷にはそれ以上にその前の話が頭から離れてなかった。

「待つてください！それより……待つてオールマイト！ナイトアイの予知はいつの話なんですか!? 予知はもう変えられないんですか!？」

少しずつ足を止めたオールマイトは予知が6〜7年後であること、遠い未来程誤差が大きくなること、そして……予知を変えられたことは無いことを告げる。

6年前から6〜7年後ということは既にいつ予知のタイミングが訪れてもおかしくない。緑谷も言っていることは理解できるからこそ受け入れられなかった。

「6〜7年って……じゃあ今年か来年じゃないか。？でしょ……？そんな……何で、嫌だよオールマイト。生きててよ。」

体育祭で……覚えてますか約束……！僕は果たせなかったんだ、果たせるまで生きてよ……」

君が来た！ってことを世の中に知らしめてほしい。体育祭の時オールマイトはそう言い……そして果たせなかった約束。オールマイトも当然ながら覚えている。

『僕が来た』って言うところ、生きて見ててよオールマイト！」

その言葉にオールマイトは足を止める。いくら平和の象徴といえど、次と指差した者にそこまで言われては止まらない訳は無かった。

「緑谷少年、私ね。予知を聞いて割とすんなりと受け入れたんだ。終わりが見えたのならばそこまでひた走ろうって」

「そんな……」

「神野でオールフォーワンと戦った時、ここがゴールだと思った。M.S. ダークライと

いう悲劇を起こした者が現れたんだ、予知はここだと思つてた。

それでもオールフォーワンを倒せたのだから十分だ、そう思つた」

そこまでは、ワンフォーオールを継いだ者の使命だ。前を向いて走らなければならなかった。

そこから先は違うと言うように、オールマイトは振り返る。既に渡した自分には、もう何も無いと思つていたが……違つたのだと。

「でも君がいた」

たかだが数か月しか過ごしていないが、時間などで絆の大きさは変化しない。変化は互いの想いで変わるのだ。

一般的なら互いの想いが時間を経て大切にするから断ち切れない絆と変わるが、二人の絆は同じ志とその大きさだけでも十分だった。

「君が……小心者で無個性だった君が私に……応えてくれる日々が！その日々が私に生きると囁いてくれた！」

それを前提にし、成長を求め合い応える日々。オールマイトには振り向けばいくらでも断ち切れない絆はあつたのだ。

ただ、視野がワンフォーオールという使命と自らの原点によって視野狭窄に陥つていただけだった。それらから解き放たれた今、身近に見える大切は自らだと気づけてい

た。

「そして君のお母さんに生きて守り育てると仰つて頂いた！今更足掻くよ！君が変えてくれた！私は生きる！」

「運命などこの腕で好きな形に捻じ曲げてやるさ！」

「――！」

マツスルフォームに一瞬だけ変化し想いの大きさをオールマイトは後継へと魅せる。オールフオーワンへ告げたケジメはこういうことだった。

緑谷も決意に涙ぐむ。身体は萎みトウルフフォームに戻るオールマイト、声色はどこか罪悪感があるものだった。

「しかし巡り巡つて辿り着けた結論、結局ナイトアイの言つた通りになっている。今更合わせる顔が無い……というわけさ……。」

おそらく彼の言つていたことは間違ひでも何でもなく、あの時引退していれば私が Ms. ダークライへ与える影響が少なかった未来へ変わつていたというものだろう……聞き入れなかつた未来が今さ」

ナイトアイへとは喧嘩別れし、どんな顔をして会えばいいのかも分からない。ナイトアイからすればオールマイトがもう一度求めてくれば喧嘩したことは呑み込み喜んで応えるだろうが、オールマイトからすれば立つ瀬がない。喧嘩を起こしたのはオールマ

イトの方なのだから。

「そして話さなかったのは強くなるうとひた走る君の枷になりたくなかった。まあひよっとしたらもうねじ曲がった後なのかもしれないけどな」

市民の死も、悲劇を避けられてはいない。が、オールマイトは死んでいない。ならばナイトアイが言っていた予知が終わった後か、それとも誰かの手で曲げられて消え去った後なのかもしれない。

だがどれなのかわからない以上、緑谷が……いや、デクが言える言葉はこれだけだった。

「……まだ予知が変わったかなんてわからない。やだよ、オールマイト、絶対に。」

僕……っ！あなたに何があっても、僕も一緒に捻じ曲げます！」

「手を煩わせないように頑張るよ」

デクの決意にニコリとオールマイトは笑う。そしてデクから向けられた拳にゴチンと拳をぶつけ、約束だと言わずに伝える。

そこまではオールマイトとナイトアイの確執であり、原因についてだ。が、ナイトアイやオールマイトが言い含んでいたことはまだ話していなかった。

「あとM.S.、ダークライのことか……ナイトアイが何か言ってたのかい？」

オールマイトはデクに向き合い話す。ナイトアイと確執があるとはいえ、情報を集め

るスペシャリストという意味では変わりはないのだ。まして予知にいた可能性があるともなれば知りたくなるのも当然だった。

「……本人と会いました。オールフォーワンから何か教えてもらったんじゃないか？つて。あとナイトアイは予知通りで嫌になるって」

「本人と!?!」

まさかの事実に関No. 1ヒーローといえど驚く。神出鬼没なのは知っていたが、デクはインターン先で出会ったのだ。そこら中で現れていることもありマークしているとも思い難いタイミングだ。

完全な偶然だったのだが、オールマイトも偶然だと予想した。偶然の思考の一致だった。

「勘が鋭いね……オールフォーワンの行ってた通りに。それにナイトアイは……そうか、そういうことか」

そこでオールマイトは気づく。あの時言っていた変わっていた予知、あれは正しく彼女のことだったのだと。

「きつと私が引退していたら成生少女が次のNo. 1になっていたんだらうね。あの時の予知は次のNo. 1は確実に現れると言っていた」

「Ms. ダークライがヒーロー側に!?!」

オールマイトがああの時引退すれば現れるとはそういうことだ。ヒーローはオールマイトが引退し戦力がガタ落ちするのにヴィランはオールフォーワンは生きている。ヴィランが優勢な時代になるのだ。

そうなれば成生はヒーローになる。社会が求める彼女はその姿なのだから。

「オールフォーワンが言っていたのも裏付けるものだった。成生少女を言うなれば、天秤のような少女だと。ヒーロー側が社会に強くなればヴィラン側に、ヴィラン側が強くなればヒーロー側に行く少女なのだと」

「つてことはN.O. 1がいなくなればヴィラン側が強くなるから……」

コクリとオールマイトは頷く。デクは単純に気さくな性格をしているヴィランだとしか思っていないが、オールマイトの言葉で考え方が変わる。

何せ別の世界ではヒーローのN.O. 1になっていたと予想される人物だ。難儀な特性を持っており、その揺れ方はヒーローにもヴィランにも傾き得るのだ。

N.O. 1から力を継いだデクだからこそ、ライバル視しなければならぬ。ヴィラン 敵とし

ても、だ。

「嫌になるというのもきつと相応の性格だったからじゃないか？爆豪少年から彼女は救けることを考えていたと聞いてるよ……自分以上かもってさ」

「かつちゃんか!？」



爆豪が人質になっていた時の状況は警察を経由してオールマイトにも知らされていない。どんな会話をしていたのかも知らわれていた。

爆豪がヒーローに向いてないと言ったこと、敵を倒すことより市民を救けることを優先しろと言われたこと。どちらもヒーロー側の視点が無ければできない見方だ。

そしてオールマイトとは違うと言い切り、その後には自ら力を示した。ヒーローの視点を持つているならもつと市民に被害を及ぼすこともできたはずなのに、しなかったこと。

それらが示すことは一つ、被害は出したいが目的以上の被害を齎すことは望んでいない……むしろ忌避するということだ。被害をおおよそ分かる程のヴィランなら、ヒーロー側が助けられるかも分かるはずなのだ。

しかも警察が示した資料はそれを裏付けるもの。被害は出たがM.S.、ダークライの近くには被害は出ておらず、オールフオーワンレベルのヴィランが暴れたにはかなりマシという結論だった。

「違う未来におけるナイトアイが見た納得するNo.1ヒーロー。成生少女がそうだとすれば……今なら理解できるものがある。

何せあれだけの力を持つ少女だ、しかもヒーローに理解があるのであればヒーローになった未来の笑顔や行動も素晴らしいものだろう」

何の憂いもなく行動し人を助け魅了する笑顔を見せるヒーロー。どこにでも現れ、光を示し、力でねじ伏せる姿。No. 1ヒーローと呼ぶに相応しいものというイメージは簡単だった。

「でも！あいつは皆を傷つけて！」

「分かってる、今はヴィランだ。……成生少女と話したんだろう？」

今はヒーローの未来は捨てられ、ヴィランとなった。故に消えた未来を考える必要はない。

しかし、消えた未来でもM s. ダークライというヴィランを知るには有用なのだ。例えば……そう、性根はヴィランではないという事実を知れたことだ。

「エリって呼ばれた子を連れてました。触れれば殺されるって」

「やはり本質は優しい側か。警告してくれたんだね？」

「え？あれはたしか忠告って……いや、まさか……」

雰囲気<sup>ヴィラン</sup>が完全に敵だったためデクは気づけていなかったが、あれは純粋な警告だった。触れたら死ぬから触れるな、たったそれだけの意味でありそれ以上ではない。

深読みするならばそれほど大事な存在だから近づくなよ？という意味にもとれるが、M s. ダークライが言った意味には含まれていなかった。依光成生には壊理は大事な存在になっているのだが、M s. ダークライにはそうではないのだ。

「私から成生少女に言えることはそう多くない。だが、戦わなくていいなら避けなさい。話が好きだとも聞いているから……説得が通じる相手のはずだ」

オールマイトもまた戦いは避けるように声に出す。説得が通じるはずだ、それもまたデクがインターン先で聞いた言葉だった。

「ナイトアイじゃないが、彼女についてはまず情報を集め分析するんだ。闇雲に戦ったところで神野の二の舞になるだけ、勝ち目が無い戦いは無謀としか言えない」

皮肉だが、M.S. ダークライにはオールマイトもナイトアイと同じ行動をしていた。力押しが通用せず、話が通じる相手なのだから交渉するという形も同じだった。

## 烈怒頼雄斗デビュー戦

デクがオールマイトからナイトアイや予知についての情報を聞くほんの数時間前、成生はドクターの研究所にいた。奪姫に会い、連れ出して社会見学させたかったからだ。

「むう……しかし」

「既に調査は終わっているでしょう？あなたからしたら大切な宝かもしれませんが私の子です。問題など無いでしょう？」

だがドクターが渋っていた。既に数日経過しており調査は完了している、しかしドクターは奪姫という至高の存在を世に放つならもつとタイミングを図って出したかった。

もちろん成生も分かっている。だが未知を恐怖に変えるには相応の結果を示さなければならぬ。オールフォーワンの娘がいると言われても無個性であり力も無いなら脅威にならないのだ。

ゆえに表に早く出し、どんな世界に出るのかを示したいのだ。自分の瞳で見たものではないと何なのか分からないモノなど、数多く存在するのだから。

「M.S. ダークライよ、奪姫は知性が予想外にまで発達しておる。計画とズレておる」

「それは嬉しい限り。知性が十分にあればできる戦術とかあるんですよ」

奪姫を渡したくないドクターの言い訳と、成生の指摘が続く。成生は電花から情報を受信する形で遠くにいなながらも奪姫のことを知っていた。

電花はドクターに聞かれた事しか返さないため、成生の方が奪姫に詳しいのだった。

「個性が暴走する」

「活力譲渡・吸収と聞いてます。使わなければいい、知性があるのでしょ？」

十分過ぎる知能・知性を持ち、個性も慣れてきている。自らの身体能力も動かし方を電花から聞いて動かし学習も進んでいる。連れ出さない理由はどこにもなかった。

「身体能力の操作が覚束ない」

それでもドクターは足掻く。崇拜する神の子なのだ、宝石よりも貴重に扱うのは当然だ。

「電花と遊んでいたなら大丈夫でしょう。あの子は力加減を知っています、ねえ電花？」  
「うん！難しいって言ってたけど一時間くらいでやってくれたよー！」

その言葉で成生は電花から情報を受け取っていたとドクターは察する。同時に情報は筒抜けになっており、食い下がるのもほぼ不可能であることにも気づいた。

だが、まだ最後の札はあつた。

「……さて、連れ出してはいけない理由とは？」

「安定してないと言ったなら？」

身体の安定具合。ドクターにしか分からないはずのそれだが、M s. ダークライは様子を見ただけで見抜く。おおよそどれくらいまで到達しているのか、何をすれば解決できるのかを直感していた。

もはや『第六感』という個性と呼んでもおかしくないほどの勘。天然のマスターピースであり社会の天秤である彼女だからこそその天性。血という意味で関わりがあるものにしかな繋がらない感性であり、ドクターやオールフォーワンには決して手に入らないものだ。

「ふむ……まあ大丈夫でしょう、こちらに渡してくれば解決できると思います」

「理由は？」

「勘です」

勘、だが根拠はそれだけで十分。何せ相対しているのはあのM s. ダークライなのだから。

観念したドクターはベッドに眠っていた奪姫から機材を外していく。カプセルは最早いらず投棄だけでいい状態になっており、すうすうと眠っている奪姫がそこにいた。

「仕方なし、か」

「ではまずはつと。……つと！」

「おカーさん!?!」

電花が驚くのも無理はない、成生は手首を切り、動脈まで届かせたのだ。ブシャという音と共に血が流れ、準備して置いていたビーカーに流れていく。パツシブ発動するはずの超再生は成生自らの意志で操作し、抑えていた。

50mの目盛りが見えてきたところで個性を発動させ、パツシブ発動するはずの超再生を元の状態に戻す。すると一瞬で元の手首に戻っていた。

「これくらいでしょう。奪姫を起こしてください」

「うむ。……そういうことか、飲ませて安定させるのじゃな?」

「流石にバレますか。どうやら私の身体は随分と個性に影響を与えやすいようで……私の子なら、身体的・精神的な安定剤となるでしょう」

奪姫の眠るベッドの横まで移動し、成生は奪姫の耳元で囁く。子をゆつくりと起こす優しい母の声、子からすれば頭が蕩けるような劇物だ。

「起きて、私の奪姫」

優しいな表情で眠る子を起こす母親。ドクターは見えていなかったが、見ていた電花には思わず足に抱きつくくらいには揺さぶられるものがあった。

奪姫は薬物投与等で起きるにしても数時間はかかるはず、ドクターの願望も混じってこそいるが正しい予想は簡単に裏切られた。奪姫の目はすつと開き、少しずつ焦点が

合っっていく。

「おはよう奪姫。私に分かる？」

ニコリと笑う成生に奪姫はボーっとし……思いつきり抱きついた。

「おかしさんだ……おかしさんがいる！」

「わっ!？」

スペックで言えば臂力も電花並みか、体格の都合でそれ以上に高い奪姫だ。ただのハグでさえ相応の身体能力が無ければ死んでいた可能性すらある。

今の成生は身体能力が発揮できてない奪姫と同等程度のスペックだ。ワンフォーオールで言えば50〜60%であり、今や空気地面化が無くても歩くことができる。だがそんな成生と奪姫は身体能力が互角だった。

既に予想以上にM.S. ダーククライの脅威が世間に晒されたことで胎児脳無計画の目的は少しずつ変わっていながらも、生み出される子のスペックだけは変わっていない証左だ。

「会いたかった!ずっと会いたかった!夢にずーっと見てた！」

「奪姫は甘えん坊ね。どっちにも似てない……起きてすぐで悪いのだけれど、これを飲んでくれないかしら？」

起き上がった奪姫にさつき血を入れたビーカーを渡す。受け取った奪姫の顔は困惑



に満ちていた。

「え……何これ……血？」

「大丈夫、鼻つまんで飲んでみて」

何の疑いも持たず勧められるがままにえいとと奪姫は血を口にする。一口つけただけでその味に目を見開き、一気にゴクゴクと飲み干していく。

「美味しー！」

一気に全部飲みきった奪姫は頬を綻ばせへたりと喜んだ表情を隠さない。そしてドクンと身体の調子が一気に上がってきたのを感じていた。

「あれ、何かすっごく……調子が良くなってきた！おカーさん何したの!？」

「さっきのは私の血。私の子なら飲ませれば安定剤にはなるかと直感したの」

直感どころではない勘に奪姫はキラキラと目を輝かせる。姉が言っていた、勘が根拠になるという行動も母のようだというのも事実だったこともあり、目の前の存在が母なのだと思わせるのも十分だった。

「すーいー！」

女三人寄れば姦しい、今から更にうるさくなっていくのが目に見えたドクターは溜息を一つ吐いて三人に声をかけた。

「会えたところ悪いんじゃないか……他所でやってくれんか？」

「大阪まで来れば怒りもしないでしょう」

ドクターから追い出され京都から大阪まで転送してきた。ここまで来れば足もつかないし、何より奪姫たちに世間を見せるのに丁度いい場所だ。

ただその肝心の奪姫はと言うと……

「……で、奪姫。ずっとくっついてると困るのだけれど」

「やだ、離さない」

左腕をずっと掴んで離してくれなかった。嫌という訳ではないし、戦闘の予定も無いから困りはしないのだが……違う側面では問題がある。

「困ったわねえ」

奪姫は電花と行動させようと思っていたのだ。自分が横にいると甘えん坊が過ぎて困るような性格になるかもしれないという危惧からだ。

こんなに離れようとしないとすると危惧は正解だったらしい。甘えてもいいが、時と場合に依るということを教えなければならぬ。

「電花、受信したら教えてね」

「分かったー!」

M.S. ダークライとして行動するためにもいつも通り広範囲受信を電花に頼み、奪姫か

らの相対位置へ転送して無理やり離れる。とはいえ転送位置は目の前、単純に拘束を外すためだけの転送だ。

再び抱きつこうとした奪姫の目の前に指先を向け、催眠光を発生させる。動きを少しだけ止めるといふ催眠だ。

「奪姫、いい？お母さんはやることがあるの、付いてきてもいいけど邪魔したらダメよ？」

「付いていくだけならいいの？」

「もちろん」

納得した奪姫は身体を動かせるようになる。抱きつくことは止め、代わりに肌が当たるくらい近くまで近寄る。

けれど甘えん坊なのは変わっておらず、個性を発動していた。

「ん？これは……私に活力吸収使った？」

「だって見ながら追いつくの難しいもん。……うえ、すっごい量と質」

離れたくないのは変わっておらず、成生を無理やりにも動かせなくさせようとしていた。

が、そこはM.S. ダークライと呼ばれるヴィランだ。効いてはいるものの致命的でも何でもないものだった。むしろ吸収した奪姫が気持ち悪くなるくらいだ。

活力吸収は奪姫のキャパシティという限界がある。プロヒーロー10人くらいを殺し切つてもなお余裕があり余る程だが、プロヒーロー10人程度一瞬で消すMs. ダークライが相手ではどうしようもなかった。

「そこらのヒーローなら即死……私なら1く2割やる気減つてところかしらね、困りはしないか」

その言葉に奪姫は肩を震わせる。自らを軽く超える母の姿に、感激に震えて言葉も出なかった。

「おかーさん！前に話してた切島つて人がいる！」

「うん？……緑谷がインターン行つてたことから予想するに……まさかデビュー戦!?見に行かないと！」

が、そんな母は電花の言葉に一人の女の表情になって目を輝かせる。そして転送を即座にパチンと指を鳴らして発動させた。

一気にテンションが上がリ思わずそんなアクションをとっていたのだ。成生は一言だけ二人に告げ姿を消す。

「探しておいで〜かくれんぼしましょう、たまにはこういうのもいいでしょ?」

「おかーさん!?!」

余りにも唐突に始まった母親とのかくれんぼ。電花と奪姫は困惑と動揺が表情に出

ていた。

「一瞬で消えた!？」

「転送だよ! おかーさんは一人だと一瞬で移動できるんだ!」

ただ電花は冷静だった……というのも、こういった唐突な行動は割とよくあるからだ。直感が鋭すぎるといふ特性が共通しているため理解できる感性であり、電花も好き勝手行動しようとして止められることも起きていた。

もちろん奪姫には初めての経験だ。まして、外に出るのも初めてであり涙目になっていた。

「でもどこに……こんなところ初めてだし、分かんないよお」

「大丈夫! こんな時の為の個性だよ! だっきも使ってみて! 吸収した活力はどこから来てるっ!」

奪姫の個性は吸収した後も返せるように、奪姫にしか見えない糸のようなものが繋がっている。死ねば消えるが、吸収すればどっちの方向に活力を吸収した人物がいるの分かるのだ。

電花も個性を発動し母の電波を確認する。が、成生は既に透明化を発動していた。成生の指先の光で覆う透明化は、自らから発生する電波すらシャットアウトしていた。

「ん……えっと、あっちの方?」

「あ、あれ？何でおかーさんが受信できないんだろ……だつき、そっちに行こうー！」

しょうがないと電花は奪姫に道案内を促し、二人はビルの屋上を跳び空を駆ける。滞空している中下を見下ろす奪姫は、見たことのない光景ばかりで目をキラキラさせていた。

「わあっ……！人がいっぱい……！」

「私も最初はビックリした！私とおかーさんとドクターとマキアしかいなかったから！こんなにいっぱいいいるなんて！」

電花が初めて世間を見せられた時と同じように目を輝かせる奪姫に姉も同じ思いだったと告げる。そして電花も思った質問が飛んできた。

電花の時は母が答えを返した質問に、代わりに姉が返すのだった。

「何でこんな跳んでいくの？壊していった方が速いのに！」

「壊すとおかーさんが怒るから！」

「分かった！」

数分飛び回りながら移動する二人。奪姫も電花から何故最短距離を移動しないのか聞き、母に嫌われないための行動だと教えられていた。

他にもいろんな疑問を電花にぶつける奪姫と応える電花だったが、先行して跳んでいた奪姫が一度足を止めた。母との距離が近くなってきたからだ。

「ちよつと大きなところに登りたいけどダメ？」

「だつきが言うならいいよ」

まるで導線のように吸収した活力の糸は繋がっている。しかし大きく距離が離れているならともかく、近ければ少し移動しただけで移動する方向が変わる。

だから一度Z方向……すなわち見える高さまで上がり、導線を直線にして移動すれば一気に近付ける。奪姫はその程度を瞬時に考えられるくらいには知能は育っていた。

ただ感性は別の話だ。100mを超えた高さから見下ろす都市の姿は、見たことのない世界にいるのだと錯覚させるほどに美しい光景だった。

「わああ………」

「広ーいー」

電花も似たように驚く。高い場所には成生が寄り添いいくらでも見た事はあるのだが、場所によって光景は違うのだ。目の前の光景は似たものをみたことはあるが、同じものではない。

電花はそれが分かるから驚くのだった。

「おかーさんは見えた？」

「うん！あそこー」

高さのお陰でようやく詳細な位置が分かった二人。が、そこからの考え方は分かれて

いた。

「じゃあ一回降りて」

「それじゃ一気に飛ぶよ捕まって！」

「え？おねーちゃん!？」

電花はガシツと奪姫の手を握って引つ張り空を跳ぶ。さらにそこからオールマイトのように素早く空を蹴り、何もないとこで空をピョンピョンと跳ねて行った。

奪姫はまだできない身体の使い方だが——電花も慣れていないという意味では同義だった。

「わっ!?!着地地点につ!？」

着地地点に誰も飛び込んでこないから大丈夫、そう判断して下りたのだが……飛び込んできた人がいたのだった。

「逃げる逃げたる!捕まってたまるかアツ!あつ!？」

着地の衝撃を抑えるつもりが失敗し、ドオン!という音と二人は降り立つ。足元にヒーローと戦っていたヤクザを置いて。

周囲はしん……と静まっていた。熱い攻防が起きていた中、どこからか飛んできた子供二人が決着をつけたのだ。何が起きたのか理解が追いついてなかった。

「えっと、その……ごめんなさい?」



電花も奪姫も拙いが、空気を読むスキルは持っていたのだった。



「探しておいで〜かくれんぼしましょう、たまにはこういうのもいいでしょ?」

「おかしさん!」

二人から転送し、透明化して転送する。位置は切島くんの近くの3mくらい上。相対位置に移動するのはいいのだが、気づかれないような場所となれば中々難しいものがあるのだ。

「さーて、切島くんどこかな?」

下にいるはずだが服装を知らない。ジツと人混みを見て、思考加速して一人一人の顔を見ながら判断する。今や増強系の個性すら打ち破る程の強化が出来ているのだ、視覚も強化されている。

そしてすぐに見つかった。ヒーローのコスチュームをした切島くと、二人のヒーローが話していた。

「いた!あのヒーローは確か……ファットガムだっけ?」

プロヒーローファットガム、身長2mはある大男……のように見えるが実際は個性で大きくなっているだけだ。脂肪に触れたモノを吸着させる『脂肪吸着』だが、脂肪を溜め込む特性もある。

武闘派のプロヒーローであり、マトモに殴り合うのは私でも面倒とは思うくらいだ。私との殴り合いで時間稼ぎが出来てしまう程度にはファットガムは強いのだ。

……まあ私が得意とするのは近距離物理戦ではなく中遠距離殲滅戦闘だけだ。

「ケンカだあ！誰か！」

など成生が状況を認識していると5人のヤクザが暴れ、逃げ出していた。

切島、ヒーロー名烈怒頼雄斗レッドファイオットとファットガム、そしてファットガムの下にインターンでやってきている雄英生徒三年生、サンイーターも悲鳴に気づき即座に行動を起こす。

「バカがウチのシマで勝手に商売始めやがって！」

「ちくしょうついてねえ！せつかくこれから一旗揚げようって時に！」

「一旦バラけるぞ！」「おう！」

通りから散らばって逃げようとするヤクザ達だったが、目の前に壁が立ちふさがった。ファットガムの脂肪という名の壁が。

「させへん！」

壁にのめり込む4人。吸着されれば力だけでは簡単には抜け出せない。M.S. ダークライのように増強系でも容易く屠れる程度まで強化されてでもなければ抜けられないのだ。

そこらのヤクザ程度にそんな力はなく、4人は脂肪の中に沈んでいった。

「つて何やエッジと個性被ってるでおまえ！」

ただ一人だけはファットの股下から抜けていた。身体を紙のように扱える個性だろう、ファットの言う通りエッジシヨットと同じ個性だ。隙間さえあれば移動ができる個性であり、一人だけ逃げればいい状況なら面倒な個性にもなる。

「ファットに……えつと誰だっけ？ サイドキックじゃないし、切島くんの先輩？」

様子を見ながら随伴しているヒーローに頭をひねる。数瞬ほどかかっていたが成生も彼の正体をようやく思い出した。

「雄英の三年生だ、サンイーターだった」

サンイーターの手がアサリに変わり、逃げ出した一人は思い切りビンタされ一撃で沈む。ビンタ一つだけでもプロヒーローと一般人では身体能力に差があり十分に鎮圧できる。まして紙の個性は防御が弱くなりやすいのだ、倒れるのも止む無しだった。

「おー……やるねえ、でもあれ私素でできそうな気がする」

身体の変化はM.S. ダークライもできる、別の生物になるというのも一応出来なくはない。

ただ今の言葉は成生も何も考えず口にしただけだった。頭ですら考えず脊髓反射で声に出しただけであり、自分でも首を傾げる結果になっていた。

最近おかしくなることが稀にある。たまに何も考えず口に出すこともあるし、思考が

黒く染まることもある。弔とオーバーホールが話してた時が最初だった記憶であり……極々稀にしか起きてないけど、何かが自分に起きることくらいは分かる。

私自身に異常が起きてるかもしれない……けど今はただ目の前のことを見ていたい。自分が……ヒーローとして好きだとと言える人を見ていたい。

だから、誰よりも早く気づけた。

「切島くん！」

烈怒頼雄斗とサンイーターに向けられた銃口。成生は弾丸が放たれる前に気づき、思考を光速に遷移させていた。

このまま撃たれば致命になる可能性がある。けれど止める訳にはいかない、銃弾程度弾けない硬化の個性なんてヒーローとして表に出るべきでないからだ。

問題は弾丸が何かだ。もし貫通系に特化したモノならマズい……文字通り頭を打ち抜かれて死ぬ可能性が高い。

「あかん伏せ」

ファットガムも気づき、二人に声をかけるも遅い。既に銃弾は放たれていた。と、同時に成生は判断した。

問題ない、このまま切島くんを受けてもらおうと。あの弾丸が何か、成生には見当がついていたからこそその判断だった。

「サンイーター！レッドライオット！」

ファットガムが撃たれた二人に大丈夫なのか声をかけ、元気のいい返事が返ってきた。

「捕らえます！」

硬化で完全に銃弾を防ぎ切り、傷の一つも負っていない烈怒頼雄斗の姿がそこにあった。

「思ったより痛くない」

「先輩！大丈夫なんすか!?! かつけえ！」

サンイーターも無事であり、致命傷なんてものは誰にも無い。無駄なことをした、撃った本人もそう思っていた。

「なんやこのポンコツはあー！」

致命傷ではない、だが無駄どころか捕まったヤクザ達を助けようとするという意味なら最善手ではあった。もつとも、それが分かるのは成生だけだったが。

「来んなボケエー！」

撃ったヤクザが逃げ出す。銃も放り捨てて自らの保身のためだけに走り出していた。

同時に烈怒頼雄斗も追いかけていた。二人の静止が聞こえない程に彼の熱は高まつており、何より先輩が撃たれた事実が足を動かしていた。

「待て早まんな！下手に追うと噛まれるぞ！サンイーター無事ならここ任すぞ！すぐ他のヒーローが来る、協力しろ！」

「無事だけど、発動しない！」

ヒーロー二人の様子を確認した成生……否、M s. ダークライは透明なまま空を歩き、烈怒頼雄斗のすぐ上を移動する。あの弾丸が何かを理解した時、成生の瞳は<sup>M s. ダークライ</sup>ヴィランへと変わっていた。

「あれがオーバーホールの弾……の劣化品ですか」

周りの喧騒にかき消される程度の声でボソリと呟く。オーバーホールが何をしているかは知らないが、壊理のことと何を作っているかは知っている。そこから計画を予想することなどM s. ダークライには容易い。

オールフオーワンの計画すら看破したM s. ダークライなのだ。オーバーホール、壊理、個性破壊弾、そして劣化品をヤクザが持っていること……情報は十分だった。

「……!? イレイザーでもおんのか!？」

答えを知っているのはM s. ダークライだけ。だがこの場にいる誰もヒントすら無いのだ、ファットガムのような反応をするのがせいぜいだった。

驚いているファットガム達を他所に烈怒頼雄斗とヤクザの追いかけては続く。透明になり気配を消しているM s. ダークライには気づかずに。

「来んなあ！追わんといてや！」

「そつちが逃げんな！せめてなあ！仲間助ける姿勢貫けよ！」

「どこにキレとんねん!？」

関西人だからか、それとも予想しない答えが返ってきたからかツツコミを入れるヤクザに、烈怒頼雄斗は声を上げる。

「人撃つて自分だけビビツて逃げるなんて——漢らしくねえよ！」

それが、ヒーローでもない弱いヴィランには突き刺さるとは知らずに。

「行き止まりだ観念しろお！」

「やかっ！ましいわ！」

行き止まりで逃げ場はないこと、そして烈怒頼雄斗に挑発されたことを引き金にヤクザは右腕から刃を生やし振るう。

しかし刃は烈怒頼雄斗の硬化した肌に通らず、逆にカウンターの拳をもらい一撃で倒れ込んだ。

「加減はした、大人しく捕まろうぜ、テツポー野郎！」

少し離れた観客の上で見えていたM.S. ダークライだが、瞳が少しずつ通常へと戻っていつていた。烈怒頼雄斗というヒーローの姿に、成生という少女が目をキラキラと輝かせていたのだった。

「う……………うう……」

「泣いてる?」

ヴィランと言ってもピンキリがある。一般人程度から極悪人まで。個性を鍛えてもいないヤクザなら暴力を振るわれるだけで動揺もするのだった。

「ズルやで……………こちら『刃渡り10cm以下の刃が飛び出る』やぞ、カッターナイフと同じくらいやぞ……………ズルやん……………そらアニキら助けたいわアホンダラ!でも怖いやん……………むしろ撃つた勇氣褒めてや……………!」

「やだよ!っーかそんなベソかいて怖いとか言うなら、悪い事に加担すんなよ!」  
「うぐう」

流れ弾が成生にも突き刺さる。怖い怖いと言いながら悪いことをするくらいならするなと言われると、心当たりが山ほどあった。

別に成生は怖がつていない訳ではない。オールフオーワンと会った時、弔との特訓、マキアとの激闘、デビュータント、どれも恐怖だった。ただそれ以上の決意か力があつたからねじ伏せることが出来ただけだ。

それを相対してはいないが好きな人に言葉に出されるのは辛いものがあつた。

「強い男に……………なりたかつたんや……………強い人らとおれば、強くなれるから」

「その気持ちは分かるけどよ……………」



同情する烈怒頼雄斗に聞いちやダメだと口が出そうになるも、成生は両手で自分自身の口を塞ぐ。

素直過ぎる。ヴィランは真実と嘘を混ぜて話すか、真実を散りばめて話す者が多い。例外はオールフオーワンや私のように強大な力を持つ者ではあるが、私でも誤魔化すことはある。要するに言葉をそのまま受け取るのは間違いなのだ。

「アニキらについていけば……力を貰えるんや。」

ヒーローになれる奴が軽率にわかるとか言わんといてや……」

こういった、自らの強化のための時間稼ぎに使われることだつてあるのだから。

ヤクザが自らの首筋に打った薬は個性を強化する薬だろう。オーバーホールからヤクザにはどんな薬があつたのか雑談的に聞いたことがあつた。

「何してんだ!? 何打つた!? オイ! 大丈夫か!」

心配して近寄つた烈怒頼雄斗に、ヤクザの全身から刃が生え襲い掛かる。さつきまでとは比べ物にならない威力、そして長さだ。

10cmしかなかった刃は5mはあろう長さまで伸び、さらには伸縮速度は遙かに上昇していた。そして速度が上昇したことで威力も上がり、素早く切れることで切れ味も鋭くなっていた。

それでも烈怒頼雄斗の硬化を破ることはギリギリ出来ていなかった。全方位に伸ば

した刃だ、攻撃というより防御のために放ったため威力が低く助かっていた。

「皆さん下がって！こいつの刃が届かないところまで……っ！」

周囲に叫んだ烈怒頼雄斗へヤクザの太ももから生えた数本の刃が飛び身体を切り裂く。烈怒頼雄斗の硬化していた身体から少しだけだが血が流れ、硬化が威力に負けていた。

「慢心したなアガキイ！偉そうに正義ごっこしとるからや！アニキらが言ってたで、ヒーローの時代はもうじき崩れるってなあ！」

薬物による副作用で気分が上がるヤクザ。成生にはここまでの展開は予想できていた。いくらヤクザとはいえ個性を鍛えてない、強個性でもなければ雄英生徒の鍛えられた守りを貫けるはずが無い。

それでも戦いを挑むならドーピングでもして、明確に殺意を向ける必要がある。しかしそこまでいけば貫けるのだ。

「……お手並み拝見」

そこらの木っ端程度のヤクザだ……ヒーローが勝つことを疑っていないが、どうやって勝つのかは分からない。成生の楽しみはそこだった。

「次は俺達みたいな日陰者の時代や言うとつたわ！なんかめっちゃハイになってきた！どけガキ！今ならお前の言う通り……アニキら助けられそうや！」

さっきの牽制染みた刃ではない。ヤクザは烈怒頼雄斗を明確に殺す威力と本数の刃を放った。さっきまでの硬化であれば確実に死に至る刃だ。

思考を加速し注目して見ていた成生は、結果がどうなるかよりも先に烈怒頼雄斗が何をしたのか理解した。

「……すごいね。分かるよ、切島くんが頑張ってること」

刃が当たる前、烈怒頼雄斗は最大の硬化である現状の限界点安無嶺過武瑠アンプレイカトルを発動していた。身体も心も硬め誰にも打ち破れぬ壁と化す、烈怒頼雄斗最大の硬化だ。

成生の知覚速度は硬める過程すら見える。硬化という個性だ、個性を鍛えれば鍛えるほど硬くなる。だが瞬時に変わる硬度がどれくらいか、最大硬度はどれくらいかといったものがある。

それでは烈怒頼雄斗はまだ一瞬で最大硬度の安無嶺過武瑠に到達してなかった。だからこそ成生には分かった、限界を超え硬め、さらに限界を超えて硬めを繰り返したこと、それがどれほどなのかも。

「いでえー！」

ギシギシと軋む音が烈怒頼雄斗から鳴る。硬化によって一つの塊になっている訳ではない、関節や筋肉、肌と分けて硬化しなければならず、しかもそれら全てに最大硬度の硬化をかけているから起きる音だ。

できない仮定だが仮に姿を全く変えずに最大硬度になれば鳴らない音だが、硬化は硬くなることであり密度といった数値も変わっている。最大の硬化であるが故必ず起きる現象だった。

「なんやこの音……軋んでんのか、全身が！」

ヤクザからすれば一瞬で変わった姿だ、驚くのも当然。ましてさつきまでとは別人——人から離れた姿という意味でだ。警戒どころか容易な一手を打ってはいけなさと思わせるには十分だった。

そしてその考えや躊躇は烈怒頼雄斗からすれば救いでしかない。烈怒頼雄斗はヒーローであり、周りにいる人を助けるためにここにいるのだ。ヤクザの注意を引きつけるのが役目だった。

「俺を見ろおー！」

「見てるよー」

もつと注意を引きつけるべく声に出して鎮圧に動く烈怒頼雄斗に、目を輝かせる成生はつい声が出てしまっていた。幸い誰にも聞こえていなかったが、純粋なフアンの成生の姿がそこに現れていた。

「ううう……！押し飛ばしたるわあー！」

烈怒頼雄斗の狙い通り一点に集中させ刃を放つヤクザだが、安無嶺過武溜には当たつ

た跡が残るだけ。傷は一つも付いていなかった。

バキンツ！と刃を殴り砕き、油断したヤクザへ一足飛びで近づき腹へと一撃を喰らわせる。

「必殺！烈怒頑斗裂屠《レッドガントレット》！」

硬化された拳の一撃。鍛えられた身体から放たれたそれは増強系個性ですらないヤクザを倒すには十分だった。

「若いのに……なんちゆう怒気よ」

「すげえ」

周囲から感嘆の声が漏れる。成生はと言うとフンスと息を荒くして烈怒頼雄斗を見ている。カツコイイ、もつと応援したい、そんなファンとしての姿だ。

「げほっ！うわああああああ！来るなあ！」

薬によるおかげが一撃で失神まではいかず、ヤクザにはまだ立ち上がる余力があった。それでも戦いにすらならないのは分かり切ったこと、もはや言葉で時間稼ぎするくらいしかない。

ただ、一瞬でも油断すれば逃げ出せる力は残されていた。

成生は行き止まりの入り口側に陣取っている。もし跳んで来たらこつちくるかもとは思っていたが、手を出すつもりもない。ファットガムが近づいてきているから捕まっ

ておしまいだ。

その予想が壊されることになるのは、思いもしなかったが。

「強くなりたかったただけやねん……頼むよ、逃がしてくれ……！俺は力が欲しかっただけの哀れな人間や！」

「ダメだ先輩を撃った。気持ちは分かるぜ俺も昔は」

「てめーの話なんぞ知るかボケエ！」

臨戦態勢から解除された烈怒頼雄斗の横を自らの背中から勢いよく伸ばした刃で推進力をつけ抜け出す。まだヴィランとの戦闘になれていない烈怒頼雄斗だ、詰めが甘かった。

「バカか俺は！」

「素直！素直すぎやで助かったわ！」

烈怒頼雄斗から逃げ切り、ファットガムが近づいてきていることを知覚している。波乱はなくこれで見物はおしまい——のはずだった。

「ここまでかな……ん？」

透明な光を放ち周囲を知覚できる成生は超が付く程の速度で近づいてきている二人を認識できた。方向も、着地する場所も間違いないここだ。

そして転送できるため誰なのかも分かっていた、電花と奪姫だ。かなり離れていたの

にもう追いつけたことには驚きもあった。

「逃げる逃げたる！捕まつてたまるかアツ！あ？！」

着地の衝撃を抑えるつもりが失敗し、ドオン！という音と二人は降り立つ。足元にヒーローと戦っていたヤクザを置いて。

「えつと、その……ごめんさい？」

周囲はしん……と静まり返っていた。そして成生は、手のひらを額に当て困った顔をしていた。

■ ■ ■

「遅うなつた！つてえーと、お嬢ちゃんたちは？」

「電花だよー！」

「奪姫です」

「ええ返事や飴ちゃんあげよう……つとちよつと待つててな」

二人が着地してきた数秒後ファットガムが到着した。周囲に粉塵が少し舞っていたが、二人が粉塵の原因と思っていないファットガムはその中心に容易に近づき軽い態度で接する。

ファットガムから飴を貰った二人はきよろきよろと周りを見回す。そして電花が気づき、指を指して周囲の目をそちらに向けた。

「あ、おかーさんいたー！」

「ん?」

ファットガムの驚きを他所に、地面に降りていた成生はとどころで残っていた瞳の色や雰囲気を通常に戻し切る。バレてないなら欠片でもM.S.、ダークライの雰囲気を見せたくなかった。

「……まあいつか、見たいものは見れたし」

「誰や!」

誰もいない場所から声が聞こえたことに周囲はざわつき、ファットガムと烈怒頼雄斗は臨戦態勢に入る。

三秒ほど間を空け、市民が離れたと見た成生は透明化を解除した。そこには、まるでいつかの雰囲気と同じ姿形をした女子の姿があった。

「私だよ切島くん。覚えてるかな?」

変わっていない声。ファットガムは警戒を強めながらも烈怒頼雄斗へ視線を向け、烈怒頼雄斗——否、切島鋭児郎はその声に警戒を解いた。

むしろ嬉しそうな顔をして、友達に声をかけるように声に出していた。

「雰囲気変わったけど……依光成生だよな?」

「なっ!」



ファットガムは烈怒頼雄斗の言葉に驚く。最大最悪のヴィランと同じ名前なのだ、警戒を更に強めるも、烈怒頼雄斗が知り合いであることにも驚いていた。

しかし目の前の女子はまるでヴィランとはかけ離れた存在だった。私服で隠れているが身体は鍛えられていると見えるも、雰囲気はヴィランっぽくない。だがテレビで見たあの最強のヴィランと似ている身体のパーツはどこどころある。歴戦のプロヒーローであるファットガムでさえ判断できていなかった。

「あはは、分かってくれるんだ。ありがとう」

「そりゃヒーローとして好きだって言ってくれた女の子を忘れる訳ないだろ。それにファンレター貰ったのって、成生だろ？」

切島は仮免試験の時に手紙を貰ったことを忘れていない。内容が「応援してます、皆を守るヒーローになってください」というような内容だったことも。励まされたことで授業にも気合十分になれた。見惚れた笑顔も思い出して五割増した。

成生はふふふと微笑む。悪戯が成功したような表情だった。

「バレちゃったか……知り合いに頼んでね、お願いしたの」

「やっぱりか」

うんうんと納得する切島は……だったらこういうことなのかと、単純な感想と疑問を口にする。渡された時のことだ。

「士傑の人に渡されたからビックリした。まさか士傑に知り合いがいるとは思わなかったけど、アクティブなんだな」

「そうだよ？ 私は好きな人が居れば追いかけて捕まえるからね」

「ははは、じゃあ俺は追いかけられてるけどどうなんだ？」

うーんと口には手をあて考える成生。気分屋な成生は追いかけることは多いが、捕まえることは早々ない。理由は簡単、相手が成生のことを知らないからだ。

成生はM s. ダークライというヴィランであり、自らが行動すれば必ず欲しいものには手に入る。無理やりに、という注釈が着くが。それは全国にも知られている程だ。

しかし強大過ぎるヴィラン、M s. ダークライというフィルターを取り払った成生の人柄を知る者はほほえない。目の前の男の子と吊くらいであり、オールフォーワンですらM s. ダークライに目が眩んでいるのだ。

そして手に入れるものはM s. ダークライとして行動して手に入れてきたため、M s. ダークライというフィルターを除いた成生が欲しいものを手にしようとした時、自らの行動がどうなるか分かっていなかった。

「捕まえないよ。でも、私が捕まえるのは私のことちゃんと知ってる人じゃないと嫌」

成生の出す結論はこれだった。自らのことを知ろうとする者でなければ突き放すが、知ろうとして知ってくれた人なら捕まえる。

ただし、自らM.S.、ダークライであることも分かった上で知ろうとしてくれる者という問題はあるが。

考えて口に出した成生の言葉は、素直に受け取る少年が受け取っていた。

「そりや恋人って言うんじゃないのか？意外に我儘なんだな」

「あ、あれ？恋人……なのかな？」

ちゃんと知ってる友達、捕まえようとする友達より上の仲。切島からすれば分かりやすい等式なのだが、成生は顔に出る程困惑していた。

そんな様子の成生を見て切島は苦笑していた。笑顔が可愛いどこか不思議なところのある高校生という印象だったのだが、抜けているところもあると知ったのだ。

「可愛いところあるじゃん」

思わず口に出てしまい、成生が顔を赤くするのも必然だった。

さつきまでのヴィランが暴れた危険な雰囲気、二人の少年少女の甘酸っぱい風で吹き飛ばされた——はずだった。ファットガムのたった一言が、和やかな雰囲気は一瞬で緊張の糸をピンと張らせた。

「なあ嬢ちゃん、アンタまさか……ヴィランか？」

「はあ？」

切島の呆れる声。何を言っているのかとファットガムの方へ視線を向けた切島は、汗

を垂らし最大限の警戒をしているヒーローの姿を見た。

何故そんな警戒をするのか、する必要なんてないと否定の言葉を口にしようとし――

「そんな訳」

「そうですよ」

――当人から肯定された。

「……ええ？」

「Ms. ダーククライって呼ばれてます」

困惑を超えて理解不能まである言葉に、切島の動きは固まる。

そしてファットガムは軽い口調をしながら、怒らせないように慎重に言葉を選んでいった。

「……堪忍してほしいわ、藪もつついとらんのに出てこんでほしいわ」

「え？ファンが好きなのヒーローを見るのに理由が要ります？」

烈怒頼雄斗のファン。成生の言葉をそのまま受け取ればそういうことだ。だからここにいるというのも理解できる。

だがヴィランとなれば前提が覆る。本当のことを言っているのかが極めて怪しくなるのだ。事実としてファンレターを貰ったりファンだと言ってくれた切島以外には、そう見えていた。

「嘘だろ……本当に……Ms. ダークライなのか?」

「私は切島くんにはその呼び名を言っていないから呼んでほしくないなあ。成生っていう名前があるんだから」

明確に不機嫌を示す成生に「あ、悪い」と素の言葉がでる切島。その後、頭をブンブンと振り認識を正そうと試みていた。

ファットガムの緊張状態を目の色も変えていない成生は視界に入れない。戦うつもりもない相手に対峙する必要も無い。

代わりに跳んできたのは、電花だった。

「おかしーさん! 捕まえた!」

さっきのヤクザが逃げる時よりも倍以上は速い速度で成生の胸に飛び込んできていた。衝撃すらも受け流し軽く抱き留め、そのまま地面へと下ろす。

二人にとってはいつも通りのことだが、たったそれだけでファットガムの表情は更に険しいものへと変わっていた。

「……そういえばかくれんぼの途中だったっけ。さて、見たいものは見れたし帰りましょうか」

「その子たちは何や!? 騙して連れ去った子やないやろうな!」

せめて情報だけでも聞き出そうとファットガムは声を荒げるも、帰ってきたのはそれ

以上に怒っている者の声だった。

「私達はおかーさんの子供だよ！血を受け継いだ家族だ！」

奪姫がフーツとまるで威嚇する猫のように怒りながらファットガムと成生の間に割り込む。ヒーローどころか市民までが奪姫と成生の関係性が分かるようですらあった。

「奪姫、ありがとう怒ってくれて」

「え、いや……えへへ」

奪姫の横に移動し成生は頭を撫でる。頬を綻ばせて親に甘える子供の姿がそこにあった。

まるで母親のよう。だが、母親である前の一人の成生という人間を見る者がここにはいた。ファンとして思われた者だからこそ、曇りのない瞳で切島は成生を見ることができていた。

「成生！本当に、本当にヴィランなのかよ！何であんな真似をしたんだ！」

成生は怒られた子供ののように眉をひそめる。ヴィランであるのは間違いないのだが、恋する少女であることもまた間違いではない。流石に想っている者から糾弾されるのは堪えるものがあったのだった。

顔を背け、視線を合わせないで成生は切島に言葉を投げる。その表情は想い人に言われた悲しみか、これから想い人と相対する未来がある事実への期待か、自らの罪への贖

罪か、入り混じり……苦しい微笑みになっていた。

「教えないよ。ただ……これは勘だけど……もし、切島くんが成生って呼び続けてくれたら……いずれ教える時が来るかもね」

成生は何も考えず自らの感覚に任せて口に出す。何も見たくない、何も考えたくない、そんな思考放棄から出た言葉だったが、天然のマスターピースの直感から出た言葉は成生自身の感情を表していた。

私のヒーロー切島くんには、私のことをもつともつと知ってほしい、と。

「それって……」

「さあ？ 私にも分かんない。ただ私の勘はよく当たるとは言っておくね」

泣きそうな表情であり、しかし笑みを浮かべながら顔を向ける成生に、切島は手を伸ばそうとして躊躇する。容易に触れたら壊れてしまいそうな笑みがヒーローの卵には手を出してはいけないものだと思わせたのだ。

その躊躇が、切島にとってデビュー戦における最大の後悔となるのだった。

「じゃあね切島くん。次会う時も近いからまた会おうね」

「成生！」

手を出せなかった。それだけ……それだけで成生の瞳には失望の色が本人すら分からない程極小さくだが混じった。視線を合わせていた切島にだけはそれが分かっ

まっていた。

困った表情をした人には話を聞く人、ヒーローの定義にはそれも入っている。それがヒーローのファンなら尚更のこと。

まして、見惚れた者なら……ヒーローとしてではなく、男として当然のことだ。

「成生！俺は！」

今度こそ手を伸ばすも、成生はゆっくりと姿を透明にして消えていく。

転送の個性は鍛え最適化したことで瞬時に送れるようになった。が、それはあくまで最適化された使い方であり、範囲を広げたりと正しく使えなければ数秒程だが時間はかかる。本来なら思考加速で上手く使えない状態でさえもコントロールできていた成生だが、今だけは思考も加速できていなかった。既に一瞬で電花も奪姫も転送できていたのに、だ。

手を伸ばし、届いた先には既にもいない。その事実ギリギリと歯を食いしばる切島の肩に、ファットガムの手がポンと置かれる。

「烈怒頼雄斗……ひとまず今はお前のデビュー戦を祝おうや。市民を守り切った上に、あのM.S. ダークライが現れて被害が無かったんや。まずはそれを喜ぼう。

……依光成生がお前のファンやっても……ヒーローからすればその情報だけでも十分や」



「……はい」

ヴェランが暴れたが被害はゼロ。さらにM s. ダーククライが現れたがその被害もゼロ。加えてM s. ダーククライには家族がおり、電花や奪姫といった情報を得られた。そんじよそこらのプロヒーローすら霞む程の十分過ぎる結果だ。

だが切島の瞳と心には、成生の悲しそうな微笑みだけが焼き付いていたのだった。

## ヒーロー&amp;ヴィランサイド 死穢八齋會突撃まで

烈怒頼雄斗デビューから数日後、ナイトアイ事務所に2〜30人近い人が集まっていた。彼ら全員がプロヒーロー、もしくは英雄生徒であり明らかに大ごとなヴィランへ向けられた対策の集まりだ。

「順を追ってお話します」

ゆっくりとナイトアイは話を始める。プロヒーローは既に話を進めていたが、学生達はプロヒーローに話を聞くべくワイワイと話していた。

今回は敵<sup>ヴィラン</sup>連合も話に入っており、イレイザーヘッドやグラントリノもこの場にいた。「協力を頼まれたから来たんだ。ざっくりとだが事情も聞いている……言わなきゃならんこともあるしな」

緑谷と切島を一瞥するイレイザーヘッド。緑谷は心当たりがありグツと息を呑んだが、切島はポカンとしていた。

何が言いたいのかわからない上に話す様子もない相澤先生に切島はキョロキョロと周りを見渡し、インターン先であるファットガムへ声をかける。

「俺置いてけぼりなんすけど……八歳？なんすか？」

「悪いこと考えとるかもしれないから、みんなで煮詰めましょうのお時間や。お前らも十分関係してくるで。烈怒頼雄斗は特にな」

特に関係している。心当たりが無い切島だが、聞こうとするよりも前に全体に通るナイトアイの声が会議室に響いた。

「それでは始めて参ります」

全員が用意された椅子に座る。人数が人数であり、時間をとらせるわけにもいかない。と端的にナイトアイは説明していく。

「ナイトアイ事務所が指定ヴィラン団体、死穢八齋會を独自に調査開始していました。そして死穢八齋會の調査開始からすぐにヴィラン連合の一人、分倍河原仁……ヴィラン名 トウワイス との接触。」

尾行を警戒され追跡は叶いませんでしたが。警察に調査協力していただき組織間で何らかの争いがあつたことを確認」

「連合が関わる話ならということであつた俺や塚内にも声がかかったんだ」

「それで……」

グラントリノと緑谷が口を挟み、さらにヴィラン連合の話へ少し脱線する。ヴィラン連合はM.S. ダーククライの兄弟弟子が筆頭にいる組織だ、無視できるわけもない。死穢八齋會と何かしら組まれたら厄介どころの騒ぎではない。

ただ今の会議ではさほど重要なことではなかった。

「学生がいると話が進まねえ。本題の“企み”に辿り着く前に日が暮れちゃうぜ」

今回の会議では死穢八齋會が企んでいることが本題だ。障害となるヴィランは組織的な動きか悪夢の一人を除いて会議にあげる必要は薄い。

「続けて。八齋戒は以前認可されていない薬物の捌きをシノギの一つにしていた疑いがあります。そこでその道に詳しいヒーローに協力を要請しました」

「昔はゴリゴリにそういうのぶっ潰しとりました。それで先日のレッドライオットデビュー戦までに見たことない種類のも物が環に打ち込まれた。

……個性を壊すクスリ」

部屋がざわつく。ただの一介のヤクザ組織を潰す程度と想っていた者もいたが、ファットガムから齎されたモノは予想以上の劇薬だ。仕方がないことだった。

「切島くんが弾いてくれた一発でその中に入ってしまったもんが分かった。……気色悪いもんやったで

人の血いや細胞が入った」

「……個性由来ってこと？個性を破壊する個性……」

切島は名指しされたことで照れ隠ししながら笑う。会議はその快活な様子とは真逆とすら言えるほどの重苦しい雰囲気になっていたが。

「……検討ついでるんだろ？」

切島以外が眉をひそめるような雰囲気の中、プロヒーローロックロックがナイトアイへ口を開いた。

数秒の逡巡があった。溜息が一つあった。言いたく無さそうな雰囲気だった。そう示した後、ナイトアイは話さなければならぬことを口にした。

「治崎には娘がいる。出生届は出ていませんが……先日、接触し偽情報ではないことも確認しています。」

そして治崎の個性は「オーバーホール」、物体の分解と修復を可能とする個性です」

追加された簡潔な事実は三つだけ。だがそれだけでプロヒーローは何が行われているか悟れてしまう。これまで起きた事件、使われた弾丸、材料。そして……生成方法。

考えられる過程が余りにも非人道的であるが故に信じたくないヒーローもいた。が、既に事件が発生している以上認めない訳にもいかない。

「まさか……そんな……」

「個性社会だ、あり得ない話じゃない」

「ずいぶんと悍ましいことをやってるな」

沈痛な表情をするプロヒーローと……デクとルミリオン。何が起きているのか分かってしまうがために、M.s. ダークライと遭遇したあの日にしなければならなかった

と後悔していた。

「えつと……どういう？」

「……学生には早かったんじゃないかねえのか？」

ここには切島や麗日もいた。連ねられた事実から察せるほどの能力を持っていない彼らに、ロックロックは会議の面子を一瞥する。

そして誰も口にしなかった……からこそ、ロックロックは自らそれを言葉にする。

「娘の身体を分解して、弾丸の材料にしてるんじゃないかねえのか？ って話だ」

「——！！」

人体実験から始まったであろう武器の売買。それも娘を素材としているという触れたくない悪意と呼ぶべき意志があるヴィランの所業。学生が視るには早すぎる社会の闇だった。だが、早すぎるからこそ宿る感情もあった。

一足早くそれを見た二人——デクとルミリオンは自らに怒っていた。悪意を目の前にして、助けられなかった事実。誰よりも救けたいと願う二人だからこそ猛烈な怒りを抱いていたのだった。

「こいつらが娘を保護していれば解決だったんじゃないか？」

「責任は全て私に在ります。知らなかったこととはいえ……二人ともその娘を助けようと行動したのです。」

デクはリスクを背負いその場で保護しようとし、ルミリオンは先を考え……確実に保護できるように。今この場で一番悔しいのは、この二人です」

憤慨する二人は立ち上がる。人を救えることに最も高い価値を持つ彼らは、目の前で救われなかった事实は捨て置けるものではない。

「今度こそ必ずエリちゃんを保護する!!」

会議室全体に響く声。ナイトアイはほんの一瞬だけ間を置き、集まった面々にやるべきことを告げた。

「これが私たちの目的になります」

単純明快極まりない目標。だが障害が多過ぎるからこそヒーローは数を集めて打倒する。まさしくヒーローとヴィランの組織同士の戦いだっただけだ。



「推測通りだとしてそのガキは若頭が隠しておきたかった核なんだろ？それが何らかのトラブルで外に出ちまった！あまつさえヒーローに見られた！」

素直に本拠地に置いとくか？俺なら置かない……どこにいるか特定できんのか？」

目的を告げたナイトアイだが当然疑問が大量に残っている。これから先何をするのか、どうやって解決するのか、障害はどういったヴィランがいると分かっているのか。

確認すべき項目は多い。

だがそれら全てを差し置いても話さなければならぬことがあった。たった一人の障害のことを。

「問題はそこであり……そしてそこに最大の障害があることこそが課題になります」  
「……見つからないってこと？」

最大の課題と問われ疑問をリユークユウが零すも、ナイトアイは首を横に振った。特定ができない訳ではない、だというのに最大の障害がある。何かがあると理解するのにプロヒーローには一秒もいらなかった。

「エリと呼ばれる少女の傍らには一人、ボディーガードがいます」

しかしナイトアイの言葉は要領を得ないものだった。まるでたった一人に誰も敵わないとでも判断しているようであり、その一人が誰なのか知らないヒーローからすれば滑稽にすら思えたことだろう。

もつとも、回答を聞いたら判断は正常だと誰もが納得するものだった。

「こちとらプロヒーローだけ？数も集めてるのに一人で何とかなるってのか？」

「……それがあの強大なヴィラン、M.S. ダークライなのです」

会議に参加していた全員の目が見開く。ナイトアイが集めた面子ではあるが、戦闘力という意味であればオールマイイトやエンデヴァー達トップヒーロークラスではない。



情報収集と一介のヴィラン組織と対峙できる程度のものでしかないのだ。

だというのに神野で伝説のヴィランとヒーローを一蹴した新星ヴィランが警護に付いているともなれば、勝ち目など無きに等しい。

「……本当なの、それ」

「間違いありません。それは実際に対峙した二人が証明してくれています。だからこそその場で保護が難しかったということもあるのです」

デクとルミリオンに向けられていた視線がさつきまでのものとは180度違うものになる。彼女と敵対しながらも情報を集め、帰ってこれているのだ。賞賛こそあれどイキがつているガキと見る人はいなくなっていた。

そして同時に最大の障害というのにも納得がいつていた。最強のヴィランの名を欲しいままにし、どこにでも現れる個性すら持っている。戦いと逃走という意味であればこれ以上ないボディガードだった。

「が、彼女であるがゆえにエリが本拠地にいる可能性が最も高い。各地にワープし現れる彼女なら連れて逃げる事さえ容易。ですが念のため他の拠点が確実に彼らのアジトであるかの確認を含め、探ってほしいのです」

「この場所……土地勘のある俺達が呼ばれたのも納得。だが……相手がM.S.、ダークライとなれば話は変わってくるぞ」

集められたヒーローは拠点を探るための要員。そこまでは分かるものの突如として現れるM・s・ダークライであれば逆に襲撃される可能性も出てくる。返り討ちなど容易に想像がつく。

しかし戦力差があると分かっているながらもナイトアイはプロヒーローをこれだけしか集めなかった。その意図が読み切れず困惑の色が会議室に蔓延し始めていた。

「こうしてる間にエリちゃん泣いてるのかもしれないのやぞ?」

ファットガムならもつと怒っていてもおかしくない話だというのに、時間がないと冷静に口にしてた。相手が相手なのだ、武闘派な彼であれど完全な戦闘状態になればどう足掻いても負けるのは必至。

集めた面々と言い、ナイトアイの対策が話されていないのだ。早くM・s・ダークライの対策ともなるそれを話して欲しかった。

「我々はオールマイトにはなれない、ましてや今回はそのオールマイトさえ破ったヴィランと相対しなければならぬ!」

オールマイトであればM・s・ダークライのいないタイミングを図って即座に救出とあった真似ができたのは間違いない。いくらボディガードでも先日のように離れることがあるのだ、可能性は十分にある。

ただここにいるのは物理的にオールマイトよりも動きが遅いものばかりだ。どうし

ようもないのは事実だった。

空気が重くなりかけるところで、イレイザーヘッドが手を挙げた。表情は他の面子と比べればいつも通りなものだ。

「予知はどうなんですか？」

「それは……極一部を除き期待できない」

ナイトアイの個性は知られている。情報アドバンテージは他のプロヒーローと比べても頭がいくつか抜けており頼るのも悪く無い判断だ。

が、ナイトアイはその個性でさえほぼ使い物にならないと告げる……その理由も。

「というのもM.S. ダークライというヴィラン、彼女だけは私の予知でも追いつけない存在なのです」

本来ならあり得ない個性の挙動。ナイトアイが苦心している理由そのものだった。

予知が真っ黒になって見えないなら分かるのだ、それは予知した人が死んだということだ。しかしM.S. ダークライに限っては違う。

彼女に関わるものの予知を見ると毎回変わっているのだ。まるで好き勝手に未来を変えられているかのように。

そしてそれは……皮肉ながらもナイトアイに自らの個性について理解させるのに一役買っていた。

「彼女は行動が不明……つまり気まぐれに行動していると見える」

「そんなんで予知って破れるもんなんか？」

「もちろん不可能です。あのオールマイトですら不可能でした」

ファットガムの疑問も当然だ。何より、これまで前例がいなかった。

予知は変えられない……はずだった。ナイトアイが最も信頼しているN.O. 1ヒーローですらできなかった。

だがそうではない。予知は変えられる、形がどんなものになるかは別だが変えられるのだ。

「予知を変える事、ですか。それがオールマイトにはできなかつた」

「条件は確定できていませんがおそらくの予想だけがあります」

もちろん例外中の例外が相手だ。だからこそM.S. ダークライの情報を集めなければならなかつた。ヒーロー業務すら3割近く放り投げる程にM.S. ダークライの調査をしていたのだ。

そしてナイトアイは理解したのだ、M.S. ダークライはヴィランではない——否、ヴィランと呼ぶしかない社会に発達しているのだと。

故にヴィランと呼ぶしかないが、本質はヴィランではない。そしてもう一つ……行動がフラフラしていることだ。正確には神野以後の話であり、神野までは明らかに目立つ

ための下準備といった様子だった。

しかし神野以後のフラつきぶりはヒーローでも、ヴィランでもそうそうあり得ない行動なのだが、長年の経験から心当たりが無い訳ではなかった。

そして調査して数日していた夜、ナイトアイは心当たりにはハツと気づいた。もしや原点が分かっているのか、ないのか、無くなったのか。であれば納得がいくのだ。原点を見失ったヒーローなら、まさしくあんなふらつきを見せてもおかしくない。

「……それは？」

「社会を個人で変える程の力を有していること。そして……自らの原点が不明瞭であること」

「……なるほど」

「イレイザーヘッドや他のプロヒーローもなるほどと頷く。ある意味で分かりやすい結論だった。

「揺さぶられやすい人間性でありながら、武力だけは突出し過ぎている。そういうことですか」

イレイザーヘッドが性格や能力を声に出し、ナイトアイもコクリと頷く。

そんな中、ファットガムは首を傾げていた。出された言葉が理解できない訳ではなかったが、腑に落ちないものがあつたのだ。

「……烈怒頼雄斗のファンや言うてたで？」

「「え？」」

ヒーローのファンが憧れてヒーローになるというのはよくある話だ。ナイトアイ自身（アイ）がそれを証明するだろうし、緑谷や……なんなら切島だってそうだ。

憧れはブレない軸を構成する一端になる。ファットガムにはM s. ダークライが揺さぶられやすいというのもどこか違う気がしていた。

「成生は、前に会った時からそう言ってた……あ、言っていました」

切島も目を伏せながら真面目な表情で口に出す。他の面々とは違い名前でも呼んでいだが、M s. ダークライの本名を知らないプロヒーローはいない。

A組関係で察しのいい相澤や蛙吹だけは珍しい切島の様子に何かを勘づいてはいた。同時に今ここで口に出すことでは無いと合理的判断を下していた。

「まあいつ会ったかは聞かんとく。……向こうにM s. ダークライがおるから呼んだんか？」

「その情報がH N（ヒーローネットワーク）に流れたからです。なので必要であると判断し呼びました」

烈怒頼雄斗デビュー戦で得られた情報は既にHNにあげられている。確実な情報だけがあげられていたため、M s. ダークライと名乗る者が現れたことと、相応の圧力を持っていたこと、そして彼女が烈怒頼雄斗のファンだと言っていたことくらいだった。

神出鬼没のため情報が怪しく、今回も怪しいものだと思う者も多かった。そう思わなかったのは実際に会ったことのない者達だけだったが。A組の面子は会ったこともあり、あり得る話だと思っていた。

「予知をほいほい変えられていますが、緑谷の予知を行った時、かなり鮮明に近くなっていました。変えられない訳ではないが、変えたくないというように」

「切島くんに近いから、言うことか。ってことは極一部の人間言うのは」

「彼と彼に親しい者、と考えています」

M s. ダークライと相對する場合は必ず烈怒頼雄斗の予知をしなければならぬ。プロヒーローには言いたいことが分かっていたが、A組の面々には分かっていたいなかった。

それだけの重要人物になっているのだが、切島も緑谷も目的は違えど成生と話さないといけないという考えでありそれ以上の考えはなかった。

「なら切島くんの予知すればええんやないか？」

「先に話を少し進めてからでお願いします」

フアットガムも分かっていたが、ナイトアイはまだ話すべきことがあると零す。何も脅威はM s. ダークライだけではないのだ。M s. ダークライはボディガードであり、雇い主がいる。

「しかしそれで全て解決できるとは思えない。何より、M s. ダークライだけが矢面に  
出て来るとは到底思えない。」

M s. ダークライがもし出てこない場合、死穢八齋會と相対しなければならぬ」

「ボディーガード言うところのにか？」

「M s. ダークライと相対した二人の証言では、エリを直接奪うなら敵対するというも  
のでした。そして……奪われること自体は別に気にしてはいない様子だとも」

M s. ダークライと死穢八齋會で繋がりがあるのは間違いない。だがその繋がりが  
何かがまるで分からない。エリによつて繋がっているとさえそうなのだが、それ以外  
がまるで見えないのだ。

そこさえ断ち切られてしまえばM s. ダークライと戦う理由は無い。そしてM s.  
ダークライは目的さえ果たせばヒーローと戦う性格ではないことは分かっている。

だからこそナイトアイは逆に戦力を抑えたのだ。戦力を揃えれば戦う気を示してし  
まう、そうなれば向こうも戦闘態勢に入つてしまい、その先は敗北だ。

ならば戦力を抑えM s. ダークライと敵対する意思は無いと示し、死穢八齋會とM  
s. ダークライの繋がりを断つ。それこそが狙いだつた。

「……死穢八齋會がエリを利用してはいる中心であり彼らを抑えらるると？」

「実際に調査した限り、M s. ダークライと思われる少女はエリを時折外出させている



ようです。本来なら大事極まりない少女であるのにそんな真似をさせるとは思えない」

「M s. ダークライの実力だからじゃねえのか？」

「それもあると思います。が、M s. ダークライからすればエリは逃げても問題ない相手。そう考えるのが無難かと」

「じゃあ何で逃がしてない？」

「二人の証言ですが、保護するなら別に渡しても構わない。そんな様子だったらいいです」

「……死穢八齋會から逃がすのがM s. ダークライ<sup>ロー</sup>つてか。笑えない冗談だぜ」

プロヒーローがようやくナイトアイの狙いを察し疑問をぶつけていく。必要となる情報はM s. ダークライの性格と死穢八齋會、そしてエリの繋がりだ。

死穢八齋會とエリの繋がりはだいたい予想がつく。希少な個性だから捕まった一般人の子供とヴィラン組織だ。あとはM s. ダークライとそれぞれの関係を把握できればこちらの行動も自ずと決まる。

「ただM s. ダークライのこれまでの行動と一貫してはいません。彼女の行動は善ではないが善に近い人物を善へ蹴り落とす」

「真逆が大半だがな」

M s. ダークライの動きに変わりはない。結論はそれだと言いながら、やはり信用が

薄いとリユーキュウは声を出した。

「……かなり願望的予測じゃない？ M s. ダークライがいるのに戦わないことを前提にした作戦なんて」

当然の疑問だった。戦えば即敗北のスイッチが常にあるようなものであり、押されないように戦うといっても限度がある。

ナイトアイはふうと一つ息を吐き、切島の方へと顔を向けた。

「仕方ない……切島くん、こちらを向いてくれるか？」

「あ、はい」

後でやると思っていた予知、切島へ視線を合わせ個性を発動する。一秒とかからない個性の発動だったが、それだけで十分な程に未来の時間を見ていた。

「……そうだったな。最近見えなかったことが多いが、こんな風に見えるものだった」

ふうと長く息を吐き、未来が見えたのだと周囲に言葉を漏らす。

「M s. ダークライと死穢八齋會は完全に別です。エリはM s. ダークライの傍にいます、直接手を出さない限り手を出してきません」

繋がりにはエリ。そこさえ何とか出来れば死穢八齋會とM s. ダークライは別たれ、M

s. ダークライとは敵対しなくなる。そしてエリはボディガードがM s. ダークライとはいえ死穢八齋會の監視下にもある。

すなわち、死穢八齋會を逮捕できればいい。M s. ダークライからエリを確保するのはその後でいい。

そこまで分かったところでようやく会議室の雰囲気明るくなり始める。希望が皆無だったのを理屈をこねくり回して希望に見せかけていたのが、正しく成立したのだ。文字通り光明が見えたと言つてよかつた。

「なら最終目標はM s. ダークライから保護することか？」

「そこから先は見えませんでした。最終目標はそうなりますが……彼女の行動からして神野のようなことは無いかと」

「何故言い切れる？」

「完全に別なら、まず確実に死穢八齋會のメンバー全員を我々にぶつける筈です。搦め手を使える彼女なら間違ひなくそうする。」

そして死穢八齋會が確保できたならエリも必要ない」

「奴のプライドが許すと思うか？」

ナイトアイは黙る。予知で分からなかつた範囲であり、本人の行動から測れる性格からも分からない範囲の箇所だ。分かれば対策を打つのが非常に簡単になるのだが、今は

分からない。

けれど分かることもある。プライドが高いなら予知も反応するはずなのだ。それが無いとなれば、M s. ダークライ自身分かっていない可能性が高い。

「……おそらくそれが分からないから、予知が反応しないのでしょうか」

「出たところ勝負って訳か」

死穢八齋會の監視を破壊した後、M s. ダークライと対峙する時から先は分からない。M s. ダークライの性格で全てが決まる。

けれどそこまで行けばエリの身柄確保ができていても意味している。目標は達成できるとも言えるのだった。何せ彼女がエリを傷つけることは無いと行動から分かっているのだから。

「幸い直接手を出さなければ向こうも手を出さないと分かっています。なので最終目標はそこに置きます」

「M s. ダークライがエリを奪う可能性は？」

「それは二人の証言からしてあり得ません。どうやら彼女が行っていたのはエリの個性の習熟だったようです」

リユーキウウの目つきが鋭くなる。あのM s. ダークライがそんなことを行っているとなれば想像以上にエリの身柄確保が難しい可能性あると見れる。疑問に思うのも

当然だ。

「……どういこと？」

「エリの個性は人を容易に殺せる個性のようです。それをM s. ダークライが制御させようとしている」

「ホント、敵か味方が分からないって厄介ね」

敵なのは分かっているが、味方する行為も行っている。エリを確保してもエリにヒーローが殺されたら意味が無いのだ。

それを考えれば、M s. ダークライはエリにヒーローを殺させないように動いている。そこだけを切り取れば潜り込んでいる味方と思ってもおかしくない。

「だからこそ予知も反応しない。そしてM s. ダークライが行っている行動からして最後は捨てる可能性が高い。

何せ彼女が行っているのは基本的に『明確にヴィランかそうでないのか誘惑して示させる行為』でありそれ以上は何もしない」

結局のところこれだ。彼女は善寄りの人にはヒーローと大差ない行為をする。そして逆に悪寄りの人にはヴィランに寄せるといふ大物ヴィランの行為をする。

今回は前者だからヒーローに近いのだが、どのタイミングでヴィラン側になるのか分からない。今回の関係性はその線引きが最も重要なのだ、一歩間違えれば全滅すると確

信すらある、故に判断が途轍もなく重要になる。線引きで撤退するために。

「だから逆に行動を止めて捨てさせるのを待つ訳か」

「ご名答です」

ヒーローでもヴィランでもないタイミング、そこに辿り着ければ敵対しない。切島がいれば話はまた変わるかもしれないが、狙いはそこにある。

「それでもまずは確実にエリの居場所とワープする可能性のある場所を確定させなければなりません。ご協力を、お願いします」

狙う場所に辿り着くため、ヒーロー達は動き出す。予知を好き勝手に変える悪夢から、未来を勝ち取るために。



数日後、デパートにある玩具売り場に二人の姿があった。一人はスーツ姿のヒーロー、ナイトアイ。そしてもう一人は……依光成生だった。

「おや、こんなところで奇遇ですね。予知ですか？」

「……冗談だろうと驚きたいところだ、今さつき変わった予知であり事実上の偶然。私  
が予知した時は死穢八齋會の誰かが来るはずだった」

予知を利用し死穢八齋會のメンバーまで辿り着き、そこから予知を行うことでえりの居場所を特定しようと試みたナイトアイ。その方法は間違っておらず……ただ、予知の

外からやってくる気まぐれがいただけだった。

警戒するナイトアイにクスクスと笑う成生。成生からすればただなんとなくで直感し行動する時が多く、その大概が本人の希望以上の結果が出るため動いているだけだ。もちろん直感に従わずに行動する時もあり、予知が外れるのはこれを好き勝手に決めるからだ。

プロヒーローの原点すら軽く凌駕し社会を簡単に動かせる存在がライブ感で生きている、予知が当たるはずもない。

「残念でしたね……まあでも私もあなたには聞きたいことがありましたし、お茶でもしましうか」

「断りたいが?」

「レディのお誘いを断る男は嫌われますよ?」

ユーモアの気配を感じ取るナイトアイ。話してみたかったこともあり、自分自身に利敵行為ではないと言いつけ聞かせる。

「……仕方ないか」

「あ、盗聴は無しでお願いしますね。今は切島くんには会うのは尚早ですし……プロヒーローなら呼んでもいいですよ」

「そんなに気に入っているのか?」

「ファンですから」

今度は年頃の少女のように可愛らしい笑顔を見せる。M.S. ダークライではないが、さっきまでのどこかヴィランのような雰囲気をしているようにも見える少女から一瞬で切り替わっていた。

もしこの表情をしていればヴィランには思えないだろう。熟練のプロヒーローであるナイトアイでさえそう思えた。同い年のヒーローの卵なら迷うのも当然と、ナイトアイは烈怒頼雄斗に同情する。

場所を移し、近くにあつたカフェへと移動する。ナイトアイはブラックコーヒーを、成生はカフェオレを頼み、届き一口飲んだ後に話は始まった。

「さて、聞きたいことは？」

「あなたがデクのインターン先ですよね？」

「調べれば分かることを聞くか？」

「確認は大事です」

ユーモアだけでなくきちんとした対応もする。もしこれがヒーロー側であつたらどれだけ助かる人材だっただろうと逡巡する。

しかしナイトアイは目の前の少女がヴィランであると知っている。それも狡猾なヴィランなのだ。



「その通りだ。お前との話も聞いている」

「なら話は早いですね。あなた達の目標とする少女、壊理は私が確保しています」

「ピリ……と緊張の糸が張られた。確保しなければならぬ少女を奪われたヒーローという構図ともなれば、一触即発にもなる。」

「……どうにかする気か？」

「いや？むしろ助かっているのですよ。私の子供と友達になって仲良くしてるものから」

コップに一口つけ、成生は特に何ということでもないと話を続ける。成生からすれば保護しているがそれだけなのだ。成生に隠されていた個性と特性は壊理以上の価値であり、境遇という意味では理解できるものはある。情も移っている……が、正しい道に戻るのは目に見えている。ならばそこから先に口を出すつもりは毛頭なかった。

逆に情が完全に移り、壊理を離したくないのはこの場にはない電花だった。初めてできた友達なのだ、離れたくないのは誰であつても同じことだ。

「電花と奪姫と呼ばれていた子供たちか」

「ええ、ただ……友達だから引き離されたくないのは当然ですよね」

「親ならそういうこともあると教えるべきだろう」

「ヒーローならそうですね」

ヒーローなら。そこに引つ掛かった言い方にナイトアイは憤りを持つも、コーヒーを一口飲み、感情諸共？み込む。

揺さぶられ合いなのだ。ここで先に用件も話し終わらず立ち上がるのは自らが格下と認めることに等しい。オールマイトの元サイドキックであるナイトアイがその選択をとれるはずもなかった。

「私はあの子をこれ以上どうにかする気はないですが……私の子供たちはそれを許しません」

「敵対するならば子供たちだと言いたいのか？」

「ええ。私からすれば切島くんの方へ応援しに行きたいくらいですよ。もうあそこに用事はないのです」

死穢八齋會など最早どうでもいいという言い方にナイトアイは少しだけ遠い目をする。

オールマイトから見たプロヒーローは置いてけぼりにされることが多い。教師になった後も通り道にヴィランが出たらプロヒーローよりも圧倒的な速度で鎮圧するということとは起きており、ナイトアイと組んでいた時などさらに多かった。

そしてその時、オールマイトは振り向かなかった。どんな表情をしていたのかは分かっているが……もしヴィラン側に似た存在がいたのなら、こんな顔をしていたのかも

しれない。

コーヒーを一口飲み、自らが作った数秒の沈黙をナイトアイは破る。屈辱だと分かっている、個人的にやらねばならないことがあった。

「……一つ願いたい」

「ヒーローがヴィランにお願いですか、正気です?」

「お前が私の予知を悉く邪魔しているものでな」

ケチをつけるナイトアイに成生は苦笑する。ヒーローの邪魔をするのがヴィランだ。ナイトアイという情報系の個性ではトップクラスに厄介なヒーローをこれでもかかと邪魔しているのは痛快ですらある。

が、ヒーローを追うファンという意味では成生にも理解できるものがあるのだ。高笑いすることはできなかった。

そしてできればと、予知を使えば知りたいこともあった。

「……まあオールマイトを引退させたのは私ですし、ファンに申し訳ないという罪悪感があるのも事実。あなたの個性も分かっていますし、構いませんよ。

何より私の目的もそれでしたし」

「何か知りたいことでもあるのか?」

「ええ。機会ができたらと思っていたのですが、私の未来は私にも分からないというこ

とを知りたいので」

成生本人の原点はほぼ達成されている。今やM.S. ダークライとしての行動もルーティンという訳でもなく、面白そうな状況かどうかと気分次第だ。個人能力は十分であり、子供たちという数の戦力も十分に持っている。

しかし成生は自分自身の未来など考えもしなかった。デビュタントまでは色々考えていたのだが、能力が想像以上に強くなっており考える必要も無くなってきたのだ。

だから知りたかった、考えたことも無い未来が自分には存在するのかと。

差し出された左手をナイトアイはそつと右手で——触れる必要はないのだが雰囲気呑まれて触れる。予知が発動し……ナイトアイの表情は暗くなった。

「……これは、どういうことだ？」

「何か分かりましたか？」

興味はあるがそこまでももないという表情で淡々と口にする成生。ナイトアイの暗くなった顔にも半ば興味は無さそうですらあった。

「お前の言う通り、少し先……我々とお前の子供たちがぶつかる未来までしか見えない。それ以上先は、分からない」

「でしようね、おおよそ予想通りなことです」

ふうと息を吐く成生の姿はどこか諦めすら持っていた。

ナイトアイは感情を読める訳ではないが、長年のヒーローの経験はある。それが察させる感情は——諦めが4割程と、変わらず進み続ける決意が6割だった。

「なぜそう思った？」

「未来などその時に生きる自らの手で変えるものですよ。それが後悔することになろうとも、振り返ってはいけない」

「なるほどな、お前でも親殺しには後悔しているということか」

ナイトアイの体感で一瞬だけ、成生の瞳が泳いだように見えた。既に成生が増強系の個性を使っていることはヒーローには解析されている……それが非常に強力なことと、速度に特化したものであることも。

神野の一件で分かったことだった。何せオールフオーワンに速度でついていっていったのだ、言い換えればオールマイトの速度にも追いつけることを意味する。惑わされず理解しようとするれば自然と分かることだった。

だというのに増強系でも何でもないナイトアイに動揺が見えた。成生の精神が揺れたことの方がやりやすい証左だった。

「流石にバレますか。オールマイトのサイドキックであれば諜報能力も素晴らしい」

「お前に褒められても嬉しくもない」

とはいえM.S. ダークライだ。動揺も一瞬であり、余裕を見せた表情に変わりコップ

に口をつけていた。

「私からはそれだけです。あなたは何？」

「聞きたいことはいくつもあるが……お前の目的は何だ。目立ちたがりなのは分かっている、だがそれもオールマイトを倒したことで実質的に果たされたはずだろう。」

やつてることも巨悪らしからぬ行為。それにヴィラン連合との連携も怪しいときた。何がしたいのかさっぱり分からない」

何がしたいのか、成生はその言葉にコップを置いて窓の外を見上げる。晴れた空は、既にやることは終わった後の未来のようにも見えていた。

成生が成し遂げたかったのは誰よりも目立つこと。そしてそれはオールマイトとオールフォーワンをほぼ同時に倒したこと、どこにでも現れる個性を示したことでほぼ達成されたと言っている。

何せ伝説のヒーローとヴィランですら勝てなかった新星ヴィランだ。話題性も力も十分に示され被害は増加の一途。一般市民がオールマイトヒーローがいれば、などという言葉で誤魔化すことさえ許さない。

M.S. ダーククライという名前が時代を作れるとさえ言っても過言ではないのだ。もつとも肝心の成生はそんなことやる気はなかったが。

目的を終えたヴィラン、今の成生はそんな状況なのだ。暴れたりオールフォーワンみ

たいに支配したりするのがヴィランとして正しい姿なのだろう。しかし成生には烈怒頼雄斗という応援したいヒーローがいるのだ、好き放題暴れたら殺しかねない。

故に、それらの目的を排除した後に残ったものから漏れ出る感情に従うだけだった。

「何がしたいのか……ですか。立てていた計画も私の能力が想像以上だったために必要もなくなった。最も目立つ存在になるのも事実上達成されたと言っている。」

だから……残っているのは第二の私を作らないこと、ですかね」

「第二の、お前？」

「ヴィランになるのは簡単だよ、そう言いたいだけです。思い詰めたもの、追い詰められた者程強大なヴィランになります」

「ならばヒーローが救うのが正道だろう」

「私はなれなかったですね。目立ちたいという目的のためにオールマイトを倒さなければならなかったからというもありますが、個性がヒーローに向いていなかったからというのがありますよ」

「だからヴィランになれというのか？」

かつて爆豪に言った言葉の逆。性格がヒーローになれるものであっても、個性がヒーローに向いていない。だからこそ真逆の爆豪を気に入らなかった。個性がヒーローになれるものであっても、性格がヒーローに向いてない者だったから。

「個性とはその人そのもの。個性がヒーローに向いていないのにヒーロー社会を生きろなど、随分と酷なことを言うのね」

諦めにも近い哀しい瞳をした成生が、ナイトアイへ向けられていた。

ナイトアイはまるで別次元にいる堕ちたオールマイトのようにも感じ取っていた。常に人助けに走り続けてきた、個性も持たなかった人……オールマイト。どれにも属せる性格であり人助けといった方向も嫌いではないにもかかわらず、個性がそれを許さない Ms. ダークライ。まるで個性の強力が自らの信念と反比例しているようだ。

言うなれば何もかも諦めたオールマイト、今の彼女から感じ取った印象はそんなものだった。

「それが、社会というものだ」

「だから私はヴィランになった」

見ていられない、目を逸らしたナイトアイは誤魔化すように口にする。だが成生の視線は変わらず向けられていた。



「ヒーロー社会でヒーローになりたいと思うのは普通でしょう。けれどヒーロー向きじゃないどころか使えば真逆の方向の結果をもたらす個性を持つならヒーローにならない。憧れと意志だけでは到達できない境遇がある」

「だが力だけはある、と。ヴィジランテではダメだったのか？」

「結果が真逆といったでしょう。助けようとして人を殺すなら最初から何もするなど言います。ただ個性があるのに使わず何もできないのは苦しい者も多い、そんな人には手を差し伸べるだけです」

根本がヒーローに向いている。ナイトアイ自身そう評したが、まさかそんな形で手を差し伸べるとは考えもしていなかった。

個性とは人そのものと彼女は言った。ヒーロー社会に向いてない人は辛い、言いたいことは分かる。そして個性と行動が合っていないものには救いを……これも分かる。

だからこそヒーロー社会に向いてない者……つまりはヴィランの見込みがある者はヴィランへ。そして個性が合っていないものには向くべき方向を……すなわちヒーローの方向へ向かわせようとする。M s. ダーククライが行ってきた行動原理としては分かりやすいことこの上ない。

根本がヒーローなのに、ヴィランになったからこそ行っている行為。ナイトアイにはそう言う他なかった。

「憧れも意志も置き去りにしてきた、力だけの存在に向かつてきなさい。私は都合上ヒーローになれなかったからヴィランになっただけ。その研鑽も向上心もヒーローと変わらない。ヒーローと違うのはヒーロー側に救けることなくヴィラン側に救けることだけ。」

ヴィラン寄りの者にとつてのヴィランに救うもの、それが今の私Ms. ダーククライよ」

ヴィランにはヴィランらしい救い方がある。それはヒーローは受けいれてはならないものであり……理解できるものだった。

「なるほど、よく分かった。……相容れない存在だということかな」

そして同時に——哀しい現実であることも。

「ヴィランとヒーローなのだから当たり前でしょう。では失礼」

「待て、最後に一つ聞かせろ」

俯き暗い表情をするナイトアイを横目に立ち上がり、微笑んで立ち去ろうとする成生。二人の会話が終わった跡だけ見れば、負けたのはどちらか明白だった。

「お前にとつての、悪は誰だ」

「言つたでしょう、私は力だけの存在だと。そこに善も悪もない。行動の善悪を決めるのはあなた達社会側、そして突出し過ぎた力を持つ個人は悪扱い。……私個人から見た悪なら私しかいないでしょう、そうあれと行動しているのですから」

立ち去っていく成生。ナイトアイが俯き伏せていた顔の下は、沈痛なものが隠れていた。

「予知した別の世界ではN.O. 1のヒーロー、か……心根が優しいというのも間違ってた。力は十分過ぎ、ユーモアも少し磨くだけで十分あるのは目に見える。

ただ……何が悪かったのだろうな、オールマイト」

あの時オールマイトが引退していれば間違はなくヒーローになった、それもN.O. 1になったであろう少女。しかも素養だけはそのままに持っている少女だ。

だからこそM.S. ダーククライになったのも分かってしまう。ヒーローとして救う者としてN.O. 1がおり、影響力も十分にあるオールマイトがいればヒーロー側から救う者はいらない……そして逆側はいない。まさしくオールフオーワンが言った通り、オールマイトがいるからヴィランになったとしか言いようがない。

成生の言葉の意味が全て理解できたからこそ、ナイトアイはただ哀しむことしかできなかった。



ナイトアイが成生と話した二日後、情報を共有するためメンバーは再びナイトアイ事務所に集められていた。告げられた事実が、予想通りだったからこそ困る反応でもあった。

「本拠地にいるうう!?!」

ナイトアイから告げられたエリの居場所は本拠地。ボディーガードにM s. ダークライがいるのだから戦力という意味であれば予想通りの場所だった。

しかしナイトアイがなぜその情報を得られたのか、そこらは集まった面々からすれば予想を超えたものだった。

「M s. ダークライと接触、予知しました」

「!!?!?!」

まさかの本人から聞いた情報であり、それも予知が終わっているというものだ。本人情報でも嘘の可能性があり得るが、予知をしたとなればそれも無い。確実性は十分なものだ。そしてついでに他の情報も得て来ていた。

「本来なら死穢八齋會の別のメンバーに遭遇し予知する予定でしたが、奴が割り込んできました」

「その結果が本拠地にいると?」

「ついでに奴自身は敵対する気はないとも……代わりに奴の子供たちが相手にするとも言っていました」

「子供たち?」

M s. ダークライの子供たち。戦闘能力までは聞いてないが、わざわざM s. ダーク

ライが口にしたのだ。プロヒーローすら凌駕する戦闘力を持つ程度はありと見るべきとナイトアイは見ていた。

が、ここには一度会った者もいた。力の片鱗だけ見たこともある、ファットガム事務所の人達が。

「電花と奪姫言う子や。小学生と中学生くらいやったな、エリいう子と友達なんか？」

「そう言っていました。友達だから奪われるくらいなら戦う、敵対するのは子供たちだと」  
「……やりづらいな」

イレイザーヘッドの言葉にA組の面子は頷く。無理やり友達を引き離すような真似だ、ヒーローがやるような行為とはかけ離れてすらいる。相手がヴィランでなければ、戦いすら拒否しかねなかっただろう。

だが躊躇いは自らの危険を呼び込むことになる。ナイトアイはそれを示すためにP Cの動画をプロジェクトAに示した。

「身体能力が尋常ではなく高いことは確認されています。これを」

民間で流れていた動画だった。二人の子供が大阪の100mを超えるタワーから跳び、空を駆けていく姿を収めていた。驚くべくは何も無い宙を踏み込んで飛び跳ねているところだ。

まるでオールマイトのようなそれであり、プロヒーローでもできるものは探さなければ

ばいない力だった。

「子供が……！……これを!？」

真つ先に驚いたのは緑谷。オールマイトの後継であり、空気砲を使うことで空を駆ける可能性には頭の中では到達していた。だがまだ到達できていない領域であり、動画の子供が可能にしているのは成長性が恐ろしくずば抜けているのだと分かってしまう。

「増強系の個性だな。しかも自在に方向転換とはセンスも飛びぬけてる」

「……いや、多分それだけじゃうで」

ロックロックの言葉にファットガムが一部否定をする。一度会ったからこそ、ここに載っていないことを知っていた。

「小学生くらいの子、降りてきてすぐに透明になつとつたM s. ダークライを見つけてんのやけど……あれは勘とかじゃなかったわ」

「素の身体能力でこれ、もしくは複数の個性を持っているってこと!？」

冷静なりユーキユウですら驚愕する事実。ファットガムの予想が本当であれば二人だけでも無視できない……どこるか最も危険視しなければならぬ相手になる。

「少なくともこれが二人、向こうの戦力に加わる。予定外の戦力ですがM s. ダークライ本人が来るよりは遥かにマシです。なんなら本人が戦わないと半ば明言してくれており、予知も示している」

M s. ダークライの参戦という最も絶望的な状況は回避できたものの、新たに強大な相手が二人増えたとなると話は少し変わる。

戦力が足りない可能性が出てくる。プロヒーローの数があるとはいえ増えた二人分は対策できる戦力を超過しかねないのだ。だがこれ以上戦力を増やすとM s. ダークライの気分が変わり参戦されてもおかしくない。

何より、予知ではそこまで含めて人数的に問題は無かった。予知を変えられると分かってしまったからこそ、判断に難しいところだった。

「M s. ダークライの最も危険な攻撃は超広範囲攻撃。二次被害、三次被害を考える必要が薄れたと考えればマシですね。少なくとも周囲への被害を抑えられる」

イレイザーヘッドの合理的な言葉にナイトアイの思考も冷静に戻る。

これはまだマシな未来なのだ。予知は変えられる、だが今ある未来は死穢八斎會の打倒までは既に決められているのだ。M s. ダークライの参戦もない。

そして……イレイザーヘッドの言う通り、周囲への被害は問題になる程は無かった。ならば、今は予知に従うのも悪くはない選択だ。

「令状も出ました。家にいる日時も分かっています。皆さん、日時になったらお願いします」

全員の顔が凜とした顔に変わる。そこにあるのは力を意志で補うヒーローの姿だっ

た。



決行当日、死穢八齋會のアジト目の前に警察とヒーローは陣取っていた。警察はともかく、ヒーローの顔は臨戦態勢そのものだ。

警察側は戦力の共有はできていたものの、相手が子供であると聞き舐めた態度になっていた。子供相手ならヒーローじゃなくても大丈夫だ、と言うように。

「じゃあ令状を伝えたら突撃で」

しん……と声が静かになる。ヒーローはこれから起きることに全力を賭さなければならぬと分かっていた。そして警察もそんなヒーローの雰囲気にもまれていた。

「突撃っ……っ!?!」

が、M.s. ダークライという存在は子どもだろうがヒーロー達を嘲笑う。

警察とヒーローが死穢八齋會のアジトに踏み込んだ瞬間、見せられた光景は想像の外にあるものだった。

「ジャンケンポイツ！あいこでしょっ！」

そこにあつたのは2 m以上はある巨漢と、中学生くらいの少女が高速でジャンケン



している現場だった。

巨漢は死穢八齋會のメンバー、それも片腕とすら言える程の戦力である活瓶力也だ。彼を抑えられれば明確に戦力が削れると言っている。そして少女は……見つけたらヒーローが即受け持つと言っていた程の者、奪姫だった。

「な、何だあ!？」

「俺が視る」

同様に足を止めた警察にイレイザーヘッドが横を走り二人を視る。消失の個性は二人から個性の使用を禁止し——そこでようやく二人は警察とヒーローに気づいた。

「あ」

「捕まえろお!」

個性が使えなければ、いくら凶悪なヴィランと言えど個性を使える相手には勝てない。プロヒーローと身体が強靱なだけの人の戦いになるのだ、活瓶力也には勝ち目は無く即座に捕縛されてしまった。

しかし、奪姫は個性を奪われたとは思えない跳躍力で家の屋根に上がっていた。明らかに増強系の個性を使ったとは思えない力に、聞いていたとはいえ警察とヒーローの足が止まる。

「りきやお兄ちゃん……タイミング悪かったね、ごめんなさい」

力也と奪姫の力は似通っている。個性の習熟という意味で、話を聞いたり個性を使ったりするのは奪姫にとって助かることだった。

おかげで個性の習熟も十分なものになっていた……のだが、力也からすれば尋常ではない速度で成長していた。力也も奪姫を殺す気で個性を使っていたが、それでも奪姫の活力を吸収しきれなかった。

そして個性の使い過ぎはどうあっても体力を消耗する。力也がちょうど体力を使い切ったタイミングが今だった。

「じゃあ私がやらないと……そういう約束だから」

奪姫は成生と約束を一つしていた。もしもタイミング悪く力也が動けなかったら、代わりになる程度にここの足止めをするようにと。壊理を奪われたくないなら全力でやってもいいが、そうではないならその程度でいいと。

「来るぞー」

少女は胸の前でパンと両の掌を思い切り合わせて音を鳴らす。それだけでこの場にいる全員が崩れ落ちる。

気絶した者や息すらできなくなっている者もおり、一瞬で鎮圧されるといふ異常事態だ。プロヒーローすら息を多少荒くしており、憔悴しきっている者さえいた。

「あ、ちよつと強過ぎた」

もう一度パンと音を鳴らすように手を合わせる。一瞬で全員に活力が戻り、気絶した者も目を覚ます。不幸中の幸い、死人は出ていなかった。

しかしこの十数秒だけでこの場にいる全員は理解した。目の前の少女——奪姫は、プロヒーローの力を優に超えている能力を持っているのだと。かの、M s. ダークライの子供なのだ。

「ごめんなさい、まだ練習が足りてなくて。りきやお兄ちゃんと練習してたんだけど、突然やってきたから……」

「これが、奪姫の個性……」

門の上まで跳び、警察とプロヒーロー全員を見回して奪姫は口にする。

「殺しちゃダメ、おかしーさんが言ってた。あとは……お姉ちゃんの友達だから、邪魔しないぞ」

「……戦力差がここまでとは。でも、ここに人数を割いてはダメでしょう。皆さん早く、奪姫はリユーキユウ事務所が受けます」

膝をついていたリユーキユウが立ち上がり門の上にいる奪姫を睨み付ける。同時に膝をついていた警察やヒーローは家の中へ走り出す。

「お姉さんが私の相手？ 私は誰でもいいけど」

「あんまり年上を舐めないことね」

全てを奪う魔王と、悪夢の墮とし子が牙を向く。生まれて半年も経っていない子供と、十数年以上を生きるプロヒーローの戦いが始まるうとしていた。



警察たちの突撃の号令と同時に、地下では成生とオーバーホールが壊理を連れて歩いてた。

成生は何もしていないが、オーバーホールの勘が鋭く警察が来たと察して早めに逃げ出していたのだ。但し成生も転送を使っていなかった。

「ヒーローがやってきたみたいですね。……電花がいれば十分でしょう」

「随分と舐めた真似をするな？壊理が捕まってもいいと？お前と壊理だけなら逃げだすのも容易だろう」

「あなたがいるじゃないですか」

オーバーホールの目が鋭く光る。力を見せろと言われているのは分かっているけど、無為に力を振るう主義ではない。

何よりオーバーホールには成生の意図が分からなかった。駒扱いするにしてもこんな無駄な使い方をするのは明らかに間違いだ。オールフオーワンを下した戦略眼がありながらそんな間違いをするとは思えなかった。

その様子に成生ははあと一つ溜息を吐いて言葉を渡した。

「この程度の戦力相手に時間稼ぎもできないならこれ以上契約は続けられませんよ」  
「……これを試練だと？」

元々オーバーホールが下手に出ていた側なのだ。だというのに要求ばかりしており、M.S. ダークライ側からは大した要求はしていなかった。

成生に不備があつたのは間違いないが、オーバーホールはそれ以上の成果は得られたのだ。ならばそれなりの対価を示すべきというのが成生の考えだった。

その対価こそが試練。下に付くならそれなり以上の力か、情を惹く意志を示せ。たったそれだけのことだった。

「私の下に野心を持った上で直接付くなら力を示しなさい。子供たちのように私の情を引いて付くのは構いませんが、そんな人は野心を持ちませんし」

「利用価値を示せてことか。なぜこんなタイミングで契約更新を？」

「こんなタイミングだからですよ」

ヒーローがやってくるタイミングだからこそ契約更新という名の試練を、次の更新するかどうかの査定扱いにする。

ヒーローがやってくれば壊理を渡せるため、どう転んでも成生からすれば問題は無い。撃退できたならそれはそれで次にヒーローがやってきた時にするだけだ。

「……M.S. ダークライは狡猾。知っていたはずなんだがな」

「油断するからですよ。利用できるものは利用するのがヴィランです」

成生はM.S. ダークライとなり目的を果たしたからといってもヴィランとしての経験や戦略眼を失ったわけではない。使うべき時には使うし、使う必要も無いなら使わないだけだ。

ただそれさえも第六感染みた直感による判断で分かってしまっただけだ。傍から見れば気まぐれにしか見えないが、成生本人は本人からして最適な行動をとっているのだ。た。

「逃げてもいいですし、とにかく壊理ちゃんを奪われないこと、条件はそれだけです。私が見学でもしましょうか」

「はっ、お前のお気に入りのヒーローを見たいだけだろうが」

ふふふと成生は微笑む。成生には壊理の安全確保と切島の活躍なら後者の方が大事なのだ。なんなら今回の騒動での一番の価値は烈怒頼雄斗のデビューとすら見ている節さえあった。

壊理はもう個性が十分に使えるのだ、ならばもう問題にはならないと言える。M.S. ダークライとしてもあととはヒーローに何らかの形で渡すだけであり、重要性は明確に落ちていた。

もつともそれは成生からすれば、の話だが。

「私にとつては今はそちらの方が大事ですし」

「今は、か。なら利用価値を示すことにしよう」

オーバーホールがぐるりと振り返り引き返していく……壊理も連れて。

まるで決別のように見える雰囲気だったが、そういう訳でもない。オーバーホールはただ価値を示しに行くのだ、一つの死穢八斎會というヴィラン組織の価値を。

「電花、壊理ちゃんと手を繋いでいるのよ？守ってあげて」

「うんー」

壊理を連れていく都合上電花も傍に寄り添う。友達なのだから当然のことだ。

成生が電花にそう声をかけたところでオーバーホールは少しだけ立ち止まる。一つだけ疑問が湧いて出たのだ、自らの邪魔になる可能性を排除する必要があった。

「お前は どうするんだ？」

「君如きが私に口を利くか」

返ってきた口調と言葉に思わず目を見開く。明らかにM.S. ダークライとも成生とも違う言葉に、オーバーホールの思考は固まる。

邪悪な瞳をした成生の姿をした少女は、頭をブンブンと振ってオーバーホールから隠すように背を向けた。

「……………めんなさい、好きにさせてもらおうわ」

本心から出たと思わせる言葉は間違いなく成生のもの。オーバーホールにも、電花にもそれは分かった。

しかしそれは逆に、一つ前に出た言葉は別人のものと思わせるには十分な行動だった。

「お前は……誰だ？」

既に転送で姿を消した成生に言葉は届かない。暗闇に消えていく言葉は、M.S. クライという悪夢が暗闇に消えていく様子を示しているかのようですらあった。



## 死穢八齋會&amp;墮とし子vsヒーロー その1

リユーキユウが個性を解放し竜の姿に変わっていく。本来なら姿を変えるのも躊躇う個性なのだが、目の前の敵に出し惜しみでできる余裕など無かった。

「おつきい……竜?」

「子供だから知らないのかしら? これでもプロヒーローのビルボードにだって乗ってるの」

ジーつとリユーキユウを見つめる奪姫。初めて見る竜という存在へ観察する瞳を向けていた。

そんな分かりやすい隙を見逃すのはプロどころかインターン生ですらあり得ないことだった。重力を軽くし音もしない動作で背後に近づき、麗日——ウラビティは蹴りを、ねじれ——ネジレチャンは波動を放つ。

「竜と他に二人……ううん、三人?」

が、振り返ることすらせずに奪姫は避けた。それどころかうラビティが背中に隠していた蛙吹——フロツピーまで見抜かれていた。

「背中に隠してたのに!」

「んっー！」

せめてもとフロツピーは舌を伸ばして顔を殴りつけるも、空に跳び奪姫は避ける。

空に跳ぶ。明確な隙であり後は自由落下するだけの好機だ。リユークユウもネジレチャンもここだと狙いを定める。

「そっー！」「えいつ！」

「ほっ」

一瞬だけ飛び尻尾を叩きつける、波動を放つ、そのどちらもが何も無い空間を蹴り地上に降りてきた奪姫には当たらなかつた。

電花ができていた『空を蹴り跳ぶ』身体能力の操作技術まで到達しつつあつたのだ。集中できていれば空でさえも自由に走れる奪姫からすれば落下は隙ではなかつた。

「竜になる、重さが変わる、舌が伸びる、エネルギーを扱う……で合ってる？」

「さあ？ 答え合わせは自分でしなさい」

地上に降りてきたリユークユウとその横に立ったネジレチャンにニコリと奪姫は笑う。戦う意志があるのかすらよく分からない笑みだが、二人が戦闘態勢を解く訳も無い。

奪姫の笑みに狙いなどない。子供である奪姫はただ感情のままに行動してるだけに過ぎなかつた。

「ん、おかーさんもきつとそう言うと思う」

口に出す言葉も感情のまま、素直なものだ。そして素直というのは、焦りといった感情も分かりやすく表情に出ることも意味する。見えていないものには、驚くように。

「油断し過ぎだよ」

「え!?!」

見えないフロツピーの舌が空から振り下ろされていた。カエルの個性で保護色のように空の色と同じになっていたのだ。いくら奪姫といえど反射速度はまだ身体能力任せであり扱いきれしておらず、不意打ちが成立していた。

咄嗟に身体を捻り躲した奪姫だが、代わりに焦りから動きの繊細さが一瞬で無くなる。

「ナイス!」

「わわっ!?!」

態勢を崩した奪姫へネジレチャンが隙の間に溜め込んだ波動を範囲を広げて放つ。威力は減衰するが、狙いは当てる事には無い。

予想通り、範囲外に逃げようと上に跳ぶ、そこを狙ってくれる……リユーキュウへのサポートが狙いだった。

「はあっ!」

「っ!？」

両手を合わせ、振り下ろして吹き飛ばし勢いのままに地面に叩きつける。地面に埋め込まれる程の勢いで奪姫は叩きつけられ土煙がまう。

完全に動きを誘導して当てた一撃。だからこそ確実に狙い、間違はなくダメージを負わせる威力を込めた拳を振り下ろした。コンピネーションが上手くハマった流れだった。

「いいのが入ったはず——嘘でしょ?」

それなりに渾身の威力ではあった。全力の7割は間違いないと言い切れる拳だった。個性で質量が増加した破壊力もあった。鱗で刻まれる傷もあった。

「おねーちゃんと遊ぶ時の方が痛いけど勢いはこっちの方が上、かな?」

土煙から出てきた奪姫の姿は無傷。腕が少しだけ傷ついてはいたが、それも目視している間に再生していた。

活力吸収で警察もヒーローも一度吸っている。そして全部返したわけではなく……一部は奪姫が奪ったままだった。活力があり超再生が働けば負傷は問題にならない。

超再生の個性を持ちながら活力吸収を使えば、敵対者が死ぬまで戦い続けられる。奪姫の最も恐ろしい戦い方だった。

「……よし、練習の成果を見せてあげる」

そしてそれは個性を覚えたての頃からできたことであり、使い方を熟知した今のことでない。

奪姫はくるりと振り返り視線をウラビティに向け、拍手を一つした。

「え」

「離れて！」

リユーキュウが突き飛ばそうとするも位置が悪かった上にリユーキュウの動きは音よりも遅い。間に合う筈もなかった。

手を叩き音を鳴らす。それだけでウラビティの身体に衝撃が走ったようであり……全身から力を奪うような暴力がウラビティを襲っていた。

活力吸収は何も全身から奪うだけにとどまらない。細胞の一つ一つ働きかけ、内臓の一部の細胞の活力だけ一気に奪うことすら可能にする。その結果はどうなるか？

答えがこれだ。細胞が活力を失うとは動きを止めることに等しい。そして脳は、一気に力を失う細胞を見れば錯覚を引き起こす——身体の内部が傷つけられたと錯覚したのだ。

かのオールマイトですら身体の内部にダメージを受ければ致命傷になる。インターン生ともなれば戦線復帰は困難になる致命傷だった。

「ウラビティ！」

がふっと口から血を流し、膝をつく。フロツピーが助けに近寄ろうとするも、視線がそれを許さなかった。

「まず一人、次はあなた」

蛇に睨まれた蛙のように動けないフロツピー。リユーキュウとネジレチャンが盾になるように間に割り込むも、視線の色は変わっていないかった。

既に奪姫の視界から消え失せたウラビティ——だが、瞳にはまだ強い光が灯っていた。



ヒーローと警察が死穢八齋會の拠点に雪崩れ込む。組員たちは抵抗するものが大半であり、個性を使った者から次々と捕らえられていく。

「暴れないでください！」

「道を空けて！後先考えずに暴れると後悔するよ！」

警察やヒーローの警告が叫ばれながらも組員たちは各々の個性を使って抵抗する。とはいえ多勢に無勢、外にいた奪姫のように突出した武力がいなければ一気に無力化されていくだけだ。

だがそれも進行方向にプロヒーローすら止める突出した武力が無ければの話だ。仮に相当する人物が居たのなら考えなければならぬ危険があった。

「組総出で時間稼ぎ……いや、外にはあいつがいる。大丈夫なのか!」  
「怪しいそぶりどころやない!けど下手すれば挟み撃ちや!ナイトアイ!」

最も危ないのは正面と背後からの挟み撃ち。リューキウ事務所が止めているとはいえ、奪姫も注意をリューキウ事務所に向けているから出来ていることだ。

仮に奪姫が挟み撃ちを理解していた場合は詰みになりかねない。

「このまま進みます!」

だがナイトアイは進む選択をとる。予知した未来はまだ先にあるのだから。

「どこから情報が漏れてたのか?……いやに一丸になってる。……いや相手が相手。個性で分かってもおかしくない」

「もっとスマートな方法ができるだろう。これは昔ながらの結束に従ってるだけだ」

サンイーターの質問に警察の率いているリーダーが返答する。警察にも死穢八齋會の情報は伝わっている。M s. ダーククライという苦渋を舐めさせられた相手がいることも。

今回は敵対しないという話だったため警察も参加することになったが、もし戦うことになれば即逃げるように指示されていた。そうでないと参加を拒否する者すらいるのだ。死穢八齋會のメンバーだけ取り押さえる、今回の警察の仕事はそれだけだった。

「この騒ぎなのに治崎や部下が姿を現さない。今頃地下で逃走準備といったところか」

ただ警察は馬鹿にはできない職業だ。情報を分析する能力ならプロヒーローでも専門でなければ敵わず、数という暴力を持っている。M s. ダークライというエラーが無ければ優秀さは十二分に発揮できていた。

「忠義じゃねえやそんなもん！ 子分に責任押し付けて逃げ出そうなんて漢らしくねえ！」

「んんー！」

烈怒頼雄斗の憤慨にファットガムも応える。友情や漢らしさを大切にする切島には許せない行為であり、近しい性格であるファットガムも同じ気持ちだった。

猛る感情を持つ面子を一目見、ナイトアイは廊下の先にあつた生け花の前で止まる。

「んんーだ」

予知で隠し扉の仕掛けを既に知っているナイトアイは手早く仕掛けを解いていく。数秒とかからずに扉は開いていき——

「っ！バブルガール！」

「はいっ！」

——同時に組員が数人出てきた。しかし既にナイトアイのサイドキック、センチピードとバブルガールは予測できており、即座に対処へと移っていた。

「二人頼む！」



「はい！」

センチピードはムカデの個性で捕らえ、バブルガールは個性の泡で目を潰して無力化する。だが暴れる組員に二人は十数秒以上は残らざるを得ない判断を下す。視線だけでそれを受け取ったナイトアイは即座に前進の判断を口にした。

「ここから地下だ！もうすぐだ急ぐぞ！」

地下への階段を下りていく警察とプロヒーロー、そしてデク、烈怒頼雄斗、サンイーター、ルミリオンの四人の学生。

走る彼らの前に現れたのは壁だった。分かりやすく行き止まりだと示すような……しかし灯りを照らしてみれば歪な形状であると分かる壁だ。

「行き止まり!?!」

「俺が視てきます」

ここには壁を透過できるルミリオンがいる。迷わずに進む選択肢を選べるのだ。

透過ですり抜け先の通路がさつきまで走って来た道と同じ様子であることを確認するとルミリオンは再び壁をすり抜けてナイトアイ達と合流する。

「壁で塞いであるだけです！ただかなり厚めです！」

ルミリオンの報告に、ならばとファットガム達プロヒーローが壁を壊す構えをとる――よりも早く、行動に移っている二人がいた。

「来られたら困るって言ってるようなもんだ！」

「そだな！」

デクと烈怒頼雄斗が蹴りと拳を同時に放つ。学生といえどインターンで十分に戦えることを示している二人だ、戦闘能力だけで言えばプロヒーローの足元に間違いなく届いている。

『ワンフオーオールフルカウル！シユートスタイル！』

「烈怒頑斗裂屠！」

合わせられた一撃は壁を壊すには十分な威力。ガラガラと崩れ落ちる壁に、プロヒーロー達は満足気な顔をしていた。

「ちったあやるじゃねえか」

「先越されたわ」

学生だからとお荷物扱いしていたプロヒーローもいたのだ、認めさせるには良いアクシヨンだった。

しかし、今の壁はあくまで物理的な壁なだけだ。そしてその壁は……作られたものだ。

再びヒーローと警察達が移動を始めようとした矢先、地下への階段は地下を形成する

コンクリが粘土のようになねり、閉じられる。さらには進むべき道さえも形を変え、道を道で無くしていく。

「道が……これは……!?!」

もはや彼らが居る場所は地下通路ではなく、地下迷宮となりつつあった。

「治崎じゃねえ……逸脱してる!できるはずば……本部長「入中」!」

それを可能とする個性「擬態」。物体に入り込み操ることができる個性だ。

本来なら冷蔵庫程度のサイズまでしかできないのだが、個性をブーストさせる薬を使用することで強化していた。

「何に化けてるかと思つたらまさかの「地下」。こんなん相当身体に負担かかるはずやで。イレイザー、消せへんのか?」

「本体が見えないとどうにも……」

操る、発動するタイプの個性であるためイレイザーヘッドが視れば解除される。入中は身を守るために姿を見せてないだけだったが、そのお陰で幸運にも個性を即時解除されて鎮圧されるという最悪を免れていた。

そしてヒーロー側にとっての最悪を予想できてしまう者もこの場にはいた。

「道を作り変え続けられたら辿り着けない……時間稼がれたら逃げられる……いやそれどころか俺達も!」

「環ー！」

サンイーターが最悪の予想に身を縮めていた。が、ルミリオンがその背を叩いて鼓舞させる。長い付き合いだからできることだった。

「そうはならないし！おまえは！サンイーターだ！

そしてこんなのはその場しのぎ！俺は行ける！」

透過して一人先へと走るルミリオン。透過の個性ならどんな壁であろうと関係ない、ただ先へと進むことができるのだ。

「先に向かってます！」

実力を知っているナイトアイは止めない。そしてナイトアイが止めなかったことから他のヒーローや警察達も相応の実力を持っているのだと判断する。

ルミリオンの姿が壁の先へ消えたとはほぼ同時、地下がさらにうねり——地面に大穴が開いた。

「！！！！」

空を飛べる個性もない上に密集していた。しかも飛べたとしても地下の形状を弄り回せる相手だ、大人しく落ちる以外に選択肢は無かった。

不意打ちにも近い落とし穴へ先頭を走っていた面子全員が落ちていく。しかし半数以上がプロヒーローであり、着地失敗しそうになる警察をフォローする人数は足りてい

た。

しかしただの落とし穴でなかった。負傷者が出れば儲けものであり、本当の狙いはそこではない。

「空から国家権力が……」

「不思議なこともあるもんだ」

「……」

待ち構えていたのは三人のマスクをしたヴィラン。地上で足止めしていた組員とは明らかに違う雰囲気を纏った者達だった。

違うのは目つきといったものだけではない。向けてくるのは明確な殺意であり、確実に殺人経験がある者の視線だった。

「よつぱど全面戦争したいみたいやな……」

武闘派であるファットガムからすれば望むところだ。そう口にし、一触即発となったところに……太い縄すら超える大きさの蛸足が数本伸び、三人のヴィランの上半身を拘束した。

「こんな時間稼ぎ要員、俺だけで十分だ」

天喰環——サンイーターだ。ルミリオンという太陽に照らされたヒーローは、太陽さえも喰らう程に実力を持ち……そして今だけは、太陽へと心が追い付く。

一瞬で三人を拘束したサンイーターだが、油断していなかった。三人の情報を既に知っており、この程度では止まらないと分かっているからだ。

「何言ってるんすか!?!協力しましょう!」

「そうだな、協力してもいいぞ。一人二人残ってくればそれでいいからな」

烈怒頼雄斗も学生とはいえ雰囲気からこれで終わらないと悟り、先輩であるサンイーターに助力を告げる。

そして三人の内の一人、金髪のヴィラン——窃野が余裕を持った口調で煽っていた。こんなものいつでも外せると言わんばかりの態度で。

その態度に、言葉に、ナイトアイは疑問を持った。

「——?」

拘束されてるにもかかわらず余裕があることではない。力を持つヴィランなら『慌てない』ことの重要さを知っているからだ。

しかし目の前の三人はいつ無力化されてもおかしくないのに、余裕があり過ぎた。捨て駒の死兵ならもつと熱くなるがそうでもない。そして言葉からして捨てられた訳でもなく明らかに駒として扱われている。

ナイトアイの疑問の答えを待たず、サンイーターは宣言を声に出していた。

「窃盗」 窃野

“結晶” 宝生

“食” 多部

俺が相手します」

この場に残り、三人を倒すのは自分だという宣言を。

「こいつらは相手するだけ無駄だ。何人ものプロがここに留まらされてる状況がもう、思うツボだ」

「ひゃ」

烈怒頼雄斗の声を遮り、サンイーターは叫ぶ。先輩である意地、ヒーローとして烈怒頼雄斗より長い経験……そして、ルミリオンの横に立つ者である誇りを持った声で。

「俺なら一人で完封できる！」

ヒュウという口笛が三人の方から届く。上半身だけ拘束されても口や足は動く。挑発にも近い言葉であるというのに、やれるなら受けて立つと言っているようだった。

「お前が残るなら他のやつらは行っていいぜ」

明らかな不穏な言葉。まるで狙いがズレておりヒーロー側が何か動かされていると思わせられる……が、ファットガムとナイトアイの声はほぼ同時だった。

「行くで！」

「……行きましょう」

サンイーター一人を残し全員が部屋から走って出ていく。迷っていた烈怒頼雄斗もフアットガムに背中を押され仕方なしに連れられ出ていく。

「フアット！ ナイトアイさん！ 先輩一人残すなんて何考えてんすか!？」

烈怒頼雄斗に問われた二人の表情は凜としたものだった。それだけで烈怒頼雄斗と彼らの違いが、分かりやすく明確に表れていた。

即ち——プロであることだ。

「あいつの実力はこの場にいる誰よりも上や。ただ心が弱かった……そんな人間が「完封できる」断言したんや。ほんなら任せろしかないやろ」

「やつらの目的が切り替わっていることの確認です。指示が出てるなら私達を逃がす可能性が高かった」

プロはプロ同士を信じる。裏打ちされている実力、専門とする能力。各々が得意とする分野においてプロと呼ばれる程に高められている力があるのだ。彼らはそこだけに無条件の信頼を寄せる。

ならばプロが信じ託す人間に、信頼を寄せないことなどあり得るはずもない。

「時間稼ぎじや……」

「ならあんな言葉は出ない。ほぼ間違いない、治崎は戦うために戦力を割り振り始めて



いる」

三人から得た情報からナイトアイは既に戦略分析を始めていた。地上の様子からしてただの逃亡ではないことは分かっており、次の手がこれだったのだ。未来予知で見えていたのはあくまでキーとなる場面だけ。見えていない部分もあり、これもその一つだった。

「三人は時間稼ぎのフリをしただけ。実際の目的は我々の分断です」

「にしちや上の連中が明確な攻撃してこなかった。よくて足止めレベルだったぞ？」

ロッキロッキが当然の疑問を口にする。地下に入ってからと地上とで動き方が違うのは間違いないが、違い過ぎるというのが問題なのだ。

同時に、ナイトアイの分析が行き過ぎており間違っていないかの確認でもあった。

「ええ……つまり、命令がそこまで行き届いていなかったと考えられます」

「急に方針転換したんか？」

流石にそれは考え辛いとファットガムの顔に出ていた。

ヴィランは一つの目的のために突き進む。道を変えようと最終的に辿り着く場所は同じ。だがこの方針転換は目的すら捻じ曲げかねない方向ですらあった。

何せ正面衝突だ。オールオアナッシングの戦いになるともなればヴィラン側からすれば最終目標にたどり着く手前の手段なのだ。

最終手段とも言えるが、使うのは間違いなく今ではなかった。しかし決断させる要素は——ある。

「治崎がそんな簡単に考えを変えとは思えない。エリをあれだけ上手く監禁していたならば慎重な男だと分かります。だとすれば答えは一つ、M s. ダークライが変えさせた」

M s. ダークライというヴィランの頂点、組織一つ犠牲にすることなど容易にできよう存在だ。ヒーローにもヴィランにも傾く天秤は、同じだけの戦力がぶつかるなら本来何もしない。

だが劣勢ならば、どちらかに肩入れするのだ。直接的か間接的かは問わず、形を変化させて必ず介入する。

「奪還されるくらいなら迎撃しろということか」  
「おそらく」

電花と奪姫のお遊びを足し、オーバーホールが全力で当たればヒーローが不利ではあれどほぼ互角になる戦いだ。ここに壊理の奪還が勝利条件となればヒーローが有利になる。故にどちらかが逃亡さえしなければ天秤は傾かない。

だからこそ傾いた天秤は劣勢と誤魔化すオーバーホールを戦わせようと働いたのだった。

ナイトアイは見抜いたわけでも予知したわけでもない。予測から仮説を立て、依光成生危険要素を加えてさらなる予測を立てただけだ。

そして証拠が、先ほどの三人だった。

「サンイーターを置いたのは狙いを明確にし、かつファットの言葉を信じたままです」

サンイーターを置き三人が抜けていく者達に何もしてこないならナイトアイの予測が正解であり、逆に不意打ちしてくるようなら予測は間違이었다と言えた。

分断して迎撃する。戦力配分の手の打ち方としてはこれ以上ない正解だ。三対一なら勝ち目があり、一人でも分断できればいいならああいっただ行動になる。まず分断だけを考え、そこから戦う。

さらにサンイーターとの勝負に勝てば挟み撃ちにもなる。将棋の一手のように、次へ繋げるための駒でもあった。

「デクも分かったのか、ギリと歯を鳴らしナイトアイへ言葉を飛ばす。」

「狙いが分断なら固まって動くべきでは？」

「逆だ。あえて半分だけ狙いに乗る」

返ってきた言葉は、もはや司令塔と呼んでも間違いいではないナイトアイの次の手だった。分析が終わったのなら対策を打つ、当然のことだ。

「命令が行き届いているのは間違いなく数少ない。さっきの三人からして十人もいない

はずだ……なら命令を受けている面子さえ捕えればいい。彼らは死兵のようだがそうではない様子だった……M.S. ダークライの魅了か？まあそれはいい。

命令を受けた面子さえ捕らえた後なら警察の物量で片付けられる」

「エリちゃんはどうするんや!? スピードが肝心とちやうんか!」

ファットガムの言葉にナイトアイはギリッと歯を鳴らし、頷く。

先んじて決めていたことであり目的、そしてそのための戦略だ。が、前提が崩れたとなれば変えなければならぬ部分もある。

「もちろん大事です。ただ向こうが逃げる気が無いのなら……もはやこれは奪還のための戦闘じゃない、全面衝突に近い。ただ私達が入り込み連絡が上手く出来なくなっただからこそ、小規模な全面衝突に出来たとも言える。

ならあととは一人ずつ確実に捕まえる。なので……分断されそうになったら二人組以上での行動をお願いします

各個撃破が怖いのは間違いない。けれどそれは相手も同じこと」

「……バディか」

ロックロックの声に頷くナイトアイ。一人で十分な実力者ならばヴィランの2〜3人を相手にしても問題ない。

だがファットガムのような武闘派はヒーロー側の面子にはあまりいない。故に最も

恐ろしいのは戦闘が得意でない者が単独で孤立することだ。

「全員で待ち構えている可能性は先程の三人で消えた。ならあとは罠のようにつかの場所に忍ばせていると考えられます」

複数には複数をぶつける。それが例え戦力的に負けていても、時間稼ぎ・足止めにはなる。最も恐ろしいのは即鎮圧されることだ。

そしてここまでの理論は死穢八斎會にも適用される。実力者は単独でも問題なく、そうではないものは複数で戦う。ヒーローから見たら恐らく最も強いと予想できる実力を持つヴィランはオーバーホール、彼一人だけは自由にさせられない——が、ヒーロー側からは一番の実力者が既に向けられていた。

「二人組なら相手がどれだけ数がいっても即鎮圧されることはない。そして全面衝突でもっとも厄介となる治崎は……」

迎撃するなら間違いない治崎は待ち構えている。そして真つ先に向かったのはミリ才だ。例え一人であっても我々が追い付くまで十分に時間を稼いでくれる」

ナイトアイの話はそこで終わる。戦略として間違いないものであり、作戦の方向を決めるには十分だった。

警察のリーダーがふつと笑い、ナイトアイに一言だけ零す。

「信じてるんだな」

「もちろん」

ナイトアイの即答。ファットガムがサンイーターに向けたように、ナイトアイがルミリオンに多大な信頼を置いている証拠だった。

(頼んだぞルミリオン……!)

治崎の横にM s. ダークライがいると分かっているとしても、ナイトアイにはルミリオンを信じるしかなかった。予知では間違いなくM s. ダークライが手を出さないと分かっているとしても、変えることが可能な相手だ。

弟子を、予知を、信じて走る以外に今ナイトアイにできることは何もなかった。

## 死穢八齋會&amp;墮とし子 V S ヒーロー その2

戦略が変わったからと言って目的は変わらない。エリを取り戻すための歩みはまず、数という暴力を失った警察を再び機能させるところからだった。

「まずは合流だ、上に戻るろう」

実力者でも警察の数には圧殺される者は多い。事実、命令を受けた死穢八齋會のメンバーは数に押されれば負ける者もいた。残り数人しかいない相手であり、警察の数で一人以上を相手にできるなら越したことはない。

（分断は一人だけか……一人ずつ分けたかったが、警戒されているのは違う）  
当然入中は阻止しようとする。警察が合流する前に分断し、各個撃破を推し進めた  
い。

だが入中は迷っていた。本当に受けた命令をそのまま実行するだけでいいのかと。入中としては時間稼ぎと、可能であれば圧殺まで行いたかった。

「妙だな……地下の形状が変わらない」

ヒーロー達に自らの個性が分析されているとしても、隠れている以上そう簡単に地下迷宮が破られることは無い。破られないならば時間制限はあれど、目的を達成すること

は容易だ。

オーバーホールから受けた命令の達成という目的なら、の話だ。

(残り時間はまだある。しかし受けた命令は……。……。ならば……。確実に、全体を小分けにする。話はそれからだ)

自らの実力を考えればもつと先に行ける。分かっただけが……。不安要素も大きくあった。

「潜り込んで操っているとすれば……。操る時に顔を出している可能性がある」

「確かになあ。イレイザー、狙えるか?」

「出てくるときが無いと何とも……」

相手はヒーロー。油断などできない存在であり、彼ら全員を同時に相手取っているのだ。慎重な男は不安に押し潰されていた。

(いや、あいつだけは確実にやらねば……。たとえ、俺が負けたとしても! ザイラン 敵連合に頼ったとしてもだ!)

入中は自らの欲求を捨てた。オーバーホールについていくことになり外道に墮ちたと認識した彼は敬愛する親分を見捨てたのだ、もはや退路は無い。退路がないなら盲目的にオーバーホールを信ずるだけだった。

入中はブーストされた力を全力で行使する。圧殺できるだけの力はあるが、それは抵



抗されなかつた場合だ。迎撃すると命令された以上、警戒すべき相手であると言い換えでもいい。さらに言い換えれば、無理やり圧殺するのは困難極まりないことであるとも言える。

入中は一つだけ必ず達成することを決めた。これだけは必ずやれと命令された内容を。

「また道が!」

命令……それはヒーローをいくつかに分断し、最も危険な者を見極め——オーバーホールを除く自陣の最も実力のある者の下へ送ることだった。

さらに孤立はさせなくていい。むしろ孤立させようとすればヒーローは勘づき、余計な力を発揮すると説明を受けていた。あくまで一人でも分断できればそれでいいと。

大雑把な指示だったが、結果的にナイトアイの戦略の上をいつているものだった。一つだけ問題があるとするなら……ヴィラン同士の連携と、ヒーロー同士の連携には差があるということくらいだ。

「危ねえ!」

「アカーン!」

牽制気味に最も危険な者へ放った地下のうねりは二人の分断に成功し、武闘派な者達へ送り込む。かばった二人は幸運にもヒーローでも武闘派の二人だった。

「烈怒頼雄斗！フアットガム！」

「二人だけじゃない……まだ道がくねって……一気に分断する気か！」

入中は本来ならば全員を圧殺できるだけの力を使い、ヒーロー達の頭上から地下を柱のように形状を変え散らすように放つ。

当たれば押し潰される質量が相手では今のヒーロー側に対抗できる者はいなかった。ヒーロー全員が回避に徹し、散らされていく。

「くっ」

「これで……！どうだあ……っ！！」

柱で散らばったところへ壁を落とすように展開し、さらに壁を厚くし完全に分断する。操作しきった地下は自らの周囲すら利用し、散ったヒーローを分断するに成功していく。

一つだけのミスを残して。

「マズい……そこっ！視えたっ！」

「しまっ！」

自らの周囲すら使い操作しきったのだ。操っている中心を視えたイレイザーヘッドに個性を消されていた。前のめりの態勢になっていた影響で両手足を埋めたままの宙ぶらりんになってしまう。

だが、既に操作は終わっており地下のうねりは収まらない。届かない距離まで分断された者達は入中の手中だった。

「デクー」「ナイトアイ！」

身体能力が強化できてしまうがゆえに避ける幅が大きくなるデクの手を、ナイトアイが取り分断される。

「マズいっ！」

イレイザーヘッドも手を伸ばそうとしたが狙われているのが自分だと察し、集団との合流の合理を選ぶ。と、同時に宙ぶらりんになっていた入中へ捕縛布を伸ばし手元へ移動させ捕獲した。

分断された代わりに、一時的にだが地下迷宮を壊したのだ。先に入中が二度と地下に潜らないことを優先していた。

「分断はされきってしまったが……こいつは捕まえられたな」

イレイザーヘッドの足元には個性をとおうともかく入中の姿。抹消され使えなくなったがブースト時間だけは続いていた。ハイになったが個性が使えないという苦痛が身体に走る。

もつとも、イレイザーヘッドの選択が正解だったのかは分からない。地下迷路を壊した先にあつたのが、それ以上の危険だったのだから。

「あなたが、わたしのあいて?」

「危険なのはお前か」

悪夢の墮とし子の長女と一人の死兵が、そこにいた。

分断され、相対する者が決められた戦い……正面衝突と呼べる戦いだ。複数同士のヒーローとヴィランの戦い、マッチアップはかくして決められた。

「デブに、赤い髪か」

「落ち着いて戦え」

「二人……!」

「ええ度胸や!」

入中がいた場所よりも更に地下の階層にて……死穢八齋會の鉄砲玉「八齋衆」の二人、  
乱波らつぱ肩動けんどうと天蓋壁てんがい慈へきじ、烈怒頼雄斗とファットガム。

「あは!デクくんだあ!」

「らつぱの兄さんやってくださいなあ!」

「トガヒミコ……!」

「お前はヴィラン連合の……」

分断されたが近い場所に敵ヴィラン連合協力者トガヒミコとトウワイズ、デクとナイトアイ。

「入中は落ちたか、だけどお前は俺たちだけで十分」

「ぎゃくー！わたしがメイナー！」

「助けは呼べるが一気に分断されて衝突か……貧乏くじ引いたな」

「俺を貧乏くじって？警察もいるんだぞ？」

「八齋衆」酒木泥泥さかきでいどろと……オーバーホールを除く面子において最強の存在、M s. ダーククライの墮とし子依光電花、イレイザーヘッドとロックロックに警察の大多数。

「治崎……お前だけか？……」

「俺をその名で呼ぶな」

そして、ヒーローとヴィランの辿り着く最終地点にオーバーホールとルミリオン……  
そして壊理。

「M s. ダーククライはどこにいる？」

「俺が知りたいところだ。壊理を放って何してるんだか……お前を殺せば来るかもしれないな」

M s. ダーククライという存在はおらず、いるのは純粋なヴィランとヒーロー、そしてヒーローが保護すべき対象だけだった。

「そうか……エリちゃんは保護させてもらう」

「やってみろ」

分断された地下でヒーローとヴィランの戦いが始まった。

——とある一部屋だけは絶対不可侵とされた上で

地下の奥深く。分断された地下よりもさらに深い深層の地下。そこにたつた一つの部屋があった。あるのは通気口だけであり、入口も出口もない。入るには何かしらの個性が無ければ入れない部屋だった。

まるで、M s . ダークライのアジトを彷彿とさせる作りだ。

「はあっ……はあっ……何……これ……抑え……きれない……」

一人、完全に隔離された部屋に……身を震わせる少女の姿。オーバーホールと話した後、この部屋に移動し、移動したとほぼ同時に背中から赤黒い蒸気を上げていた。異常

であり身体が破裂しそうな現象、それを少女は身体を無理やり抑えつけていた。

彼女の個性は貴重かつ強大だ。強大さで言えばオールマイトやオールフオーワン、貴重さで言えば壊理でさえも容易に飛び越え、社会を一変させられる個性だ。そして……その片鱗を使うだけでM.S. ダークライというヴィランになれていたのだ。

社会の天秤という評価は伊達ではなく、むしろ過少評価とすら言える程の個性だった。

本来あるべき社会にいれば彼女は、オールマイトやオールフオーワンを差し置いて救世主や英雄と呼ばれる存在なのだ。少女の姿であろうと搦め手など一切使わないでそれだけの活躍ができる程の個性を、正しく有していた。

それだけの個性なのだ。強大で貴重で……同時に、危険な個性だ。普通という概念からは真逆とすら言える。

「はあっ……はあっ……!!」

抑えられずに胴体が弾け飛ぶ——幻覚を見る。

まるで自らの中に何者かが大量に存在し、身体の中から貫いて出てくる——幻覚を見る。

水が入ったコップを落としたら砕け散るように自らがバラバラになる——幻覚を見る。

「私に……何が……起きてるの……？」

少女——依光成生から発せられていた熱気は少しずつ収まっていく。異常な熱は収まっていくものの、落ち着いたのは戦いの一部が終わった後だった。



分断される少しだけ前、正面衝突となると戦略が決まった戦い——1対3の戦いは既に始まっていた。

サンイーターと三人の戦いは実力差を連携で埋める戦いだった。

実力で優っているサンイーターの触手が力を強める寸前に窃野が隠していたナイフで切りつけ、サンイーターが引いた瞬間に宝生が結晶の身体で体当たり、反撃を多部がフオローし宝生の体当たりを確実に当てる。

「連携……っ！」

「いいだろ？ゴミにはゴミなりの連携ってのがあるのさ」

体当たりし、結晶に身を包んだ宝生はさらに右手を固め、威力を高めた拳を振るう

……が、拳がサンイーターの顔に当たるとは無かった。

「諦めろ。俺は……太陽すら喰らう者サンイーターだ」



蝟の膂力を『再現』し、結晶による傷は手に覆わせた甲羅で防ぐ。個性無しの膂力では負けているサンイーターだが、タコの膂力を『再現』すれば関係ない。

さらにサンイーターは自らの個性を解放していく。喰らったものを力に変える個性を遺憾なく発揮する。

『サイズ可変』

『複数同時再現』

『特徴自由選択』

サンイーターの雄英で鍛え上げられた二年半の結晶。インターンも含め、プロヒーローと比較しても遜色ないトップレベルであるルミリオンすら認める技術の集合体。

それが今、心が太陽に追いついたことで『再現』される。

「混成大夥キメラ・クラークン!!!」

巨大なタコの触手がサンイーターの背中から一瞬で生え、部屋全体を埋め尽くしていく。勢いよく埋め尽くしていく触手は放っておけば部屋が完全に埋まり切り、圧殺されると思わせるには十分だった。

「オイオイオイオイ!!!」

突如として発生した大質量に三人は避けるのがせいぜいだった。宝生は吹き飛ばされるも不意打ちではないため意識はあり、窃野と多部は距離を離して避けきる。

「俺一人で十分つてのはこういうことか！」

大質量での攻撃は味方も巻き込む。地下のように閉じた空間ならなおさら気にしなければならぬ。だからサンイーターは敢えて味方を遠ざけたのだ。

これで完封できる、相手が木っ端ヴィランなら間違いないそうだった。

ここに居るのは、実力のある上に相性も悪いヴィランだった。

「多部！」

「うまつ！」

マスクで顔全域を覆っていた男、多部がタコの触手へ噛みついて千切る。次々と放たれる食い千切りはタコの触手を動かさなくさせていく。

「多部は何でも食べられる！消化速度も速い無限の胃袋だ！タコなんざ全部喰っちゃまえ！」

十本近くあった触手が一本ずつ使えなくなっていく。このまま何もしなければ数分と経たずに動けなくなる。

（なら神経毒で！）

サンイーターの判断は間違っていないかった。食えることが個性なら毒も食べる。消

化も早いなら毒の周りも早い。

多部に注意を向けなければならなかった、だから見えていなかった。バツという音と共に、神経毒が込められた触手が窃野の手に収まる。

「そのサイズなら、俺が盗める」

窃盗の個性は一定以上のサイズまでのモノを瞬時に手元へ移動させることができる。動揺したサンイーターへ宝生の拳が叩き込まれる。

「流れるような連携……利用されると分かっているのか？」

流石に止められずサンイーターは吹き飛ばされ壁に叩きつけられる。

ここまでの対処に思わずサンイーターは疑問を問いかける。実力のあるヴィランであり連携もできてるのだ。仲が良くなければ難しいことだ。それを利用されてるのは天喰環には納得したくないことだ。

「お前らはオーバーホールもM.S.、ダークライも知らない。どん底に落ちている者に正しい意味で手を指し伸ばしてくれる人をな」

「オーバーホールは俺達を必要としてくれた。人生捨てた飛び降りるヒーローにキャッチされた時は絶望したもんだ」

必要ともされねえ、自ら希望を見出すこともできねえ人間には価値なんかねえ。だとうのに死ぬことすらお前らは許さなかった」

「そんなゴミをあいつらは肯定してくれる。オーバーホールは必要だと言ってくれるんだよ」

「価値を与えてくれた男の為だ。邪魔者は殺す」

(恐怖で従ってるんじゃない……洗脳に近い……!)

サンイーターの考えは間違っていない。価値が無いと言われた者に価値があるとしてやれることは、依存・洗脳させる第一歩だ。

ここにいとされる、最も強大なヴィランがやつてることと同じように。

「それでM.S. ダークライはな……女神だ。目え見て自分らしく個性を使って生きてくれば私は嬉しいってな、言ってくれたんだよ！

あなたがゴミだと思っても私にとっては宝石だと言ってたんだよ！

オーバーホールが先に拾ってくれてなかったら！まず間違いなく惚れてた女だ！どんなヴィランだって肯定されてあんな笑み向けられれば惚れんだよ！」

「どんなヴィランだって肯定してくれる、ヴィランを輝かせてくれる太陽、女神、そこで触れたら燃える宝石があいつだ！言っちゃまえば俺ら悪にとつての夢なんだよ！

誰もが欲しがる！手を伸ばす！あいつが夢に舞ってほしいからってなあ！

お前たちには絶対に分からないだろうな！」

「ねじ曲がつて痛々しい笑い顔のくせに……何でか分かんねえけど惚れちまう。ねじ曲

がっちまつてる日陰者の俺達と同じだって言ってくれてる

だから！あいつと一緒に笑ってやる！」

オーバーホールの洗脳だけではない。間違いなくM s. ダークライという存在に魅了されていた。

M s. ダークライは強大な存在だ。目もくらむ程の存在感を持ち、ヴィランなら誰もが欲しがる女性だ。手に入れば世界が手に入るとまで呼ばれる宝石であり、魅了されるのもおかしくはないことだった。

ただそれが本当に自らの意志だけから発せられたものであるか……個性によつて発せられたものなのかを知る者はどこにもいなかった。

「輝かせてくれる太陽、か……分からないでもないさ」

ある意味でヴィランとヒーローは対称的だった。他者の意志で堕ちて洗脳され魅了されていく者に対し、自らの意志で尊敬し合い繋がり合う者。環境要因や自立性といったことを考慮すれば優劣は無い。

「俺にも太陽はいる。けどな、あいつらは言ったさ……俺はサンイーターだつてな！」  
相手本人を見て、認める。行いは同じながらも性質は真逆。ただ想いが大きい、大切な譲れないものがあるという事実は同じ。

諦めないことも、同じだった。サンイーターは再びタコを再現し触手を伸ばす。が、

見切られており宝生に踏みつけられる。

「バカが……っ!？」

「そこだ」

宝生が背中から思いきり見えない触手に突き飛ばされる。腰につけていた袋ごと飛ばされ、前のめりに倒される。

実力差というのは何も個性の強さだけで決まらない。使い方というものがあるのだ。

タコは保護色を持つ。さらにキメラ・クラークを千切られた触手がそこら中に散らばっているのだ。視認し辛い上にカモフラージュもあり、見えないのも仕方ないことだった。

袋の紐が解け、中から結晶が一つサンイーターに飛んでいく。

「もう一つ!」

「っ!」

さらに窃野の視界を防ぐように瓦礫を蹴り跳ばす。窃盗で取られるも、サンイーターの狙いはそこではない。

「貴様っ!……!?!」

目にしたのは宝生だけだった。大事にしていたとある結晶が奪われたのだ。奪われ

た後……ガリツという音と共に、結晶をかみ砕いた姿を見てしまった。

激怒しかけるも、目の前のヒーローを正しく認識していたからこそ宝生は立ち止まる。

「!?」

「何!?!」

実力あるヴィランだからこそ他二人も気づいた。目の前のヒーローの様子が明確におかしくなったことに。

「がっ……!?!これは……!?!」

——サンイーターは一つだけ間違いを犯した。偶然の間違いではあったが、それは正しく間違いではあった。

それも、この場どころか他の戦場の戦局すら左右するほどの大きな間違いだった。

「髪の毛……っ?」

宝生が大事にとつてあったそれは、小さな結晶だった。一本の髪の毛が巻かれただけ、宝生の個性で作られた結晶だ。そして問題なのは髪の毛の方だ。

サンイーターは食べたものの影響を受ける——依光成生の影響を。

「M s. . . . . ダークライの……!?!」

サンイーターの個性は『再現』。但し食べたものに上限はない。そして上限が無いというただ一点において、サンイーターの個性はマスターピースの特性に合っていると覚えてしまっていた。

それゆえに、サンイーターの個性はより濃ゆく影響を受けてしまう。マスターピースである彼女の特性を一時的にだが得てしまったが故に。

さらに、運が悪かった。本来なら過去に墮とした髪の毛一本であり影響があっても多大程度であって化け物染みたものではないはずなのだが……今現在の依光成生は、自らの個性の影響真つ只中にいた。強大過ぎる個性の影響真つ只中だ。

今現在だけは遠くにある髪の毛一本であろうとも、自分自身である欠片なら馬鹿げた影響を与えてしまう状況だった。

「あなたは、そんな風になりたいのね」

「あ」

サンイーターは一瞬だけ幻視する……白い髪をした少女。白いワンピースを着た、瞳を閉じながらも微笑む姿。触れれば折れるような華奢な身体にしか見えないのに、しか



しそこには途方もない力が込められていた。

「が………制御………できない………っ?!?!」

ドクンドクンと心臓の鼓動が、身体そのものの熱が高まっていく。個性が暴れ、混成大夥と呼ばれた技術が、技でも術でもない力に変えられていく。

「あああああああああああああああああああああああああああああああああああ  
ああああ!!!!」

大きく、ただ大きく膨れ上がる。壁を壊し、三人を死なない程度に叩きつけ、下に上に横に大きくなっていく。

そんな——最終的には数十m以上のサイズのバカでかい蛸へ少しずつ大きく変わっていく。

純粹な蛸と違うのは、触手が十何本もあることと頭に小さな殻をかぶっていることだけだった。

マッチアップ 烈怒頼雄斗&ファットガム VS 乱波  
肩動&天蓋壁慈

ナイトアイ達ヒーロー主戦力がいる場所よりも深い階層の地下、そこに二人のヒーローと二人のヴィランが相対していた。

ヒーローは烈怒頼雄斗とファットガム。ヴィランは乱波肩動&天蓋壁慈、ナイトアイとオーバーホールの戦略通りに配置された戦いだ。

「デブに、赤い髪か」

「乱波、落ち着いて戦え」

「二人……!」

「ええ度胸や!」

乱波がズンズンと歩き二人の前に立つ。そしてそのまま拳を繰り出す構えをとった。  
「砕けても知らねえぞ! 安無嶺過武瑠!」

「おまえ、いいな」

ボボボボと風を切り、弾丸のように速く、重いラッシュが二人を襲う。硬化の個性と吸着の個性、どちらも防御寄りの個性であり攻撃向きではない。

ゆえにヴィランの攻撃を完全でないまでも防ぎきることが肝心要になる。烈怒頼雄斗は、この瞬間はまだ分かっていなかった。

「けほ……」

（破られた……！俺の最大硬度を……！）

二人ともダメージはあったもののラツシユをしのぎきり、踏みとどまる。胸中だけは二人で真逆にも近いものになっていた。

ファットガムは経験豊富だった。いくら防御能力が高くても破られることはある。故にダメージがあっても戦意喪失することは決してない。

対して烈怒頼雄斗はダメージは軽減でき倒れてないが初めて個性を破られた。防ぎきったと言えるのだが、破られた事実の精神的ショックが防げなかったと錯覚させていた。

その心情が、敵対しているヴィランにも見える程に。

「あの少年は……ダメだろうな」

「らあー！」

その瞳は弱弱しく、恐怖に染まりかけていた。天蓋の声にファットガムが拳を振るうも、バリアの個性により届くことは無かった。

即座に距離をとり烈怒頼雄斗の近くまで移動するファットガム。距離をとりたいの

もあつたが、烈怒頼雄斗はファットガムのインターン生なのだ。教えられることはまだまだある。

「その状態解くな！心まで折れたらこっちの負けや！」

「ファット……」

ファットの声に反応する烈怒頼雄斗。分かつてはいたが精神的ショックは大きい。何せ破られたのは初めてであり、即座に立ち直れる程の経験が無かった。

「二人とも防御が得意な個性だ」

「防御が得意？受けきれてないぞ」

既にダメージが溜まつているヒーロー側に対してヴィラン側は軽い情報共有をしていた。乱波のモチベーションに関わるため意外と重要なことなのだ。

「我々が矛と盾、向こうは盾と盾といったところか」

天蓋はバリア、乱波は強肩の個性であり盾と矛と呼べるものだ。矛と盾を持った者と盾しか持っていない者では勝敗は決まっているようなものだった。

「敵<sup>ヴィラン</sup>退治はいかに早く戦意喪失させるかや！こっちが先に戦意喪失してどないすんねん！」

ファットガムの声にヴィランの二人は感心する。天蓋は勝ち目が無いはずなのに戦おうとする意志に、乱波はまだ戦えることに。

「我々に勝つつもりだ、やったな乱波」

「わかつてくれたか、いいデブだ！」

そしてファットガムは決断を下す。脂肪吸着の個性は何も脂肪を纏い防御壁にするだけが使い方ではない。

更なる応用がその先に在るのだ。しかしてこれは諸刃の剣、失敗すれば負けは必至。加えて敵との相性も良好でなければならぬ。

「おい楽しくなってきたんだこれ外せ」

「相性は良好。コンビネーションで確実に倒せばいい」

未だバリアを張る天蓋に喧嘩ができないと乱破は殴りつける。喧嘩という過程こそ望みである乱破と確実に倒すという結果を望む天蓋では意見の相違があるのも当然だった。

「……喧嘩狂いめ」

「わかつてくれたか、良いひきこもりだ」

二人の様子を見てファットガムは勝機を見出す。相性が良い相手がいたからだ。

「乱波くん言うたな……打撃が効いたんは久方振りや」

ファットガムの切り札は一定以上の物理ダメージを受ける必要がある。乱破は条件に合っており、二人の会話から乗せやすい性格とファットガムは見抜いていた。

切り札にはもう一つ必要なものがあつたが……このまま戦えばギリ貧、賭けに出るしかなかった。

「俺も昔はゴリゴリの武闘派やつてん。お前の腕が上がらんくなるのと俺が耐え切れなくなるのどっちが先か。矛と盾どっちが強いか……」

勝負してみようや！乱破くん！」

「やっぱりお前はいいデブだ！」

二人が前に出る。殴り合うという純粋な喧嘩が始まる。残された天蓋と烈怒頼雄斗も止めなかった、理由は簡単だ。

「天蓋！バリアは！」

「出さない」

「そうか！良い人ばつかじゃねえか！」

横槍を入れるであろう天蓋は何を言っても聞かないと諦めており、烈怒頼雄斗はまだ精神的ショックから帰ってこれてなかったからだ。

「がつぐつつ！」

ファットガムは殴られ続ける。乱破もそれだけ殴ればラツシユの速度が遅く……なるどころか、速くなってきていた。

「がっかりさせんなよデブ、まだ倒れねえでくれよ

ようやく肩があつたまつてきたとこなんだ！」

乱破の全力はここからだつた。流石にファットガムも吐血し、全身に痣が残り、動きも鈍くなっていった。

「嘘だろ？まだいけるよな！」

まだラツシユを続ける乱破。ファットガムはまだ立っているのだ、乱破からすればまだ喧嘩の途中だつた。

圧倒的に劣勢なファットガムだが、その瞳に光がまだまだ残っていることに天蓋が気づく。

「乱破！そいつ何か企んでる！早く仕留めろ！」

「気になる！生きていたら披露してくれ！」

さらに速くなり、遂に全力の速度に到達した乱破。さらに加速するラツシユに、流石にヤバいとファットガムが思った瞬間だつた。

「うおおあああああああ！」

烈怒頼雄斗が、ファットガムの前にいた。それはまさに盾、矛と矛になり得る盾の戦





爆豪に言われた「倒れないことは強い」こと、成生に手を伸ばせなかった「救えなかった」後悔。それらが相まって「誰よりも倒れない盾」と化す。

烈怒頼雄斗が踏ん張りラツシユを耐える。限界を超えてさらに強度を高め、割れたら即座に硬めて守る。不屈と呼ぶべき戦いだっただけ。もし依光成生がここにいれば目を輝かせたであろうものだった。

——だからかもしれない。ラツシユのせいで誰も気づかない位置、烈怒頼雄斗の足元……一呼吸にも満たない程の極微小の赤い蒸気が触れていた。

「おおおおお!!」

烈怒頼雄斗は原点を想い限界を超える。本来なら硬化の最大である安無嶺過武瑠アンブレイカブルさえ超えて硬化する。意志も身体も硬め、打ち抜けていたはずの乱波の拳が少しずつ傷んでいく。

少しずつ歩んでくる烈怒頼雄斗と、突如として痛み始めた拳に乱波は笑った。

「ははははは!!最高だ!おまえは最高だ!」

更に速くなった拳が烈怒頼雄斗を襲う。ファットガムにも流れ拳が飛んでいくが力の込め方が弱かった。

そして……遂に烈怒頼雄斗は乱波まで到達した。ガンガンと数発殴るもバリアに受

け止められてしまう。

そこまでが、烈怒頼雄斗の限界だった。白目を向き意識が朦朧とし、無意識的に反応はするものの……もう気絶していた。

「おいー」

「馬鹿！ 気づいてないのかそいつは」

しかし、烈怒頼雄斗の働きは十分だった。十分過ぎたとすら言える。

「ようやくたきりしまくん」

ファットガムの切り札。それは受けたダメージを吸着し、沈みこませ、蓄積させる。そしてそれを腕に溜め込み一撃にして放つ最大のカウンター技。

相対する敵が物理的ダメージを与える敵であり、腕に溜め込む数瞬の時間を稼ぐという限定的条件下で放てる技。しかして威力はそれだけ大きい。

時間を稼げるかは賭けだった。それも分が悪いものだ。

乱破から受けたダメージは十分。だが乱破のラッシュが速過ぎたせいで腕に溜め込む時間がなかったのだ。それを烈怒頼雄斗は補い切ったのだった。

「敗因一つや！ 甘く見とつた！ 俺も！ おまえらも！」

烈怒頼雄斗ちゆうう!! ヒーローの漢気を!!」

溜め込んだ衝撃を拳に込め、ファットガムの渾身の一撃が炸裂する。バリアを張る時間すら与えず、放たれた衝撃は二人のヴィランを気絶させた。もうこの地下での戦局には関われなほどのダメージだ。

「ギリギリ……やった……きりしまくんの、おかげや」

がくりと膝を下ろすファットガム。意識があるのは彼だけだった。

「ワイも……かなり限界やったけどな」

しかしそれも限界。乱破のラッシュを喰らい続けたのだ。さらに最後の1撃は脂肪を燃やして衝撃に変える技だ。タイミングが遅ければ自らの脂肪を燃やし過ぎることになる。

今回は、ギリギリで燃やし過ぎたのだ。烈怒頼雄斗が時間を稼いだのは良かったが、如何せん位置が悪かった。タイミングを調整するため時間をかけ過ぎていた。

ドサリと地に伏すファットガム。意識は引き止めれば繋ぐ程度にはあるものの、気を抜けば即倒れる程のものだ。ヴィランが起き上がる前に回復しなければマズいのはヒーローの方だ。

掠れるファットガムの瞳に映ったのは軽やかに歩く一人の姿。

「あん……た……た……」

足元から赤い蒸気が上がっているという見たことのない姿だが、ファットガムには彼女の声を聞いたことがあった。

「安心していいよ」

安心させるような声色。それだけでヴィラン側であろう彼女が戦う気が無いのは分かるのだった。

「より……みつ……せ………」

こいつなら安心していい。ファットガムは確信があった。

烈怒頼雄斗のファンと言ったからか、見た目は普通の少女にしか見えないからか、理由は分からない。

だがファットガムは直感的にそう感じ取り——倒れた。守るべきインターン生を、任せられる少女が抱きしめたのを瞳に移したと同時に。

「身体が冷えちゃダメだから」

優しく切島鋭児郎を抱きしめる依光成生の姿がそこにあった。

## 夢のような時間

少し時間が経ち……医療室、そこには四人の姿があつた。寝ている者が三人、一人はファットガム、一人は乱破、一人は烈怒頼雄斗。

そして最後の一人は、依光成生。烈怒頼雄斗——切島を膝枕して寝顔を見ていた。

成生の赤い蒸気は三人を介抱し切島を膝枕している途中で完全に治まっていた。四人の戦いの後に切島を介抱しにきた時、成生には見えない位置でまだ発生していたがもはやそれもない。

もつとも、そんな位置で発生していたせいで成生本人はとつくに治まっていると勘違いしていたが。

体に指を向けスキャンするように光を向ける。傷は多いが、後遺症になるようなものは無かつた。

ホッと安心すると、いたずら心から一言呟く。

「切島くん、起きてる？」

「……寝てるって言ったら……どうする……？」

帰ってきた返事に成生は目を見開く。動揺を隠さない成生だが、すぐに落ち着きクス

りと笑って声をかける。

「起きてーって声をかけよっかな、もう起きる時間だよって」

「寝坊しちまうって？」

起きようとしめない切島に、いたずら心がまた反応する。

目をつむったままの切島に吐息がかかりそうな程に顔を近づけ、ねだるような声で切島の耳にささやいた。

「それとも——キスの一つでもしないと起きてくれない？」

「っ！」

バチつと目を覚ました切島だが、身体は起こさなかつた——否、起こせなかつた。

起き上がろうとする体を起こさないよう優しく抱きしめられていたからだ。随分と力の強い少女に。

「ダメだよ、まだ身体は傷だらけ。マトモに動くのもきついでしょ？」

「いつ!?!……成生？」

「力を抜いて、もたれかかって？」

痛みが走る身体だ。起き上がるのもつらいのはその通りだった。言われたとおりに身体をもたれかからせ、再び膝枕の姿勢に戻る。

そして見下ろされながら、ニコリと微笑みかけられた。

「来ちゃった」

「……どうして？」

「苦しんでるヒーローに、介抱するファン。分かりやすいでしょ？ つい起こしちゃったけど」

「そっか、そうだな」

「ついつい起こされたというのもヒーローからすれば助かることだ。止められ動けない以上どうしようもないが、目の前の女の子と話すことくらいはできる。」

そして今は、ため込んできた疑問をいくらでもぶつけられる貴重な時間だった。

「なあ成生……どうして俺なんだ？ いや、あの、嬉しいんだけどな」

「切島君が普通の個性だったから」

切島が照れながら口にした疑問は、伏せた瞳をした表情から答えが返ってきた。言いづらそうな顔だったのは、口にした言葉が半ば答えだった。

普通の個性……それ自体は蔑称でも何でもない。ありふれている個性だという言い方でもあり、特別でない個性という意味合いでもある。指先が光る人も、身体が硬くなる人も、よくいる普通の人だと言える。

だがそれは裏を返せば、普通の個性を持つものは社会から見て特別な人にはなれないとも言えた。

「私の個性知ってる?」

「指先が光るとかって聞いてる」

M s. ダークライの情報は既に世の中に知れ渡っている。依光成生という少女の個性も。

神野の戦いからして明らかに詐称している個性登録だが、戦いで指先が光る個性は使われていた。常軌を逸したどころか規格外の使い方ではあったが、確実に指先が光る個性ではあった。

当然、切島も知っている。同時に——個性が特別普通でないことも、それだけ成長させてきたであろうことも。

自らが社会的に見れば似た境遇の個性だからこそ、切島が成生の個性の在り方と思うのは純粹な尊敬だけだった。

「そう、私の個性は指先が光るだけ。それだけだった……どこにでもあるような個性だった」

「優しい個性だな。導く光ってこんな感じかって」

余りにも予想外過ぎる言葉に成生はパチクリと目を瞬かせる。

かつて自らに記した名前——闇M s. ダークライを導く光。しかして今はM s. サイ ダークライとしてここにいるのではなく依光成生としてここにいるのだ。



素のままの成生を、導く光だと本人に伝えた者は一人としていなかった。……本人のいない所で言っている者は多かったが。

「そんなこと言ってくれた人は初めて」

「俺も普通の個性だからな。最近なんだぜ？倒れねえつてのはつええつてことに気づけたの」

普通の個性にも強い特徴はある。ただそれに気づけるか、そこまで辿り着けるかはまた別の話だ。

切島であれば倒れないこと、成生であれば自らがここにいると示せることだ。成生は自らの個性の強みに気づいてはいなかったが、辿り着いて利用はしていた。

そしてそれに気づいたのは——今。切島が言ったからだった。

「そっか……強いね」

「へへ……」

気づけたことを心にしまい、純粋な誉め言葉を口にする成生。切島も素直に受け取っていた。

切島の声が落ち着き、数秒の間が空く。迷う瞳を見せた成生を、切島は待つて見ていた。そして成生は逡巡した口を開く。

「……私にはね、普通の個性なのにヒーローを目指す人が輝いて見えたんだ」

「ヴィランになったのはそれが」

原因か。そう口にする前に成生は人差し指で切島の口を止める。そして、首を横に振り……上を見上げて成生は呟く。

「私はね、特別になりたかった。普通でいたくなかった。誰よりも特別な存在になりたかった。オールマイトより……オールフオーワンよりも、ヒーロー社会の中でも特別な存在になりたかった。

だから、これしか方法は無かったんだ。オールマイトと呼ばれる社会だから、私には<sup>社会を壊す</sup>これしか選択肢が無かった」

見上げているせいで顔は見えない。だからこそ、切島は自らが感じた素直な言葉を声に出していた。

「すげえな」

「えっ?」

涙を目に浮かべ、そのまま泣きそうな顔の成生は顔を向ける。そこには感心する切島がいた。

「俺には出来ねえよ。オールマイトどころか社会全部敵に回して、自分自身を証明するなんて真似。すげえって言わずしてなんて言えばいいんだ」

善悪を抜きにして達成したことだけで言えばとんでもないことだ。オールマイトや

オールフオーワンほどの者でなければ成しえないことであり、彼らに並んだと言つて間違ひはない。

さらに形はどうあれその二人を倒した上で社会に自分自身を示したのだ。純粹に達成したことだけで言えばこれ以上はない。

ただそれを評価してくれた人はいなかつた。メディアがこれでもかと叩いていたくらいだ。

「嬉しい、誰もできないってしか言わないんだもん」

成生の口角が上がる。自分でやると決め、実行し達成したことだ。まだ両親が健在だった頃に例え話で話したことはあるが、達成できるはずもないとしか言わなかつた。

オールフオーワンは全部話せばできるだろうと言つただろうが、話さずに倒してしまつていた。

「そりや俺だつて被害見た後ならそう言うよ。でもよ……その……成生だから」  
「？」

照れくさくて言いづらく、見下ろす成生の視線から逃げようと切島は顔を左右に動かす。が、微笑む成生は追いかけて視線を逃さない。

逃がしてくれないと察し、ふうと一息ついて切島は視線を合わせ口を開いた。

「成生だからそんな言葉が真っ先に出てきたんだ」

「――」

涙が一筋、両目から零れる。成生という少女が、他人の言葉で初めて流した涙だった。

「普通の個性なのに、そこまでいったんだろ？」

俺たちみたいに、先生みたいな先導もいなくてそうなったんだろ？」

ほんの一瞬だけ間を置き、切島は言葉をつづける。自分の本心から出る言葉を。

「ずっと、みんなを見てきたからそうなれたんだろ？」

成生は声が出ない。思考加速もできないまま完全に固まり、言葉をそのまま受け取る  
ことしかできなかつた。

「どれも成生がやったことだ。ヴィランになってやらかしたことは許されちゃいけない  
けど……」

俺は——成生を嫌いになれないんだ」

切島の素直な言葉が突き刺さる。M.S.<sup>ウイ</sup> ダークライではなく、依光成生という少女に向けられた言葉。どんなものよりも心も顔も赤くさせるものだった。

「もう……ばか……」

「え？わりの？」

小声でつぶやく成生。が、膝枕している位置関係すら忘れていたのか切島に届いてしまっていた。さらに顔を赤くする成生だったが、ふうと一息を吐いて自分を鎮める。ただ切島の素直さに釣られたのか、本音がついつい言葉は出てしまっていた。

「直球ばかり」

「それが俺だからな」

「ほめ殺し馬鹿」

「わりのか？」

「硬い」

「悪口ですら無くなってねえか？」

クスクスと笑いあう二人。世間の評判ややったことを度外視すれば仲睦まじい様子  
としか表現の仕様が無かった。

「でも、それが切島君なんだ」

「……ああ」

「私が好きな、切島君なんだ」

「……ああ。……好き!？」

唐突に好意を向けられた切島の頬が赤くなる。

成生の好意は人としても……異性としても好きであるというものだ。前者だけなら  
ともかく後者まで含まれており初心な切島には刺激が強かった。

「ありがとう」

「ああ……っ!？」

成生の顔が切島に近づいていく。唇が近付き顔を赤くし顔を背けようとした切島だ  
が、がっしりと掴まれており動かせなかった。

「これは、お礼だから」

切島に落ちてくる唇は少だけ目の上にズレ、額に落ちた。時が止まるかのような時間が数秒続き、成生は唇を放す。

完全にフリーズした切島だが、それ以上に成生は思考が混乱していた。自分が思わずこんなことをしてしまったことに恥ずかしくなり、しかも思考加速ができてしまうからこそ尚更悪化していた。

そして悪化しきった結果、素のままの部分だけが表面化して出ていた。

手を放し、ニコリと微笑む成生。そこあったのは綺麗な青色の瞳と朗らかな少女の姿。

「おやすみなさい、切島君。また会おうね」

「あっ！おい！」

切島は体が動かさなかったわけではない。動かすのが辛かったただけだ。

そして今日の前にあるのは奮い立たせる人の姿。烈怒切島頼雄闘郎が手を伸ばせない訳が無かった。

「あの時は掴めなかったからな」

離れようとする手を掴み、引き留める。たったそれだけのことだが——成生がヴィランだと示した時に、できなかつたことだった。

成生はまだ座った姿勢だが立ち上がろうとしていた。驚きながらも、掴まれた手に視線を向ける。引き留めること、それが何故か心臓の鼓動が早まるくらいには嬉しかった。

優しい表情になった成生は姿勢を戻し切島の頭を膝に優しく置き直す。さつきまでと同じだが、成生の雰囲気だけが変わっていた。

「……そっか。うん、じゃあ少しだけここにいなね」

「よかつ……あー……安心したら……眠気……が……」

激戦の後、成生が無理やり起こしたような形だ。再び疲労を感じ取り、身体は無理やりに休眠をとろうとしていた。

「私はここにいなよ」

「せ……い……」

安心した顔で切島は眠りにつく。嫌い特別にならないと口にした少年に向けられた瞳は相応に特別なものだった。

「……切島君ヒロー。私が特別だって……嬉しかったよ」



少女は笑う。瞳の奥に深淵の色や邪悪が入り込んでいると分かっているとしても、流れる嬉し涙は当人のもの。依光成生という人間のものだ。

Ms. ダークライ  
ヴィランであって未だ依光成生ではない恋する少女は数分の間、切島の傍にいたのだった。

これがヒーローの少年とヴィランではない少女が交わした最後の笑顔とは……誰も考えはしなかった。

## マッチアップ トガ&amp;トウイスVSナイトアイ&amp;デク

ところ変わってマッチアップはヴィラン側がトガ&トウイス、ヒーロー側がナイトアイ&デク。狭く音が響き、声を小さくしても相手に伝わる程だ。

デクの表情だけが険しく、他全員は余裕気だ。理由は簡単でありナイトアイは個性により既に知っており、ヴィラン側は計画通りに近いのだった。

「M s. ダークライがここにいたんだ。可能性は考えるべきだった」

「予知には見えていた。タイミングまでは分かっていたが……ここか」

とはいえナイトアイも全て知れている訳ではない。個性『予知』はナイトアイが一時の間自由に未来を視れるが、相手に成生がいるのが問題だった。

一時間自由に未来を視れるならナイトアイの情報処理能力と相まって一時間もかからないヴィラン捕縛の計画など全容が見えるものなのだ。しかし今回に限ってはそうではない。

一発で予知が確定した訳ではなかったのだ。

何度も見て、似た光景が多いから未来に起きるだろうという予測が今回の予知だった。いくつも未来が変わり、しかし全てが全く違う未来ではない。M s. ダークライ自

身を視たこともある。

だからこそ詳細な予知は出来ず、大まかな予知しか出来ていなかった。一言一句知ることができないが、どういった状況になるかは分かるのだ。

そんな心境のナイトアイとデクの声にヴィランは口角を上げながら声を返した。

「成生ちゃん来てるです?」

「あいつはまったたく!」「隠したがりだな!」

トガは嬉しそうに、トウワイスは仕方ないと言いたげだ。

成生はヴィラン連合全体とは距離をとっている。成生が死穢八斎會にいるということをヴィラン連合も知っていたが、ここに来ているのは知らなかったのだ。

「……どうやら偶然らしいですね」

「当然だ。こいつらは死穢八斎會から呼ばれてきている。M.S.、ダークライ側じゃない」

ナイトアイの情報に理解を示し頷くデク。しかしその情報はヴィラン側には良い情報ではない。

何せ味方が増えたというだけなのだから。

「それなら最悪成生ちゃんに回収してもらえばいいです」

「気にしなくていいな!」「いやしろよ!」

「くっ！」

成生という最強のヴィランがすぐ近くに居る。救助という名目なら林間合宿の時にこれでもかと暴れた実績もある。

ヴィラン側が倒れても問題ないと判断するには十分だった。

が、その判断は一手遅かった。

「確かにそうだな。だがそれは助けに来たらの話だ」

「わ」

ナイトアイが5kgの重さを持つ印鑑を勢いよく投げつける。成生がいるという一瞬の油断、そこを見逃すナイトアイではなかった。

トガの腹に命中し吹き飛ばされ壁に激突、粉塵をあげる。トウワイスも吹き飛ばされていくトガに手を伸ばすが、ヒーロー側が許さなかった。

「トガちゃん!?!」

「助けに来る前に終わらせる、デク！」

「はい！」

ワンフオーオールフルカウル、10%。M.s. ダークライという脅威のために早く制

御を覚えようとした現状の限界。

仮免試験の時よりほんの僅かに増した程度の10%だが、それでも十分過ぎる身体能力になっていた。トウワイス一人を真正面から戦えばねじ伏せられるくらいには。

「トガちゃん助けて—!?!」

「な」

ただトウワイスは真正面から戦うヴィランではなかった。しかもただ逃げ回るだけのヴィランではなく、身体能力も高いうえで逃げ回るヴィランだ。

デクが見たことのあるヴィラン連合は大半が形はどうであれ戦意を見せて向かってきていたため、全力でトガの方へ逃げ走り出したのはデクと言えど読み切れなかった。

「逃がさん」

追撃だとナイトアイがトウワイスへ印鑑を投げる——が、伸ばされた手が勢いすら消して掴み取る。そしてその手は、トガの手ではなかった。

「けほ……仁くん、成生ちゃんがいるんですよ?」

「あつ、そっか」

トウワイスがトガの言いたいことを正しく理解する。右手を伸ばし、トウワイスは自らの個性で最も自分が危険に陥る者を複製する。

当然何が複製されるのかも予知を行っていたナイトアイだが、その危険性を理性で抑

えきれず、今日の前の状況に手を出さざるを得なかった。

「させんー！」

「っー！」

再び印鑑を投擲するも、粉塵を裂いて現れたもう一人の手に摘ままれる。それはさつき伸ばされた、トガの手ではない別人の手と同じものだった。

「成生ちゃんがいるなら最初から全開です」

粉塵が晴れた場所に立っていたのは全く同じ姿をしたM s. ダークライの姿。かつてのデビュタントの時のものではない。

髪型はウエーブがかかったショートであり服装も私服……肩だしの白いトップスに水色のフレアスカート。伊達メガネもかけており見るからに隠してる姿だ。

その雰囲気だけは同じ。瞳こそ混沌としたものではなくトガの黄色いものだが、圧倒的なまでの存在感がそこにあつた。

そしてそれが、もう一人。

「M s. ダークライが……二人……!?」

トウワイスの複製により増えたもう一人の成生。こちらは瞳が混沌そのものであり…… M s. ダーククライを増やしたのだった。

「終わるのはどつちが早いかな、試してみましようか」  
ウラン

敵は変身と2倍——すなわち、悪夢に変わる者と悪夢を増やす者。英雄を継ぎし者とかつての英雄の相棒が挑むウランがそれだった。



「せいちゃん力は扱うのも難しいです。でも少しなら扱える」

トガの個性『変身』は身体能力も変化する。元のトガの身体能力からかけ離れ過ぎれば十全に扱えるわけではないが——トガは成生の友達であり、変身が初めてという訳ではない。

十全とはいかないまでも、多少なら使えていた。

そして増えた M s. ダーククライはというと、困惑していた。

「ふむ？……分身、2倍ですか。なら容赦なく……いえ、これは」

複製されたことではない。複製された本人だからこそ誰よりも理解できる、本体の

影響のせいだ。

「どうしたんだ」

「成生ちゃん？」

申し訳ない表情をした成生が二人の方へ顔を向ける。

本体は未だ赤い蒸気を上げて自らの力を抑え込んでいるのだ。途方もない程に強大な個性だからこそ、複製された者に影響が出ない訳が無い。

「すみません。本体が今大変なことになってましてこつちにも影響が……既に身体を保つのも限界……一発だけしか無理ですね」

「は!？」

できて一発。M s. ダークライの一撃なら十分な威力を持っているのだが……M s. ダークライのが選んだ攻撃はヴィランとしては悪く無い選択肢であり、しかしヒーロー側が最も助かる選択だった。

「一発な「さよなら」

油断せず、警戒を解かず、瞬きすらしていないナイトアイの身体が水平に吹き飛び壁にぶつかる。一発無造作に蹴るだけ、ただそれだけでプロが瀕死になる程の攻撃になっていた。

救いだっただのはレーザーでもなければ光による攻撃でもなかったことだ。仮にレー



ザーによる斬撃を使われていけば壁すら貫通してヴィランもヒーローも真つ二つになつていたのでから。

「ナイトアイ！」

反応は遅れたもののナイトアイの下へ近寄るデク。流石はオールマイトの相棒と呼ぶべきか、衝撃は分散させ自ら飛ばうとしていたことでダメージの軽減は出来ていた。

だが直撃した腹部は致命傷一歩手前。これ以上動かすのも危険ではあった。

「トガちゃんあとはお願ひします」

「はぁーい。ありがとうございます」

一瞬でナイトアイを無力化したM.S. ダークライは姿を泥のように崩して消えていく。

二倍の個性は耐久力を落とした分身を作る。しかし成生の個性は今や本体以外では自らの個性に耐久力が追いつかない程の強大さになっている、二倍のように少しでも耐久が落ちれば即座に崩壊して当然だった。

「がっ……」

「意識はある。でもこのままじゃ……いや、守る！守って戦う！」

デクが受けている指令は各個撃破。それがどんな形であれ、目的さえ達成できれば問題は無いのだ。最も困難な道であろうと、救うヒーローであるデクは躊躇なくその道を

選ぶ。師であるオールマイトと同じように。

デクがナイトアイを守る選択をする最中、ヴィラン連合の二人はM.S.、ダークライの影響を話していた。

複製で何もせずに崩れてしまうほどの影響を受けているのだ。複製でこそないものの、変わっているトガに影響が無いとは思えなかった。

「トガちゃん大丈夫？」「問題ない？」

「んんっ?……成生ちゃんの言う通りだったのです。変身にも何か変な影響が出てます」

手をグツパツと握ったり開いたりしてトガは力加減を確かめる。そして成生は新しい牙の生えた笑みを浮かべ、動く。

「ものすごく元気が湧いてくるって感じですよ!」

「うっ!」

一歩でデクの目の前まで跳び胸を殴ろうとする。が、両腕をクロスするようにデクは守る。反応は明らかに遅れていたが、ギリギリで態勢は間に合っていた。

だが壁がすぐ後ろにあつたことで勢いが殺し切れず壁にぶつかり、身体が埋もれる。

(10%じゃ耐えられない!無理をしても上げないと!)

デクは即座に判断を下す。現状の10%のフルカウルでは間違いなく負ける、かと

いって100%を使えば地下ごと吹き飛びかねない。

故に、選ぶ選択肢は第三の選択肢。

「ワンフオーオールフルカウル……25%！」

「わっ!？」

先ほどトガにやられたように、一步で目の前に到達し鳩尾へ向けて正拳を放つ。不意打ちにも近い一撃だったが反応したトガは即座に距離をとっていた。

デクが選んだ第三の選択肢は一時的に使える限界までパーセンテージを上げるといふもの。身体は軋み、数分も動けば反動が来るであろう強化率。近くにM s・ダークライがいること、再びM s・ダークライを複製されれば全滅するという危機感が限界を超えさせたのだった。既にM s・ダークライは複製できないのだが、デクの耳には入っていないかった。

「あんまし保てないけど……戦えない程じゃない！」

数分というのはオールマイト達の戦いやこれまでの戦いの事を考えれば十二分に長い時間だ。増強系の個性の極限であるO F Aは全開で振るえば、3秒で戦いが終わる程の力があるのだ。数分もあれば戦いなどとうに終わっている。

ただそれが言えるのは、身体能力で相手が明確に追いつけない場合だ。

「成生ちゃんのに力に勝てると思ってるのです?」

「ぐっ!?!」

変身の個性は血を吸った人に変わる。見た目だけでなく身体能力も……変身の個性が成長すればという前提なら、変身した先の人の個性も使えるようになる。

未だトガはそこに至っていないものの、今の成生は身体能力だけでも馬鹿げた能力を誇る。何せ彼女の身体能力は電花達にまだまだ劣るものがあるが、異形の反射速度で完全に電花達を圧倒できるようになりつつあるのだから。

とはいえ成生の反射速度も個性由来に近い。変身で近づくことは出来ても同じになることは出来なかった。故に身体は動いても反射で動くことは出来ない。

ただ身体能力だけでも、十数m離れた相手に一步で懐に入り拳を振るうくらいは容易いのだ。

「成生ちゃんが一番怖いのは反射速度。流星にそこまでは扱えないけど……つと」

「くっ!」

身体能力で言えばOFA25%で成生と互角程度。しかし個性や技能抜きでそれだ

と言うことだ。

緑谷の技能はフルカウルの戦闘技術に全振りだ。それ込みで身体能力が対等であるなら、トガの変身した姿は純粋にトガの技能だけが上乘せられて有利になる。

徒手戦闘ではあるためトガのナイフ技術は使えないし姿を隠す技能も使えないが、手でナイフの代わりにする。それだけで十分に優勢に進めていた。

「基礎戦闘能力は……今のデクくんの身体能力に追いつけるくらいには、強いんだあ」  
「なら、こっうだ！」

デクはその場で思い切り手を振る。それだけで土埃が舞い風が荒れる。身の回りの環境を利用し不意打ちに繋ぐのはデクにとって格上に対する対処法だ。

M s. ダークライならば個性で探知できるため効かないが、ここにいるのはトガだ。

「わ!？」

探知もできず、成生の身体能力があるせいで逆にその場所から動かないという選択肢をとってしまふ。

突入する以前はデクはO F A I 0 0 %を使わないと決めていた。例えばM s. ダークライが戦闘に入りかねないからだ。が、目の前のヴィランには今以上の出力でなければ倒すことはできないと判断する。

「アトロイト——」

「させね」

この場にいるもう一人を忘れていたのが、デクの間違いであり——同時に幸運だった。いつの間にかそこにいたMr. コンプレスが瓦礫を『圧縮』してを投げ、トガとの間に割り込ませていた。

ここにいたのは四人だけ。であるならば至る考えは一つだ。

「三人目!？」

「流石だぜ!」「Mr. コンプレス!」

「おいおい増やされちゃったのかいおじさんは」

トウワイスによる複製だ。さらに最悪の事態に陥るデクだったが、この未来には意図的に辿り着いたのということ忘れていた。

再び距離をとったデクの背後には立ち上がるヒーローがいた。

「ぐ……衝撃を備えてこれか」

「ナイトアイ!」

一撃で意識まで刈り取られたはずのナイトアイがそこにいた。

来るであろう衝撃に備え防御に徹し、意識を無くさぬよう覚悟を決め、吹き飛ばされる勢いを直前に自ら飛ぶことである程度威力を減衰させる。身体能力が圧倒的に負けているため予知による事前準備した防御だったが、それでも致命傷手前までのダメージ

を負ったのだった。

「状況は……予知通り最悪だな。デク、私は動ける。それだけで十分だろう」

「……っ！はい！」

情報伝達は時間は最小で情報量は最大に。デクとナイトアイの会話はそれだけで十分だった。

「仁くん助かりました」

「おいおい相手は二人かい？」

未だデクの起こした土埃は舞っている。さらに成生に変身しているが故に、その力を振るえるがために、トガラしくなく油断していた。話しかけられていたMr. コンプレスもまた、同様だった。

——突如土埃を貫いて飛んでくる印鑑に気づかない程の油断。その行き先は、トウワイス。

「俺に!?!」「俺じゃない!?!」

ただの牽制攻撃。だが予知により油断を突いた攻撃になり……トウワイスに直撃すれば気絶するのは必然である威力はあった。

とはいえトウワイスは鍛えてない訳ではない。二人とは違い油断していなかったために、ギリギリで回避できていた。

そして牽制があつたのなら当然本命がある。飛んできたのは、一步で踏み込んできたデクの拳。

「来るな!」「来い!」

トウワイスが避けようとするが、それよりも先にトガが割り込んできていた。

「遅い、させる訳が無いのです」

この場で身体能力が互角なのはデクとトガ。デクが出てくるならトガが相手しなければならぬ。

そこを、デクとナイトアイヒーローは突いた。

「(っ)……でっ!」

「な」

ナイトアイが壁に叩きつけられた時にできていた瓦礫。握り込んでいたそれをトガが割り込むギリギリでデクはトウワイスへ投げつけていた。

トウワイスは体を丸くして耐えていたが、増強系の飛礫だ、耐えきれぬ訳がなかった。

「仁くん!」

「はっ!」



倒れたトウワイスの心配、デクはそこを突きトガへ拳を振るう……が、再び圧縮された瓦礫が間に割り込んできた。

「わっ！」

「くっ！」

距離をとるデクとトガ。土埃は収まり全員の姿を全員が視認できる状態になった。

「仁くんが倒れちゃったのです。……これは、ちよつとマズいかもです」

「あとはトガヒミコと複製された男一人」

トガが戦略的撤退を考え、ナイトアイが次の攻撃を考えていた時、地響きと呼ぶべき音が鳴っていた。ナイトアイの予知が上手くいかない<sup>M.S. ダーククライ</sup>ヴィランが引き起こした災害の音だ。

ズズン……ズズン……ズズン……

五人がいる地面が揺れる程の大きさ。しかしヒーローにもヴィランにも、今回の一件に関わる者で地面に作用する個性持ちは一人としていない。

「大きな音……かなり近い？でもそんな大きな音なんて」

「デク、私が叩きつけられた壁は砕けそうか」

予知の個性で先んじて何が起きるか分かっているナイトアイがデクの困惑を鎮める。

迫ってきている者の正体も分かっているが、この場にいる戦力では対処のしようがないこともナイトアイには分かっていた。

「今のパワーなら、おそらく」

「向こうも迷ってる、逃げるぞ」

分断された壁は分厚い。が、OFAの出力を上げれば壊せる。100%なら地表までぶち抜ける威力があるのだ、たかが数mもない厚みの壁など全力<sup>100%</sup>を出す必要もない。

しかしデクが未だ迷っているのはナイトアイの方針が変わったからだだった。

「各個撃破だったのでは？」

「目の前の予知は変わった。戦略もクソも無くなりつつある、まず合流せねばならん。私が牽制、お前が本命だ」

予知が変わった。それだけでデクには十分に危険であることは伝わる。何せそれができるのはMs. ダークライだけなのだから。

Ms. ダークライが動いた可能性がある。たったそれだけで撤退が視野に入るのだ、可能性が出てきた以上各個撃破ではなく、合流していつでも撤退できるようにする方を優先するのは当然だ。

ヒーローは戦略的撤退へ方針を変えつつ——この場にいるヴィランもまた似た動き

をしていた。

「トガちゃん嫌な予感がする、逃げた方がいい」

「私もです。この音が到着する前に逃げるのです。退路は頼みます」

「任された」

ヒーロー側を警戒しながらトガはトウワイスを抱え、Mr. コンプレスは圧縮している玉をいつでも投げられるように構える。ジリジリと少しずつ退きながら。

極小の動作だったが、ナイトアイは動きとその意味を見逃さなかった。

「どうやら事情が一致したな。向こうも後退してる……よし、一気に背を向けて真後ろの壁だ、いいな?」

「はい」

数瞬の沈黙が場を支配する。どちらも同じ考えになったからこそその緊張が場に流れる。それを破ったのは、ヒーロー。

「行くぞー!」「はい!」

「くそっ!……ってあれ?」

飛んできた印鑑へMr. コンプレスは圧縮した玉を投げ、圧縮されていた瓦礫を展開し撃墜する。

続いて本命のデクが来るはずとトガがMr. コンプレスの前に立つが、何も攻撃は飛んでこず大きな音だけが響いた。そこまでヒーローの動きを見てようやく二人は臨戦態勢を解く。

「逃げるつもりだったですか」

「退いてくれたなら好都合だ、こっちも上に行くぞ！」

Mr. コンプレスが階段状に地面を圧縮し地上へと道を作っていく。音の震源ではないであろう方向へ。

五人が抜けた数秒後、壁を破壊しながら巨大な<sup>サイナイター</sup>タコが進撃していた。

# マツチアツプ 電花VSイレイザーヘッド&ロックロック

「八齋衆」酒木さかきでいどろ泥泥と依光電花、イレイザーヘッドとロックロックに警察の大多数。二体多数という数の上では圧倒的にヒーローが有利な状況。

「先手必勝」

さらにそこへ「消失」の個性の優位性が上乘せされる。一瞬で電花と泥泥、二人の個性が「消」され、即接近したロックロックにより二人の服が「締」められる。

一瞬で個性が使えなくなり、身体が動かせなくなったのだ。

「ちよつ！待て！お前何とかでき」

「わ」

ロックロックの個性に電花は驚き、戦闘経験豊富な泥泥は即座に脱出を行おうとするも——捕縛布で顎を打ち抜かれる。

「寝てろ」

ロックロックの個性に驚いている間に泥泥の意識は刈り取られ、ガクンと身体から力が抜ける。

イレイザーヘッドとロックロック、どちらも個性をまともに使わずに捕まえる技能に特化した者だ。不意打ち気味なら実力者であつてもご覧の通りだった。

「あー……えいつー！」

泥泥が倒れたとほぼ同時、バキツという音と共に電花の拘束服が外破れる。ロックロックの個性『デッドボルト』プロヒーローレベルでも力任せに外れるようなものではないのだが、電花のパワーは脳無と同じなのだ。プロヒーロー数人を相手取るパワーには力負けしていた。

「わたしだけになっちゃった……服も着替えないと」

「油断するな。こいつがおそらく最も危険だ」

「分かってる」

服を破り、繋ぎ局部を視えなくしていく電花。これが遊びなら間違つてない行動だが、戦闘なのだ。

ヒーローはそんな悠長な時間待つてはくれなかった。

「常に先手をとる」

走り近づき、同時に捕縛布を伸ばす。消失の個性と合わされば余程の素の身体能力に差が無い限りは決着がつく、合理的な行動だった。

瞬き一つせず——個性を使わず、鎮圧する。イレイザーヘッド、最善の行動だった。

次の瞬間……電花の姿が消えた。

「なっ!？」

瞬き一つしてなかったおかげで電花の予備動作をイレイザーヘッドは垣間見えていた。ほんの一瞬足先が地面にめり込むところだったが……跳んだことだけ分かっていた。

背後を振り返るとさつきまでと変わらない電花の姿があった。壁に当たるギリギリであり、力の調整が完璧なのだと言っていた。

「こせいを……つかえなくする?ならこう!」

電花は思い切り拳を地面に振るい、ドオン!という音と共に粉塵が閉じられた部屋全体を覆わせる。

全員の視界は狭まり、身長が1m程度しかない電花は一瞬で姿を隠していた。瞬きすらしてないイレイザーヘッドがほぼ見えなかった身体能力を持つヴィランが姿を完全に隠す。

十分過ぎる脅威だった。

「やられたっ……!」

「イレイザー!俺の近くへ!」

ロックロックが前面に出てイレイザーヘッドをかばう。ただでさえ身体能力で圧倒

的な差があるのに個性まで使われたら勝ち目は無い。

ロックロックが「締」めたとしても服はほぼ無いため効果は薄く、次の戦闘があるかも怪しい。盾となるのは合理的な判断だった。

だが、電花は天<sup>合理性と相性が悪い</sup>。然なのだ。ある種天敵とすら言える存在だった。

「あなたたち二人は、こわいからあとで」

「しまっ」

怖いから。たったそれだけで相手がプロヒーローであつても戦う優先度を下げる。凶悪なヴィランを後回しにすることが難しいヒーローとは考えが違うのだ。

二人とすれ違つた電花が跳んだ先には、ヒーローと共にいた警察たちがいた。

「があー」「ぐう！」

電花が拳を振るい、粉塵が舞う中で倒れる音と声だけが響く。イレイザーヘッドとロックロックは声が聞こえてしまうからこそ動けなかった。

戦力で言えば警察一人とプロヒーロー一人では圧倒的にプロヒーローが上回る。今ここにいる警察全員とプロヒーローを天秤にかけても良くて等価とすら言えるのだ。ここにいるプロヒーロー二人は合理的であるからこそ……失つてはいけない戦力であるかどうかの判断で迷う。

さらに加え、警察たちが多少バラけているにもかかわらず次から次へと悲鳴が聞こえ



るのが問題だった。

次から次へと声が響くということは、電花が五感で警察の位置を認識できているのだ。電花も見えていないにも関わらずそれができるといふことは、今にも二人に跳んできたとしてもなんらおかしくない。

闇雲に動いても無駄であり危険。合理的だからこそ動けないのだった。

「保つか？」

「……ダメですね。もうじき解けます」

悪いことは続く。もつとも気にしなければならぬ事象のリミットがすぐそこだった。

すなわち——

(戻った)

——個性『消失』のタイムリミットだ。

「頭に直接……!?!」

個性を使えなくても翻弄される。なら戦闘用であろうとなかろうと個性を使える状態ならさらに翻弄されるのは分かっていた。

未だ粉塵で見えない姿。しかし声だけは確実に聞こえる。五感を翻弄するには十分過ぎた。

（面倒だったよー！）

子供足らずの声ではなくきつちりとした声が頭に直接届く。電花の個性『広範囲電波』は何も広範囲に届けるだけではない。応用すれば一人だけに送ることも簡単であり、頭で考えた話し方で話すことすらできるのだ。

少しずつ粉塵が収まり、二人の視界が鮮明になっていく。そうしてようやく電花が行っていたことが判明する。

上下左右、明らかに壁を蹴っているとしか思えない足跡がそこにあつた。

「超高速で常に動き続けているのか……！まるで緑谷の全身身体強化みたい……！」  
「着地点なら速度は落ちる。そこなら」

ロックロックのアドバイスもイレイザーヘッドは舌打ちを一つしただけだった。

（分かってるでしょ）

「ダメだ、暗すぎる」

そもそも地下であり明かりはそこまでのない場所なのだ、遠ざかれば暗くなり視え辛くなる。そこに高速で移動しているという要素を加えれば、見れるのは運が良くて一瞬だけだ。

（動き回るのは慣れっこだからね！）

「ガキだな」

「見た目通りだな」

警察の大半が崩れ落ち動くのが精一杯程度にダメージを負った時——電花の動きが止まった。まだ戦いは終わっておらず、誰もかれもが立ち上がることはできるのにも関わらずだ。

その原因は、勘<sup>M.S. ダークライの子供だから</sup>が鋭いからだだった。

「……っ？なにこのけはい」

まだ遠くにあると電花も分かっている。けれど無視できない気配が向かってきているとも分かっていた。

電花にとつての優先度で言えば、目の前のヒーロー達よりも遥かに脅威の存在だった。

「止まった？」

「締めるぞ！数秒だけが十分だ！」

動かなくなり独り言を呟く電花に捕縛布が伸び、消失の瞳に囚われる。

だが電花にとつてはそんなことよりも向かってきている者の方が集中すべき存在だった。眼中<sup>ヒト</sup>にない者<sup>コト</sup>のことなどはや頭の中には無かった。

「あ、使えなくなっちゃった。……おかーさん、じゃ、ないよね。誰？」

捕縛布が電花を巻き、見た目上は捕まえることに成功する。

既に電花の顔はヒーロー達を向いておらず上を向いているのだが、イレイザーヘッドとロックロックは注意が他所に向かっているとしか考えていなかった。

何せ電花は強い。二人は電花が油断していることや注意が他所に引かれていることまでは考えても、何故他所に引かれているかまでは理解しなかったのだ。

「だつきでもない、あではでもない……こせいのあるだれかがたべた？」

「捕まえた！他の面子の救助を」

ロックロックがイレイザーヘッドの捕縛布を『締』める。『消失』され、捕縛布に巻かれ、その捕縛布も『デッドボルト』で強化されている。

タルタロスにいるようなヴィランでさえ動くこともできなくなる——はずだった。

「それじゃあそぶのはこれでおしまい」

ブチブチという音と共に電花は布を千切っていく。凍らせたり燃やしたりした訳ではない、ただ単純な力だけのものだった。

「あり得ん……！破れるとすればオールマイトと同じレベルだぞ……！」

「しらなかつた？わたしたちはおーるまいとがきじゅんなんだよ」

捕縛布を引き千切り自由になった電花はパンパンと埃を払い……何かを察したのか

後ろの壁を振り向く。

「——っ！なに!?!」

ドガアアアン！

咄嗟に横に跳んだ電花が見ていた壁が壊される。そこにはデクとナイトアイの姿があつた。

■ ■ ■

「緑谷!?! 作戦はどうした!?!」

「先生!?!」

デクとナイトアイが壁を壊し合流しようとしたことはイレイザーヘッドにも分かる。

問題はそこではなく、分かれる前には各個撃破の情報が伝わっていたにも関わらず合流したのだ。

更に疑問を告げようとしたイレイザーヘッドの思考を、ヨロヨロと動くナイトアイの言葉が晴れさせる。

「作戦は変更だ。今すぐルミリオンの後を追う！逃げれる者は撤退を！」

警察もヒーローもその言葉に迎合する。幸い逃走用の通路自体は塞がれておらず崩壊もしていない。逃げることは出来る状況だった。

そして追う方向もナイトアイなら予知で分かる。正確には、追うべき者がいるという

事実を知っている。

「待て、まだそいつがいる」

「っ!? M.S. ダークライの!」

デクが電花を認識し、即座に構える。のほほんとアホ面をしていた電花はそこでようやく「向かってきている何か」を察した。

「あー……そーいう。じゃあかえるね」

「……え?」

ばいばいと手を振りM.S. ダークライがいるであろう方向の壁へ拳を振るう。それだけでデクが破った穴どころではない厚さを貫通し、道を作っていた。

タツタツと作った道を走っていく電花を見、デクは100%フルカウルを維持しながらも警戒を解いた。

「逃げた? 向こうの作戦ではないのか……ロックロックと無事な面子は即時撤退を!」

イレイザーヘッドはナイトアイの言う通りに指示を出す。警察の大半が負傷している以上、撤退にも護衛が必要になる。イレイザーヘッドは戦力として外せない以上、ロックロックが行くしかない。

そしてナイトアイはデクとイレイザーヘッドに進行方向を告げる。

「ルミリオンがいる方向は、やつが逃げた先だ。行くぞ」

ナイトアイは電花と壊理が友達であることを知っていた。そして今回M.S. ダークライから直接、自分よりも電花を気にしろとも言われている。

となれば電花が何かしらの危険を察知したなら真つ先に向かうのは壊理の下だ。予知などせずとも十分予測できる範囲のことだった。

「一体何が起きて」

「何かがこちらに向かっています。おそらくM.S. ダークライの仕業の何かが」

「了解した」

即反応したイレイザーヘッド。それも当然であり、既に聞こえてきているからだ。

ズズン……ズズン……ズズン……

進撃している何かがある音が。

「この地鳴りか」

「近づいてきている……！急いで！」

ロックロックと警察は撤退へ。デク・ナイトアイ・イレイザーヘッドは追撃へ走る。唯一負傷しているナイトアイは走るのもきついため、仕方ないとデクへ一言告げた。

「デク、私を担いで走れ。イレイザーと並走しろ」

「サー・ナイトアイ。そこまでの傷なら撤退を」

「大丈夫だ。私は死なん」

「……分かりました」

ナイトアイは予知がある。死なないと断言されたということはナイトアイが死なない予知がされているということだ。

ただ一つだけイレイザーヘッドには気がかりなこともあった。進撃してきている存在、それが個性によるものならば消失で消せる。その事実を、逆手に取る。

「私が視れば大丈夫なのでは？」

「……異形系の個性の可能性がある」

「現段階での一か八かは辞めておきたいところですね」

ナイトアイの返答からイレイザーヘッドは珍しくも舌打ちを一つした。撤退の判断をするほどの存在の可能性を予知できていない事実、それが分かったのだから。

「……予知も万能って訳ではないんですね」

「ふっ、未来は変えられるものだ」

イレイザーヘッドの言葉にナイトアイは微笑む。その表情はこれが悪いことではないと言っていた。

「ただそれは悪い方向にも……良い方向にも、だ」

ナイトアイは既にこの戦いを予知していた。ナイトアイの予知はM s. ダークライの干渉込みで言うところと十分先程度の未来ならまるで分からないものだが、数分にも満たな



い未来くらいまでなら大まかに分かるのだ。

しかしその予知はナイトアイ自身想像だにしないものであり……同時にそうなる予測も考えられる余地があるものでもあった。

「それはどういう」

「敵の敵は味方、ということだ」

ヴィランはどこまでいってもヴィランであり、ヒーローもまた同じ。予知に見えた二人の男の姿は分かりやすくそれを示していた。

マッチアップ オーバーホール&根本&クロノスタシス  
VSルミリオン

地下通路の奥の奥。待ち構えているようにも……逃げるための準備をしているようにも見える様子のオーバーホールがそこにいた。

左右に根本、クロノスタシスの二人を連れ壊理を守るように立ち、背後からの気配に反応する。

「すいませんね……少し話聞かせてもらっていいですか」

振り返ったオーバーホールの視界には、ハアハアと息切れしながらも傷一つない姿のルミリオンが立っていた。

オーバーホールが特に驚くことは無い。ヒーローの個性を全て知っているわけではないからだ。地下にすぐ来れるような個性の者だったというはず……その程度の認識だった。

「あの時の……すぐ来れるような道ではなかったはずだが」  
「近道したんで……その子保護しにきました」

「……事情が分かったらヒーロー面か、学生さん」

オーバーホールはルミリオンへ侮蔑の視線を向ける。

事情が分からないから踏み込まない。ヒーローとしてその選択は間違いではない。

しかしあの時のM.S. ダークライには踏み込んだ。だどいうのに壊理には踏み込まなかった。その違いがステインが求めるような純粋なヒーローから遠ざかったと言えるのだ。

なぜなら、救うべき存在がいたのに見捨てたとと言えるのだから。そしてそれを最も感じるのは——被害者だ。

「あの時見て見ぬ振りをしたよな。お前に保護されることをこの子は望んじやいない……」

この子にとってお前はヒーローじゃない」

オーバーホールは分かっていた。直接的な言葉を使うのもそのためだ。

そんなヒーローに向ける感情は一つだけ。

「……だから来た」

「伝わらないな。分かりやすく言ってやろう」

殺意が三人から放たれる。雰囲気だけでルミリオンに重くのしかかる圧力は、ただのヴィランどころではないことを分かりやすく示していた。

「死ぬってことだよ……俺達の手でな」

「っ！」

オーバーホールが手を床に当てる……と同時に床が分解されていく。床が岩に分かれ、石に分かれ、小石に、指先程の小ささまで分解され、次の瞬間に修復される。棘の形へ形を変えて。

個性『オーバーホール』。特徴は分解と修復。鍛えられた個性は、目に見える床全てが変わっていくことを容易に可能にする強力なものだった。

(修復つてレベルじゃない!?)

両脇から串刺しにされるも透過の個性でルミリオンはすり抜ける。個性の相性が良くなければ死んでいた。

しかし相性というのは特定条件下で最大限に発揮されるもの。オーバーホールの個性との相性は良かったが、ここにはまだ二人のヴィランがいる。一人の個性との相性は……既に測るところだった。

オーバーホールの個性で修復が終わったちようど同じタイミング。根元が口を開いていた。

ルミリオンへ、疑問を届けるために。

「どういう個性だ?」

『透過』! あらゆるものをすり抜ける!」

意志とは無関係に答える言葉。声に出してからハッと気づく自分自身の意識に、ルミ

リオンは個性を使われたのだと予測する。

予測は正解だった。根元の個性は『真実吐き』、本音を話すことを強制する個性だ。根本に疑問をかけられれば、答えなければならぬ。身体が勝手にそうしてしまうのだ。身体を完全に操作できるような化け物以外には確実に効く個性だった。

「厄介な個性だな」

「本音を喋らせる個性……！」

とはいえ一度くらい分かります個性だ。ルミリオンも一瞬で個性を見抜き、厄介な個性と即座に判断する。

ルミリオンからすれば放っておいても戦闘力は無い。ただ自らの言葉に、本音に、感わされる可能性は十分にある。壊理を一度見捨てたと言われれば、動揺の一つくらいはする自信はあった。

（玄野の個性は分かっている『クロノスタシス』……直撃すれば終わり。全員厄介だな）

「玄野は隙を見て刺せ。根本……二つだ、使っていない」

「了解」……っ！分かりました」

オーバーホールの言葉に二人が頷き、二歩ほど離れる。戦闘力は無いが殴る蹴るといった戦闘のフォローができる距離だった。銃器なら即直撃できるだろう距離でもある。

明らかな戦闘へ向けられた様子に、ルミリオンは表情には見せず……困惑していた。奪われたくない者がいるヴィランの動きではなかったからだ。

「逃げないのか？」

「山々だがな。理由があるのさ……ヒーローには分からない理由が」

エリが奪われるかもしれない可能性を賭けてなお譲れない理由。ルミリオンには一つだけ見当がついた。一つだけという特定が、思わず口を開かせていた。

「……Ms. ダークライか」

「察しが良過ぎるのはよろしくないな」

凶星を指されたのか、再び地面に手をつき床を分解、さらに鋭い棘へと修復する。

さつきよりも速いスピードで。

さらに壁を作り逃がす気はさらさら無いと意志を示していた。

（早い！経験で培った透過ですら反応が一部遅れてる!?!）

透過の個性は強力だがオートでは発動しない。全範囲攻撃だと狙われている・当たる場所の予測しかなり大きく透過させなければならぬ。腹に直撃するなら足と顔以外全て、顔に直撃するなら上半身全体といったように。

上手くいかなければ壁に埋まる。透過を解除すれば高速で壁の外へ射出されるため死ぬことは無いが、自らの狙った動きは出来なくなる。

強い個性だが、使うのが難しいのだ。今のルミリオンのように、使いこなしているのは経験・鍛錬の成果に他ならない。

今の攻勢一つとつても、ルミリオンが無傷なのはひとえにナイトアイの下で『予測する力』を鍛えていたからだ。

だが鍛えていたのはそれだけではない。それだけなら雄英高校でビッグ3と呼ばれる程の実力者にはなっていない。予測・判断・分析できる能力も兼ね揃えるように鍛えていた。

「くそ……いや、違う」

これでは勝てるか危うい。そんな思考を一度ルミリオンは止めた。

分析すればするほど千日手であり倒せないしエリの身に危険が及び可能性が高かった。エリを保護できればヒーロー<sup>ルミリオンの</sup>の勝ちであり、敗北とエリに危険が及ぶことだけが負けなのだ。

ルミリオンは知っている、信頼している。サーナイトアイの戦略眼を。

ならばここでやるべきことは決まっている。大前提を足止めとし、可能な限り打倒へ戦いを進める。もちろんエリちゃんを保護しつつだ。

「捕まえるかどうかは二の次だな」

「随分と舐め腐った言い草だ」

まるで自分を生殺与奪を考えるような言い方に、オーバーホールは静かに怒る。怒り、その感情は隙を晒しやすくする。

そして先ほどよりも鋭くなった棘は、ルミリオンにとって壁のように扱える。

オーバーホールが再び攻勢に出ようとした一瞬、ルミリオンは一步だけ下がり、棘にぶつかり後ろ半身をすり抜けさせる。

半身だけ身体を壁に埋める。それがルミリオンの必殺技のための予備動作。

「必殺——ファントムメナス！」

「っ！」「マズい！」「若！」

ファントムメナスは個性による物理的反発——要するに線の動きになるが一瞬だけ超高速で行動できる必殺技だ。両の拳が根本とクロノスタシスの二人に突き刺さり、そのまま吹き飛ばされる。

通ったのは一撃だがヒーローの必殺技の一撃というのは並大抵の威力ではない。必ずこれをすれば優位に立てると明言できるアクションなのだ。

事実、一撃で二人の意識を吹き飛ばしていた。オーバーホールが触れることも出来ずに後方へ吹き飛ばされ、修復も届かない。

「すり抜け……面倒な動きだ」

「俺の方が！強い！」



自らを鼓舞するようにルミリオンは宣言する。

オーバーホールは強い、一撃ではルミリオンは倒し切れず、一撃与えては修復される。だがオーバーホールの攻撃はルミリオンの届かない。油断するような隙さえあれば致命傷を与えられるが、隙を見せない。

10分強程の時間、油断一つ無い均衡の取れた戦いは続く。そしてズズン……ズズン……という音が随分と遠くから聞こえ始めた時、均衡は崩れた。意識を取り戻した一人の男によって。

「若ー」

オーバーホールが修復できればそれが理想だった。だがルミリオンの攻勢はオーバーホールが後退し二人の下へ行かせることさえ許しはしなかった。

壊理を守らなければならないという条件も相まって、二人が自然に意識を復活させるしかオーバーホールには手がなかった。ギリギリで間に合ったのだ。

「根本！撃て！」

銃に込められた弾は二発。そのどちらも個性破壊弾であり、使つていいからルミリオンへ隙を見せろという指示だった。

オーバーホールが撃つという指示を出すということ。そして指示されたアクションは銃弾を放つこと。ルミリオンは持っている情報から即座にそれが個性破壊弾を放つ

のだと理解する。

「っー！」

当たればマズい。だが同時に襲ってくるオーバーホールの攻撃が視界を覆っていた。全身透過すれば問題ないが、射出する方向を定められない。

下手すれば壊理に直撃する可能性だってあるのだ。仕方なしと全身を透過させルミリオンが地面に埋まり始めたその時――

「無駄撃ちはダメでしょ」

――聞こえてはならない声がルミリオンの耳に届いた。

埋まるギリギリで見えた視界に映ったのは銃弾をつまむように止める成生の姿。最も恐れていた事態がルミリオンのマッチアップで起きていた。

「オーバーホール。まだやってたの？」

すなわち、依光<sup>M.S.ダークライ</sup>成生の参戦。戦う気は無いと言ってもここは戦場、居るのなら戦うのがヴィランとヒーローなのだ。



力を満ち足りた姿で現れた成生。表情は微笑みながらも、自信満々といった顔つきに

なっていた。

「依光成生！」

「遅かったな」

「成生おねえ……ちゃん」

三者三様の反応。対する成生は頬を赤らめてニヤニヤとした笑いになっていた。

もし戦闘の場でなければ身体をくねくねとさせて興奮を抑えていなかったことだろう。

「しよがないよね……身体が火照るくらいには熱くなったことがあったんだあ」

恋する乙女が想い人のところに行っていたのだ。そして嬉しい言葉や行動を貰えた。恋愛のボルテージという意味では最高潮を経験したばかりなのだ。

テンションが上がって仕方なかった。

「気分がいいんだよね……オーバーホール、私にしてもらいたいことでもある？」

「それならさっさとあいつを排除してくれ。面倒だな」

「三対一で負けるの？二人倒れてるし……あ、一人は復活してるね」

冷静に場を見渡して状況を確認しただけ。成生にとってはそれだけがオーバーホールにとっては失態にも近い。挑発的な言い方であるとも言える。

「……随分とイラつくところを突いてくるな。本当に気分がいらいしい」

「私は嘘は吐かないけど。受け取った人が嘘を吐いたと思うことはあるかもしれないね」

更なる挑発。成生にとっては最早区切りをつけた組織であり、オーバーホールは捨てていい存在なのだ。

遊べる玩具程度の認識であり、挑発に意味など無かった。

ただそう思ってるのは成生だけだ、言葉の受け取り方は各人によつて異なる。ここにはそれ以外の人の数の方が多い。

「M.S. ダーククライ……でいいのかな？」

対峙しているルミリオンが口を開く。その声が聞こえると同時に、成生の瞳は一瞬で混沌に濁った。

雰囲気や威圧感も烈怒頼雄斗と居た時のそれとは別物。乙女などではない、頂点に位置するヴィランがそこにいた。

「ええ。変装してるから気づきませんでした？」

「残念ながらね」

「ふふっ」

ゆつたりと一指し指をルミリオンへ向ける。いつでも殺せるとも、お前に言いたいことがあるともとれるものだ。

「——嘘は良くないですよ？」

M.S. ダークライの言葉にゴクリとルミリオンの喉が鳴る。冷や汗も流れ落ちており、嫌な予感を五感で感じ取っていた。ジリジリと後退する程の威圧だった。

「私のことは知っていたでしょう、ナイトアイのサイドキックさん？」

嘘は良くない、ナイトアイのサイドキック。たった二つの情報だけがそれだけでM.S. ダークライは結論まで届く。

直感が第六感と成り、思考も加速できる。最上の情報処理能力がそこにあった。

「壊理を傷つけたくない、電花が一番止めるであろうこと、ナイトアイに伝えた情報はそれだけ。感じ取った情報は別……例えば、服装や雰囲気」

「っー」

「私があなたに感じ取ったという意味でもある。あなた……いえ、ルミリオン、雰囲気が出たあの時と対して変わってない。つまり、戦おうとしていない。」

それが意味する結論は一つ。あなた達ヒーローの狙いは、私を戦いの土俵に持ち込ませないことね？」

「何？だが俺と戦っていたぞ」

「私が介入することに条件があるとでも思っていたのでしょうか。だけど忘れてないかしら？」

私は——目立ちたがりの気まぐれなヴァイランなのよ？」

M s. ダーククライの言葉を皮切りにルミリオンはフアントムメナスを発動する。気圧されて後退していたのは間違いなかったが、壁にぶつかるためでもあったのだ。

レーザーが放たれるよりも早く全身透過を発動、一瞬で二人をすり抜け——エリを抱きしめる。

「な?」

オーバーホールの驚きも無理はない。ここまでの戦闘で壊理を奪おうとしなかったのだから。

もちろんオーバーホールが阻止していたということもある。油断しないオーバーホール相手に隙を突くことはできなかった。

しかし、M s. ダーククライという存在が現れたことで精神的に余裕ができてしまったのだ。M s. ダーククライが守るだろうという安心感、そこを突いたのだった。

ただそれが……正しい選択だったのかはまた別の話だ。何せM s. ダーククライの反応速度は頂点、反応出来ない訳がないのだから。

「壊理ちゃんが奪われている……それが私を止められる理由になるとも?」

「……違うのかい？」

ニタリと笑うM s. ダークライ。邪悪にも見えるその笑顔は明らかな害意を持っていた。

「違いますよ」

否定の言葉に、壊理の目に陰が落ちる。ずっと信じてきた人が、信じたことが間違っていたと思わせる言葉を吐いたのだ。幼子の壊理には、トラウマになりかねないほどの傷だ。

そして反応したのは壊理だけではなかった。M s. ダークライへ——地面から棘が突き刺さる。

「治崎!？」

「事情が変わった。手伝え、ヒーロー」

突き刺さったはずの棘は服に届くギリギリで粉碎されていた。棘が刺さる前に両手でビンタするようにはただけ、たったそれだけだがM s. ダークライの今の身体能力ならそれだけで十分対処できていた。

「まさか私に向かつてくるとはね。ルミリオンも巻き込もうとしているのは……オーバーホール、あなたの策略？」

距離をとったオーバーホールに疑問を口に微笑みかける。その声色は普段通りにも

見えたが、それなりの付き合いであるオーバーホールには分かる。

意外にも、驚いている声色だった。

「いいや違う。お前の策略だ……分かってるんだろう？」

真剣な目つきのオーバーホールに対しM.S. ダークライは不敵な笑みを零すだけ。今のM.S. ダークライとそれ以外という形で戦力の天秤は釣り合う——デクがO.F.A.100%で戦える。潜在能力が全て使えるならば。プラスウルトラ、限界を超えて到達すれば届くギリギリなのだ。

ただ策略とは言われればノーであり、偶然かと問われればその通りだった。

M.S. ダークライ 依光せいは、自らの直感を信じて行動していただけ。そこに策略など無く、我儘な行動が結果的に策略となっただけなのだった。



## M s. ダークライ V S ヒーロー &amp; ヴィラン

「エリを奪われるのはもはやどうしようもない、お前がエリを気にせず戦うつもりなら尚更だ。なら全員皆殺しにする以外に道はなく、お前が最も邪魔であり倒せる可能性があるある選択はこれしかない」

オーバーホールの選択は共闘。M s. ダークライがエリに害を加える可能性が出た以上、抵抗しないという選択はとれない。それなら可能な限り戦力を準備するしかなく、今戦える者を集めるのは必然。

M s. ダークライはルミリオンの方へ一瞥する。オーバーホールから目を離していたが、オーバーホールからはM s. ダークライに隙など見えなかった。

「ルミリオンも同じ考え？」

この共闘はかなり唐突な提案だ。受け取る側が拒否することも容易であり……事実、返事はそつけないものだった。

「エリちゃんさえ保護できればそれでいい」

エリを抱きかかえながらルミリオンは答える。しかしその返しは、M s. ダークライを愉しませるものでしかなかった。

「そう……じゃあエリを殺してでも奪い取ると言ったら？」

「……戦いたくはないかな」

戦意に火が付いているM s. ダークライは適当に理由を付けてでも戦おうとする。ルミリオンからすればたまったものではない、何せようやくエリを保護できつつあるのだから。

しかし感情だけでダメとは言えなかった。理由は簡単だ。

「正直ね。ただ私とオーバーホールが戦えば被害が出る、見逃さないでしょう」

「っ！」

戦えば被害が出る、それは間違いなく地上にも及ぶ。M s. ダークライの広範囲攻撃が避難もしていない街中で起きれば起きるのは惨劇だ。

それを止めるためにヒーローは戦うのだ——

「ところでナイトアイ、予知はここまで見えていたかしら？」

——ここに賭けた全員で。

「お前の未来は知らなかったが、お前の<sup>烈怒頼雄斗</sup>ヒーローの未来から……ここまでは決まってい

た。ここから先は知らないがな」

ルミリオンの後ろから、デク達三人が合流していた。

デクに抱えられていたナイトアイは自力で立ち、ルミリオンの横に並びM s. ダークライと対峙する。師弟並び立つ姿は、ボロボロであっても輝きそのものは失わない。

未来は過去に行つた予知で決められていた。過去で行つたことが未来に関わるのだ。だからこそ——M s. ダークライはヒーローの背後の上へ指差しニヤリと笑う。

「ならあれも見えてなかったようね」

ズドオオン!!!

指さされた先、天井から数本の触手がなだれ込む。デクとナイトアイ、イレイザーヘッド、ヴィラン連合も含めた面々が逃げた方がいいと判断した巨大な化け蛸。それが遂に追いついたのだった。

一振りでも命中すれば確実に吹き飛ばされ地中に埋められるであろう大きさ。動揺するのも当然だった。

「なっ!!?」「追つてきてたのは蛸……!!?」

引き起こした、ただ一人を除いて。

「ここからの未来は私が作るということ、あれが分かりやすい象徴でしょう?」

M s. ダークライは知っていたわけではない。ただ蛸から自らの何かを感じ取った

だけだ。

感じ取れば自らが引き起こした何かであることくらいは分かる。ならばM s. ダークライが過去に誰かへ何か影響を及ぼした結果が今に届いたと言えた。

化け物サイズの蝮、個性によるものだと言ったと誰もが思うために……即座にナイトアイは判断を下す。

「つ！未来は我々が作るのだ！イレイザーヘッド！」

「分かつてる」

個性によるものなら抹消の個性が効く。即影響が効いたのだが……イレイザーヘッドとルミリオオンが目にしたのは、確かな信頼を持つ者であり突入時にはそんな姿などしていなかったヒーロー。

「天喰……!?!」「環!?!」

最もプロに近いと信ずる教師と、誰よりも輝けると信ずる親友。そのどちらもが目の前にM s. ダークライという脅威がいるにもかかわらず、動揺を隠せていなかった。

対して陥れた張本人である彼女は、ただ嗤うだけ。

「私と敵対すればこうなるという、目に見える被害ね。」

フフ……アハハハハ！あの子は随分と歪な姿になったのね！歪んだ姿になりたいだなんてヒーロー失格でしょう!?!本当にヒーローなの!?!私と一緒に来た方がいいんじゃない

ない!？」

「……っ!」

滅多に怒らないルミリオンの顔が怒りに染まる。それでも感情に任せて行動に移さないのは流石ヒーローと言う他ない。

十分にパフォーマンスができたときM s. ダークライは天井に指していた指をそのままヒーローに向けようし、マズいと直感し動きを止めた。

同時にルミリオンは天喰とエリをデクたちが破壊してきた壁の外へ連れ出していた。

「指一本動かさず」

動きを止めさせたのはオーバーホールの仕業だった。

それ以上指を下げていれば床から伸びて来ていた棘に刺さりそのまま千切れていた。オーバーホールの分解と修復で、地面から棘がM s. ダークライの身体の間を動かさないように生えていた。

無理やり動かせば可能だが数瞬の時間がかかる。となればその数瞬で相対している面子なら何か対策を打てるのは容易に想像がたった。

ただM s. ダークライは、身体を動かさなければ戦えないなどと思ってる彼らを滑稽

と見ていた。

「……身体を動かす必要がどこにあるの？」

「な」

マスターピースであるM s. ダークライの身体は自在に動かせる。例えば——髪先。

「髪の毛……っ!?!」

依光成生が最も研ぎ澄ませている個性は『指先発光』。ただこれはあくまで個性登録していた時はそう見えていたからというだけに過ぎない。実際は、応用して扱えば身体の『先』と成せる箇所からならどこからでも発光できる。

異なる未来で爆豪が『クラスター』と呼ばれる技能にて掌の汗がニトロ口になるのを、別の箇所の汗から発動できるようにしたようなものだ。個性の応用ではあるため困難なのだが、M s. ダークライからすれば息をするより簡単だ。

しかしこれまで鍛えてきたのはあくまで五指からのもの。髪先からレーザーが放たとしても、威力はまるで収束できていないものだった。髪先からレーザーが放

た威力は低い！ただの熱いだけの光だ！「レイザーヘッド！」

事実、自在に髪先を操作し全方位に放たれるレーザーはナイトアイに火傷すら負わせていなかった。

それでも全方位に光っている髪だ、眩い光は目くらましにはなる。同時に光である以

上、目には影響が出る……つまり、イレイザーヘッドが直視を躊躇う程度の隙はできる。「そう、それだけで十分——あなた達程度ならね」

今のM s. ダークライのレーザーはただの光ではない。正確には、個性だけではないのだ。

依光成生は熱と光、そしてダークマター染みた特性を持った何かを伸ばしていると認識していた。間違いではない、だがそんな個性は今も存在しない。

正解は、マスターピースによる『成長』だった。レーザーではない、成長で爪が伸びているように、髪先であったり指先が実際に伸びているのだ。

ただ元々の身体以外のところ、ダークマターのような特性を持った伸びた部分は老廃物のように即座に消える。それらが結果的に依光成生が認識している特性を持っただけなのだ。

そして今のM s. ダークライは何となくという直感だけで自らの成長さえも操作する。伸びた部分は消さないように……鋭くなるように。

「髪が鋭く……!?!」

「う……」

この場にいる全員に髪先からのレーザーは当たっていた。そこから鋭く針のようにしたのだ、一歩でも動けば刺さる針地獄の形成だ。さらにほんの少しだけ髪先をずらし

針がそのまま切り傷を作る。

さらに髪先程度に手間取っているなら丁度いいと言わんばかりに、Ms. ダークライは身体の間を生えている地面から生えた棘を力任せに破壊していく。

縛りのないMs. ダークライには個性が使えない状態にしなければ勝ち目は無い。肝心のイレイザーヘッドは視界が髪先で埋められており、Ms. ダークライが見えていなかった。

「暴れるとなると流石にイレイザーヘッドは邪魔ですね……で、ここからどうします？ 盾となるファットガムも烈怒頼雄斗もない。当たれば致命でなくとも傷を負う。

「どんだん脱落していくだけね？」

ほぼ制圧されたに等しい状態。動けるのはすり抜けられるルミオンだけだが、身体能力には差がある。なにより『成長』も使い始めたMs. ダークライの攻撃は範囲攻撃が増えている。

目の前の状況からルミオンも単独で戦ったところでいつかすり抜けが失敗する時が来るのは分かっていた。考えている間にも状況は動く。

すり抜けができなくとも、傷を負っても、死ななければ戦える者がここにはいるのだ。

「俺を、舐めるな」

「あら」



全身に傷を負いながらもM s.、ダークライの髪先に手を触れ分解する。しかしM s.、ダークライも分かっており分解されるよりも早く髪先の成長を終わらせ元の姿へと戻る。

髪先による制圧が終わる。それは同時にイレイザーヘッドの視界が戻り、M s.、ダークライの身体を捉えることを意味する。

「仕方ない、それじゃあ動きましよう」

「その前にお前は死ぬがな」

オーバーホールの身体能力は高い。ルミリオンと個性無しで戦っても互角程度にはなるだろう。油断しているM s.、ダークライ相手なら近づくことくらいはできていた。

ただ触れられるかは別の話だ。

「っ!？」

「私に触れられるわけがないでしょう。誰だと思ってるんです?」

M s.、ダークライの身体能力は消失により素の身体能力だけとなっている。つまり変身したトガと同じ程度であり、O F Aにすると25%を優に相手どれるくらいだ。放射神経は異形により光速のままであり、予測した攻撃すら反応できるレベルである。

しかしそれ以上に厄介なのは、鍛え上げた体術だった。オーバーホールも地下に潜っているヴィランの中では随一のものを持っている。個性の相性もあるが……乱破と五

回戦って全勝できる程なのだ。

が、Ms. ダークライは低く見積もっても同等レベルだった。オールフォーワンに準備してもらった弔との特訓と、学習能力が高いことに起因していた。

「分解と修復。触れれば死ぬ……かも分からないですがね」

「何……？」

触れられることも無く分解による棘もオーバーホールの腕による直接的な攻撃もヒョイヒョイと避けるMs. ダークライ。そして髪先が根元から分解されたことでヒーロー達もようやく動けるようになってきていた。

だがオーバーホールとは連携が取れる筈もない。オーバーホールもヴィランなのでから。

「やってみますか？」

ヴィラン同士の戦いは殺るか殺られるか。ヒーローの鎮圧するような戦いではなく、確実に殺す策は優先的に扱う。クロノスタシスと自分自身を分解し修復、腕を四本と頭から矢印のような特徴をした髪を生やし、当たれば強制的にスローにする能力を髪に付与する。

当たれば致命まで持つていける個性だ。

「いい度胸だ」

腕を増やし致命攻撃の選択肢を増やし、棘による先制で動きをけん制する。M s. ダークライは簡単に避けるが、避けるモーションは起きる。

オーバーホールの動きを見極めなければ連携はできない。だからこそ——一人だけは可能だった。

「やれ！治崎！」

ルミリオンが背後からM s. ダークライの視界を塞ぐ。完全に透過しているからこそできる手であり、オーバーホールとそれなりに戦って癖を見抜いていなければできなかったことだった。

「俺をその名で呼ぶな！」

激高するオーバーホールはその手をM s. ダークライに届かせ……触れた。

バツン!!

「倒した……のか？」

「分解したんだ、生きてる訳がない」

分解の個性により上半身が消し飛び、個性は抹消により使えない状態にある。戦いはこれで終わったと、ほんの少しだけ緊張感が弛緩したその時だった。

「そう思ってるなら間違いですよ」

地震が起きたように地下が揺れ、オーバーホールの二本の腕がグシャリという音と共に千切れ砕け散り矢印の髪の毛は千切られる。速過ぎる脚力は蹴りにより物理的に千切れる領域まで至れる、そこまでの力があれば千切った腕を蹴り飛ばすだけで砕ける。さらに再生途中であろうが腕まで生えれば髪を引き千切る等簡単だ。

「指先一本あれば私には十分、再生するんですよ」

分解によって吹き飛んだのは上半身だけ。下半身は残っており、身体全てが粉々にされた訳ではなかった。それだけあれば、彼女には十分だった。

「はや」

「身体を強靱にしてね」

倒した油断、一人には確実に拳を入れられる隙。M s. ダークライが選んだのはイレイザーヘッドだった。

殴られた勢いのままに受け身も取れず壁に打ち付けられる。イレイザーヘッドの意識もそのまま飛ばされていった。

抹消は、もう使えない。タイムリミットが設定されてしまったのだった。

「どうやって……!? 個性は消していたはず! 何をした! M.S. ダークライ!」

「……教えてあげると思う?」

ナイトアイの言う通り、超再生の個性を持つているものの抹消によって消されていた。それは間違いない事実であり……しかし、発動したのは成生自身は超再生の個性と認識している別の特性だった。

マスターピースと成っている以上、『成長』という個性でない部分には個性の消失は効かない。

さらに抹消の個性は、異形系には効きづらい。個性の影響を0にはできないのだ。本来の個性は異形の個性である成生は、既に超再生が持つ再生能力すらも自らの異形個性に混ぜていた。

本来であればマスターピースが持つ『成長』は津波のような指すら生成できる程のもの。それを自らの体の維持と、せいぜいが指や髪が伸びる程度に収めているのだ。あり得ざる超再生能力を持つのも当然だった。

「さて、どうします? まだやりますか……ヒーローにヴィラン」

本来の自らの個性を認識しないままに扱う成生。しかし異常には気づいており、何かが起きていることは分かっていた。

別の世界線ではオールマイトすら超えるヒーローの力を持つヴィランが、最適化などというダウングレードしていた力を握り潰し——目覚めていく。

纏っているように赤い蒸気が少しづつ湧いていく。まだ身体の表面に僅かに漏れる程度だが、成生の意志に関係なく身体から零れていた。



オーバーホールが吹き飛ばされ、ルミリオンも一度距離をとる。次なるヒーローの手は、Ms. ダークライからしても意外なものだった。

「私が前に出る」

「ナイトアイ!」「ナイトアイ、正気ですか?」

デクどころかMs. ダークライでさえ思わず疑問が口に出る程のアクション。だが続けられた言葉がMs. ダークライを納得させた。

「さっきのレーザーはもう使わないだろうか?」

「……予知ですか、先読みされてるようで面倒ですね。確かに使うつもりは無いですよ。今は消失中ですし、つまらないですし」

予知ではない。既に今日可能な分の予知の個性はほぼ使い切っており、使うタイミン

グも無かった。

ただのブラフ。しかし一言だけでM s. ダークライの行動を狭めさせていた。

M s. ダークライという人を調べたナイトアイだからこそその一手。制圧系の攻撃に對してオーバーホールが共闘できるからこそその戦術的予測。そしてそこから更なる決め手。

次なる一手はナイトアイにとつても賭けだ。しかしここまで来た以上賭けに乗らない訳にもいかない。しかし可能性はある。

「その驕りが我々に勝機を与えてくれる」

M s. ダークライが最強のヴィランである事実。切り捨てられたからだろう、あのオーバーホールがヒーローと共闘するという屈辱すら行つても戦おうとした相手。

その事実をM s. ダークライが認識しているという隙。そこを突くしか方法はなかった。

「驕り……ね。これは余裕って言うんです」

「驕りに決まっているだろう」

ナイトアイが半身に構え、投擲にハンコを構える。そして対峙しているM s. ダークライへ直線的に走る。

同時にルミリオンとデク、オーバーホールも行動を起こす。まず真つ先にオーバー

ホールが床を分解して棘にし、三人の動きを隠すように、M s. ダークライの視界を潰すように展開していく。

「また目くらましの分解ですか……いや、他の二人も」

「前に出るの一人じゃないってね！そして俺より強い威力持ちはいる！」

「っ！デクですか！」

今のデクはトガと戦った時と同じOFAの出力だ。ルミリオンよりも遥かに身体能力が増強されている。M s. ダークライといえど警戒した方がいい程度の近接戦闘の身体能力を有していた。

「消失のリミットまでにケリを着ける！」

「そうですか、残念」

「え」

パシツと軽い音と共にデクの蹴りが止められる。

警戒しているのは身体能力だけ。体術といった面ではデクはオーバーホールにさえ数段劣る。同等以上であるM s. ダークライが相手では身体の使い方が圧倒的に負けているのだ。

加えて言えば身体能力が近かったのはトガが変身した時の姿だ。今やあの時を超えているM s. ダークライとでは身体能力でさえ負けていた。



二人がかりで近づいて鎮圧する。そんな発想にM s. ダークライは溜息をついていた。

「はあ……決め手はどうするつもりですか？ オーバーホールも効かないとなれば私を倒そうなんてできないでしょうに」

「……さあね！ 無いからどうしようって感じさ！」「っ！」

「自棄ですか……」

M s. ダークライが気にするのは『自身をどうやって鎮圧・討伐・行動不可にするつもりなのか』という一点だけ。

デク・ルミリオン・ナイトアイは火力不足、オーバーホールは既に打つ手がないと信じ込んでいる、誰もが決め手を持っていないのだ。

疑問に答えたのは、少し離れた距離からサポートしていたオーバーホールだった。

「いいや決め手はある」

「オーバーホール？」

身体能力が増強され、耳もいいがためにM s. ダークライには聞こえてしまう。

それが、隙だった。

「これだ」

M s. ダークライは強過ぎる個性であり、油断を誘うとしても単独では困難。だから

こそ狙うべきはここしかなかった。

デクとルミリオンに紛れほぼゼロ距離まで近づいていたナイトアイが握っていた銃から――銃弾がほぼゼロ距離から放たれる。何度もオーバーホールは目くらましのためだけに分解していた訳ではない。もつとも不意を突いて近づけるであろう人物に、最大の切り札を渡していたのだ。

M s. ダークライがこの場で恐れるのはオーバーホールだけだった。最強のヴィランであり大した攻撃など効かないという自負もあるが、危険と判断しているのは事実であり……だからこそ効かないというパフォーマンスすら行ったのだ。ルミリオンという目潰しも面倒だったが、せいぜいこの二人だけだ。ナイトアイの近接戦闘など鎧袖一触と思考すらしてなかった。

故にオーバーホールは何かあるのだと声で誘い、近接戦闘で強い二人を先行させることで相対的に戦闘能力が低いナイトアイが油断を突ける。そして決め手は、既に直線に走るくらいなら支援できる場所にいるオーバーホールが渡していた。

オーバーホールが個性破壊弾を完成させており今の手持ちにあること。ナイトアイはその賭けに勝ったのだ。

放たれるのは、個性を破壊する弾丸。

消失はナイトアイがゼロ距離になった時からリミットは過ぎ既に個性は使える、転送すればこの距離ですら避けれる。が、思考を加速している思考は戸惑っていた。

(……避けないといけない攻撃。避けないと個性が破壊されて私は何もできなくなる。それは嫌だし、タルタロスどころか研究所に送られて実験生物扱いになるだろう

——そのはずなのに、避けないでもいいって思ってる私がいる。避けないならそんな未来があるはずなのに、大丈夫だと言っている私がいる

私は……どうすればいいの?)

個性を破壊する弾丸はM・S・ダークライの胸の中心へ向かい——

—  
打ち抜いた

## 個性破壊弾

壊理の個性「巻き戻し」、貴重で特別な個性だ。オーバーホールが壊理の個性を利用し作製した、個性破壊弾と呼ばれる弾丸にはその個性から派生した特性が込められ、個性だけを狙い「巻き戻す」。そして生まれる前まで戻して消し去り……結果として破壊される、そういう力だ。

「個性だけ」を狙うため、撃たれた後に壊理が別個に個性を利用し「身体全体」を巻き戻せば、個性もろとも破壊される前に戻るといった抜け道もあるにはある。

しかしその基本的仕様は、弾丸は直撃すれば個性だけが「巻き戻る」。

だからこそ、依光成生には効果的だった——悪い意味で。

「あ」

ヴァイランとしての覇気がどんどんしぼんでいく。それはM.S. ダークライという存在が消滅し、邪悪な欠片も全て消し去っていくようですらあった。

深淵色の瞳は邪魔な色を取り除くようにして碧色の瞳に変わっていき、色がどんどん透明な綺麗さを帯びていく。

「わ、たし……は」

力は萎み圧力も薄れていく——はずだった。

とある一瞬から逆に純粋な力が暴発するように極大化していく。地下にて抑え込んでいた、ほんの少しだけ纏っていた赤い蒸気が噴出し、戦っている面子……デクやオーバーホールたちを吹き飛ばしていく。

「がっ!?!」

「ぐう!?!」

「何、が!？」

瞳からは輝きが消え、ただ澄んだ色をした透明な碧色だけが残る。どこを見つめてるのか分からない視線はただ純粹さだけが残りながらも彼女自身は残っており、力だけがそこにある。

「いったい何が!？」

「銃弾は当たったよ!？」

「……まさか、ここからが本番か」

「個性は破壊したはずだ、なぜこんな」

デク、ルミリオン、ナイトアイ、オーバーホール。戦っていた面子は同じ場所に固まり赤色の嵐からひたすらに耐える。踏ん張るだけでは耐えられないためオーバーホールが床を分解して壁を作って耐えていた。

対して引き起こした張本人は、ただ宙を見上げて棒立ちしていた。

「私が……な……も……」

嵐の中心にいるせいには何も見えていなかった。目に映るのは……かつての自分の姿。思い出せない程昔の、子供の姿だった。



夢、もしくは精神的な世界、現実ではない別の場所。せいの意識はそこにあった。

「はいは……。」

瞳に映るのは五歳にも満たない頃の自分自身の姿。かつて住んでいた家のリビングの椅子に座り、足をぶらぶらさせながら、誰もいないテーブルの先へ顔を向けていた。

「昔の……私の姿。個性も持っていない頃」

ぼけつとした顔で屈託もない笑顔をし、どこにでもいる普通の幼女だ。何にも染まっていない瞳は碧色に染まっており、それ以外の色は何もない。

「ふふ、こんな子だったんだ」

思わず微笑んでしまうくらいに、普通の女の子だ。これが今に繋がるとはまるで思えない姿だった。

……そう、今に繋がるとは思えない姿なのだ。



「■■■■わたしー？」

五歳の子供が口にしたのは自問自答するような独り言。誰もいないリビングで、だ。そこで気づく、目の前の子供は何を見ているのかと。間違いない何かが見えている、意思疎通を行っている。それが何か思い出すよりも前に、目の前の子供は口を開いた。

「うーん……」

わたしはおとーさんとおかーさんのこどもだよー！」

純粹無垢な言葉。頭の中で何かが、カチリとハマる音がした。

同時に、目の前の光景は少しずつ霧がかかり視界自体が薄れていく。

「なんで今、こんな昔を思い出ししてるの？」

こんなタイミングで起こされたのだ、大事な記憶だったのだろう。

しかし思い出したところで特に大して思いつくこともない。大事なことがあつたはずだと認識できてはいるものの、まるで考え付かない。

考え付かないからこそ——成生は解決しようと思考を加速してしまう。

「なんでまた……。……違う」

五歳の頃の自分自身が独り言をした事実。概要はそれだけだが、内容は違う。

聞こえるように聞こえない疑問と疑問の欠片、回答が両親の子供であるというもの。

そこから先の未来に自分自身がいるという事実。それらだけで、成生は結論が出せて

しまう。

出せてしまう、のだ。

「■■■■わ■しを……知って、わたし……は……」

結論を出すギリギリで思考を限りなく遅くさせる。結論など出させない、これは夢だ  
と言い聞かせた方が遥かにマシだ。

そんなことが事実であつてたまるか

事実な訳が無い

だつてそんなことが

そんなことが

私が

一歩ずつ

選んで

選んで進んだ道だ

「まぎ……か……嘘、……だよ……ね………？」

許される訳が無い

許されていていい訳が無い！

事実がこれであつてたまるか！

じゃないと私は……私が……

「私……の……個……性は……」

気づいてしまえば、終わってしまう。依光成生という人は終わる。直感で結論に辿り着く寸前に成生は、頭の中を何も考えなくさせていた。

頭は空っぽのまま、子供よりのみっせいの姿の成生は遊びだす。



「超再生」や「土流」といった最適化されてきた個性が巻き戻しされ破壊されていく。発芽するはずだった……オールフオーワンに渡された、精神を侵食するよう改造された個性さえも巻き戻し消されていく。

個性破壊弾は確かに個性を巻き戻し破壊した。M.S. ダークライを構成していた個性『最適化』すら破壊しており、普通ならばそのまますべての個性を破壊するはずだった。

しかし本来なら生まれる前まで戻し破壊するはずの個性は、マスターピースという彼女自身の特性が邪魔したことで個性を初めて使った時までしか戻せなかったのだった。

彼女自身の本来の個性だけは消されない。それは彼女自身と呼んでもいいものだから。

それも当然、成生にとってマスターピースとは生まれた時からの身体的特性だ。個性と繋がっているのであり、個性を無くすとはすなわち彼女を殺すことを意味する。

だが個性破壊弾が彼女の体を塵程の粉々にした訳ではなく、ただ胸を撃つただけであり死んでいない。故に身体は鍛えられたそのままに、個性は初めて使われた時へ戻ったのだ。

——最も使いこなせたその時へ

「……わた……し」

赤い蒸気が衝撃を発するほどに依光成生の全身から噴出され渦巻き、エネルギーの奔流とも呼ぶべきそれは誰をも彼女へ等しく近づけさせない。

噴出する赤い蒸気はオーバーホールと言い争った後に地下の部屋で抑えていた規模ではない。竜巻や嵐とすら呼べるものであり今にも地下を吹き飛ばそうとしていた。

「やらせ」

オーバーホールが手を出そうとした瞬間、竜巻の中から視線が向けられる。向けられただけでオーバーホールは目に見えない何かに勢いよく吹き飛ばされ、背後に作っていた吹き飛ばされないよう作っていた壁に激突、ガンつと頭を打ち気絶する。



不意打ちだったため気を失わない覚悟ごと、意識すら刈り取っていた。

「瞳を向けただけで」

そしてその視線は何も起こさないうままに……彼女を止められる可能性のある二人組へ向けられていた。

デクと合わせた二人組——壁一枚で隔っていたところにいた彼女が、そこにいた。

「デク、は、誰？」

震える声を出すヒーローが保護すべき少女、エリ。たった壁一枚は壊されており、しかし四人がいる背後だったために嵐の影響は受けていなかったのだった。

背後に壁一枚隔っていたのなら、壁が無くなれば目の前にいるのも当然。そして求め

られた言葉は、意外なものだった

「エリちゃん、でいいのかな」

「せいお姉ちゃんを、止めて」

目を見開くデク達三人。既に満身創痍に近い三人では暴走を始めている彼女に届く筈もない。

できる可能性があるのは、エリを連れて逃げるくらいだ。

何より、デクは目の前の暴走している存在がどれほどの力を有しているのか欠片だけだが分かるのだ。そもそもがOFA25%で負けた上、受けていた圧力からオールフオーワンと同等なのは明白。

それが暴走している。オールマイトと同等以上なのは分かってしまうのだ。

ナイトアイも横に並び立った経験から、察していた。この場にいる戦力では、彼女を止めることはできないと。

「僕には……できない。あんな力は、僕には」

俯くデクに届いた言葉は、確信のある言葉だった。口を開いたエリはまるで、依光せいだが確信のある時に話す雰囲気をしていた。

「ううん、できる」

ガバツと顔を上げエリの方を向くデク。エリの額には角が生え、ほんの少しだけ光を放っていた。巻き戻す個性を使う際の光だ。

「お姉ちゃんが言った。怖いのはデクってヒーローだけだって」  
「でも、それは」

依光成生なら警戒するだろう、何せオールマイトの力だ。倒したことのある力とは言え衰えたものであり、全盛期とは程遠い。

もしも100%で使えるなら、オールマイトの全盛期と同等以上の力を使えるなら、ヴィランにとっては恐るべき力となる。

ただ「もしも」の話なのだ。今のデクには到底制御できない力だった。

だからこそ——エリという存在を含めた二人組を、暴走している成生は警戒しているのだ。

「私が個性を使えば、きっと、全力が使える」

今のデクに100%の力は制御できない。制御すれば身体が壊れてしまう。壊れた身体は二度と元には戻らない可能性もある。

しかしエリの個性は元に戻す、『巻き戻す』個性だ。壊れてしまう時の痛みさえ耐えられるのなら、100%の力を思う存分に使うことができる。

「……っ！それは、でも……エリちゃんは？」

エリが拷問を受けていた事実をデクは知っている。理由が個性由来であることも。

個性を使うことがどれだけ辛いことなのか、デクには分からないが心配の一つくらいはできる。

そんなデクの心配は、強い光を灯した瞳に打ち抜かれる。

「お願い、お姉ちゃんを助けて」

ハッキリとした、決意を持っているとも呼べる声色。目の前のことが分からない子供の言葉ではない、きちんと前を認識して歩む人の言葉だった。

M s. ダークライの雰囲気のように、見蕩れてしまう程の心意気。見てしまったからには、分かってしまったからにはデクは止まらない。

デクはエリをおんぶし、常に個性が届くようにする。その上で、目の前よりみっせいの子供に宣言する。



入っていく。

同時に、子供のようないき声をあげる依光成生。制御できない、暴走した力を振るい、自らだけしか見えていない姿。

明らかに異常をきたした姿に、二人が立ち向かう。

「ワンフォーオール・フルカウル

100%!!!」

激突する力に——空が、見えた。





へ近づくと。弾丸よりも早く着くほどの身体能力であり、ワンフォーオール100%フルカウルにも全く劣らない身体能力だ。

「デトロイトスマッシュユー！」

デクは読んでいた。不意を突こうと一撃で倒れる敵ではない、油断などできないと警戒し、念のためと追撃のために準備しておいた一撃を放つ。

読みを得意とするデクだが、そこから先は読めなかった。

「すまっ……しゅー！」

よりみつせいが、まったく同じ威力の拳をまったく同じアクションで放つたのだ。まるで鏡写しに放たれる拳に、オールマイトのファンだからこそデクは動揺する。

「なっ!？」

無邪気な一撃だが綺麗に相殺され、周囲に衝撃が拡散すらしない。それがどれだけ異常なことなのか、これもまたデクだけに理解できた。

デクの100%はオールマイトのように威力が他のところに逃げないように調整さ

れたものではない。あくまで100%の力を振り回しているだけだ。

フルカウルという「使い方」を覚えたことで少しだけ制御はできているがそれでもせいぜい30%。70%は力が正しく使われていない。それでも身体能力は100%あるため威力も相応になる。

言うなればプロボクサーが正しいフォームで殴るのと、プロボクサーと全く同じ身体能力を持つ者が適当なフォームで殴る違いだ。そんな攻撃を相殺する難易度は……後者の方が難しい。前者は正しいフォームだからこそ逆に分かりやすいのだ。

後者であるデクの一撃を綺麗に合わせて相殺した。よりみつせいが力を調整して合わせた威力にしたとしか考えられない。デクがまだ制御できてない力に合わせたのだ。

「おそろーきれいー」

「がっ!？」

デクの動揺を逃さずに反射したように掴み、よりみつせいは思い切り空へ放り投げた。ただ投げられるだけでも加速度でGを身体に受け、不意を突かれれば身体能力が高くて影響を受ける。デクはエリを離さないように支えるのに必死だった。

身体能力が同等まで近づいても反応速度で圧倒的に負けていた。成生の鍛えたフィジカルだけは残っており、思考は加速していないが、反射速度はそこまで変わっていないのだ。

「あーそびーましよー?」

放り投げられた200m以上の上空までよりみつせいもまた追ってくる。苦も無く空を跳ねる姿は、まるで空を地面のように扱っているようですらあった。

「これが、本当のよりみつせい……?」

デクは気づいていなかったが、ワンフオーオールに内臓する個性『浮遊』が発動していた。余りの危機に本能的に発動しており、発動にかかる負荷も『巻き戻され』ていた。本来なら発動すること自体知らず、使えるのも未来の話。しかし今だけは使えていた。

「真正面はマズい」

空を走るように駆けるよりみつせいに対し、直感的にホバー移動するように空を飛ぶデク。空中でありながら移動方法の違いは、自在に飛ぶ戦闘機と高速で走る地上の戦車のようなだった。

そうなれば必然、戦車の方が二次元的な動きになり翻弄されることになる。

「むうくえいつ!」

「ぐうつ!」

捉えられないデクに業を煮やしたせいは空の何かを掴み投げる。デクには視認できないが、ワンフオーオールに内臓する個性『危機感知』が働き咄嗟に躲す。本来なら耐えられない負荷も浮遊同様に『巻き戻され』る。

こちらもまた本来使えるのは未来。だが今だけは、依光成生がよりみつせいである間だけは使える。

デクの悲痛な声は危機感知——自らの個性によるもの。直撃はしておらずただ自らの個性に耐え切れない自傷だった。

目の前の子よりみつせい 供はそんなことを気にする筈もない、再び空の何かを掴み連続で投げ始める。

「あははーえいつー！やあつー！」

「くっー！」

デクの100%の力ならば遠くからでも拳を振るえば空気砲のように威力を持った風圧を放てる。相殺を試みようとするも『危機感知』がダメだと悟らせ回避行動へ移る。

もしも相殺を狙っていたならデクはエリもろとも吹き飛ばされていた。なぜなら今のせいが掴む空の何かは岩を投げているようなものなのだ。それも大砲やミサイルが当たろうと壊れない密度がある岩だ。収束もできていない空気砲等、無意味もいいところだっただろう。

空にそんな岩は存在しない。これもまた、成生の個性によるものだった。

投擲によって回避しかできないデクに、ようやく隙が見えたとき、せいは一歩でデクの目の前へ跳ぶ。

そして思い切り腕を引き、パンチを振るう。全力の一撃を。

「ゼーんりょーくつぱーんちー！」

「ヤバいー！」

デクのスマッシュのようにただ全力で拳を振るうだけ。やったことはそれだけ。特筆すべきはその威力。

あまりの威力に空が割れ雲は全て散り、拳を突き出した先は真空と化し周囲から風を呑み込み竜巻を引き起こす。地上で放たれば間違いない災害と呼ぶ威力であり、人に向けて放つていいものではない。

しかしそれだけの威力を持った拳は外れた。よりみつせいに隙ができたとも言える。

今のデクは見逃さない。両手を組み振り上げ、ハンマーのように両手を全力で振り下ろす。

「ワイオミングスマッシュ！」

「やー！」

両腕で放たれたデクの全身全霊の一撃。強敵であろうと当たれば地面に叩きつけられクレーターを起こせる程の威力を、よりみつせいは地上に近づく程に吹き飛ばされながらも両手で掴むように受け止めていた。

「100%の……オールマイトのっ……力だぞっ……!?!」

「じゃあわたしはもっとうえだー！」

懐に入り込まれ吹き飛ばさないようにデクは膝蹴りを叩き込まれる。大きすぎる破壊力だがエリへ貫通せず、デクの身体全体に響くように放たれていた。

「があっ!?!」

オールマイト以上の力でそんなことをされれば全身が粉碎される。しかしこのダメージも『巻き戻され』無かったことになる。

ただデクにとって今のダメージは肉体的なものよりも精神的なものの方が大きかった。何せ止められたのは自分自身の全身全霊、すなわち……オールマイトの全力と同等なのだ。

100%の力を受け止められたことに動揺を隠せない。さらに叩き込まれた膝蹴りは同じ以上の威力なのだ分かってしまう。

最大威力は受け止められ、よりみつせいの攻撃は止められず……さらに強大になつていくようにも感じていた。

どんどん力を増していくよりみつせい。対照的にデクは既に限界を超えた力を使っていた。これ以上は、今は届かない。

一方地上では、余りにも影響力が大きすぎる存在に対抗すべく、数人が上空を見上げていた。

「あれが……別の世界のNO.1。確かに力だけならオールマイトと比べても何ら遜色ない。

しかもあの様子……言っていたな。子供の頃から相当する力があると。つまりあれは基礎能力……！」

おそらくだがまだ彼女は個性を使っていない状態だ。デクに勝ち目がない」

「俺が行きます。一瞬の目くらましくらいだけどデクならそれで十分」

ナイトアイとルミリオン。残された二人は頂上に位置するヒーローとヴィランの戦いを見上げていた。

届かない高みにいる二人。だがオールマイトという同じ高さを知っているヒーローナイトアイがここにはいる。届かないまでも……近づこうと、横に並ぼうと、背中を守ろうとしたヒーローが。

「だがどうやって？先ほどの上空よりも近づいているとはいえ届くのは一瞬だけだ。予測するにも限界がある」

できることは全部やる。ナイトアイがオールマイトと学んできた経験だ。オールマイト程物理的に範囲は広くないのだから、別の角度から人を救ける。分業とはそういうものだ。

既に予知の時間はほぼ無い。できて数秒、ここで札を切るのは難しい。敵対しているのはM.S. ダークライなのだから。

「でも……止めないと。あの高さじゃ被害が神野と同じに」  
「分かっている」

既に高さは神野でオールマイトとオールフォーワンが戦っていた時未満、地上から十mもない程度まで落ちていた。しかも今回はオールフォーワン以上の広範囲攻撃を持



つ Ms. ダークライが相手だ。

手を出さなければ、神野以上の被害が出るのは明白。しかし打つ手が無く——助けとなる声は意外なところから届いたのだった。

「あーっ！壊理ちゃんとおかーさんあそんでるー!?」

地下に響くのはたった一人の子供の声。しかしここにいる以上はただの子供ではなく、さらに「おかーさん」と呼ぶに値する女性は一人しかいない。

「だつきー！きてー！とめるよー！あではよぶよー!」

二人のヒーローの視線が声の主へと向けられる。瞳を向けられた先にいるのは子供——依光電花。依光成生の子供であり、空にいる二人に対抗できる札の一つ。

そして依光成生の子供は一人ではない。よりみつせい地上へ吹き飛ばされた際に空いた穴からひよいと降りてきた者がいた。

「二人じゃ……まだあれには届かないかなあ。艶羽いてようやくくらい？」

そこには服は破け殴られたような跡や撃たれた跡はあるものの、まったく意に介してない様子の奪姫の姿があった。

リニューキュウ事務所や警察が行ったのは足止めだけ。体力を削る程度しかできなかったのだった。

単体でもここにいるヒーロー全員を屠れる子供が二人。その純粹さにナイトアイが二人を『視』、ヒーローは賭けに出る。

「ルミリオン、分かってるな?……後は頼む」

「分かりました」

戦えるのはルミリオンだけだ。ナイトアイは立つことが精一杯であり、空の戦いに混ざることなどできる筈もない。

代わりに自らのできる最大限の助力、情報や指針だけを伝える。ルミリオンとは察せる程には信頼関係を築けていた。

子供二人が跳び立とうとする手前、ルミリオンは彼らの前に立ち、いつもヒーローとして子供たちに笑うように笑顔になって問いかける。

「……君たちも来るのかい!?!じゃあ止める競争だ!連れて行ってくれると嬉しいな!」

まるで自分も同じようなことができると言いながら子供扱い。学生や大人なら何言ってるんだと反応するだろうが、目の前にいるのは実際に子供だ。

反応は顕著だった。

「わかったー！」

目を輝かせながら、電花と奪姫はルミリオンの両脇を引っ張り——空へ跳んだ。

## よりみつせいVSヒーロー&amp;壊理&amp;悪夢の墮とし子

時間は少しだけ巻き戻る。地下へヒーローが突撃した時、地上では奪姫とリユーキウ事務所がぶつかっていた。

「まず一人、次はあなた」

内臓へダメージを与える奪姫の個性にウラビティは倒れ、次だと指を指されたのはネジレチャン。今の奪姫には視認し拍手しただけで内臓にダメージを負わせられる。

しかし使い方としては活力を吸収する形で、だ。波動という活力に近いエネルギーを扱うネジレチャンには、微かにだが奪姫が何をしているのが視えていた。

——拍手はあくまで相手に何か、レーザーのような活力の線を向けるだけの行為。そこからスキャンして相手にダメージを与えている。

「ネジレチャン」

「大丈夫」

リユーキウの心配そうな視線にネジレチャンは声だけを返す。奪姫から目を逸らすわけにはいかない、拍手するモーション……は視えなくとも、音に集中するために。

パンつと音が鳴った。

「わっ!」

「……避けた?」

咄嗟に飛んで、感じていた活力吸収のレーザーから避ける。ネジレチャンの予想通りだった。

「線が当たって、私の活力を操作するにはタイムラグがある、かな?」

目を見開く奪姫。凶星です、と顔に書かれていた。

奪姫の活力操作は発達してきてはいるものの、まだまだ未熟だった。「浸透いたい活力いの」と名付けたそれも操作に慣れていないのだ。

ものによつては一瞬どころか当たれば確殺とすらなり得るヒーロー達の必殺技、ヴェランもまた似たものを持っている。

例えばM.S. ダークライがレーザーを放つ・レーザーソードを振り回すように、未来の話ならば弔が五指を地面に触れさせるように、茶毘が赫灼熱拳を使うように、トウワイスが一定量以上の増殖を行うように。

極めているヴェランが使えば確殺の威力。だが奪姫はまだウラビティすら殺せていないし、ネジレチャンには避けられる程度だった。

「どうやって分かったの?」

「教えてあげない!」

べーつと舌を出して馬鹿にするネジレチャンに、ムツとする奪姫。ようやくマトモな手が打てるリユーキユウやネジレチャンが口角を上げる。

それが、奪姫には気に食わなかった。

「走り回ればさっきのは大丈夫!止まったらダメ!」

「じゃあこっち」

「え」

集中していた、視えていた、回避が間に合わず防御した。ネジレチャンは全て間違っただけはしていなかった。

唯一見抜けなかったこと——それは何も、さっきの技は拍手するまでもなく、直接触れれば問題ないことだった。

奪姫がやったことは単純明快。吸収した活力で自らの身体能力を強化、全力で近づいてビンタし、ついでに浸透活力を使っただけ。傍目から見れば、「ただ近づいてビンタしただけ」だ。ただ奪姫の身体能力を考慮すれば確殺にすら到達する威力になる。

「ネジレチャン!」

ビンタされ吹き飛ばされるネジレチャンをリユーキユウが受け止める。攻撃を受け

た外見にすぐわれない、息すら困難な程にダメージを受けた姿。明らかに先ほどの一撃がただのビンタではなかったことが分かる。

「これで脱落だね」

相手がたいしたヴィランでなければ回復のために一度ネジレチャンを撤退させるが、リユーキュウは相手が見逃してくれるとは到底思えなかった。

何せネジレチャンは浸透いたたいの活力の原理を見破った。一番に狙われるのは分かっている。

「ただまだ手加減が難しいなあ……特にこれは」

「撃てー！」

「ん?」

ゆえにリユーキュウは、警察の援護と共に跳んで前に出る。弾丸をパシパシと受け止める奪姫だが、逆に受け止めることに集中していたため人型になり警察に紛れ、視界から消えたりリユーキュウに気づいていなかった。

「邪魔だなあ」

「そこね」

真上から竜の形態になったリユーキュウが尻尾を叩きつける。全体重の籠った破壊力に、遠心力まで加わった一撃であり相当な実力を持つ敵ヴィランでも失神させられるものだ。

地面にめり込み沈み込めるほどの破壊力。しかしこれで終わらないとリユーキュウ



は聞こえた声から察する。

「あだつ」

まるで頭を軽くはたかれたかのような声。いくら活力を吸収していようが耐久力が頭抜けていなければ出ない声色だった。

「まだ全然ね」

叩きつけ地面にめり込ませたがリユーキュウは奪姫から即離れる。耐久力は恐ろしく高く、個性も気を抜けば一撃必殺。距離がとれてなければ対応することすらできない。

自らだけでは打倒し得ない程の強大な敵<sup>ウイラン</sup>。リユーキュウは奪姫のことをそれ程の脅威と認識していた。

もつとも、奪姫がリユーキュウを面倒な相手と思うかは別の話だ。そして何より奪姫は——まだ子供だった。

「もう、限界！おかしさん！ごめんなさい！！」  
「な」

駄々をこねるように大声をあげる奪姫。両腕を空に挙げて発動した個性は、リユーキュウすら膝をつかせる。

「少しずつ翳り奪って……最後には全部奪<sup>と</sup>ってあげる！」

広範囲に探知する活力吸収。無差別ではなく明確に攻撃をしてきた者達へ放つ最終手段。現状の最大なら2km程度の範囲をカバーできる吸収範囲と広い上に熟れてないとはいえ、視界内の相手だけに強く吸収させることなど容易い。

「さーて、何分保つかない?」

子供の無邪気な笑顔を見せる奪姫。震えるようにリューキュウの瞳は向けられる……その足元へ。

「冗談でしょ!?!——ウラビティ!」

「え」

バシツと空へ飛ばすように奪姫の腹へアッパーを放つウラビティ。ダメージは皆無だが、狙いはそこではない。

『ゼログラビティ』、浮かせる個性だが触れるだけならふよふよ浮くだけ。重力がなくなくなったかのように浮くなら、殴るなりして相応のベクトルを向けてやれば勢いがそのまま反映される。

ただベクトルを与えられるのはウラビティだけではない。何よりほぼ同じ使い方一度破られている。

「勢いよく浮かばせられれば……あとは」

「さつきと同じだけ」

空を蹴れば跳べる奪姫には関係ないのだ。同じように空を蹴ろうとし――

「違うわ」

――両足が舌で巻き取られ動かせないことに気づく。

「あっ!?!足を!?!」

奪姫の動きを阻害する。フロツピーと奪姫のパワー差を考えれば本来不可能なことだ。

しかし意識を逸らしているタイミングならほんの一瞬だけは可能。そして一瞬あれば十分だった。

「地中までめり込ませればいいのでしょ?」

信頼できるヒーローがいるのだ。倒すことができないなら、違う手段がヒーローにはとれる。

そして、信頼できる先輩もいるのだ。

「解け……何で!?!」

「波動の……纏わせ……やっと、できた」

フロツピーの舌に波動の力が纏わせられていた。ネジレチャンは波動を攻撃的エネルギーで扱うが、他者の身体に纏わせて他者の攻撃と同時に波動をぶつけるという使い方もできる。

そして他者の身体が波動をぶつけるまでの道であるタイミングならば、一時的な身体強化になるのだ。

勢いよく空へ飛ばされた奪姫へ、上空へ飛んでいたリューキュウの拳が激突する。

「ちえつ、仕方ないなあ」

「堕ちなさい！」

ゼログラビティの個性がかかったまま、恐ろしいまでのベクトルがぶつけられる。そうなれば当然、地面に深く……非常に深く埋め込む程の勢いへと変貌する。

ドオオオオオオオン!!!

地面へ貫通するように、直径1mもないが深い穴が空いた。

穴の近くにリューキュウ、ネジレチャン、ウラビティ、フロツピーが集まる。耳に集中しても、音は聞こえない。

倒した……訳ではないとプロが判断する。

「これで、少しは保つてしよう」

両膝を突く程に疲れているリューキュウの言葉にウラビティとフロツピーは思わず顔を向ける。ヒーロー側は既に満身創痕、限界を超えているとすら言ってもいいのだ。

「倒せてないんですか？」「嘘」

「あれじゃ、倒せないよ」

ネジレチャンはもつともダメージを負っているからこそ相手の力量が分かる。受けたのがただのビンタと個性だけであり、奪姫の最大威力ではない。それでもほぼ動けない程のダメージを負っているのだ。

耐久力もリューキュウが戦い理解した。奪姫の鋒をネジレチャンが、盾をリューキュウが知っているのだ。この程度で倒せる相手ではないと誰よりも分かっていた。

戦力が分かってもヒーロー側が満身創痕なのは事実。故にもつとも軽傷であるフロツピーだけは気づいていた。

「……今にも皆倒れそう」

味方の戦力は今にも潰えること、そして……

「吸収が……終わっていないわ」

奪姫の、敵対する意志はまだ残っていることに。

しかし深く地中に埋めたことでヒーロー側に打てる手は無い。奪姫が地中から出てくることに注視しながら、個性で活力を奪われるしかないのだ。

一気に活力が奪われることはなかった。だが継続して奪われ続ければ、まともに動くことも出来なくなっていく。

「そろそろたおれた？」

数分後、地下から風穴が空きよりみつせいが空中へ吹き飛ばされたと同時に、ケロツとした顔で奪姫は地中から戻ってきた。

——と、同時に別の声が周囲に響いていた。

(だつきー！きてー！とめるよー！あではよぶよー！)

声ではなく電波、頭に響く声。ヒーロー側は活力を奪いきられまともな思考も危うい。声と誤認するのも仕方のないことだった。

「でんか姉？分かった！」

快活な声を出して走っていく奪姫。奪姫の敵対意志が大きくなかったため足止めには成功したものの、ヒーロー達は動くことすら出来なかったのだった。

■ ■ ■

時は現実に戻り、奪姫、電花、ルミリオンは空を跳ぶ。デクの近くまでルミリオンへ投げられ、浮遊の個性で空へ着地する。

「ルミリオン！それに二人は!？」

「お母さんが心配だつてさ！」

奪姫と電花は、よりみつせいの真正面に立っていた。

「おかーさん！」

遺伝子は繋がっている、子供たちの声。暴走する前ならば聞こえるだけで動きを止める程に情を持っている繋がり。ほんの少し前まで、正気なら成生の瞳の奥には必ず在る

者。

「だれ？」

——今は、違う。子供に戻っているよりみつせい依光成生の中に二人はいない。中学生以降になつてから作られた二人は、子供の時代に存在しない。

シヨックを受ける二人もまた子供。感情を隠すことなどまだまだ出来ていない。……母を取り戻すために戦う意志を示す感情を。

「うん？なにかすわれた？」

「これは!?元気が湧いてくる!?!」

全力で放たれる活力吸収。たった一人に向けられた威力は本来プロヒーローでさえ一瞬でミイラにするレベルだ。

が、それですら今のよりみつせいには蚊に刺された程度。吸収した活力は電花どころかデクやルミリオン、壊理にも分けられ、疲労や傷さえも回復していく。



「じやまするの?」

先制した個性でさえマトモに通じない。しかし個性はあくまで手段の一つ、次の手のために奪姫は声を上げる。

「止まって!」

「ん!」

跳ぼうとしてたよりみつせいはピタッと動きを止める。まるで親から命じられた子供のよう。

子供であることを利用する。一時的に止めるためなら非常に有効だが、完全に止めるためには使えない手だ。

なぜなら、子供は我儘なのだから。

「何して遊んでるの?」

「んーと……オールマイトごっこ。あっちがはじめたの!」

「止めたら止まってくれる?」

「やー！」

嫌だと駄々をこねる子供。よりみつせいの行動は分かりやすかった。

「しようがない……私たちが相手」

奪姫の言葉でよりみつせいの顔が四人の方へ向かれた刹那、何かを感じ取ったよりみつせいは明後日の方向へ掴むように両手を伸ばした。

同時、勢いよく飛んできた何かが激突し弾かれる。

「近くに居たからってひどくない!？」

ほぼ不意打ちで飛んできたのは白い翼を生やした少女——Ms. ダークライの墮とし子、あては艶羽あてはだった。近くで個性を使い飛んでいたら電花から電波を飛ばされ、急いで飛んできたのだ。

プロヒーロー、ホークスの遺伝子から生み出された彼女の個性も近いもの。何より特筆すべきはその速度。

「はやい」

無邪気な顔をしていたよりみつせいだが、思わずムツとするくらいには速かった。それも当然、翼を持つ艶羽は空こそが独壇場。地上では奪姫一人よりも能力が低い、空中であれば墮とし子半数を相手取っても互角以上の戦いが可能になる。

捕まえられない程に速過ぎる、たったそれだけの理由で。捉えられる唯一の例外は依光成生おかしげんであり、よりみつせいではない。

「っー」

艶羽に気をとられたよりみつせいへ奪姫がとびかかる。よりみつせいと奪姫では身体の大きさにそこまで差は無く、羽交い絞めにして両足も腰に捕まれば振りほどくのは困難になる。

拘束とは力を抑え込むことであり、直接ぶつけられないようにする行動だ。純粋なパワーが頂点にあると、ぶつけられなければ意味が無いのだ。

「こつちはおそいけどっ！じゃーまー！」

「ぐっ！どんどん力が増してる……！」

加えて奪姫のパワーも相応に強い。まだ身体熟练操作に熟れてないとはいえOFAで言えば30%を優に超える。使い慣れれば80%すら超える潜在能力があり、吸収した活力を加算すれば100%とも対等に渡り合える。

しかし、よりみつせいの影響により潜在能力は発揮できる状態でありながら——拘束は今にも振りほどかれかけていた。

「皆！」

奪姫の声に真つ先に反応したのは、ヒーローたちだった。デクが浮遊でルミリオンを音を消して飛ばし、デクは別の方向から強襲する。

「およう……あつ、そつち？」

羽交い絞めにしようと、よりみつせいは依光成生だった。光速の反応速度は、正しく扱えるのならどうあつても先手を打てないことを意味する。

接近するのは危険とデクは拳を開き空気砲へ切り替える。

「気づかれっ!? デラウエアスマッシュ！」

「たあつ！ つてだれ!?!」

頭突きするように空気砲を弾いたよりみつせいが、突如として視界を塞ぎ目の前に現れたヒーローに驚く。

依光成生とよりみつせいが最も異なる点、それこそは周囲の状況を把握し続ける能力の有無。

依光成生なら気づいていた。よりみつせいだから気づけなかった。たった一瞬の隙——見逃す彼らではなかった。

「速達便!」「隙だよ!」

「あつ、なにして?」

眼にも映らない速度で艶羽が電花を運び頭に飛びつかせる。ゼロ距離になったのなら、電花は最大出力でたつた一人に個性を向けられる。

よりみつせいの中に眠っているであろう、依光おかしさん成生へと声を届けるために。

『起きろー!』

広範囲電波の個性がたつた一人に収束して放たれる。近くに居るデクヤルミリオンにすらキーン!と高音が聞こえる程の波。受信できる依光成生には、これ以上なく心身に、骨身に言葉が響き渡る。

「みみいたい……」

それでも、よりみつせいは動きを止めるだけだった。

だが今までの一連の流れでよりみつせいがどうなるのか……電花・奪姫・艶羽の三人は信じていた。だからこそ、最後の一手のために奪姫は叫ぶ。

「艶羽！手を！」

「人使い荒いんだから！」

「わっ!?!はや」

奪姫と電花の腕を艶羽は掴む。電花、奪姫、艶羽が間接的に触れたことで、奪姫の個性が走る。

浸透活力、触れれば活力を操れる応用。奪姫と艶羽の活力を電花に走らせ、三人分の想いを依光成生へ届ける。

「「全力全開！とどけえっ!!!」」

「活きる力を最大以上に増幅させて、子供たちの思いが電波に乗せられ依光成生へ走る。」



精神世界と呼ぶべき場所。そこにいた成生は——ほんの少し、たったほんの少しだけ思考が結論に辿り着いてしまった。

「私の個性、『■■■■■になる』だったんだね。分かるわけないな……はは」

結論に触れただけ、だというのに自らの身体精神が崩れかけているのが分かる。これがこれまで築き上げた心が壊れているのか、軋んでいるのか、それとも幼児にでも戻っているのか、成生には分からない。

それでも単純明快なこととして分かっていることはある。

「……もう帰らないと」

ここにいてはダメだということ。ここにいて思考速度を操作している限り、自らに待っているのは破滅のみ。

「■■■■わたしは見つかったかな……見つかったからかな」

一人でいるわたしがここにいれば、崩れて消えるだけだ。

『起きろー!』

天からの声。誰からの声かも分かっている、どうやって届けたのかも分かっている、何故聞こえたのかも分かっている。

だというのに、成生の顔は優れない。何故なら個性のせいであらうから。



「ふふ……ふふ……起きたらこのことは忘れてる、忘れさせてるけど……思い出す時はきつと来る」

第六感と呼べる直感ですらこの個性が及ぼした自身への影響の一つ。全能にすら思える個性。そんな個性だが『個性』なのだ、デメリットがある。

それも個性の影響で分かってしまう。自らの未来も、起きうる結末すらも分かかってしまうのだ。

「その時に、私が」

『とどいて！起きて！おかしさん!!!』

身体が薄く透けていく。精神世界でだけ起きていた人格が現実に起きようとしている証拠だ。

見ていた現実から目<sup>自らの個性</sup>を閉じ、何も見なかったと自らの心に封をする。

「私でいられることを、願ってる」

『『『起きて！依光成生！』』』  
おかしさん

精神世界から消えていく。たった一つの願いを口にしながら。

「切島くんみたいなの、普通の個性だったら……よかったのに……」

依光成生の瞳から、一筋の涙が頬を伝う。



現実では、よりみつせいが地上に墜落し、十数秒の硬直をしていた。思考が加速できると分かっている。なお処理できない膨大な電波を無理やり頭にねじ込まれたことにより、処理しきれずにフリーズしたのだ。

数秒も止まればデク達も動きを止めようと行動できたが、出来なかった。何せ動きを見せれば三人の子供が立ちはだかるのだから。鋭い奪姫の眼光が、分かりやすく示していた。

「あれ、私……」

帰ってきた仕草、濁っていない澄んだ瞳。デク達はどちらなのか分からなかったが、彼らには分かる。

「おかしーさん！」

「おかえりなさい！」

「疲れたあ……」

立ち上がり子供たち三人へ微笑む依光成生。それはかつて見たことのある表情だった。

「眠ってみたいね。……なるほど、あなたが相手してくれてたのね」

「依光成生……！」

言葉に出されようやくM s. デクとルミリオン ダークライが復活したのだとヒーローは理解する。しかし表情は依光成生含め、皆優し気なものだった。

「壊理ちゃんをよろしくね。私たちはここまでで目的は果たした」

「待って！」

壊理が声を上げ、デクはフルカウルを解く。100%フルカウルは指一本動かすこと  
もできないのだ、敵意があれば屠られるだけだが、Ms. ダークライが戦うのであれば  
勝ち目は無いと言う意味でどちらでも変わりはない。

壊理がデクから降り、口を開く。

「……ありがとう」

目を見開く成生。照れくさかったのか顔を背け、すぐに穏やかな表情に戻る。まるで  
高校生の少女のような仕草に、デクとルミリオンはどこか親近感を覚えていた。

返ってきた言葉も、ヴィランというよりヒーローらしいものだった。

「（こちらこそ、かな）」

どこか安心させる声。依光成生という少女の本来の姿がそこにはあった。

「壊理ちゃん、頑張ってるね」

「……うん！」

ヴィランの手から離れた者を応援する。それもヴィランには狡猾なものでもない限  
りあり得ないこと。しかし依光成生は平気で口にする。なぜなら声を届ける相手は  
敵対する者ではないのだから。

当然、ヒーローやヴィランは別だ。デク達へ向けた視線のように。

「何をするつもりだ」

「少しだけ籠って……その間は子供たちを自由にさせるってところかな？ 艶羽まで出てきちゃったから……皆遊びたくなるでしょうし」

「子供……たち？」

「ええ、皆私が作った子供。遊び相手にはなつてくれたんでしよう？……面子にはないか、イレイザーヘッドにでも聞きなさい」

話はそれで終わりと身を翻し、成生は使えなくなつたはずの転送を使う。本来指定した人を瞬間移動させるように使う筈の個性は、黒霧のようにゲート状に開く転送門とも呼ぶべき個性へと変わっていた。

成生は首を傾げながらも使い方といった認識は合っており、現実と認識がズレていることに一瞬だけ困惑する。

「あれ？ 随分と使い勝手が変わって……即効性は死んでる。……まあいいか」

ただ問題にはならない。自らが使ってきた感覚と同じなら結果は同じになるのだから。

「電花、奪姫、艶羽、先に行きなさい」

「「はーい！」」

三人が転送門をくぐりワープしていく。呑気な三人の様子と真逆の、鋭い視線を成生は感じていた。身体を半身だけ向け、顔を視線の主へ向ける。デクヒルミオン

「感謝の一つはしておきましょう、デク」

成生の感謝の言葉。普通のヒーローなら戯言であると反応したり、驚いたりとするが、ここにいるのは並のヒーローではない。

二人は、ただ警戒を解かずに対峙するだけ。ただ、疑問を口にするだけだった。

「……何故、銃弾を受けたんだ」

デクはフルカウル100%を使った。だからこそ分かる、M.S. ダークライは例えほぼゼロ距離だろうと、完全にゼロ距離でない限り避けられる身体能力を持っている。

受ければただで済まないのは関わった当人であるM.S. ダークライとオーバーホルが一番知っていることだ。故にデクには解せなかった。

デクの言葉に成生は微笑みながら返答を口にする。

「そうした方が良いと思ったから、それだけ。こうなるとは思ってもなかったけれど」

なんとなくそうした方が良さそうだったから。ふわふわした感覚にイラつきそうになるも、堪えてデクは質問を……デクにとって一番大事な質問をかける。

「エリちゃんは、お前を助けてって言っていた。僕は、救けられたか？」

目を閉じ、一息吐き、再び目を開く。成生の一動作だけだが、それだけで逡巡したのが壊理には分かる。

思考を加速できることを壊理は以前に成生と話している時、聞いていた。ほんの少しの時間稼ぎは成生にとつて恐ろしく悩む時であることも。

壊理のために悩んでくれる。壊理にはそれだけで十分だった。さらに、答えもまた壊理だけは正しく受け取る。

「私自身の意志で言うなら答えられない……けれど直感だけでいいなら答えましょう——イエスとノー、どちらでもあると」

デクとルミリオンの表情は硬く、対照的にエリの顔は綻ぶ。事情を知る者と知らない者の差であり、壊理は気づかず声を出していた。

「よかった」

どういふことだと口にしたいたい気持ちを抑えきれず、デクとルミリオンは一瞬だけ目線

を壊理の方へ向ける。

電花という友達を持った壊理は知っている——成生が壊理のために悩んでいたこと、自らの力に苦しんでいたこと。それらを壊理に隠していたことを。

電花という友達を持った壊理は知っている——成生は苦しんでも自分の足で進むことを是とすることを。例え巻き戻されようと、性格は変わらないことを。

デクの想いと壊理の想いは似ていたがすれ違っていた。目的は同じように聞こえるだけ——即ち、『依光成生を救える』こと。

デクは逮捕しヴィランから足を洗うことだったが、壊理はそうではなかった。だからこそその「よかった」だった。

もちろん、成生にも伝わっていた。照れくさいがために、早くこの場から離れようとして声を出す。

「壊理ちゃん優しいね……。デク、早くその力を使いこなしてくださいね。私のヒーローに負けてしまいますよ」

「何を」

「私だけのヒーローは私にはこれ以上なく突き刺さる。だから、他の人から目移りされたくないんです。」



他の人はオールマイトあの後継者ただけ見てればいい」

デクはグツと口を引き締めながらも、頭の中では言葉の意味を検索していた。ルミリオンもまた同じく……そして、デクよりも早く予測に辿り着く。

しかし口にはしなかった。今は成生を刺激しないことを優先したからこそその判断だ。

「要するに……私のヒーローのために強くなってくださいね？ヒーロー」

依光成生がゲートの中へ消えていく。少しずつ黒く染まっていく後ろ姿に、涙ぐんだ叫びが響く。

「成生お姉ちゃん！忘れないから！」

後ろ姿からでも分かる、口角を上げた様子。数舜だけ視えたそれは、黒く染まりゲート事消えていく。

「……………切島くん？」

残ったのはヒーローの眩きだけ。  
名を口に出していた。

No.1ヒーローの後継が、  
Only1ヒーローの

## ヒーローサイド 死穢八齋會編アフター 切島編

「なんかよく分からないけど退院してきた」

「「何で!?!」」

死穢八齋會との激突の後、一日程病院に入院した切島は退院して寮へ帰ってきていた。

乱破による全身殴打で全治一週間以上は確定レベルのダメージだったのだが、異常な回復力を示した切島は一日で回復しきっていた。

ファットガムはまだ入院中、サンイーターは傷こそないものの食べたものが食べたものだ。検査が長引いていた。

本来なら切島も異常な回復力のせいで検査が長引く予定だったが、通院するという形で一足先に退院したのだった。

「すっごい重傷だったよ!?!身体全部グルグル巻きになつて!」

「なんか一日で治った」

「治癒の個性でも使われたのか!」

「いや、自前」

摩訶不思議な現象。当然個性の介在を疑うのだが、それも今回は無い。ただ切島本人の体調は、分かりやすく変わっていた。

「俺も分かんねえけどすげえんだ。身体の底から力が満ち溢れてくるってこういうことなんだな」

まるでよりみつせいとの戦いでデクヤルミリオンが奪姫の活力操作で常に絶好調が維持されていた現象だ。が、切島は奪姫とマトモに相對しておらず、奪姫の影響があるというならまだウラビテイの方がその可能性は高い。

もつと大元依光成生にいる存在の影響。そう考えた方が自然だった。

「依光成生に何かされた、ってこと？」

「んん？何で成生がそこで出てくんだけ？」

ただ切島は倒れた後何も聞いていない。緑谷の疑問、自分自身の体調に依光成生が関わっているのは知らないことだ。

依光成生本人から切島をどう思っているか聞いていた緑谷は、極自然に口に出した。

高校生の思春期には、爆弾の発言を。

「私のヒーローって言うてたの切島くんのことじゃないの?」

しん……と音が消えたかのように静かになるA組一同。男子も女子も、鈍轟と飯田い者以外は  
その意味を高校生らしく理解してしまったからだ。

分かりやすく——恋しているのだと。

「それしかないでしょ!」

「え!?もしかして切島くんにぞっこんなん!?」

「ヴィランとヒーローの恋物語……!切島くんなんてことを……!」

一大恋愛ストーリーの映画設定かと思わせる関係性に、思春期真っ盛りの高校生が食いつかない訳が無かった。

そしてその当人はというと——

「え!?!いやそれはその……その……」

——満更でもない表情をしていた。分かりやすい反応は燃料となり、恋愛……という  
より女生徒の関係には特に燃える二人に直撃する。峰田と上場

「事実かよお前ええ!!?!」

キヤーキヤーと沸き立つ女子達と憤りに震える二人。他の男子は納得した表情をしていた。

「ケツあのモブ女のどこがいいんだか」

「といつてもあれは惚れたとしてもおかしくない」

「綺麗だなとは思うが」

「茨の道だろうが、クラスメイトとして応援してやるべきだろう」

爆豪、常闇、轟、障子と一度遭遇した男共は口々に想いを零す。なんだかんだ言つて、彼らも思春期の男子だった。

もちろんその空気を読めない者もいるのだが。

「切島くん何があつても彼女はヴィランだ！捕まえなくてはならない！分かつてるだらう！」

空気を切るように飯田が真面目な声を上げる。女子達は少しずつピンク色の声が落ち着いていき、飯田の真面目さに応えるように切島も決意を口にする。

「ああ。成生は俺が止める」

……繰り返すが、ここにいるのは思春期真っ盛りの高校生だ。それも思春期に頭（頭）の中を支配されたよう（田）な者もいる。

「で、どこに惚れたんだ？」

大恋愛レベルの恋バナを、見逃してくれるわけもなかった。

「眩しいんだ、笑顔が。俺だけしか見てねえ笑つてるところ。敵にした時の目は哀しかったから……もうさせたくねえ

あとぎゅつて抱きしめられた時とか膝枕も柔らかかったし……あ」

空気が凍る。思春期でも初心な者も多いA組には、成生と切島の関係性と進み具合は刺激が強過ぎたのだった。

「ちよつとこつち来い」

「今何て言った？膝……何？返答次第では個性を使うことも辞さない」

当然男子には憤怒に至る二人がいる。肩を掴まれながらも「後で」と切島は軽く返していた。

「女友達ってそんなことするのか」

「轟……」

「切島は進んでるな」

他の男子は天然の轟に呆れた視線を向けたり、男として羨む目を向けたりしていた。

そして男子よりも女子に初心なのがA組の特徴である。

「あわわ……そなに進んでたなんて」

「ヴィランって敵だよ、三奈ちゃん。スゴイ敵だよ、ライバルだよ」

「何で私!？」

「殿方のお誘いとはあのようなことをするのですか?」

「ヤオヨロも懂れる?」

キヤーキヤーと姦しい様子にたった一人、爆豪だけはくだらないと他所を向いていた。

「……ケツ」

ただ、成生に被害を受けた者として、トラウマを克服するためにも、話を聞かない訳にはいかないのだった。



時間は少し飛び、数日後の雄英の授業中まで飛び。林間学校でやった個性伸ばしは継続して行われており、イレイザーヘッドが担当して授業していた最中のことだった。

イレイザーヘッドはいつも通り成長具合をデータにし、生徒それぞれに合わせた成長を確認していた。担任であり、誰よりもA組の生徒のことを知っているために明確なデータがどうしても目についてしまう。

「切島、随分と調子いいな」



「そつすね。何でか分かんないです」

「個性もグングン伸ばせてる。これは中々やる……はあ、間違いないか」

生徒の成長にイレイザーヘッドは頬を綻ばせ、ため息を一つ吐いて確信を得る。

一日前に呼び出され聞いたこと。その影響が最も反映されている人物は間違いなく目の前の生徒なのだ。良くも悪くもある予想が事実となったなど、ため息の一つも出してしまうものだ。

「切島、放課後にDグラウンドに來い」

担任として、プロヒーローとして、依光成生と相対する者として相澤消太、イレイザーヘッドは口にする。雰囲気は切島は思わず叱られると感じ取っていた。

そして放課後、二人の姿がDグラウンドにあった。切島は困ったような表情を、イレイザーヘッドは真面目な顔をしていた。

「俺何かしたつすか？」

「お前は悪くない。悪いのはあの女だ」

イレイザーヘッドの一言で切島は察する。鈍感気味なところもある切島だが、何故だか今は勘が良かった。

大怪我だったが一日で回復した、調子が良い、個性の伸びが非常に良い。そしてそれらが目に見える程に分かりやすく出たのは――死穢八齋會との戦い、ひいては成生に会っ

た後からだ。

「成生……の影響が俺に？」

「その可能性が非常に高い。お前、硬化できるのは15分だけだっただろ」

「はい」

切島の個性「硬化」はただ硬くなるだけの個性だ。持続時間も15分と長くはないが、それ以外のデメリットは無いとも言える。

逆に言えば、持続時間が延びれば純粹に強くなれるのだ。しかし使用時間は個性そのものの限界であり、破るのは不可能と言える。

「それ以上使ってみろ」

「は？え？できないと思いますけど……」

だがイレイザーヘッドは破れと口にした。個性とは身体能力に近いが、これは人の限界値を超えろと言うような指示だ。

相澤自身の個性『抹消』で言うなら目を瞑れば個性が使えなくなると言うこと。相澤自身も言うように、今相澤自身が言ったことを自らに言うなら「目を瞑るな」ということ。

生物的に不可能なこと、しかし相澤はできると認識しており……故に命令として告げる。

「いいからやれ」

「はい」

15分後、切島の硬化は問題なく続いていた。

「……まだできそうです」

「マジか」

30分後、15分の時の姿と同じ、変わらない様子だった。

「何時までできるか分かるか？」

「多分、一時間くらい？」

「……合理的でないが仕方ない。個性自体に影響してるなんて調べないといけないからな」

「すみません……」

「悪いのはあの女だ、お前じゃない」

1時間後、脂汗をかいている切島の姿があった。以前の切島の、硬化が解ける直前と同じ表情だった。

「……解けるギリギリ、つて感じですよ」

「つてことは個性伸ばせば時間も伸びるか」

「この感じは、そんな感じですよ」

硬化を解き、相澤はため息をつく。切島は頭がキーンとし息切れしながらも、相澤が呟いた言葉は耳の奥に届いていた。

「はあ……ふざけた個性をしているな、あの女。個性自体に影響し、強化さえもできるのか。」

間違いなく指先が光る個性は副次的なものか。それでいてあの個性の伸びよう……恐ろしいな」

「あの」

相澤の呟きに切島は割り込む。聞き逃せない言葉が紡がれていたのだ、口を挟まない訳にはいかなかった。

「あれは多分副次的じゃないと思います」

「ほう？」

相澤は興味津々であり、切島は目にキラリとした光を灯して息を整える。

想<sup>依光成生</sup>い人だから肯定したい訳ではない。彼女をもっと知りたいからこそ口を開いていた。

「だってあの光に皆惹きつけられてる……てますから」

「なるほどな。言いたいことは分かる。」

ヒーローもヴィランも、市民も身近な人ですら惹きつけてる。まるで社会で一番目立

てるように。

そしてそれはお前があの女から聞いた目的……社会を壊すのに向いてる個性だ。目立つ者が社会に歯向かい壊す、これ以上ない最適解だろうよ」

丁寧言い直す切島に、相澤は自身の彼女への感想を口にする。目的に沿ってそうなったと言うべき個性。丁度いいと相澤は機密クラスの情報を切島にだけ伝わる声で伝える。

「今回の件で情報が集まってきた。あの女の個性も少しずつだが予想ができ始めてきている」

「それは？」

「まだ予測段階だがな。自らの個性に影響できる個性であるなら……外部から取り入れれば自らの個性に変容もできるだろう。」

指先が光る個性は……例えばあの女の母親の個性が両腕が光る個性だったように」

「……！」

両親の個性を継いだのではない、自らの個性に両親の個性を反映させた。考え方が間違っていた事実と同時に達した予想は、彼女自身の個性が強大極まりないことを証明している。

そして強大さは先日証明されており、デクの100%ですら届かない程だ。だから

こそ予想できることもある。

「そしてその変容範囲の拡大もできる可能性があり、今回成されたと予測できる。考えたくなかったが……視ただけで個性の模倣も可能だろう。

オールマイトごっこ、だったんだろ？」

「……聞いた話では」

デクの100%を模倣したのか、元々持っていたのか分かっていない。

ただオールマイトの姿は5歳以前ですら子供なら誰でも目にする。オールマイトの全力とデクの全力は同じであるなら、超えられる個性を持っているなら、デクの全力を超えることは不可能ではない。

そしてもう一つ。個人レベルで見ればオールマイトの全力と近いのはオールフォーワンの全力だ。彼らの個性は『個性に干渉する個性』である以上、ヒーローが彼女も同質の特性を持っていると予想するのは必然だった。

「そこから予想できる個性の一つは……お前にだけは教えておこう。

『個性を創る』個性だ」

「——は？……なんすかそれ？そんな個性……無敵じゃないっすか」

笑えない冗談だという表情をしながら肩を震わせる切島。

そんな個性があつてたまるかという現実逃避、そんな個性があつたらどうしようもない敵であるという絶望、成生が持つているという理不尽な運命に対する怒り。切島の中にあるのは全部だ。

相澤は淡々と仕事だと言うように言葉を続ける。ただ、どこか言葉は震えているようでもあつた。

「強力な個性には大きなデメリットが存在する。忘れたか？

それを克服できてないのはお前も目にしてるだろう。

……あの瞳を」

二人が思い出すのは混沌の極致とでも呼ぶべき瞳の色をした姿、M s. ダークライ。

そして切島は笑つた時に見せた綺麗な瞳も同時に思い浮かべる。二つとも彼女が見せた姿であり、片方が片方からかけ離れた姿でもあつた。

騙しているのではなく個性による影響で全く違う姿を見せた可能性。提示されれば切島にはどちらが偽物だとは思えず、どちらも本物で個性によつてそうなつているかと思えなかつた。

さらに相澤は続ける。個性の影響はそれだけではないことを。

「おそらく個性の影響はそれだけじゃないと俺は思つてる。それだけなら全盛期のオールマイトとオールフォーワン相手にして勝てるなんて言えないからな。

もつと致命的な何かがある。何かは分からんが」

しかし分かっていないと口にしていた。デク達が戦ったよりみつせいは致命的なまでに個性に影響された結果だったが、切島には伝えていなかった。

相澤自身も確信が無いのだ。例え伝えた未来が分かったとしても、生徒の未来である以上簡単に口出し出来なかった。

ただ、彼女の個性は危険なことを切島には伝えなければならぬと認識はしていた。昨日聞いたこともあつたが、仮に先んじて知れたなら同じことをしたろう……理由は簡単だ。

「……俺に教えてくれたのは」

「あの女——依光成生がお前を私のヒーローと呼んだからだ」

ヴィランを特定の個人をヒーローと呼ぶ。それが意味することは、そのヒーローに重い感情を持つという宣言だ。

もちろん自らが敵対したいから覚えておくという意味があるのも否定はしない。だがそれも、そのヒーローのことを覚えておきたいという意味表示とも言える。

「あの女のヴィランとしての本質も今回の件で見えてきた。

言うなれば……エリ以上の凶悪性とオールマイト以上の強さを併せ持つ個性を持った、自らのヒーローの素養を理解している我儘で繊細な女の子だ」



「わがままで繊細……ですか」

その通りだなと切島は苦笑する。もしまたシヨップینگモールで会えたなら振り回されながら付き合うだろうし、あんまり強く言うとしヨボンとする姿が目には浮かぶ。的を得ている表現というのがしつくりくるものだった。

「そうだ、ヒーローごっこでできるけどできないって癩癩起こしてるガキみたいなもんだ。ただ個性だけはバカでかく……だからこそ個性に呑まれてる」

「そう言う個性に振り回されてるだけの普通の女の子ですね。あと……エリちゃんに似てるってのはありそうです」

切島が個性に振り回されているというワードから連想した人、頭に浮かんだのは緑谷だった。直近で印象にあるのはエリだった。

男女の違いもあるが、暴走するかどうかの違いが大きい。緑谷は暴走しないが、二人は個性で暴走するのだから。

「……分かったか。あの女はヴィランだが、それは個性を利用されなかったためにヴィランになつてるとも言える。今回で言う、エリが個性も使えてある程度成長していれば同じ道を歩んでいたかもしれない。成長したエリならオーバーホールすら一瞬で戻し殺せたことだろう。」

貴重な個性は誰にだって狙われる……だから、自分自身で全てを捻じ曲げれる程に強

くなる。非合理的だが結論は合理的だ。

それが何を意味するか分かるか？」

「えつと……分からないです」

貴重な個性であることは強大であることとほぼイコール。しかし切島の個性は平凡な個性であり強大でもない。貴重な個性を持っている人物が思うことは分からなかった。

だから、相澤の続いた言葉は理解できなかつた。

「あの女は成長する以前までのヒーローを見限ってる」

「！」

「プロヒーロー全体を諦めて見ていると言ってもいい。あいつらは私を助けることにはできないってな」

社会を見渡しても助けてくれる者がいない。それがどれだけ恐ろしいことなのか切島には分からない。

だからこそ強くなる……気高いと、強い人だと思った。そのために個性を鍛えて……その先にあるのは、自分が明確メに変わダってしまラった姿イ。

切島には分からない。依光成生がいる場所は普通の感性では到達し得ない場所なのだ。

だが分かることもある。自ら望んでそこに到達はしていない、望んでなどいないということだ。でなければ瞳の色があんな色にはならない。

きつと自らが変わってしまったても、そうせざるを得ないから変わった。そんな、環境によつて生まれたヴィランなのだろうと、切島は認識していた。

「……自分が強くなるってそういう」

「舐められたもんだ。だが正解であり誰もあの女を見ていなかった。エリと同じ、ヴィランが活性化されて初めて見つかるタイプの人間だ。事実、普通の学校に潜伏して気づけてなかったしな」

「プロヒーローでは、助けられない？」

「舐めるなよ切島。何度苦汁を舐めされられても最後に勝つのがヒーローだ。」

だがそこにお前が居なきやならん。それだけは覚えておけ」

コクリと頷く切島。その瞳には強い光が宿っていた。相澤も切島の顔を見てほんの少しだけ口角をあげる。

「……エリと同じであるということは対処方法も同じということになる。」

厄介なのは個性だけで、個性さえ何とかなればおそらくだが痲癩も収まる。そしてヒーローみたいになりたかったのはあるんだろうな……個性の磨き方が尋常じゃない」

本来ならヒーローサイドであり志望している人間、ならば個性を鍛えるのは当然のこと。

警戒すべきであり解決しなければならぬことだが、切島は眉をひそめていた。

「それもありますけど……ちよつと違う気がします」

「ん？」

切島が考えていたのはただの直感によるもの。まるで成生の如く答えに一直線に向かう第六感。純粋な成生は個性を疑わないが故に直感を信じて言葉にでき、切島は成生のことを想うからこそ直感をそのまま言葉にできる。

「個性が厄介なのはそうかもしれない。けどそれ以上に……成生のことを知らないと戦えない気がします」

「それは感情か？」

「勘です」

相澤は成生の放った言葉を全てには知らないが、知っていることもある。直感的に行動していることは公言していることであり、目の前の生徒はどこかダブって見えていた。

「ふむ……上に打ち上げておく。お前以上に依光成生のことを理解しているやつはいないからな」

「へへ……」

照れくさそうに笑う切島に相澤は苦笑する。相手が相手とはいえ教え子の恋愛であり、成就してほしいのは感情の一つとして持つていた。

ただ難し過ぎるのは明白であり、先生として・男としては無責任気味に頑張れと言う他ない。

「明日からは個性伸ばしもつときつくするからな」

「ありがとうございます！」

走つて教室へ戻つていく切島の後ろ姿を見つめる。相澤は昨日聞いていたことと、今聞いた個人の意見がほぼ一致していたことにため息を吐いていた。

「はあ……昨日聞いたことナイトアイの予知は、本当らしいな。切島に伝えたのはオールマイト含む英雄のヒーローが予想していた個性、この個性だった方がマシだったんだが……切島だけは違ふと分かつていた、か。

本当の個性があれだったら……悪夢としか言いようがないな。

こつちも、あの女も」

相澤——イレイザーヘッドは昨日のことを思い返しながら呟く。余りに衝撃的な事実だったが故に話していた者達以外誰にも話せない真実。それが示す未来は変えるべき結果。

「恋心は成就させてやりたいが……今のあの女は無理だろうな」

未来は変えられる。それを示した元凶依光成生の変えられない未来を、ナイトアイが話した依光成生の個性を、イレイザーヘッドは鮮明に思い出していく。

## ヒーローサイド 死穢八斎會編アフター ナイトアイ編

ナイトアイは目を覚ました。そしてデクやルミリオン、バブルガールといった数人がお見舞いに来ては帰りを繰り返して二日ほど経ち、ルミリオンだけになった際に試しに個性を使った時だ。ナイトアイはオールマイトと共に歩んでいた時以来の感覚を味わっていた。

「未来が、固定されている」

依光成生が生まれた後には中々無かった風景。未来で見えるテレビの風景が同じであるというものが予知しえていた。

ルミリオンがナイトアイ事務所に来た時には既に視えなくなっていた光景。故にナイトアイもルミリオンに伝えておらず初めて聞いたと驚いていた。

「そんなことが？」

「Ms. ダークライに何かあった……いや、あの戦いの後遺症とでも呼ぶべきか」

あの戦いで未来が決められた。そう考えるのが自然であり、決めたのは確実に依光成生だ。

依光成生に起きた事象を考えればメンタルに多大な影響を与えられたとしてもなん

らおかしくない。それが未来を固定化させたとなれば、ナイトアイの予知で視えた未来を変える方法も見えてくる。

それは未来を変えられるほどの力と意志を収束させること。成生のように力が突出していれば気まぐれな意志によって未来は変えられ、意志が強大でも変えられるほどの力が無ければ変えられない。さらに意志は衝突する関係性も持っている。

途轍もない情報だが、ナイトアイはそれ以上に危険な情報を手にしてしまっていた。「だがおかげで分かった。未来の話だが、奴の本来の個性を知れる機会があつた」  
「それは!？」

未来が視えるということは未来に個性を話すような機会があれば先んじて知ることができる。ただ未来が固定化されているということは、言いふらしても問題ない程に未来を変えさせない意志が働いているという意味でもある。

さらに知り得た事実、言いふらすと逆効果であることも示していた。

「今は、多くの者には話せない。話せるのは……ルミリオン、今から話す面子くらいだ。集めてくれ」

「なぜ……いや、分かりました、サー。日にちを改めて連絡します」

ナイトアイの病室は個室。人払いも難しくなかった。



数日後——相澤が切島に伝える前日、ナイトアイが集めたのはルミリオン、グラントリノ、イレイザーヘッド、塚本の四人。イレイザーヘッドを除きオールフォーワン対策のために集められる面子と同じだった。

人払いされ盗聴や盗み見といった対策を終え、四人はナイトアイへ視線を向ける。

「やつの個性が分かったというのは本当か」

「はい。ただ情報を伝える人は制限させて頂きたい。ここでの会話も他言無用です」

グラントリノの言葉にナイトアイは真つ先に箝口令を敷く。四人も集まった面子から、あまり話せない内容だと察していた。

すぐに静まり、同時にナイトアイが口を開く。

「理由は……個性が強大だけではない、彼女の個性は影響力も強大なのです。それこそ、今話していいのかすら悩む程に」

「影響力……？」

コクリと頷くナイトアイ。まだ身体がボロボロだが多少のリアクションくらいはできる。

影響力。他者が他者へ与える能力であり、憧れや嫉妬といった関係性へ与える力だ。成生がヴィランだからではない、成生の個性が影響するのだ。

「やつの本来の個性は他人への影響も大きい。多くの人に注目されるなんて状態になっ

た時点でマズかった。

やつを目にするだけで他人へ影響を及ぼし、自らにも影響を及ぼす個性なのです。……良くも悪くも」

「その影響は」

イレイザーヘッドが食い気味に疑問を口にする。見ただけで影響を与える個性など洒落にならないから当然のこと。ましてやイレイザーヘッド、相澤消太は教師であり生徒に悪影響を及ぼされては困る立場だ。

生徒には、分かりやすく影響を受けているであろう人物がいるのだから尚更だった。

「ヒーローはよりヒーローとしての能力を高くし、ヴィランはよりヴィランとしての能力を高くする。言わば、自らの理想になりたいようになる。望むのなら個性の限界すら超えて理想に近づく。

おそらくだが……奴の近くに居ればいる程、もしくは個性が強大であればあるほど影響力は大きくなる。

それだけ多くの人に影響を与える個性ともなれば、未来が読めないのも必然だったの  
 でしょう」

ナイトアイは目頭を抑え、悩ましいと仕草に表しながら成生の個性の影響を言葉にした。

本来の切島なら乱破のラッシュで即割れる。本来のデクならフルカウルを30%も使えない。本来の未来は全て改変されている。

オールフオーワンやオーバーホールといったヴィランがより強大にならなかったのは限界を超えることを躊躇ったからだ。慎重であったり狡猾であったりと自らの限界を既に自ら決めてしまった者達には、性格はともかく個性へ与える影響は皆無に近かった。

しかし自らの理想になりたいように進ませる影響が必ずしも良いものとは限らない。何故なら自らの理想は自らにとつて正しい成長とイコールではないこともあるのだから。

「そのの……あ」

「悪いところが見当たらねえが？」

察しがいい者が多いとはいえ流石に分かりづらかった。ルミリオンとグラントリノが会話を遮り合うように疑問を口にする。

「理想に近づくとということは一時的に視野が狭まるようになる。事実、我々はやつをMs. ダークライというヴィランとしてしか見られなくなりつつある。

依光成生は、少女ではなくヴィランとしてより強く見えるでしょう？頭に靄がかかる程に」

ナイトアイの答えは明快なもの。自分たちに降りかかっている影響も正しく認識していた。

言葉を受けて全員が依光成生のことを考えようとする。真つ先に見えたのは、指から黒い光を放つ黒いドレスを着た依光成生M.S.、ダークフライの姿だった。

続けて依光成生が制服姿だった頃を思い返そうとするも、靄がかかったかのように思いつけなくなっていた。

「……確かにな」

全員の表情が険しくなる。影響が明確に自分に降りかかっていると認識できていた。ただ影響がそれだけなら大したものではない。ヴィランをヴィランとして見れているのだからヒーローとしては正しいとも言える。

しかし未来が視えるナイトアイだけは、それこそが致命的なのだと分かるのだった。

「そして間違いなく、やつをヴィランとして見た者にはやつはヴィランとしての顔を見せる」

「……マズいなそりや」

対ヒーローにおいて依光成生は依光成生M.S.、ダークフライへ変わる。依光成生は冷酷にも近い性格をしているため弱点と言えるものが存在しない。

逆に依光成生であればヒーローのような素養があるのは分かっている。故に感情的

にもなったりと気まぐれになったりと弱点だらけにも近い。

結論は、ナイトアイの口から語られた。

「予知で視れた最大の影響力がそれです。やつが注目を集めれば集める程にやつはヴィランとして完成されていく。

そしてM s. ダークライというヴィランに勝てる存在は、いない」

M s. ダークライに戦闘において勝てる者はいない。複数人でかかろうが同じこと。それはここにいる面々はよく分かる。

神野でヒーローオールマイイトの到達点をもつてしても、地下で個性クッゲーに持ち込んだを消したとしても勝つことは出来なかったのだから。

「行きつく先は……もう示されている、か」

塚本が口にし、頭に浮かんだのはオールマイイトとオールフオーワンが負けて倒れた姿。神野でひれ伏した、悪夢の如き光景。未来に再び起き得る光景であるならば、ヒーローとして絶対に避けなければならないものだ。

だがナイトアイが知り得たことは影響力という一点だけに留まらない、むしろここからが本番。

ナイトアイが知ってしまったことは依光成生という人間の個性だけではない、特性もまた視えていたのだ。

「さらに悪いことは個性以外にもう一つ……やつの身体。あれは危険です」  
「……………危険？」

「やつの身体は……例えば髪の毛を口にするなりして身に宿せば自らの限界を優に超えられる。雄英のプラスウルトラという教えじゃない、個性の限界すら打ち破れる。

何せ彼女は……その気になれば個性を複数持てる上に、上限は無いのです」

全員の顔が驚愕に染まる。危険どころではない情報に、理解へ時間がかかっていた。オールフオーワンやドクターがマスターピースと呼ぶ特性。さらにはそれが制限があるとはいえ譲渡も可能になるとなれば危険という言葉ですら生温い。

捕まえてモルモットにするなり……少なくともタルタロスに送るべき人物だ。死亡したとしても特性が残るならさらに面倒であり、ヴィランにとってみれば貴重どころではない。利用可能な聖遺物となる。

グラントリノと塚本はタルタロスでオールマイトとオールフオーワンが話していた内容を知っている。オールフオーワンが依光成生を救世主と呼ぶべき存在と言ったことがようやく理解できつつあった。

「そりゃ誰もが欲しがらる訳だ……影響力が極大な上に、自らの身体の一部を報酬に使ってるってか。ヴィランなら誰だって喜ぶ」

オールフオーワンはそれはもう喜んだことだろう。研究できれば自らの夢が叶う存在だ。

ただ研究出来なかった。マスターピースは個性込みの特性であったためだ。個性が正しく理解できていなければ特性を研究しようとしても弾かれるのみ。

言い換えると——オールフオーワンですら成生の個性を把握できなかったのだ。だからこそ研究対象の成生を殺す訳にはいかなかった。そしてそのまま影響力を多大に受けてしまい、M.s. <sup>ヴイランの女王</sup> ダークライとして認識してしまい、殺せなくなってしまった。

ヴイランの女王であるM.s. ダークライとして依光成生を見てしまえば、オールフオーワン 支配者と  
いえどヴイランとしての格を自ら成り下げてしまうのだ。

「打開策は？」

「今は手だし出来ん……が、未来は固定されている。やつが影響力を失っているのか、それとも自らにも影響を及ぼしている個性の影響なのか……」

塚本の疑問に判断できないとナイトアイは告げる。いくら未来が視えるとはいえ処理が追い付かないことだってある。10秒の動画を処理するのに10分必要な場合だってあるのだ、情報量が多いためナイトアイでも整いきれてはいなかった。

本来なら情報を整えてから動くのがナイトアイだ。ただ今回は、早く共有すべきだと感情が叫んでいた。

ナイトアイらしくないとグラントリノと塚本は見るも、昔のナイトアイはこんな時もあったと思ひ返す。オールマイトのサイドキックだった時代は、先走って情報を得た時はこんな時もあったつけと少しだけ懐かしむ。

懐かしむような空気になりかけたのを切ったのは、イレイザーヘッドの言葉だった。

「見た未来は変えるべきか否か、どちらですか？」

「……変えるべきだ。だが変えるべきではないとも言える。」

悪くない未来ではある。だが被害が余りにも、余りにも大き過ぎる」

何もしなければ訪れるのは被害が大きくもナイトアイが納得できなくもない未来。だが余りにも大きい被害となればヒーローとして許容できない。

ナイトアイは気づいていなかったがその選択は……：皮肉にも、かつてオールマイトへ自分が勧めた選択に近いものだった。

かつてオールマイトが選ばされたのはNo.1ヒーローがいなくなれば被害は一時的に起きるも成生がヒーローとなり救われる未来。それをオールマイトは拒絶したため被害は抑えたものの成生はヴィランとなった。

今回は何もしなければ莫大な被害が出るものの成生について悪くない未来。だがそ



れを拒絶し被害を軽減しようとすれば間違いなく成生にとって悪い未来になる。

唯一違うのは未来を変えられる程の力をナイトアイが持つていないこと。故に選択肢は限られていた。

「イレイザーヘッド、烈怒頼雄斗には個性が危険であることは教えてください。詳細は、ダメです」

「分かった。丁度雄英の方で個性を予想してるからそつちを教える方向でいく……で、大丈夫ですか?」

「お願いします。影響が最も大きく表面化しているはず、何せ……彼女のヒーローですから」

成生の影響力に乗っかる。未来を変えるのに最も手っ取り早い方法は成生の力や感情に干渉することだ。何せM.S. ダーククライは簡単に未来を変えてきたのだから。

そして最も成生に影響を与えられるのは、成生のヒーロー高見を置いて他にいない。

ただ、成生に影響を与えられるのは一人だけではない。

「未来へ話を進めましょう、彼女を止める方法はある。我々に風は吹く、その切符がこれだ」



手紙の差出人には、  
艶羽という文字が書かれてた。

## ヒーローサイド 死穢八齋會編アフター エリ編

相澤と切島が話していた数日後、エリがアライアンスにやってきていた。

エリはよりみつせいとの戦いにおいて全力で個性を使ったが制御できなかった訳ではない。むしろかなり繊細な制御を行っており、知恵熱で一日ほど眠っていたがそれだけだった。

問題はあった。保護者がおらず、なおかつ強大な個性を持っているのは見過ごせないところだ。孤児院にいれても再び同じ悲劇が行われる可能性は十分以上にある。

故にとられた措置は、イレイザーヘッドの保護観察下におかれるというもの。

エリの個性が暴走しない確証が——依光成生にはあるが——ヒーロー側にはないのだ。ならば選択肢は『抹消』できるイレイザーヘッドの下以外にない。

そして相澤がアライアンスに連れてきた狙いは、保護してすぐに表面化した問題、エリの笑顔が見れないということにあった。

大事な人<sup>依光成生</sup>と離れた影響もあるが、何よりオーバーホールの実験台にされていたのだ。

笑い方を忘れていても何ら可笑しくない。

保護したエリと話した相澤は既に暴走しない確証をしており、ならばと連れてきたのだ。緑谷と通形はここにはおり、二人に会わせることで解決できないかと試みていた。

相澤もヒーローなのだ、笑顔を忘れた子供を笑わせたいのは当たり前だった。

「エリちゃん！」

連れてきたエリを真っ先に気づいたのは緑谷。ナイトアイ達の前で決意表明してでも救いたかった者であり、共に戦った戦友でもある。緑谷も戦いが終わった後どうなったのか知りたくて仕方なかったのだ。

「お兄ちゃん！」

「久しぶりだね、元気にしてたかな？」

「エリちゃん？、大丈夫になったのかな」

お茶子も気づき和気あいあいとしつつも笑顔だけは見せない様子。エリが人見知りなところもあるが、誰よりもヒーローである緑谷はすぐに気づく。

相澤に事情を聞こうとするが、エリが何を話しているかを耳に聞き入れながら。マルチタスクに近いが、一般人なら誰でも持っている情報処理能力だ。

聞こうとした瞬間、エリから出てきた言葉は余りにも予想外過ぎる言葉。誰しもが思

考どころか身体も止めていた。

「ばくごーって誰？」

意外な第一声。ヒーローが知らなかったのは、エリと成生がどんな関係性なのか、どんな会話をしていたのかだった。

「かつちゃん……？」

ただ一般論として、嫌いな奴は誰かなんて話はそれなりの仲ならする。

成生が爆豪を嫌っているなんてこともエリは知っていた。ついでに会ったらどうしてほしいかも。

しかし爆豪はエリを知らない。成生との関係も。

「あ、？」

「かつちゃん？」

爆豪本人も近くに居たため近寄ってくる。

エリは子供であり、爆豪は子供が苦手だ。つい先日補欠仮免試験という名の児童教育で合格したとはいえ、それは男児を中心に担当したため。女兒など突き放すのが基本だ。

ただ爆豪もヒーローの卵。面倒極まりない児童でもないエリには、会いもせず突き放すようなことは無かった。

「何の用だガキ」

「えーと、デクお兄ちゃんちよつと持ち上げて」

「?、はい」

爆豪から見て面倒極まりない女子の影響を受けた児童、という意味では突き放すべきではあったのだが。

エリは爆豪の頭に手を伸ばし——個性を発動した。

「(っ)、だ」

「!?何しやがるクソガキ!」

「エリちゃん!」

髪の毛一本もない程の範囲。極々微小の頭の中、治癒の個性ですら回復できない場所。エリが発動した個性はそこだけを巻き戻す。

ついでに、慕っている姉の言葉も伝えることを忘れていなかった。

「成生お姉ちゃんからのお願ひ。「そろそろ悪夢から起きたら?」って」

「あのモブがああ……!」

アクションの全てが爆豪の感情を逆撫でする。それら全てが成生の指示ともなれば、

爆豪の頭の中では爆豪を指指して爆笑する成生の姿が完璧なまでにイメージされていた。

頭が爆発したかと思うくらいに激怒する爆豪。ただ周りからは心配が向けられていた。爆豪に何かされていたことなど、誰も知らなかったのだから。

「かつちゃん何かされてたの?」

「何でもねえ!」

爆豪は林間学校の後囚われ、成生にトラウマを焼き付けられていた。文字通り、脳内に物理的にだ。その後悪夢に魘されることも多かったが、それを表に出すことは無かった。それだけの精神力を持っていた。

成生はそれすら分かっていた——だからこそ暴露させた。爆豪にとっては屈辱になると知っているから。

しかし悪夢に魘されることが無くなることは純粋にメンタルが安定するということであり、デバブが無くなれば元の実力に戻る。そして爆豪は治してくれた者に礼を言わないような男ではなかった。

……ただ、忘れられているが、成生はオールフオーワンと比べられるほど狡猾なヴィランとされている。当然、嫌がらせも比べられるくらいにはできる。

「礼は言わねえぞ」



「うん、成生お姉ちゃんもそう言うだろうって言ってた」

「あんの女あああ……!!!」

完全に爆豪は成生の手のひらで弄ばれていた。

周囲から見れば爆豪が一人憤怒に震えているだけ。ここまでブチギレている爆豪に事情を聞ける仲はA組でも一人だけしかいなかった。

その唯一、緑谷が向けている視線はエリの方だった。爆豪に何かあったとしても自分から教えてくれる人ではないと良く知っているのだ。

「……ねえ、エリちゃん何したの？」

「え？成生お姉ちゃんがぼくごとって人壊しちゃったから直しておいてって」

「え!？」

ガバツと爆豪の方へ体ごと振り向く緑谷。憤怒に震えていた表情でありながらぼつが悪そうな顔という難しい顔をしている爆豪は身体ごと別の方向へ向けていた。

その場にいる全員へ話したくないと、全身からオーラが放たれているのが誰の目にも見えていた。

爆豪が話したくなくても話す人物がここにはいることを怒りで一瞬忘れてしまったのが運の尽きではあった。

「頭の中をちよつと焼きつけた？とか言ってた」

エリは爆豪など見えていないと言わんばかりに続けて話す。これには流石の爆豪もブチぎれ、エリの口を塞ごうととびかかる。

が、A組男子の全員が拘束した。障子や常闇といった面々はこうなると察していたため警戒し捕まえ、他のA組男子も二人が止めたことで全員で拘束していた。爆豪拘束に参加しなかったのは緑谷と切島、あとは女子のみだ。

そして緑谷はというと、エリの言葉で連想して思考の海に潜っていた。

爆豪の頭の中を焼き付けるなど大掛かりな仕事だ。依光成生と言えどそう易々と出来ることではない……と思いたい。そうなる必要になるのは時間だ。かつちゃんと依光成生が同じ場所にそれなりの時間一緒にいた時とはいっただろうか。

考えられるのはたった一つ——ヴィラン連合に捕まっていた神野の事件の時だ。

「あの時か……い！」

「ちっ」

周囲に分かりやすく聞こえる程に大きな舌打ち。緑谷の声はよく届く爆豪には、誤魔化すようにそうするしかなかった。

頭の中が沸騰したり鎮火したりと忙しい爆豪と思考の海に潜りながら話す緑谷。その隙間を縫うように蛙水の鋭い質問がエリの方へ届いていた。

「待って。じゃあなんでエリちゃんにそんなことをさせるの？」



「ヴィランの美学ってやつ？」

「かもしれないわ。でも方法があれば治しにいかせる、って考えればいい子でしょう？」  
蛙水は成生を擁護しているが、理由は簡単だ。

この場にいる誰よりも冷静でいられること、そして奪姫と戦ったからだ。

所々で奪姫は成生について話していた。蛙水梅雨には彼女が成生に懐いていることも、尊敬しているようにも見えていた。

それは子供をきちんとあやせる人ということだ。少なくとも、恐怖で支配するような人ではない。

「確かに……でも、ならどうしてあんな真似を」

「……彼女、ヒーローとしての素養があるって話だったわ。なら、エリちゃんを表社会に向けたかったんじゃないかしら。」

治癒する個性に似てるなら皆欲しがる」

「!!!」

梅雨の分析はヒーローに都合のいいものだ。しかしエリが望めば間違いなくその道へ進むことができる。

まさしくM s. ダーククライが動いているムーブそのものだった。ヒーローになりたければ表社会へ進むべきと指し示す。もしもそうでなくなつたのなら、再び悪<sup>M s.</sup> 夢が訪<sup>ダーククライ</sup>

れるだけのこと。

M.S. ダークライはヒーローや表社会が向いているならそちらへ誘導する。心酔されやすいヴィランとして社会に浸透しつつある原因だ。

それでも、今現在に見える成生の姿はエリを表社会へ向けようとさせている。ヒーローと呼んでもおかしくない行動とすら言えた。

「ヒーローが助けようとすれば動く助けてくれるヴィラン……何で敵対しないといけな  
いのかしら」

判断力に優れるが故に梅雨には分らない。善悪で揺れに揺れる成生であるために、梅雨には優しいヒーローにも凶悪なヴィランでもあるように見えていた。

ヒーローとしてもヴィランとしても、どちらの面も見ているのは梅雨だけではない。もつと近くで見ている者もここにはいる。

「……助けてほしいって人はいっぱいいた。その手を握ろうとしないのが依光成生だ。だから、それを何とかしないとイケないと思う。」

ただ捕まえようとするだけじゃ、彼女は捕まえられない」  
緑谷も今の成生の状況を認識してはいた。

表社会へと手を差し出すと掴んでくれないどころか手を払ってしまう。けれどもその表情は、表社会へ行きたい救ってほしいと叫んでいるようにも見える。

「<sup>M.S.</sup>ダークライ  
ヴィランでありながら<sup>依光成生</sup>ヒーロー、<sup>依光成生</sup>救けるべき人でありながら<sup>M.S.</sup>救けるべきでない人。だからこそ強大であり、だからこそ救けることができないのだ。

まずはその柵をどうにかしなければ、救けるどころか捕らえることもできない。

「敵対したら元も子もないわね」

「それは間違いない……かな。今回使った力は壊れることを覚悟した全力だった。でも超えられた……ってことは敵にしたら勝ち目がない」

オールマイトの力を所有しているという意味で緑谷は個性そのものには絶大の自信を持っている。そしてA組の全員も体育祭の轟との衝突で全力の緑谷のパワーは知っている。

それでさえ超えられた、全員の目が驚愕に染まるのも仕方のないことだった。

「はっ……ってナイトアイが言ってた!」

「オールマイトの元サイドキックが言うなら間違いないわ」

重い空気になりかけたのを誤魔化す緑谷に、梅雨も即反応する。

ここにいるのはヒーローの卵。最も純真にヒーローになろうとする者達であり、ヴィランとの戦いで最も戦意喪失してはいけない者達だ。

まして、見ているのは歳が近いヴィランなのだ。例え空元気に近いものだろうと、口に出さなければならぬ。

もちろん、あるのは空元気だけではない。次のための考え方もだ。

「戦場に立たせず、敵にせず、捕まえようとしない……説得？」

「今回ナイトアイが立てた計画はそうだった。

もし……全面戦争になったりして敵にしないといけない状況になったら、絶望的な戦いになるかも」

「考えたくないわ」

「ホントね」

依光成生との全面衝突、イコールで神野の再来だ。プロヒーローでさえ避けている選択肢であり、卵である彼らも考えには入れても選択したくないと言い切れる程度には思考できていた。

成生が同年代であるが故に、数歩間違えれば同じヒーローを目指すクラスメイトになつていたかもしれないと分かるが故に、どうしても「依光成生を救けられるか」を考えてしまう。

静まりかけた空気に声を出したのは、エリだった。

「あと……きりしまつてお兄ちゃんはどう？」

「ん？俺か？」

「ここにはA組全員が居る。エリの声が届く範囲に切島はいた。

「成生お姉ちゃんを助けて」

「当たり前だ」

「……それ、僕にも言つてたよね？あの時だけじゃなかったの？」

「うん」

切島は当然のように助けを求める声に頷き、緑谷は聞いたことのある言葉に思わず問い直す。

エリは頷くも表情は暗い。緑谷に助けを求めた時とは違い、悩みを打ち明けるようだった。

「お姉ちゃんがお姉ちゃんじゃなくなってる時があったから。悪い何かがお姉ちゃんの中にいるのかなって……」

子供の感覚は鋭い。特に親しい者の感情の機微は本人すら知らない範囲のことを認識できることさえある。

……エリが感じ取った悪い何かは巻き戻されて消えてしまったのだが、知る由もなかった。

「それは……。いや、視えたのか？」

「うん。お姉ちゃんは受け入れてたけどきつと違う。戻ってる時に変なズレ？みたいなのがあったの」



エリは自らの個性で直接成生を巻き戻していない。だが自らの個性を使われているならどんな挙動を起こすかは知っている。

一定の効果を担保する個性破壊弾は常に一定の速度で巻き戻すようになっていた。途中で変速することは無い。

それが明確に不安定な巻き戻しになっていた。マスターピースという特性など知らない、エリの心当たりはそれしか無かったのだった。

そして、エリが感じ取ったのもう一つあった。

「あと……成生お姉ちゃんはまだ戻せない。怖い感じがしたの」  
「怖い？」

「うん、黒い光に握り潰されるような……もう一度触れたら冷たい何かに吞まれてしまうような、そんなの」

黒い光、連想させるのはM.S. ダークライ。一度喰らった攻撃ならば次からは学んで逆利用すらできるであろう狡猾なヴィラン。

切島は『個性を創る個性+ $\alpha$ 』と認識しており、耐性を得るのも自在であり流石と笑っている。

緑谷は『未知だがトップヒーロー&ヴィランを倒せる個性』と認識しており、依光成生の警戒レベルがあげられたと気持ちを引き締める。

「安心しろ、俺らが何とかする」

切島はエリの頭をポンポンと撫でる。

二人は……否、彼女と相対した者ならば、依光成生は泣きたくないのに泣きそうな少女を泣かせる人ではないことを分かっている。

何せ彼女はヴィランとしても、ヒーローとしても、背中を押すのが生業なのだ。望みの方向へ進ませることこそが彼女の行動原理だ。

ヒーローとしてだけの行動ならA組も、なんならB組でさえ彼女が分かる。そして切島は最も分かっているからこそ彼女を止めるために笑うのだ。

——戦う意味は無く、止める意味だけが彼女には必要なのだ。その先の姿は、切島だけは……切島とエリだけは知っている。

「あいつの笑顔って眩しい光なら俺らが作るんだからな」

「……うんー」

エリは忘れない。近くに居続けてくれた姉のような人の姿を。居続けたからこそ見たことのある笑顔を。

離れてしまったがヒーロー達は再び見せてくれると約束した。『頼る』ことを覚えたエリに、一切の不安は無かった。

「ん、笑えるようなら安心だな」

イレイザーヘッドはその光景に微笑む。

切島と同じように、エリも笑っていた。  
くなった少女は、どこにもいなかった。

本来あるべき未来に、  
親から捨てられ笑えな

## 悪夢の後遺症

地下深く、M s. ダークライのアジトとされる場所。いつもなら非常に煩い……喧しい子供たちが動き回っている場所が、奇妙なまでに静かな雰囲気に含まれていた。

それも一日どころではない。時間をきちんと数え上げればこれで三日目だった。

「おかしさんの様子は？」

「ずっと眠ってる。疲れてたのかな」

艶羽はその場所に近づき疑問を口にする。返事は即座に返ってきていた。

アジトの最も最奥、M s. ダークライの寢床。そこにM s. ダークライは眠り、身体のスキャンといったことができる電花と、身体に漲っている活力の判断ができる奪姫がいた。

M s. ダークライはアジトに帰ってきた。身体的には無傷であり、使っている個性は違えど変わらない様子だった。

が、ベッドに倒れ眠りについた後——目覚めなかつた。

異常を起こしたなら医者に診てもらうのが妥当であり、ドクターの存在はM.S. クライの墮とし子は知っている。ただ居場所は知らず、情報伝達手段もない。ついでに母親の状況を伝えたくないと本能を感じ取っていた。

「……ううん、逆。活力が溢れてるくらいには元気だよ」

「じゃあ、何で起きないの？」

「乱れてるから、かな」

二人へ顔を向けず、電花は声だけで答える。長女である彼女の声はもう、どこか舌つ足らずなものは無くなっていった。

目覚めない母親の前に、姉である自覚が一気に花開いたのだ。狼狽える弟妹達のために、この場において最も凶体の小さな姉は最も頼れる姿になっていた。

「おかーさんの脳波？がものすごく乱れてる」

電花は電波の受信もできる。母親に電波を送信したこともあれば、受信したこともある。どうなっているかなど姿を見なくても分かるのだ。

「エリちゃんがいればよかったのに」

「いつ起きそう？」

「私たちは好き勝手していいの？」

「ドクターは呼べないの？」

奪姫、艶羽が次々と疑問をぶつける。無邪気な言葉であり、母親への心配が純粹に表れていた。

俯きながら二人へ電花は口を開く。姉として頼れる姿になった今だからこそ、受信した眠っている母親が抱いている気持ちがかかるものがあつた。

「少しずつ治まつてるけど、私たちの行動が大事」

「私たちの？」

受信したのは自分自身へ向けた不安、疑念、それらの感情と……子供たちの心配。

母親が自分自身に求めているもの。立場を示し何をしているのかが分かればその原点は分かる。

目立ちたい。母親の願いがそれであることくらい電花は分かる。しかしそれだけではないことも分かつていた。

何故ならば自分たちを作つたからだ。一人で派手に暴れた方が目立てるのは間違いない。

だというのに作つた。ならそこには必ず別の目的があるはずだ。便利だから、人数が必要だから、それだけでないことくらい容易に想像がつく。

「おかしさんが今治まつていつてるのも私たちが何か行動したから。こうやって話すのにも2日くらい慌ててたから……」

母親が賢いことも電花は知っている。目覚めないならどういう行動をするくらい予想も付けられるはずだ。

つまり目覚めないおかーさんは、私たちへの試練だ。

おかーさんは自分自身への疑問を解決しながら、何かを待っている、それが何なのかは分からないけれど、私たちに関係する何かであることは間違いない。

だから私たちが何かすれば回復は早まっている。そうとしか考えられない。

「つてことはつまり」

「好き勝手してれば起きるつてこと!？」

艶羽が目を輝かせながら電花に聞き返す。自由を好む艶羽からすれば当然の反応だ。

母親から受信する。肯定している感覚であり、自分たちが何をしなくとも起きる時期すら教えてくれる。

「うん。治まる速度もだいたい速いから。どれだけ遅くとも3ヶ月以内には起きるよ」

3ヶ月。子供たちからすれば非常に長い時間だが、治療期間という意味なら短くはない時間だ。

何せ電花に母親がどういった状態なのか分かっている。本来なら即死クラスの傷を

負っているのだと。

「3ヶ月も!？」

「あのおかーさんが!？」

分かってるのは電花だけ。奪姫も艶羽も分かっていないのだ。どれだけの重症になっっているのかも、今がどれだけ異常な状態になっっているのかも。

それら全て、時間で解決できると教えてくれる母親が全て解決しまえている事実も。

「これホントはのーしってやつだから、起きない方が普通なんだよー」

脳死。治療系の個性があつても治らない場合がある傷であり病。個性は脳で扱うため、個性を扱えない状態になるはずなのだ。

しかし母親は当てはまらない。個性を発動しているのは脳ではないのだと言わんばかりだ。しかしダメージは残っているため眠っている……のだが、二度と脳死を起こさないように最適化されると電花は受信していた。

「じゃあ私たちは好き勝手動くね」

「あ、私も」

ホツとした奪姫と艶羽の二人は動き出す。母親が望まれているがためにも。元々好奇心旺盛な艶羽、母親のために外に出回りたい奪姫、ここに留まる理由はもう無かった。

「私も。大は借りてくよー…崩華も誘おうかな。とむらおにーさんのところ行ってくる」



「じゃあ私も。勇也と灯火連れてくね、消一と闇子は二人で楽しんでるけど……誘ってみるかなあ」

奪姫は大と崩華ほうかを連れて、艶羽は勇也ゆうやと灯火とうかを連れようと部屋へ戻っていく。

ベッドの横に残ったのは電花だけ。目を瞑り、受信と送信で母親の意識と直接話を繋ぐ。そこで伝えられたのはたった一言だけだが、十分に伝わっていた。

(好きに外を生きてきなさい)

「私は仁と残った子と……うん、好きに動くよ」

ベッドに背を向けて離れ部屋に戻ろうとする電花。しかしその足は重かった。

母親を一人にするのが嫌な訳ではない。巻き戻しの個性を無効化すらできる母親なのだから、一人にした方が良い可能性すらあるのだ。

理由は、電花自身にあった。

「ごめんね皆、嘘ついちゃった。ホントはもう少し短いんだけど……もう私には、全力で動くには、残ってる時間がないから」

電花は寿命がどれだけ短くてもかまわないと作られた試作品。しかし現時点での優秀さで言えば兄弟の中でも最上位。頂点にいるのは奪姫と電花だ。生まれた順を加味すれば、最も個性に長け、最も自らの能力を把握できてしまう。

つまり——誰よりも母親に近い才を持っているのだ。だから、母親と同じように、知

りたくないことさえも分かかってしまう。

「私の時間、分かるんだ。……いつも通りに動けば、3ヶ月も無い」

ベッドにギリギリ声が届く位置で電花は立ち止まる。受信する電波は聞こえないと言っていた。

電花には分かる。聞こえないふりではない、本当に聞こえていない。電花が告げた言葉は聞いてほしいけれど、聞かせたくないことだったため都合は良かった。

「抑えて、よくて半年……だから、お母さん。私を受け取ってね」

振り返った電花の瞳に映るのはベッドに横たわる依光成生の姿と——一つの、人形の姿だった。

残りの命を、使い切って好きに生きる。決意を示すように……しかし伝えないように、受信の個性でも持つていない限り聞こえない波長の電波でそう呟いていた。

依光成生が最も信頼する子供は花開く。依よつていた光が薄くなるうとも、表に出たからには好きに生を成そうとする。依光成生の子供だから、説得力はそれだけで十分。

瞳は強く輝き、ただ一人を救うためだけに動き出す。

ヒーローのようにではない。自らの破滅が分かっているように、例え一人を傷つけようとも救うために動くのだ。

そこにあるのはただの我儘。母親のためだけに捧げる、人生で最初で最後の我儘だった。

## 義賊の投稿者は悪夢に魘される

時は数か月前に戻る。M.S. ダーククライが神野でデビュータントし、暴れに暴れまわっていた時期……が過ぎた頃。新星ヴィランの名が日本の隅から隅まで知れ渡った時期だ。

現代の義賊にして投稿者、ジエントル・クリミナルは紅茶を飲む。犯罪仕事を行う前後のルーチンだ。これをやるか否かで成否が大きく変わると言ってもよく、成功した時の紅茶程美味しいものは無い。

犯罪仕事のレベルによって紅茶のブランドを変える。これもモチベーションのため的大事であり、ルーチンの一枠を担っていた。

今回の犯罪仕事は大したものではない。故に適当な喫茶店に入り紅茶を飲んでいた——そんな時だ。

「あなた……何故投稿者なんてやってるの？」

「……君は？」

いつの間にか横に座っていた少女に声をかけられた。バケットハットで白い髪を隠した、どこにでもいそうな私服の少女だった。

目を瞑って紅茶を飲んでおり、匂いや味に集中している姿。声をかけられなければ邪魔せずにお暇していたことだろう。

「悪いとは言えないけど……：……らしくない」

「あ、もしかしてリスナーかい？」

続けて告げられた言葉に目の前の少女が誰なのか考え付いたのはそれ。リスナーかけられた言葉から予想できるのはそれくらいだった。

「ううん、でも分かるんだ」

「個性かな？」

「そんなとこ」

否定を返されたとなれば全く別の方向から知ったと察せれる。個性ならば可能性も十分だ。

曖昧な返事と同時に少女がコトンとテーブルに置かれたコップが、肯定しているようだった。

「今回の仕事は止めた方がいいよ」

「何よ！ ジェントルの何が分かるって言うの!？」

「代わりがあればいいでしょ？」

女性のリスナーだからか、横にいるラブラバの反応がいつもより酷い。ラブラバは私

のファンだがかかなり強火なところがある。

新規を歓迎したい気持ちはあるけども、にわかへ反応してしまうのだろう……困るところだ。

「場所を変えましょう。少し、話がしたいの」

立ち上がり、少女は私にだけ聞こえる声で一言だけ呟いた。

「安心して。私も、ヴィランだから」

驚愕にコップを落としそうになってしまっても、空いていた手で支える。そして残った紅茶を一気に飲み喫茶店を後にした。

少しだけ先を歩く少女をラブラブと共に追い、少しずつ人気がない場所へと歩いていく。周囲の視線も少しずつ無くなっていき、辿り着いたのは町はずれの壊れた住居、寂れた廃墟。

野良ヴィランが襲ったことで廃棄される住宅がある。町外れともなれば需要がなくなる場合もあり処分に困りそのままになる……その一つだった。

少女が振り向き、視線を帽子で隠したまま対峙する。圧力は無く、ヴィランとは思えない姿だ。

「あなたが居るべき場所はここじゃないでしょ」

「ほう……?」

「欲しいのは歴史に名を刻む英雄にも等しい名声、違う?」  
「!!?」

鋭過ぎる指摘、容赦のない言葉。会って数分も話していない人間から放たれるものではない。

リスナーでもない。だというのにまるで私自身が見透かされているようですらあつた。

「何故知っている……?」

「さあ? 何でだろ。今の私には分かっちゃうんだよ」

首を傾げ自分自身でも分かってないと言いたげな少女。しかし発言自体に迷いはない様子だ。

ヴィランだという言葉が無ければ、ふわふわした雰囲気をした不思議ちゃんとも思える反応。自らへの自信だけは少女がヴィランである事実を分かりやすく示しているが、そのせいで人物像が掴めない。

雰囲気の歪さ。勘では感じ取り……ヴィランとしてではなく女としての勘の鋭さは私よりも優れた者がここにはいた。

「……いや、まるで違う。でも、そうとしか……」

「ラブラブ?」

ラブラブが後ずさる。心当たりが無ければそんな反応はしない彼女だ。

私がいれば強気にも出る。まして相手はにわかで、強火な彼女だ。そんな彼女が……おそるおそる口に出した。

「依光成生？」

「へえ？……知ってるんだ」

目を見開く、という感覚が自分でも分かる。

目の前の少女が少女の皮を被った悪夢に変質したような、霧囲気が異様なものに変わる。

圧力ではない。大物ヴィランを持つ、心臓を掴まれるような殺気ではないのだ。ただ異様な霧囲気、まるで頭の中に夢のような霧がかかる感覚だ。

「自己紹介が遅れたね、現代の義賊にして投稿者、ジェントル・クリミナル。そしてそのパートナー、ラブラブ。」

私の名前は依光成生、ヴィラン名は——Ms. ダーククライ」

帽子を脱いだ顔はいつぞやのテレビで見た姿とほぼ同じ。違うのは服装と体型、そして髪の色が黒ではなく白ということだ。

「なんと……！」

「随分と表側に向けた顔をしたヴィラン……ヴィラン？がいたものだからね、声をかけ



ちやつた」

成生少女の声色はさつきまでと変わらない。雰囲気は異様に変わっているが、威圧する気はないと言いたげだ。

表情はさつきまでの隠していた様相とは違い嬉々としている。動かしてなかった表情筋が仕事を始めたようだった。

「あなたが義賊だというなら答えは簡単。私が暴れている間に現れる木っ端ヴィランを抑えればいいよ」

「マッチポンプをやれって言うの!?!」

ラブラブの怒りはもつともだ。私とてそんな真似は好まない。

義賊であることを知られていても……目線が逆か。私が義賊と知っているから、成生少女自身は悪評を高めていくから、私を使って名声を高めればいいと言うのか。

義賊の名声などついでに上がると言っているのだ。だから乗つかれと。私が好む好まないで今の立場にいるのかすら分かっていると考えれば……乗つかる方が正解だろう。

「どうせ今の私が何を言ってもあなたは表側に真つすぐ戻れない。ならそっちの方がいいでしょ。」

何より、義賊に変わりはない」

「私にも流儀がある。過激で暴力的な行動はしないと決めていてね」

「素晴らしいわ。けれど無駄ね、ここから先のヴィランの行動は悪化していく一方。流儀に反するからと言っていれば、名すら忘れて消えていくだけよ」

「……。……否定はできないか、流儀を曲げる時が来るのもその通りだろう」

「ジェントル!?!」

ラブラバの目線から、成生少女の瞳から、目を伏せる。目を逸らすことの意味をこの場にいる者で知らない者はいない。

「それに、ヒーローには何か突き刺さってるものがあるみたいだし」

「全て見透かされている、のか」

私には疵がある。ヒーローになりたかった、助けようとして間違えた、そんな——  
ヒーロー志望が落伍した過去がある。

そこから何故ジェントル・クリミナルが生まれたのか、ヒーローとなった同級生が名前を忘れたことがきっかけだ。隣にいたはずの者にさえ、忘れ去られ消えていく。貧しく哀れに消えていく。

許せなかった。姿を残しなかった、名前を残しなかった……名声が欲しかった。たとえヴィランになつてでも、目立ちたかった。

ラブラバにすら話したことは無い。というのに成生少女は勘<sup>過去</sup>だけでそれを打ち抜い

た。悪夢と呼ばれる理由が私にも少しずつ分かってきていた。

「それが何なのか知らない。でも横に支えてくれる人もいるし、止まれる足もある。それなら必ずあなたが進むべき道を進める時が来る」

「まるでカウンセラー……いやフィクサーだな、成生少女」

嬉々として話すだけで人の心を誘導する。カウンセラーと呼ぶべきなのだろう……が、それがヴィランとなれば目的という概念がどうあっても挟まる。そこから繋がる予想は、フィクサー黒幕という存在の確立だろうか。

……そんなことせずとも十分に悪評が立っているのに？放っておけば彼女の天下が訪れるのに？

「人の心を誘導すればその人はヴィランにもヒーローにもなる。ならヴィランのカウンセラーはフィクサーそのものでしょ？」

——私には、結論のように聞こえた彼女の言葉は、空虚なものにも感じてきていた。嬉しくて話していた結果が彼女にとつてどうでもいいものだ、というなら悪夢だろう。操るだけ操って、使えなくなったら捨てる極悪なヴィランだろう。

だがそうではなく、結果だけが空虚だとしたら？思考や行動の過程は、嬉しくて仕方のないことだとしたら？

横ラに支えてくれる人バがいて、止まれる足がある。と言いたいのであれば成生少女には

「成生少女……君には」

「そこまで」

言葉が詰まる。無理やり口を抑えられたかのような錯覚。威圧されたわけでもないのにそうしなければならぬと思わせる言葉影響力の力。

声を出したくても、出せなかった。そうしなければならぬと、頭が、身体が反応していた。

「あなたを見つめてみたかっただけ。人生なんてやり直せないものだから尚更かな。

時代を揺らしていくから、クツシヨンよろしくね」

そう呟き、成生少女は背を向けてどこかへ跳んでいく。一瞬で視えなくなった姿が、寂しく見えた背中が、もう会うつもりは無いと言っていた。

「君には、支える人も、止まれる足も無い……のか？」

「ジェントル……」

ジェントル・クリミナルはヒーロー志望の落伍者。それでも救ける者としての矜持を全て忘れた訳ではない。

だからこそ、依光成生という少女の歪さが鮮明に視えてしまうのだった。



「クソがあー！」

「はっはっは！荒っぽいのは嫌いだがこういうのは得意なものでね！」

2ヶ月程の時間が過ぎた頃、動画投稿サイトには空気の膜にサンドイッチされ動けなくなったヴィランとジェントル・クリミナルが映っていた。

「ヒーローも到着してしまうのでね！ここから私も退散するでしょう！」

我が名はジェントル！ジェントル・クリミナル！現代に生きる義賊よ！」

ビシイッ！とカメラに決めポーズを見せつけ動画は終わる。現地ではいつも通りラブラバが興奮していた。

「かっこいいわジェントル！もつと決めポーズが見たいわ！」

撮影に成功したので希望に応え、ビシイッとポーズを決める。ラブラバからはキャー！とピンク色の声があがっていた。

ラブラバの持つ個性「愛」による強化モード、ラバーモードは使っていない。ラバーモードは時間制限があるが超強化される形態であるため退く時に使う時もあるが、今回はただのジェントル・クリミナルの実力だ。故に急ぐ必要も無くゆつくりと歩いて去っていく。

ヒーローの追手を完全に振り払いビルの上で今回の撮影の反省会を行う。ここまですべて進んできている。成長少女の言った通りに。

「すぐ消されるがリスナーも増えてきている。あの時に示された道はある意味で間違い

なかったというわけか」

「でもでも！あんな女の尻ぬぐいなんてジェントルがやる必要なんてないでしょ！」

ラブラブの言う通りだ。名声を稼ぐなんて真似のためでなければこんなことはしない。ところが困ったことに、名乗っている「義賊」という称号が邪魔している面もあった。

「義賊は大悪が居て成立する面もあるのさラブラブ。そして悪を討つのはヒーローでなくとも良い。」

名を刻むには悪を討つ、間違いを正す。そうしていればいい」

「じゃあ依光成生を討つの？」

一番の理想はそれだ。歴史にすら名を残した最大最凶のヴィランAFO、それを超える大悪である依光成生を討てば義賊だろうがなんだろうが名を残すほどの存在になれる。<sup>ヴィラン</sup>

成生少女も間違いなく考えたはずだ。考えても実行できないから無駄なことではあつたらうが。

私に依光成生を倒せる力はない。彼女は強大だ、強大過ぎると言ってもいい。一度会っただけで頭の中に存在感を確実に残している。口にした言葉が一言一句覚えさせられている。

洗脳……ではないが近いものだ。誰の記憶にも強く印象に残るカリスマとでも言うべきもの、数度会ったヴィランであれば心酔するのは間違いない。よつぽどメンタルが強ければ多少は保てるだろうが、一年もあればどんな者だろうと陥落することだろう。一度会っただけでそれが分かる。立ち向かうなど出来ない……出来なくなってしまう。

「しない。彼女は我々にどうこうできる人ではない」

「……ちよつと残念。ジエントルにぼっこぼこにされるあの女は見てみたかったのに」

それは私も見たい。依光成生というかM.S.<sup>大</sup>、<sup>悪</sup>ダーククライを、だが。

「ははは、成生少女をぼっこぼこに出来る人はそうそういないさ。居るとすれば……どんな形であれ彼女の横に居る人だろう。」

ちようど私がラブラバにぼっこぼこにされるようにね」

「ポコポコの間違いじゃない！」

ポコポコとラブラバが私の太ももを叩く。痛みはない、なんならマッサージ気分で見持ちよくすらある……スキンシップというやつだ。

「さて、次の案件だ。一度拠点に帰ってから話そう。情報も確認しておきたい、頼むよラブラバ」

「えええ！」

ヒーローを撒けたことは確認できた。ならば次の案件へと時を進めよう。

拠点に戻りラブラバにネットに潜ってもらおう。突発的な争いでなく、ヴィランが団結して襲撃する情報であれば落ちていたりするのだ。

当然、危険度は突発的なものに比べれば比較にならない。事前情報というメリットはあっても、数を揃われるというデメリットがあるのだ。複数対一人では鎮圧も難しい。だが、だからこそ映えるのだ。一人が複数のヴィランと戦うことによる再生数は伸びやすい。流儀ではないが、仕方のないことなのだ。

「次の案件は大きい。何せ——雄英にヴィランが迫っている。これを妨害、鎮圧する」  
「荒っぽい案件ね……ジエントル、大丈夫？」

コクリと頷く。事前情報から、能力が突出したレベルのヴィランはいない。成生少女なら木っ端と称するヴィランだけだ。

個性の相性もいい、完封できるのは間違いないと言い切れる。

何より、今回は新たな試みでもある。試みとしての意気込みは、私の髭を賭けてもいいくらいだ。

「雄英文化祭というイベントだ。少しでも侵入できればおしまいの可能性すらあるイベントだね。逆に——成功すれば今のヴィランが勢いを増している状況を抑えられる一手になる。」



そして義賊というからには、『守る』というのは悪くはないだろう？この挑戦には私の髭すら賭けても構わない」

「そうね！もつとジェントルの姿を見せられるわ！」

『守る』という行為は基本的に尊いものだ。守られた側が知っていれば理想的であり、知らないならば……私達であれば投稿できる。

何も知らない者が何も知らずに守られた時に理解できないのは危機感が追い付かないからだ。ゆつたりと理解させることができれば名声もさらに上がっていく。

「あと……今回は生放送ではなく動画にして上げよう」

「え!?もつとジェントルのこと知ってもらいたいのには!?」

いつも投稿している生放送はリアルタイムだ。突発的な方がいい案件もある。

が、今回はゆつたりと理解する動画だ。目的にそぐわない。

それに、私の疵がちよつとした悪戯を試してみたいと囁いているのだ。

案件が終われば次にやりたいことがある。ラブラブがいなければ出来ない作戦、所謂バレなければ問題ない。

「なあに、あまりに早い放送だと文化祭が楽しめないじゃないか。私だつて行つてみたんだ。」

案件が終わった後にちよつと覗くくらいなら大丈夫だろう。大きな案件の後だ、ラブ

ラバとデートしたいんだ、できるだろう？」

「……！行きたい！ジェントルと行きたいわ！それに頼ってくれるのね！そんなところも好きよジェントル！」

「頼るとも。私が動く理由は最早私のためだけではない。君の想いに応えるためでもあるのだから」

「ジェントルー！」

ラブラバの能力があれば雄英に気づかれずに文化祭に侵入できる。遠目に様子を視れば十分だが、それくらいなら問題ないだろう。

そんな、軽い気持ちだった。尊ぶべきものには、尊ぶ理由があることを忘れていた。



文化祭当日の朝。雄英に気づかれずヴィランの襲撃を鎮圧できた私とラブラバはとある喫茶店に向かっていった。

何せこの喫茶店は雄英に近い……などよりも最も特筆すべきことは、最高級の紅茶であるゴールドティップスインペリアルが提供されていることだ。紅茶は大事だ、案件と同じ程度には。

「無事解決だ。さて、一度解決後の紅茶でも飲みに行こう。大きな案件だったからね、事

前調査しておいた店にゴールドティップスインペリアルを飲みに行こう」

「あとはこの動画をあげるタイミングね。……文化祭の終わった後でしょ?」

「そうだと、冷や水を浴びせるのは投稿者としてNGだ、再生数も悪くなる」

義賊であっても手柄だと叫ぶのはTPOを弁えた方が良く。ジェントル・クリミナルは悪を正す義賊だが、善を阻害する賊ではないのだ。

喫茶店でゴールドティップスインペリアルを飲み、その香りに、味に感動する。

感傷的になっていた私は喫茶店から出てても感覚に浸っていた。だからか、彼にぶつかりかかってしまった。

「気を付けたまえよ」

道路に出たタイミングで緑髪の縮れ毛の少年にぶつかる寸前で足を止める。感傷に浸っていた私は思わず口を出していた。

「ゴールドティップスインペリアル之余韻が損なわれるところだったじゃあないか」

すみませんと一礼する少年。礼儀は正しいようで何より、これで紅茶の味が分かるのなら素晴らしいのだが。

だからだろう、続く言葉に反応してしまった。

「へえ……あの店、喫茶店か何かなのかな……分からないな……」

「知っているのかね少年!」

「呟いた言葉に即座に応える。紅茶が分かる者ならば同士だ、言葉を尽くさなければならぬ。」

「ゴールドティップスイーパーアルが、何か、なのかなければその発想に至らないはずなのだが……君、分かる人間かね!? 幼いのに素晴らしい!」

「あの……僕はそんなに……友達が淹れてくれたから知ってただけで……」

「ほう……そんな高貴な友が——」

口にして気づく。目の前の少年が果たしてどこから来たのか、言葉から予測できるところに。

高貴な友、近くにあるのはエリート校である雄英。見たところ学生程度の年齢、全ては一つの事実につながる。

——目の前の少年は、雄英の生徒だ。

「良い……友人を持っているね」

「はい……人には……恵まれて……」

まだ大丈夫、気づかれていないのなら、この場を去ればそれで解決だ。

私としたことが思わず昂ってしまった。だがまだなんとかなる、ここでおさらばだ。

「待ってください」

止めてくれるな少年。その先には私の流儀がぶつかってしまう。

……止めようとしているということは、ヒーロー科の少年ということだろう。目を背けた私の流儀は、君のような夢のある若者にはぶつけるものではない。

しかし言葉をかけられたのなら止まらなければならぬ。その先を知っていなければ

「——ルーティーンってやつですか？」

手遅れ、か。

(自分を責めないでジエントル！仕方のないことよ！)

ラブラバの視線が退けと言っている。

確かに雄英に侵入することはついでだ、失敗してもなんら問題ない。今退いても今後として何の問題も無いだろう。

しかし自らの心の疵、ラブラバとデートするという約束を破ること、そして成生少女の「必ずあなたは進むべき道を進める時が来る」という言葉。

予言のようなそれが今なのだとすれば、進むべき道が今なのだろう。

これまで案件を何度も行い、それが今なのかと思ってきた。だからこそ培った経験もある。けれど今は何かが違う、案件にかける想いか……それともぶつかる者の想いか。

故に、決めた。

「なんのことかな？」

「動画を見ました」

ぶつかることは最早避けられない。ならば選択は退くか進むかだ。

「やれやれ、動画を取ってない時に。……突発案件だが悪くないか。ラブラブ、カメラを回したまえ」

迷いは目の前にぶつけよう。進むべき道を進むのだ。

「うちに、手を出すな」

瞳に映る少年の目は、掛ける想いは、熱く燃えていた。



ジェントル・クリミナルは義賊だ。義賊とは元々薄汚れた金持ちから金品を盗んで貧乏人に分け与える盗賊という意味であり、ひいては汚れた力を使うものを倒すものとも言える。

だから少年と戦う必要などない。何か、理由でもない限り——例えば、自らの信念を貫けるのか試すべきと決意したといったものだ。

「察しのいい少年だ」

「この子たしか……緑谷出久？」

「……！知られてるのか」

ラブラバが知っているということは危険分子なのだろう。だが相對した今、できることは無い。

できることはもう、ぶつかることだけだ。

「ラブラバ、予定変更だ。」

これより何があるうともカメラを止めるな！

「勿論よジェントル！」

でもでも！戦うの？ここで！？果たして得策なのかしら！？

「諸君！<sup>リスナー</sup>これより始まる怪傑浪漫！目眩からず見届けよ

私は救世たる義賊の紳士、ジェントル・クリミナル！！」

ポーズを決めると同時、個性を発動し少年との間に空気の膜を張る。『弾性』が付与された空気はトランポリンのように跳ねる膜となる。

「予定がズレた！只今いつもの窮地にて、手短にいこう。今回は——『雄英、入ってみた

！』

「そんな事させない！」

少年が勇んでとびかかるも、ぐにやあと空気の膜に阻まれる。ジェントルの個性を知らないのだろう、見えない空気の膜など警戒できなかつた。

「なっ!?!」

「外套脱衣のさいに」張らせて」もらつた

リスナーなら承知のはずだが？私の個性は『エラスティシティ弾性』

触れたモノに弾性を付与する。たとえそれが空気だろうと！」

ジェントリーリバウンド。ただ空気の膜に『弾性』を付与するだけの、私が誇る盾。打ち破るには切つたり爆破したりと、物理的衝撃以外でなければならぬ。

相性は私に分があつた。

「暴力的解決は好みじゃない」

増強系の個性で突つ込んだ少年だ。跳ね返る壁にぶつかつたのなら当然、自分自身の勢いのままに跳ね返る——見たことも経験したこともない増強のままに。

ドフユという音と共に少年は吹き飛ばされていた。あまりの勢いにドン引いてしま



う。

「エグイくらいに暴力的よ？」

「私も驚きと困惑の最中だよラブラバ。予想の四つ程上をとんでいったな。

すなわちそれほどのパワーとスピード。見かけによらず恐ろしい！申し訳ない少年、私は征く」

「謝るなら！学校に手を出さないでよ！」

即座に復帰し再び突っ込んでくる少年。直線的な動きならば早くても問題にはならん。

目の前の空気の膜を避けたとて、『弾性』付与できるのは一箇所だけではないのだから。

「それはできぬ相談だ——ジェントリートランポリン！」

足元に仕掛けた空気の膜により上空へ少年は飛ばされた。遠距離攻撃も飛行能力もなければこれで時間は稼げる。

「学生の頃は私も行事に勤しんだよ……君もかける思いがあるんだろうが、私のこの髭と魂に及びはしない。

この案件は伝説への更なる一步。邪魔はしないでもらいたい!!!」

一瞬だけ少年の方へ視線を向ける。態勢を整えようとしていないことから遠距離攻

撃も持ち得ていないということだろう。

「さらば青春のきらめきよ！」

後方確認も済んだ、自分自身とラブラバも弾性付与した空気の膜で跳ぶ。連続して跳んでいけば到着はすぐだ。

「ジェントル！緑谷出久は体育祭で手を壊しながら戦ってたクレイジーボーイよ！」

「狂気！ 関わるべきじゃないな、彼が回しを済ませる前に案件を成功させる」

「リスナー諸君、雄英入ってみたはこれより——タイムアタックへ移行する！」

滞空時間を制御できる私達とできない少年。もはや障害はないという確信を得——同時に、何か危険があると勘づく。

「ジェントル・クリミナル！」

身を翻し何かが飛んでくる予感から回避する。何かがマントに当たった衝撃があった。

遠距離攻撃を持っていた？にしては動きがおかしい。慣れていないと見た。

一瞬の迷い、少年は見逃してくれなかった。空を蹴り、地上へ復帰していた。

「懸ける想いは！皆同じだ！」

「それは！失敬！」

何をしたのか考える時間もくれずに即抑えつけに来た。が、どうやら少年に勢いを止

める術は無かったらしい。大きく吹き飛ばされるだけで済んだ。

吹き飛ばされたのは工事現場の最上階、空が見えるが足場は鉄骨だ。

ジェントリリーバウンドを受ければ……いや、ここから落ちるだけで時間は稼げる。少年も分かっているからだろう、動かなかった。

「どうして雄英を襲うんだ！」

「どうして、か」

そもそも雄英に侵入する気はあっても襲撃する気は無いのだが……それは無駄な問答か。第一ここで争ってる目的は違う。

「私は世間からはヴィランと見られているだろう？」

「もう通報した。……ヴィランならいいって言うのか!? それと雄英に入ることと何のつながりがある!？」

「勘違いだよ少年。雄英を襲うことが目的ではない……少年が目的だ」

ピタリと動きが止まる。……ほう? こういった会話で止まるというならまだまだ未熟ということだ。速度に差があってもどうにかなる。

「僕、だつて?」

「そうだ。雄英に入ってみることは少年の大切な者に関わることだ。すなわちヒーローがヒーロー活動することと同義。」

なら、少年は本気を出さざるを得ないだろう？」

苛立ち、焦り、透けて見えるぞ少年。ヴィランが相手なら動揺を見せてはならん！  
「隙だよ少年」

一瞬、右腕をほんの少しだけ動かす。たったそれだけで今の私には十分だ。使い方を以前にも増して熟<sup>な</sup>らした私には十分な威力の拳打になる。

さらにここは態勢を崩せば落ちる場所だ、都合がいい。

「がつ!？」

「空気の膜を利用し小さな拳打を弾性で伸ばし態勢を崩す程度の衝撃に変換した

この足場なら『落下時間』という合間ができるだろう？さらに落ちた方向にも膜は張つてある、戻ってくるのすら時間がかかることだろう

敵対した者との会話は動揺を誘うものだ！真実を話そうと何をしようと隙を見せてはならん！」

鉄骨から落ちる少年を横目に雄英へと空気の膜を展開して跳ぶ。当然ラブラバも共にだ。

「予定は狂ったがラブラバ！警戒されてなお侵入を許したなれば！私達はより一層深く世に知れ渡るだろう！」

最早障害はない。あるとすれば先ほど回避した遠距離攻撃だが、ここまで離れれば届

かないだろう。さきほどは中距離程度だったが今は倍以上も離れているのだから。

仮に届いたとしても大した足止めにはならない。マントが吹きすさぶ程度なのだから。

そう、油断したのが悪かった。

「ん、ん、ん、ん!!!」

「と、届くのか!」

35%という声と共に背中に衝撃が走る。明らかに足止め以上の威力だった。

ここまでの距離で鎮圧レベルの攻撃を放てる。侮ったつもりは無いが……先ほど撃たなかったから油断した。手加減されていた?……それとも撃たなかったのではなく撃てなかった?

少年の様子からして前者は無さそうだ、ならば後者。条件があるか、はたまた限界レベルだから簡単には放てないといったところだろう。

「しつこいわね……使いましうか、私の個性」

墜落気味のやり方ではあるが雄英の近くの森までは来れた。が、深刻な顔をしていたからかラブラバに心配されてしまった。

ラバーモードは強力だ、今の少年にも隙を突けば互角以上に戦える。

「いいや、大丈夫さラブラバ。まだ、その札を切るには早い」

気持ちには分かる。しかし私はまだ全力を賭していない。二人の全力は、まだ出したくない。

「でも」

「ラブラバが本当に使いたい時に使えばいい。今じゃないだろうか？」

「……そうね」

少しの会話しかできない。後ろから少年が追ってきているのは分かっているのだ。時間はない。

「待て！」

「いや早っ！」

ふらつきながらも空を蹴って向かってきている……なるほど、それがさっきの攻撃の正体か。拳打で空気砲のように空気を飛ばしているのだろう、であれば増強系なら不可能ではない。

そして空を蹴れば足場扱いとして跳ぶのも難しくは——いや難しいが不可能ではない。

「だが、まだ私には」

「そこだ！」

何も無い空を——否、私が『張った』空を蹴る少年。目の前で不規則に動くのは流石

に予想するのは難しい。

「そう、予想が難しいだけだ」

「な」

戦い始めた最初の衝突と同じ、ぐにやりと空気の膜に衝突する少年。さっきの少年の動きから私の個性を逆利用するのは読めていた、動きは読めないが速度からして直線的な動きしかできないのは分かっている。

あとは不意をつくであらう場所に『張って』おく。それだけだ。

「がっー」

最初の勢いを遥かに上回る速度で吹き飛ぶ少年。強化レベルを変えた、といったところだろう。最初の遠距離攻撃云々もそれで結論付けられる。

「ラブラブー！」

「ええーもう少しよー！」

ここからは走るしかない。『張って』跳んでいけば警戒しているヒーローに気づかれずしてしまおう。

致し方なしと数歩走り出した瞬間、背中を抑えつける衝撃が走った。

「——っ！」「う、そ!?!」

背後は見えないが、聞こえる息づかいは少年のものだ。

あり得ない。かなりの長距離飛んでいったはずだ。これほどまでの短時間でここま  
で来るのは不可能だ。空を跳ねようと……まさか

「はあ……はあ……捕まえた」

「まさか、その速度で利用したのか——張った膜の全てを！」

強化レベルを上げた状態でトランポリンのように跳ね更なる加速を得る。空を蹴つ  
て滞空できるともなればそんな真似も可能なのかもしれない。

しかし、しかしだ。それでも間に合わないはずだ。こちらも移動していたのだ、さき  
ほどと同じ距離でもないのに

「さっきの速度が続いてれば届くかはギリギリだった。でも速度が落ちてたから、間に  
合った」

「——！」

——ラブラバに足を合わせたから。私が思考から外していたところを突かれた。

首だけは動く。ラブラバへ向けると泣きそうな顔をしていた。

いかん、ラブラバのせいではない。撤退を決めたのに決めなかつた私のせいだ。真  
正面から向かおうとした私のせいなのだ。

「ジェントル……私の、せいで」

「違うともラブラバ、私のせいだ」



ああ、でもそんな私にラブラブは応えてくれる。ラブラブがしようとしていることなど言わずとも分かる。

ならば、応えなければならん。例えこれが、依光成生の計画仕組まれたことだとしても。

「愛してるわ、ジェントル」

「私もだとも、ラブラブ」

ラブラブの個性『愛』、超強化された能力は増強系の個性が相手だとしても凌駕する。

「何だ!?!急に力が!?!」

「あのバカは、ホントに碌なことしない。私の想いを……『愛』を、舐めないで」

ラブラブの個性は伸ばされたことは無かった。個性伸ばしが難しく、偏に運用が難しかったこと、想いを乱されることが無かったからだ。

だが今はラブラブが恋敵として見ている存在依光成生がいる。以前にも増して強化率は上がっている。

「さらに、力が増してっ!?!」

抑えつけられた状態から少年ごと起き上がる。体重と個性で抑えられていようと、それ以上の力ならば何の問題にもならん。

「悪いな少年、一対一だ」

起き上がると同時、足を払い少年を身体ごと回転させる。

力で勝っていたのだ。それが突然負けたとなれば大きな隙ができる。あとは意識を刈るだけだ。

「しばらく眠っていてくれたまえ」

「必ず最後に愛は勝つだよ」

首筋に手刀を放ち昏倒させる。それで終わりだ。

終わりの、はずだった。

「まだ終わってないぞ！」

放った手刀は首との間に挟まれた腕に阻まれる。衝撃だけでも相当なものだが、少年の意識はしっかりしている。

「ラバーモードだぞ？ラブラバの愛だ、超えられることなどあつてはならん！」

「ジェントル！ごめんなさい！愛が、愛が足りなかった！」

ギリリと歯ぎしりしているのが自分でもよく分かる。愛が足りない？馬鹿を言うな、そんなこと言わせる私自身に憤慨するに決まっている！

「君の想いが足りないなど、誰が証明できよう……！」

ラブラバを進行方向へ優しく投げ、私は少年と相對する。ここから先は私がいても護

衛にしなければならない、ならばラブバを先に行かせるのも止む無しだ。

それにラブバーモードなら、二人でなら、真正面からのぶつかり合いでさえも勝てる。証明せねばならんのだ。

ただ耐久力だけは少年に分がある。私の戦闘スタイルはダメージを負わない立ち回りが前提だからだ。少年は自傷しながら戦える、となればやることは変わらない。

「がっ!？」

「また防がれた……また、か」

見切られている訳ではない。ギリギリで間に合っている動きだ。

「どうして、想いを踏み躪れる!？」

何で英雄の想いを踏みにじる!？夢の為なら人の頑張りも情熱も奪えるって言うのか!？

何より——さっきの言葉は!嘘じゃないだろう!狙いは僕だろう!」

間違いではない。故にこれは本来ならヒーロー対ヴィランの一对一の構図であるだけだ。

あの時と違うのは、今の私の想いは一つではないことだけだ。

「見透かされてしまったか、だがやらねばならんことなのだ」

「どうして!？」

それを問うか！知っているのは君も同じだろうに！

「私はジェントル・クリミナル、ラブラバの愛に応える者なのだ！二人の懸ける想いを描く者なのだ！信念のないヒーローなどとは想いが違う！

——しかし！知らねばならぬのだ！ヒーローと私、何が違うのかを！」

「ジェントル！あなたは！」

「ヒーローを落伍した者だ、諦められなかった者だ。ならばせめて、間違えた道を進むと分かっているも！何が違ったのか知らねばならぬのだよ！」

想いを背負って進む果てにぶつかるなら、違うのはどんな想いを背負うかだけ。

知りたいのは認められない者が背負った想いと認められた者が背負った想いに貴賤など無い。その証明だけなのだ。

「——なら！分かるはずだ！壊されたくないものがある、守りたいものがあるってことくらい！」

「それは、私も同じだ。

ラブラバに応える。夢を叶える。それだけは譲れんのだよ！」

「なら！」

「だから！譲れない戦いを挑むのだ！救けを譲れない者に戦いを挑むのだよ！」

譲れない戦いを避けるような者の背負った想いなどが知れている。故に避けな

い者へ挑むのだ。

「私達の愛は！ヒーローの救ける想いに負けんのだと証明するために！」

ジェントリー・サンドウィッチ！

「がつ!？」

幾層もの空気の膜を張り地面に押し付ける。余りにも暴力的であり、当たればまず間違いなく拘束できる切り札故に多用したくない技だ。

警戒されたら扱い辛くなってしまふからだが、今はそんなこと言っている場合ではない。

「ぐ……」

（ヴィランだけどヴィランじゃない！まるで、M s. ダークライのように……善のために戦っているけれど悪い行為に手を染めるように）

ジェントリー・サンドウィッチで動けなくなった少年だが、暴れ方がおかしい。動きが真上ではなく——下、地面か。

私が地面に弾性付与するよりも速く、地面を蹴り吹き飛ばし私の真正面に着地・相対してきた。

「……あなたのような人を知ってる。目的のためなら雄英の想いも踏み躪れてしまう人

だ。懸ける想いのために、自分自身も捨てられる人だ」

一瞬脳裏によぎったのは成生少女の姿。自分を捨てられる者……同じか、私は私とラブラバの想いを背負っている。

だが私自身は半ば捨てている。ヒーローから落伍したあの時に、ヒーローとなった友から名どころか存在を忘れられたあの時に捨てた。

「——切島君が言っていた。あなたのような人に必要なのは、止めることだって。

だから止める。僕達の想いは、負けやしない」

「自分を捨てた私を、笑うか？」

「笑わないよ、ジエントル・クリミナル」

右の拳を握り、思い切り殴りかかる。首を狙うのではない。正中線、真正面を狙い撃つ。

少年もまた、全く同じ狙いだった。拳が激突し、衝撃が周囲に広がる。

「勝って！ジエントル！」

届いた声。愛はさらに強く、想いは靄のような形状と成りながら私の身体に入り込

む。

右の拳をぶつけ合いながら、左腕で組み付こうと手を伸ばす。少年もまた狙いだつたらしく、手四つのような形になる。

「君は！何のためにヒーローを志す！」

「っ！」

何故かは分からない。だが、声に出ていた。戦いの中でハイになっているのか、それともラブラバの愛に乗せられたのか分からない。

けれど心の底から出た言葉だった。偽りの一つすらない、私自身の言葉だ。

「人を救いたいから？想いは素晴らしいとも、私もそう思う。それだけで進めるならまさしくヒーローだろう！」

「あなたはっ！」

「だが！人の想いを！無視して進むのか！ヒーロー！」

止めなければならぬ想いを！受け止めずに進めると思ふのか！」

「誰かと共に進みたい想いを！覚悟を！懸けた心を！無下にするのかヒーロー！」

少年の顔は、真面目そのもの。出てくる言葉は偽りのないものだ。と直感的に分かつてしまった。

「僕も、同じだ。」

僕だけの道じゃない。身の丈に合わない夢を、想いを……心の底で諦めてしまった夢を！笑わないでいてくれた！

認めてくれた皆に！応えたい！

辛い思いをしてきた人に——明るい未来を示せる人間になりたい！」

……明るい未来を示せる人間。私と——なんなら依光成生とも本質は同じではないか。

成生少女が示すのは本人の進むべき未来、そこに本人の後悔はない未来だ。明るい未来が表社会に出る未来と言い換えるなら違うが、本人が後悔して表社会に出れば捕まるだけ。

だが辛い思いをした人間となれば違う。成生少女は表社会に送るべきと考えて動く。本質は皆同じ、道が違えただけなのだ。道が違えたのなら、最早やるべきは一つ。

手四つの態勢から振りほどき、少年を地面に叩きつける。

「ぐっ」

「恥も外聞も！誇りすら捨てて！君を断つ！」

ラバーモードの強化時間は残り少ない。空気を『張り』、線では見えようと速過ぎる程の速度で全力で動き回る。



道を違えたのなら、ぶつかるだけだ。

「ジェントル・クリミナル！」

少年が空気砲を放つ。同時にいくつも放つが動き回る私には当たらん。

貫手の一撃で心の臓をぶち抜く。目の前に手が届くその一瞬、真横から衝撃が走った。

「が」

空気砲を空気の膜に当てて反射させた。理解が追い付いた瞬間、私の視界に少年はいなかった。

「シュートスタイル——セントルイススマッシュ！」

背後から放たれた一撃、地に伏せてしまふ威力は十分にあった。

「戦ってきた人の中でも、誰よりも戦いづらい相手だったよ」

背中に乗り、抑えつけられている感触がある。ラバーモードは切れた、この状態で抗う術はない。

もつとも、最早戦う気にもなれない。少年の言葉が、胸のつつかえをとってくれたのだから。

(負けてなどいなかった、か……。……。ありがとう、少年)

少年が戦ってきた人は知らないが、何故だか相応の力を持つ者と戦ってきたのは直感的に分かった。彼らと比較して少年が私に向けた想いは、無視できないものだった。

「ジェントル！そこまでヒーローが……」

ラブラバの声が聞こえる。このままではラブラバも片棒を握ってきたと認識されてしまう。

それだけなら問題だがまだマシだ。一番の問題はそこじゃない。

「嫌よ……。ジェントル……。……。離して！私からジェントルを奪わないで！」

ポカポカとラブラバが抵抗している音が聞こえる。増強系の個性である少年にはその程度蚊に刺された程度だろうが、少年は動かないでいてくれた。

一番の問題は私と離れたことによってもっと大きな被害を齎すこと。

「ジェントルと離れるくらいなら——死ぬ！」

一人で離れればラブラバは私の元に来ようと私どころではないヴィランになる。それだけは、許せない。

(私も……。少年も、見せてはいけない戦いだらう。であれば)

であれば、選択肢は一つだけ。

「この戦いは、なかったことに」

『弾性』で少年を遠くへ飛ばす。見えない位置まで飛ばせば多少誤魔化すことはできるはずだ。

「ジェントル!?!」

「そのまま失せたまえ少年。君の勝ちだ。

彼女の為に、彼女の明るい未来の為に」

見えなくなったとほぼ同時、ラブラバが来た方からやってきているハウンドドッグの視線が向いた。ああ、分かっていた……だからそうしたのでから。

「自首したい。話を聞いてもらえらるだろうか?」

一番の罪は——相葉愛美あいばまなみを洗脳していたこと

だから彼女に、恩赦を」

困んだヒーローに、自らの罪を告げる。せめて、ラブラバの罪を軽くできるように。

それが私サイラン、ジェントル・クリミナルの最後の姿だった。



数日後、ジェントル・クリミナル——飛田弾柔郎とびたたんじゅうろうは留置所にいた。尋問を行う警察官、

ゴリラの個性を持つ者の目の前に。

「洗脳かどうかなんてテストすりやすぐに判断つく。馬鹿な嘘はやめとけ、ありやホントにお前を好いてる。」

未遂も多いが罪の数が多いことから考えても」

「私が直接的なものだ。同罪じゃない」

「……相思相愛かい、やだやだ。」

退学、元ヒーロー科。ねじれねじれて動画投稿者か」

「夢を思い出してしまった。恐くて走り出してしまった——たとえ間違った道だとしても」

「なら今日止まれたのは正解だったな」

警察官の言葉に飛田は目を見開く。

間違いを正す、分かっていたからこそ止めてくれたことに感謝もあったのだった。

「人生やり直せないなんて言うのはな、やり直す気のない諦めたやつか、結果を急ぐせつかち野郎だけだ」

警察官の言葉に、飛田の脳裏に浮かんだのは一人の少女の姿。

フィクサーを名乗りながらも、瞳の奥を隠すヴィラン。感じたものが間違っていないかと今なら分かる。

「彼女は……あの時後悔していたように見えた……そうか、結果を急いだのか。いや、急がざるを得なかったのかな」

「あ?」

「依光成生だ」

警察官の目が見開く。何せ依光成生はヴィランとしてビッグネームとなっており、情報があればあるほど助かる。

ただ信奉者のようになっていくことが多く、冷静な観察眼をした人は少なかつたのだった。

「彼女には支えてくれる人も、横にいてくれる人も、止まれる足も無い。だから強い。

ずっと止まらない足が誰よりも速く動いてしまっているから……誰もかれもを突き放す。

ああ、ようやく分かったよ」

「何がだ」

「彼女は誰よりも——賢過ぎて優し過ぎる。自らの個性に溺れてしまうと分かっていたから、誰にも頼れない。個性に溺れると知ってるなら、ヴィランになるのは必然。だから関わる人は皆突き飛ばす、私とは関係ないよと言うように。」

しかし……誰にも頼れないけれど頼られるなら応えてしまう。まるで、普通の少女が話しかけたら応えるように。だからこそ、誰もが見惚れてしまう。

誰もを肯定してくれるけれど……彼女自身が辛い道を歩むのを誰だつて見えてしまうから、誰の目にも留まつてしまう。可哀そうという感情……ではないな、止まつてほ

しいという願望だ。

彼女が表裏どちらの社会でも働いている悪事のように、本当は誰にだって頼られてほしいのだろう。だが同時に、誰かに頼ってしまいたいのだろう。誰にも頼れないなら求めるのは……繋がりなのだから」

飛田が話すイメージを受け取る警察官からすれば、ビッグネームのヴィランではなく普通の少女が暴れているだけといった印象だ。

間違いではないのだろう、分かることもある。ゴリラの異形をした警察官だ、本来の姿ならイメージとは違う姿や性格をしているなど知っていることだった。

「繋がり、ね」

「目立つことを最優先にするがゆえに、自分自身には興味が無い。自分自身が行ったことだけにしか興味は無い。」

……今の彼女は誰よりも臆病なのだろう。一歩先へと自らの意志で、足で、歩み出せば求めているものは何もかも手に入るというのに」

誰よりも持っているものが多いけれど見えていない。欲しいものだけが視えてしま  
う。

そう言いたいのだろうと結論付け、ため息を一つして警察官は声に出す。

「……はあ、本当に依光成生に接触したんだな。事実なら依光成生にはお前らが眩しく

見える訳だ。

何せ止まれる足もあれば、相思相愛の相手もいるからな」

警察官の言葉に飛田の目から涙が流れる。誰かに止めてほしかった、そんな願望は最初からあったのだ。

——何せ飛田は元ヒーロー志望。誰かを助けるためにヒーローになりたかったのだから。

「……茶でも飲むか」

「っ……紅茶を」

「粗茶だよ馬鹿」

思い出してしまったかつての思い、止めてくれた想い人への感謝、止まれない人を  
知ってしまったこと。

飛田の溢れる涙は、止まらなかった。

## 三章

## 堕とし子の脈動 灯火

九州にてN o. 1、2ヒーローとなったエンデヴァー・ホークスが脳無に襲撃された。重傷を負ったものの燃やし尽くすことに成功し、N o. 1という存在を世間に知らしめた事件だ。

大半がそれらの戦闘及び「これまでのN o. 1ヒーロー、オールマイトではなく今のN o. 1ヒーローエンデヴァーを見ろ」とカメラに言い放った通称「見ろや君」が大きなポイントだった。

新しいN o. 1ヒーローの活動の始まりのスタンディング。何代も受け継がれてきた力を振るう不出生のヒーローでなく、一個人が作る輝かしい未来の第一歩。

そう、なるはずだった。

「まずその怪我と出血何とかしないと」

「俺はもう動けんぞ。誰か呼んで……」

スタンディングが終わりホークスに介抱されているエンデヴァーの前に、二人の影が近寄っていた。



「ちよーつと待つてくれよ。色々想定外なんだが」

「ホントね。でもまあ悪く無いんじゃない？ 私からしたらある意味想定内よ、だってそこに轟炎司がいるんだから」

「それもそうか。」

まあとりあえず、初めましてかな？ エンデヴァー」

二人……ヴィラン連合の茶毘、そして悪夢の墮とし子の四女である灯火の姿だった。

赤いスカートに黒いオフショルダートップス、ついでに黒ニーハイ。靴は姉達が最近好んでいるものと揃えて黒いローファー。

顔立ちは整っているが黄色い瞳はツリ目できつそうに見える、長身でありポニーテールが姉達三人より姉らしく見えさせる。

エンデヴァーとホークスはヴィラン連合も悪夢の墮とし子も知って入る。しかし全容は知らない。特に悪夢の墮とし子達は全員で何人いるかも分かっていない。

ただ分かることは一つだけ、ヴィランの下に集った者達ということだけだ。

「……………あのスナッチを殺したようだな。ヴィラン連合、茶毘……………」

大規模な電波障害と共に、蒼と藍色の炎の壁が展開される。ミルクレープの様に層を重ねた壁は周囲の瓦礫を燃やし尽くしていく。

「うん、綺麗。もう少し調整すれば蒼になるのかしら？」

「何だ、お兄ちゃんっ子だったのか？」

「ううん、兄姉は敬うものでしょう？電花姉えも奪姫姉えも、艶羽姉えも皆カツコいいもの」

「そりやお前……の姉見てたら納得もするか。」

エンデヴァー、少し話そうぜ。せつかくの機会だ」

新たに現れたヴィラン二人。満身創痍のヒーローとはいえ立ち向かわないのはヒーローではない。No. 1、2ヒーローともなれば尚更だ。

「ぐっ」

「いやあなたは休んでてください。俺がやります。雨覆ザコ羽くらいしかありませんけど……時間稼ぎくらいは」

「勘弁してくれ。俺はその脳無を回収しに来ただけだ。勝てる筈ねえだろ。」

——満身創痍のトップ2相手によ！」

茶毘が駆け出す。目的は言った通り脳無の回収だけだ、故に走る先はエンデヴァー達の居る位置とは微妙に違う。二人の横にいる脳無の下へだ。

「——そのまま行って！」

「後ろは頼んだ」

何かに勘づいた灯火へ飛んできた影はドオオン！という音と共に衝撃を叩きつける。

炎の多層壁を乗り越え、服の一部が燃えしながら走ってきた者の名前はミルコ。N O. 4 ヒーローでありその個性は「兎」。戦闘力は物理戦闘のみに割り切った武闘派であり、先ほどの衝撃はただ踵を落としただけだった。

それを片手で受け止めた灯火。しかしその顔には面倒だと分かりやすく書かれていた。

「兎さんはお呼びじゃないの」

「はっ！ガキあやすのは好きじゃないのはこっちも同じだよ！

エンデヴァー！ニユース見て跳んできた！こっちは任せろ！」

灯火と対峙するミルコを背に茶毘は二人へ蒼炎を放つ。本来ならミルコとエンデヴァー達に挟まれており不利であるため撤退すら視野に入るのだが、茶毘は灯火の力を信用していた。

「そこ退け轟炎司。焼かれたくなけりやあな！」

「ぐっ！……蒼の、炎？」

「エンデヴァーさん捕まって！何も無く動くよりマシです」

エンデヴァーがホークスに捕まり距離をとろうと離れる。茶毘に二人共止めを刺されることと脳無を奪われることをホークスは天秤にかけ、後者を選択した。

仕方の無いことではある。今始まりの刻を迎えたエンデヴァーを落とさせるわけに

はいかないのだから。

「脳無は返してもらうぜ」

「くっ」

「安心しろ、これ以上手は出さねえよ。俺が手を出したら灯火が面倒なことになりそうなんだな」

「灯、火？」

ギリギリで茶毘の蒼炎から逃れる二人。攻撃は終わり、茶毘とエンデヴァー達というヴィランとヒーローの対峙もまた終わる。

ただ終わらないものもある。例えば——口撃。

「轟炎司、お前の子供だろ。ちゃんと姿を見なくていいのか？」

「なにを………いつて………」

エンデヴァー、轟炎司には四人の子供がいる。長男である燈矢はかつて事故で失っているが、他三人は家で過ごしている。

子供と言われても意味が分からないのも当然。ただのでまかせ口撃であると判断するのも止む無しだった。

そんな話の中心である灯火はというと、ミルコと拳をぶつけ合っていた。

「やるな」

「そちらこそ」

ミルコの猛攻を圧倒的なまでの反射神経と身体能力だけで対応する灯火。ほぼ互角であり個性を使っていないというのにこれだけの戦力がある、というのはミルコからしても信じられないことだった。

ただ、知らないことではなかった。故に口撃を一言だけ仕掛ける。

「聞いてるぜえ？ 四人目の悪夢の墮とし子！ 何人動けるかまでは知られてねえが、脳無の完全上位互換って話らしいな！」

ほんの一瞬だけ灯火はピタリと止まり、隙を突きミルコは蹴り飛ばそうとし——逆に蹴りをカウンターされる。

隙を突く技能、油断せず油断させる技術。姉達三人と遊ぶ灯火はそういった技能を持ち合わせている。何せ遊ぶ姉三人は母に最も近い姉、最悪の弱体化能力を持つ姉、誰よりも速い姉なのだから。

「……………どこでその話を？」

「ぐっ……………さてな！ 情報が速いやつがヒーローには多いんだよ！」

たった一撃、されどあのミルコに一撃だ。灯火が個性を使っていないことを考えれ

ば、成長すればミルコは敵ではないとミルコ自身分かってしまう。

そしてミルコの焦燥を気づきもしていない灯火は「速い」というワードに見当がついていた。今や兄弟姉妹全員好き勝手に動いている。自分の欲求を満たすためだけにだ。

確実にそんなことをする姉がいた。

「おおかた楽しいこと好きなの艶羽姉えだろうけど」

「ぬ」

何もない宙へ右手を握りしめ、一気に手を開くことで空気砲を放つ。ちようどデクが先日ジェントルに放ったものと同じ、五本指による同時に5つはなつ空気砲でだ。それをサポートアイテム無しで放っていた。

ミルコは回避しつつ近寄ろうとするも、野生の直感がエンデヴァー達の方へ走れと頭に響かせていた。

「まったく……全力使うの疲れるから嫌やなんだけど、仕方ない。

何せここは私の晴れ舞台でもあるから！」

何かが来る、危険な技だ、避けなければならない。

エンデヴァー達を両脇に抱え、さらに遠くへ脱兎の如く逃げ出す。少し離れて警戒し

ていたヒーロー達にも離れるように声を荒げる。

「急いでここから離れる！」

ミルコの直感は正しかった。

放たれるのはかつて母親を止めようとしたエンデヴァーが使った究極の一撃。それを模して放つ、灯火が今放てる最大の大技。

「赫灼熱拳——ヘルファイヤーウォール！」

赫灼熱拳。エンデヴァーが使う炎の極致にして奥義。真正面から受けて立ち上がれる者はいないとすらされる技。母親でさえも真正面からぶつかるとはしなかった灼熱の業火。

灯火は使える——血を継いでいるから。個性を継いでいるから。

「「な！」」

エンデヴァー、ホークス、ミルコ、他のヒーロー達全員が驚愕する。しかし足は止ま

らない。止まれば迫ってくる業火の壁に焼き尽くされるだけなのだから。

しかし壁には一点だけ穴があった。分かりやすく、人一人分だけ避けるような穴が。「よし、回収完了だ」

その穴から抜けてくるように茶毘が脳無を抱えて灯火の方へ歩み寄っていく。やるべきことは終えた。ならば後は帰るだけだ。

「氏子さん頼む」

茶毘が耳につけていたデバイスからドクターへ通信、ドクターは脳無に指示し泥ワプの個性を発動する。ただし対象は茶毘だけだった。

「お前は残るのか」

「帰るわ。熱は逃がしきってるけど『外』で全力使うのは初めてだから」

ズズズ……という音と共に空間を侵食する黒い靄が灯火の周囲に集まっていく。成生が死穢八斎會との戦闘後に使ったそれと似て非なるものだ。

どこが違うのか。それは単純明快に——使い手だ。

「だってもう夕方。子供は帰る時間でしょう?」

泥に消えていく茶毘の瞳に映っていたのは、灯火の掌から出ていた黒い靄。

最上位脳無の特徴は強靱な肉体、超再生する身体、そして複数の個性の搭載だ。

奪姫や艶羽の考え方は一つの個性をまず特化させてからサブの個性を得るというも



のだった。だが灯火は違う。

姉三人にはどうやっても追いつけない。だから複数の個性を特化させないまでも使いこなせるようになるという考え方だった。

「さよなら。いつかまたどこかで」

ミルコにひらひらと手を振り靄の中へ消えていく。灯火から離れていたミルコは舌打ちをしつつ、守り切ったことにだけ目を向ける。

「チツ……すまねえ、あれは消し切れないわ」

「いいえ、助かりました」

ヘルファイヤーウォールから距離をとり威力を減衰。蹴りによる衝撃を幾重にも放ち壁にする。ミルコが取れた防御はそれしかなかった。

トップヒーローがそうせざるを得なかった、というのが問題だった。しかもどんなヴィラン相手だろうと肉弾戦闘という一点であれば最高峰にいるミルコだ。そのミルコが肉弾戦で互角、個性を使われれば「市民を守る」という戦いにおいてほぼ負けだ。傷を負った人がいないことが唯一の救いだった。

さらに灯火によって齎された情報はそれだけではない。

「……間違いなくエンデヴァーさんの技」

灯火が放った一撃は赫灼熱拳。使えるのはエンデヴァーに連なる者くらいなのだ。

エンデヴァーもホークスも心当たりは全く無い。故に脳無との戦いに勝利したことよりも、灯火という疑問の方が大きかった。

「認めたくないがな。あの圧縮の仕方といい、俺の技を真似たものだ、随分と様になっていたが。いったい何者……ぐ」

「エンデヴァーさん!?!」

失血、個性使用の限界、エンデヴァーは気を失う。ホークスが叫ぶも、意識は遠のいていく。

死ぬわけではないと分かっているてもホークスは心配だった。

「あとで知らせてやつから今は寝てろ」

もつとも、ここには頼れるヒーローがいるのだ。二人共ミルコに抱えられ近隣の病院へ連れ去られるのだった。

## ヴィラン連合チュートリアル終了

時はエンデヴァーと脳無が交戦した時から一か月半程前に戻る。

ヴィラン連合は黒霧の手引きによりギガントマキアに遭遇していた。黒霧本人はグラントリノに捕まってしまい、ギガントマキアも警察に存在が知られたという失態を犯したが、ギガントマキアに死柄木の下へ向かうようにという指示だけは達成していたのだった。

しかしギガントマキアに一蹴されたヴィラン連合。ドクターの手引きによりマキアは止まり、オールフオーワンが使っていた泥ワープの個性でドクターの居城へと転送されていた。

そこにあつたのは大量のカプセル。脳無と呼ばれる化け物が培養液の中に眠っていた。

「( )は……」

「なんだこれ」

そしてそれだけではない。脳無のような姿ではあるが、手術痕もなければ脳がむき出しになっている訳でもない。一部異形が混じっているが人間にしか見えないものもカ

プセルには入っていた。

その奥から声は響く。老人のような声だった。

「ハイエンドじゃよ！よりマスターピースに近づいた傑作じゃ！凄いじゃろう！これまでとは違うんじゃないよ！」

姿が見えるのはドクターだけ。ただ人の気配は一つだけではなかった。

「死柄木弔。それにトガさん……あと茶毘、トウワイズ、Mr. コンプレスね。ようこそ」

声をかけた主はカプセルの上。足を組み、興味深そうにヴィラン連合を見つめていた。

面影はM s. ダークライにも似て……しかしどこか優し気なものにも見える。その瞳は全く笑っておらず、心を揺さぶり、見た人に配下に置いてほしいとねだらせる雰囲気纏っている。まるでかつてのオールフォーワンのように。

ヴィラン連合の中でも知る者は弔とトガだけ——奪姫の姿がそこにあった。

「お前たちは」

「ほほほ！お前の妹弟子、M s. ダークライの堕とし子じゃよ！もつとも彼らはM s. ダークライを主として見ておるがな」

妹弟子。M s. ダークライと弔との関係をヴィラン連合の面子は知っているが、手下

がいるのは知らない。トガも話には聞いていたものの、会うのは初めてだった。

「ガキが、何でここに」

「M s. ダークライからの指示。そろそろ表舞台に見せてもいいって」

「少し雌伏したいとM s. ダークライが言ったらいいのでな。実質奪姫がトップじゃない」

つまりM s. ダークライの組織のNo. 2。M s. ダークライの戦力が突出しているのは分かっているものの、墮とし子という関係があるとドクターは口にした。

M s. ダークライと奪姫の関係を吊とトガは薄々察しており、それ以外の面子は感心するだけだった。何せ中学生程の見た目なのだ、侮るのも仕方ないことだった。

「私と電花姉はとつくに表に出てるけど、他の兄弟きょうだいはまだだから」

「勝手にすれば」「いいじゃねえか!」

さらに姉というワードから誰かの妹であると奪姫は口にした。見た目と相まり、トウワイスは軽く声を返してしまっていた。

どれだけの力を持つのかも知らずに。

「奪姫一人でもお主ら全員相手にできる程の戦力じゃ。それがここに合わせて三人もある、今のお主らの状況分かっておるのか?」

トガは奪姫を既に信頼していいと判断し警戒は解いていたが、弔も茶毘も、トウワイ  
スも Mr. コンプレスも警戒していなかった訳ではない。だがそこに二人の人影は  
あった。

ヴィラン連合を挟み込むように両脇に位置取り、いつでも制圧できたと言わんばかり  
だ。

「いつの間に」

「ポニテの方が灯火とうか、ツインテの方が崩華ほうか。あなた達にも関係してらしいよ？茶毘さ

んと弔さん」

「俺に？」

待てという声がドクターから飛ぶ。奪姫は作られた側であり計画を知る側ではない。

しかしほんの欠片ほどの情報を溢したことはドクターにはあった。何せ奪姫の父親  
が父親だ。ドクターが崇拜するほどの感情を持つている男なのだ。

奪姫のことだから忘れはしないと予想したが、まさか今のタイミングで口にするとは  
とドクターは冷や汗をかいていた。

「その計画はまだ駄目じゃ。それはオールフォーワンとわし、そして Ms. ダークライ  
だけの秘密じゃ」

「じゃあいつか教えてくれよ」

弔が考えるのはM.S.。ダークライが関わっているというだけで碌なことじゃなく、何かしらに利用されただけということだ。

M.S.。ダークライが会わないからとヴィラン連合に人を送ってこないように、M.S.。ダークライはヴィラン連合に悪質な行為はしない。

オーバーホールとの交渉の時にいたが、あれも結局交渉決裂するのが目に見えていた。やったことは決裂を早めただけに過ぎない。

奪姫もそうであるかは分からないが、話した内容はそうであると言っていた。

「私も実は知らないの、聞いただけ。個人に聞いて予想する分は構わないけどね」

「いいんですか。成生ちゃんのことだからなんとなく分かりますけど」

「後で教えてくれよ」

トガは変身の個性で成生になったことがある、何度もだ。身体に馴染むのか、少しずつ直感が鋭くなってきた。成生に変身すれば分かる、トガの直感はそう告げていた。

トガの様子を見もせずドクターは話題を変える。バレても問題は無いのだ。墮とし子に制御装置はある

「まあ奪姫らは護衛に過ぎん。話を戻そう……」

ドクターは告げていく。弔は何を為したいのか。何も為していない社会のゴミが、ドクターの献身を捧げる人であるのかと。弔を見極めたいのだと。

「俺は、先生とあんたと会う以前のことをよく覚えていない」  
「よく知っておるよ」

弔は告げていく。オールフォーワンと会った時のことを、家族の残骸として手を渡された時のことを。脳裏によぎったことと——正体不明の苛立ちを。

手を身につけると落ち着くが、何故か常に怒りが噴き出している。心の奥底に鉛が落ちていて、そこから噴き出しているようだ。何を為したとしても消えない。弔はそう続ける。

「俺はきつと全部嫌いなんだ。息づく全てが俺を苛つかせる

じゃあ——もう壊す、一旦全部。あんたは世にも美しい地平線が見れるよ。だから手を貸せドクター。地獄から天国まで見せてやる」



イカれた答え。子供の戯言。しかしドクターの琴線に触れていた。

「はははは！まるで子供の絵空事、狂人の戯言！だがしかし！ヴィランとは戯言を實踐するものことじゃ！」

力を貸そう。何より……元々協力する予定じゃったよ」

「てめえ……ふっかけやがったな」

「慌てるな、この子らもじゃが……お前の為の研究を準備しておる」

ドクターの言葉に甲の目が見開く。オールフオーワンに向けられていた視線が少しだけ向けられたからだ。

一人の為に研究を行う、ドクターがオールフオーワン以外の誰かに行う訳が無い。しかしその禁を破ると言うのだ。単純に驚いていた。

「しかし！後者はまだ渡せない。お主らは弱い！墮とし子一人に負けるようでは話にならない！」

——最低限の格は付けてもらう」

一呼吸間を置き、ドクターは条件を示す。相応に困難な条件を。

「ギガントマキア、あれを屈服させて見せよ。あれはここにいる三人同様に純粹。故に

認めるかどうかは分かりやすい。

その時先生が継がせようとした全てを渡そう」

継がせようとした全て。継がせたくないものもあると明白に告げるドクターに弔は眉をひそめる。

「全部じゃねえのか」

「そうしたいのはやまやまなんじゃが……知らん間に何もかも皆殺しにするバーサーカーなどいらんじゃろう？」

「そりゃあな」

弔含めるヴィラン連合の全員がうんうんと頷く。ドクターも全員が危険性を分かってくれたことに頷いた。

「問題はあれどお主らに覚悟があれば……程度のものなら渡すとも。覚悟があらうと関係なしにワシや先生ですら危ういものなど封印しておくべきじゃ、違うか？」

「貰えるもんなら貰うだけだな、いらんもんはいらん」

最終確認もできたと弔から言葉を貰い、ドクターは膝の上に乗っている脳無に刺さっている電極をいじる。

「では戻って貰おう」

「まったく、長いチュートリアルだったぜ」

脳無の個性『泥ワープ』が発動する。泥ワープの個性でヴィラン連合の茶毘を除く全員が転送されていく。

残った茶毘もハイエンドの様子をもう少し見たいと離れていった。灯火と崩華も監視のために茶毘を追っていく。

残ったのはドクターと奪姫だけ。少しの沈黙が、二人の間に温度差を生じさせていた。

「お主も行っているぞ。護衛はもう十分じゃ」

「なら行きますね。……あれ、私は何も思いませんけどおかしさんは知ってるんですか？」

奪姫が顎で示す先にあるのはカプセルに入った人間。ドクターは奪姫には何も話していないが、奪姫はあれがどういったものなのか分かっていた。

一言で言えば……同胞なのだ。

「当然じゃろう。そういえばお主ら何をしておるんじや？好き勝手に、ワシはいいがMs. ダークライは怒るのではないか？」

「怒りませんよ、それが指示ですから。信者は十分集まりましたので、今は——デトラネット社に交渉を」

奇しくもヴィラン連合に武器を提供している義欄がデトラネット社に捕まったタイ

ミング。凶った訳ではない。奪姫と兄弟姉妹も母に憧れてコスチュームが欲しかっただけであり、都合よく動き始めたのがデトラネット社なだけだった。

「ほほほ！面白いことをしておるな」

「弔おにーさんに何かあるかもですが私は知りませんよ。それでは」

一瞬で姿を消す奪姫。転送、それも母親がかつて使っていた瞬間移動の個性だ。堕とし子達は脳無改造によつて複数の個性を持てる特性を持っていた。

しかし取得方法が脳無とは明確に違う。脳無はドクターによる改造で移植するように個性を受け取るが、堕とし子は自ら喰つて手に入れる。かつて依光成生が女性ヒーローの髪を食つて個性を得たように。

当然、母親の髪を喰えば持つている個性も手に入る。拒否反応など無い、何故なら血が繋がっているから。

ドクターはかつて母親が新たに個性を手に入れた状況を知っている。故に個性移植はしなかったが、予想通りではあった。

だがその強大きさにドクターは、かつてギガントマキアに抱いたように恐れ——同時に欲しかった。

「……言えぬのう。あれらはM s.、ダークライから貰ったものではなくM s.、ダークラ

イのクローンを使っておるなど。M s. ダークライの許可など得ておらんことも」

禁忌そのもの。M s. ダークライの存在自体がそれに値するのだが、ドクターの行動は更に数歩踏み込む。オールフオーワンの指示ではなく、戦力を増やすべきならと思つて行動したものだ。理念自体は邪悪ではあるが思想は純粹だった。

ドクターは知らない。既に奪姫の目の奥は冷たくなつていたことを。電花の受信範囲は一地方を超えて東日本全域程まで広がっていることを。電花の受信範囲に、既に研究所が入っていることを。

奪姫も、広範囲電波の個性を持つていることを。



弔たちがギガントマキアのところに戻り戦い始めた頃、茶毘は未だ研究所にいた。ドクターと脳無について談義したり、自らの出自について話したりと終わつた後だ。

テーブルに着き、灯火と対面していた。崩華は監視のためかかなり離れた位置から見ている。

奪姫から直々に関係があると言われたのだ、知りたいのは当然の欲求だった。

「で、灯火って言ったか。お前と俺の関係って何だ？」

「兄と妹」

完結過ぎる言葉に流石の茶毘も声に詰まる。しかしそれも仕方のないことだった。

何せ茶毘の出自——轟燈矢、エンデヴァアの長子であるのは秘密どころか関係者であるドクターやオールフオーワンしか知らないことなのだ。知っていること自体が想定外だった。

「……轟炎司の、新しい娘だと？」

「そこはどうでもいい。大事なのは依光成生の四女つてところ」

茶毘はその言葉に驚愕から理解に進む。

オールフオーワンを超える災厄、M s. ダークライの子供だ。M s. ダークライの情報網を使えるのだらう、そう予想した。

M s. ダークライはオールフオーワンの弟子でもある。知っていてもおかしくない。ならばそこから灯火の言葉に筋道を立てて考えていく。

辿り着くのはすぐ。茶毘は結論に笑うしかなかった。

「ははは！これはお笑い種だ！まさか勝手に種を盗られて！しかもこんな子を作られるなんてな！」

茶毘はエンデヴァアの息子だ。だからエンデヴァアの虐待に等しい訓練を知ってい

る。エンデヴァーがそれを求めた理由も、訓練が対象を変えて現在も続いていたことも。

それがエンデヴァーから離れたことでエンデヴァーが求めた理由に到達し、父などいなくても構わないという様子で母親を慕っている子が出来ていたのだ。笑うしかなかった。

「ドクターの脳無改造を加えられて、今はこんなこともできる」

「わ」

「面白いでしょ？」

軽く腕を振るっただけ。それだけで茶毘に風圧が当てられる。オールマイトが使っていた身体増強に近い身体能力だ。それも併せ持っているとなると先ほどまでドクターと話していた能無よりも優秀なのではと考えてしまう。

灯火の能力、スベックは彼女自身の口から告げられた。

「脳無の完全上位互換って話。私は脳無の身体能力と複数個性持ち可能特性と再生能力にエンデヴァーの炎、それらをおかーさんの力で<sup>最適化させて</sup>望まれて作られた。起きたのつい最近だけ」

「……マジか、そりゃ頼れるな。お前みたいなのがまだまだいるのか。一大勢力ってレベルじゃないな」

事前に風圧を浴びせられてなかったら間抜け面を晒していたと茶毘は悟る。

M.S. ダークライというトップだけでも化け物染みた戦力だ。が、彼らは一人一人でも最低でもトッププロヒーロークラス複数人レベルの戦力がある。しかも生まれたてとくれば途方もない成長の余地があるのだ。国墮としすら容易。茶毘の頭によぎるのはそれほどの戦力。

さらにもう一つ、茶毘は気になったことがあった。

「奪姫……奪う……オールフオーワン？」

まさか他のやつ、……崩華つてのは俺のボスのガキか？」

「知らない。知ってるのはおかーさんとドクターだけ」

「そりやそうか」

背伸びしていた口調が少しずつ崩れてきた灯火に、微笑みながら間違ひなくそうだと確信する茶毘。あのドクターとオールフオーワンがこんな面白そうなことに口出ししない訳が無い。

母親を依光成生として子を成して自らの手駒とする。倫理観の欠片も無いがM.S. ダークライとドクター、オールフオーワンの三人なら笑って実行するだろう。

茶毘は知りたかったことはあらかた聞き終えた。どう扱うか考えようとしたと同時に、灯火から疑問が飛ぶ。



「で、脳無使って何するの?」

「何で言わなきゃなんねえんだ……いや、話すか」

どうせ話しても M s. ダークライがいれば未来予知染みた直感でバレるだけだ。奪姫が纏っていた雰囲気を見ていればその直感が子供に引き継がれないとは思えない。

加えて茶毘は灯火に少しだけ親近感を持ち始めていた。何せ妹だ。しかもエンデヴァアの被害を受けておらず、子という認識すらされていない子だ。

殺してもエンデヴァアの心身に影響がない兄妹。となれば苦しめる必要もなく、立場的には味方でもある。……悪くない気分だったのだ。

「ホークスが接触したがってるみたいだな。スパイしたいんだろう」

「スパイ!」

子供のように目をキラキラと輝かせる灯火。子供だなど茶毘は呆れ顔をしていた。

「……何だ、やっぱガキだな。まあそのスパイがうちに入りたがってるから試金石として使うのさ」

「んー……適当なヒーローにぶつけるとか?」

「それでもいいんだけどな、あんまり都心部で暴れさせたくないってのがある。目立ちたい気持ちはあるが今はそこまで求めてないんだ」

むむむと眉を顰める灯火。いくら悪夢の墮とし子と言ってもまだまだ子供。知識や

交渉といった面ではまだまだ成長途上だった。

「じゃあどうするの?」

「だから試金石さ」

ただ悪夢の墮とし子なのだ。ヒントさえあれば答えに到達するのは鋭すぎる直感が働き思考を最適化する。

灯火も例外ではなかった。

「いい感じの場所提供してくれてこと?」

「ガキだが察しは良いな、その通りだ。で、脳無が暴れた後に回収するのが俺達の役目だ」

理解できたのか微笑みながらコクリと灯火は頷く。そして微笑んでいた顔は少しずつにやけ顔に変わっていく。

「じゃあ私は燈矢兄いの護衛?」

燈矢。捨てた名前だが灯火との繋がりの一つでもある。悪くない気分だが、今の自分には合わないかとハツと茶毘は笑う。

「何で知ってんだ、茶毘でいい。まあ何かあるか分からんし頼む」

兄から頼まれる。兄弟姉妹の仲が良い墮とし子である灯火にはそれだけで受け入れるに値する理由だった。

「任された！」

ふんすと鼻息を立てて立ち上がり、灯火は奪姫の下へと走り去っていく。奪姫は既に姿を消しておりもういないのだが……茶毘護衛の許可をもらいに行つたのだ。行動が完全に手間のかかる妹のそれだった。

そんな灯火の去つて行く姿に、茶毘の目は珍しく優し気だった。

「妹か……悪くねえな」

純粹無垢。悪夢の墮とし子、灯火は未だそこから抜け出してはいない。電化・奪姫のように母のために何もかも捨てる・切り捨てる覚悟もなければ、艶羽のように自由に動く欲望も無い。

ただ擦れに擦れてここまできた茶毘には、眩しく……同時に癒されもする存在だった。

## デトラネット社交渉

ギガントマキアと敵<sup>ウイラン</sup>連合が衝突して数日が過ぎた後、一人の少女が敵<sup>ウイラン</sup>連合に合流していた。仲間ではない、同盟……とも呼べず一方的な関係にも近い。敵<sup>ウイラン</sup>連合からしても意外だった。

「なんでこいつがここにいる？」

「お兄ちゃんの護衛」

「つて訳だ、すまねえなりーダー」

灯火、悪夢の墮とし子にしてエンデヴァアの娘だ。燈矢……茶毘が合流したのはマキアと戦い始めた二日後あたりだったが灯火はいなかった。今回、ドクターや奪姫の許可が下りたため合流したのだ。

そして敵<sup>ウイラン</sup>連合からしても毎日ギガントマキアと衝突し……特に弔の疲労は途轍もないものになっていた。灯火という戦力が加わるのは悪くないことだった。

「……まあいい、こつちも戦力が足りてねえ。あいつ相手に勉強できる時間の稼ぎができるってんなら助かる」

だが何より、弔は自らの研ぎ澄まされていく感覚をきちんと認識できつつあるという

のが大きかった。このまま進めば個性自らが成長できる確信があった。

すぐにマキアと実戦できる環境は悪くなかったが、感覚を認識する時間さえマキアはくれないのだ。ほんの少しだけ余裕が欲しかったところ、助力はちようどいいタイミン  
グだった。

「マキアさんは認めないからねえ、後継ともなれば当然」

「……知ってんのか」

ケツと吐き捨てるように弔は口にする。灯火はふふんと自信満々に鼻息で笑っていた。

「そりゃ遊び相手だもの。今なら多少はやり合えるかも……休む時間あげるから交代して」

「ちっ……助かる。ぶつつけ本番がしやすいのは楽なんだが個性も体も使えない時があるんだ」

マキアはM.S. ダークライと戦っただけでなく墮とし子とも遊んだりしている。その分マキアも成長しており、弔が戦うにも限界がすぐに訪れるほどだ。

とかまともには戦ったこの数日だけでも弔は成長しなければ死ぬ戦闘が連続し続けていた。いくらヴィランにもプラスウルトラの精神があらうと、あまりにも連続し続け肉体的限界が先んじてくるのだ。

灯火という隙間ができる。これ以上ない手助けだった。

「……灯火か」

「ちよつと試したいことあるから、いいよね？」

「後継の方が先だ」

「なら向けさせるだけ」

ただマキアは後継の選別のためにここにいる。灯火のことなどどうでもよく、遊ぶ相手になるなら後回しにしなければならない。

邪魔をするのなら——潰すだけだった。

「あなたの巨大化は『高揚を体躯の変化エネルギーに変える』。高揚とは熱を生み出すもの、そして私が生み出すのも、熱。

なら——こういうこともできるはずだって思ってた」

灯火の身体に熱が溜まる。何かが起こると言い切れる熱量が灯火から発せられる。しかして『溜まる』という現象に、マキアは先んじて拳を振るった。

「！」

マキアの巨体の拳、それを灯火は片手でパシツという軽い音と共に受け止める。

墮とし子の身体能力は非常に高い。脳無と同等以上であり、オールマイトを基準にされてはいる。

しかしマキアを相手にここまで簡単に拳を受け止めるのは困難だ。活力吸収により肉体強度を最大化している奪姫や、身体強化・増強系を得意とする墮とし子ならできなくはないが、灯火はその範疇にない。

ただ、灯火にはたった一つだけ墮とし子の中で最も優秀と言い切れる特徴があったのだった。

「熱を、身体能力に変えて更に——衝撃へ！」

マキアが発する衝撃波と同じものが放たれる。マキアが持つ個性『巨大化』、その応用と全く同じ運用だった。

炎熱を得意とする灯火だからこそ可能な運用。個性の制御が途轍もないレベルにある証拠でもあった。

ちようど、M.S. ダークライの『指先発光』のように。

「私は一番おかーさんの血が濃いからね。びっくりさせるのはお手の物だよ！」

最も母親の血が濃い、それが灯火の持つ最大の特徴だ。故に個性の成長速度は爆速、与える影響も甚大、純粋であり灯火という人物を周囲に浸透させるのも早いのだった。

「……少しだけ遊んでやる」

あてられたマキアは敵<sup>ライアン</sup>連合との戦いを一時中断し灯火との闘いを始める。それはまるで子供同士のごっこ遊びのようでもあった。



一月ほど後、12月中旬。弔が単独で相対するようになり……今は灯火が戦っていた時のことだった。

「ん……う？あ、電話きてるよ」

灯火も成長しており、周囲の音にも余裕をもつて反応できるようになっていた。離れた位置にいるトウワイスの電話に気づけるくらいには。

「ああ！義欄だな！最近電話来なくて元気にしてるか不安だったんだ！」

「ああ、それは私たちのせいだ。彼は悪く無い。敵ライバル名トウワイス、分倍河原仁くんだね

？」

「誰だ。……義欄は!？」

「今、ニュースでチェックできる状況かい？すぐに見てほしい！」

義欄とは別人、電話に出たのはボイスチェンジャーで変わっている声に不審に思いながらもスマホでニュース確認するスピナーとMr.コンプレス。ニュースに出てきた情報は誰かの指が各所に落ちていたというもの。問題はそれらの場所だ。

死穢八齋會組長邸宅前、保須市ターミナル前、中央高速道路、神野区グラウンドゼロ、福岡都市中心部。死穢八齋會と交渉した、ステインと共に暴れた、オーバーホールを襲



撃した、AFOの最後の指示、茶毘が新しい脳無の試運転をした。全て関りがある場所だった。

「俺達が現れた場所だ——」

「初めまして敵<sup>ヴィラン</sup>連合！

異能解放軍リ・デストロだ」

異能解放軍。かつて存在していたヴィランの一グループであり、戦力はかなりのものを誇っていた。AFOが率いた者に比べれば規模は小さかったが、政府へ数年に渡って武力蜂起していたヴィラングループとなると滅多にいないのだ。それだけ求心力がある組織だったが、最高指導者デストロと構成員は逮捕され、解体された……はずだった。しかし解放軍は死んでいなかった。デストロが逮捕されても、血を分けた子供がいたのだ。地道に地域に根を張り、構成員を水面下で増やし、かつて以上の規模へ膨れ上がっていたのだった。

「ヤクザの次は解放軍かよ……レトロブームでも来てんのか。最近本が売れてんだって？」

「はっはっは押さえてるね！」

「義欄はどうした！あいつはいいやつなんだ！」

義欄は優秀なブローカーだ。捕まるにしても捕まり方というのをわきまえている。

だがそれはあくまで表社会の話だ。裏社会において捕まるといふのは生殺与奪の権利を完全に奪われてしまうことを意味する。

心配するトウワイスの言葉に、リ・デストロは軽く声を返した。

「彼はここにいるよ、生きています。人質を利用しないうちに殺すなんて馬鹿な真似はしない」

「人質……なるほどな。用事は何だ？革命サークル」

弔は今が自分自身にとつて大事な時期だと分かっている。個性がこれでもかと成長しており、余計な邪魔はされたくなかつた。

だから依光成生と話す時のように、認識を素早くし頭を回していた。そうしなければあのバカとの会話についていけないのだ。逆を返せば、あのバカと話す時のように動けば話を素早く進めることができる。そして煽るところも、同じようにできていた。

リ・デストロの声に怒りが混じった。ボイスチェンジャーを使っても分かる程になつていた。

「……革命サークル？そういうった冗談は嫌いだ。

潜伏解放戦士11万6516人、既に決起の準備はできている。自虐ジョークは好きじゃないな敵、連合！」

成生達に影響されている弔とトガ、それに茶毘と灯火は鼻で笑っていたが、それ以外

の面子からすれば脅威もいいところ。正しく認識したくない情報だった。

「……はったり、だろ」

「新潟か、随分と山奥だな」

「っ！」

今いる場所を正しく認識されている。それだけで解放軍がどれだけこちらの情報を握っているのかが分かかってしまう。

何より問題なのは、敵<sup>ヴァイラン</sup>連合は世間にヴァイランとして認知されているが、解放軍は認知されていないことだった。

「もう遅い！衛星で君たちの場所は常に監視している！通報すればM.S. ダークライによる汚名を返上しようとヒーロー達はこぞってやってくるだろう！」

解放軍も分かっている。だからこそそれが交渉のカードになることも。

甲はチツと一つ舌打ちする。要求を呑まなければならぬという状況に知らない間に追い込まれていたという事実、イライラするのも当然だった。

「予告アリとは優しいね、何がしたい」

「解放の先導者は我々が支持する者でなくてはならない。君たちは名をあげすぎた。」

我々の手で潰し、解放軍再臨の狼煙とする。指はその宣誓、まどろっこしい駆け引きなど必要ない」

その言葉にニヤリと甲の顔が破顔する。丁度いいとしか言いようがないタイミング、それも向こうは潜伏し続けてきた猛者。マキア程ではないが、群として連携すると見ればマキアを超えかねない者。故にマキアよりも相性はいい。

甲は自らの成長からしてマキアを壊すのももうすぐと見ていた。あと何か、もう一つ足りない何かがある。それさえ超えられれば全て壊せる確信があった。

そして最悪のパターン、敵側にM.S.、ダークライの関係者がいても灯火という戦力がある。少なくとも邪魔はしてこないのは明白。

笑う以外ありえなかった。

「戦おう、異能を解放して。これからすぐ！愛知“泥花市”に来るといい

来れば義欄は解放しよう！そして選ぶといい！

私達と戦って潰えるか！それともヒーロー達と戦って潰えるか！死柄木弔!!!」

そう高らかに声を上げ、電話は切れたのだった。

「丁度いい」

甲の、掠れるような声も聞かずに。

■ ■ ■

電話が切れ、ヴィラン連合との交渉は終わる。デトラネット社からすればあとは待ち、罠にかけるなりなんなりとヴィラン連合を料理すればおしまいだ。

その程度のことだった。今はそれよりも遥かに強大な者と交渉しているのだから。

「さて、ヴィラン連合はこれでいい。懸念事項足る脳無や茶毘についても解決している……木っ端サークルだ、影響力だけもらってきよならとていこう。」

目下最大の取引先はあなた……いや、あなたたちと言った方がいいかな？」

全員の視線がリ・デストロの視線の先へと向けられる。窓際、何もいない場所。誰もいないはずの場所から彼女の声は届けられた。

「ここに招待しておいてその言い草？」

少女の声が会議室に響く、透明になつて姿を消していた奪姫がそこにいた。瞳の奥は薄暗く、のぞき込めば引きずり込まれそうな雰囲気が大物ヴィランであることを示している。

ここにいるのはデトラネット社でも幹部以上の構成員。雰囲気には無だが、警戒を最大にする程には神経を尖らせていた。雰囲気には吞まれることは無

「いえいえ、あなたたちが、かのMs. ダークライの近衛部隊と聞けば当然の帰結ですと  
も」

リ・デストロは対等である口調でありながら恭しい態度を隠さない。理由は簡単なこ

とだった。

「私達を下した個性に、M.S. ダークライの持つ影響力。配下になど置けない、かといって真正面からぶつかればあなた——奪姫様一人で十分。

数で押ししても片っ端から活力を奪われ沈黙していく。質では勝てなかった。まるでかつてのオールフオーワンの伝説を思わせる」

実は既にデトラネット社は奪姫とぶつかっていた。10万を超える解放戦士、奪姫一人が相手だったため会社を送ったのもその一端のみであり千人程度だけだったが……結果は壊滅。

実力者揃いではあるのだが数を多くぶつけるのは奪姫からすればカモ。活力を片っ端から吸収すれば向かってきたものは皆倒れ伏せる。奪姫の個性である活力吸収には吸収限界もあるが、暴れていれば消費していく。適当に空に殴りつけて空撃ちでもすればそれで十分だ。

質で言えば切り札である外典でさえ、活力を自らの膂力に変換したフルパワー奪姫にぶつかり負けていた。幹部クラス、武力で言えばリ・デストロレベルの人材がもう一人いれば話は変わっただろうが後の祭り。敗北を喫したとデトラネット社は判断していた。

その後デトラネット社は調査を重ねた末——解放戦士の質と数を合わせたところで

高すぎる質達には勝てないという結論にも至ったのだった。

「しかもあなた相当レベルがあと何人もいるのでしょうか？ M s. ダークライと共にいた子供や……茶毘と共にいた少女、それだけであなたを含め三人。既に聞いた話ではさらに二人。」

「電花姉に灯火ね。可愛い子よ」

ふふふと自慢げに奪姫は微笑む。墮とし子の兄弟姉妹仲は非常にいいという言葉ですら生温いのだ。溺愛ではなく信頼という意味で。誰かに知られるということは誇ることであつて恥ずかしくないことではない。

次女であり、動ける者では今や一番上の年長である奪姫はそれを隠すことなどしない。電花という尊敬すべき姉を知っているからこそ、誇るのだ。

「灯火様ですね、炎という意味では今のN<sup>o</sup>. 1と似通っている。……いえ、詮索は止めておきましょう」

「いい判断ね」

「あなた方が真正面からぶつかったのなら、その時の影響力に我が社が関わっていたのなら、それで十分です」

デトラネット社はリ・デストロがトップに立つ会社だ。利益を優先し、使えるものは使うのだ。触れてもいいが握ってはいけない存在ならば、触れるだけの行為から利益を

得ようとするだけだった。

「なら交渉は十分かしら？」

以前話した通り——私達の目的にはあなた達のような大規模な組織が必要。武装もあれば欲しいわ、私たちが使っているという事実があなた達のメリットにもなる。

私達が提供するものは、話した通りよ」

につこりと笑う奪姫。少女の可愛らしさが残っているが、見せる微笑みは会社同士の交渉を仕掛ける者のそれ。リ・デストロ含め幹部も全員が理解していた。

判断は既に会議を経て下された後であり、会社の利益という答えで結論づいていた。「ええ。ヒーローのコスチュームのような武装にはデータが大量に必要ですのでその一員扱いで構いません。欲しいのは武装、というよりM s. ダークライのことを鑑みるにコスチュームのような服でしょうし是非作らせて頂きます。

なので話された通り——あなた方M s. ダークライの墮とし子の情報を頂ければ、それで十分です。先行して渡された情報……電花様、艶羽様、そして勇也様」

墮とし子の情報は秘匿されている。何人いるかも、戦力がどれくらいなのかも分かっている。いい。

が、墮とし子・M s. ダークライ側から見ると秘匿する意味がなくなってきた。情報の価値が薄れてきているのだ。渡しても問題ない程度に。



もちろん奪姫は全て渡すつもりなど毛頭無いが、直に知れ渡る者を口にするなど問題など無い。ただその「直に」という時期がデトラネット社は欲しかった。

M s. ダークライの誇る自らを除く最高戦力。会社が協力していると知られれば――これ以上ない宣伝になる。

「女王を守る近衛部隊。戦力差は我ら10万がぶつかったところで蹴散らされるだけ。

ましてや……あなたの方の求める、M s. ダークライの信奉者を集める事業では30万を超えるのでしょうか？」

墮とし子の長女、電花。彼女が求め、広範囲電波の個性を使用し水面下で集めていた人材達……悪夢依光成生の狂信者。電花が出来たことはあくまで集めようとするだけ。広告塔シンボルも無ければ、集められる場所も無い。そして電花には時間も無かった。

故に思想と共に奪姫に、兄弟姉妹に託した。必ずやり遂げるようにと、それが依光成生おかしんのためになるからと。手段も似たようなやり方デラで集めてネットいる人達社がいるから協力してもらうようにと。

もつとも、電花も解放思想と依光成生個性とは人そのものだよが似ているとは思ってもおらず、恭順の姿勢を示しつつあるのはあずかり知らないことだった。

「多く見積もってるわ。それに戦力とは呼べない」

「数は力ですよ。いくら訓練されていても不意打ちされれば致命的です」

10万が一箇所に集まろうと30万に各都市で不意打ちされればたまったものではない。まして墮とし子が集めているのは戦士ではないのだ。市民に紛れ込む程度の戦力……故に、市街地ゲリラ戦を行えとなればこれ以上ない危険を孕むことになる。

数で押すのではない、紛れ込んだ大量の暗殺者が襲うのだ。少数精鋭ではなく数を多く揃えるデトラネット社は避けたい戦いだっただけ。

あからさまに我が社は不利であり恭順したいのですと言っていているデトラネット社にため息をつく奪姫。そんなつもりは甚だ無く、あるのはただ行動するから協力してくれというだけ。仕方ないと面倒くさそうに声に出す。

「先に言っておくわ。現状私達はあなた達を配下にするつもりは無い」

「……一応理由を伺っても？」

話してからふと奪姫は悪戯を思いつく。配下になりたがっているのなら、配下になるには条件を付けなければならないのだと。

妥当かつ、難しい条件を。奪姫はちょうど今——一時期は母親依光成生と対等と言われた男、ギガントマキアが動いていることを知っていた。

「私たちは依光成生M.S. ダーククライの配下、故にその考えを継いでいる。

——オールフオーワンの弟子、死柄木弔という兄弟子がいるでしょう？」

一瞬の沈黙。驚きも無く、声も上がらない。ここにいる全員が意味を正しく受け取っていた。

優秀な大人とは、社会人とは、交渉する者の言葉の裏の意味をきちんと理解する。そしてここにいるのは皆優秀な社会人だった。

「なるほど。妹弟子であるM.S.、ダークライと対等である死柄木弔、ひいてはヴィラン連合と対等な立ち位置にしておきたいというわけですか。

つまりこう言いたい訳ですね——ヴィラン連合を潰したなら考えてやってもいい」  
奪姫はにつこりと微笑む。言葉に対するリアクションとしては肯定以外の何物でもない。

「好きに受け取るといいわ」

「ではそうしましょう。M.S.、ダークライの考えはあなた様から聞いています。デストロの解放思想に近い。

ですが——ならば！あなた方に」

「いらない」

リ・デストロの上ずった声を奪姫はズバリと断ち切る。言いたいことは分かるのだ、似ているならより強大な方に付きたいのだろう。

だがあくまで似ているだけなのだ。奪姫からすれば解放思想や戦士といったものは参考にするべきものや協力すべき存在であり、呑み込む相手ではない。食あたりするのが目に見えているのだから。

「私たちは私たちの思想で動いているわ。解放思想はあなた達で使うといい」

もう用は無いと、後ろ背にしていたガラスを手刀で円状に切る。円に切られたガラスを蹴り飛ばし、奪姫は個性を、広範囲電波指向性をもたせて声に出す。

「大、来なさい」

遠くでドゴツという音が鳴る。次の瞬間、ビルに張り付いた大男の姿があった。

数メートルはある巨体。風貌は荒々しいながらもどこか子供っぽい。元気いっばいな漢大将といったようだった。

ただその顔つきと体つきは別物。岩どころか鉄のように頑強な身体つきに、異様に伸びた爪。しかし張り付いているのに爪を突き刺してはおらず、イモリのように張り付いているだけ。体格に任せた頑強な人間ではなく、明確に個性を手足の如く操って動いている人間だ。

ビルにぶつかつた衝撃さええない。流石のり・デストロラデトラネット社の幹部達も驚いていた。

「だっきねーちゃ。よんだ？」

「帰りましょう。用事は終わったの」

奪姫は身を翻し、リ・デストロ達に背中を向け大が差し出した手のひらへ移る。もう用事は無いと、座って帰る気満々だった。

ただ姉が単身で交渉していたという事実、目を背けられる弟はいなかった。

「ねーちゃんかせたら、つぶすからな！」

大の声にビリビリと空気が震える。ガラスが振動で壊れるかと誤認するほどの重さを持った声、それだけでどれだけ強大な存在なのかを分からせてくる。

ドツという音と共に暗闇に消えていく二人。残されたり・デストロ含めデトラネット社幹部は全員が一息吐いていた。

「ふう……。あれは、恐ろしいな」

大と呼ばれた大男。力を奪いひれ伏させる奪姫とは違う、ただ圧倒的な力そのもの。全力でぶつかつたところで上から潰されるだけの力の塊であり、実力者が揃っているここでも力関係は同じだった。

蟻と巨象とまではいかないが、人と子猫程度には力の差がある。分かっってしまうからこそ恐れ……。会社という組織に属している人間であるがために分析をしていた。

「ボディガード、でしょうね。警戒していた範囲にいましたが、透明化していましたが、あり反応できませんでした。大と呼んだ巨漢の上に奪姫が立ち守るだけで解放戦士は壊滅状態までいくかと」

「数で押せば……いや、そもそも二人だけではないのか」

「灯火と呼ばれた少女はエンデヴァーの技を使っていました。数で押すには相性が悪過ぎる」

「組み合わせられたらまさしく防護は完璧か。近衛部隊と呼ぶだけはある」

問題を見つけたら報告し、全体で相談する。そしてリ・デストロへ連絡という社会人の見本であり、今はここにリ・デストロもいる。会社としての速度は最速であり、決断も最速だ。

どういった対処をとるのか、結論はほぼノートタイムで出ていた。

「敵に回すなよ。恐らく電波も視られている、衛星による監視も禁止だ。悟られたら滅ぼされる。」

30万を超えるであろう人材の場所もデータとして貰っている。集めるのは簡単だ、我々の得意分野だからな」

「〔御意〕」

M s. ダークライや墮とし子達に面倒だなど思われること、それだけが最も避けなけ

ればならない事態だ。

「……配下ではないが対等とも言い難い。しかし好きに動いていいと言う。

M s. ダークライの娘というのも理解できるものがあるな、やっていることが同じだ。

個性を好きに行使用する姿。まさしく解放思想の体現なのだが、どうすれば配下にしてもらえるのか」

リ・デストロ口自らが認める上位の存在、M s. ダークライ。瞳に誘われ行動に惑わされ、自らに向けられた力は魅入られるもの。人として、ヴィランとして、支配下に入ろうとするのも仕方のないことだ。

間違っているとしても、そうしたがる。それがM s. ダークライのカリスマ<sup>影響力</sup>。考えが近ければより自らの意志でそうしたがるようになるのだ。

リ・デストロも分かっている——が、止まらない。誘惑されようとその先は交わる可能性が高いのだ、ならば共に進もうとするのは効率という面でも有用だった。

そこまで考えリ・デストロ……四ツ橋<sup>よつばしりきや</sup>力也は首を振った。

「いや、止めよう。まずは短期目標だ。

ヴィラン連合を潰す」

会社とは長期目標を掲げ、中期目標、短期目標と決めて達成していく。中期目標にて

M s. ダークライの下につくため、ヴァイラン連合の壊滅短期目標のため、更にデトラネット社は行動を活発化させていくのだった。



## 再臨祭

数時間後、泥花市に到達したヴィラン連合。そこで灯火は唐突に動きを止めた。

「ん、お前は行かないのか？」

「行かない。行ったら余波が酷いことになるから」

真剣な眼差しを町に向け、灯火は全員に聞こえるように口に出す。

短過ぎる付き合いだ、だからこそヴィラン連合の全員は警戒心を強める。

「どういふことだ」

「向こうに奪姫姉えがいる」

奪姫。その名前は研究所で聞いた名前であり、当時のヴィラン連合であれば壊滅する力を有する者のことだ。現在なら戦力差は分からないが、戦いは避けたいと即座に判断出来る程度には強いことに変わりはない。

「裏切りか？」

ただでさえ解放軍という罫に突っ込もうとしているのだ。慎重にならざるを得なかった。

事情を知る灯火以外は、だが。

「違う、今の私たちは皆好き勝手動く。代わりに一つだけ約束してることがあるの。

たった一つだけ——兄弟姉妹での喧嘩は基本的に禁止」

「殺し合わなきやいいんじやねえか!」「殺そうぜ!」

灯火が続けて話そうとフンと鼻息を鳴らし……茶毘が約束の意味を理解し先んじて声に出していた。

「ああ、なるほどな。向こうにいるならこつちも動かなくなることか。相互不干渉ってことか」

言いたいことをだいたい言われた灯火の顔は露骨にブスツと不機嫌な表情へ変わる。声のイントネーションも不機嫌を隠さないまま、灯火は話を続ける。

「……そう。だから墮とし子がいる組織同士の抗争に墮とし子が参戦することは基本的でない。例外があるとすればおおかーさんに何か言われた時と、双方が確認とれてない時くらい。」

今はおかーさんは何も言わないから好き勝手動いてる」

「つてことは墮とし子がない組織といる組織の抗争なら参戦するつて訳かい。怖いねえ」

Mr. コンプレスの言葉に灯火は頷く。

これは最低限のルールだった。墮とし子は子供であり複雑なルールを作っても分か

らない。だから約束を作った電花には彼らの感情と母親を信じるしか選択肢は無かつた。

すなわち兄弟姉妹が母を慕う感情。それだけは絶対だと信じ、ルールを破ると母に怒られると兄弟姉妹に伝えた。

母を慕うなら破らない。母を慕ってないなら慕う兄弟姉妹が敵対する。

今も当然、約束は遵守されていた。

「九州の時とかがまさにそれ、勇也兄いとかヒーロー側のどつかにいるかもだけど私知らないし。今回は私も奪姫姉も視えてるし喧嘩になっちゃうから参加しない。だから純粹な組織同士の戦いになるだけ」

「構いやしない。どうせやることは変わらん」

墮とし子が参加しなくなるだけ。ヴィラン連合からすれば好都合だった。

灯火はマキアにも届きうる銚。だが今はヴィラン連合が自分たちのみの力を鍛えているのだ。助力はあくまで助けを求めているときに欲しいもの。

今は、要らなかつた。

「じゃあ頑張つてね」

ひらひらと手を振る灯火を高台に残し、ヴィラン連合は泥花市の町へ歩を進める。

ここに居る灯火を含めた、墮とし子四人のことは知らずに。

「……崩華がいるけど、まあ大丈夫かな。多分おかーさんの指示で残ってたやつだろうし、勇也兄に懐いてたしっかり者だし。向こうに大もいるみたいだから二対二でちようどだね。」

崩華も真正面から参戦はしないから大丈夫かな」

灯火は無邪気に笑う。兄弟姉妹で仲良しだから考えも同じなんだなあと嬉しく思ったがために。



泥花市の町に踏み込むとヴィラン連合は解放軍の圧倒的な物量によって分断された。弔の崩壊でかなりの個人と、茶毘の蒼炎で範囲殲滅を仕掛けたが失敗したのだった。

そして今、トガヒミコは解放軍幹部キュリオスと対峙していた。分断するべく仕掛けられた地雷を避け、そこまでが織り込み済みだったが故に分断されたのだ。

「連続失血死事件、その犯人、トガヒミコですね」

「誰です?」

キュリオスの眼差しは真剣なもの。侮るつもりどころか格上の者へ送る視線だった。

それも当然。なにせトガヒミコはヴィラン連合の中でも唯一、彼女から明確に友と呼ばれているからだ。

「彼女——Ms. ダークライに友と呼ばれる存在。ただの一般女子高生が狂気に至り、出会った狂気を共有する……素晴らしい。」

「そんな話を取材したい……受けてくださる？」

ただトガが示した表情は、明確な敵意を持ったモノだった。

「成生ちゃんは成生ちゃんです。あの名前は他所の名前、一緒にしないでください」

何も知らない者が口を挟むな。親友と呼べる仲の友達であり、絶対不可侵の領域。侵そうとするのならば、純粋な敵意を持って相対するのみ。

ヒーローやヴィランだからではない、ただ譲れないものだから。

弔と一緒に全部壊すという元々あった戦う動機が変わる。皆と共にではなく友の為に。

ゆらりとトガの姿は消える。個性ではない、ただの技術だ。

「これが消える技能ですか！」

困んでいるのに見えない。元々あった技術に加え、成生と遊んでいたことによる影響。感知系の個性をいくつか使えなければ見つけられない程に成長していた。

「話に聞いてたより消えるのが速い！ですが！」

困んでいた者達が道を覆い尽くすように、足場を無くすように走り——地面が爆破する。

「っ！地雷！」

「正解です！」

声の先に見つけたと、解放軍の目が集中する。

しかし、一瞬遅い。既にトガはシリンドラを展開済み。解放軍の人間に刺し、吸うところまで動いていた。

トガは成生の影響を最大クラスに受けている一人だ。身体能力も劇的なまでに成長していた。

「ちっう」

ただ、無策で突っ込む癖は友と成生同じだった。

シリンドラを通して血を飲もうとした瞬間、血そのものが爆破。装備が吹き飛び顔や身体に刺さる。

「っ!?!」

「血を吸うアイテム！ですが無駄です！」

私の指揮する者達の血は私の個性『地雷』が仕込まれています！

ただ——油断はしません！」

キュリオスが走る。手首につけていたリングのスイッチを押して。

「展開——チェインリング。あなたがM.S.、ダークライから影響を貰ったように、私も影響を受けているのです！」

「こんな風に！」

チェインリングは地雷の個性を簡易的に扱い、爆破するグローブとなる。本来ならいたぶる程度の威力であり人を吹き飛ばすようなものではない。

が、爆破されたトガは地面に水平に飛び、壁に打ち付けられていた。小規模な地雷どころか口ケツトランチャーでも喰らったような威力だった。

がらりと崩れる壁と共に地面に倒れ伏す。増強系の個性でもなければ指先一本動かさないダメージ。

しかしトガはグググと、立ち上がる。それが限界だと分かっているにもかかわらず、譲れないものだから。

譲れないものだから——トガは笑う。

「ごほっ……成生ちゃんみたい……私も好きに生きるのです」

二人で一緒にいて成生が微笑む時、トガは笑う。それが当たり前だから、友達と呼び合える仲だから。トガと成生にとっては「かあいい！」と言い合えるそれが普通だから。同じように笑い、最後の力を振り絞る。吹き飛ばされる直前に握った血の入った瓶。割れなかったそれを口に放り込み噛み砕く。

血を飲む。さつきまで吸おうとしていた、襲ってくる人の血ではない。ストックしておいた血だ。誰の血なのかは……誰の目にも分かりやすく目立つ姿で分らせる。

血の海から立ち上がり変わった姿は——親友の姿。最強のヴィランと称されながら……誰かに頼りたいだけの女の子。

「M s. ダークライ……!? はっ！ ストックしていた血！

ですが姿と身体能力の一部だけ化けたところで悪夢に変わったわけではない！ ならば」

「舐めないでください」

消える技能に加え、超が付く程の一瞬の加速。動けないはずの身体から目にも止まらぬ速度、誤認し見失うのも仕方ないことだった。

トガの膝がキュリオスの腹にめり込む。



「がっ……………!?……………嘘」

『超瞬発力』で一気に加速し膝蹴りで腹に衝撃を放つ。吹き飛ばないように威力を分散させ、一人の身体に衝撃を走らせて全身を破碎する。

成生が使った身体操作である『人形操作』+『超瞬発力』。それをただ吹き飛ばすという優しい使い方などトガはしない。身体能力を自分の意思で100%扱い切れるならば、威力をどこに集中させるかさえ自由自在なのだ。

今のトガに容赦はない……慈悲さえも。理由は簡単なことだった。

「私は、成生ちゃんの友達です」

「が……………」

倒れ込むキュリオスの首を掴み、そのまま持ち上げる。階段をあがるように一歩分だけ『宙に地面を作り』、立ち、キュリオスの足を地面から離す。

土足で踏み込んできた人には、私と成生ちゃんとの関係をちゃんと伝えないと。トガの感情はそれだけに集約されていた。

「すごいところも弱いところも知ってますのです。」

成生ちゃんああ見えて努力の鬼です。私だから知ってますが個性をずっと使えば

なしにしてる。個性伸ばしをずっと続けてるようなものなのです。それなのに限界なんてまるで見えない。

でも寂しがりです。私と一緒にです。だから暇さえあれば一緒に遊びます」

私は成生ちゃんじゃない。だから成生ちゃんみたいに鍛えた個性の使い方は出来ない。レーザーは使えないし頭の回転も速くない。思いつきり目立つことも出来ない。

でも知ってる、これ全部成生ちゃんがそう使いたいからそうしてるだけだってこと。ホントは成生ちゃんの個性は望めば力を与えてくれるような個性。だから使い方は使う人によって変わる。

だって、そうじゃなきゃあんなこと聞いてこないのです。

「私が血を飲んだだけでいろいろ干渉してくる……成生ちゃんの個性はとんでもんです。成生ちゃんと相性が良ければ望めば望む程力が溢れていく。

——『なりたい私』は何？なんて聞かれたら答えるに決まってるじゃないですか」

トガはキュリオスの首を左手に持ったまま、右手を手刀にする。そしてキュリオスを

解放しようと襲ってくる人を右手で切る。

一時的に手を硬化化させるだけの個性……成生ちゃんの想い人の個性。ナイフを今持っていないから仕方ないのです。

襲ってくる人の背後に一瞬で移動する。

前に見せてもらった成生ちゃんの『瞬発力』の個性。成生ちゃんと追いかけてこしただり着いていく時には必須なのです。

負った傷を『再生』させる。さらにキュリオスもろともと範囲攻撃で負っていく傷も再生させていく。

瞬時にとはいかないまでも死ぬことは無くなる『再生』の個性。応急処置代わりですがこれも仕方ないのです。

望む私になれるように力をくれるなら貰います。

「好きに生きる私です。成生ちゃんの友達の私です。もうなってるから手を取り合っついていって」

きつと成生ちゃんが私程度にしかこの個性を使えなければ、みんな幸せだったと思え

る個性。

使って初めて分かるのです。成生ちゃんの個性は本当なら成生ちゃん以外を許容しない。だからこれはきつと裏道で……私と成生ちゃんの、友達っていう絆の象徴。

「M s. ……ダーククライ……の……ちから……」

「違います。」

私が成生ちゃんから貰っただけの、『私だけの力』です」

成生ちゃんは誰にだって微笑む。だけど一緒に手を繋いで笑ってくれる人なんて……きつと一成生ちゃんのヒーロー人を除いていない。

だから、私はずつと横にいてあげるのです。一緒に笑って生きたいから。私からは手を離さないから。むしろ振り回してあげるくらい一緒に居たいから。

「見え……ない……ぐふっ……」

成生ちゃんが使った、『光学迷彩』の個性。実際には指先発光の応用って話ですが、応用なんて私にはできないのでこうです。

「私、あなたのこと嫌いです。さよなら」

『硬化』した指で、キュリオスの首を切った。

■ ■ ■  
周囲の解放戦士を殲滅したトガだったが、最後の一人を切ると同時に倒れ込んだ。息が上がっており、身体もギシリと音が鳴っていた。

「使えば使う程に熟れる成生ちゃんの個性……だけど、使いすぎました……やつぱり負担大きいです。傷は治りましたが身体ともに動かないです。ホント奥の手です。

一番近くにいるのは……仁くん」

感知系の個性を最後に発動し『変身』は解ける。

個性を使う分には問題なかったが、限界を超えた挙動だったのだ。いくら個性の抜け道を使ったとはいえ成生の個性は余りにも強力であり独善的なもの。肉体強度まで完全には保証してくれなかった。

満身創痍。そんな言葉の状態が最も適しているとすら言える今のトガの目の前に立ったのは……黒いタイツで覆われた男ではなく、彼岸花の簪で髪を結った白髪の一人の少女だった。

「大丈夫か」

男口調で話す少女の言葉は優しいもの。友達によく似ているとトガはクスリと笑う。味方であることはそれだけで分かったからだ。

「……仁くんじゃない……でもその雰囲気。成生ちゃんの、知り合いです？」

「一応娘だな」

灯火の妹だろうと予想を付け、甘々の灯火と比べると姉妹らしくないなあと心ぐちる。

「トガさんだけは殺さないように守つといてつて母さんと電花の姉貴に頼まれてるんだ。

仁さんがくるまでに何人か来そうなんだな。それまでは守る」

「あなたは……誰の？」

ギガントマキアとの戦いや九州でのエンデヴァーとの戦闘を知っているトガは茶毘が灯火に甘いと見ていた。おそらく身内なんじゃないかと勘が叫んでいた。

その勘は正しいと彼女——崩華は告げた。

「あんたらのリーダーだよ」

「ふふ、ふ……どつちにも……全ぜ……ん……似てないの……です」

トガはそれだけ眩き意識を落とす。

あの二人の血を継いでいるなら間違いのない安全が保証される。トガは考えずらしていなかったが深層意識ではそう感じ取っていた。

気絶したトガの様子を見、崩華は微笑む。母親が微笑むのと似た顔立ちをして。

「よく言われるよ。母さんにもな」

破壊の権化と悪夢の血を継ぐ者。しかしてその表情は柔らかい。その二人の血そのものが夢なのではないかと誤認しかねない程に。

ただ現実は待つてくれない。解放軍の数は十万を超える。トガが百人規模を何とかしようとも、数千人がトガ一人に向けられている。トガを守るならば、彼らが襲つてくるのは必然のことだった。

もつとも、二人の血を継いでいるのは現実。崩華の口からは軽い口調で声に出していた。

「邪魔な奴らは殺しておくよ」

地面に手を当て、個性を発動させる。一見何も起きていないが、何が起きるのかは解放軍にはすぐに分かった。

「か……」「あ……?」「え」

襲つてきた数十人の動きが止まる。一步でも動けば何が起きるか身体が理解したからだ。動けば、身体が崩れるのだと。

何もかもを崩壊などしない、無為の破壊行為を崩華はしない。母親や姉妹が甘い故に、彼らに敵意や殺意を向けることなどないよう崩華は育っている。

ただ崩華は、襲つてくる者への破壊行為の躊躇は皆無だった。

「散れ」

襲つてきた解放軍の身体の中から勢い良く華が咲き、身体が崩れていく。身体の子  
構造が一部崩壊され柔らかくなった身体を突き破り、咲いた華は赤く染まる。

『咲華』。射程距離はあるけど触れた場所ならどこからでも分子を崩壊させて花を咲か  
せることができる個性。……伝播させることも可能、こんな使い方教える姉貴共は一度  
母さんに張り倒されるべきだと思ふ」

五女、崩華。個性『咲華』。崩壊の力を完全制御・補助的に活用した個性であり、崩壊  
する元となったもののエネルギーを華に変える個性である。華は咲いた後崩壊させる  
も自在、壊せば後に残るのは塵だけ、残せば華だけが残る。

崩華は物は壊さない、人は壊す。塵だけ残して消していく。ただ、美しく消していく。  
「……まあ甘い母さんはあの三人を張り倒すことは絶対しないだろうけど。勇也の兄貴  
にしぼかれるべきだな」

自由人過ぎる三人の姉。電花と尊姫と艶羽彼らに振り回される妹はため息を吐きながら屠り続ける。  
何もかもを壊したくなどならない、華になって最期を見せてくれた方が面白いのだと力  
を奮いながら。

血は継いでも継がれない意志もある。それを証明するかのよう。



## 行進

トガがキュリオスを倒した十数秒後、解放軍幹部には情報が伝わっていた。

今さらの泥花市は至るところの監視カメラがリデスト口達のタワーにいる者へ状況を知らせている。最高指導者の情報選別も早かった。

「皆さん！大変悲しい連絡があります」

解放軍広報担当である花畑が声を上げる。選挙で当選している議員だ、広範囲に声を届けることなど出来て当たり前。

「何だ!?選挙カー!?そんなのありかよ!」

技能だけでは届かないこともある、例えば選挙で物理的に声が届かないこと。解決は簡単で別に技能に頼ることだ。選挙カーに乗りスピーカーを使えばいい。

どれだけ通る声を持つてようが限度がある。花畑は知っているからこそ声を上げる。それこそが解決軍における自らの技能と理解しているから。

「トガヒミコによってキュリオス氏が倒されました。彼女は解放に身を捧げたのであります」

「そんな……」

「なんてこと」

「指導者は何と!?!」

一瞬の沈黙。宗教に近い解放軍はざわつきを抑える速度も宗教のそれとほぼ同じだ。

「無駄にするな、と」

花畑が最高指導者の言葉を告げる。一言だけだが、解放戦士の戦意を高めるには十分が過ぎた。

「「「「「「「「「「」」」」」」」」

戦意が高まり過ぎた解放戦士は人の流れを密にし一つの濁流となり、死柄木へと襲い掛かる。

一対一の連続では体術で凌がれ、一人へ崩壊が向けられることで負ける。一人にしか向けられない崩壊なら一体多で向ければいい。濁流の如き人の多さならば崩壊の対処速度を大きく超えられる。

「死柄木い!」

スピナーも狙いが分かり、一度離れろと口が出かける。

ただ、そこで口は止まった。死柄木の様子は明らかにおかしく……しかしどこかで見

たような覚えがあるものだったからだ。

襲われる死柄木はというと、頭がふらついていて、頭の中で動き回る記憶と感情が身体に影響を及ぼしていた。

（ああ……気分が悪い。眠いんじゃない、寝てはいたんだ。そんなことはどうでもいい。ただ———まただ）

『見なよ転狐、これは秘密なだけだね』

（トガからあのバカが大暴走したって話を聞いてから、時たま頭の中を過ぎる）

『おばあちゃんってヒーローだったんだって』

（記憶に無いのに、感情だけが思い出す。ドクター達と会ってから頻度が増えて）

『大丈夫だよ。私は転狐のこと応援してるから』

（つたく、全部見せてくれよ）

『悪夢には、負けないでね』

あり得ざる記憶すらも混じり、死柄木の気分は悪いなんてものではないレベルになっていた。

「最高に気分が悪い」

手を伸ばし一番前の解放戦士へ崩壊が走る。そこからさらに伝播し、一塊になって襲ってきた解放軍の全てが塵となって崩れていく。

死柄木が直接触れていないのに、崩壊が伝播して広がっていつていた。

「死柄木……お前……!」

「まだだな。まだいける」

スピナーの驚愕を他所に笑う死柄木。それはAFOやMs. ダークライの笑みに似てきていた。

■ ■ ■

「つたく、暴れる気マシマシだなリーダー」

死柄木達から少し離れた場所。大通りでもない通りだと暴れられるのは精々二人程度だったためにヴィラン連合は分けて進軍している。

茶毘も別の通りに居たのだが、崩壊で崩れる人の波が見えたことで自らも暴れようとテンションが上がっていた。

「なら俺も暴れるとするか——ッ!」

そう口にしほんの少しだけ掌から炎を出した瞬間、一つの影が頭上から落下してきた。

咄嗟に離れた茶毘が見た影の正体は、3mはあろう氷でできた二つの手。そして氷の手に立つ、手が氷の手と連動するように動く男の姿だった。

「氷……氷ね……」

氷、炎と対極に位置する現象の一つ。分かりやすい個性であり、先達が多い個性でもあり——技能を磨きやすい個性でもある。技能を磨きやすければとつきやすいものとなり、技能を磨きたいと希望する人が増える。

エンデヴァーという極北が存在しても後追いは山ほどいるのがその証左だ。トップが居ようと諦めなくていい、そういう分野なのだ。

だからこそ、熱という分野を同じとするからこそ、茶毘には目の前の人物が測れていた。

「……俺も分かるようになってきたなあ。

強いだろ、お前」

返事は無く、マトモに会話をする気は無いと行動が示す。氷の手はバキバキと砕けていき無くなり、周囲に氷の礫が舞っていく。

礫は形状を変え……浮遊する氷の針を大量に作っていた。

「何故すぐに炎を出さない」

「……さあなあ」

数本の針が空を飛び茶毘に襲来する。応戦する茶毘は熱を抑え気味に、しかし氷は全て溶け切れるように燃やしていく。

「意図的……ではないな。異能に問題ありか」

「おいおい勘違いするなよ」

測られた。茶毘は動揺を完全に隠しながら範囲を広げて炎を展開する。最大出力ではないが、十分な威力はある程度に。

茶毘には全力を出さない理由がある。正確には……出せない理由が。出さなくてもいいから全力は出していかなかったが、目の前の相手は全力で応じなければ勝てないと察することが出来る程には実力が近かった。

「知らないようだから教えてやるよ。氷は——溶けるだろ」

「そうか、大変だな」

跳び、氷の針を雲のような形状に変化、着地して氷の雲は空を飛ぶ。自在に飛ぶ姿は身体能力で回避するより軽快なものとすら見えた。

それも当たり前。彼——外典の個性の本領はそこにあるのだから。

「知らないようだから教えてやる。僕は——氷を操る」

外典が手をグツと力強く握りしめる。ただそれだけで近くのコンビニやスーパーといった店に売られたり置かれていた氷が動き出す。店の外へ念動力で動いているかのように動き、外典の周囲まで勢いよく飛んでいく。

外典の持つ『氷操』の個性。氷は塊となり、まるで龍のように形作られていく。

「この町に存在するありとあらゆる氷が僕の味方だ。学校も行かず、ヒーローなんかよ

りずっと長く、ずっと異能を鍛え続けてきた、最高指導者が僕を強くしてくれた。

かのM.S.、ダークライも肯定してくれた——半端な炎で溶かせると思うな！」

「そりゃ素敵な人生歩んでんな——可哀そうに！」

物量で押しつぶされる。そう判断し瞬間的に茶毘は最大出力の炎を放出——同時、氷の龍が激突する。その熱量は……均衡を作り戦線を二つに割った。

死柄木とスピナー、トウワイズとM.R.、コンプレスの二手に散らされる。しかしその分割は潜在的な能力を考えれば悪手でもあった。

「はは、やってるな」

「茶毘——派手過ぎるぜ！」

片方は離れていたためか被害は無く、その勢いを利用して敵陣へとさらに深く食い込む。

『崩壊』の個性がどんどん成長している死柄木は、もっと広範囲の崩壊ができると確信しながら突き進む。二つに別たれた戦線の一つをどれくらい崩壊させられるかを期待しながら。

「茶毘い——後先考えず何やってんだ！」

もう片方は比較的近かったため熱が飛んできていた。一度少し離れなければ危険な程の距離、目標となるタワーから離れる方向へと走る。

「トウワイスもさっき走って行っちゃった。トガちゃんと一緒にならいいんだが……」  
さらに片方は散らばってもいた。トガが最初に離れ、トウワイスが探しに向かったのだ。

トガは成生への変身もあり一対一ならば無類の強さを誇るが基本的に攻撃は一人に向ける。範囲攻撃を持っていない。多数に囲まれた時、対処はできるが時間がかかるのだ。

トウワイスを含めたヴィラン連合全員が知っていた。トウワイスが向かったのも気が持ちが分かるのだ。

そして今、最も敵陣から遠い場所……トウワイスはトガを見つけていた。呼吸は安定しながらも、ボロボロの姿をしたトガを。

「トガちゃん……！冷てえけど息はある！返り血が大量に……！拭いてあげなきゃ……！覚えてるかい？キミがくれたハンカチだ」

ただ意識は無く、安静にしなければならぬのは見ただけで誰でも分かる。トウワイスも同じ程度には理解できていた。

違うのは、トウワイスがどれだけ大事に思っているのかという一点。トウワイスには唯一無二の存在が重傷を負っている。それがどれだけ心にくるのか、トウワイスはよく知っていた。



「ダメだ……君は、連合の皆は、俺の居場所なんだ。あぶれちまった人間を必要としてくれた……唯一の……許せねえ。宗教被れ達め」

トガにだけ意識を向けていたトウワイスだが、影に気づく。背後から誰かがやってきたことを示すそれであり気づけたのはトガが無事ではあったからだろう。

振り向いたそこにあつたのは、自身のトラウマだった。

「おいおいおい何がどうなってるんだこりゃ!？」

倒れていたトガを守るように立つトウワイスの目の前には、顔を晒したトウワイスが数人立っていた。



タワーの最上階、Mr. スケプティックとり・デストロはパソコンに視線を向けていた。

「トウワイスとトガが合流。丸池さん家の前にいます。」

おそらくトガの味方であるアンノウンは池山さん家前にてほぼ同時に撤退。姿が見えなかつたことからMs. ダークライの墮とし子の一人かと」

「トガを友と呼ぶのを憚らない彼女だ。護衛の一人くらいは割いていてもおかしくはな

「い」

倒れたトガへ向けられた戦力が全て死亡するなどという異常事態。明らかに突出し過ぎた戦力が隠れていた。

しかしヴィラン連合にステルスで行動でき、馬鹿げた戦闘能力を持つ者が居るとあればヴィラン連合全体が隠れて行動する必要などない。となれば他所の者だ。トガを友と呼ぶ彼女なら、全く可笑しくないことだった。

「トガを殺さない」とこちらの計画に支障が」

Mr. スケプティックは不満気な顔で呟く。Mr. スケプティックは突出したIT技能を持つ解放軍幹部の一人だ。

さらに情報屋ネットワークもそれなりに知っており、『情報を扱う』という分野では解放軍で最も高い能力を持っている。

その分野において高い技能を持つということは、人の心をへし折るような真似も平気で行える人種も理解できる者であるということでもある。

今はトウワイスの心をへし折るために、Mr. スケプティックはトガの殺害を視野に入れていた。

「出ない。だからああしたのだろうか？」

——視野に入れていたが、出来なくなつた。ならば次のプランに動くだけ。Mr. スケプティックが既に行動したことをリ・デストロの言葉は示していた。

「ふばいがわらしん分倍河原仁。自らの異能により自らを増やし自らに殺されかけ自らを見失い……心に怪我を負つた男。

我々の思想に寄っている側の人間であり支えはヴィラン連合——特にトガ。確かに心を、トガを殺せば与する可能性が高い」

異能解放軍は自らの異能個性を好きに使つて許される社会を理想とする。

かつてトウワイズ——分倍河原仁は、自らの孤独や寂しさを埋めるために個性を行使、自らを増やし、増やした自分に殺されかけている。

それは異能解放軍として誇るべき行為。ただそこで自分を見失う心の弱さが問題だった。それさえ無ければ、解放軍に間違いなく入れた人材だった。

「しかしトガを殺せないという条件が発生した……ならば、保険が動くだけだ。

そのための君の異能だろう？」

会社、特に優秀なチームやグループは目標を設定した時、計画を実行する時、失敗する可能性を考慮に入れる。そのためのバックアップ用人材を準備したり、予定を早く入れて行動したりする。

ただ今は昨日出来なかったはずの個性の使い方を今日できるようになるなんてこともあり……そんな影響を起こす人<sup>M.S.、ダークライ</sup>がいるからバックアップできる手は更に増える。

バックアップされていた計画の実行は、既にされていた。

「あの女のおかげで私も個性が伸びたのは否定しませんよ」

Mr. スケプティックの個性『人形』。人型サイズの人形までなら見ていれば操作できる。監視カメラ等を通して『視』ていれば操作可能。

本来であれば通信デバイス等の個性を使うのに適した道具を扱わなければ遠隔操作などできないのだが、M.S. ダークライの影響で個性が強化された結果、ここまで至れたのだ。

衛星カメラから見てるだけ。情報としてはそれで十分だった。

「分倍河原仁、お前を解放軍に引き入れる」

大量のトゥワイスの人形を操作するMr. スケプティック。

トゥワイスの人形にトゥワイスが立ちはだかる後方、人の形をしただけのトガの頭が、グリーンと回った。



トウワイスの人形がトウワイスに襲い掛かる。それは嘗てトウワイスが見た、悪夢の光景そのものだった。

「あああああ!!! やめろおおオオ!!!」

何体もの人形によってトウワイスのマスクが剥ぎ取られる。裂けないように包んでいた布は千切られ、再び裂けてしまえと状況が示しているようですらあった。

トウワイスは抑えつけられ、守っていたトガも奪われる。人形はトウワイスを完全に無力化はせずに、トガが殺されていく様子だけを見せるように顔だけは自由にしていた。

「ああー誰だお前ら!? 冷てえ! 俺か!? 誰なんだよお前ら!」

困惑するトウワイスを他所に、人形達は次の行動へ移る。

トウワイスを戦闘面で無力化した。ならば後は心をへし折るだけ。人形達はトガへも群がる。

「あつあつ! 包まねえとやばいやめろ……やめろ! 畜生! やめろ!」

——トガの人形の首をへし折ることで。二倍で増えたトウワイスがトガを殺したと誤認させる。計画は着々と進行していく。

「トガちゃん!?!」

トガの首が人形達によって少しずつねじられていく。基本的に首が180度回る人

間はない……回れば死ぬからだ。

「トガちゃん！やめろ！やってるのは……俺か!?俺が殺すのか!?

ハンカチで包んでくれたあの子を！俺が!?ああ裂ける！

俺は本当に俺なのか!?

トガの首が曲がっていく。時間は幾ばくも無い。トウワイスの心はピシリと音を立ててこそいたが、身体が先に動いていた。

「あああああ!!!トガちゃん!」

底力を振り絞り抑えつけられていた腕を振り切る。何人もの人形が抑えていたが、火事場の馬鹿力を不意を突かれるように発揮されれば流石に抑えられなかった。

「殴って止め、拘束しろ」

「偽物め」

「がっ!?!」

人形が声を出し、暴れたトウワイスを殴り飛ばす。トガに近付ければ偽物だと分かるかもしれない、遠隔操作しているMr. スケプティックの判断は間違っていないかった。

再び拘束され、今度は五人がかりで手足一本につき一人という大仰な拘束を行う。

Mr. スケプティックが唯一間違っていたのは、トウワイスの個性への認識だけだった。「二倍」で増える条件、その全容を知らなかった。

「腕をへし折れ」

「偽物め」

声を出すのはMr. スケプティックの遠隔操作が届いた合図。ただ効果的な言葉でありトウワイスの心にも響く。

が——バキツという音と共に、トウワイスの心は大きく変わった。

腕が折れる。それはすなわち重傷ということだ。そしてトウワイスの『二倍』で生成された人物は……重傷で身体が崩れて消える。

重傷を負う、それはトウワイスが最も恐れていた行為だった。自分自身が偽物であれば、生成された者であれば、消えて無くなるから。

「痛えのに消えねえよ俺！」

同時、トガの首が回る。トガが死んだと見るも、トウワイスの目に映るのはさつきまどと同じであり……全く違う光景。

さつきままでの裂けるような視界ではない。自らが本物だと分かったが故に開けた――

—何のフィルターも通さない、クリアな視界。

「ん?」

「偽物め」

「……そうか」

Mr. スケプティックの声が届くも、大質量によってかき消される。トウワイスの個性が発動したのだ。

個性『二倍』。その最大の特徴は増やした自分自身も『二倍』を使えること。自らを無限に増やすことが可能なのだ。

増えたのは数十人程度。それでも人形を吹き飛ばすだけの軍勢と化していた。

「……冷てえ。暖かさが無え」

トガに——トガの人形に触れるトウワイス。トウワイスにはそれが偽物だと分かっていた。抱きしめようと触った時の感触が、同じだったから。

「さっきまでの人形と、同じ」

分かっていった。ただ……分かっていてもトウワイスには見捨てられなかった。見捨てられるはずも無かった。

自分自身の居場所が、そこにあるのだから。

「ああ、ああ……トガちゃん……トガちゃん……こんな、こんな姿に」



トガの人形を抱きしめるトゥワイス。動かない人形だが、愛しい人を抱きしめるような優しさがあった。

死んでいないと分かっている、偽物だと分かっている、トゥワイスには仲間を裏切らない、殺さない。自分自身が本物だと分かった今、その想いは殊更に強くなっている。

故に、男は人形を置いて立ち上がる。怒りに震えた顔をして。

「よくも俺に偽物を殺させたな」

「トガちゃんも成生ちゃんが助けたんだろ。分かるよそれくらい。あの二人はすごい仲間が良いからな」

「仲が良くて……暖かいんだよ。熱が無くなるなんてことは無い」

トゥワイスの居場所はヴィラン連合とその仲間にある。トガの仲間の成生もまた当然、その位置に居る。

トガと行動をよくするから、トゥワイスも同じようにトガと仲良く動くから……自然と信頼を構築していた。M.S. ダークライではない、成生にだ。

だからこそトガが最も頼りにするのは成生だと知っていた。その逆もまた然りであり、誰よりも強い成生が友の危機に何もしいない訳が無いとも。

「ここにるのは全部偽物だ。俺もそう——じゃなかった」

トガと成生の信頼関係を知っていても不安だったのは自分の個性のことだった。自分自身が偽物なら、この想いも偽物かもしれない。そうだったら、二人に悪い。

トウワイスらしい、そんな感情。

ただそれも——今は無い。本物だと証明された今、何の縛りもない男が解放される。

「俺は本物だ。だけどな、俺は仲間を殺さない」

仲間を殺さない。それだけは偽物でも同じ想い。その禁を破った——破らせた者に向ける感情は、軍勢にしても尚足りない。

「よくも殺させたな。個性『二倍』、その恐ろしさを思い知れ……解放軍！」

—— 無限増殖

サッドマンズ・アングリーパレード  
哀れな怒れる行進

——

「「うわあああああ!!」」

無限に増え続ける男が怒りのままに個性を發揮する。相手する側からすれば悪夢も  
いいところだ。

増える、増える。増える、増える。

一人が二人に、二人が四人に、たった一人の男が引き起こす増殖は無限に男を増やし続ける。

守るべき者は守られている。守るのは自分じゃなくていい、無事なのが分かっていればそれだけで十分。ならばここに用は無い。ただただ増えて、蹂躪すればそれでいい。

人が二つと書いて仁と読む。二人を見守れる、たったそれだけの想いでトウワイスの心はこれ以上なく補強されていく。

現実という悪夢を見てきた、だから悪夢は見たくない。心の怪我のせいでトウワイスにはM s. ダーククライの影響などない。

受けているのは依光成生の影響だけ。友達を守る、居場所を失くしたくない。トウワイスも同じ願いを持っているからこそ、個性を更に輝かせるのだ。

## 道

無限増殖 サッドマンズ・エンゲリバーレド 哀れな怒れる行進。余りにも無法過ぎる数は11万対6という物量差を文字通りひっくり返せるに至るものだ。

数の総力差は11万対6+∞。∞に至るには時間はかかるものの、逆に言えば時間がかかるだけだ。

時間が味方だった解放軍が逆に、短期決戦を仕掛けなければならなくなっていた。しかしそれは所属している集団同士の戦いの話。今回の戦いにおいてはもう一つ決着をつける条件がある。

数が無限であり対処がほぼ不可能である『トウワイズ以外の全撃破』。もつと言えば、『リーダーが頭を下げた方の負け』だ。解放軍であればリ・デストロが、ヴィラン連合であれば死柄木のどちらかが頭を下げれば勝敗は決する。

そして死柄木と真正面から戦える戦力かというと、解放軍には外典とり・デストロがいる。二人いるのだ、片方を止めなければヴィラン連合の負けは確実。さらにリ・デストロへ死柄木を送り出す道を作るには戦力差を考えても時間がかかる。リ・デストロの判断次第では逃げられる可能性すらあった。

それでも今は個性をフルに使えるトゥワイイスがいる。『無限に増える人』に対しては、鍛えた個性であっても個人の逃走だろうと余程の事が無い限り話にすらならない——はずだった。問題だったのは外典とトゥワイイスとの相性。

茶毘と争っていた外典は無造作に手を振るう。

それだけで、辺り一帯を埋め尽くしていたトゥワイイスは地面ごと吹き飛んだ。

「俺達イー！」

「僕は氷の温度も操れる。いくら無限に増えようが、僕の相手じゃない」

「地面……地下の水道管を破裂か」

広域制圧を得意とするトゥワイイスに対し、広域殲滅を得意とする外典。相性差が絶対的であり、相対するのは茶毘しかないのだ。

だが、さつきまで外典と戦っていた茶毘は既に劣勢だった。トゥワイイスが来たと同時にそちらに任せようとするくらいに。

理由は二つあった。

「厄介だな」

「残念だよ。全力のお前と戦いたかった」

一つ目……茶毘の身体からはプスプスという音が出、皮膚が少しずつ焦げていた。茶毘は炎の規模を大きく、熱を高めようとすればするほど焦げが広がりながら戦っていたのだ。

最大火力を放つこと自体はできるが、余りにも茶毘自身への反動が酷い。必ず来る父との戦いのために、温存しなければならぬのだ。使いたくはなく舐めプ染みたことをしなければならなかった。

ただ、二つ目……茶毘の予想に反しているものがあつた困惑。こちらの影響の方が大きい。

「全力の個性とお前の身体、合っていないんだろ。焦げ臭いんだよ」

「そうだな……ああ、その通りだ。間違いない……はずなんだがな」  
「？」

予想よりも焦げていない。茶毘が困惑していた原因だ。

茶毘はこれまで自分を燃やしながら相對した者を燃やしてきた。どれだけの炎を放出すれば自らがどれだけ燃えるかも身体でよく知っている。その経験は誰にも負けなという自負すらある程だ。

それが明確にズレていた。一言で言えば——全力を出せる。

「Ms. ダークライの影響……つてやつか？それとも灯火か？」

「何の話だ」

「いや？ただ茶毘に付すつてのは寿命じゃなければ悪夢だわなつて話だ」

茶毘というヴィランネームは茶毘自身が付けている。かつての名を茶毘に付し、執念そのものによって動く身体で父に今の力を見せるため。

そんな時に灯火という暖かさが横に来了。成生の血を最も濃く引いている灯火が、だ。

茶毘や灯火、果ては成生ですら知らないことだったが、灯火という存在が生まれた時点でこうなることは必然だった。成生が生まれた時からマスターピースであったように……成生の血を最も濃く引くということは、本人が明確に行動しない限りにおいて、運命は決められていることなのだ。

エンデヴァーという歪みを持ったヒーロー。茶毘という、燈矢と呼ばれた将来No. 1にすら成れたヒーロー志望の少年から歪まされ、顕現したヴィラン。一家庭だけで見えた時、ヒーローとヴィランのどっちかに寄っているかと言われれば……ヒーローだろう。No. 1ヒーローは伊達ではない。

だから灯火は茶毘に寄り添う。成生が、ヒーローやヴィランの背を押すように。

言わば轟家における依光成生。見るだけでも影響を受け、横に居れば魅了され、話せば力を授ける存在。故に最も横にいた茶毘はこれ以上ない影響を受けていた。

——体質すら、改善する程に。

「見せてやるよ。これが最強の炎つてやつだ」

現在のNo. 1ヒーローが使う溜めて放つという技術を習得して放てる技、高まった熱は獄炎とすら呼べる程の蒼炎、それが押し寄せる壁のように形状を変えた一人に向けて放たれる。

■ ■ 熱拳 ヘルファイヤーウォール

さつきまでの拡散するように放たれていた、熱量もそこまでなかった炎とは比べるべくもない。外典の判断は早かった。

「油断させるためだったか……！ならこっちも最大火力だ」

町中の至る所で地面が吹き飛ぶ。水道管が凍り、内部でできた氷が地面を吹き飛ばし……念動力で操られたかのように外典の下へ集まっていく。先程までより遙かに多く、



トウワイスの大軍が屠られたのも納得がいくほどの規模。

それらがとぐるを巻く龍のように外典を守り、さらに伸ばされた首が茶毘へ突撃する。

炎の壁と氷の龍の激突。熱すぎる炎と大規模過ぎる氷が正面から衝突し、周囲に熱量を放出した。

「のわああああ!?!」

「茶毘おまつ!?!」

「巻き込まれ」「逃げろ!」「外典様の戦いだ!」

スピナーと死柄木だけは先んじてタワーへ近づいていったため被害は無かったが、二人以外は全員が被害を受けていた。

「殺す気か!?!」

「あつぶねえ!」

かつて『No. 2 ヒーロー』エンデヴァーが放ち破られ、『悪夢の墮とし子』灯火が見様見真似し逃げられ、そして今回『ヴェラン』茶毘が放つ……熱量のプラスとマイナスにおける真正面の激突。

打ち勝ったのは、プラス側。

「ぐ……」

「ギリギリだった。本当にギリギリだったよ」

ただ、茶毘の炎は打ち勝ったが押し切っただけ。外典も目標は達成していた。

タワーへの道を氷で防いでいたのだ。茶毘も全力を使った反動で上手く動けず、外典も炎によるダメージで動けない。

痛み分けて引き分け。それが勝敗だった。

同時に、戦局は大きく傾く。解放軍においてトウワイスに対抗できる戦力は外典とリ・デストロだけ。片方が崩れ、もう片方に死柄木が向かっているならば……トウワイスを止める手段はない。

「よくやったぜ！」「もつと増えるぞ俺！」「また増えるぜ！」「大暴れするぞ！」

量による暴力。解放軍が精鋭揃いだろうと相手が無限なら勝ち目は無い。さらに悪いことに……ヴィラン連合における最強の質も動き始めていた。

「起きろマキア。後継のところへ向かえ。美味しいところを見逃すぞ？」  
「主の後継……」

最強の巨人が、進軍を開始した。



ほぼ同時刻。スピナーと死柄木は徐々にだがタワーに近づいてきていた。

少しずつ覚醒してきている死柄木だが、数の暴力には疲れを隠せない。スピナーは戦力と見られておらず、そこまでの攻勢を受けていない。体力的には余裕があった。

「死柄木……お前、大丈夫か？」

「ああ、気分は最悪なんだが機嫌はいい。それに見ろよスピナー、タワーが近づいてきた」

友人と話す距離で二人の会話は続く。戦い続きの死柄木にとってスピナーの存在は大きい。

戦力的に背中には任せられないが、一緒に馬鹿やれる友だ。横にいてくれるだけでモチベーションは高まりやすくなる。

そしてモチベーションが高まれば覚醒は早まり、個性も扱いやすくなる。

「人もさつきまでと比べてそこまで増えてない。後ろで茶毘がやってくれたみたいだな」

「さつきの馬鹿げた炎か。茶毘のやつあんな規模できたんなら早くやれよ」

「だな」

軽口を叩く二人。タワーの方だけ見……包囲されたことに気づいていなかった。

背後から流れてくる、黒い人の波も。

「しま」

「おいおいおい！」「何っだこれ！」「邪魔だなどかせどかせ！」

包囲を完全に破壊しながらトウワイスが増えて来ていた。見たことも無い規模の増殖に流石の死柄木も目を丸くする。

「おいおい……マジか増えたのか？」

「おう！」「頼れよリーダー！」「ようやく力になれるぜ！」

数人のトウワイスが十数人に、数十に数百に増えていく。個性『二倍』のポテンシャルが完全に解放されていた。

「うっかり俺たち一人で解放軍を手籠めにしちゃうぜ！」

トウワイスがタワーへの道を開いていく。二人もトウワイスが個性をフルに使えばこうなると知ってはいた。だがそれは机上の空論。こうなる可能性もあるな程度の予想であり、現実には成り得ないはずのものだった。

それが現実になった今、スピナーが呟いた言葉が心情を全て示していた。

「もうトウワイスだけでいいんじゃないかねーか？」

「いやあいつは義欄を好きすぎる。許せねえな解放軍……人の心を弄びやがって」

死柄木も同じ気持ちを抱いてこそいたが、口にするのはトウワイスに悪い。死柄木はトウワイスのボスなのだ、現実だけでなく……何故こうなったのかを考えなければならぬ。

ボスの器を持つ者、人の心を弄ぶ。死柄木の言葉を横で聞いていたスピナーは一人のヴィランが頭に浮かんだ。

「……どこぞの悪夢にも言っちゃれよ」

「いつかはな、今は無理だ。力あ付けるほどよく分かる……あいつとの距離」

「追いつけよ」

「当たり前だ」

ヴィランとしての格が違う。戦力が違う。だからといって憧れるわけにはいかない。憧れて目を光で灼かれれば、歩くことさえ出来なくなる。

それが分かったから死柄木はM.S. ダーククライに向かつてヴィランの道を歩く。最強のヴィランであり、後ろに道を作るタイプなのだ。追いつけない訳が無い。

鼓舞しさらに進もうとする二人だが、足止めを喰らった形だ。トウワイスが崩れてくれたとはいえ、追いついた解放軍がいた。

「ヴィラン連合！ その首魁！ ここまで好きにさせてしまった事、誠に遺憾でございます！」

選挙カーに乗って追いついた解放軍幹部・花畑。『煽動』の個性を持つ彼の言葉は、ただの兵隊を強化させる。

声を上げる花畑へ体を向け、視界に入れるスピナー。死柄木に背を向ける形だが……背を預けた形とも言えた。

「……先行け死柄木。あれは俺とトウワイスがやつとく」  
バフ役  
 「頼んだ」

死柄木が一人でトウワイスたちと共に走っていく。残ったのはトウワイスとスピナー。スピナーは戦力で見ればヴィラン連合でも最弱であり、個性を使ったとしても誰にも敵わない。

しかしスピナーは自信に溢れていた。理由は簡単なことだ。

「トウワイス！ 政治家を狙え！」

「OK!分かった!」

トウワイスに指示を出し、自らはナイフを懐から取り出す。くるりと回し動きやすい構えをとる。

かつてスピナーは一人だった。誰にも必要とされない、望まれない者だった。引きこもっていたのもそれが原因だった。

求められること。頼り頼られること。M.S. ダーククライが現れる前に動き出した彼は、誰よりもそれを求めて行動していた者だったとすら言える。

必要とされる。それも引きこもっていた時に遊んでいた遊びも共通している友に。これを悪夢に頼らず自力で現実にできた。悪夢に翳される者達よりも求められているという自負、スピナーが持つていなかった自信を持てるのも必然のことだった。

「伊口秀一。異能『イモリ』……異能弱者が何をできますか。何より、キミが何かを為せる人間とは思えません」

「はは!バフ掛けのお偉いさんが前線に立つなよ!ルール知らね!奴あ即ブロックされちまうぜ?」

為せる人間!?そりやそうだ!俺はあいつの横にいられりやそれでいい!あいつの見据える未来を視れるなら十分!

解放軍も一緒だろ!?!なあ政治家さんよお!」

啖呵を切るスピナーに一瞬目を奪われる花畑。死柄木を追うことが優先すべきであるのに、リ・デストロのためには先にスピナーを倒さねばならないと頭の中で危険信号が鳴っていた。

リ・デストロへの狂信、スピナーの友愛……ある種の同族嫌悪だった。花畑自身、思考では理解できても感情が納得できないことだ。何せ同じ感情と認めれば、弱者と見ている者と見ている景色が同じ扱いになる。

リ・デストロを信奉しているからこそ、許せないことだった。

「……同列に語ってます?」

「変わらねえだろ?」

花畑へと走り出すスピナー。すぐに解放軍に蹴飛ばされ、トゥワイスに回収されていた。

「くだらない」

そう口にしながら死柄木を追おうとしていた花畑はスピナーへと向き直る。死柄木の足止めという考えは思考の中心から弾かれていた。



時はほんの少しだけ巻き戻る。まだスピナー達がトゥワイスと合流していない時だ。

「よーうてめーか?俺達の居場所をぶっ潰してえ馬鹿教祖つてのは?」



「……分倍河原」

トウワイスは死柄木に先んじてタワーへ到達していた。リ・デストロと義欄を前にし、救うために臆さず自らの個性を使う。

「ずいぶんハゲてんじやねーかてめー。ハゲ教祖じやねーか！」

「捻りがないな。光目立っているつてると言つてほしいところだ」

トウワイスは自らを増やし、さらに自らだけでリ・デストロを相手にするには皆に悪いとヴィラン連合の面子を一人ずつ増やす。

対してリ・デストロは目の前で増えるトウワイスを傍観していた。ヴィラン連合の増殖を止めること自体はできた。が、トウワイス自身が増える速度は相当に速く、止めるのは無駄と判断したのだった。

「やっぱ自分のことは自分がよく分かってんだよ。他のモンとは速度が桁違いだ。

許しを乞えやハゲ教祖！」

「ふむ、素晴らしい異能だ。下にいた兵もそれでやられたのか」

死柄木、茶毘、Mr. コンプレスの増殖が完了する。一人ずつ増えた彼らだが、個性はそのままであり純粋に戦力が『二倍』になったと言える。

脅威的な戦力増。しかしリ・デストロの表情は変わらない、驚く必要もなかった。

「いいか！てめーらは！コピード！」

よって死んでも存在が消えることは無い！」

「死ぬ前提でリーダー増やすなよ」

「誰だこいつら」

「え？お前自分増やせんのか？」

「増やせるようになったんだよ」

「じゃあお前複製か？」

「複製だろうと何だろうと！皆のために命張れることに変わりはない！」

さらに数体複製されたトゥワイスが義欄へと走り——上半身が消し飛んだ。

「脆いな。ところで君……人質の意味を分かっているのか？」

指一本、トゥワイスに手を伸ばし振るっただけだった。それだけで狙った人へ風圧が発生、吹き飛んだのだ。

トゥワイス本体であればこんなことは無かつただろう。しかしトゥワイスの真骨頂足る『二倍』になったからこそ起きた現象だった。

「分倍河原、それ以上増やせば義欄を殺す。部外者故にたくはないが、致し方ない」

だからこそトゥワイスは動きを止めざるを得なかった。自らを増やしても指一本で対処される。本体であれば話は別だが、複製だから動けない。

複製されたトゥワイス達は本体がどこにいるか分かっていた。何故なら彼らは

分倍河原仁  
トウワイスだから。トウワイスなら必ず——動けない仲間を守る。

事実、ここに本体はいなかった。故に戦力は、複製された死柄木・茶毘。Mr. コンプレスの三人のみ。

「安心しろ。お前が作ったこの状況……1対たくさんだ」

ボンとトウワイスの肩を叩き安心させる死柄木。トウワイスの活躍は文字通り盤面をひっくり返した。

開戦する前、死柄木は戦力差を考えなかった訳ではない。リーダーとして勝ち目があるかを判断しなければならなかった。勝ち目がありその上で戦いに臨む、リーダーとして当たり前の分析はやっていた。

それでもトウワイスの増殖は読めなかった。リ・デストロ口同様に。だからこそトウワイスを褒めるのは当然。そして、目的のために動くことも。

「俺達に分がある！」

「取り返しいいんだな」

複製トウワイスが義欄へと走ると同時、三人がり・デストロ口へと駆ける。茶毘は炎を放出しつつ、Mr. コンプレスは圧縮のために手を伸ばし、死柄木は二人の陰に隠れて。

同時、リ・デストロの腕が巨大化し——薙ぎ払う。

複製された茶毘とMr. コンプレスは消し飛び、陰に隠れていた死柄木も吹き飛ばす。腕を振り払うという一動作だけで甚大過ぎる被害が起きていた。

だが、トゥワイスは目的に達していた。

「義欄……すまねえ巻き込んだ」

「いや、俺が突っ込み過ぎたんだ」

トゥワイスはリ・デストロの攻撃を受けながらも、全身が消し飛ばすことは無かった。連続して複製しまくっていたからだ。複製されたトゥワイスが盾となり、一人の上半身だけが残っていた。

それだけ残ればトゥワイスには十分。一人が残れば二人になり、さらに増える。茶毘達がり・デストロの目を惹きつけ、義欄の下へ辿り着いていた。

「右手……指がなくなつて……お前、右手でたばこ吸つてたよなあ」

「俺あ商人失格だ。俺から情報漏れちまった」

「謝るな。悪いことしてねえやつは謝らなくていいんだよ……!」

義欄に辿り着いたとはいえ残ったのは指一本で消し飛ばされるトゥワイスだけ。トゥワイスも目の前の状況からは義欄を連れて逃亡できるとは思っていなかった。次

の数瞬までは。

「やはり〴〵〴〵遊び〴〵程度か。なら我々の前に屈しろ」

「こつちの台詞だな」

トウワイスに手を伸ばそうとしたリ・デストロの背中から複製された死柄木が手を伸ばして襲っていた。茶毘とMr.コンプレスの肉壁によって死柄木は逃れていたのだ。

吹き飛ばされたはしたものの、反撃は十分にできるダメージ。不意を突いて一撃で崩壊させるつもりだった。

「っ」

しかしリ・デストロも身のこなしは強者足るもののそれ。死柄木の不意打ちも軽くなされる。

「随分と高尚なことを考えておいで」

「高尚か……ふむ、ならば聞こう。……君は異能が何か考えた事はあるかね？」

巨大化した手を振り回し、死柄木を追い詰めながらリ・デストロは語る。凌ぐのに低一杯な死柄木は反応できてはいるものの、ギリギリでしか身体が追い付いていなかった。

言葉も感情のままに出るのみ。頭では何も考えられていない。

「あのMs. ダークライは言ったよ、異能とは自分自身を表すのだと。まさしくその通

り！

かつて個性の母と呼ばれた女性は言った『異能はこの子の個性です』『この子が自由に生きられる世の中を！』

だが彼女の声はそこまで、反異能の者に殺されたからだ。

Ms. ダークライのように力があれば話は変わっただろう、目立てれば声を上げられただろう。現世に現れた彼<sup>Ms. ダークライ</sup> 女の声は彼女を思い返させる！

「知ってるよ。これでも歴史の勉強くらいはしてる。それに……あいつのことはお前以上に知ってるさ」

「……失礼、脱線した。個性の母の声は時を経て掘り返される。『異能は人の“個性”の範疇』、多様性だ、意識改革！

しかしそのどれもが異能の抑圧だった。忌避されたのは異能の行使そのもの。デストロは思った、『母さんの願った未来はこれじゃない』『真の意味で異能を個性と呼べる社会を！』

自らの語り、自らの歴史。自らを形成するものを口にしり・デストロは戦意を上げていく。高まった熱は、自らの肉体強度を高めてさせていた。強度が高まれば速度も速くなる。

——捕まえきれなかった死柄木を、捕まえられるくらいには。

「歴史無きチンピラの破壊衝動。私達以上の重みがあるかね?」  
「依光<sup>あ</sup>成生<sup>つ</sup>はいいのかよ」

巨大化した片手で握られながら死柄木は口にする。この身体ではどうしようもないことが分かった以上、できるのは言葉による時間稼ぎのみ。

ほんの少しだけ、会話一つ稼げれば十分、それが分かっていたからの行動だ。

「直接会ってはいないが、詳しい者には聞いたとも。彼女はあるべき未来に現れるはずだった少女だと。それが我々の象徴とすら言えるほどに相応しいものだった……これ以上無い社会へのカウンターだろう!?あるべき未来には！我々が望む姿そのものが象徴としてあるのだから！」

「……はっ、所詮はその程度か。目の前が見えちやいねえな。眩しい光に目がやられたか」

「何?」

依光成生、M.S. ダークライがどんな者か死柄木はよく知っている。トガと並んで詳しいと言っている。肉体的特性や個性は詳しくないが、人柄はそれなりの付き合ひがある。

そして死柄木は会った時から手で自らの顔を隠していた。見えていたとは言えるが、最初から全部見えていない。影響力も受けたのは少しずつであり……だからこそ見過ぎ

てはいけないことが分かっていた。

それでも見たくなるのがM・S。ダークライなのだが、死柄木は影響を受けつつも抑えるという真似ができていた。

「トウワイズ、義欄助けたいならクッション出しとけ」

残る話は本体に聞けと死柄木はトウワイズへ声を出す。リ・デストロも意図があると即座に察する。

絶体絶命のこの状況。そんな中でクッション……すなわち大規模攻撃の余波が来ると。状況を分かっているリ・デストロが答えに辿り着くと同時、タワーが傾き始める。「窓際に吹き飛んだ時眼下に見えた、あいつはタワーに触る。」

俺ならそうする」

会話一つ分の時間。それが複製された死柄木は欲しかった。その時間が、本体の死柄木をタワーに到達させる。タワーの最上階に上がるなんて真似はしない、する必要が無い。死柄木にとって人質は意味をなさないのでから。

死柄木がピタリと五指をタワーに付け、そこを起点としてタワーが崩壊させた。余波は即座に最上階に到達したのだ。

タワーが崩れ、中にいた者達は地面へと叩きつけられる。普通ならば落下死する高さであり、瓦礫が降り注ぎ物理的な質量攻撃すら同時に喰らう。トウワイズは増殖し自ら



をクッションとすることで防ぎ、リ・デストロは自らの個性で防いでいた。

少しずつ砂ぼこりが晴れ、堕ちてきた姿が露わになる。全身が巨大化し、強固な肉体をしたリ・デストロがそこにいた。

「高いところから落ちたなら死ねよ。お前がボスか……CM出てたやつかお前？」  
「答えを聞きそびれてしまったな」

ヴィラン連合のボスと、解放軍のボスが対峙した。